THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

創刊第廿五年第貳百五拾號紀念

第廿五年第一号

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歐米に於ける最近流行の空中飛行機は日本に於ける紳士貴婦人の愛用せるダイヤモンド入身装飾の如く流行せり

今般新荷着ダイヤモンドは純白色にして無疵なり

價格壹個に付
金百八拾圓より
金壹千五百圓まで
外に金參拾圓以上各種

東京市京橋區八官町
DK
小林時計店
電話新橋一〇〇三



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

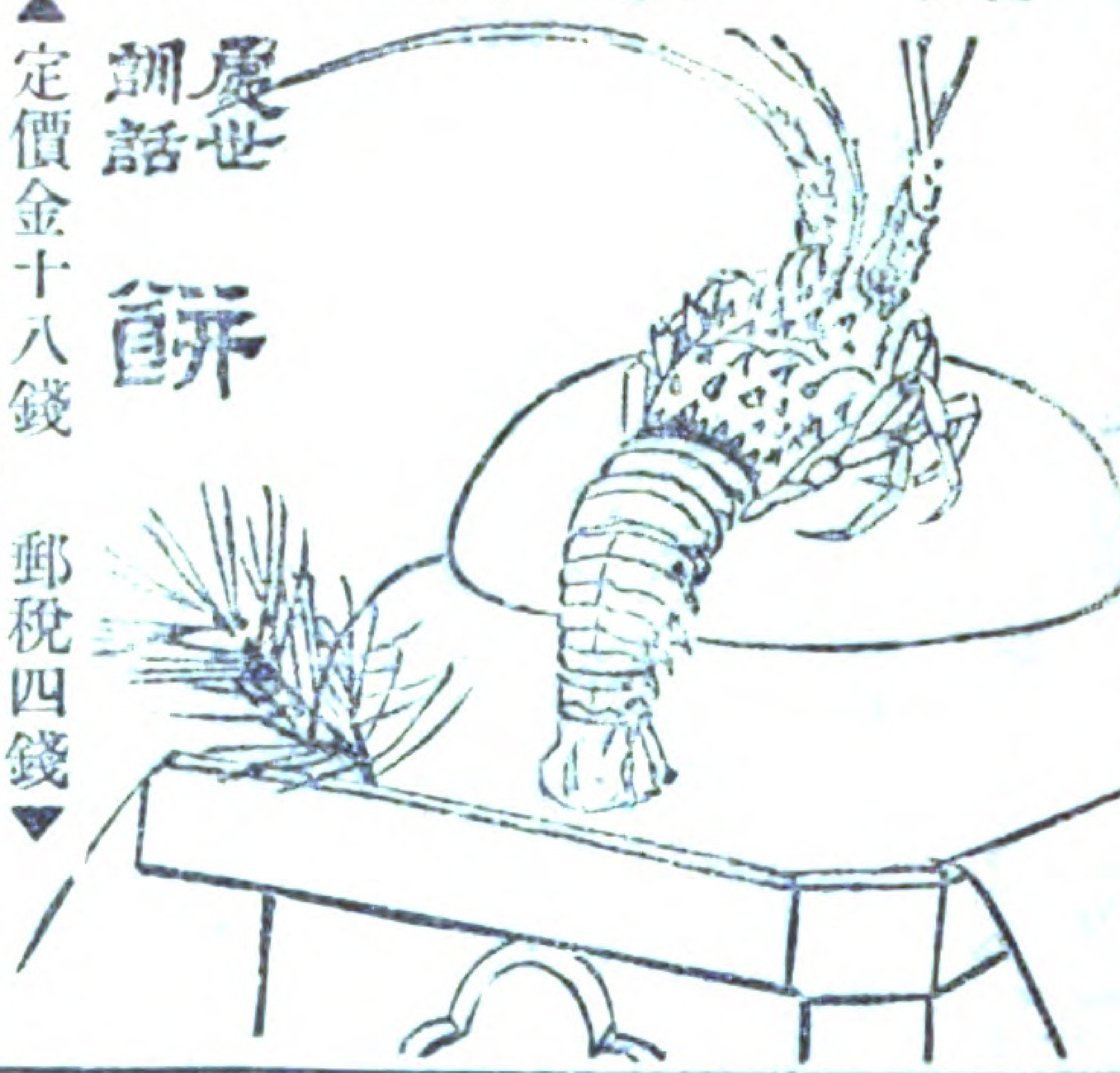
謹賀新年

◎新年の好讀物◎

年始の最好贈品

和田垣博士戲著
川村畫伯艸畫

慶世訓話 餅



▲定價金十八錢　郵稅四錢▼

◉內容の拔萃◉

大三十日千戶萬戶餅を搗く扱ぬ餅の數々
は牡丹餅のし餅鏡餅その外に太刀持提灯
持太皷持うちの親爺は債金持て鬼の呵責
てびつくり驚天尻餅を搗いた

愈出で丶愈奇一讀歳を忘る可く
再讀新年を祝すべく熟讀氣持心
の持を修養し得べし

餅に力餅あり花餅あり夫婦餅あり子持あり頭痛持あり
金持あり數へ來る百九十一中に最も大切なるは氣持心
持なり博士お正月に無限の寓意を記して諧謔諷刺愈々
出で丶愈々妙を極むベン〳〵たる諸君の餅腹に侚詰み
込んで讀み給へよ胸がすいて氣持がよくなる

碧瑠璃園著　忠孝小說叢書第一篇第二篇

白河樂翁

前編　菊判總クロース製　箱入頗美本　定價金一圓二十錢　郵稅金十二錢　后編

賜天覽

◎東京朝日新聞評　儉約力行慈悲正義の權化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に變々として現はる家庭の讀物として生ける教訓を與ふべく其華胄の人たりし爲めに華族の子弟に讀ましめて大なる感化あるべし裝釘の艶美なる近來隨一

◎新小說評　家庭に於ける婦女の閨變にも男子が一夕の讀物としても吾人は如是の小說を大方に薦む（中略）優美瀟洒なる考案と繪書とに由つてまた頗る架上を飾るに足る

◎報知新聞評　德川三百年間に於ける大名中の巨人は何人か曰く白河樂翁是れなり當時の文壇に於て艷麗にして然も犀利の筆を備へたる人は誰か曰く碧瑠璃園是なり此人にして此人を描寫す其書や蓋し近來の好讀物

◎道評　文章典雅全體引締りて一氣讀下するに絶て惰氣を感ぜず眞に面白く家庭には言ふ迄もなく一般の讀物として大に推擧せんとす

小松原文部大臣題字　川村清雄君口繪及裝幀

最新刊

平田內務大臣題字　齋藤松洲君裝幀

發兌　東京日本橋區本石町三丁目　至誠堂書店　電話本局三六六六　振替東京一七四四　賣捌各地全國書林

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歐米に於ける最近流行の
空中飛行機は
日本に於ける紳士貴婦人
の愛用せるダイヤモン
ド入人身装飾の如く流
行せり

今般新荷着ダイヤモンド
は純白色にして無疵な
り

價格(壹個に付)
金百八拾圓より
金壹千五百圓まで
外に金參拾圓以上各種

東京市京橋區八官町
OK
小林時計店
電話新橋一〇〇三



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

謹賀新年

新年の好讀物

和田垣博士戯著
川村畫伯艸畫

年始の最好贈品

處世訓話 **餅**

▲定價金十八錢　郵税四錢▼

◉內容の拔萃◉

大三十日千戸萬戸餅を搗く扨も餅の數々は牡丹餅のし餅鏡餅その外に太刀持提灯持太皷持うちの親爺は債金持て鬼の呵責てびつくり驚天尻餅を搗いた

愈出でゝ愈奇一讀歳を忘る可く再讀新年を祝すべく熟讀氣持心の持を修養し得べし

餅に力餅あり花餅あり夫婦餅あり子持あり頭痛持あり金持あり數へ來る百九十一中に最も大切なるは氣持心持なり博士お正月に無限の寓意を記して諧謔諷刺愈々出でゝ愈々妙を極むべし〳〵たる諸君の餅腹に向詰み込んで讀み給へよ胸がすいて氣持がよくなる



碧瑠璃園著　忠孝小說叢書第一篇第二篇

白河樂翁

前編　菊判總クロース製　定價金一圓二十錢
箱入頗美本　郵税金十二錢　后編

賜天覽

◉東京朝日新聞評　倹約力行慈悲正義の權化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に變々として現はる家庭の讀物として生ける教訓を與ふべく其華胄の人たりし爲めに華族の子弟に讀ましめて大なる感化あるべし裝釘の艶美なる近來隨一

◉新小說評　家庭に於ける婦女の團欒にも男子が一夕の讀物としても吾人は如是の小說を大方に薦む（中略）優美瀟洒なる考案と繪書とに由つてまた頗る架上を飾るに足る

◉報知新聞評　德川三百年間に於ける大名中の巨人は何人か曰く白河樂翁是れなり當時の文壇に於て艶麗にして然も犀利の筆を備へたる人は誰か曰く碧瑠璃園是なり此人にして此人を描寫す其書や蓋し近來の好讀物

◉道評　文章典雅全體引締りて一氣讀下するに絶、て惰氣を感ぜず眞に面白く家庭にては言ふ迄もなく一般の讀物として大に推擧せんとす

大臣題字川村清雄君口繪及裝幀

最新刊

平田內務大臣題字　齋藤松洲君裝幀

發兌　東京日本橋區本石町三丁目　文誠堂書店　電話本局三六六六　振替東京一七四四　賣捌　全國各地書林

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

小説

落日

正宗白鳥著

中澤弘光畫

定價八拾五錢　郵税十錢

東京神田富山町　左久良書房　發行

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田山花袋著

田舎教師

岡田三郎助書

三版

定價　金壹圓六拾錢　郵税金拾八錢

定價　各金五拾五錢　郵税各金八錢

文藝入門

藤村著 **新片町より** 四版

花袋著 **インキ壺** 三版

東京神田富山町　左久良書房　發行

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論による旨御附記を乞ふ

早稻田大學講義錄

新學年開始

各科壹年半卒業

法律科講義

政治經濟科講義

文學科講義

各學課表及內容見本付詳細規則無代送呈

以上各科共第六號を出し登載の講義漸く蔗境に進む就學に適當なる時期は今なり殊に本年度より修業年限を短縮して壹ヶ年半を以て業を卒へしむ而かも去華探實の方案に因り要領を逸せざる講義振りは實に本大學講義錄の特色とする所なり

東京牛込早稻田

振替東京一一二三番

電話番町三七四番
二四二二番

早稻田大學出版部

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士
金澤庄三郎先生編

辭林

增補第二版

▲語數八萬挿畫一千有餘を收む

▲萬象の事物文藝科學を網羅す

模範的國語辭書として好評を博せる本書は更に幾多の語辭を增補し其の面目を一新せり學生教師實業家等座右必須の書也

定價二圓 小包料十六錢

東京神田 振替東京一五九七

三省堂發行

電話本局 特長三三一一六 七二・一七四九

信用ある店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

明治四十三年一月號

帝國文學

毎月一回一日發行（定價一冊金拾五錢 郵税一錢）◎六冊前金郵税共九拾錢 ◎十二冊金壹圓六拾錢

▲豫言の藝術（四十頁の大論）……姉崎嘲風

○今昔物語の犬……芳賀博士

○詩は氣息也……櫻井天壇

○契冲傳補遺……上田博士

○無駄話……厨川白村

新春文壇の偉觀

○自由劇場印象……阿部崎樓

○愁の空……内藤濯

○現實觀……黒田明信

○短歌……柴舟 晶子 千王伎

▲昨年の日本畫……藤岡博士

小説 郷愁……平田禿木

小説 雨の降る夜……小林愛雄

口繪 夢見る女

▲ルツソー告白録……折竹蓼峰

對話 糺の森……成瀬無極

脚本 故郷花……三樹園博士

▲舊文藝破壊運動……岩城準太郎

發行所 [illegible] 大日本圖書株式會社 振替東京一九二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼一册定價五拾錢郵稅金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出で、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、及は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を酙酌して、假りに**試驗問題**に擬し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 **反省社出版部** (電話下谷九百十九番)(振替東京三十四番)

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶以て處世經たるべし 以て思想辭典たるべし◀

高橋五郎先生譯（四版）

ベーコン論説集

世界論文集中の珍として三百年來學者の手に愛誦する全編五十八の名什、句々金玉『之を讀む二十回、讀む毎に新意味を發見し來る』とは眞也、以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし。

要目

◎眞理を論ず ◎交友を論ず ◎戀愛を論ず ◎高地位を論ず ◎邦國の眞偉大を論ず
◎死を論ず ◎商議を論ず ◎旅行を論ず ◎無神説を論ず ◎人に於ける天性を論ず
◎富を論ず ◎猜疑を論ず ◎貴族を論ず ◎功名心を論ず ◎事物の變遷を論ず
◎美を論ず ◎攝生を論ず ◎豪膽を論ず ◎習慣と教育を論ず ◎娟嫉及羨望を論ず
◎復讐を論ず ◎談話を論ず ◎黨閥を論ず ◎青年と老年を論ず ◎畸形を論ず
◎逆運を論ず ◎幸運を論ず ◎統治を論ず ◎結婚と獨身を論ず ◎仁愛慈悲を論ず
◎迷信を論ず ◎稱讚を論ず ◎忠告を論ず ◎虚偽及假扮を論ず ◎禮式と禮儀を論ず
◎狡猾を論ず ◎親子を論ず ◎遲疑を論ず ◎學問及讀書を論ず ◎從者及朋友を論ず
◎自愛を論ず ◎忿怒を論ず ◎似智を論ず ◎名聲と聲聞を論ず ●外十四章

△時事新報評『…高橋氏のベーコン論説集は飜譯書として最も成功したるものゝ一ならん…』

△東京日日新聞評『…咳唾悉く珠玉となるといふも恐らく過褒ならず』

總クロース一冊 定價一圓廿錢 郵税十錢

時代代表 日本英雄傳 ●十巻の内●

山路愛山先生著（三版）

源頼朝

中村不折筆 頼朝肖像入 紙數七百頁 正價九十五錢 小包郵税八錢 臺清韓郵税十四錢

●五版 足利尊氏 正價五十五錢 郵税六錢

△近刊 西郷隆盛

發行所 東京神田區雉子町 振替第七九九五番 玄黄社

○賣捌 東京堂 上田屋 至誠堂 北隆館 東海堂 大阪杉本 久留米菊竹

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學士岡田正美編

新版 日本文學通覽

▲學校讀本として又好文の士の參考用として適良の書▼

菊版四百五十頁
全一册
定價金壹圓
郵税金八錢

特徴

本書は普通の文學史の單に理論的歷史的に叙するものと異なり專ら時代文學の實質を知らしむるを主とせり。されば上は上古、奈良朝より下は室町、江戸時代に至るまで其時代の文學の大勢と變遷發達の梗概とを述べ而して其時代を、代表するに足るべき實例を掲げ且つ一例毎に詳細なる解説を附したり。故に本書は一編の文學史とも見らるべく又一種の趣味ある讀本とも謂ふべし。

目次

發兌
東京市京橋區銀座壹丁目
大阪市東區北久太郎町
（振替東京二一九番 振替大阪一〇五五番）
大日本圖書株式會社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

福本日南先生著　全一册　定價貳圓貳拾錢　郵税拾貳錢　直接註文不要

元祿快擧錄

舶來上等紙八百五十頁
コロタイプ寫眞版十葉入
彩色石版大地圖二葉添付總布上製美本　函入
全文五號　振假名付

義士正傳

題して元祿快擧錄と云ふ事は赤穗四十七士が千古の快擧筆は一代の巨匠日南先生が特得の文唯此二點先づ人をして神躍り魂飛ばしむ竹田出雲が忠臣藏より雲右衛門が浪花節に至る迄通俗的說話何ぞ多き然も其眞を得るもの幾許かある室鳩巢の義人錄より信夫恕軒の講話に至る迄學者の指を染めしもの亦幾回然も語つて情しきもの若干かある其精しと云ふものは市井の好奇心に投ぜんが爲めに粉飾せられたる架空の談話にあらざれば其離實に近きものは周圍の事情と時代の精神とを顧みざる漢學者が强ひて自家の桎梏に推入したるもの也多年日本武士道の精華として推重せられたる義人の傳記が何時迄斯くて止むべき日南先生茲に慨し今や椽大の史筆を呵して之が正傳を立つ本書三篇三百十章上篇は凶變の發生より義士の東下に至り中篇は忠奸錯々の列傳下篇は討入より蓋棺事定に終る考證精確幽を闡き微を穿ち詳密を極めざるはなく加ふるに先生一流の言文一致紆折の筆を以て之を出し秀雅の度を以て之を行り、感慨の情を以て之を致す一たび卷を披いて風神の注ぐ處に及べば二百年の後四十七士の眞骨頭躍々として紙上に現はれ來る寔に近代絕調の文字也

東京本鄕區本鄕一丁目
株式會社　啓成社
振替口座一二〇五五番

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

如斯名士揃の新年號ありや

實業之日本

一月一日發行 第拾參卷第壹號 一冊郵稅共拾貳錢 半年分增刊郵稅共壹圓五十五錢 一年同參圓

▲横額 空前の大附録

卅名士眞筆座右銘 悉く我社の爲めに特別揮毫

◎山縣公爵 ◎東郷大將 ◎澁澤男爵 ◎犬養毅氏
◎井上侯爵 ◎乃木大將 ◎菊地京大總長 ◎大石正已氏
◎松方侯爵 ◎後藤遞相 ◎三井男爵 ◎島田三郎氏
◎桂侯爵 ◎牧野文相 ◎高田早大學長 ◎益田孝氏
◎德川慶喜公 ◎阪谷藏相 ◎鎌田慶應塾長 ◎添田壽一氏
◎西園寺侯爵 ◎加藤弘之男 ◎森村市左衛門 ◎新渡戸博士

諸名士卅名

▲逆境に處する修養

實業之日本顧問 農法學博士 新渡戸稻造

◎最も愉快なりし新年……侯爵 井上馨
◎大西郷の感心せし實業人物……侯爵 松方正義
◎余の伊藤井上比較論……伯爵 大隈重信
◎余の今日を作りし父の訓言……侯爵 桂太郎
◎余の新人物訓練法……男爵 後藤新平

其他 阪谷前藏相 △牧野前文相 △菊地京大總長 △高田早大學長 △鎌田慶應塾長 △目賀田男爵 △梅博士を初め實業家諸士駢列 偉観

▲五十名家結婚出産調べ 其他趣味ある珍奇文字滿載

東京京橋南紺屋町 實業之日本社（電話新橋八七四番）（振替貯金口座參貳六番）賣捌全國各地書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●大隈伯爵序文
●新渡戸博士序文

●櫻井鷗村著

歐洲見物

菊判布製●意匠奇拔●紙數六百頁●挿畫一百餘枚●定價壹圓七拾錢●郵税十二錢

初版五日間に賣切 再版出來

著者曩に大隈伯の命を帶て渡歐す其過る所東西諸邦の人情風俗史蹟は輕妙沈痛の筆に活躍し臆面無く忌憚無き叙評は人の未だ見ず語らざりしにも及びて警罵骨を刺し而も一道の精神脉絡貫通するものあり眞に文壇未曾有の快著たり敢て江湖の覽鑒を期す

出版書目 御報次第贈呈

東京市麹町區五番町十六番地
振替貯金口座東京七八四七番

丁未出版社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

故伊藤公愛讀の書

三版四版五版即日賣切第六版出來

故公爵　三條實美卿題字
伯爵　大隈重信君序文
子爵　秋元興朝君序文
男爵　肝付兼行君題字
法學博士　梅謙次郎君序文
岡谷繁實君著

名將言行錄

總クロース金文字入
菊版貳千三百五拾頁
全四册函入正價金六圓
▼特價金四圓五拾錢
送料市外參拾錢
滿韓六拾錢

◎名將言行錄に依て古英雄に面接するを得べし
◎名將言行錄に依て明治巨人春畝公の心的生活を窺ふべし
◎名將言行錄は敎訓に富み趣味に富める古今の名著なり

▼內容見本　無代進呈すべし

東京本郷森川町
振替壹九四六七
文成社
東京神田
東京堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎文部大臣小松原英太郎公題辭◎

◎全國師範學校中學校 高等女學校長教諭 二十數氏序文◎

←・◎◎◎佐村八郎先生著◎◎◎・→

日本品詞辭典

◎全壹册 四六判半截本 金文字入總クロース美製本

◎紙數七百餘頁◎選収語數三萬有余◎定價金壹圓 郵税六錢

特價 二萬部限 金七拾五錢

普通教育の精神に基き、普通教育の實用を旨として編したる本書は、純正公潔教化に害なき語、日用に有要なる語等を選収せり從つて他の古今一般の辭書の如くに、淫猥鄙俚の語古雅死廢の語迂不急の語、分り切つた無用の語等は採らず、蓋し學生用辭書に根本的改善を加へたる者の第一書也、現文部大臣大に此旨趣を賛して、特に題辭を給ふ、學生用辭書として、未曾有の盛事なり、尚ほ此書は品詞別に類排して文法學に便じ、解釋に漢譯を充て、作文に資し、檢索便覧を期して一語一行制を創出せる等、出色多趣の新著也、宜也、全國到處、好評嘖々、各學校各聯隊は勿論、會社員、事務家、實業家等に、偉大な歡迎と愛用とを受けつゝあり此際特價提供を以て、更に一般需要家の下命を仰ぐ。

見本送呈 入用者は郵券二錢を要す

發行所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 **六合館書店** 振替貯金口座東京二三七一

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新年必讀の最新小說

小杉天外作

小說 **草笛**

寫實主義の完成者自然主義の最初の唱導者が十八年間の勞作中より得意の篇を拔いて此の草笛は成れり

全一冊菊判 總クロース 金緣箱入 廣瀨尋常飯澤天羊二青年書家意匠 最新式美裝 紙數六百九十頁 正價金貳圓 送料十二錢

後藤宙外作

小說 **冷淚**

現代青年の胸中の秘密を曝露せる作也、現代中年者の戀と活動と淚と愉悦とを描破せる作也。中年婦人の自負と弱點と若き女子の甘夢と苦悶とを具象化せる作也、

十二月二十五日發行 全一冊菊判 美裝鰭崎英明君意匠 紙數四百二十頁 正價金八十錢 小包料八錢

小杉天外作 寫眞小說 **コブシ** 菊版全三冊 紙數千二百頁 前篇七版 中篇五版 後篇三版 クロース美裝 正價每篇壹圓宛 送料各十二錢

昇曙夢譯 露國名著 **白夜集** 菊版全一冊 紙數二百八十頁 クロースゴリギイ式美裝 正價金壹圓 小包料八錢

發行所 東京市日本橋區箔屋町拾四番地 **章光閣** （長電話本局二〇八五番 振替口座竹澤草五八九二番）

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論の旨御附記を乞ふ

德富健次郎著

小說 寄生木

小說寄生木は昨年の秋二十八歳で死んだ東北農家出身の陸軍士官の生涯の物語である。千百餘頁の長文字何を語る乎。多情多恨の若き生命がさまの〳〵運命に弄ばれて人生の奥底より叫び出した一篇無韻の長恨歌此が小說寄生木である。

菊判千百餘頁

定價 特製二圓 並製一圓五十錢 郵稅各十二錢

エール大學名譽教授ラッド博士序
同志社長原田助先生校閲
頌榮幼稚園長エ、エル、ハウ女史編

定價一圓五十錢 郵稅十二錢

フレーベル氏 人之教育

東京朝日曰く兒童教育の最初の唱導者が生前の一大著書たる本書が今日迄邦文に譯されざりしは不思議の感なくんばあらず今ハウ女史譯して之を公にす其の教育界に貢獻する所多かるべきを疑はず譯文勉めて平易を旨としあれば何人も之に依て深奥にして趣味深き哲學を窺ふを得べし教育家宗教家其他兒女教育に心あるもの必讀の書

エ、エ、ラモラウ氏原著
頌榮幼稚園長エ、エル、ハウ女史編

開發的生活

一名兒童教養法

定價 上製六十五錢 並製五十錢 郵稅各六錢

萬朝曰くラモラウ氏の著にして幼兒期少童期弱年期青年期の四期に分ちて兒童教養の法を講じ頗る心理的方面の研究たるもの觀察と奇警に重きを置き空論を避けて一々實例に就きたるは最も興味あり實益ある點にして行文平明何人も一讀子女薫陶に於ける應病與藥の法を悟らん

發兌 東京市京橋區尾張町二丁目 警醒社書店 (振替貯金五五三番)

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京朝日新聞連載

伯爵 東久世通禧先生題字
文學博士 三上參次先生序文
文學博士 芳賀矢一先生序文
木村鷹太郎先生序文
大町桂月先生序文
山路愛山先生序文
須藤南翠先生校補
清水橘村先生編著

家庭訓話 今日の歴史 春の巻

洋裝菊版總布製
上製大判全一冊
口繪插畫寫眞銅版木版
版密圖百餘個
紙數四百餘頁
正價壹圓五五錢
內地送料金十二錢

發兌元
東京神田區猿樂町二
振替口座一二二一一
弘道館
東京堂
林六合館

芳賀博士曰く本書一冊の價値は幾百の教師を一堂に會し幾千の書籍を一室に集むるに同じと。三上博士曰く本書一たび出なば學校は良好なる參考書を得家庭は恰好なる讀物を得べしと。是「今日の歴史」の中學校小學校に於ける修身歴史の資料となり家庭の訓話となる所以也。木村鷹太郎氏曰く最も趣味あり最も面白き讀本は「今日の歴史」なりと是本書の高尚にして有意味なる所以也。山路愛山氏曰く本書を讀み古人の言行をしのび國の盛衰興廢を知らば以て其の思想を養ふを得べしと是「今日の歴史」の青年自省錄となる所以也大町桂月氏曰く奇拔にして破天荒なる本書の如きもの無しと是「今日の歴史」獨得の長所也。疑ふ者は家庭訓話「今日の歴史」一本を取り而して日々の東京朝日新聞紙上に徴せよ。讀者諸君本書名類似の書あり著者發行所に注意を要す

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新古書籍取次販賣

見よ

新年の祝として世に高評ある書籍二十點を限り今回特に左の定價より一割引にて郵送料弊店負擔にて御注文に應ず可候間何卒至急御注文下され度願上候

謹賀新年

新古書籍
取次販賣

東京神田南神保町十五
東條書籍店
振替口座東京一七一七一番

地方販賣書籍

地方讀書家諸君の御便利を計り新古書籍雜誌類は何等の種類を問はず多少に係らず勉强取次仕り候

新本割引

新本は定價にて壹圓五十錢迄は郵送料だけ弊店の負擔と致し壹圓五十錢以上は總て定價の一割引にて郵送料は別に申受候
但し原書醫書は割引致さず候

古本販賣

古本は價格の不同有之候間一應御照會の上御注文被下度御照會の節は往復葉書又は返信用郵券封入にて願上候

御注文便法

御注文節のは著名、書名、定價、發行所の御記入を願上候
御送金の節は振替口座にて規定の登記料貳錢増にて東京壹七壹七壹番東條書店宛に御拂込被下候はゞ途中盗難紛失等の恐れ無く至極便利に御座候

渡邊外三名	法律大字典	三、五〇〇
重野外二名	漢和大字典	三、〇〇〇
金澤博士	辭林	二、〇〇〇
神田外五人	新譯英和字典	九〇〇
藤井學士	廿世紀獨和字典	一、五〇〇
野村外一人	佛和新字典	一、四〇〇
槇山榮次	教育教授の新潮	一、〇〇〇
槇山榮次	系統的教育學	二、〇〇〇
森岡常造	教育學精義	二、〇〇〇
吉田學士	倫理學要義	二、〇〇〇
福來博士	心理學講義	二、八〇〇
元良博士	心理學綱要	一、〇〇〇
重野日下	日本武士道	一、五〇〇
紅葉山人	金色夜叉	一、六〇〇
土井晩翠	英雄論	五〇
大内青巒	碧巖集講話	四、〇〇〇
山田孝道	菜根譚講義	二、〇〇〇
宮内鹿川	韓非子講義	二、〇〇〇
岩垂憲德	儒學大觀	二、〇〇〇
高島平三郎	兒童心理學	二、二五

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稲田文學社編纂

文藝百科全書

發兌元 東京京橋區鎗町一の二 振替口座東京八五三三番 株式會社 隆文館

▼愈々製本出來――期限 明治四十三年一月二十日限 實價特賣▲

一時拂金拾貳圓 着金即刻送本

三回拂金拾五圓 毎月五圓三ヶ月拂

送費 内地金卅六錢 清韓金七拾錢

古今三千の時載と東西の方所とに起れるあらゆる文藝と人物及び其の著作の梗概とを蒐捜網羅して茲に整然たる本書をなす。考證嚴正、記述適確、世界文藝の精華は殆どこの一卷に盡く。之れ正にわが文藝史上の光彩たるのみならずまた出版界の一大偉觀たるを信ず●

本書に附したる新式索引はあらゆる事項を索つて一目の下に展開せしむるの至便を寄與す。即ち本書は完全なる百科全書たると同時に又一大文藝辭典たり。

詳細說明書 郵券二錢御送付次第送呈す

本書の裝釘 脊角革洋布綴 金模樣堅牢美本

四六倍判紙 數千八百頁

挿畫 精巧彩色木版三葉。アート四色版六葉。三色版五葉。精巧アートタイプ及寫眞版數十頁。組込五百版餘個

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

アンドレーフ作 中村春雨譯 滿谷國四郎畫 コロタイプ着色

信仰

本書は露國アンドレーフの代表傑作也牧師一家の戰慄すべき闇黒面を描いて自然の不可抗力に悶え苦しむ人間の憐れむべき姿を極めて無慘に表白し白痴兒の出生妻の燒死更に牧死の狂死に至るまて人間の獸性を描いて深刻を極む

クロス綴 美本全一册 定價八十錢 送料八錢

綱島梁川の遺著

我觀錄

著者内生活の史的記述にして全篇

寸光錄

書簡集

悉く生命に滿ち末代稀有の大文字

病間錄 同裝箱入 新裝各口繪コロタイプ二葉 各册金壹圓二十錢 小包料金八錢

下卷新版 上卷再版 一册 一圓十錢 小包料八錢

伊東元帥 東久世伯爵 土方伯爵題字序文

碧瑠璃園著

錢屋五兵衛

商界唯一の傑物の生涯を潤色して雄大壯烈を極め其材料は錢屋家の私庫より出でゝ一篇の傳記小說也否立志傳也商業史也家庭の讀本也

全二册 一圓八十錢 送料八錢

吉田松陰

維新の下手人時代の原動者たる松陰の生涯は多淚多艱悲壯勇烈、歷史小說家唯一人の著者の活寫天下の急需を促して忽ち三版を重ぬ。

全二册 一圓八十錢 送料八錢

山下破鏡作

滑稽諷刺 双胎兒

一册 四十錢 送料六錢

夢三郎譯

内氣者の失敗記

生れて兄やら弟やら分らぬのも滑稽なら内氣で失敗しては笑はれるのも滑稽、所謂人に笑はれ拔かれるのが此書の運命だ、新春好箇の讀物也。

一册 四十錢 送料六錢

發兌 東京京橋區中橋廣小路 大坂東區北渡邊町 （振替東京二八二三） 杉本梁江堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

伊藤銀月新著 新刊

海舟と南洲

定價金六拾錢
郵稅金六錢

伊藤公の死に依つて或る偉大なる教訓を得たる日本人は、願みて海舟と南洲とを見ざるべからず海舟は俗の衣を被り俗の事をなし、眼盲者救世主にして、南洲は實踐躬行を以て犧牲の道德を教へし活教育者也。

新刊

南朝と北朝

定價金六拾錢
郵稅金六錢

後醍醐帝鎌倉幕府の專横を憤らせ給ひて之れを誅し玉ひ建武中興の盛時謳歌せしも暫らくにして逆臣尊氏の爲め世は南北兩朝に分れて天下麻の如く亂れ忠臣雲の如く興りて我國史上の詩的時代とはなりぬ此間五十年の史乘を著者が健筆によりて縱横に批評せしものこれ又得易からざる一大回顧錄也。

秀吉と家康

後編出づ　前編後編各金六十錢　郵稅各六錢

史を繙いて戰國群雄割據の項に至る毎に吾人青年は血躍り肉戰くの感あるにあらずや吾國三千年の史中第一人の太閤秀吉と十五代の將軍政畧の端を開きし家康の二人を捉へ來つて著者が縱横犀利の筆を馳せて當代の歷史を傳す讀み來りて兩雄の性格手腕神に入るの想あらしむ今や爰に後編を新刊す合せて江湖の一粲に供す。

伊藤銀月著　國葬當日に發賣して江湖の大喝采四版に及ぶ

伊藤博文公

（額面用コロタイプ版新聞半頁大肖像添附）　定價金六拾錢　郵稅八錢

著者平生公の人物を研究すると共に公の傳記を草しつゝ有りき偶今回の兇變に遭遇して其本色たる熱烈る氣動いて已まず晝夜兼行疲れず憩はずして此書を成しぬ國民は公に何を學ぶべきか本書を見ずして知る能はず乞ふ糊と剪刀との一時的粗製品と同視する勿れ。

安部磯雄　赤司繁太郎　共著

理想の青年

定價金四拾錢　郵稅金四錢

如何なる時、如何なる所に於ても青年は社會の柱石たるべし青年を離れては人生正氣なく精神なし青年の修養是に於てか一層の重きをなすべし

木下尚江　卷頭語　赤司繁太郎著

青年と人格

コロタイプ兩氏肖像入　紙數二百八十頁　定價四拾五錢　郵稅六錢

本書は著者が青年の爲に道德上の見地より青年即ち第二の國民に人格の尊ふべきことを極論し熱血を注ぎたる論文集にして現代青年を有する父兄幷に教導者たる將來青年の配遇者べき淑女及淑女の父兄の座右に一日も缺くべからざる青年人格論にして又恰好の一大聖典也。

發行元　東京市京橋區南傳馬町（振替東京一九八〇二）千代田書房●大阪東區北渡邊町 杉本梁江堂▲其他各地書店 發賣

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新版發賣

我國の教育

前文部次官 澤柳政太郎先生新著

美裝全壹冊
紙數七百頁
定價金貳圓
郵税十二錢

我が國民精神の解剖圖――本日直に申御込あれ

日露戰役後歐米人の我日本を研究し日本の優勝なる所以を知りて以て日本の將來をトせんとするや倫敦大學は日本の教育を知るの最も切要なるを認め其の適當なる講演者を我國に求め來り著者は即ち其の選に當られたり本書は先生が其の草案を基礎として著述せられたるもの先生獨特の活眼を以て我が教育の沿革制度を説くこと簡潔明瞭我教育の現狀と精神とを叙して歷々之を掌に指すが如し題して教育と云ふも之を一幅の我國民精神の解剖圖と見るべく又た先生が我國の爲め國民に代り歐米人に向つて吐かれたる氣焔錄と云ふも可なり直接間接に教育に關係ある人々は勿論苟くも我が日本の事を念とするの士は其政治家たると實業家たると將た何れの業務に從事するとを問はず必らず一讀せられざる可からず

東京神田 表神保町 同文館

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BOOKS BY MAIL.

Books by mail, prepaid, to any portion of Japan, at very lowest prices. Please remit with your esteemed orders for prompt attention.

The following is a list of the most popular books and published of late :—

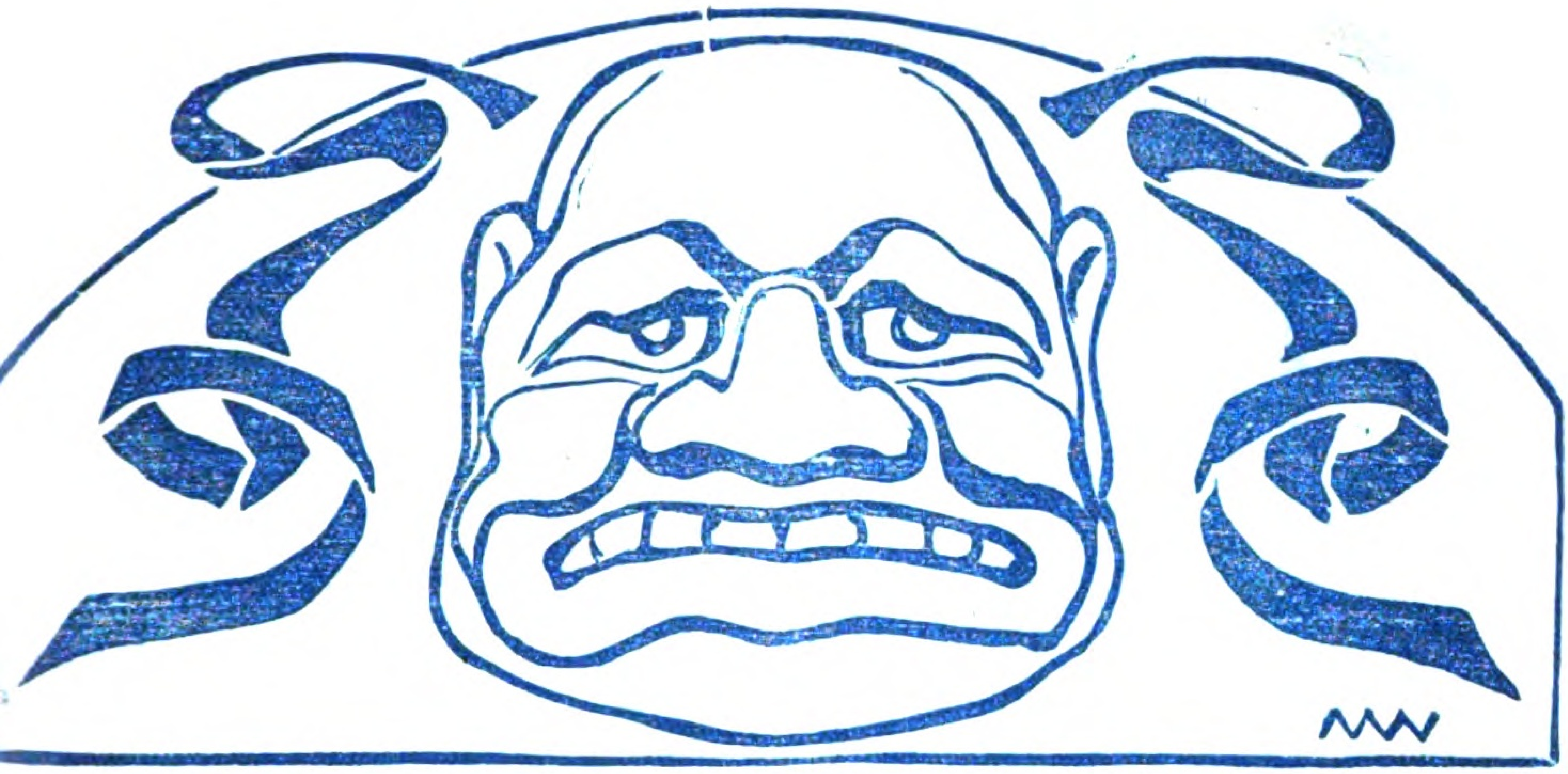
1.	"The Spirit of America" by Prof. H. Van Dyke..	by mail,	$1.63
2.	"The American of the Future" by B. Mathews ..	"	1.35
3.	"Whose Son is Christ?" by F. Delizsh...........	"	0.87
4.	"The Religion of Sensible Americans" by Presi. D. S. Jordan	"	0.88
5.	"Martin Eden" by Jack London	"	1.65
6.	"Toil of Men" by Israel Querido	"	1.50
7.	"The Education of the Will" by Dr. J. Payet ...	"	1.60
8.	"Psychology and the Teacher" by Prof. H. Muensterberg	"	1.60
9.	"The Life of Mirabeau" by S. G. Tallentyre ...	"	3.30
10.	"Joan of Arc" by Anatole France. 2 vols.	"	8.30
11.	"The Immigrant Tide" by E. A. Steiner	"	1.60
12.	"The White Beo" by Prof. H. Van Dyke.........	"	1.35
13.	"Political Issues and Outlook" by President Taft	"	1.35
14.	"Equety," by F. W. Maitland, LL.D.	"	4.60
15.	"The Temple" by Dr. Layman Abbott	"	1.35
16.	"Diplomatic Memories" by John W. Foster......	"	6.35
17.	"Economic History of America" by Prof. G. S. Gallender	"	2.99
18.	"Conquest of the Air" by Prof. L. Rotch	"	1.10
19.	"The Training of Farmers" by Prof. L. H. Bailey..	"	1.08
20.	"Dry-Farming" by Prof. W. Macdonald	"	1.31
21.	"Knowledge, Life and Reality" by Prof. G. T. Ladd	"	3.85
22.	"Every-Day Japan" by Arthur LLoyd...........	"	4.69
23.	"A Book of Precious Stones" by J. Wodiska ...	"	2.75
24.	"The Valor of Ignorance" by H. Lea	"	1.90
25.	"After Death—What?" by Prof. Cesare Lom-brose	"	2.70

BUMMEI-DO & Co.,
1750 Sutter St., S. F., Calf.,
United-States of America.

文明堂
は一番早く歐米の新刊書籍を廣告致します
の書籍を購讀なさる諸君は優先の新知識を獲ます
の廣告書籍は皆傑作のみであります

信用なき店舗及卑猥なる品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

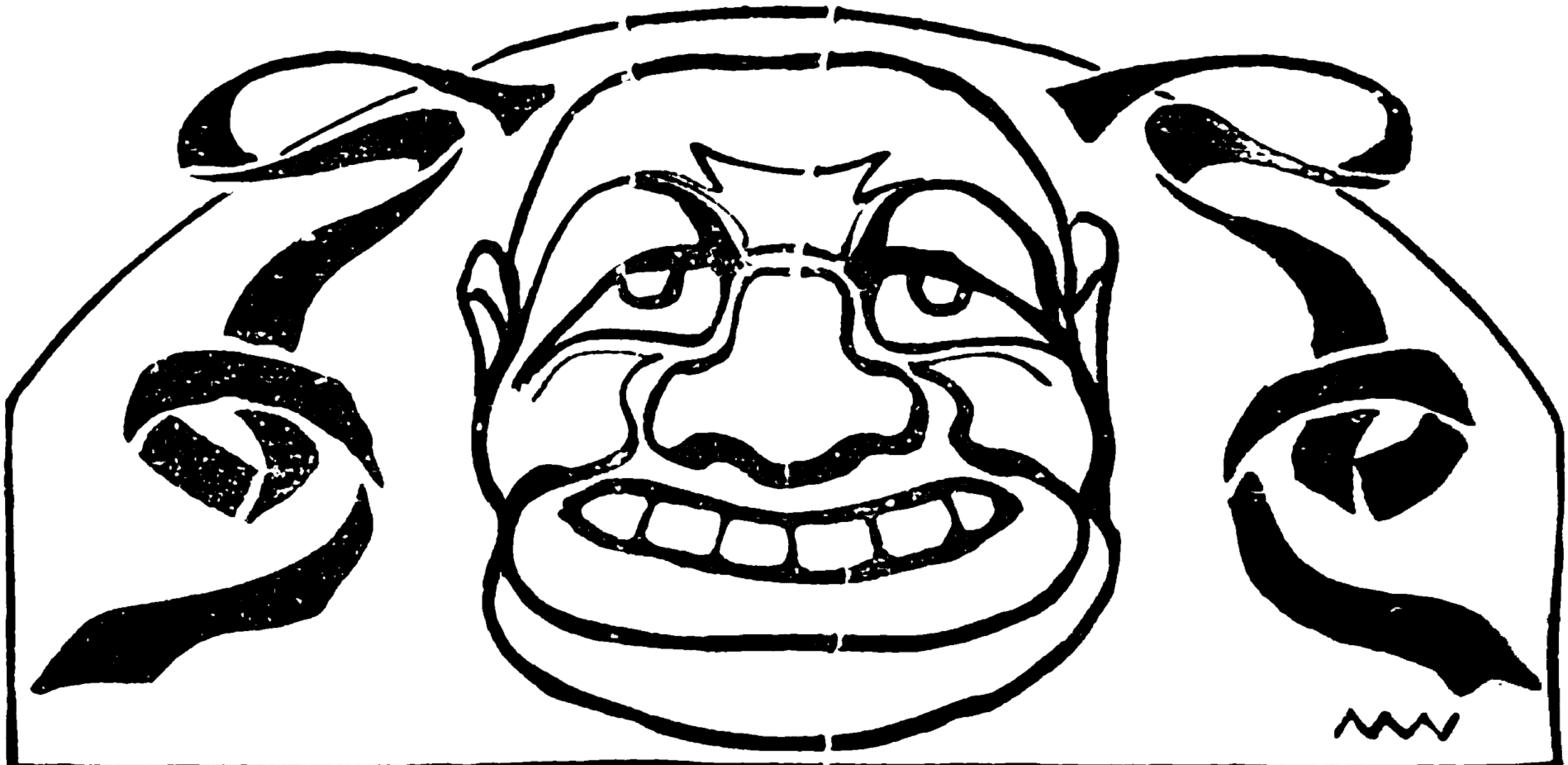


中央公論第廿五年第一號目次

△公論

△說苑

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

松林伯知口演

德川榮華物語

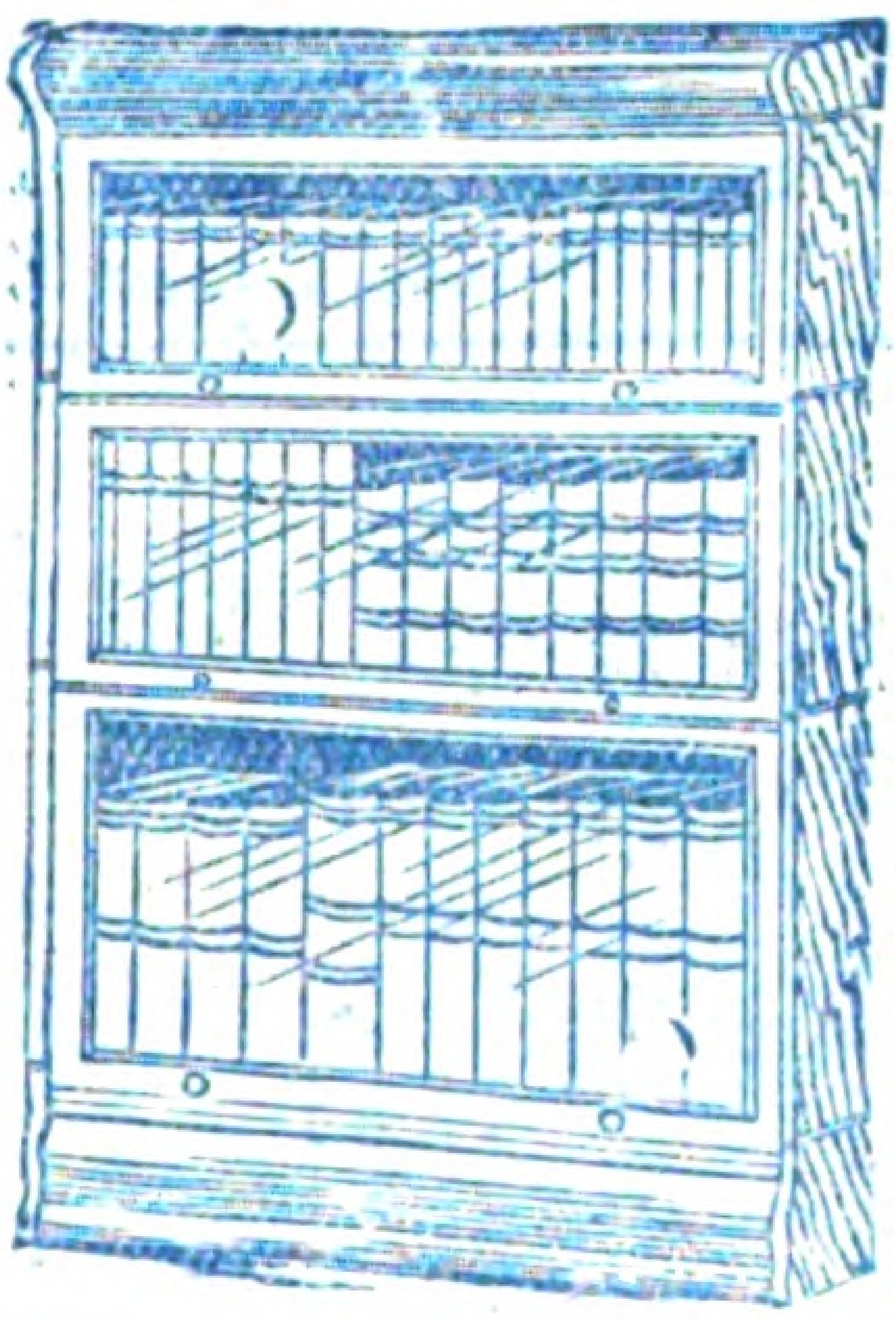
前篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
後篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
續編 椿の巻
定價各冊金五拾錢〇郵稅各冊六錢

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナルブック、ケースより數等進步したる者にして特徵は

●材料は上製は櫻並製にはナラ樫を精選し堅牢此上なし●形狀は優美にして色彩は上製は紫檀塗り並製はハイカラ塗●在來の函と異り硝子戶は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり●一組の本箱は三個の段函を重ね之に別にトップ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の增加に從ひ隨意に段函の數を增加し得べく、如何なる室にも適應すべし

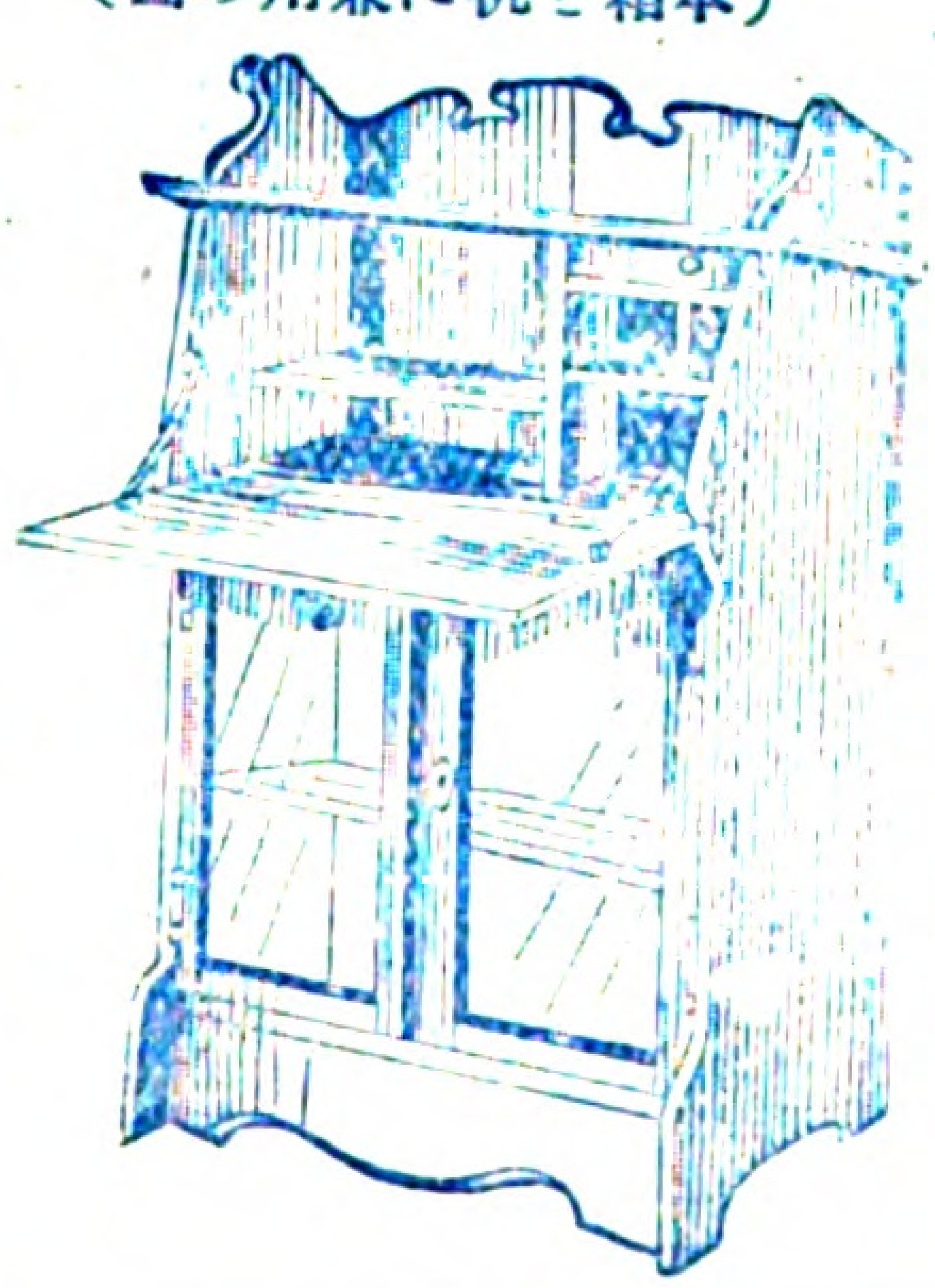
一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺上製金參拾圓（荷造費金壹圓）並製金貳拾七圓（荷造費不要）地方運賃御自辨



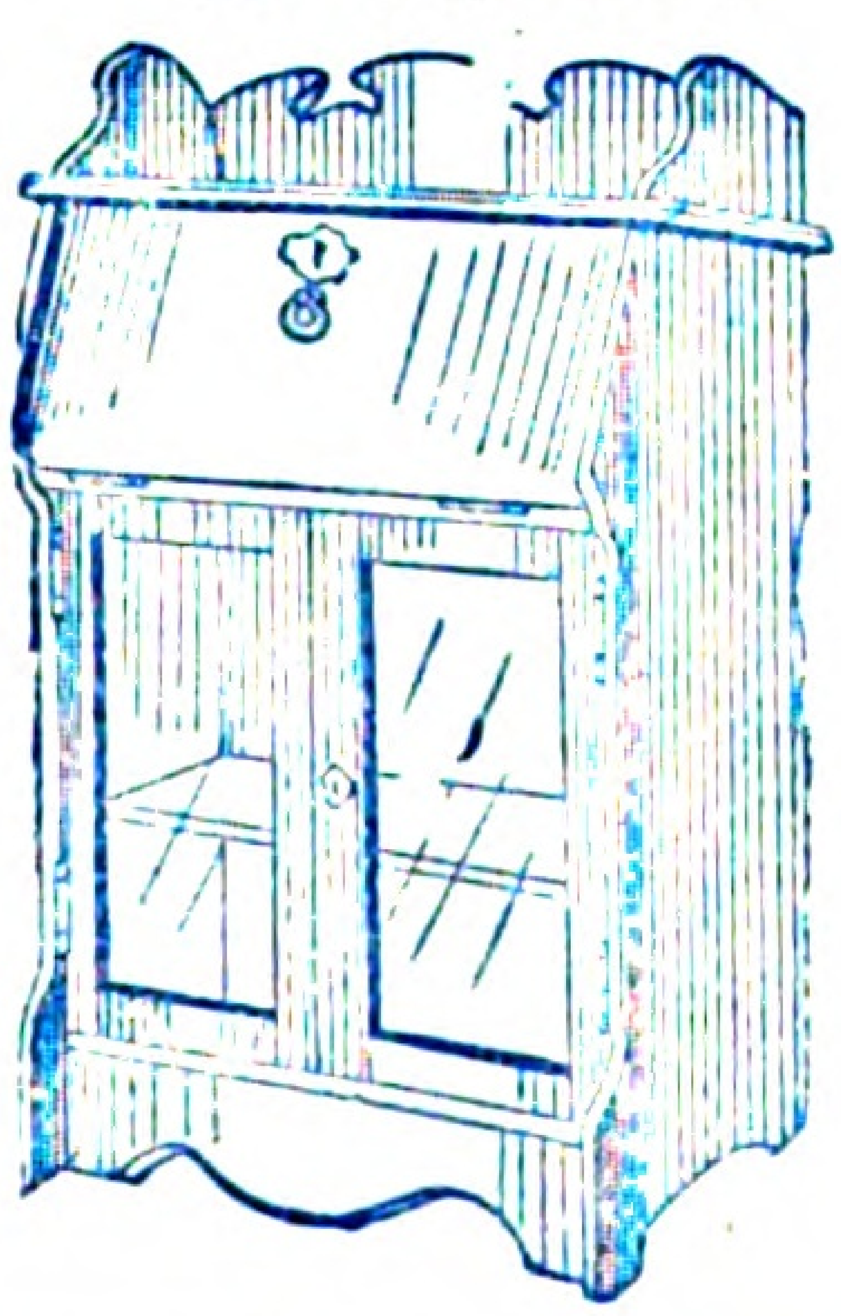
理想のデスク（本箱と机の兼用）

●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的也
●上部本棚の戶は開閉自由にして開けば机板なり、用終りて閉つれば元の戶となる故、如何なる狹小の場所にも用ひられ室內面積上の經濟最も大なり
●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し
●實用的なると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室內裝飾たるに足る
●一個高サ四尺四寸、間口二尺二寸、奥行一尺●上製（櫻製紫檀塗）金貳拾圓並製（ショーツ製ハイカラ塗）金拾七圓荷造費壹圓參拾錢地方運賃自辨

（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に專用の圖）



各種本箱製作の御注文に應ず

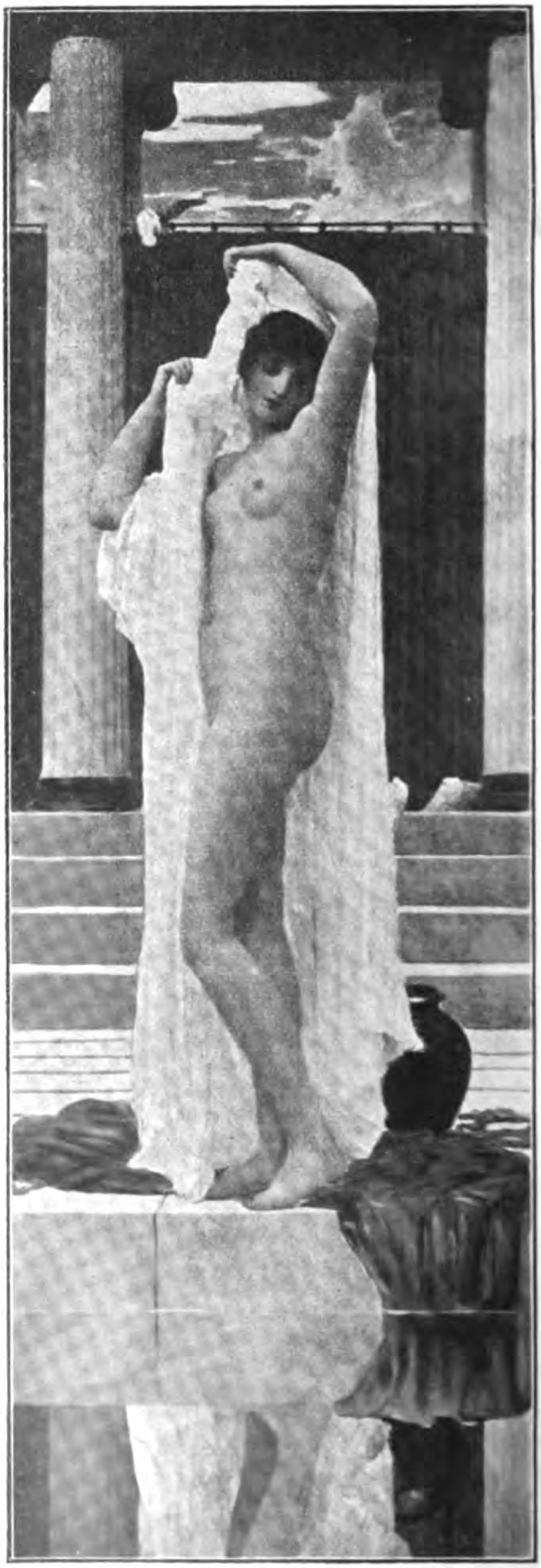
東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七 振替貯金口座二百番）

新橋堂書店 發賣

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

The Bath of Psyche.



BY LORD LEIGHTON P.R.A.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新春第一の二百五十號

烏兎匆々また一歳を送つて明治四十三年の春を迎ふると共に、我が中央公論は創業後二十五年を重ね、玆に第二百五十號を發行す、雜誌として二十五年第二百五十號に及ぶは、我が國に在て未だ甚だ短しと爲さず、吾人の知る限りに於て、其の年齡よりすれば『東京經濟雜誌』最も古くして吾人の兄たるも、『日本及日本人』、『太陽』以下は總て我が弟たりと稱するも可也、僅かに三年五年を數へて雄と稱し、多くは朝に起つて夕に倒るゝ間に在て、兎も角も二十五年第二百五十號を重ね得たるは、詮ずるに世上君子同情の致す所にして、吾人の感謝に堪へざる所とす。

然れども吾人の心は常に新た也、吾人同人の志は常に新春の卷首に申明するが如く、時論を公正穩健なる方向に導くにあり、此がためには刀鋸鼎鑊も甘きこと飴の如しと雖も、然かも曾て矯言激語したることあらず、努めて平靜の態度を支持せんとす、唯だ駑才微力にして宿昔の志業十の一を成すに至らざるは自から深く慚愧する所なりと雖も、世上君子の渥き眷顧に依て、幸ひに蹉跌少く、玆に芽出度き新歲を迎ひ得、何ぞ感謝に堪えんや。

聖皇の德天日の如く、新興の國運隆然として抑ゆ可らず、吾人は今新たなる文壇に上るに方つて、恭しく天壽の無窮を奉頌すると同時に、汎く世上諸君子を祝福して而して亦共に自から慶す。

明治四十三年元旦

反省社同人

98330

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第二十五年
第壹號
第二百五十號

來れる政治期節の豫測

（一）

一陽來復と倶に、季節は純政治期に入れり、世間の視聽は幾んど擧げて内閣と議會とに集中せんとす、此の時に方つて吾人また筆を此の方面に染めて、多少の觀察論を試むるまた甚だ無要ならざらん。

内閣は官吏增俸、諸稅整理、國債償還額增加を四十三年度財政上の三政綱として議會に臨まんとし、而して議會殊に衆議院は、地租輕減を以て内閣と對抗せんとす、知らず、其の成否並びに形勢の推移する所如何ぞや。

（二）

官吏增俸は行政整理に伴ふ、所謂行政整理とは官吏減少のとにして、各省は多く判任官を減じて少しく高等官を減じ、此より約三百七十萬圓を節し得、之に一般會計より八百七十萬圓を支出して約三割の增俸を行はんとするもの也。

桂首相は最近大阪に於て演説し、物價騰貴、生活上進、貨幣實價半減のため、多年の宿論たる官吏增俸の今にして實行せざる可らざる所以を主張したりしも、政友、進歩の兩黨に在ては、寧ろ增俸を不必要として之に反對せんと欲するもの〻如し、是れ兩者衝突の第一也。

稅制整理は所得稅(四百五十萬圓)、砂糖稅(二百萬圓)、毛織物稅(百萬圓)、工業用酒精稅(六十餘萬圓)を減少し、市内通行稅を廢止して四十三年度には約九百十七萬餘圓、次年度以降約千十萬餘圓を減ずるもの也、(營業稅は四十四年度より百五十萬圓を減ず)然れども農民の代表者たる政黨々人は多く之を悦ばず、未だ著るしき反對論あらざるも、然かも其の成否俄に保す可らず。

公債償還額增加は、約六千百萬圓と爲さんとするものにして、桂首相は歲計剩餘金は一時限りのものにして性質上減稅の如き長期に渉る財源とすべきに非ずといひ、純餘剩金七百五十萬圓を國債整理基金增加に繰入れんとする也、是れ商工界には人氣宜き措置にして、政黨間にも格別の異論なし。

政友會及び進歩黨等の主張する地租輕減論は、農民の負擔を輕くするがために、稅率一分を減ずるを主旨とす、即ち現在地租八千四百九十七萬餘圓に對して、約一千五百四十餘萬圓の歲入を減ずるもの也、官吏增俸に反對して之より生ずべき一千二百七十餘萬圓と、所得稅以下諸稅の改正案を訂正して之より

得べきものを併せて、以て其の財源に充てんとするもの也、内閣は果して其の官吏増俸案を放棄して快く之に從ふべきや否や、是れ殊に注目すべき問題也、換言すれば、官吏増俸實行せらるゝか、地租輕減論成立するか、孰れか敗れ孰れか勝つか、内閣勝つか、政黨勝つ乎、頗ぶる興味ある政治問題ならずんばあらず。

(三)

官にあるものは官吏のために鳴き、民間にあるものは農民のために鳴く、其の鳴くや喧しと雖も畢竟其の在る處に依て異なるのみ、若し政友會をして政府に立たしめば、地租輕減よりも官吏増俸を先にするや必せり、故に其の鳴くを聞くにも、相當の割引を爲さゞる可らず。

局外者として公平にいへば、官吏増俸必らずしも急とす可らず、少くも必らず三割の増俸を爲さゞる可らざるの理なし、政府にして眞に官吏を生活の困難より救はんとせば、第一に其の事業を相當の範圍に縮少せしめて以て物價を低廉ならしむるに如かず、次には官吏の所得税を免除するも可也、蓋し官吏は國家の公人として名譽の職分を有す、平民の容易に有するを得ざる位階勳等は幾んど官吏の占有物也、而して其の勤續十五年以上に及べば、總て恩給の典に浴すべく、別に遺族扶助法あり、民間人の容易に有す可らざる特典を有するに於て、平生得る所の報酬假令少しとも、彼と此れと相引きて以て忍耐するを要す、即ち位階勳等を必有する高等官以上には増俸せずして所得税を免除し、必らずしも位階勳等の恩典に浴せず、又多く所得税を負擔せざる判任官に増俸する、或は必らずしも不要ならざるべし、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

高等官の四等以上のものに至ては、増俸は寧ろ不急のみ。

地租輕減論も今日に在ては尙ほ不急也、日露大戰役の後を承け、二十餘億の國債を有して、而して一面には世界一等國の列に入り、東洋の盟主たる卓絕せる地位に立てる我が日本は、文武の庶政を更張して益々進步發展を期するがためには、國民も亦負擔を重ぬるを辭す可らず、苟くも退嬰恬熙を甘んぜば乃ち已む、列國と伍し、列國と進み、列國と共に當然享有すべき名譽、地位、福利、權威を得んと欲せば、國家は唯だ邁往勇進の一あるのみ、乃ち國民も亦發奮抵勵して以て益々負擔の重きを期すべきのみ、名譽、地位、福利、權威は無代價にあらず、然り、高價にして低價には非ず。

試みに世界の大勢を看よ、列國との交涉最も少き米國すら、今や關稅を增加すべきか、將た如何にして中央政府の收入を增加すべきかに焦心しつゝあるにあらずや、獨逸は大宰相ビユーロ侯竟に一身を賭して增稅を決行したりしにあらずや、我が同盟國は大なる增稅のため今や先例少き上下兩院の衝突を來して、政戰轉た辛烈を極めつゝあるにあらずや、列强の趨勢斯の如き時に方つて、我が國獨り珍らしくも僅かに財政の餘裕を得たりとて、早くも餓虎の肉を爭ふが如く、或は官吏のため、又は農民のため之を爭ひ取るに急なるが如きは、抑も何の心ぞや。

歷史的にいへば、地租輕減論は其の民のためにするものに非ずして、寧ろ政府攻擊の武器たるに過ぎず、初期議會に於て所謂民黨は藩閥攻擊の臼砲として之を用ゐ、次て屢々非地租增加を以て政府と戰へり、山縣內閣にも肉薄し、伊藤內閣にも急迫して、爲めに議會の解散を看たることすらありき、然れども

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地租は三分より漸次に增して竟に現在の如く五分五厘となれるにあらずや、今日の地租輕減論なるもの、亦政府攻擊の一武器たるに過ぎざるのみ。

若し眞面目に地租輕減を主張する政事家ありとせば、吾人は實に其の時勢後れなるに呆然たらざる可らず、土地の如き確實なるものを所有する以上、資本に對して三分の利廻りを得るに滿足すべし、若し然る能はずして、必らず少くも五分を得んと欲せば、寧ろ土地を沽りて而して株主たるに如かず、吾人は實際斯の如くならんとを希望す、僅かに十町內外の土地を所有するものが、地主と稱して袖手以て飽食安居せんと欲するが如きは、寧ろ國運を阻するもの也、然るに今の地租輕減論者は動もすれば地主の所得五分の利廻りに足らざるを以ての故に、其の負擔を減ずべしといふ、思はざるの甚だしき也。

若し其れ米價下落して農民の收入金額少きが故に減租すべしといふが如きは、短見の極也、米價騰貴せば乃ちまた增租を行ふべきや否や、斯の如き愚論は寧ろ齒牙に介するに足らざるのみ、然れども今の地租輕減論は、米價下落のため大小地主の意大に動けるに乘じ、內閣を攻擊して以て窘窮せしめんとする策士が、卒然として之を案出したるものなると蔽ふ可らず。

（四）

地租輕減論の火元は素より進步黨に在り、彼等は以爲らく、我れ先づ之を提唱して以て民意に投ぜば、政友會は默する能はず、素より反對すると能はざれば、竟に贊成して漸く內閣と絕緣するに至るべし、兩者絕緣し、假令全く絕緣せざるも、互ひに反目嫉視するに至らば、政局の發展期して待つべきのみと、

進步黨の非改革派が僅かに一箇年前まで三稅（織物、通行、鹽專賣）廢止を以て極力議會に論爭しながら、今や之を忘れたるが如く、新たに地租輕減論を提げ起ちしは、其の機變を弄するに過ぎずして而して定見なく信義なき所以にして、常に民心を繫ぎ得ざる一原由なるも、然かも其の機略の巧みなるは稱せざらんと欲するも得ざる也。

政友會は果して進步黨の圖るが如くなれり、彼等の智あるものは素より今日地租輕減問題を提げて內閣と戰ふの愚なる所以を知らざるには非ず、然れども彼等の或るものは、前期議會に在て、三稅廢止の代りに、穀物輸入稅の增額其の他を以て農民の意を迎へんとしたるが如く、常に農民に阿媚して或は及ばざるを恐る、故に地租輕減論の如きは踴躍して之を擔ぎ廻り、其の衆議院に多數を占るに乘じて我が黨の一手能く之を實行し得んと唱へて、極力其の斷行を期圖するが如し、而して滔々たる形勢の趨むく所、智者も竟に衆愚を奈何ともすると能はざるのみ。

政友會既に地租輕減に反對せず、而して進步黨之を助くとせば、其の衆議院を通過すべきや言を俟たずとす、若し貴族院にして之に反對せん乎、實行得て期す可らず、內閣は枕を高くして眠るを得べしと雖も、貴族院にも亦大地主あり、農民の意を迎ふる事を悅ぶ者あり、政局の多事にして內閣に窮危あるを樂むものあり、彼の研究會と雖も恐らくは減租論には反對せざるべし、乃ち其の貴族院を通過せんと亦必然なるに似たり。

然らば則ち內閣は如何にして地租輕減を阻止せんとする乎、全く官吏增俸論を拋ちて減租論を實行す

べき乎、即ち政黨を勝たしめて議會に從ふべき乎、將た議會を解散して飽まで決戰すべき乎、純理的にいへば、地租輕減論は一の愚論のみ、内閣も政黨も共に極力論爭すべき問題に非ず、然れども其の政略問題たるに於て、所詮何等かの解決を見ずんば止まざるべし、一片のマッチも風によつて之を煽すれば、貴に炎々烈々たる燎原の火と成る、一愚論と雖ども此がため議會解散を見るが如くんば、意外なる政治上の重大なる問題となつて、殆んど收拾すべからざる政局の變異を現じ來らん、是れ最も興味ある問題にして、恐らくは當期議會に於ける最大最要なる注目點なるべし。

（五）

吾人の信ずる所によれば、當期議會に解散を看るが如きとは萬莫かるべし、地租問題增俸問題のため議會解散を賭してまでも内閣と政黨と相抗爭するには至らざるべし。

然かく判斷する第一の理由は、政友會が解散を恐るゝに在り、政友會の爲めを圖るに、桂侯の内閣と妥協し、桂一黨が漸くにして民望を喪ふか、若くは政務に倦て更迭を欲するを俟ち、徐ろに之に代るを最良の手段とす、斯く好意的妥協的に更替するときは、少くも桂黨をして貴族院に妨害運動を爲さしめざる利益あれば也、陸海軍の統御を圓滿に爲し得る利益あれば也、智慮ある原敬氏の一派は、政友會を提げて、山本權兵衞伯を擁戴せんと欲し、頻りに安樂兼道氏をして聲息を通ずるに力めつゝあり、山本伯果して起たば、桂侯に取て實に隱然たる一敵國たるべく、政友會は大なる强味を加ふべしと雖も、伯の起つや否やは今に至て尙ほ判斷し難きものあり、假令幸ひにして起つも、桂侯と惡くしては陸軍の關

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

係を圓滑ならしめ難き事情なきにしもあらず、所詮桂黨と戰ふの外なくんば、勢ひ已むことを得ずと雖も、然らざる限りは力めて之を避くるに如かず、之を避けて衆議院に於ける多數の結束を堅くすると共に、機會ある毎に貴族院を開拓するを以て最も智慮ある手段とす、吾人は素より政友會の謀將策士が果して永く斯くする忍耐力あるや否やを疑はざるを得ずと雖も、少くも今期議會の無事を希ふて、桂黨との妥協を繼續する意圖なるや疑ひなし、同じく解散にても、地租輕減問題に由ること民望を收むるに於て頗ぶる便宜なるも、解散の結果、現在の如く多數を得るや否やは覺束なし、進步黨の策士にして若し此の機會に乘じて桂黨を動かし、之をして新政黨の成立に力瘤を用ひしめば、一昨夏來屢々計畫せられて屢々頓挫せる新政黨或は竟に成立して、桂黨の面々全く黑幕を撤して新政黨の陣頭に立つに至るも亦測る可らず、是れ政友會に取て一敵國を作る也、畏るべき一勁敵を現ずる也、殊に伊藤公を喪へる今日、桂黨より辛辣なる迫害を受くるが如きことあらば、政友會は竟に減じて百人內外、多くも百二三十人の議員を有するに過ぎざるも亦測る可らず、之を伊藤公の死歿に考へ、政友會の現在地方に於ける眞の地盤なるものに照すに、是れ幾んど動かす可らざる豫言ならざらんや、政友會は之を避くるがためにも、解散は最大なる禁物也、假令進步黨の形勢然らずして、更らに第二の民黨大聯合を現出し來ることあるも、貴族院の形勢にして變ぜざる以上、桂黨の民望を有すること依然として今日の如くなる以上、民黨大聯合は竟に歷史を繰返すのみ、結局政友會の利にあらざるや明らけし。

且つ解散の後、總選擧に於て民黨聯合多數を占むるも、地租輕減は政黨の提案也、桂黨にして若し死

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

力を盡して貴族院に防守せば、或は成立の機無からんとす、是れ亦考へざる可らず、乃ち考へて益々解散の害あつて利なきを知ると明らかならん。

第二の理由は内閣の解散を好まざるに在り、内閣既に前議會の協賛を得て財政の大綱大方針を定めたる以上、多く解散を畏るべき理由なし、彼の官吏增俸、諸稅整理、國債償還額增加の如きは、必らずしも一年二年を爭ふべき緊急問題に非ず、假令全く行はれざるも內閣存立の理由を無意義ならしむる程の重大問題にも非ざるが故に、必らずしも議會解散を賭してまでも支持すべき必要あらず、況んや地租問題の如き愚論のために解散を敢てせば、内は徒らに人心を激昂せしめて政情を險惡ならしめ、外は我が財政に對する列國の信用を毀損し、併せて桂黨の政治的智能を疑惑せしむべき虞あるをや。

且つ桂侯其の人の性質より考ふるも、解散は容易に視る可らず、侯の聰明なる、能く解散の愚にして徒らに官民を勞するに過ぎざるを知悉するに止まらず、侯の特能なる調和手段のあるあり、內閣を提げて議會政黨と調和するが如き、實に其の擅場とす、侯は時として伊藤公の如き先輩をすら一蹴するの勇氣なきにあらずと雖も、平生調和、圓滑を悅び、事を創する每に、豫め他と衝突すれば則ち讓歩すべき限度を想定し、此の限度以內は軍人的に之を死守する精神あるも、其れ以外に於ては十分に折衝し讓歩して以て事を纏むるを常とす、蓋し侯は故兒玉伯等と同じく『憲政の要道は互讓に在り』と固信するものゝ如し、即ち增俸、減租の兩問題を以て相對抗するに方つても、必らず調和妥協の途を發見すべく、斷じて議會を解散するまでには至らざるべし、然り、政黨にして妥協に應ぜず、飽まで增俸其の他

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の政府案を破壊し去て、遮二無二減租案のみを成立せしめんとせざる以上、斷じて解散すること莫かるべき也。

(六)

衆議院を左右すべき政友會、及び内閣兩つながら議會解散を欲せざるも、然かも各々主張あり、此の主張や其の面目に於て斷じて悉く放棄す可らず、是に於てか妥協の外あらず、妥協なるものは兩者共に勝者たらず、又敗者たらず、互讓して以て各々其の面目を保持し得る所以の途なれば也。

然らば則ち兩者妥協の方途如何、吾人は未だ語つて詳なることを得ず、吾人の推測は形勢の大體に止まるべくして、決して細目に渉る可らざれば也、否、渉ること能はざれば也。

試みに其の大要をいはゞ、官吏増俸は之を一割乃至一割半、或は二割に讓歩するも可なるべし、所得税の減少は一般に渉るが故に異議なしとするも、他諸税の改正は之れを後年に讓るも不可なからん、國債償還額の増加は、剩餘金の繰入れにして、素より恒久の財源とすべきものにあらず、財源として之を爭ふは影を捉へんとするよりも愚也、随つて多く異論を挾むべき餘地あらず、地租は之を五厘減に止むれば、其の額約八百萬圓、何等かの工夫に由て之を擧ぐること難からざるべし、假令四十三年度に於て之を得ざるも、次年度には容易に其の財源を發見し得べし、即ち之を豫約して以て妥協するも妙ならん。

然れども妥協の條件は吾人必らず明言を憚かる、明言せざるに非ず、能はざるのみ、唯だ何等かの妥協によつて此の議會の無事に終りて、而して政治期節また平靜なるべきを疑はざるのみ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人物經濟論

（上）

人生の事畢竟人力のみ、或は黃金の力を過大視して資本の重要なるを說くものあり、然れども資本豈黃金のみに止まらんや。

北米合衆國が其の始め幾んど無人の曠野にして、僅かに歐洲の流人謫客等に由て開拓せられし所以を思へ、資本家なるものは始めより來りて企業せざりし也、今巨億の富を有するカーネギーも、始めは一の綿打小僧のみ、實に赤手空拳を揮つて起れるもの也、我が岩崎、澁澤、安田、大倉の徒輩また然り、豪傑の士は文王を待たずして起る、資本なしと雖も、英物は能く富を成す、此の所以を知るものは黃金を貴ばずして寧ろ人力の重ずべき所以を識るに餘りあらん。

近くは伊藤公の如き、足輕より崛起して竟に公爵大勳位に至れるもの也、明治の元勳多くは然り、彼等幸ひに明君の擢用を蒙むりしと雖も、曾て有力なる推輓を得しには非ず、實に其の智勇辯力を以て今日に至りしのみ、人力の重んずべき、何ぞ多言を要せんや。

露國の大と富とを以てして、而して小にして貧なる日本に一籌を輸せしを思へ、我が人力竟に彼れに超越したるが故ならずや、兒玉はクロバトキンに優り、乃木はステスセルに優り、東鄕はマカロフに優り、而して色黑く丈短き島國の兵士は、白皙にして長大なる北歐の大國人に優さりしが故ならずや、人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事は總て人力に在り。

（中）

此の理由に依て、吾人は所謂野に遺賢あるを以て興國の祥事にあらずとす、英材必らずしも朝に事へて政局に立つを要せざるも、民間の事業に當りて以て大に其の智勇辯力を揮ふを要す、然らずして徒らに不遇を嘆じ、若くは不遇を嘆ぜざるも、十分に其の材力を伸すに至らしめざるは、猶ほ黃金を土に埋むるが如く、駿馬を櫪間に隱臥せしむるが如し、不經濟の極也。其の不經濟なる程度は、銀行の金庫に巨資を遊ばしめ、船舶を陸上に伏せしむるよりも尙ほ甚だし、語勢を強くして之をいへば、人生の進步發達を遲々たらしむるもの也、是れ經世家の切に意を致すべき點ならざらんや。

（下）

今試みに之を具體的にいはん、彼の一代の才人と稱せられし伊東巳代治子、末松謙澄子、金子堅太郎子、都築馨六、奧田義人の諸氏が若隱居然として世事に關せざるは、人物不經濟の明證ならずや。

日清戰役前に在ては、伊藤、山縣、黑田、井上、松方、西鄕、大山の諸元勳內閣に列して、一時の材を盡したりき、彼等各方面に當りて其の智勇辯力を傾盡し、下に人材雲の如く集まる、國勢伸張せざらんとするも得べからざりし也。

日清戰役の後、新たに臺灣を我が領域とし、日露戰役の後は、更らに樺太の南半を加へ、且つ韓國に宗主權を立て、統監府を設け、南滿洲を租借し、東清鐵道の一部を領有して、關東都督府を置き、南滿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人物經濟論

（上）

人生の事畢竟人力のみ、或は黄金の力を過大視して資本の重要なるを說くものあり、然れども資本豈黄金のみに止まらんや。

北米合衆國が其の始め殆んど無人の曠野にして、僅かに歐洲の流人謫客等に由て開拓せられし所以を思へ、資本家なるものは始めより來りて企業せざりし也、今巨億の富を有するカーネギーも、始めは一の綿打小僧のみ、實に赤手空拳を揮つて起れるもの也、我が岩崎、澁澤、安田、大倉の徒豈また然り、豪傑の士は文王を待たずして起る、資本なしと雖も、英物は能く富を成す、此の所以を知るものは黄金を貴ばずして寧ろ人力の重ずべき所以を識るに餘りあらん。

近くは伊藤公の如き、足輕より崛起して竟に公爵大勳位に至れるもの也、明治の元勳多くは然り、彼等幸ひに明君の擢用を蒙むりしと雖も、曾て有力なる推輓を得しには非ず、實に其の智勇辯力を以て今日に至りしのみ、人力の重んずべき、何ぞ多言を要せんや。

露國の大と富とを以てして、而して小にして貧なる日本に一籌を輸せしを思へ、我が人力竟に彼れに超越したるが故ならずや、兒玉はクロパトキンに優り、乃木はステスセルに優り、東郷はマカロフに優り、而して色黑く丈短き島國の兵士は、白皙にして長大なる北歐の大國人に優さりしが故ならずや、人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事は總て人力に在り。

（中）

此の理由に依て、吾人は所謂野に遺賢あるを以て興國の祥事にあらずとす、英材必らずしも朝に事へて政局に立つを要せざるも、民間の事業に當りて以て大に其の智勇辯力を揮ふを要す、然らずして徒らに不遇を嘆じ、若くは不遇を嘆ぜざるも、十分に其の材力を伸すに至らしめざるは、猶ほ黄金を土に埋むるが如く、駿馬を櫪間に隱臥せしむるが如し、不經濟の極也、其の不經濟なる程度は、銀行の金庫に巨資を遊ばしめ、船舶を陸上に伏せしむるよりも尚ほ甚だし、語勢を強くして之をいへば、人生の進歩發達を遲々たらしむるもの也、是れ經世家の切に意を致すべき點ならざらんや。

（下）

今試みに之を具體的にいはん、彼の一代の才人と稱せられし伊東巳代治子、末松謙澄子、金子堅太郎子、都築馨六、奥田義人の諸氏が若隱居然として世事に關せざるは、人物不經濟の明證ならずや。

日清戰役前に在ては、伊藤、山縣、黒田、井上、松方、西郷、大山の諸元勳内閣に列して、一時の材を盡したりき、彼等各方面に當りて其の智勇辯力を傾盡し、下に人材雲の如く集まる、國勢伸張せざらんとするも得べからざりし也。

日清戰役の後、新たに臺灣を我が領域とし、日露戰役の後は、更らに樺太の南半を加へ、且つ韓國に宗主權を立て、統監府を設け、南滿洲を租借し、東清鐵道の一部を領有して、關東都督府を置き、南

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洲鐵道會社を設く、之に臺灣總督府を加へて、我が政治機關並びに利益線の擴張したるもの、殆んど前と同日に語る可らず、即ち人材を需要するの多き何ぞ多言を要せんや。

井上、大山、松方、樺山、板垣、大隈の諸翁の悠遊するとは、吾人今敢て甚だ異議を唱へず、彼等は功成り名遂げて今や餘生を娯むもの也、之をして英雄の末路を善くせしむる亦實に聖代の祥瑞たらずんばあらず、但だ年若く材俊なる新人が、動もすれば樞密院に入りて若隠居然たるが如きは、吾人の故障を申立てざるを得ざる所とす。

伊東子、奥田氏は、尙ほ宮中制度の起草に齷齪す、未だ必らずしも晏居すと做す可らず、然れども末松、金子、都築の諸子氏は如何の體ぞや、末松子が伊藤公の愛婿となり、其の才識多く蔽はれて、單に舅公の覊縁に由ると視られしは、實に其の初めを謬まれるもの、惜むべきの甚だしき也、金子子の往くとして可ならざるなき、また一代の材人たり、都築氏は材に兼ぬるに力を以てす、優に大臣たるべくして而して未だ大臣たらず、恰かも世をスネたるが如く飄逸す、果して何の心ぞや。

今の世は果して智勇辯力を用ふる餘地なしとする乎、大臣の椅子素より限あり、政黨幹部また自から限度なきにあらず、然れども新人の材力を用ゆべき所何ぞ政治の一局面に限らんや、實業可也、文學可也、美術可也、各々其の適する所に由て大に活動すべし、英雄首を回せば即ち神仙也、米國大統領の地位を去て、將さに紐育市長たらんとするものあるを思へ、職分には素より高下なし、身を心と共に輕くして、如何なる職業地位にも就て、以て自家の力量を十分に試むべし、是れ人物經濟の眞髓を得る所以

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

也、若し材力を用ゆる斯の如くんば、延きて世の進歩に資する少からざらんとす。

吾人は必らずしも此の數氏者といはず、唯だ僅かに子爵男爵を得、十萬圓五萬圓内外の資產を得て、早くも若隱居となり太平の逸民たる人才を見て嘆惜に堪えず、敢て一言して其の奮起活動を促すのみ、今や年と共に人心も亦新た也、苟くも材幹あるもの亦新たに活世界に入て新たに活動すべき也。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

公論

人類の將來

丘淺治郎

一

何事に限らず未來を說くのは決して容易ではない、昔から「一寸先は暗」と云ふ通り次の瞬間に如何なる事が起るかは前以て知ることの出來ぬが常である、多少學術上の根據を有する天氣豫報でさへ、當らぬことが多い故、世間からは當るも八卦、當らぬも八卦と同樣に見做されて居る、されば今日の所では未來の豫言は到底普通の人間には出來ぬことゝて、若し之を爲し得る者があつたならば、其者は必ず人間以上の所謂豫言者の類でなければならぬ如くに思はれて居る、

然しながら、未來のことゝても、總てが全く豫言の出來ぬものゝみとは限らぬ、來年の暦には何月何日には日蝕が有つて、何時何分何秒に始まつて、何時何分何秒に終ると明記してあるが、それが必ず確に當る、今年現はれる「ハレー」彗星なども幾十年も前から既に今年現はれるべきことが天文學者には知れてあつて、今後また何十何年目に再び現れ出ると云ふとまでが明に解つて居る、他の方面に於て豫言が總て不可能なる如くに見ゆるに反し、天體に關してのみ斯く正確に豫言の出來るのは何故であるかと云ふに、之は決して特別な秘密がある譯ではなく、唯既往に於ける天體の運動を正確に測定し、その運動を支配する法則を探り求

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

め、之を將來に當て嵌めて、豫言するのみである、されば他の事とても、天文學で將來を推測するのと同一の方法によつて考へたならば、多少の豫言の出來ぬことはなからう、我等が今此所に聊か人類の將來に就いて論ずるのは、決して豫言者を以て自ら任ずる次第ではなく、單に天文學者が天體を觀測し研究するのと同一の態度を取り、生物界の既往の變遷を調べ、それより生物各種の榮枯盛衰を支配する法則を探り求め、之を人類の場合に當て嵌めて、その將來を推測しやうと試みたに過ぎぬ、天體の運動の簡單なるに反し、生物界に起る現象は極めて複雜であつて、到底數學的に計算は出來ぬから、時を指して豫言することは素より出來ぬが、唯その進み行く方向と、終に達すべき終局點とだけは恐らく誤りなく推測し得るであらうと信ずる、

之より先づ、人類が如何にして生存競爭場裏に他の動物に打ち勝ち、今日見る如き優勢の位地を占め得るに至つたかを考へ、次に地質學上の各時代に全盛を極めた諸種の動物が如何にして一時斯かる勢力を得るに至つたか、また何故それが遂に亡び失せたかを調べ、それ等を基として人類の將來に就いて我等の推測する所を順次述べて見やう、

二

さて人類は他の動物に比して如何なる點が優つて居たので總て他の動物に打ち勝つて、今日の位地を占め得るに至つたかと考へるに、恐らく、誰でも直に氣の附くことであらうが、それは思考力、推理力の器官なる腦髓の發達せることゝ、運轉の自由自在なる手を有することゝである、假に人間の手に屈伸自在の指がなくて、其代りに馬や牛に見る如き蹄が着いてあつたと想像して、それでも人間が今日の位地まで達し得たであらうか、否かと考へれば、人類の進歩に取つて手が如何に缺くべからざるものであつたかが直に知れる、手に指が無かつたならば、第一、物が握れぬから如何なる簡單な器械をも使ふことが出來ぬが、若しも人間に器械を使用する能が無かつたならば、到底他の動

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に優るべき目醒しい働きは出來なかつたに違ひない、人間が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蠻人を征服したのも全く器械の力に依るのである、人間の外にも幾分かの器械を用ゐる動物が全くない譯ではないが、人間の如くに一から十まで器械ばかりを使ふものは他にない故、實に「人間は器械を使ふ動物なり」と云ふ定義を下しても差支へはない、また腦髓の方が充分に發達しなかつたと想像すると、此場合にも人間は決して今日の位地に達し得なかつたことは疑ない、凡そ如何なる器械でも、之を用ゐるに當つては手を使ふと同時に必ず腦をも使ふもので、器械を造るに當つては更に多く腦を用ゐる、腦で工夫した器械を造つて使用して居れば、手はそのため漸々熟練して益々精巧に働き得る樣になり、手を働かして經驗が積れば腦はそのため更に進歩して前よりも一層よく物を考へ得る樣になり、兩方で相助け合ふて、兩方ともに益々發達する、腦の思考力、推理力が進めば、自分に比して遙に筋肉の强いもの、感覺の鋭いもの、爪牙の鋭いものに對しても智力によつて容易に打ち勝つことが出來るが、人類が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蠻人を征服したのも總て此方法に依つたのである、

元來如何なる器官でも突然一足飛びに發達するものではなく必ずその履むべき順序を經て漸々進み來るもので、人類の腦なども手と器械とに依つて獲る經驗の重なるに隨ふて發達したのであるが、之と大關係あるは言語である、今日の所で言語を有する動物は人間のみである故、或る人が「人は言語を有する動物なり」と云ふ定義を下したのも尤である、通常言語は口で云ふもの丶如くに見做されて居るが、實は口は單に言語に必要な音を發するだけの器官であつて、眞に言語を使ふ器官は腦であるから、我等は常に腦で物言うて居ると云ふた方が寧ろ正しい、言を換へれば、言語なるものは腦の働きに使ふ器械であつて、手が種々の器械を用ゐて働く如くに、腦は言語を用ゐて働くのである、器械も初めは石斧や石棒の如き粗末なものであつたのが、終に自働車や「ライノタイプ」など頗る精巧なもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が出來た如く、言語も初めは至つて粗末なものてあつたのが、漸々進歩して精巧なものとなり、腦はその精巧な言語を使ふて、益々推理の力を進め、智力を增し、何事をもよく工夫して終に他の諸動物に打ち勝つて今日の優勢なる位地に達したのてある、

人類の起りを想像するに、恐らく今日より何百萬年か何千萬年かの昔に其頃生存して居た猿類の中の或る一種が樹上の生活より地上の生活に移り、後足のみて體を支へ、直立して步み、斯くして自由になつた前足を用ゐて簡單な器械を使ひ始め、或は石を拾ふて敵に投げ、或は枝を折つて敵を防ぐべき棒となし、或は石を打合せ、割れて鋭い刄の生じたものは之を斧または刀として用ゐ、小さい片は鏃として矢の先に結び附け、石を打ち合せ、若しくは木を磨り合せて居るとき偶然火の發することを屢々經驗する間には、遂に自由に火を造る方法を覺え、隨意に火を用ゐ得る樣になつた以上は、之によつて土器を燒くことも出來、次には鑛物を熱して靑銅、鐵さへも採つて、種々の武器を造り得るまでに進むてあらうが、此程度まて進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つも無く、自分に危害を加へる獸類は悉く退治し、自分の種屬は漸々蕃殖して全世界に擴がり、終に戰と云へば人類相互の戰のみを意味する今日の有樣までに進み來つたのてあらう、また斯く手を用ゐて爲ることが進步する間には、經驗の重なるに連れて、腦の働きも速に發達し、終には困難な無形の事柄をも抽象的に思考することの出來るまでに進み來つたのてあらう、我等人類は斯くの如く腦と手との働きに依つて今日占め居る位地までに達したのてあるが、さて今後は如何に成り行くてあらうか、

三

「歷史は繰り返す」と云ふ諺がある、之は恐らく時の古今を問はず同じ原因があれば必ず同じ結果が生ずることを云ふたものてあらう、然らば或る事の將來を論ずるに當つては、嘗て既往の歷史中に起つた似寄りの事件の成り行きを調べて、參考し比較することは甚だ

必要である、今人類の將來を論ずるに當つても、先づ人類より以前に此地球上に全盛を極めて居た各種の動物が、終に如何なる運命に遇ふたか、また何故その樣な運命に遇ふたかを詳しく研究して參考せねばならぬ、

人類以前に地球上に全盛を極めて居た動物の例を擧げれば、古生代に於ける魚類、兩棲類、中生代に於ける爬蟲類、第三期に於ける獸類などである、此等は各々其時代に於ては恰も今日の人類の如くに絶對に優勢なる位地を占めて、假にも之に敵し得る動物は決して他に無かつた、特に中生代の蜥蜴類の旺盛を極めて居た勢は殆ど想像も及ばぬ程で、近頃發堀せられた化石のみに就いて見ても北アメリカから出た「アトラントサウルス」といふ蜥蜴などは體の長さが十六間もあつて、今日の最大の鯨よりも更に大きい、こんな動物がうろ／＼と陸上を匐ひ廻つて居たときの實際の樣子は如何であつたらうか、また其頃の海の中には「イクチオサウルス」、「プレシオサウルス」などゝ名づける鯨の樣な大きな蜥蜴類が無數に游いて居た、また空中には翼を有する蜥蜴類が澤山に飛んで居たが、その中で、「プテラノドン」と云ふ種類などは翼を擴げると三間半もあつて、今日最大の飛ぶ鳥なる南米の「コンドル鷲」に比べて殆ど三倍も大きい、斯くの如く、其時代に於ては陸上を走るものも、水中を游ぐものも、空中を翔けるものも悉く蜥蜴類のみで、聊ても之に匹敵すべき動物は他に無かつたのである、次に第三期に於ける獸類もその通りで、單に身體の大さのみに就いて云ふても、「チノテリウム」と稱する象類の如きは頭骨だけでも長さが一間近くある、「マケロヅス」と云ふ虎では牙の大さが殆ど短刀ほどあり、鹿には左右の角が二間以上に擴がつたものがある、されば此時代に於ける獸類は中生代の蜥蜴類と同じく、如何なる動物が出て來やうが到底亡ぼされる如きことは夢にも有り得べからざる勢であつた、然るにその成り行きは如何と見ると、中生代の大きな蜥蜴類も、第三期の恐ろしい獸類も、兩方ともに實際に於ては忽ちにして亡び失せ、次の時代には

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殆ど全滅の姿と成り終つたのである。

一時絕對の優勢を占めて向ふ所全く敵なしとも云ふべき有樣にあつた此等の動物が何故に忽ち衰へ亡びるに至つたかは大に研究すべき問題である、此問題に就いては、古生物學の書物にも何も論じてなく、生物學者等の間には何の說もない樣で、普通には唯これ等の動物よりも尙一層優つたものが現はれた爲に、生存競爭に敗れて亡びたのであらうと簡單に思はれて居るが、我等の考へては此問題は斯樣に簡單に解決せらるべきものではなく、更に深く研究を要する、第一、旣に優勢の位地に立つて居ると云ふことは、生存競爭上その動物に取つて大に有利な點である故、假に同等の競爭者が現はれたと想像しても、決して容易に負ける理由はない、一種の動物が絕對に優勢の位地を占めて居る以上は殘りの動物は之に比して悉く劣等の位地に立つて居ることは勿論であるが、今まで劣者の位置に立つて居たものゝ中から或る一種が突然急速力を以て進步し、今まで絕對に優勢を保つて居たものを追ひ越し、忽ち之を全滅せしめると云ふことは容易に有るべきことでない、山が海となり、海が山となつて天地も覆るかと思ふ樣な大變動が地球の表面に起つた場合はいざ知らず、斯かる天變地異が無い以上は、其時の劣者の中から、其時の最優者を忽ちに亡ぼすべき程の力を有するものが現はれやうとは容易に信ぜられぬ、然らば前に述べた如き一時全盛を極めた動物種屬が何故に忽ち滅びたかと云ふに、我等の考へによれば、その動物種屬自身の內に、自ら滅亡すべき原因が生じて、この原因が內から働くのと、外から攻める敵の力とが相合して、遂に之を滅亡せしめたのである、

凡そ物が亡びるには二通りの原因がある、一は外に在つて外から働く原因で、他は、內に生じて內から働く原因である、我國の歷史に就て見ても、平家が亡びて源氏が興つたのは、決して平家が引續き健全に發達して優勢を占め居るべき筈の所へ、源氏が更にそれ以上に優つたものとなつて、競爭の結果これを倒したのではない、若しも平家に內から亡びるべき原因が無、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたならば、競爭上遙に不利益な位地にあつた源氏が、後より之を追ひ越して倒す望みは到底無かつたであらう、彼の驕れる平家が久しからずして亡びたのは、平家の亡びるべき原因が既に內から働いて、最早危く成りかゝつた所を源氏が外から突き倒した故、恰も內部の朽ちた枯木が些細の風にも倒れる如くに、容易に亡びたのである、常に生存競爭の劇しい世の中にあつては、如何に一時優勢を保つた動物でも、內から亡びる原因が働いて、その運命が傾いて來た場合には、今まて劣等の位地にあつたものゝ爲に忽ち倒されて仕舞ふのは當然である、中生代に天下を我物顏に横行した「イクチオサウルス」や「プレシオサウルス」が僅に一時代限りて滅び失せたのも、第三期の恐るべき猛獸、驚くべき巨象が暫くて全く死に絶えて後に子孫を遺さぬのも、全く平家の亡びたのと同樣の理由に基くのである、

一時絶對の優勢を保ち得た動物種屬を內から働いて滅亡せしめた原因は何であるかと云ふに、我等の見る所によれば、何れの場合に於ても必ず、初め其種屬を急に勃興せしめた原因と同一のものである、之は一寸聞くと甚だ不思議に思はれるであらうが、少しく詳しく調べると其理由が明になつて來る、凡そ何事でも一利あれば必ず一害あるは免れ難いことで、人の傳記などを讀んで見ても、同一の性質が其人の長所であると同時にまた短所でもあると云ふ樣な文句を往々見るが、動物の有する諸種の性質にも之と同樣なことがある、或る動物は體の大きく筋肉の強いことに依つて他の種屬に打ち勝ち、或る動物は武器の鋭いことに依つて他の種屬に打ち勝ち、其他それ〴〵異なつた方面に他に優れた所があつたために優勢の位地に達し得たであらうが、假に身體が大きく、力が強かつた爲に他に打ち勝つた動物に就いて見るに、體の大きくて力の強いと云ふことは確に生存競爭上、他の動物に勝つに都合の好い性質ではあるが、また生活に多量の食物を要すること、成長に長年月を待たねばならぬこと、蕃殖の遲かるべきこと、働作に敏捷を缺くこと、其他尙種々の不利益なことが必然に附帶して來る故、一定の度

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を超えれば、體の大なることは却て、生存競爭上に都合が惡くなる譯である、また牙や角の大きく鋭いことは之を用ゐて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之とても、牙や角だけが單獨に發達し得るものではなく、これを載せるための頭骨、顎骨も、之を運用すべき筋肉も、その筋肉を養ふべき血管も共に發達せざるを得ぬ故、牙や角が大きくなれば、それだけ、其動物の負擔が重くなつて、之も一定の度を超えると、恰も不相當に多くの海陸軍を造つた貧乏國が武器を維持するために重税を課する結果として、總て他の方面が疲弊し、終には國全體が衰へざるを得ぬ如くに、矢張生存競爭には却て不適當なものと成つて仕舞ふ、凡そ或る性質を備へたるが爲に總て他の種屬に打ち勝つて、絕對に優勢の位置に進んだ動物は、後には更に其性質を用ゐて相互に競爭するを免れぬもので、筋力で天下を取つた種屬は後には自己の種屬内で相互に筋力を以て爭ひ、牙で優勢を占めた種屬は後には自己の種屬内で相互に牙を以て鬪ふ故、益々體の大きなもの、牙の强いものでなければ生存することが出來ず、斯くして、初め其種屬をして他に優らしめた性質は何所までも際限なく進まねば止まぬ有樣となるが、前に述べた通り、如何に初め生存競爭に都合の好かつた性質でも或る程度を超えると却つて生存競爭に不利益なものとなり、且身體が或る一定の生活法に適する樣に專門的に遠く變化すると總て他の方面にはそれだけ不適當なものと成らざるを得ず、隨てそれだけ融通の利かぬものと成り終に生存競爭上不利益な位地に陷つて、漸次他の種屬のために滅されるに至つたのである、

以上述べたことを尙詳しく論ずれば、多くの實例を擧げて證據立てることが出來るが、斯くては餘り專門學の範圍に深入りすることと成る故、此所には略する、唯我等の考への要點を述べれば次の如くである、即ち地質學上の各時代に優勢の位地を占めて居た諸種の動物が、後に至り忽ち亡び失せたのは、決して單に他の種屬のために攻められて敗けた爲ではなく、寧ろ、その亡びるべき原因が内部に生じたのに因るのである、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然してその内部に生じた原因と云ふのは、即ち初め其種屬をして總て他の動物に勝つて優勢の位地に達せしめた原因と同一のものである、「シャミセンガイ」や「オウムガイ」の樣な何所の隅に生きて居るか分らぬ程の微々たる生活を營んで居るものは却て古生代から今日まで引續いて細長く生存して居るに反し、一時急に盛になつて、暫くは絶對に優勢を保つて居た樣な動物が悉く次の時代に滅び失せたと云ふことは、我等が此所に述べた如き原因によると考へるの外には到底説明の仕樣は無い樣である、

斯くの如く化石學上の例の示す所によると、一時地球の表面に優勢の位地を占めて居た動物種屬は、孰れも初め其種屬をして他の動物に打ち勝つて、優勢の位地に達せしめた其同じ性質が、やがて却て禍をなして、そのために悉く亡び失せて仕舞ふたが、さて人類は如何であらうか、人類だけは獨り他の動物とは全く違ふて、人類をして今日の優勢なる位地に達せしめた腦と手との力に依り、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮へ行くてあらうか、將また他の動物と同じ法則に從ふて、嘗ては人類をして他の動物に打ち勝たしめ、文明人をして野蠻人を征服し得せしめたその腦と手との働きが、やがて却て禍をなして、人類をして、恰も空に向ふて投げた石が降ち來るときの如き「パラボラ」線を畫いて、一刻毎に速力を增しつゝ滅亡の運命に向ふて進ましめ居る如きことは無いてあらうか、

四

前に述べた通り人類が今日の有樣までに進み得たのは全たく言語と器械とを用ゐて働く腦と手との力に因つたのであるが、この力の發達に伴ふて如何なることが起つたかと云ふに、凡そ器械を用ゐる以上は所有權と云ふものが生じ、財産なるものが現はれ、同時に財産を借して利子を取ると云ふ制度も起るが、その必然の結果として、終に貧富の懸隔が甚だしくなり、富める者は益々富み、貧しき者は益々貧しく、一社會の中に、遊びながら贅澤の極を盡す少數の極富者と、如何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に働いても生活に必要な衣食さへも充分に獲られぬ無數の赤貧者とを生ずるに至る、西洋諸國では今日既に此有樣に達して居るが、世の進むに隨ひ此傾向は益々烈しくなるに違ひない、金の有り餘る富豪と、生活のためには如何なる恥をも忍ぶ貧民とが並び存すれば、其間に宜しからぬ現象の起るは當然の理で、之のみでも世道の頽廢、人心の墮落の原因としては充分である、

富者の華美な生活を見、金力によつて殆ど何事をも爲し得ざることなき有樣を目擊する多數の人々が、同じく一生を送るならば我も斯くの如くにして暮したいと思ふは無理ならぬこと故、世間一般に唯金錢にのみ重きを置く樣になり、如何なる苦しみを忍んでも金錢を溜めやうと決心することを奮發と名づけ、何等かの方法に依つて金錢を溜め得たことを成功と稱し、父兄は行末を思ふて子弟に奮發を强い、雜誌は成功者の例を擧げて盛に青年を煽動する故、益々金錢のための競爭が劇しくなるが、一人をして富豪たらしめるためには數萬人が貧苦を忍ばざるべからざるは計算上、明てある故、總ての奮發者が悉く成功することは到底望むべからざることで實際には其多數は何時までも唯劇しい競爭を續け、苦しみながら遂に一生を終るのである、肉體の慾には何れも際限があるが、金錢に對する慾には際限が無いから、富だ者は、その生存競爭に有利なる地位を利用して、更に富を增さうと努め、貧者は益々之に苦しめられ、終には每日朝から晩まで牛馬の如くに働いても、生存に必要な食物、衣服さへ充分に獲られぬ程になる、要するに、今後は貧富の懸隔が益々甚しくなり、一度貧困に陷つたものは如何に奮發しても容易に頭を上ることは出來ず、金錢のための競爭が何所までも劇烈になつて、從來の道義や人情を顧みては居られぬ樣な世の中に成り行くものと思はねばならぬ、

また人間は何事にも器械を用ゐる結果として、生活が次第に自然の狀態に遠ざかつて行く、火を點して夜も明るくし、炭を焚いて冬も暖くする、更に進んで夏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も氷を造り、電氣扇を廻轉せしめて暑を防ぐが、斯く器械の力に依つて天然に反した生活をすると、身體は次第に天然に對する抵抗力が減じ、段々懦弱に成つて、僅の寒暑に曝されても直に病氣に罹るやうになる、西洋人が靴下を脫ぐと風を引くと云ふて恐れるのは既に其例である、また火を用ゐて食物を煮て食ふ樣になつてからは、剛い物を嚙む齒の力が漸々減じて、齒は弱く且惡くなる、野蠻人に比しては文明人の方が一般に齒が弱く、同じ國の内では下等社會よりも上等社會の方が一般に齒が惡いことは齒醫者のよく知る所である、料理の法が進めば胃がそれだけ弱くなつて、終には食事毎に「タカヂヤスターゼ」を飮まねば飯が消化せぬ樣な人も生ずる、出產の如きも元來普通の生理的の作用であるから決して困難な筈はなく、獸類の牝に出產の際に同僚の助けを求めるものゝないは無論のこと、人類でも「アフリカ」や「オーストリヤ」の土人は姙婦が旅行中に出產する場合には暫時同伴者と離れ、叢陰で出產を濟ませ、傍の小河で幼兒を洗ふて、直に自分の背に乘せ、早足で同行者に追ひ附いて、平氣で旅行を續けるが、本來かく輕便であるべきものが、文明國になると、生死にも關する大事件となり、必ず產婆、看護婦、產科醫者の助けを借りなければ產めぬことに定まり、其上に難產の割合が次第に增へて行く、斯く身體が段々弱くなつて、防寒具、避暑具、防濕具、頸卷、手袋、耳覆ひ、呼吸器、塵除け眼鏡、ゼム、淸心丹、「タカヂヤスターゼ」其他種々雜多の物の中、何か一つ缺けても忽ち病に罹るやうに成れば、生命を保つに必要な物の品數が非常に多くなり、それだけ生活費が高くなつて、生活難が度を增し、生存の競爭に尙一層の努力を要することに成る、特に葬式に其日だけ看護婦を傭ひ込んで車で供をさせる程に虛榮心に滿ちた人間が、富豪の贅澤な生活を常に目の前に見て居るのである故、幾ら有つても尙其上に金錢の不足を感じ、一にも金錢、二にも金錢と、唯それのみを思ひ煩ふて一日も安んぜぬ樣に成るに違ひない、

生存競爭が劇甚となつて、烈しく競爭せねば自分の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生存が危いと云ふ不安の念が一刻も念頭を離れぬ樣になると、無意識的に競爭して居たときとは違ひ、唯それだけでも甚しく神經を刺擊するが、人間が便利もしくは娛樂のために造る器械が、また烈しく神經を刺擊するもの計りである、今日でも一寸外へ出れば直に電車か汽車に乘るが其喧しい響は聽神經を通じて强く腦の中樞を刺擊する、慣れると餘り喧しく感じなくなるが、之は唯その響が意識に入らぬだけで、實際耳と神經と腦とが刺擊せられて居ることは毫も減じない、活動寫眞を見る人は單に畵が動く如くに感じて居るが、實際には一秒に二三十回宛の割で劇烈な光と暗黑とが交る／＼眼の網膜と視神經と腦とを刺擊して居るのである、斯く神經系に對する刺擊が多過ぎるために神經は次第に衰弱し、其働きが過敏となり、病的となつて、些細な事をも甚しく氣に掛け、僅なことをも非常に心配し、少しく逆境に立つと忽ち失望落膽し、或は自暴自棄となつて、輕々しく自殺し、若しくは重罪を犯すやうになる、今日でも統計の示す所に依ると、精神病者、自殺者、犯罪者の數は一年毎に增して行くが、今後は其原因が增加するに隨ひ更に一層甚しくなるものと覺悟せねばならぬ、

また敎育が進んで腦の働きが發達すると、萬事自身の智力で判斷し、識別する力が增す故、若しも社會に不條理な制度が存在するときは忽ち之に氣が附き、劇しく其不都合を感じ、其爲に不利益な位地に立つて居る者は堪え難い不平を起すに至る、無智の野蠻時代や半開時代には、何樣にかして餓ゑず凍へず、安全に暮し得るものは、それて滿足して、貧乏な自分の隣りに富裕な人が稍々贅澤に暮して居ても、各々その分である如くに心得て、敢へて何故に彼と我との間に斯くの如き貧富の差があるかと考へもせぬが、世が進み、知識が開けるに隨ふて、何事に就ても其理由を知らうと欲し、若し不條理極まると思ふことを發見した場合には、之に對して不平、不滿の念を禁じ得なくなる、我よりも體格腦力ともに遙に劣つて居る彼が、何故社會に於て我よりも上に位して居るか、我れが毎日衣食

を得るために斯く苦しみつゝあるに、彼は何故快樂に耽りながら安らけく世を渡つて行くか、正直に働く我に一顧をも與へざる世間は、何故に强慾不正なる彼を斯くまでに尊敬するかと考へては、益々劇烈な不平が起り、過多の刺戟のために神經が過敏になつて居る所へ此不平の念が現れるから、愈々我慢が出來なく成る、今日の虛無黨と云ひ、社會黨と云ひ、無政府黨と云ふは、孰れも此不平の爲に生じた結社で、西洋の文明國には一國として此類のものゝ無い所はないが、不平の原因の消滅せぬ間は今後も益々盛に起るものと思はねばならぬ、また此不平と、生活難と世間からの壓迫とが一度に重なり合ふと、鬱憤の餘り如何なる蠻行でも敢てする輩が續出する、今日までも暗殺、謀反等が屢々行はれたが、今後は尙一層頻繁に起るに違ひない、

野生の動物には生存競爭の結果、常に自然淘汰が行はれ、筋肉體力の劣つたもの、感覺の鈍いもの、其他生存に不適當のものは亡びて、適者のみが生存する故生存に適する性質は代を追ふて僅かづゝ發達し、決して退歩する如きことは無いが、人類には、何物とても交換の出來る貨幣が流通する樣に成つた後は自然淘汰の働きが中絶した、人類に於ても生存競爭劇烈で、敗者は生存が出來ぬのであるから、確に一種の淘汰が行はれて居るには違ひないが、今日人類の生存競爭に於て勝敗の定まる標準は必ずしも身體の勝れたこと、精神の優つたことではなく、多くは全く別種の關係から勝敗が決する故、常に極めて劇しい生存競爭がありながら、優者のみを生存せしめると云ふ淘汰は起らぬ、身體も健全で智力も相應に發達した者が貧に迫つて自殺することもあれば、病身な愚物が醫者と看護婦とを傭ひ得る金錢の力で、無事に生存して子を遺すこともある、立派な人間に育つべき體質の嬰兒が唯貧家に生れた計りに營養不良で夭死することもあれば、兩親の孰れに似ても碌な者には成りさうもない月足らずの兒が、贅澤なる定溫哺育箱の助けに依つて安全に成長することもある、斯くの如く今日の人類には身體の健全と、精神の優秀とを標準とした淘汰は全く行はれぬが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淘汰が止めば其時まて淘汰の標準てあつた點が直に退化し始るのは生物學上、動かすべからざる確な事實てある、暗黒な洞の內に在つて眼の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其動物の眼は次第に退化する、追ひ掛ける獸類の居ない所に住んて、飛ぶ力の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其鳥の翼は次第に小さく弱くなる、アメリカの大洞內に居る盲魚や、ニユージーランドに產する無翼鳥は斯くして出來たものてある、されば人類も肉體及び精神の優劣を標準とした淘汰が行はれぬ結果として兩者ともに漸次退化すべきは數の免かれざる所て、今後は必ず著しく退化の現象が現れるてあらう、現に今日ても西洋諸國ては既に人類の退化現象の少からぬに氣が附き醫者、法律家、社會學者などが集つて、喧しく之を論じ、其爲に專門の機關雜誌をも發行して、之を防止する方法を講じて居るが、淘汰の行はれぬ限りは退化は止むを得ぬ故、到底致し方は無いのてある、

以上略述した通り、人類は、初め諸動物に打ち勝つ際に大に役に立つた腦と手との働きが、其後何所までも發達した爲に、その必然の結果として、生活が自然の狀態に遠ざかつて、身體が弱くなり、貧富の懸隔が甚しくなつて、生存競爭が烈しくなり、神經は衰弱し不平は增進して、世道人心は益々墮落するの外なきに至つたが、此等は總て廣い意味に於ける退化の現象に屬する、今日とても既に世道の廢頽、人心の墮落を歎く人は幾らもあるが、其原因が人類自身の性質の內訌に起つたものてある以上は、今後も引き續いて同一の方向に進むてあらう、さて斯かる退化の現象が今日以後、更に歩を進めたならば、人類の身體上、精神上、社會上に如何なる變化を生ずるてあらうか、之は我々が今から愼重に研究して置くべき大問題てある、

五

先づ生活の困難、人心の墮落が今後身體上に如何なる結果を生ずべきかを考へるに、第一に影響を蒙るのは性慾に關する方面てある、生活の費用の高まるに隨ひ、結婚して一家を支へ、妻子を養ふとは段々容易てな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くなり、相應の資產を造つた後でなければ結婚が出來ぬ所から、自然に晩婚の風が生じ、中年以後まで結婚せぬ者も段々多くなる、然るに性慾は人類自然の肉慾の中で最も力强いもので、青春燃ゆるが如き時期に當つては、到底理性に依つて冷に制禦し得べきものではない、それ故、公に結婚の出來ぬ場合には、何等か他の方法に依つてその滿足を求め、其結果として裏面の風儀が次第に亂れるは止むを得ぬ、また女子は身體の構造上、資本を要せずして金錢を儲け得べき方法が備はつてある故生活の困難な場合、若しくは、虚榮心を滿足せしむべき金錢の不足を感ずる場合には、暫時肉體を貸して、之を補はうとするに至り易い、甚しきに至つては學校の授業料を得んが爲に密に稼ぐ女學生までも出來る、斯くして公然の結婚に依らずして性慾の滿足を得べき簡便な方法が到る所に出來る上は、青年は悉く、之に依つて滿足を求め得て、晩婚は素より一生獨身で暮す男も多くなり、今日でも西洋諸國では既に嫁ぐべき相手が無いために據なく獨身で暮す女が非常に澤山にある、斯樣な世の中になれば梅毒が忽ち擴がつて止まる所を知らぬであらうが、梅毒は甚しく身體を弱くし、特に神經系を犯せば痲痺性癡狂などゝ云ふて、長くても二三年で必ず死ぬ恐ろしい精神病を生ずる、其上梅毒は必ず子孫へ傳はる故、此病が世の中に蔓延すると、一代毎に一般の健康が衰へるは云ふ迄もない、先年獨乙國ベルリンの大學で學生中に花柳病に罹つて居ない學生の稀なるを知つて大に愕き、特に講義を開いて花柳病の恐るべきことを學生に說き聞かせた、性慾の發動を講義に依つて停止することが出來たか否かは知らぬが、性慾に基く病が確に世の進むと共に勢を得て益々擴がり行くは疑を容れぬ、西洋人が「開化 Civilisation は梅毒化 Syphilisation なり」と云ふのは全く實際に的中した言葉である、

また公に結婚する者も、生活難の增すに隨ひ、其目的が一變して、從來の如く淸き家庭を造つて健全なる後繼者を產み育てる爲ではなく、男は富者の娘を娶つて出世の手掛りと爲やうと圖り、女も富者に嫁して、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活難の心配なく且榮華に世を送らうとするから、隨て結婚の自然の結果なる妊娠を嫌い、有らゆる方法を考へて之を避けやうとする、性慾の滿足は家の內外に求めながら、子を育てる面倒を免れやうとする者が增加すれば、一般の產兒の數が漸々減少するのは當然のことて、現に佛國の如きは、そのため國力の衰へる處があるので、種々その救濟の方法を講じて居る、また兒を產んでも、其養育を人手に委せて、自身は樂を爲やうとする女が多くなると、乳を分泌する性質が退化して、西洋ては今日既に、兒を產んでも乳の出ぬ女の數が年々多く成つて居るが、今後は此現象も更に進むてあらう、

人類の生活が次第に自然の狀態に遠ざかるに隨ひ、身體が漸々薄弱になり、神經が過敏になることは前にも述べたが、生存の競爭が劇しくなるに伴ふて、自分の生存が何時危くなるかも知れぬといふ心配が瞬時も念頭を離れぬと、常に不安の念に堪え得ず、漸々苦悶の狀態に陷り、若し何等かの手段に依つて一刻でも壓迫の烈しい現實世界を忘れて、借金取りも鶯の聲に聞える夢幻の境に遊ぶことが出來れば、之を無上の快樂と感ずるに至る、酒や煙草が到る所に盛に用ゐられるのは其ためてある、初めて文明人に接觸した野蠻人が、何よりも先づ、酒と煙草とを欲しがるのも、恐らく無意識的ながら、器械を用ゐて責めて來る文明の壓迫を暫時だけても忘れたい爲てあらう、酒も煙草も有毒な成分を含むて居る故、多量に續け用ゐると中毒を起す、酒精の中毒によつて震戰性譫妄症に罹り、煙草の中毒によつて視力を鈍衰することは世人の知る如くてあるが、更に恐るべきは子孫の體質を害することてある、醫學上の統計によると精神病者、低能者、體質異常者は殆ど悉く其父母もしくは祖父母等に酒客を有するものてある、然し酒と煙草とは極めて重い稅を課して、經濟上容易に飲めぬやうにして外部から强制的に防ぐことも出來、また煙草には製造者が如才なく芋の葉や蓮の葉を乾して刻み込むから、其害毒は或は恐れるに足らぬかも知れぬ、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世の開けぬ中は農産物が其まゝて直接に費消者の手に渡る故、飲食物に混ぜ物が無いが、製造工業が盛になると飲食物も一ヶ所で多量に製造し、一時貯蔵して置くために防腐剤を加へることもあり、また法外の儲を得やうとして、容積重量を増すために種々の物を混ずることもある、酒に「フォルマリン」を加へ、砂糖、温飩粉に房州砂を混ぜ、醤油に「ザッカリン」を入れることなどは今日既に盛に行はれて居るが、これ等も長い間には少しづゝ身體を害せぬとも限らぬ、

また製造工業の發達に伴ひ、人の仕事が益々細かく分業的になつて、身體の働きも一方に偏する樣になり、耳を用ゐる職業の者は耳のみを過度に用ゐ、眼を使ふ職業の者は眼のみを過度に使ひ、其ため各職業に固有の病も出來て來る、其上に職業によつては年中絶えず綿屑を吸ひ込むとか、鹽酸の烟を嗅ぐとか、自然の生活には決して無い有害物に觸れる故、之によつても身體は漸々惡くなる、田舍が衰微して、都會が盛大になる程、此害の範圍は廣くなり、其結果も著しく現はれるであらう、

六

以上は主として不自然の生活より起る身體の退化を述べたのであるが、次に智力の進歩に伴ふて精神上に如何なる變化が生ずるかと考へるに、教育が進み知識が増せば次第に何事に就いても其理由を知らうと欲し、且自身の判斷力に訴へて其當否を鑑別しやうと試みる樣になり、從來唯他動的に敎へられて其まゝ信じ來つた事に對しても疑を挾む樣に成つて來る、之は從來單に知識上の權威に服從して居たのが、其支配から脫して獨立に考へやうとするのであるから、精神的解放とも云ふべきことであるが、其結果として總ての方面に懷疑の念が生ずる、其中で精神上に最も著しい影響を及ぼすのは道德上に關する懷疑である、尤も金錢の遣り取りに忙しい多數の人々は、從來とても唯習慣に從ふて行動するだけて、道德上の議論などは丸て眼中に置いて居なかつたし、又今後とても、多數の人は實際の生存競爭に追はれて、此樣な問題を考へる暇も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なく世を渡るであらうが、少しく學問でもする人は道德の說く所と目前の事實とを對照して、疑を挾まざるを得ぬ樣になる、例へば書物には善人は終に榮え、惡人は終に亡びる如くに書いてあるが、實際には貧富の懸隔、生存競爭の劇甚のために、善人が亡び、惡人が榮える方が却て多い樣に見え、正直に一生懸命に働いて居た者が不意に災難に遇ふて悲酸極まる境遇に陷ることもあれば、不正直な横着極まることをして莫大の財產を造つたものが、自分一代は云ふに及ばず、孫の代まで富み榮えて居る例もある、積善の家が忽ち斷絕して、積惡の家に却て餘慶のあることもある、斯樣な事實を目前に見ては、道德とはそも何物であるかとの疑念が起るは當然で、「善は善なるが故に爲すべし、惡は惡なるが故に爲すべからず」と云ふ如き不得要領な說法には到底承知が出來なくなり、從來の道德は根抵から改めて吟味せねばならぬとの觀念が浮ぶ、一方で理論上道德に關して疑を抱く者の生ずる間に、他方には更に一步を進めて、實際の處世上、道德なるものを安く見縊り、自分一身の損得から打算して、生存競爭上、道德に從ふを利とする場合には道德を尊重し、道德を破るを利とする場合には道德を捨てゝ顧みぬ輩が多數に生ずる、西洋諸國で、他の方面の道德が甚しく衰へたに拘らず、商業上の道德が堅く守られて居るのは斯樣な動機から起つたことであるから、之を以て他の方面の德義を測るの標準とすることは出來ぬ、人心が斯かる程度に達した上は、道德が彼等に對して何の威嚴をも保ち得ぬは勿論である、

生存競爭が烈しくなれば、目的のために手段を擇んでは居られぬ樣になり、不正なことも聞き慣れては日常の如くに思はれ、一旦成功さへすれば、世間は其光輝に暈まされて、如何なる手段に依つたかは忘れて問はぬ、斯かる例が無數に現はれるに隨ひ、道德の價値は益々認められなくなつて、終には過去の時代に存した古物の如くに思はれ、實際の生活には全く度外視せられるに至るやも測り難い、世には往々、今日は舊道德が破壞せられ、新道德が未だ定まらぬ過渡時代で、

るから、世道人心が多少混亂の狀態にあるは止むを得ぬと說く人もあるが、以上述べた如くに考へると、所謂新道德なるものは、何を根底として、何時出來上るものであるか、眞に心細い次第である、

生活難の增すに隨ふて、往々宗敎の叫び聲が一時多くなることもあるが、我等の考へに依れは、之は決して或る人々の論ずる如き信仰の復活と見做すべきものではなく、唯競爭場裡の不安の念に堪へずして、何物にか摑み附いて慰安を求めやうと試みるのであるから、恰も溺れんとする者が浮かんで居る藁にも摑み附かうとするのと同じであつて、無智の爺婆が安心して信仰して居たのに比すると全く趣が違ふ、人が地獄極樂を其まゝに信じ得た時代には、宗敎は風敎の維持にも失意者の慰安にも有效であつたらうが、一旦智力が進んで懷疑の念を生じた者に對しては、到底多くの安心を與へる力はない、特に他人を救ふ前に、先づ自分を救ふべき必要のある今後の宗敎家によつて、道德が幾分でも維持せらるべきことは頗る望が少ない、

斯くて道德も宗敎も、今後は生活難と智力の增進に伴ふ懷疑、不安の念を鎭めることは出來ず、生存競爭の方は一刻も休まず追ひ立てる故、人心は唯墮落の方向に進むの外に途なきに至るであらう、

七

人類が社會を形造つて生存して居る以上は互に力を協せ相助けると云ふことが何よりも大切であるが、生活難の加はると共に人心が墮落すると、此事が次第に薄らいて行く、各個人の間の競爭が劇しくなると、自分一身の生存を圖ることに全力を盡しても尙不足を感ずる程である故、勢ひ他を顧みることなどは出來なくなり、隨て何事を爲すにも唯自分一身の利害損得から割り出して計畫せざるを得ぬ樣になつて仕舞ふ、元來人類の如き協力一致の本能の頗る薄弱なものには制裁を設けて互に相誡め、協力一致の破れぬ樣にする仕組が必要であるが、昔は道德、宗敎等に依つて多少之を爲し得た、然るに今後は貧富の懸隔、知識の增進等に伴ふ利己の私慾主義が勢を得て、宗敎道德は共に衰へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るの外はない故、唯強制的に働く法律の外には、人類に協力一致の働きを爲さしめ得るものは無くなる、斯く成れば、世は私慾と法律との競走となり、私慾は巧に法律の空隙を潜り、法網に觸れずして大に儲け得べき方法を講究して實行し、之を防ぐためには更に密なる新法律が造られ、法律の數は限りなく增すであらうが、錠前が改良せらる每に盜賊の錠破りも精巧になる如くに、法律が密になれば、それだけ、之を潜る術も進歩し私慾は相變らず總ての方面に盛に働き續けるであらう、

各個人が悉く私慾に依つて働く世の中に成れば、協力一致を要する事業は素よりよく行はれる望はない、たとひ協力一致の外形だけは繼續しても其內容は私慾の集まりと變つて仕舞ふ、例へば團體の自治の如きも、元來は多數の人々に適當と認められ選み出された者が衆に代つて議員となるべき筈であるに、今後は私慾主義の跋扈するに隨ひ、其位置を利用して儲けやうと思ふ者が、自分の方から候補者と名乘つて盛に運動し、うるさく選擧者に迫り、有らゆる手段を取り、時としては兇器を持ち出してまでも、他を排して自分が當選しやうと努める樣に成るに違ひない、福澤氏が嘗て世界國盡しの中に「政體ありて主君なく、天下は天下の天下なり」と謳ふた北米合衆國の人に云はせると、米國は共和政治と云ふ理想的の政體で、各個人は貧富上下の別なく、憲法によつて平等に政治上の權利を與へられて居ると云ふが、今日既に上述の如き有樣に進んで居る故、假に自分がニユーヨーク市の住民に成つたと想像すると、自分の實際に有する政治上の權利は唯、自分の好まぬ候補者を選むか、棄權するかの二途の中、一つを隨意に選び得ると云ふ權利のみに過ぎぬ、されば今後は協力一致を要する働きは漸々困難になり終には殆ど不可能になるやも知れぬ、

智力が進めば道德に向ふて懷疑を挾む樣になると同じく、從來の傳說によつて存する社會の制度に對しても單に盲目的に服從して居らぬ樣になり、批評的の態度を取つて之に望むから、不條理なりと思ふことには

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反抗の念を起さざるを得ない、單に祖先の御蔭によつて、愚劣な子孫が何時までも社會の上位を占め得る印度の世襲的階級制度などに對しては第一に斯かる反抗の念が起るであらうが、之が劇しく募つて、現在の制度を倒さうと試みる者が盛に現はれては、社會の秩序安寧が破れる虞がある故、國を治むる局に當る者が力を極めて之を抑さへやうとするのは無理もない、然しながら斯かる思想は外部から壓して、發表させぬ樣にすることは出來るが、心の中に思ふことまでを防止することは出來ぬ故、今後は智力の進むに随ひ、尚一般に擴まるは免かれぬであらう、「泣く兒と地頭には勝たれぬ」と云ふ諺も有つて、時の强者に反抗するは損である故、大抵の人は自身の利害から考へて、容易に公には名乘らぬが、西洋諸國では今日既に之に類する念は殆ど總ての人の内心に存する樣に見受ける、尚此等に就いては論ずべき事が澤山にあるが、餘り長く成るから止める、

八

人類の將來などと云ふ問題は到底十頁や二十頁で詳に論ぜられるものではないから、此所には素より極めて大體の筋道だけを述べたに過ぎぬが、之に依つても人類が今如何なる方向に進みつゝあるかと云ふことだけは多少明に知ることが出來やう、即ち人類は其始め腦と手との力に依つて他の動物に打ち勝ち、絶對に優勢な位地を占めるを得たが、其腦と手との働きの進んだ結果として、今後は貧富の懸隔が甚しくなり、生活の困難が増し、身體は退化し、神經は過敏となり、不平、懐疑の念が進み、私慾のみが盛になつて、協力一致の働きが出來なく成るべき運命を有するに至つたのである、人類の場合に於ても、初め生存競爭上最も有效であつた其同じ性質が限りなく發達して、後には却て禍をなして、今後は滅亡の方向に進むの外なくなつたのであるから、彼の中世代の「アトラントサウルス」が、初め他の動物に勝つ際に有效であつた體力が過度に發達し、終には其ため敏捷を缺いて滅亡したのと全く同一の徑路を進みつゝあると推測するの外はない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

されば其終局も、地質學上の各時代に一時全盛を極めて居た他の諸動物と同じく、恐らくは次の時代までに時々全滅するを免かれぬものと見做すが適當てあらう、

斯樣に考へて見ると、今日の人類は、恰も不治の病の初期に罹つて居る有樣て、各民族は未だ輕いながらも、到底全快の見込みのない不治の病人に比較すべきものである、一個人が不治の病の初期に罹つた場合には、他事を投擲つて、安樂に靜養することも出來るが、地球の表面に於ける各民族は、常に互に睨み合ふて、僅の隙てもあらば、相倒さうと待つて居るのてあるから、專ら病を養ふのみに掛かつては居られぬ、必ず外に向ふては武備を固めて敵の侮を防ぎ、內は出來るだけの方法を講じて一刻でも病勢の進むことを止めて壽命を長くすることを務めねばならぬ、今後に於ける各民族間の競爭は恰も不治の病人が相鬪ふて居る樣なもの故、武備の劣つたものが先づ敗ける虞があるは明てあると同時に、病氣の急に進んだ者も忽ち敵に倒さるは疑ない、されば各民族ともに全力を盡して、此兩方面に於て常に他の民族に優るやうに務めることが必要てある、

小醫は人を醫し、大醫は國を醫すと云ふが、若し人類の不治の病なる世道の廢頹を醫し得る者があつたならば、之こそ大醫の更に大なるものである、世は澆季なりとは三千年の昔から絕えず人の云ひ來つたことてあるが、其間に之を憂へて、世を救はうと志した人は素より多數に有つた、その中て死後の崇拜者によつて今日まて名を傳へられた者には基督、孔子などがあるが、此等の人々の敎へたことは根本は極めて簡單て且同一てある、即ち「己の欲する所、之を人に施せ」若しくは「己の欲せざる所之を人に施す勿れ」と云ふことに歸着するが、此訓へは實行が出來さへすれば、世道の廢頹も人心の墮落も即座に撤回することが出來て世は忽ち極樂淨土と成る筈てあるから極めて結構てあるが、惜しいかな、今の世の中ては實行が到底覺束ない、今日まて之に依つて世道人心の墮落を防ぎ得なかつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことは過去の歴史の證明する通りてあるが、今後とても同樣てある、生存競爭の劇烈な世の中ては、一刻でも他に先んじて此訓に從ふた者は、忽ち取り返しの附かぬ苦境に陷る虞がある故、一民族内の總ての個人が、一、二、三の號令と共に、悉く揃ふて此訓へを守る樣になる時の外は到底その實行を望むことは出來ぬ、

根本的の治療法が無いとすれば、其他の方法を求めるの外に道はないが、他の方法は今日既に文明諸國に澤山に行はれて居る、養育院、感化院、孤兒院、慈善會、出獄者保護會、安價食物供給所、無錢宿泊所、勞働者養老金、貧困者慰問其他種々の救濟法は皆此類てある、此等は病の原因を除くのてはなく單に現れた症狀に對する療法てある故、素より姑息なるを免れぬが、適當に行はるれば、其だけの効は充分にあるべき筈てある、時としてはトラスト征伐、累進的相續稅法等の稍々外科的治療に類する方法が案出せらるることもある、また身體の退化を防ぐためには、米國の或る州て現に行ふて居る如くに、遺傳性の惡病患者には强制的生殖を禁ずることも出來る、之に就て人權云々と論ずる人もあるが、斯かる論は足の先が壞疽に罹つて腐り始めたときに細胞權を云々して患部を切斷することを躊躇するのと同樣な迂論てある、人類の過去に鑑み、將來を慮れば、前に擧げた如き諸種の救濟法は何れも今後益々奬勵して出來得る限り協力一致の精神を失はぬ樣に努めねばならぬ、之が、軍備の充實と共に、他の民族の間に介在して他の民族に敗けぬための唯一の手段てある、

九

終に尙一言したいことがある、我等は昨年の一月の本誌に「所謂文明の弊の源」と題する一篇を揭げたが、其後或る人から斯樣な論は讀者をして悲觀に陷らしめる患はないかとの注意を受けた、今此所に述べたことに對しても或は同樣の懸念をする人が無いとも限らぬが、我等は斷じて左樣な心配は無用てあると考へるのてある、

人間には一定の壽命があつて早晩死なねばならぬて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは、誰も承知して居らぬものはないが、そのために悲觀に陷つたと云ふ人は曾て聞かぬ、また此地球は其始め火の塊であつたのが漸々冷却して固形の地殼が生じ、凹んだ所へ水が溜り、斯くして諸種の生物が生じて、今日の有樣までに進み來つた、今後は更に冷却して、今日の月に見る如く、水は凍つて氷となり、土は凍つて石となり、空氣も凍つて液體となり、更に固形體となるであらうが、斯くなつては生物は到底生活は出來ぬ故、今見る如き生物は其前に總て消へ失せて趾を留めぬであらうとは、地球を論じた書物には悉く明記してある、また太陽と、若干の稍々大きな遊星と、無數の小遊星とより成る太陽系なるものも其初めは今日望遠鏡で實際幾つも見える如き星雲であつたのが、漸次凝固して今日の姿までに成つたのであるから、今後も尙變化し續けるべきものである、其上、太陽は之に附屬する無數の星と共に「ヘルクレス」星座の方へ非常な速力で進みつゝあるとのこと故、終には如何に成り行くか分らぬ、年々歲々何の變化も無い如くに思ふのは、人の命が短かいために變化を知るべき時間が無いからであつて、恰も大きな圓の周邊の一小部が直線と異ならぬのと同じ理である、我等が此所に述べた所は、唯人類は腦と手との働きの進んだ結果として、今日既に滅亡の方向に進みつゝある故、地球が冷却して生物が全滅すべき時期を待たず、それより遙に前に滅び失せるであらうと豫言したのみである故、從來人の云ひ來つたことに比して餘り多く異つては居らぬ、盛者必滅とは常に人の唱へ來つたことで、始めあるもの必ず終りあるは、是れ生滅の法である、天長く、地久しくとか、天地無窮とか、終り無き世とか云ふのは梨子を「有りの實」と呼び、硯箱を「當り箱」と名づけるのと同じく緣喜を祝ふ假の言葉で、數日の後には必ず枯れるに定まつた松の切り枝を立てゝ、常盤に榮えるのを願ふ徵しとするのと同じ心持で常に唱へて居るに過ぎぬ、

總じて、來るか來ぬか分らぬ危害は、全く來ないものと見做し、來ることは確であつても、其來る時の定

まらぬ危害は當分は來ぬものと見做して、氣に掛けずに生活して居ることが健康なる人の常態である、汽車に乘つて旅行すれば何時衝突して顚覆せぬとも限らぬが、乘つてから降りるまで絶えず之を心配して居る者は一人もない、また人間は老少不定と云ふて何時死ぬか分らぬものであるが、毎日此事を考へて悲觀し續ける者は一人もない、斯樣なとを常に憂ひて暮すのは唯幽鬱性の精神病患者のみである、されば萬一此文を讀んで悲觀に傾く人があつたならば、其人は已に現時流行の神經衰弱症に罹つて居ると診斷せざるを得ぬ故、我等は其人に向ふて、病勢の募らぬ内に速に療養に取り掛ることを切に勸告する、(完)

新聞紙界の新傾向

楚人冠　杉村廣太郎

一、

毘頭盧尊者の顔は、絶えず善男善女に撫でさすらるゝ爲に、何時しか眼や鼻が亡くなつて、高低が取れて仕舞ふ。之と同じやうに、或る種類の世の中の事は、兎角立體的から平面的に、垂直線的から地平線的に、移りかゝつて來てゐる。更に今少し之を具體的に言ひ直せば、凡そ社會各般の制度組織の中に、次第に命令的より相談的に、專制主義より協同主義に進んで、内外上下の別の漸く滅び行かんとする傾向のある者が多い。

之を政治に就て見るに、昔は治者被治者の間に、截然たる分界があつて、民は依らしむべし、知らしむべからずなどゝ、すましてゐたものであつたが、夫が立

意の政となり、代議の制と化して、漸く一國の政治は、民主的と云はぬ迄も、君民同治といふ形になつて來た。

宗教の上から見ても、昔やかましかつた法王や長老や僧正僧都の制が次第に崩れて、今日宗教の最新の形を備へたユニテリアンや新佛教では、無教師主義無僧侶主義が唱へられてゐる。即ち或る法教上の權能を具へた者が說法し訓諭するといふよりも、同行信徒互に相敎へ相戒めるのが、當然の制であるといふのである。是を其の道の者は、敎權主義倒れて自由主義起り、傳說主義亡びて討究主義之に代ると言つて居る。

更に之を商工業の上から考へると、生產者と分配者と消費者とは、各々獨立して、殆ど相交涉する所なかつたものが、近來產業組合の發達と共に、此の三者互に相依り相助けて、以て其の間の調和を圖るべきものであるといふことに成つて來た。

文藝の方面に於ては、此の傾向が、殊に著しい。古代の文學は、多くは妖怪變化の事を敍して、殆ど人間と交涉する所はなかつた。夫が中頃一轉して、中心は人間に取るやうにはなつて來たが、其の同じ人間の事を敍するにしても、成程斯なことは能くあると思はしむることよりは、寧ろ先づ世間に餘り有りさうもない事を書き立つる方が多かつた。力の强い男といへば、滅法界强くて、誰と戰つても負けぬやうな强い奴が出て來る。女に惚れたといへば、思を遂げなければ死んで仕舞ふといふやうな大變な男許り出て來る。如何にも有りさうでないこと許り。現に「小說的」とか「ローマンチック」とか言へば、架空にして事實らしからぬことゝいふ意味に取られるのを見ても、此の間の消息は知れる。夫が近來自然主義の勃興と共に、急にひた〳〵と人間に近づいて來て、人間日常の生活其儘なものが小說の材料に取らるゝことになつて來た。是を讀者と小說中の人物との間に、內外上下の別が亡くなつて、同等同位のものになつたと言ふことが出來る。

右の如き社會の各方面に顯はれた一種の自然の傾向は、新聞紙界に於ても、亦明かに顯はれてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一體世の中が開けるに連れて、人間の事業は先天の才や本能に依ることが次第に少くなつて、教育修養の力に待つとが多くなる。隨つて、傑出した偉人などいふ者が段々出惡くなつて、人の頭は大抵同じやうなものになつて來る。昔は社會のどの方面にも、一段高い所から人を見下してかゝる者と、一段低い所で人から見下さるゝものとがあつた。高い低いといふ言葉に語弊があるなら、内と外と見ても宜い。即ち一方に己等許りで内端で何もかも人知れず纏めて置いて、愈々出來上つた所だけを拔打の切尖と許り見せた『内の人』と、他の一方には、嘗て相談も受けず、模樣も知らされず、唯他の成すが儘に任せて、寢耳に水の何もかも出た所勝負と構へた『外の人』とがあつた。所で之が前に言つた教育修養の力て、低い側、外の側に立つた人の地並が進むに連れて高低内外の人の頭が大抵同じやうになつて來ると、何時しか高低の度が少くなり、内外の別が、追々に撤去せらるゝに至つたのである。丁度今まで食事の献立を一切料理人任せにして置いた人が、己れ次第に料理に通じて來ると、己も料理の相談に與つて、成るべくは己の氣に入つたものを食はうといふ考を起したのと同じい。自分の料理した御馳走は人任せのものより旨いと同じやうなもので、此の方が己にも旨くはある、料理人の方でも後で小言を食はぬだけ面倒が少ない。結局双方の利益である。立憲の政が專制の政よりも宜いといふのは、畢竟するに、民が政治に參與するを得る爲に、政治上の問題に對する國民の注意と熱心とが強くなる、罷り違つて、へまな立法をやつた所が、人民が相談づくでやつた、へまだけに諦めがつき易いから、民の不平を招く虞は減じる、といふ點に在る。——斯く双方の利益となるべき新傾向が、新聞事業の上に顯はれて來たのは、元より以て當然である。

人間が何百年何千年の間、別に何等の目的を定めた上でもなく、何を目當としてでもなく、唯盲滅法界に、いはゞ本能的にやつて來た事をふり顧ると、其處に何

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だか目的らしいもの、目當らしいものを考へてやつて來たやうに見える所の一種の傾向がある。此の傾向を、世の所謂哲學者なる者が捉へ來つて、人間進步の自然の順序を說明しやうとするのである。例へば、原始時代に個々の人間が集つて、社會を形くるに至つたのは、自らなる人性の傾向が、何とはなく發現した迄のものて、何も初から其の方法目的を考へた上て出來たのてない。後になつて、社會學者なんどいふ者が出て來て、いや社會の目的が人格の完成に在るとか、いや自然と人類の調和てあるとか、喧しいヿを言出したもの〻、之は畢竟自然の傾向の發現したもの〻中から、其の中に潛んだ自然の順序らしいものを捉へやうとした努力に過ぎぬ。初から社會を形成した個々の人間に、社會の組織に目的があるとか、其の目的が何てあるとかいふやうなヿを自覺して、此の目的を遂せんが爲とて、假に社會を組織しやうと考へた譯ても、何てもない。新聞紙の傾向とても、亦其の通りて、新聞紙が出來て以來、今日迄の新聞紙の爲した所を見て、我々が之に一種の傾向を認めやうとする迄て、新聞紙の方ては、誰も初からこんなヿを考へてゐたのてない。唯併し社會が社會に目的のあるヿを悟つて、所謂社會の自覺に入つた以來、之に依つて、社會の進步發達を謀るには、何いふ方針に出づべきかといふ問題の見當がつき易くなつたと同じく、新聞紙が新聞紙の傾向に鑑みて、朧氣ながらも何等か之に發達の順序あるが如きを自覺し來れば、之が新聞紙の方針を定めるに有力なるべきは、疑を容れぬ。

其處て愈々本論に立入つて、新聞紙が如何なる點に於て、政治宗教商工業文學の上に見るが如き傾向を現して居るか、何の點が命令的より相談的に、專制主義より協同主義に進み來つた所てあるか、而して此の傾向を如何に利用して、如何の利益を新聞紙及公衆が受くべきかといふヿを考へて見る。

二、

從來新聞紙の公衆に對する態度は、随分權柄づくな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものであつた。新聞紙の論説雜報其の他の記事の書き振は、丸て政府が御布令ても出すか、教師が生徒に教へるやうな具合てあつた。いはゞ新聞紙は上から下に臨んだのである。上から下に臨むといへぬならば、内端から他人に向つたと言つても宜い。兎に角、新聞社と公衆とは、賣手と買手との關係か、役者と見物人との關係に止つて、其の間に、何等の親しみ、何等の近づき、何等の暖か味がなかつたのである。隨つて、此の兩者に和衷協同などいふ考は毛頭なかつた。新聞に出さるゝといふことが無暗に恐れられたのも、其の惡口が恐いといふ外に此の親みがなかつた爲てある。親しい間柄ての惡口なら腹藥にもなるが、腹の底が知れぬ阿伽の他人の惡口は薄氣味が惡いのと同じ理窟だ。之と反對に、一寸新聞紙に自分の名が出たのさへ、名譽のやうな、氣恥かしいやうな心持がしたのも、亦新聞紙なるものが、自分と親しみのない爲に、何だか之に出さるゝことが、知らぬ人許りの立會つた廣場へても呼び上げられたやうに、氣がさしたのである。又新聞記者なるものが、變に烟たがられ、卑められたのも、品性の低い記者が多かつたといふ理窟の外に、此の近づきの缺けてゐた爲といふ點も大にある。附き合つて見れば、自然と同情も出て來るやうな人でも、遠方から人の噂許り聞いて居れば、隨分忌な感じの起るのは世間に珍しくない。新聞記者も亦此の種の忌な感じを人に與へたに過ぎぬ。斯の如くにして新聞紙と世間との間に接觸點を缺いてゐたとは、丁度世の所謂教育家が、學校の一小天地に小城郭を構へて、世間と風馬牛相關せざるもの丶如く濟してゐるのと同じやうに、最も世間と接觸し、最も人間と相識るべき新聞紙なるものが、丸て世間や人間と沒交渉なるかの如く振舞つた。

斯して斯くの如く相隔つた兩者は、樣々の因縁から次第〳〵に近づき出して來た。先づ營業の方面からは、何分新聞の出し放し許りでは物足りぬとあつて、追々に讀者と新聞社との接近策が講ぜられて來る。能く世間の新聞が行ふ懸賞や、福引や、寶さがしや、人氣投票や、商品の賣買の周旋や、職業の案内などは、皆此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の意味から出た一種の接近策たるに過ぎぬ。次に廣告の方面でも同じやうな考が出る。此の考から某々新聞の讀者會が出來る、投書家懇親會が出來る、地方版と唱へて、某々の地方に限り賣り捌く特別の新聞を作つて、成るべく其の地方の記事を多く載せて、人氣を集めやうとする。新聞社が主催となつて、內地の名所や海外へ有志の團體旅行を企てる。現にハーストの新聞で行ふ世界一周競走などいふのは、其の最も著しい例である。其の形こそ樣々であるが、主眼は廣告の意味から社と讀者との接近を謀るの策たるとは、即ち一である。

所で、新聞記事の方面に於ても、亦之と同樣な考が出て見える。今迄の新聞紙の意氣込では、新聞紙は己等が勝手に作るから、讀者の方で見るだけ見て呉れゝば宜いといふ具合であつたが、之が前に云つた讀者の知識の進步と趣味の發達とに伴つて、新聞紙の方でも、何時迄も高く留つて居られなくなつて來た。讀者の方が一步踏み込んで新聞紙の製作に手傳ひ出すと共に、新聞紙の方でも喜んで一般公衆の助力を迎へる。兩者の間に知らず識らず協力が起り、親しみが出來、近づきが出來て、其の結果同情が出て來た。此の同情の次第は後に委しく說くとして、今先づ此の種協力の最も著しい例を擧ぐるなら、其の第一は讀者が新聞紙に對して材料を供給することである。此の材料供給にも意味が色々あつて、純粹に新聞紙の事業を助けやうといふ外護心から出るのもある。新聞紙を助けると共に、兼ねて己も其利益を受けやうといふ兩面の考もある。又單に新聞紙を利用して己の慾を充たさうといふ考から出たのもある。英國には、ペニー、ア、ライナー（一行一片記者）と唱ふる者があつて、社外の者が自ら材料を渉獵つて來て、之を一行一片で新聞社へ賣りつけるを職としゐる。又米國で人の注目すべき事件を逸早く見知り聞き知つた者は、我一と競つて直樣之を新聞社に報せに行くこと、丁度日本で行倒れ人でもあると、直ぐ隣者が警察へ驅けつくるに異ならぬ。又英米では、某々の地に、何か一事件が起つたとする。幸に其の地に

新聞紙もなければ、又何處の社の通信員も置かれてゐないとする。さうすると、其の地の文才ある靑年が、直に電報で中央の大新聞社に、『何々事件生ず入用なきや』と聞き合せる。其の社で打棄ておけば、其の儘電報料丸損となるが、『入用、三百語』といふ樣な返電でも來れば、直に三百語の電報を打つ。之が紙上に出ると、其の週の終には必ず相當の原稿料が來ることになつてゐる。此の任意通信で通信の伎倆を認められて、遂に作の中央の新聞記者に雇ひ入れられた者は澤山ある。米國では、之を以て新聞社に入る最捷徑と迄考へてゐる人がある。――此等は皆公衆と新聞社との相方の利益の爲に協力する實例である。新聞社でも實際此等の協力を利益とすればこそ、ペニー、ア、ライナーの相場が段々上つて、今では一行一片などの安いのは殆どないといふ。又米國でも公衆の報告で新聞紙に載せる價のあるものは、一件壹弗以上で買ふことになつてゐる。

新聞紙に對する投書の如きも、亦此の種の協力の一例であることは今更說く迄もない。

三、

此の協同の精神が營業の方面廣告の方面及記事の方面に顯はれて來た結果、遂に新聞記事の書き方に迄其の影響を及ぼして來た。之を以て協同精神の發現とはちと言ひ兼ぬるかも知れぬが、慥に讀者と記者との間に近しみ親しみの出て來るやうな書方が流行つて來たといふことは、明に言はれる。自分は此の點に就て少しく詳述して見たいことがある。

先づ論說の書き方から見てかゝるとする。從來の新聞紙の論說といふものは、何うしても一枚上の役者が己より一枚下の者に說いて聞せるといふ體裁であつた。「何々すべし」「何々せざるべからず」といふのが論說の主眼とする所であつて「全體お前達には分るまいが、乃公は斯う考へてゐる」といふやうな口調であつた。夫こそ左ながら先生が生徒に物を敎へてゐる具合に異ならぬ。所で之が追々に改つて、(腹の中はさうでもあるまいが)次第に讀者と共に事を議するといふ風にな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて來た。今此の傾向を說明する爲に、少し諄々しいが一二實例を擧げて見る。先づ明治廿三年八月十九日の某新聞に次の樣な論說が出てゐる。

○周章する勿れ

愛國公黨解散せり、自由黨解散せり、九州進步黨解散せり、解散非解散久く決せざりし大同倶樂部も亦解散せり。此くの如く解散したる個々箇々の分子は將た如何なる變狀を呈せん歟、果して一直線に進步黨聯合を成さんか、今日に於て未だ立憲改進黨の解散せざるあり、將た一轉して三黨合同を形成せんか、獨り立憲改進黨を外にするに至るべし、今日は是れ政黨變遷の期に際し、各種の關係、各種の意思、交々相錯綜して未だ決斷に至らざるの時なり、舊形變じて新形將に成らんとするの時なり、其紛々擾々たる固より怪むに足るものなし、百川注いて海に入る其間固より奔潭飛流なかるべからず、鑛石煉りて金となす、其間固より沸騰溶解の時なかるべからず。故に今日に於て紛々擾々たるは固より怪むに足らざるのみならず、強て彌縫糊塗以て其外形を掩はんとするときは、却て各種の關係意思をして十分に融合するの機會を失はしめ、後來復び紛擾を生ぜざるを得ざるに至らんとす。合同又合同、分離又分離、吾儕は既に黨派の離合騷ぎに飽きたり、舊來の黨派なる者何ぞ其れ離合變遷の甚しきや。進むに銳なる者は其退くも亦速かなり、其忽ち合ふて忽ち離れ滔々汨々として定まらざる所以のものは、其始め合するや甚だ輕易にして一時の關係に依り、一時の勢に乘じて忽ち進むが故に、其不可なるや忽ち離散すればなり。然れども從來の黨派は多く是れ空論に依りて相合せる準備黨派なるが故に、縱令忽ちに合ふて忽ち離れしむるも、只だ識者の嘲笑を招くに止り、未だ大なる弊害を見ることなかりしも、今後の黨派は然らず、議會の實務に當らざるべからざるの責其だ大なり、若し此後に於て復た從來の弊習を踏ぎ、一離一合するが如きことあらんか、徒らに當路政治家の愚弄する所となり、議會の勢力をして頓に輕からしむるの結果を來たさんとす、此時に當りて、黨人たる者は、宜く反復熟思して以て去就を決せざるべからず。簡單なる抽象的の主義は以て黨派の意見を盡すに足るか、且其主義は果して如何なる意味を包含するか、又舊來分立せる各黨は果して百事運動を共にし得るか、將た或黨は其性質同くして或黨は異なるか是れ尤も注意せざるべからず、黨派の合同固と是れ事實問題に依らざるべからずと雖ども、豫め其志氣相投ずるもの相集るは必しも不可ならず、只其れ一時の虛勢に乘じ附和雷同するは不可なり、況んや帝國議會の開設眼前に在り、事實問題を議するの期近きに於てや、是れ尤も沈思熟考すべく、而して徒らに輕躁の擧動をなすべきの時に非ざるなり。

此の文を讀んで、先づ目につく點が二つある。第一は議論が如何にも抽象的で、其の論理が一に全く演繹法に依つてゐる。『百川注いて海に入る、其間固より奔潭飛流なかるべからず、鑛石煉りて金となす、其間固より沸騰溶解の時なかるべからず、』といふやうな所から、ぽつ〳〵議論に取りかゝつたもので、斯んな議論なら殆ど日本の政黨事情も何も心得ぬ政治科の學生など

が、下宿屋の二階で寢轉んでゐながらも考へらるゝ所である。第二に此の論文は何處迄も訓戒的說法的口調であつて、『可からず』が到る所に尾いてまはる。『お前達は知るまいが』といふ意氣込は、言外にほの見えて居る。昔は之でも宜かつたらうが、今日はさう行かぬ。

近來の新聞紙の論說は議論といふよりも寧ろ事實の註解說明たるに止つて、「何々せざるべからず」が「何々なり」となつて來た。即ち或る事實に對して、露骨に善惡得失を批評するよりも、其の事實の由來する所を說明し講釋して、之に對する判斷は讀者に任せたやうなものになつて來た。之で主張がなくなつた譯でない。主張を言ひ表はすに、一々人の手を取つて字を習はせるやうに、斯くならずんばあらずと說く代りに、主張を會得せしむべきだけに、之に關聯した事實を說くやうになつて來た。即ち推度よりも事實に重きを置くやうになり、演繹法より歸納法に傾いて來たのである。朝河貫一君の著「日本の禍機」の序文に、

余は此種の文に普通なる訓戒ある文體を愛せず、その自ら賢とし他を愚となる語調を遠ざけんと務めたり云々

とあるは、流石に能く此の間の消息を解した心掛と僕は見た。又有名なるマシユー、アーノルドの甥にして、永らくマンチエスター、ガーデアンの主筆であつた史家ギリアム、トーマス、アーノルドが或人に與へて、論說の書き方の心得を說いたものゝ中に斯ういふとがある。曰く

余は常に自ら敎師口調を避けざるべからずと思へり。さりながら君も亦其の所見を叙するに餘りに向ふ見ずにして餘りに無遠慮なり。斯の如きは是れ今日流行する所のものに非ず。內心は如何ばかり獨斷的にして頑然不動ならんとも、表面は斷案的ならんよりも、寧ろ試驗的衷願的暗示的ならんこと、是れ敎育ある人士のなす所、

朝河君とほゞ同じ意味と見た。

此の「可からず」調を避けて、能く事實的說明的の體を得た例は倫敦タイムスの論說の書き振である。之は正面から理窟ばかりを說き立てずして、讀者をして或る議論を形づくらしめるだけの材料となるべき事實をちやんと示してゐる。言はゞ之は昔よりも讀者に對す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る敬意を加へたとになる。議論をしなくても議論の材料を與へてさへ置けば、常識のある讀者ならん限り同じ結論に歸着するといふ見込を立てゝの話である。今でも田舍の新聞は全然此「べからず」調でやつてゐるのがある、つまり讀者の進まぬが爲に夫てなければ合點の行かぬのである。試に最近の式ともいふべき論説を此處に擧げて見やうなら、四十二年の十一月三十日の東京の某新聞にあつたのが好個の一例と信ずる。曰く

○貴族院の黨派

吾人は近來の貴族院の黨派の生出を怪まざるのみならず、寧ろ當然の始末となすものなるが、其理由は別に六箇敷き政治上の理論に根據するにはあらず、只最近の我日本の政治上の事情に依りて之を見る。現に目前の桂内閣は、衆議院に於ける政黨の代表者を一人も容るゝこと無きに拘らず、却て貴族院のみを重要視し居るものゝ如く、特に同院に有力なる一黨派の代表者を容れ居ることとなり。若も之を同院に有力なる一黨派の代表者といふ可らずとすれば、少くも有力なる一黨派らしきものより出でたる一代表者らしきものとは謂ふを得べし。研究會の岡部司法大臣是なり。殊に西園寺内閣にては、二人までも貴族院の有力者を容れたる例あり。此例一たび開けて、我貴族院が急に重要の意味を得たると共に、同院内の黨派も亦等閑事ならざる次第とはなりたり。是最近に於ける我日本の政情なり。此政情の下に於て、貴族院の黨派の特に造り出されんとするもの一にして足らざるを見る。殆ど同院を左右するに足るが如き勢力を有する研究會に對する伯爵同志會並に子爵側の談話會の如きは、頗る政黨熱を喚起し來りて、其の對敵者に對抗し來り、最近の子爵議員補缺選擧に於ては則ち既に初陣ながらも百九十六に對する九十八票を占め、其會員は則ち研究會の選擧團體たる尚友會の百五十二人に對して既に百零七人を得たり。こは貴族院令の同爵間連名投票を利用して尚友會が子爵議員を壟斷したるの弊に反動したるにも因ること大なれど、しかも亦此壟斷より成れる研究會が殆ど貴族院を左右するの力を得て、而も西園寺内閣にも又今の桂内閣にも其代表者らしきものを出し得たる吉例に倣はんとするに起るもの也。之を見て、研究會は頻りに氣を揉み、殊に研究會のパトロンたる桂内閣の一黨も頻りに妨害を試みんとすれども、吾人を以て之を見れば、こは寧ろ猫兒が自分の影に驚きて飛び上れる痴態に類するものとす。殆ど一笑にも値せざるなり。但桂黨の面々も決して他を妨害するのみに甘んぜず、自らも亦新たに黨派を貴族院に樹立せんとするに疎かならざるなり。現に彼等の目より之を見れば、男爵の選擧團體を殆ど壟斷せる二七會は彼等の用となる可らずと觀念す可きにや、新に共同會なるものを起して之に對抗し、既に二七會の員數と同一なる迄の會員を得たりともいへり。而して又他の一方には則ち軍人同志會なるものも新に起り、軍人の新に爵位を得たるものを合て以て尚友會を援け且研究會に勢ひを假さんとするにも似たり。只いづれも〳〵、未だ政綱を提げ政見を掲げて以て尋常政黨の爲す所を爲すに至らざるのみ。顧ふに多分彼等は結局之を爲すに至らざることならん。何となれば、彼等の運動は遂に國民的たるの必要なく、今の貴族院令の存する限り、同族的なるを得て足れりとするを以てなり。故に其運動は正々堂

ゝの青天白日的ならずして、動もすれば隱約機微の薄暮夜陰的に陷れり。畢竟するに、こは今の貴族院令に本來するもの。此法令が與へたる、而して前述の政情が養ひたる、今の貴族院内の黨派なるものは、果して憲法の下に於て眞に勢力を得べきものなるや否や。吾人に聊か疑ひなきを得ざるなり。則ち此點に疑ひなきこと能はずと雖も、今の實況は別に怪しむにも驚くにも足らずと見る。姑く之れを容れて可なり。本年の貴族院は存外に面白き現象を生ずるとともならん。吾人は寧ろ之を樂むものなり。

之を前の「周章する勿れ」と比べると、此の方は殆ど全部事實を叙したもので「可からず」式の議論は丸でない。唯事實を概括し說明して今後に對する豫想を少し許り述べた切りてある。或意味に於ては、雜報記事と餘り違はぬ。然り、新聞紙の論說は次第に雜報化すべきもので、新聞紙本來の目的から言つても、彼の有名な「應用新聞學」(米國)の著者シユーマンの言つたやうに、新聞紙にニユース(新聞)を揭ぐべきものでピユース(意見)を揭ぐべきものではない。之を言ひ出しては長くなるから、更に次なる項目に移る。

四、

更に著しい一例は、近頃の新聞記事中或る一個の記者が、左ながら讀者と共に現に或る一事件の發展を見て居るかの如く、書きこなす文體の加はつたことてある。元來今迄の新聞記事は、殆ど盡く三人稱の客觀的記事に限つたもので、實際之てなくては、新聞紙の記事が出來ぬもの丶如く誰も彼も心得てゐた。丁度歷史家が歷史に筆を取るやうな體裁で、世界の或る出來事を、世界外の或る、事として見ざるなく物として聞えざるなきやうな處から書いてゐるやうにあつた。所で、斯な歷史文學の中にもカーライルの佛國革命史の或部分のやうに、筆者と讀者と、同じ時に同じ物を見ながら、互に其模樣を語り合つてるやうな風に、書き出す一種の文體が出來たと同じく、新聞紙の中にも、大分此の種類の一人稱の主觀的記事が加はつて來た。恐らく之は訪問記の先鞭をつけた巴里邊から起つて、遂に英吉利、亞米利加に及び、更に亞米利加から日本へ渉つて來たものてはなからうか。

斯いふ書き方の方が、ひた〳〵と讀者と近しく見え

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るといふ大なる便宜がある。或る意味から言へば、此の傾向は乾燥無味なる事實の臚列より一轉して、多少其處に文藝的な衣をつけたものとも考へる。たしかポイントンの「文學とジョーナリズム」との中に、文學は主觀的として新聞記事は客觀的とやうに區別してあつたやうに思ふが、今此の近代の傾向に依つて、此の二者漸く調和の域に近づいて來たのである。

此處へ一例としてカーライルの革命史中にある千七百八十九年五月四日の國民議會の光景と、マコレーの英國史中の、彼の有名なワレン、ヘスチングス彈劾の條とを、一寸譯して見やうかと思つたが、あんまり白々しいやり方と氣がついてやめた。唯僕が從來讀んだもの丶中で、此種の文體の最も思ひきつたものは、ワシントン、アーヰングの「アルハムブラ」の中にある何とかいふ一篇で、僕は今手許に書物をもたぬから、何といふ標題であつたか、語ることは出來ぬが、何でも或る古い塔の上へ登る時の記事で、「ほら石段が崩れてゐるから足許に氣をつけて」などいふ口調で始めて、丸て讀者と共に件の塔を登つて行くやうに書いてある。——いや之も原文を擧げぬ方が萬全の策だ。僕に取つてこそ珍しく讀めたが、專門の文學者から見たら、何の夫位のことをと笑はる丶かも知れぬ。そんな危い藝をして見せるよりはと、急ぎわが本城へ逃げ歸る、

新聞紙の記事で、此の類の變化の、誰にも認められ得るのは、第一に訪問記である。訪問記は記事の性質から既に主觀的のものであるが、夫ても初は、極めて生氣のない客觀の記事が多かつた。第二には、記者社會で雜觀と唱ふる一種の記事である。之は觀兵式とか園遊會とかの本筋の記事が補足して、其の一部の光景を、記者の目に映じた通りに細叙するもので、事件の大樣は本筋で知れるが、其の躍如たる當日の模樣は主として、此の雜觀に由る。第三に最も甚しく眼先を變へ來つたのは、從軍通信で、之は日清戰爭當時と日露戰爭の時のとを比べると直ぐ知れる。日清の時は殆ど總く參謀官あたりから聞いたま丶の作戰計畫や戰鬪の經過を基として、或る戰爭の輪廓が客觀的に叙したも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の許りであつたが、日露戰爭の時には、そんな本筋の外の雜觀式若くは個人式の記事が大分勢を振つた。僕が倫敦で或る從軍記者から聞いた話だが、日露戰爭の通信中、此の點で先づ異彩を放つたのは、デーリー、テレグラフのマツクヒユー氏が送つた鴨綠江戰當夜の黑木本營の記事で、此の名文が一たびテレグラフの紙上に顯はれた時は、一時數ある從軍記者の顏色を失はせたといふ。斯く語つたのは、テレグラフとは專ら競爭の位地に在る新聞の記者であつたから、まさか嘘であるまい。

件のマツクヒユーの文は、多少我邦でも評判に上つたものであるから、僕は從軍通信の變化を示さんが爲に、其の長きを厭はずして、此に其の全文を譯出する。譯文の原文に及ばざること遠きは、今更斷る迄もあるまい。

○其夜の黑木本營

鴨綠江の戰爭を見てから、私は黑木大將の司令部に近い義州迄引返した、此處で例のやかましい原稿檢閲官に會ふ積であつたのだが、行つて見ると、司令部は既に進轉して仕舞つた後で、今は何處に在るか分らぬといふ。追懸ると言つても大變なことだが、外に仕方がないから河の上流、此處から凡そ五哩の所に在る橋の方に向つて、私は紐育ヘラルドのデビス君と共に一生懸命馬を走らせた。橋に着いて聞けば、司令部は其處からまだ四五哩あるとのこと。仕方がないから、又走つて、其處迄行くと、今度は其處から七八哩先の九連城に移つたとのことだ。橋も何もない靉河を渉つて、兎角して九連城へ着いたのは、丁度日の漸く暮かゝつた時であつた。途中彼方此方に戰死者が沙上に倒れて居るのを見、又とある野戰病院の中で、日本の軍醫が敵味方の別なく丁寧親切に負傷兵の手當をして居るのを實見した。九連城へ着いて市中を走せ行く中、一人の憲兵が英語で我々を呼びかけて、外國通信員の爲に設けてあつた宿舍迄案内して與れた。私は急ぎ馬を繫いで置いて、電報の檢閲を求める爲急ぎ司令部へ突走(つッぱし)つた。電報は僅に二十語の短いものだが、之が抑も戰地から發送を許された第一番の電報であつたのだ、

司令部の光景は丸で戰爭同樣であつた。司令部といふのは、後(うしろ)に廣庭のある支那風の大きな家の中にある。此處で初めて私の目に入つたのは、銃劍をつけた儘壁にもたせかけた露國の施條銃の大きな一束であつた。見ると一として血痕のつかないのはない。中には彈丸の中つた所から裂けたのもある。又中に一つ銃把に銃丸を受けて、中つた所は小さい穴に過ぎぬが、之が藥倉に迫つて破裂した爲、銃の持主に手ひどい傷を負はせたと見えて、銃把にあり〳〵其の證據を留めて居るのもある。其の又傍には鹵獲した大砲の彈丸を山の如く積んである。何でも今度の戰爭で露軍は砲二十八門を失つたといふことだ、斯ういふ物を見て居る中に、參謀長藤井少將から、黑木大將が例の廣庭の所で外

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國記者一同にお目に懸らうといふ通知があつた。我々の黒木大將に面會したのは之が初めてゞ、藤井參謀長は順々一人々々我々を紹介して呉れた。やがて私の順番となつた。見れば大將は中背の人で、色はマホガニーと紛ふ程に黒くなつて居る。短い口髭が上唇を覆ひ、其の下に嚴格に結んだ口、堅くひき緊つた顎が見える。眼の色は黒いが、夫にロバーツ元帥の眼の様な愛嬌があつて、顔の下の方の殊にむつかしげなのを差引して居る。何だか一種力のある立派な顔で、如何にも鴨緑江に架橋して歐洲最良の兵が固守せる地點に日本の精兵を送るを畏れぬ人のやうに見えた。將軍はだぶ〳〵した暗藍色の軍服を着け、端細になつた帽子をかぶり、足には上草履を穿いて居た。今日は終日乘馬で餘程疲れて居れたらうが、莞爾として如何にも御機嫌の體であつた。私が引合せられた時、將軍は今迄長い間外國通信者に會はれなかつたのを殘念に思ふこと、併し夫は忙しくて已むを得なかつた爲て何時か其の中機會があるだらうと待つて居られたことなど話された。私がテーリー、テレグラフを代表して、將軍の大勝利のために祝辭を呈した時、將軍は欣々然微笑を含んで手を擧げて目禮せられた。其から暫時は一同此處に居殘つて談話が初まつたが、中には將軍を相手に語つて居るものもある、藤井參謀長を捉へて頻りに此日の戰況を聞いて居るのもあつた。

折から此處で如何にも芝居にでもありさうなことが起つた。我々が立つて居る側へ、名前は知らぬが何でも高級の士官らしいのが突然汗馬に鞭打つて驀然に此の廣庭に驅け込んで來た。而してひらりと馬から下りると、直つか〳〵と將軍の側へ行つて、急ぎ敬禮を施して、何やら二言三言日本語で言つた、之を聞くと齊しく、大將の顔は見る〳〵、如何にも得意氣な嬉しさうな色になる。四邊の參謀士官連は、孰れも莞爾として互に祝し合つて居る。話した言葉は私に分らぬが、何でも餘程よい報知があつたものに相違ないと私は思つた。やがて、藤井少將は我々の側へ來て、唯今日本軍は敵を追擊して砲二十八門を鹵獲し、將校二十名兵卒數百を捕虜としたとの通知があつた。就ては即刻電報は二十語限りと申して置いたが、更に二十語を増して四十語の電報を歐米各地に發送することを、大將からお許しになつたとのことを傳へられた。此に於て我々は一同改めて大將に祝辭を呈した後、更に今二十語の電報を考へた。

其の中日は全く暮れて、篝火が此の廣庭に焚き初められた。一方の火の側には、大將と幾人かの幕僚（其の中には久邇宮殿下も入らせられた）が坐つて居る。一方の火には、外國通信者が忙しげに何か書いて居る。其外の火には、士官や兵卒がかたまつて居る。左ながら忘れデタイの戰畫其のまゝである。火の側に煙草を吹かす一團、あちこちと往交ふ武官の姿、焚火の光にきら〳〵と輝く分捕銃器、壁や天井に映るおかしい様々の影、此等は實に永く忘るべからざる光景であつた。夫に加へて、今まで我々の見た實戰の様を思ひ浮べなどして居ると、此の時恰も此忘るべからざる光景に更に一段の光彩を添ふべきことが起つて來た。といふのは外でもない。捕虜や負傷兵の追々到着し初めたことである。捕虜が到着すると、幕僚中の露語を解する者が、之に向つて訊問をするのである。第一番に私の見たのは、コサックの喇叭卒であつた。快活なふざけ好きさうな奴で、こんな身の上で居ても何だか人を馬鹿にしたやうな眼付をして居る。何か話しかけられると、氣を付けの姿勢で嚴格に敬禮するが、一向落着き拂つて中々一筋繩には行きさうにない。斯ういふ者を訊問して、何か報知を得やうとするのは、餘程上手に尋ねなくては行くまいと思はれたが、果して參謀達もさう

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思つたと見えて、間もなく外へ逃り出してしまつた。

次に來た奴は大分樣子が違ふ。之は騎兵の下士だつたが、可愛想に頭にひどい傷を蒙り、脇腹に銃丸を受けて居た。之を載せて來た擔架は丁度私の居つた火の側へ支那の苦力が下ろした。何だか獨逸語でぶつ〳〵獨り語をいつて居る所を見ると、何でも獨逸の國境に近い地方から來た者に相違ないと私は思つた。慌しく手眞似て十字を書いて、如何にも心底から出たやうな聲で「我が父よ」とか言つて祈つて居たが其の啜り泣するやうに吐く呼吸が、手負の身に如何にも苦しさうで、私は不憫で堪まらなかつた。所が手負は何と思つたか急に「隊長殿」と呼ばはつた。萩野大佐が此處へ來て、親切に露西亞語で之を勞つてやると、手負は左ながら怪我をした小供が母親の膝にかぢりつくやうに、大佐の手を握つて、戀しさうな口調で「私の側に居て居さい」と繰返し〳〵言つた。萩野大左は極々靜かに其の握られた手を放したが手負は一寸の間默つて、今度は故郷に殘した妻か情婦かを思ひしたと見えて、「オヤ〳〵お前はどこから此處へ來たの」といふ。さうかと思ふと今度は「水々」と叫んだ。私は幸ひ水といふ日本語を知つて居たから、其の由番兵に話してやると、間もなく水を持つて來て與れた。私は出來るだけ徐に手負を抱き起して、之を支へて居る間に、右の番兵は水を露兵の脣に宛がつてやつた。手負は長く深く一口に水を飮んだから、私は再び之を横に寢させたが、見れば靜に默禱するものと見えて脣が動いて居つた

此の空地一面盡く斯の有樣である、二三歩先に司令部附の田村軍醫が一人の重傷露國士官の傷に繃帶を施して居る。其の傷といふのは、銃丸が左の腕から胸を貫いて右へ拔けたので、其の外に手首にも右の腿にも彈瘡がある。迚も助かる見込はないが、軍醫は出來るだけ其の苦痛を和らげやうと骨を折つて居る。又別に一人露兵の輕傷者が突立たまゝで居るのがあつた。之を連れて來た日本兵は百方之に向つて横になれと言ひ聞かせたが、何しても合點が行かない。此に於て件の日本兵は藁を地上に廣げて、自身先づ之に横に寢て見せて、露兵にも斯うせよと手眞似で教へた。疲れ切つた此の負傷兵は漸く合點が行つて今より二三時間前までは敵であつた日本兵の側へ横になつたが、其の身が下に敷いた藁に着くと、其の儘前後も知らずに眠つて仕舞つた。廣庭一面至る所皆此の類で、日本兵の捕虜や負傷露兵に對する親切は殆ど他に比すべきものがない位であつた。

さうかうする中、原稿檢閲官の用意が整つたといふので、早速電報の檢閲を受けたが、さて司令部には羅馬字の電報を取扱ふ技師がない。此處から一番近い所で、鴨綠江の彼岸、義州から數十哩さきの松江洞迄行かなければならないといふ。仕方がない、又馬に乘つて出かけた。時は既に十時を過ぎて居るから、餘程急がなければならぬ。其處で四五の同業者と一番近い道を取つて、砂原を走つて、鴨綠江の第一支流は格別の困難もなく徒渉したが、さて第二流に行つて見ると、渡船は彼岸に在つて、此方へ呼び寄せる法がない。丁度其處に數名の日本兵が居合せて、上流に馬で渉れる所があるとて、其處へ案内して與れた。私と一行中に在つた佛國騎兵大尉トーマス氏とが先頭に立つて、中流迄乘り入れたが、半分も行くと突然水が深くなつて、人馬共に水の中にづぶ〳〵と入つて仕舞つた。私は朝鮮馬に乘つて居たが、之は私の樣な者を載せて泳ぐとが出來ない、あはや其の儘水底に沈んで仕舞ひさうに見えたから、私は馬背を放れて水に飛込んだ。幸に雙眼鏡短銃背嚢等は司令部に遺して來たから、邪魔になるのは唯衣服と長靴ばかりであつた。だが之が眞夜中の眞黑暗のとて、私は兩岸孰れも見ることが出來

ない、唯潮流に從うて一生懸命に泳いだが、漸くにして背の立つ處へ着いた私の馬も震へながら鼻をくんくん言せながら着いた。トマース大尉や其の他の連中も辛にして無事に着いた。夫からづぶ濡れのまゝで走つて、朝の三時頃やつと目的地に達した。衣服を着かへると其のまゝ新に馬を雇つて、軍用電信局へ電報を届けて、さて寢床に着いたのは丁度東天漸く白からんとする頃であつた。私が今朝戰爭見物の爲め此處を出てから丁度二十六時間になる、が併し床に就て其日一日のことを思ひ回はすと、苦しいのは苦しかつたが、之でも世界の戰史に於て永く最大戰勝の一として傳へらるべき戰鬪を目擊することを得たのだと思つて、嬉しかつた。

學校の卒業證書授與式の記事などいふものは、極めて面白くないもので、其の學校に關係のある者の外は、先づ大抵は讀まぬがちなものである。所で、近頃此の授與式の樣を雜觀式に書き試みる者が出て來たので、大分門外漢にも面白く讀めるやうになつて來た。之から思ふと、殘念なのは、宮中で行はるゝ時々の祝祭の記事で、此等は孰も宮内省の役人から通信社の手を經て、新聞社に傳はる位のもので、いつも〳〵同じやうな儀式の模樣と列席の人名を敘べたきり。新聞社の方では、載せぬ譯に行かず、載せたとて殆ど誰も讀まぬ。若し之に新聞記者も列席させて、記者が見た所を勝手に書かせたら、僅に一度の實物になるに相違ないと、僕は殘念で堪らぬ。

五、

大内青巒氏が地方演說に回る時の注意だとて、昔僕に話したものゝ中に、何ても第一に其の土地に關する或る事柄を何か知ら一つ說き出して、其の土地と自分との間に親しみを附けることは必要だとあつた。佐倉へ行つた時は、宗五郎の話から始めるとか、足利へ行けば、足利家の事蹟を述べるとかいふのである、新聞紙と讀者との間に暖か味が出來、親しみが出來て來るやうにとて、記事の書き方を平面的ならしむる事に就ても亦注目すべき點が大分ある。

第一に、記者と讀者とが、丁度同じ所に居て、同じものを見てゐるやうに、現在のまゝを眞寫する。「東京朝日」を例に引くのは、聊か嗚呼がましいが、昨年の夏「朝日」の荒木風骨君が書いた「實業家回り」の一節池田謙三氏を銀行に尋ねた時の記事が、丁度此處にあて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はまる。曰く

「頓て導かれたる此處な一室、黒塗の腰厚うして、鐵の日車格子重き土藏の中で、薄闇きこと宛から牢獄も一般、大小五個の金庫に前後を取圍まれたる中央には、支配人の席があつて其横手には大きなる掛時計が掲ゑられてある、名刺を持ちながら店の方より歸り來れる池田重役の風貌を一瞥するに汗襦袢の上に細帷衣の棒縞なるを着し帯は無地子色の博多と擬つて、足袋は御約束の白を穿いて居る、若し夫れ三分白の頭髪を長目に分けて、無髯の豐顔、脂ぎつて赭きところは何處から見ても浪花節の心打

▲席上の硯箱、硯の水全く涸れて禿たる筆に埃を埋め、硝子の墨汁壺は汚るゝに任せてペンが挿してある、一本の葉卷と途中にて消えたる吃未了の葉卷とが手近に置かれて、黒水牛の見認印が肉池の側に轉がつて居る、主人公今しも敷島の莨に火を點けんとして燐寸を撈しながら、記者の來意を聽いて語つて曰く

▲私は避暑避寒をするとも限らればだれ、しないとも限らぬ、がマアしないことが多い、之はだれ、時間が許さないと云ふよりもだれ、自分が左程行きたいと思はないからだ、勿論だれ、別莊も持つて居ればだれ、可いのかも知れないのだがれ、其れも無しさ、偶さか出掛くることがあるとだれ、宿屋の部屋が塞がつて居たりだれ、御生憎を喰はされたりしてだれ、面白くもないのでだれ、詰り出掛くることも少なくなる。だがれ、行く行かないはだれ、自分の自由でだれ、行くのは惡いと極めても居なければだれ、行かないのが可いと極めても居ないのだ、道樂もだれ、之れてなければならぬ云ふ道樂はだれ、無い代りにだれ、どの道樂もだれ、嫌ひと云ふ道樂はだれ、少しも無い、遊藝音曲の類もだれ之れが好きだと言つてだれ別に嫌るものもなければだれ、之れが可厭だと言つてだれ、別に排斥するものもない」

之を讀むと、如何にも其の時の光景が目に浮ぶ。

第二に、記事中の人物と記者とが、親しく膝を交して相語つてゐるやうな、打解けた樣を示すのも、一つの法てある。親子か兄弟が睦しく打語らつてゐるのを見るのは、見ず知らずの他人が頭許り下げ合つて敬語づくめに話し合つてるのを見るよりも、氣が暢々して心持が宜い、之と同じ理窟で、畏まつて記者と相對した物語よりも、打解けた奴の方が、何となく讀んで面白い。言文一致に美妙齋式の敬語が流行らなくなつたのも、全くは此の意味に由ると、僕は見てゐる、此の相親しんだ樣を書いて神に入つたのは、夏目漱石君の「滿韓ところ〲」で、每々「東京朝日」を引くのは恐れ入るが、差當り手近に在るから、御免を蒙つて、其の一二節を紹介するを許されたい。

先づ眞最初の一項に曰く

南滿鐵道會社つて一體何をするんだいと眞面目に聞いたら、滿鐵の總裁も少し呆れた顔をして、御前も餘つ程馬鹿だなあと云つた。是公から馬鹿と云はれたつて怖くも何ともないから默つてゐた。すると是公

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お笑ひながら、何だ今度一石に連れつて遣らうかと云ひ出した。是公の連れて行つて遣らうかと云ふのは、二十五年前、神田の小川亭の前にあつた怪しげな天麩羅へ連れて行つて呉れた以來時々連れて遣らうかを余に向つて繰返す癖がある、其癖未だ大した所へ連れて行つて呉れた試がない。「今度一所に連れてつて遣らうか」も大方其格だらうと思つてたどうんと答へて置いた。此氣のない返事を聞いた總裁は、まあ海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て來るが可い。御前見た樣に何にも知らないで高慢な顏をしてゐられては傍が迷惑するからと頗る適切めいた事を云ふ。何でも是公に聞いて見ると馬關や何かで我々の不必要と認める程の御茶代抔を宿屋へ置くんださうだから、是公と一所に歩いて、此彪大の御茶代が宿屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるか一寸見たくなつた。そこで、ぢや君の供をしてへい〳〵云つて歩いて見たいなと注文を付けたら、そりや何うでも構はない、一所が厭なら別でも差支ないと云ふ返事であつた。

それから第二回目の初には斯うある。

小蒸氣を出て鐵嶺丸の舷側を上るや否や、商船會社の大河内さんが、どうか總裁と御一所の樣に伺ひましたがと云はれる。船が動き出すと、事務長の佐治君が總裁と同じ船で御出になると聞いてゐましたがと聞かれる。船長さんにサルーンの出口で出逆ふと總裁と御同行の筈だと誰か云つてた樣でしたがと質問を受ける。斯うみんなが總裁々々と云ふと是公と呼ぶのが急に恐ろしくなる。仕方がないから、えゝ總裁と一所の筈でしたが、えゝ總裁と同じ船に乘る約束でしたがと、忽ち二十五年來叫び慣れた是公を儉約し始めた。此儉約は鐵嶺丸に始まつて大連から滿洲一面に廣がつて、とう〳〵安東縣を經て、韓國に迄及んだのだから少からず恐縮した、總裁といふ言葉は、世間には何う通用

するか知らないが、余が親友中村是公を代表する名詞としては、餘りにえら過ぎて、餘りに大袈裟で、餘りに親しみがなくなつて、餘りに角が出過ぎてゐる。一向味がない。たとひ世間が何う云はうと、余一人は矢張り昔の通り是公々々と呼び棄てにしたかつたんだが、衆寡敵せず、已を得ず、折角の友達を、他人扱ひにして五十日間通して來たのは遺憾である。

如何さま總裁では餘り親しみがなくつて餘りに角が出過ぎて、一向味がない。若し此の記事が始から終まで總裁で押し通して、是公と漱石との關係に一言も言ひ及ばなかつたら、此の「猫」以來の名文が、如何に興味の索然たるものとなつてゐたらうか、

去年農商務省に何某書記官を訪うて、日英博覽會の模樣を聞きに行つたとがある。何某書記官といふと仰山だが、先生と僕とは或る英語學校の同窓で僕は今でも昔と變らぬ友達の積りで居る。だから此の日の訪問も「おい博覽會の具合はどんなもんだい」位の間から始たのであるが、之を新聞に出す時は格別親しく見せる必要のないとて、ずつと客觀式に固つて、「何某博覽會事務官の談」とか何とか書いた。之を書きながら、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何だか非常に僕は餘所々々しい物足らぬ氣がした。何某君の談話に相應な材料があつたればこそだか、さもなければ、恐らくあんな記事は、一人の讀者を招致し得なかつたらうと僕は思つた。

第三、に記者と讀者との知識の程度又は境遇の餘り違つたやうな記事は親しみが薄くなる。去年中央公論に「時子」を書いた時、或る見知らぬ人が僕に書を寄せて、「外は一向見るに足らぬが唯冒頭の『月も日も忘れたが、何でも一昨年の春の初の或夜一時過』の一句が氣に入つたとあつた、此の一句だけ感心して、其のあとは一切感心せぬといふなら、賞めたのだかくさしたのだ分らなくなるが、兎も角、僕は此の一句のため見知らぬ人の氣に入つた理由を推して、深く自ら戒むる所があつた。夜の一時過電話のかゝつたと位は永く記憶してゐ居やうが、夫が何月何日であつたか、恐らくかけた時子も知るまいし、かけられた僕も無論忘れてゐる。日記帳を繰れば分るかも知れぬが、そんなものを調べて、糞丁寧に話し出すよりは、忘れたものは忘れた儘で、突然に思ひついた茶話か何かのやうに言つた方が親しみがある。夫が面白かつたのではあるまいかと僕は思つた。

名を擧げるのは憚るが、或る高山植物に明るい文士の高山植物採集の爲に某山を攀ぢたといふ記事を讀んだ時、僕は殊に此の感を深うした。文は成程結構な文だが、其の中に無暗に高山植物の名前やら講釋めいたものが出て來て、能く斯なことを知つてゐたと感心するよりも寧ろ、何だか手を取つて敎へられるやうな氣がして、少からず興味が殺げた。話頭は變るが、前年凌雲閣から飛び下りて自殺した女のあつた時、某新聞の記事に、其の女が大地へ落つる前先づ何處やらの屋根へ落ちて、此處で何處とかに何センチメートルとかの傷を負うたと書いてあつた。何處に何センチメートルの傷がついたといふことは、大地へ落ちて仕舞つて醫師が來てから分つた話で、屋根へ落ちた時調べたのでも何でもない。之を屋根へ落ちた時斯く〳〵の傷を受けたと書いたのでは、如何にも、普通人に分らぬこと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が獨り其の記者に分つたやうに聞えて、近しみがなくなる。惜むらくは其の全文を揭げたいと思つて探したが分らぬ。

前に出たアーノルドなどはえらいことを言つてゐる、曰く記者が緩くり、書いたものは讀者も緩くり讀む。記者が急いて書いたものは讀者も急いて讀むものだ。だから走りながら讀むやうな讀者に讀ませやうとするには、記者も走りながら書くに限るとある、ちと極端な議論ではあるが、讀者と記者と其の境遇を同じうすることに由つて生ずる所一種の同情的關係は慥に此の中に說かれ得てゐると僕は信ずる。

六、

人が新聞や雜誌を手にした時、緊急重要な其の當時の出來事は暫く措いて、其の外に先づ何が一番に目につくかと言ふと、大抵の人は、自分の書いたものか、自分に關する記事だと言ふ。夫から次には自分の友人の書いたものか、又は之に關係した記事、夫から自分の關係ある商賣、とか自分の專攻した學問とかの記事に目がつく。何處迄も「自分」といふことが頭につくのである。此の故に記者と讀者との間又新聞紙と讀者との間に近しみが出來、親しみが出來、同情が出來て、一切の記事が自分に關係あるものゝみの如くなつた時は、其の新聞紙に對する興味が餘程加はつて來るに相違ない。斯うなると、讀者が新聞紙を中心として、一個のコムミユニチーを形づくる、更に進んでは、一個のフワミリーを形づくるとも言へる、即ち新聞紙に書いた事が、皆自分の友人親戚の口から出た話のやう聞える。——すべての新聞紙は、今や皆自ら覺らずして斯の如き方針に進み行きつゝあるのである。

新聞紙は人間本位ならざるべからずといふも、新聞紙は must feel the pulse of the world といふのも、皆此の意に基づく。(をはり)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何だか非常に僕は餘所々々しい物足らぬ氣がした。何某君の談話に相應な材料があつたればこそだか、さもなければ、恐らくあんな記事は、一人の讀者を招致し得なかつたらうと僕は思つた。

第三、に記者と讀者との知識の程度又は境遇の餘り違つたやうな記事は親しみが薄くなる。去年中央公論に「時子」を書いた時、或る見知らぬ人が僕に書を寄せて、「外は一向見るに足らぬが唯冒頭の『月も日も忘れたが、何でも一昨年の春の初の或夜一時過』の一句が氣に入つたとあつた、此の一句だけ感心して、其のあとは一切感心せぬといふなら、賞めたのだかくさしたのだ分らなくなるが、兎も角、僕は此の一句のため見知らぬ人の氣に入つた理由を推して、深く自ら戒むる所があつた。夜の一時過電話のかゝつたと位は永く記憶しても居やうが、夫が何月何日であつたか、恐らくかけた時子も知るまいし、かけられた僕も無論忘れてゐる。日記帳を繰れば分るかも知れぬが、そんなものを調べて、委丁寧に話し出すよりは、忘れたものは忘れた儘で、突然に思ひついた茶話か何かのやうに言つた方が親しみがある。夫が面白かつたのではあるまいかと僕は思つた。

名を擧げるのは憚るが、或る高山植物に明るい文士の高山植物採集の爲に某山を攀ぢたといふ記事を讀んだ時、僕は殊に此の感を深うした。文は成程結構な文だが、其の中に無暗に高山植物の名前やら講釋めいたものが出て來て、能く斯なことを知つてゐたと感心するよりも寧ろ、何だか手を取つて敎へられるやうな氣がして、少からず興味が殺げた。話頭は變るが、前年淩雲閣から飛び下りて自殺した女のあつた時、某新聞の記事に、其の女が大地へ落つる前先づ何處やらの屋根へ落ちて、此處で何處とかに何センチメートルとかの傷を負うたと書いてあつた。何處に何センチメートルの傷がついたといふことは、大地へ落ちて仕舞つて醫師が來てから分つた話で、屋根へ落ちた時調べたのでも何でもない。之を屋根へ落ちた時斯く〳〵の傷を受けたと書いたのでは、如何にも、普通人に分らぬこと

が調り其の記者に分つたやうに聞えて、近しみがなくなる。惜むらくは其の全文を掲げたいと思つて探したが分らぬ。

前に出たアーノルドなどはえらいことを言つてゐる、曰く記者が緩くり、書いたものは讀者も緩くり讀む。記者が急いて書いたものは讀者も急いて讀むものだ。だから走りながら讀むやうな讀者に讀ませやうとするには、記者も走りながら書くに限るとある、ちと極端な議論ではあるが、讀者と記者と其の境遇を同じうすることに由つて生ずる所一種の同情的關係は慥に此の中に說かれ得てゐると僕は信ずる。

六、

人が新聞や雜誌を手にした時、緊急重要な其の當時の出來事は暫く措いて、其の外に先づ何が一番に目につくかと言ふと、大抵の人は、自分の書いたものか、自分に關する記事だと言ふ。夫から次には自分の友人の書いたものか、又は之に關係した記事、夫から自分の關係ある商賣、とか自分の專攻した學問とかの記事に目がつく。何處迄も「自分」といふことが頭につくのである。此の故に記者と讀者との間又新聞紙と讀者との間に近しみが出來、親しみが出來、同情が出來てゞ一切の記事が自分に關係あるものゝみの如くなつた時は、其の新聞紙に對する興味が餘程加はつて來るに相違ない。斯うなると、讀者が新聞紙を中心として、一個のコムミユニチーを形づくる、更に進んでは、一個のフワミリーを形づくるとも言へる、即ち新聞紙に書いた事が、皆自分の友人親戚の口から出た話のやう聞える。――すべての新聞紙は、今や皆自ら覺らずして斯の如き方針に進み行きつゝあるのである。

新聞紙は人間本位ならざるべからずといふも、新聞紙は must feel the pulse of the world といふのも、皆此の意に基づく。(をはり)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人生識字憂患始

三宅雄二郎

東坡の詩に人生識字憂患始、姓名粗記可以休、とあり。人の多く引用する所、其の何の義たるかは、解釋區々、東坡自ら東坡の見解あり、他の人々各々別に見解あるべきが、一讀して何等か意味の通ずるは他に非ず、書を讀むものは書を讀まざるものより憂ふる所多しとすべき事實あるなり。判然たる區別なきも、區別を認むるに難からず。何を憂ふるか、人の爲に憂ふるか、自らの爲に憂ふるか、兎に角書を讀まざるものより憂ふる所あるらし。

知識そのものは憂樂に與からず、憂を增せば樂をも增すべき筈なれど、幾許か古今を知り、幾許か東西を知り、幾許か國の事を知り、幾許か人の事を知る、知れば缺陷をも知る。凡そ事に完全なる無く、若し完全を求めて憂ふれば際限あるなし。范仲淹の言へりし如く、廟堂の高きに居りて民を憂ひ、江湖の遠きに據りて君を憂ひ、進んで憂ひ、退いて憂ひ、每に天下の憂に先ちて憂ひんか、永遠に憂ひざる能はず。アダム、エバが、禁ぜられし菓物の味を知り、子孫永く苦患を免れずと傳ふるも、知識に累せられしならずや。世に知識なき少兒を佛といふ、知識ある年長者は苦悶を免れざるか。

知識に伴へる憂患は避くべきに非ず。競爭の激しき社會、多數の上にて知識あるは知識なきに勝り。腕力を主とするが如き軍事に在りても、孜々汲々新知識を得るに勉む。海軍は軍艦の構造を競ひ、構造の宜しきは戰はずして優强と認めらる。一たび飛行機の可能事たるの知らるゝ、皆爭ひて之が工夫するに勞す。何事も知識に由り、何物も知識に由り、一日知識を得るを

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

怠れば其れ丈敗北の現はるゝ憂ふるの不幸と否とを問ふの暇あらず、勢の驅るところ、唯だ益々知識を增進せざるべからず。世界を通じ、教育を重んじ、學校を增設する、宛も往代の宗敎を重んじ寺院を增設せしが如し。

教育は重んずべく、學校は增設すべし、實に能ふ限り奬勵するを要す。而も知識の必要の明白なるに拘らず、教育を受けたるものが教育を受けざるものに破らるゝ跡あるは何ぞや。世間の各方面に於て重要の地位を占むるは、若干の例外を除き、教育を受けざる輩ならずや。全く教育を受けずといひ難く、小學教育又は何等かの教育を受けたらんも、學者と名づくべき部類に屬せざるは言ふ迄もなし。日本には新教育の布かれしより日猶ほ淺きにせよ、相當の教育を受けて原動力と稱すべき位置を占むるもの幾人か有る。總理大臣と爲れるなきは勿論、內閣の運命に關する有力なる大臣となれるものも無し。會社、銀行も、自ら發起して自ら經營せるは極めて少し。教育を受けたるもの、幾千幾萬を以て計るべきに、大多數は教育を受けざるものに支配せられつゝあり。社會の表面に活動するは概ね教育なき徒にして、教育あるものは此等の命を聽きて動くのみ。

故福澤氏の慶應義塾及び時事新報社を經營せる、確に事業家たるを證明するも、氏は學者たるべき資質ありながら、學者にあらず、英書を讀むことさへ、小幡、濱野等數氏に讓れり。現代の程度よりせば、學問に於て平凡なりしと謂はざるべからず。而も其の平凡なりし所は即ち彼の如き事業を成し遂げ得たる所以ならずとせず。氏の外に、學者として事業を經營せるあるも、孰れも及ばざること遠し。カーネギー氏は會社銀行の頭取を調査し、大抵大學出身ならざるを知り、大學教育の實業家に不必要なるを唱へぬ。大學教育の別に利益あるを知り、寄附せる金額も少からざれど、實業界に雄飛するに益せずと見做せるなり。之獨り實業界にあらず、學校以外の方面は盡く然り。ルーズヴエルト氏がハーヴアト大學出身なりとて、大學內に氣焰の高

なりしは、相當の教育を受けて大統領となれるの珍しければなり。

我が官私大學卒業生は年々幾千の多く、而して職業難の聲益々高きを加へ、將來如何に爲るべきかは一大問題たるを失はず。されど果して職業無きや否や、大學出身ならざるものが、職業を求めて職業を得、中に大に發展し、大學出身者數名を雇ふを見れば、眞に職業無きかを疑はざる能はず。職業難の聲の到る處に聞え、實際苦むものは少からざるは、職業無きが爲めなるか、又は職業あるも之を知らざるが爲めなるか、或は之を知るも之に就くを敢てせざるが爲めなるか。學制改革論者は、修學期間の長きを以て主なる原因としていふ、卒業年齡廿七八なるは、青年の活氣を減ずること著るし、遲くも廿三にて卒業し、年少氣鋭、社會に突進せしめざるべからずと。反對者はいふ、順當に小學、中學、高等學校を經過すれば、廿三にて大學を卒業するを得ん、今日年齡の後るゝは、中學卒業生の多きに過ぎ、延て高等學校入學試驗の嚴を加ふるが故にして、漸を以て卒業期限の早くなるを見るべしと。議論は議論として暫く措て問はず、今日も廿三にて卒業するあるのみならず、私立大學に年少卒業生の少からざるに、燃ゆるが如き活氣を以て突進するの甚だ稀なるは聊か怪むべし。是れ強ち年齡の如何に由らず、又た別に由來する所あるに非ずや。

家に在りて書を讀み、教場に入りて書を讀み、又た家に歸りて書を讀み、常に書を廢せざるは、青年の活氣を減ずる嫌なきか。活氣は何程か天稟に具はるも、養成の如何にて增減するなきを得ず。讀書の性質として室に閉ぢ籠り、机に凭り掛り、體を動かさず、呼吸すること淺く、其の屢々なるや、軈て他の事情と關連し、活動の慵きを感ぜしむるに至らずや。猛り狂へる獅子も久しく檻に容るれば柔順と爲る、活氣に充てる青年も幾年か教科書を課せられ、參考書に拘束せられて、活氣を減ずる無しとせず。

性來活氣の旺盛なるものは、拘束せられて幾分を減ずるも、尚ほ進んで活動するに堪ふべきが、性來活氣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に乏しきは、拘束せられて殆んど全く之を失ひ、書箱に全世界を見出し、日々唯だ讀書を事とし、然らずんば讀書同様に默坐し又は座談して日を送る。現實世界に出づれば、弱肉强食の猛烈なるあり、退いて書を讀めば、何人も壓迫し來らず、難きを避け易きに就き、識らず知らず書中に唯一の慰安を求め、須臾も之より離るゝを欲せず、甚しきは書を讀むをも懶しとし、横はりて空想の浮ぶに任せ之を辿りて滿足するに及ぶ。而して偶々現實世界を見れば、己れの考ふると大なる差違あり、出でゝ矯革に從事するの勇氣なく、徒らに世間の果敢なきを唱へ、さりとて理想を設けて其の來るを待つの餘裕もなく、同好者と捨鉢を語り合ふを責てもの事とす。斯かるは學校に出入するものに往々見る所なり。

事は一概に言ふべからず、讀書の害あるも、其の利あるは明けし、利あるの明なるも、其の害を忘るゝを得ず。現實世界に活動するを好まざるものは、書を讀みて益々活動より遠ざかり、世間の目して重要事とする所即ち親子夫妻等の關係に疑を挾み、窃に、或は公然に、其の破壞せられんことを希望す。其の甚しきは少けれど、多少さる色合を帶ぶるは、讀書の習ありて以來時代としてこれ無きはあらず。而も現實世界は力の世界、力あるものは寢ころびて呪ふものに耳を假さず、己れの欲する所に向つて横行濶歩するを辭せず、讀書せざるものが讀書するものを壓倒し、少くも此と對抗するを得るは、故なしとせず。元と知識は讀書よりすと限らず、讀書するものと讀書せざるものと其の知識に於て孰れの優れるかの決し難き場合に乏しからず。讀書は手段にして目的に非ず。忙中に閑を得て讀書するものは、讀書に專らなるものより知識の活用に長ずる狀あり。リンコーンの勞働しつゝ書を讀める、實に書を讀みしもの、書に讀まれしに非ず、その讀みし所は盡く消化し了れるなり。職業難を口にし、無標準を口にし、一種の憂患に囚はるゝは、讀書の弊を受けたるに非ずとせんや。近頃青年の讀む所大抵二種に分る、一は活動といひ成功といふ類、一は煩悶といふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

懐疑といふの類、而して各々一に偏す。一方は權勢に與かるに汲々とし、或は仲買店に入り、相場にて大儲けせんとし、一方は坐して世間を愚にせざるを時代後れとす。共に痼疾となれるは殆んど奈何ともすべからず。成るべく讀書の利を多くし其の害を少くせんとするものは此邊に考ふるを要す。

對韓方針

池邊吉太郎

私は大體に於て朝鮮の事を樂觀して居る。何も六づかしい事はないと思つて居る。それだから今更ら對韓方針などと言ふ必要がないかも知れぬ。

處が先頃朝鮮の側から日本の對韓政策をかうして吳れろといふ注文があつた模樣だ。それには大分反對もあつたらしい。然し桂侯の遣り方は哈爾賓事件以後極つてゐる。現狀維持――ちつとも現狀を動かさないといふ方針――之は至極賢い決定だと私は信じて居る。世人も知つて居る通り朝鮮には兩班(ヤンバン)といふものがある。此兩班といふ一階級が別にエライ特權を持つた譯でもあるまいが、從來文武の官權を獨占して來た。そこで日本の保護國とならぬ前の朝鮮、殊に京城の政界は何時も〳〵兩班中の仲間同志の政權爭奪の結果猫の眼玉同樣に變化して居た。其癖は今も猶殘つて居る。何かしら變化を促して見たいのである。一進會の元の起りは一種特別のもので實に不思議なものだ、けれども今日になつては矢張り元の朝鮮風になつて居る。それて今の政府の李完用一派――對――一進會、それから大韓協會、西北學會、いろ〳〵の黨派で押したり引いたりして居る。局面は新らしい樣であるけれども古

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い芝居てある。筋書も一向に珍らしくない。處て此黨派はどれもこれも朝鮮ては非常に不人望てある。どれもこれも朝鮮の興廢存亡には關係が無くなつて居る。若しあの先生達が朝鮮を背負うて立つ力を持つて居たら朝鮮はかの樣には始めからならなかつたらう。そこて兩班は、兩班、朝鮮は朝鮮てある。日本は此兩班の言動に重きを措くに足らぬのは恰度維新の當時日本の舊士族などの七六づかしい建議や建白などに重きを措くに足らざりしと同樣てある。舊士族は舊士族てある。新日本は彼等と關係なしに別に出來上りつゝあつた。要するに朝鮮は兩班てはない、又京城てはない。寧ろ音もなく香もなく一向政治の事や經濟の事が分らず、時に煽動されゝばパッと燃え上つて直ぐに消えて了ふ、意志もなく希望もなき七道の人民が朝鮮てある。それが本當の朝鮮てある。其本當の朝鮮に對して政治上經濟上の施設をなすことが大切てある。日本の對韓政策は一に此點から割出されねばならぬ。何も上面の、京城の大きな聲や、騷ぎどよめく響に耳を傾くる必要がない。現政府もあれらを相手にせぬのは賢い仕打と私は思つて居る。

處て日本の是迄の統監政治、これは私は成功して居るとは認めて居ない。けれどもエライ失敗とも思はない。伊藤公自らも多分成功とは信じて居なかつたらう。若し成功と信じてゐたら統監を罷める時になつて迄も司法權を引上るとか軍部を廢止するとかいふ事をせなかつたてあらう。又確かに失敗と認むべき點もある。私はあの次官政治を失敗と思ふ。伊藤公の積ては大臣あつても實際は次官が遣る。自分の政治は次官に遣らせるといふ積てあつたらう。處が失敗して伊藤公の希望通りに行かなかつた。尤もこれも全く失敗したといふ譯てはない。よい次官を置いた處の政治はなか〱擧つた。もう少しどうかしてあいつを修正したら、あれても行けぬ事はないかも知れない。只、今の儘ては安心がならぬ迄てある。又もう少し無用なお役所を廢してもよからうと思ふ。學部、農商部、これらは今ては無用の長物だ。無くしても宜しい、そして日本の役

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

員の數も朝鮮の役員の數も減じてもよいと思ふ。そんな事で幾らか修正を加へ、政費も減じ、そして本當の朝鮮、本當の朝鮮人に安寧幸福を與ふる政治を行つたならば多數の人民が次第〱に安心し、次第〱に日本の政治に謳歌するやうに必らずなるだらうと私は信じて居る。現に新らしい仕組てはあるが朝鮮人は既に皆日本の裁判を信用し、歸服して居る。其結果、事件は非常に多い相だ。これが證據だ。それからもう少し經濟向の事をよくしてやつたらよからうと思ふ。裁判制度の改正て生命財産の保護は追々出來るだらうが、生命のもとになる財産を朝鮮人に與ふる仕組はまだ出來てゐない。それをやる元は日本人が朝鮮から物を餘計に買ふ事てある。買ふとしても差當つては澤山のものはない。未開國のお極り、あるものは農産物ばかりてある。然し日本に農産物の需要が無いてない。處が現在ては日本と朝鮮との間には相變らず關税がある。日韓合邦といふ事はどういふ事か私は知らぬが、少くとも關税の垣丈けは取除きたいと思ふ。そこて政府の注意が必要だと云ふは外てはない。今度の日本の條約改正の一件てある。どうする積りか知らぬが已に日本は列國に對して朝鮮を代表して居る。其れてあるに拘らず朝鮮に列國との條約を維持して置く必要が何處にあるか、日本と列國との條約て以て朝鮮を支配する端緒を今度の條約改正て定めて貰ひたい。これは六つかしい事てはない。現に朝鮮と商賣してゐるものは日本が一番大きい。外の國はあるかなしかてある。列國ては故障を申立つべき筈がない。然し朝鮮と日本との間に悉皆關税を罷めて了ふについては多少の故障があらう、それは外てはない、朝鮮の法律は日本の法律てはない。日本の法律は朝鮮に行はれてゐぬ故、朝鮮の税法の下て日本よりも有利の事業を外國人などが起して日本に關税なしにドシ〱輸入する。それては困ると日本の大藏省が言ふだらう。然し其弊害は取除くことの出來る弊害だ。今一つは朝鮮が關税の收入を失つて財政上困るかも知れんといふ事てある。けれども實際日本ては朝鮮に金を注ぎ込んて居る。恩惠を施して居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。それだのに關稅を取れぬとて澁すのは餘りに蟲がよ過ぎる。又朝鮮の品物を無稅て買つてやれば一方に失つたものを一方に得さしてやる譯である。條約改正も今年あたりからボツ／＼やらうから、私は對韓方針の差當つての仕事は條約改正を機として、朝鮮と列國との條約を罷め、日韓の間の關稅の垣墻を取去る必要ありと信じてゐる。其事が朝鮮の經濟上の活力を必らず增加し得る力あることを私は疑はぬ。（完）

美術と經濟

和田垣謙三

論題は美術と經濟、——先づ第一に美術といふことに就て愚見を述べて見たい。抑々美術とは何ぞや、專門家が之に如何なる定義を下して居るか、私は一向に知らぬ。併ながら今其文字の上から之を調べて見ると、獨り我邦に於て美術といふ字が成立ち、又用ゐられて居るのみならず、英國に於ては之をフアイン、アーツといひ、佛蘭西に於てはボザールと稱し、而して獨逸に於てはショーネ、クンストと呼ぶ。何れも美といふ字と、術どいふ字の二つを結び合して出來て居る。即ち何處でも美術は美術、哲學者が何といはふがいふまいが、美術とは讀んで字の如く美術——美はしき術といふことであつて、凡そ人間の眼に、又耳に、又心に、美と見え、美と聞へ、美と感ぜらるゝ、美其物を喚發し發揮して、由て以て美味美感を滿足し又能く之を培養して行く術である。是が私の自己流の解釋。專門家などが何と言つて居るか、定めて之と大同小異であらうと思ふが、大異小同であつても構はない。私は私の解釋が決して違つて居らぬと深く信じて疑はない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

扨、美術の大體はさういふものとして置いて、西洋てはポエトリー、ペインチング、エンド、ミユーヂツクといふて、卽日本風にいへば詩歌、繪畫、音樂、此三つをスリー、シスタース即ち美術の三人姉妹であるといつて居る。之は一々理窟のあることて、强ち不都合又不道理な分け方てはない、併ながら右の三つの外に彫刻、彫金、建築、或は庭園術、料理法、陶磁器は勿論のこと、漆器ても着物ても、刀劍ても、束髮ても、舞踏ても、造花ても、生花ても、式部式ても、あるひは好き不好きても、何てもかでも以上の定義に適合するもの又は之と趣を等しうするものは所謂工藝に於ける美術と云つても少しも差支なからうと思ふ、玆に外國の言葉を用ひた序に一寸云ひたいことがある、それは成程美、術と此二字を以て美術を現すのたが、又ある場合には美なる形容詞を用ひずして、單に術、即ち英語のアート獨逸語のクンスト、單に術家とか術者、あるひはアーチスト、直譯すれば單に術者、斯ういふ時には何を意味するかと云へば、單に術と云ひ、單に術家と云へば即ち美術家を意味する、日本てもあるひは技術者てあるとか、何術家、柔術家、灸術家、劍術家、美術家、或は官海游泳術家、術にも色々種類があるてあらうと思ふ、所が歐米ては術家、アーチストと云へば無論美術家の事てある、所謂美術なるものは術の中の術、美術なるものは術者の中の術者てあると云ふことになつて居る。

さて前に申した通りに美術といふことは廣く之を解する時には殆際限のないものてあり、又文化文明の進歩に連れて益々多きが上にも益々多きを加ふることてあらうと思ふが、等しく美術〳〵といふても、其間に自ら本末主客の別のあると云ふ事を辨へねばならぬ、成程此耳目鼻口、之は如何なる人間でも先づ不具てない以上は、又人間てなくても下等動物ても悉く之を具へて居る、之等の所謂五感に觸る丶所の美、美は即ち美てあるが、私は之を一種の肉美と云ひたい、而して見るとか、聽くとか、味はうとか以上に人を滿足せしめて行くものは、是は詰り精神美とか、單に心美とか、

或は思想美とか、或は空想美とか――――もしも言へるならば――云つて見たいと思ふ。聲も形も色も香もなき、而して美のある條件を具へ、美の特色を持つて居る、故に眼之を見て而して美と爲し、耳之を聞いて而して美となし、耳目之を以て美となす、美の美、美の根本、美術の美術と云ふものは、是は一種分析すべからざるもの、アンアナライゼブル、不可分析、不可模倣、不可思議なるもの即ち言葉を換へて云へば、人間的に非ずして、殆神秘的、神授的、神聖不可侵的のものである、又さうなくてはならぬと思ふ、故に歐羅巴にはインスピレーションと云ふ言葉がある、是は詰り神明の御告によつて或る事を成就する事である、輕く言へば天籟、今日に於て又百代の後に於て、人が殆ど詩聖の首座に置くべきものは彼のミルトンであらう、パラダイス、ロストの著者たるミルトン、彼は盲目でありながら世界第一の文章を書いたのである、又ベートーベンと云ふ人は確に音樂者の中の五本の指に折らるゝ人、五本の指と云ふより一二の中に這入る人であらう、或は拇指を屈せらるゝ人であらう、[illegible]聞しあらう、其ベートーベンは何だ、聾者だ。肉眼、肉耳を以つてゐない所の人が、名文章を作り、妙曲を作つたのである、美術に於て如何に肉の領分より靈、之を大きく言へば神秘的の、神明的の領分が廣いかと云ふ事は是でも分る、又少しくどいやうであるが、西洋の言葉に（The Third Eye）と云ふ事がある、美術家は二つ以上の眼を以つて居る、直譯すると少しをかしいが、二つ以上の眼だから三つ目小僧か、或は横目を以て見るか、或は人を知る眼を持つて居るのか、そんな意味ではなからうと思ふ、世間では彼は口の人だとか彼は筆の人だとか、彼は腕の人だか言ふ、美術家にも勿論腕もいるだらうし、口もいるだらう、筆もいるだらう、けれども美術家に最も必要なものは此二つの目、双眼以上の第三の眼である、其眼は即ち天眼である、靈眼である、神眼である、私はかう解釋する、故に私の考には、美術家は必ずしも學者でなくてもよい、大學者必ずしも大美術家でない否小美術家でもない、併

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ながら苟も眞の美術家と云ふものは或る意味に於ては大學者てなくてはならぬ、又大學者に非ずんば決して美術家の最も小なるものとさへなることが出來ぬ、我輩の云ふ大學者といふことは讀むて字の如く大に學ぶ者と云ふ事てある、即ち人に學ぶのてはない、天に學ぶ、神明に學ぶ、神明に導かれ、造化に師事して、今謂ふ所の靈眼或は靈腕を以て造化の眞意を窺ひ寫すの工夫がなくてはならぬ、齊戒沐浴的の精神を以て其職を天職と思ひ、天命を奉ずるものと思ふ程の神靈的の修養、是は勉めて亦勉め、勵むて愈々勵まねばならぬことてあらうと思ふ、重ねて云ふ、美術家と云ふものは必ずしも世間の所謂學者、世俗の所謂博學なるには及ばぬ、又必ずしも金を持つにも及ばぬ、况や太皷を持つにも及ばぬ、金は乞食でも持つて居る、太皷は幇間が持つて居る筈だ、唯美術家なるもの丶汲々として其及ばざらんことを畏るべきは、所謂コンマース、ウイズ、ゴッド。神と商賣をすると思はれては、生兵法が大傷の基て、此コンマースと云ふ言葉はモット高尚なる意味に用ひられて居る、商賣といふ意味てはない、即ち神々との交際と云ふ言葉て神に接すると云ふ事てある、塵深き浮世にあつても其精神は清く高くして能く神明に接し得る、其事の出來るように覺悟すると云ふ事てある、之が第一(フアースト)のことて、第二(セコンド)のことて、而して第三(サード)のことてある、一にも二にも三にも之を措いては他には何事も何物もない。故に千萬の言語よりも一人の行ひといふ者が雄辯てある。無言の實例は千言萬語よりも雄辯であると信ずるが故に私は一つの例を引いて話して見たい。先刻御承知の人もあらうが小倉某といふ人がある。此人は嘗て楠公神社に建てた伊藤公の銅像だの、大隈伯の銅像だのを作つた人てなか〳〵熱心の人、此小倉先生、△△△△△の立像を依頼されて居た。二千圓とか三千圓とか大枚の金が貰へる譯てあつた。處が日露の戰役に於て戰死者の多い中に或海軍士官、それが下々の者に大に敬慕されて居たが、下士兵卒が其德を思つて或は廿錢或は卅錢の零碎なる金を集めて其れを以て此小

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倉の所に又肖像を頼みに來た。實に彼は涙の人である、又血の人である、それて彼を棄てゝ此に着手した。其水夫共の醵金といふものは所謂長者の萬燈より貧者の一燈てある。其麗はしき精神といふものは千萬金の金を以て之を測るべからざるものである。其精神に感じて萬事を打棄てゝそれに掛つた。一方の方からは矢の催促、まだ出來ないか、まだやらないか——出來ない、そこて非常なお目玉を喰つて、契約の取消し——小倉が私にいつた。實に不幸が續く、折角拵へた伊藤公の像は鼻をチ切られたり、眼を潰されたりして、又今度作らうとした△△△△の像は右の譯て影も形も亡くなつた。誠に困るといふから、それは少しも困らぬ、小倉君萬歳と言つて私は肩を三つ叩いてやつた。私は美術家の精神は斯くなければならぬと思ふ。若しも神があつて之を見たならば、△△△△△の連中は何と怒鳴らうが、何と威張らうが、紫の雲の中から善哉〳〵、確かに其聲は彼の胸にも聞ゆると思ふ。それ位の自任があつて初めてインスピレーションも之を受けることが出來る。其處に至つて私は美術家の任務に重いことを思はざるを得ない、先づ私の美術、美術家といふものに付ての考は大略斯んなものである、

そこて今度は經濟といふことを言はなければならぬ、美術は私の專門外のことて、所謂盲目の垣覗きてあるから、もし不幸にして私の說が間違てあつても美術仲間の大したお咎めもなからうと思ふが、經濟の方は少しく違ふ、兎に角二十年許り此事に關係をして居るものてあつて、始から申せば三十餘年、明治五年から…………それて盲目的とか、或は門外漢とか云ふ言葉を以て責を免かるゝ事が出來ない、故に此事になると先づ命がけの仕事になつて來た、

さて經濟と云ふことは其文字から云ふと、彼の美術の二字の如く簡單々純なるものではない、即ち經濟は經國濟世とか、或は經世濟民とか、なか〳〵六ヶ敷いことてある、歐羅巴ては通常之をポリチカール、エコノミーと云ふ、之を直譯すれば公共的或は國家的家法と云ふ事てある、又近頃は單にエコノミックスと云ふ、

是は家法或は家政と云ふ意味である、此經濟の字は所謂東洋的で、又エコノミクスと云ふは、西洋的、分解的である、そこで今日多數の學者が經濟と云ふ語は此字句よりは、稍狹い、而して歐羅巴の家政の意味よりは、稍廣い、其中間の意味で之を用ひて居るので、それ故に我國に於ても、曾て經濟と云ふ字を止めて、理財或は財理といふ字を用ひたこともある、即ち經濟學の本然の範圍、又其攻究の方法目的、他の學科との關係等に對しては二十世紀の今日に於て猶學者の議論紛々として居る、或は經濟學なるものをして進むで他の領分を壓して、一種の學術的、學界的、帝國主義といふやうなものを皷吹せむとするものもある、又一面には此學の王位即ち其學界に於ける獨立權を奪ひ去つて、社會學といふ露國的、支那帝國的、尨大なる一大學界の分科としやうと云ふ徒もある、あるひは其處まで行かずして、韓半島の如くより大なるものゝ保護國的のものにすべしと云ふ議論もある、なか／＼むづかしい、そこで我々の内輪喧嘩、兄弟喧嘩、之を近所隣りに言ひ觸らすべきものでもないから此處では寧ろ經濟的とか經濟上とか、狹い意味の、通俗に用ふる經濟と云ふことに就て話して見たい、其稍や狹き意味に於ける經濟と云つたとて、經濟上といふものは金錢的、眞逆そんな狹い意味ではない、けれども先づ利害上、利害的と云へば、經濟上、經濟的と云ふのと先づ近い、中らずと雖も遠からずである、尤も此經濟と云ふ事は國家的の事である、其利害と云ふても一身一家の利害ではない、勿論國家的利害、所謂、國利民福とか、國利國益と云ふ事である、其意味に於て玆に私は經濟と云ふ字を用ひて、其意味に於て美術と經濟の關係を論じやうと思ふ、若し然らずして所謂ポケット經濟、即ち巾着經濟、又は馬穴經濟、手桶經濟、即ち臺所經濟と云ふことであるならば、それは私の專門ではなく、寧ろ不得意の方である、不得意を以て得意として居る方である、であるから、こゝに謂ふのは國家的の利害と云ふ意味に止めて、こゝに經濟と美術との關係に就て一言しやうと思ふのである、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美術と經濟――美術は美の啓發、經濟は利の增進を以て其用として居ることは略述べ得たものと信ずる、依つて一歩進むて美術と經濟との關係、大そうえらさうだ、誇大的の言ひ方である、モット簡單に云へば美と利との關係、もう少し短く言へば美利論、美利なんと言ふと音が少しおかしく聞えるが、併しながら調子宜い、例へばピッ／＼と響いたと云へば、ブル／＼ふるへたなんと云ふよりは餘程宜い、所がもしも前後してリビと云つたなら餘程ゴロが惡い、即ち美といふものはどうしても下風に立つべきものでない、私が經濟と美術と云はずして美術と經濟と云ふ理もこゝにある、さて、美利論と云ふことを、十分に論じやうとするならば、所謂神秘、三位合體と云ふ事に論じ詰めて來なければならぬ、而して後に更に進むて眞善美利一體と云ふ説がある、私は曾て眞善美利一體説と云ふものを唱へた事がある、ある新聞に和田垣の珍論と云はれたが、此のチンは珍の字か陳の字かどちらか知らぬが、要は唯此論が正しい論であるかないかと云ふことである、私は眞善美三位一體に一歩を進め眞善美利四位一體と云ふことを十分に述べィ見たい、即ち此四つは四つにして而して一つ、一つにして而して四つ、其根は一つだが、詰り四つに分れて居るのだ、物其物は一つ、それの四側面に過ぎないのだ、即ち眞と善と美と利、是は互に撞着抵觸するものでない、琴と三味線と鼓弓と尺八、此三曲あるひは四曲の合奏が出來るが、各々其音色の變つて居る所て却て一張一縮が出來る、音樂に就て言へば、さう云ふもの、又理學上に於ても、もう少し進むて、より大なる審美上とか、美學上とかて眞善美利四位一體といふことを唱へて見たいが、議論が細かくなるから、私は眞善美利四位一體といふ一種の論を持つて居るといふことだけを申しておく、

次に進むて稍々實地論に入り、本邦に於ける美術と經濟と云ふ事に就て述べやう。

美術と經濟――私がこゝに美術と經濟と云ふ事を論ずるのは、抑々何故か、我々は今や二十億に近き國債、――二十億と云ふと、國庫收入の四倍、此利子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だけても一億近きもの、其國債を背負つて居る、グリースの哲學者は人間は負債を拂ふ動物なりと言つたが私が之を修正して「否利子を拂ふ動物なり」と言ふたといふことが或新聞に出て居つたが、それは事實無根て、一向當人は知らないことてあるが、假りにそれを事實として拙者が其言を發したとしたならば、即ち我々國民は現實其利子を拂ふ國民てある、和田垣をして智者の名を成さしめた譯てある、詰り此日本と云ふものも所謂世界列强一等國の班に加つて、其名譽の赫々たると同時に其債務も亦一層の重きを爲したと云ふことはこれ亦言ふまてもないことてある、實に我邦は日露の戰役に依つて我邦の武力は世界の耳目を驚かしたのてある、併ながら武勳とか武名とか云ふものは、寧ろ螢の光の如きもので、遠くから見ればピカリ〳〵と誠に麗はしきものてある、けれども側に寄つて見ると、光も溫氣も少しもないのてある、今後は所謂實力勝負てある、——一六勝負などと云ふものてはない、實力勝負、所謂經濟的の競爭、それは決して十八ヶ月の短日月て落着の付くものてない、百年千年の長年月に亘り、一大戰爭、彼を知り、己を知るは——これは孫子の金言てあるが、能く彼を知り、又能く己を知つて戰はずして勝つの兵略、商略、經濟策、政策と云ふものは果して如何、是は今日の我々、又我々のみならず、我々の子孫が十分に熱心に考へて、所謂勝を千里の外に決し、又百歲の後に決せねばならぬことてある、それ故に農ても、工ても、或は陸海の運輸交通ても、又金融機關ても、或は敎育事業ても、苟も國利民福の消長に關する事務に從事して居るものは勿論其分を知り、其分を盡し、以て大日本帝國々民たるの權利と義務とを全ふせねばならぬ、併し玆に注意すべき事は、我國は世間て云ふ通りに一方から見れば東洋の英國てあるが、又他の一面から見れば我國は恰に東半球の佛蘭西てある、伊太利てある、又近世に於ける故希臘國てある、即ち美術國てある、隨分惡口上手の外國人が、日本を色々論評して居るが、その中の似たものを揃へ、違つたものを捨てゝ、所謂惣〆勘定と云ふやうなもの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をやれば、其結果として所謂貸方勘定の方、日本の長所强點の方に現れたものが丁度三點ある、第一は日本人は親切である、カインドである、第二は日本人は奇麗好きである、殆ど潔癖である、而して第三は日本人は美術思想に富むて居ると云ふ算盤が出た、我輩は此親切、潔癖、美術心と云ふことは所謂是れ一の三位一體て、親切と云ふのは感情の方、潔癖と云ふのは身體の美て、美術心は精神美、其各方面の美を包含し、美を意味するものであつて、即ち三位一體、寧ろ三美一體、さう云ふ字を製造して見たい、して見れば十目の見るところ、十指の指すところであつて、果してこの多數の評に誤がないならば、我國は慥に東洋の美術國である、否世界の美術國である、併ながら俗に云ふ通りに煽てと何とかには乘るべからざるものである、私は我日本が果して眞正の意味に於て美術國であるか、どうかと云ふ事に就ては多少の疑がないてはない、併ながら疑ふべきを疑ふて、然る後始めて信ずべきを信ずることの出來るのは物の順序である、私は認める、我國民は一種の美術思想に富むて居る、何故にさうか、之に就ても說を持つて居るが、詳しく云ふ暇がない、短く云つて見れば、我國は所謂天然自然的の美術、或は美術品に乏しい、ダイヤモンドとか、ルビーとか人の手を待たざる出來合ひの美術品は、海にも陸にもないのである、そこて所謂窮乏困難が、國民を玉にして、却て天工を奪ふ程の人工的美術品を爲すに至つた、是は私の說てある、易く言へば、之を死地に陷れ、可愛い子に旅をさせるのである、憎まれ子世に蔓るのである、前にも云ふ通り我國は確に一種の美術國である、一種〱と諄く云ふようてあるけれども、是れ亦一種の論結てあつて、我國は眞に總ての意味に於て一大美術國であるかどうかと云ふ事に就ては矢張り疑を存して居る、成程美なるものはあるけれども、所謂我國の美術の美は、可愛らしい、外國て云へばラブリー、或はプリッチー、シャルマン、優美の美、是をもう少し遠慮なく言へば輕薄なる、薄ッペラの、徒に纎巧をこれ事とする美、其美が多數を占めて居る、而して雄大

ながら苟も眞の美術家と云ふものは或る意味に於ては大學者でなくてはならぬ、又大學者に非ずんば決して美術家の最も小なるものとさへなることが出來ぬ、我輩の云ふ大學者といふことは讀むで字の如く大に學ぶ者と云ふ事である、即ち人に學ぶのではない、天に學ぶ、神明に學ぶ、神明に導かれ、造化に師事して、今謂ふ所の靈眼或は靈腕を以て造化の眞意を窺ひ寫すの工夫がなくてはならぬ、齋戒沐浴的の精神を以て其職を天職と思ひ、天命を奉ずるものと思ふ程の神靈的の修養、是は勉めて亦勉め、勵むで愈々勵まねばならぬことであらうと思ふ、重ねて云ふ、美術家と云ふものは必ずしも世間の所謂學者、世俗の所謂博學なるには及ばぬ、又必ずしも金を持つにも及ばぬ、況や太皷を持つにも及ばぬ、金は乞食でも持つて居る、太皷は幇間が持つて居る筈だ、唯美術家なるものゝ汲々として其及ばざらんことを畏るべきは、所謂コンマース、ウイズ、ゴッド。神と商賣をすると思はれては、生兵法が大傷の基で、此コンマースと云ふ言葉はモット高尚なる意味に用ひられて居る、商賣といふ意味ではない、即ち神々との交際と云ふ言葉で神に接すると云ふ事である、塵深き浮世にあつても其精神は清く高くして能く神明に接し得る、其事の出來るように覺悟すると云ふ事である、之が第一(フアースト)のことで、第二(セコンド)のことで、而して第三(サード)のことである、一にも二にも三にも之を措いては他には何事も何物もない。故に千萬の言語よりも一人の行ひといふ者が雄辯である。無言の實例は千言萬語よりも雄辯であると信ずるが故に私は一つの例を引いて話して見たい。先刻御承知の人もあらうが小倉某といふ人がある。此人は嘗て楠公神社に建てた伊藤公の銅像だの、大隈伯の銅像だのを作つた人でなか〱熱心の人、此小倉先生、△△△△△の立像を依賴されて居た。二千圓とか三千圓とか大枚の金が貰へる譯であつた。處が日露の戰役に於て戰死者の多い中に或海軍士官、それが下々の者に大に敬慕されて居たが、下士兵卒が其德を思つて或は廿錢或は卅錢の零碎なる金を集めて其れを以て此小

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倉の所に又肖像を賴みに來た。實に彼は涙の人である、又血の人である、それで彼を棄てゝ此に着手した。其水夫共の醵金といふものは所謂長者の萬燈より貧者の一燈である。其麗はしき精神といふものは千萬金の金を以て之を測るべからざるものである。其精神に感じて萬事を打棄てゝそれに掛つた。一方の方からは矢の催促、まだ出來ないか、まだやらないか——出來ない、そこで非常なお目玉を喰つて、契納の取消し——小倉が私にいつた。實に不幸が續く、折角拵へた伊藤公の像は鼻をチ切られたり、眼を潰されたりして、又今度作らうとした△△△△△の像は右の譯で影も形も亡くなつた。誠に困るといふから、それは少しも困らぬ、小倉君萬歲と言つて私は肩を三つ叩いてやつた。私は美術家の精神は斯くなければならぬと思ふ。若しも神があつて之を見たならば、△△△△△の連中は何と怒鳴らうが、何と威張らうが、紫の雲の中から善哉〳〵、確かに其聲は彼の胸にも聞ゆると思ふ。それ位の自任があつて初めてインスピレーションも之を受けることが出來る。其處に至つて私は美術家の任誠に重いことを思はざるを得ない、先づ私の美術、美術家といふものに付ての考は大略斯んなものである、

そこで今度は經濟といふことを言はなければならぬ、美術は私の專門外のことで、所謂盲目の垣覗きであるから、もし不幸にして私の說が間違であつても美術仲間の大したお咎めもなからうと思ふが、經濟の方は少しく違ふ、兎に角二十年許り此事に關係をして居るものであつて、始から申せば三十餘年、明治五年から…………それで盲目的とか、或は門外漢とか云ふ言葉を以て責を免かるゝ事が出來ない、故に此事になると先づ命がけの仕事になつて來た、

さて經濟と云ふことは其文字から云ふと、彼の美術の二字の如く簡單々純なるものではない、即ち經濟は經國濟世とか、或は經世濟民とか、なか〳〵六ヶ敷いことである、歐羅巴では通常之をポリチカール・エコノミーと云ふ、之を直譯すれば公共的或は國家的家法と云ふ事である、又近頃は單にエコノミックスと云ふ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

是は家法或は家政と云ふ意味である、此經濟の字は所謂東洋的て、又エコノミクスと云ふは、西洋的、分解的てある、そこて今日多數の學者が經濟と云ふ語は此字句よりは、稍狹い、而して歐羅巴の家政の意味よりは、稍廣い、其中間の意味て之を用ひて居るので、それ故に我國に於ても、曾て經濟と云ふ字を止めて、理財或は財理といふ字を用ひたこともある、即ち經濟學の本然の範圍、又其攻究の方法目的、他の學科との關係等に對しては二十世紀の今日に於て猶學者の議論紛々として居る、或は經濟學なるものをして進むて他の領分を壓して、一種の學術的、學界的、帝國主義といふやうなものを鼓吹せむとするものもある、又一面には此學の王位即ち其學界に於ける獨立權を奪ひ去つて、社會學といふ露國的、支那帝國的、尨大なる一大學界の分科としやうと云ふ徒もある、あるひは其處まて行かずして、韓半島の如くより大なるものゝ保護國的のものにすべしと云ふ議論もある、なか〳〵むづかしい、そこて我々の內輪喧嘩、兄弟喧嘩、之を近所隣りに言ひ觸らすべきものでもないから此處ては寧ろ經濟的とか經濟上とか、狹い意味の、通俗に用ふる經濟と云ふことに就て話して見たい、其稍や狹き意味に於ける經濟と云つたとて、經濟上といふものは金錢的、眞逆そんな狹い意味てはない、けれども先づ利害上、利害的と云へば、經濟上、經濟的と云ふのと先づ近い、中らずと雖も遠からずてある、尤も此經濟と云ふ事は國家的の事てある、其利害と云ふても一身一家の利害てはない、勿論國家的利害、所謂、國利民福とか、國利國益と云ふ事てある、其意味に於て茲に私は經濟と云ふ字を用ひて、其意味に於て美術と經濟の關係を論じやうと思ふ、若し然らずして所謂ポケット經濟、即ち巾着經濟、又は馬穴經濟、手桶經濟、即ち臺所經濟と云ふことてあるならば、それは私の專門てはなく、寧ろ不得意の方てある、不得意を以て得意として居る方てある、てあるから、こゝに謂ふのは國家的の利害と云ふ意味に止めて、こゝに經濟と美術との關係に就て一言しやうと思ふのてある、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美術と經濟――美術は美の喚發、經濟は利の增進を以て其用として居ることは略述べ得たものと信ずる、依つて一歩進むで美術と經濟との關係、大そうえらさうだ、誇大的の言ひ方である、モット簡單に云へば美と利との關係、もう少し短く言へば美利論、美利なんと言ふと音が少しおかしく聞えるが、併しながら調子宜い、例へばピリ／＼と響いたと云へば、ブル／＼ふるへたなんと云ふよりは餘程宜い、所がもしも前後してリピと云つたなら餘程ゴロが惡い、即ち美といふものはどうしても下風に立つべきものでない、私が經濟と美術と云はずして美術と經濟と云ふ理もこゝにある、さて、美利論と云ふことを、十分に論じやうとするならば、所謂神秘、三位合體と云ふ事に論じ詰めて來なければならぬ、而して後に更に進むで眞善美利一體と云ふ說がある、私は曾て眞善美利一體說と云ふものを唱へた事がある、ある新聞に和田垣の珍論と云はれたが、此のチンは珍の字か陳の字かどちらか知らぬが、要は唯此論が正しい論であるかないかと云ふことである、私は眞善美三位一體に一歩を進め眞善美利四位一體と云ふことを十分に述べて見たい、即ち此四つは四つにして而して一つ、一つにして而して四つ、其根は一つだが、詰り四つに分れて居るのだ、物其物は一つ、それの四側面に過ぎないのだ、即ち眞と善と美と利、是は互に撞着抵觸するものでない、琴と三味線と鼓弓と尺八、此三曲あるひは四曲の合奏が出來るが、各々其音色の變つて居る所で却て一張一縮が出來る、音樂に就て言へば、さう云ふもの、又理學上に於てももう少し進むで、より大なる辨美上とか、美學上とかて眞善美利四位一體といふことを唱へて見たいが、議論が細かくなるから、私は眞善美利四位一體といふ一種の論を持つて居るといふことだけを申しておく、

次に進むで稍々實地論に入り、本邦に於ける美術と經濟と云ふ事に就て述べやう。

美術と經濟――私がこゝに美術と經濟と云ふ事を論ずるのは、抑々何故か、我々は今や二十億に近き國債、――二十億と云ふと、國庫收入の四倍、此利子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だけでも一億近きもの、其國債を背負つて居る、グリースの哲學者は人間は負債を拂ふ動物なりと言つたが私が之を修正して「否利子を拂ふ動物なり」と言ふたといふことが或新聞に出て居つたが、それは事實無根で、一向當人は知らないことであるが、假りにそれを事實として拙者が其言を發したとしたならば、即ち我々國民は現實其利子を拂ふ國民である、和田垣をして智者の名を成さしめた譯である、詰り此日本と云ふものも所謂世界列強一等國の班に加つて、其名譽の赫々たると同時に其債務も亦一層の重きを爲したと云ふことはこれ亦言ふまでもないことである、實に我邦は日露の戰役に依つて我邦の武力は世界の耳目を驚かしたのである、併ながら武勳とか武名とか云ふものは、寧ろ螢の光の如きもので、遠くから見ればピカリ〱と誠に麗はしきものである、けれども側に寄つて見ると、光も溫氣も少しもないのである、今後は所謂實力勝負である、――一六勝負などと云ふのではない、實力勝負、所謂經濟的の競爭、それは決して十八ヶ月の短日月で落着の付くものでない、百年千年の長年月に亘り、一大戰爭、彼を知り、己を知るは――これは孫子の金言であるが、能く彼を知り、又能く己を知つて戰はずして勝つの兵略、商略、經濟策、政策と云ふものは果して如何、是は今日の我々、又我々のみならず、我々の子孫が十分に熱心に考へて、所謂勝を千里の外に決し、又百歳の後に決せねばならぬことである、それ故に農でも、工でも、或は陸海の運輸交通でも、又金融機關でも、或は敎育事業でも、苟も國利民福の消長に關する事務に從事して居るものは勿論其分を知り、其分を盡し、以て大日本帝國々民たるの權利と義務とを全ふせねばならぬ、併し玆に注意すべき事は、我國は世間で云ふ通りに一方から見れば東洋の英國であるが、又他の一面から見れば我國は慥に東半球の佛蘭西である、伊太利である、又近世に於ける故希臘國である、即ち美術國である、隨分惡口上手の外國人が、日本を色々論評して居るが、その中の似たものを揃へ、違つたものを捨てゝ、所謂惣〆勘定と云ふやうなもの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をやれば、其結果として所謂貸方勘定の方、日本の長所强點の方に現れたものが丁度三點ある、第一は日本人は親切である、カインドである、第二は日本人は奇麗好きである、殆ど潔癖である、而して第三は日本人は美術思想に富むで居ると云ふ算盤が出た、我輩は此親切、潔癖、美術心と云ふことは所謂是れ一の三位一體て、親切と云ふのは感情の方、潔癖と云ふのは身體の美て、美術心は精神美、其各方面の美を包含し、美を意味するものであつて、即ち三位一體、寧ろ三美一體、さう云ふ字を製造して見たい、して見れば十目の見るところ、十指の指すところであつて、果してこの多數の評に誤がないならば、我國は慥に東洋の美術國てある、否世界の美術國である、併ながら俗に云ふ通りに煽てと何とかには乘るべからざるものである、私は我日本が果して眞正の意味に於て美術國てあるか、どうかと云ふ事に就ては多少の疑がないてはない、併ながら疑ふべきを疑ふて、然る後始めて信ずべきを信ずることの出來るのは物の順序てある、私は認める、我國民は一種の美術思想に富むで居る、何故にさうか、之に就ても說を持つて居るが、詳しく云ふ暇がない、短く云つて見れば、我國は所謂天然自然的の美術、或は美術品に乏しい、ダイヤモンドとか、ルビーとか人の手を待たざる出來合ひの美術品は、海にも陸にもないのである、そこで所謂窮乏困難が、國民を玉にして、却て天工を奪ふ程の人工的美術品を爲すに至つた、是は私の說である、易く言へば、之を死地に陥れ、可愛い子に旅をさせるのである、憎まれ子世に蔓るのである、前にも云ふ通り我國は確に一種の美術國である、一種〳〵と諄く云ふようであるけれども、是れ亦一種の論結であつて、我國は眞に總ての意味に於て一大美術國であるかどうかと云ふ事に就ては矢張り疑を存して居る、成程美なるものはあるけれども、所謂我國の美術の美は、可愛らしい、外國て云へばラブリー、或はプリッチー、シャルマン、優美の美、是をもう少し遠慮なく言へば輕薄なる、薄ッペラの、徒に纖巧をこれ事とする美、其美が多數を占めて居る、而して雄に、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とか、崇高とか、壯麗とかいふ、所謂富士山的、アルプス的、ナイヤガラ的の美と云ふものは是は極めて乏しいと云ふ事を自白しなければならぬ、曾て日本にフオンチンと云ふ英國の寫眞師が來た、之が日本を調べて、日本で稍や得難いのは富士山のみ、そこて富士の寫眞を十二三枚揃つた、餘程能く撮つて居る、殆畫の樣なものである、其外或は一方から見ると一種の氣品の高いものだとか、一種變つたものもあるが、是は所謂精神とか、氣韻とか氣品とか云つて先づ云へばエッキス光線的のもので、身も皮も血もない唯骸骨を其處に出したやうなもの、是はスケッチと云ふやうなものて、眞の美術、眞の繪畫とは云へぬと思ふ、即ち他人が日本は美術國であると言ふても、吾々は少し唾を眉毛に附けて聞きたい、自ら顧て其短所を補ふて行かなければならぬと思ふ。

そこて私は一種の僻論を持つて居る、古人は小兒だ、而して我々後世こそ却て大人てある、是は或は口に或は耳にした事てあるが――然るに學術は年と共に榮える、年と共に進むて來るのに、美術は之に反して年と共に衰える、退くと云ふやうな事を往々世間の人が云ふ、是は果して事實であるか、事實ならば其理由は如何、是亦一の問題てある、我輩は後世の人は、先輩の肩に或は頭の上に馬乘りに乘れ、又乘らねばならぬ、勿論古人と云ひ先輩と云ふものは我々が之を貴ばなければならぬ、其恩を忘れてはならぬ、けれども眞に之を貴び、之を德とする所以の途は、古人を馬にして其上にフン跨つて、ドー〳〵と馬上に威風堂々勇氣凜々として益々遠く、愈々高さに登るにある、それが後世の人の權利であり又義務である、殊に我國の古美術と云ふものは前に云ふた通り多少偏した、即ち不具的の美術てあることを思へば、今日は移り變りの世の中てと或る意味の、沐猴にして冠する――猿に冠、高帽子に高足駄、廂髮にリボン、レースに元祿式と云ふやうな、ナカ〳〵混沌、トンチンカン的の世の中てある、舊未だ去らず、新未だ來らず、其時勢に生れた所の美術家、又我々、又我々の後世、即ち其短を補ふてさうして今

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日よりは、古よりは、より完備せる、より完全なる美術を作る、是が美術家なるもの丶任務であらうと思ふ、而して始めて後生畏るべしと云ふ意味が生じて來るのである、斯くあつてこそ美術家として古人に耻ぢず、又已れに耻ぢず、又後世に耻ぢず、而して之によりて我國の特色を現はして、美術の應用を益々盛にして、外國人の眞似ることの出來ない巧妙なるものを作ることならば、二十億の借金の如きは何でもない、一本の筆、一本の鑿を以て一吹きに是を吹き飛ばすことが出來る、眞に國をして富み、民をして豊ならしむる、即ち日本の今後の國是、戰後の經營、其特色の中の最も特色なるものを押立て、而して國としての天職、使命を完ふするより外仕方がない、其點に於て美術、美術工藝、美術産業の其源である所の日本の美術家の任務は極めて大なるものであると思ふ、それが日本に於ける美術と經濟の關係だと思ふ、

蛇の如き長い話の上に蛇足を加ふるの要を認めぬが尚一言したいことがある、私は今迄主として美術の我國に於ける重要なる所以を説いて、美術家に對する希望を述べ來つたが、獨り美術家のみならず、一般人民が美術を尊重するの念がなければ美術は發達するものでない、西洋にはペーブル、ビハインド、ガンといふ言葉がある、大砲の後ろにある人民といふことである必ずしも大砲を打つ人ばかりが大砲を打つのではない千里も萬里も海山を隔てた後ろに居る所の人民が、其聲援を與へ後援となつて砲術方をして其術を盡さしめるといふのである。豈獨り大砲の後ろの人民のみならんや、美術家の繪の具皿の後ろ、カンバスの後ろにあつて、國民が援助奬勵をなすにあらずんば眞正なる美術の發達を見ることがなかく難いのである、然るに今日我邦の人が果して我邦に於ける美術の價値及び位置を自覺して居るか、私は多少、ではない大なる疑を持つて居る、疑ではない、疑ふまでもなく自覺して居らぬ。世の富豪殊に暴富者の爲す所を見よ、流石は美術國の人民だから、少しく餘裕が出來て來ると、忽ち一種の美術心、似而非なるものかも知れぬが、それが

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

發動して來る。其發展の順序は略ぼ似て居る。先づ其邸宅を美にする、其次に書畫董骨を玩ぶ——玩ぶといひたい、何となれば、其美を覺り其美を愛して而して之を自ら爲すに非ずして、多くは所謂附和雷同して、交際的に、甚しきに至ては金儲的に之を賣つたり買つたりする。而して其玩ぶものは何かといふと、殆んど十中の八九までは器物ならば古器物、書畫ならば古書畫、而して其古器物古書畫は多くは擬せ物、いかさま物、彼等が新作品、新作物に對する冷淡さ加減といふものは實に驚くの外はない。新らしいものといつて彼は必ずしも悉く之を好まないのではない、疊は新らしい方が宜しいと云ふが、疊ばかりではない何とかも新らしいのが宜しい、其爲には生殺與奪の權を振り廻すなんかと云ふ事もある、寫眞は新らしいのが宜いだらうが、美術になると誰も彼も人眞似して、唯古いものが宜いと云ふ、なぜかと云ふと古いから宜い、所謂デツド、アート、死んだ美術に心醉して居る、死者をして死者を葬らしめよと云ふことを彼等に一言したい、

彼等は活きたる所の美術、倒れんとする所の美術、之を鼓舞し、之を奬勵すると云ふ事は殆どしない、これをする勇氣も義氣も俠氣もない、古物なら二束三文の値打しかないものに千金萬金を投ずる、所謂弱い者いじめ、緣日の植木屋同然、安く値切り、之をこぎつて、さうして竟に之を買收せずむば止まずと云ふ有樣、其事の眞僞は知らねが、何時か新聞に見ると白馬會に出て居つた和田三造君の野馬の畫、百五十圓とかいふもの、それを某侯が五十圓に値切り倒して御買上になつた、かゝる有望なる青年畫家といふものは世の富豪者は宜しく之を奬勵せねばならぬ、之を窘め散らかして、之に所謂冷たいブランケットをオツ被せるなんと云ふ事は、決して爲すべからざることである、然るに新聞には右のやうなことがある、其眞僞は重ねて云ふ、私は知らないのみならず、新聞にあることは寧ろ往々誤を傳へることが多いと云ふことを、私は知つて居る、併ながら所謂火のない所に煙立たずて、之に似たやうな事があつたらうと思ふ、是は必ず松○侯てしたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼ばかりではない、此の如き例は所謂枚擧に遑あらず、それで私は今一つ實例を上げたい、數年前太平洋畫會に未亡人といふ水谷君の書いた畫が出て居つた、私の友人某、是は米國に居て商業をやつて居る、是が頻に賞めて買つて行つた、同じく百五十圓であつたが、其人は百五十圓では高くない所か安過ぎると思ふ、誠に結構なものだ、自分之を家に置かうと云ふのではない、米國に行つて賣つて見たいと思ふ、であるからして誠に申惡いが、假りに百圓で約定して貰ひたい、尤も立派なものだから、彼地に持つて行つたら相當に賣れるに違ひない、賣れたらば勿論元價の割合で更に計算をする、宜しいと云ふ事で、持つて行つた、翌年歸つて來て、實に非常な評判で好き價で賣れたとて約束の通り五十圓をやりました、前約の通り之を畫家に贈つた、私は之を聞いて喜むだ、是は近頃の美談だと思ふ、青年美術家と云ふ者は斯くまでに奬勵すべきものであると思ふ、それは松〇〇〇といふ人、角力の好きな人で或新聞に角力を觀る爲に米國から歸るのだと書いてあつたが、荒岩贔負で、曾て荒岩に眞珠の化粧廻を贈つた人です、ところが此松〇〇〇と云ふ者は商人である、商人たる松〇氏にして此の如し、而して貴族で屈指の富豪家たる松〇侯にして彼の如し、必しも人の話でない、人を離れて今日の日本の社會を論じたい、實にトンチンカンの話、松〇、松〇何ぞ其の名の相似て而して其心事の相距る遠きや、殆ど雪と墨との別ではないか、而して其商人の心却て貴族的、貴族は却て商人的、素町人的と云はねばならぬ、若しも事實誤つて居れば取消すだけの事、果して此の如き事ありとすれば、日本の社會と云ふものは美術家には誠に冷淡なる社會であることを嘆ぜねばならぬ。

私は一方には美術家に望み、一方には一般社會に望み且つ責めたのであるが、然し美術家たるものは、人の己れを知らざるを咎めず、己れの未だ到らざる處、及ばざる所を責め、一本の筆、五色の繪の具を以て彼の赳々たる武夫の功名手柄以上の光彩を發揮し、我國をして獨り武術の日本たるのみならず、眞正の意味に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て世界の美術國たる日本たらしめんことに盡力せられむことを希望する。

（完）



次號豫告

次號の本欄には本號に間に合はざりし山田法學士の長論文及び桑田法學博士の論文等掲載せらるべし。

變な女

楚人冠 杉村廣太郎

一、沒落

此の夏、入澤醫學博士を相州葉山の別莊に訪ねた歸途、逗子の停車場迄來ると、七八歲の女の兒の、其の父らしい三十四五の男に背負はれたのが、來合せた。痛はしや、其の女の兒といふのは、萎びたといはうか、へしやげたといはうか、誠に見る影もなく瘦せほうけて、片手には淺田飴か何かの鑵を左も重さうに持つてゐる。之がプラットホームに入つて、親の背から下されたのを見ると、背は屈まり腰は曲んで、辛く踏みゝめた脚は、ゆら〳〵と左ながら宙に浮いたやう。唯ぼんやりと光のない眼て、父の顏を見上げたきりて、口も利かねば身動きも元よりしない。僕は見るに見兼ねて、思はず顏を背向けた。僕に病身の娘が一人ある故か、僕は斯な小兒を見る

毎に、何となく胸が一杯になつて、我知らず涙ぐんで來る。見まいと思つても、つい目が其の方に向く。思ふまいと思つても、始終頭に其の俤が浮んで、時には夜一夜其の夢ばかり見ることがある。而して斯なとの有つた日か、又は其の翌日には、氣のせいか、乾度碌でもない話を聞かされるに定つてゐる。

歸りは、久しぶりに圓覺寺の舊知を尋ねる積で、鎌倉で汽車を下りた。鶴岡八幡宮の後手から、小袋坂を通つて、山の内に差蒐ると、はや圓覺寺の前の杉林が見える。日の暮方とは言ひながら、時は八月の中旬、此處迄てく／＼と歩いてくる中に、身は汗みづくになつて、息もつけぬ程の暑さ。兎も角も一休みしてと思つて、とある茶店を覗き込めば、僕より前に書生が二人奥の方にゐて、其の中の一人が、しげ／＼と僕の顔を見てゐた。何も見たやうな顔だが、誰だか思ひ出せぬ。見たやうなどころか、餘程親しい顔である、決して昨今の顔ではない。はて誰やらであつたなと思つてゐる中、彼は突如として、『卿は杉村君でありませんか』と言葉をかけた。『やッ御無沙汰』と、僕は我知らず答へたが、實の所、何時から其の所謂御無沙汰をしてゐる人であつたか、まだ考がつかなかつた。彼は白絣の浴衣に細い三尺帶を〆めて、筒の煙草入を腰にさしてゐる。何見ても、毎年夏休に、參禪の爲とて、此の邊へ寄つて來る書生としか見えない。

其の中茶店の主婦が、何かした拍子に、岸さん何やら斯やらといひ出した。成程、彼奴は岸だ。越前の人、岸政次だ。と思ふと、彼の人並より長く飛び出た咽佛が目についた。いや岸ならば、僕の俄に思ひ出せなかつたのも無理でない。彼ならば、斯る處に斯る姿で斯る折に出會ふべき筈はないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

僕が初めて彼と相識つたのは、明治二十九年の夏、遠州の新居で佛敎夏期講習會の開かれた時であつた。何でも二川の觀音から、豐橋へ一所に遠足に出かけたことがある、と覺えてゐる。彼は其の時千葉の第一高等學校醫學部の學生であつた。其の後一兩年經つて、彼は病氣に罹つて、療養旁々坐禪の爲に鎌倉へ來て居つた。僕と親しく往來したのは其の時である。能くづけ〳〵と無遠慮に物を言ふ、無愛想な男であつたが、併し腹の中は眞正直な親切な人であつた。其の後病氣が全く治つて、故郷に開業してゐる中、急に思ひ立つて、耳鼻咽喉科の研究の爲に上京したとて、僕を尋ねて呉れたことがある。夫から歸つて約十年。時々の人の噂に聞けば、彼は益々强壯になつて、醫者は流行る、金は出來る、盛名儕輩を壓して、すばらしい勢であるとのことであつた。だから、岸と聞けば、僕には直ぐ、五六の書生に先生先生と侍かれて、自用車で出入するモーニング、コート姿の病院長が思ひ浮ぶ。今見るやうな見すぼらしい樣では、其の人と聞いても、其の人と信じられぬ位である。

『避暑ですか』と、僕は平凡なことを聞いた。『いや、ずッと此方に居るンです』と彼は言ふ。元氣は裝つてゐるが、調子は沈んでゐる。やがてさも嘲けるやうな笑を含んで、『實は坊主になる積で、東慶寺の老師(釋宗演師を指す)に御相談に出たのですが、少し待つたが宜からうと言ふお話なので、其の儘になつてゐるのです』と言つた。言葉の端々如何にも仔細ありげには聞えるが、人通りの多い茶店の店頭では、立入つたことも聞けぬ。僕は故さらに話頭を外して、前に彼と此の鎌倉で會つたのは何年前であつたかの、其の後身體は全然よくなつたかのなど〻聞いたが、其のうち彼の調子は何時しか昔の岸に立歸つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於て世界の美術國たる日本たらしめんことに盡力せられむことを希望する。

（完）



次號豫告

次號の本欄には本號に間に合はざりし山田法學士の長論文及び桑田法學博士の論文等掲載せらるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

變な女

楚人冠 杉村廣太郎

一、沒落

此の夏、入澤醫學博士を相州葉山の別莊に訪ねた歸途、逗子の停車場迄來ると、七八歳の女の兒の、其の父らしい三十四五の男に背負はれたのが、來合せた。痛はしや、其の女の兒といふのは、萎びたといはうか、へしやげたといはうか、誠に見る影もなく瘦せほうけて、片手には淺田飴か何かの鑵を左も重さうに持つてゐる。之がプラットホームに入つて、親の背から下されたのを見ると、背は屈まり腰は曲んで、辛く踏み〆めた脚は、ゆら〳〵と左ながら宙に浮いたやう。唯ぼんやりと光のない眼で、父の顔を見上げたきりて、口も利かねば身動きも元よりしない。僕は見るに見兼ねて、思はず顔を背向けた。僕に病身の娘が一人ある故か、僕は斯な小兒を見る

毎に、何となく胸が一杯になつて、我知らず涙ぐんで來る。見まいと思つても、つい目が其の方に向く。思ふまいと思つても、始終頭に其の俤が浮んで、時には夜一夜其の夢ばかり見ることがある。而して斯なとの有つた日か、又は其の翌日には、氣のせいか、乾度碌でもない話を聞かされるに定つてゐる。

歸りは、久しぶりに圓覺寺の舊知を尋ねる積で、鎌倉で汽車を下りた。鶴岡八幡宮の後手から、小袋坂を通つて、山の内に差蒐ると、はや圓覺寺の前の杉林が見える。日の暮方とは言ひながら、時は八月の中旬、此處迄てく〳〵と歩いてくる中に、身は汗みづくになつて、息もつけぬ程の暑さ。兎も角も一休みしてと思つて、とある茶店を覗き込めば、僕より前に書生が二人奥の方にゐて、其の中の一人が、しげ〳〵と僕の顏を見てゐた。何も見たやうな顏だが、誰だか思ひ出せぬ。見たやうなどころか、餘程親しい顏である、決して昨今の顏ではない。はて誰やらであつたなと思つてゐる中、彼は突如として、『卿は杉村君でありませんか』と言葉をかけた。『やッ御無沙汰』と、僕は我知らず答へたが、實の所、何時から其の所謂御無沙汰をしてゐる人であつたか、まだ考がつかなかつた。彼は白絣の浴衣に細い三尺帶をしめて、筒の煙草入を腰にさしてゐる。何見ても、毎年夏休に、參禪の爲とて、此の邊へ寄つて來る書生としか見えない。

其の中茶店の主婦が、何かした拍子に、岸さん何やら斯やらといひ出した。成程、彼奴は岸だ。越前の人、岸政次だ。と思ふと、彼の人並より長く飛び出た咽佛が目についた。いや岸ならば、僕の俄に思ひ出せなかつたのも無理でない。彼ならば、斯る處に斯る姿で斯る折に出會ふべき筈はないのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から其の所謂御無沙汰をしてゐる人であつたか、まだ考かつかなかつた

を〆めて、筒の煙草入を腰にさしてゐる。何見ても、毎年夏休に、參禪の爲とて、此の邊へ寄つて來る書生としか見えない。

其の中茶店の主婦が、何かした拍子に、岸さん何やら斯やらといひ出した。成程、彼奴は岸だ。越前の人、岸政次だ。と思ふと、彼の人並より長く飛び出た咽佛が目についた。いや岸ならば、僕の俄に思ひ出せなかつたのも無理はない。彼ならば、斯る處に斯る姿で斯る折に出會ふべき筈はないのである。

僕が初めて彼と相識つたのは、明治二十九年の夏、遠州の新居で佛教夏期講習會の開かれた時であつた。何でも二川の觀音から、豊橋へ一所に遠足に出かけたことがある、と覺えてゐる。彼は其の時千葉の第一高等學校醫學部の學生であつた。其の後一兩年經つて、彼は病氣に罹つて、療養旁々坐禪の爲に鎌倉へ來て居つた。僕と親しく往來したのは其の時である。能くづけ〳〵と無遠慮に物を言ふ、無愛想な男であつたが、併し腹の中は眞正直な親切な人であつた。其の後病氣が全く治つて、故郷に開業してゐる中、急に思ひ立つて、耳鼻咽喉科の研究の爲に上京したとて、僕を尋ねて與れたことがある。夫から歸つて約十年。時々の人の噂に聞けば、彼は益々强壯になつて、醫者は流行る、金は出來る、盛名儕輩を壓して、すばらしい勢であるとのことであつた。だから、岸と聞けば、僕には直ぐ、五六の書生に先生先生と侍かれて、自用車で出入するモーニング、コート姿の病院長が思ひ浮ぶ。今見るやうな見すぼらしい樣では、其の人と聞いても、其の人と信じられぬ位である。

『避暑ですか』と、僕は平凡なことを聞いた。『いや、ずッと此方に居るンです』と彼は言ふ。元氣は裝つてゐるが、調子は沈んでゐる。やがてさも嘲けるやうな笑を含んで、『實は坊主になる積で、東慶寺の老師（釋宗演師を指す）に御相談に出たのですが、少し待つたが宜からうと言ふお話なので、其の儘てな

た。「いや君、前に此處にゐた時は、身體に故障がある許りで、他は一切無事だッたが、今日は身體が無事なだけで、名譽も財産も地位も、皆亡くなつてゐるんだ」と慨然として、左ながら物を投げやるやうな風に言つて了つた。

斯う聞くと齊しく、忽然として逗子で見た女の兒の姿が、まぢ〳〵と僕の目に浮んだ。

二、强姦

丁度其の頃、米國から歸つたばかりの鈴木大拙君が東慶寺にゐるといふので、兎も角もと、岸と二人で、尋ねて見た。大拙君は、一昨年僕が倫敦に居た時、遠く大西洋を隔てゝ、一二度手紙のやり取りをしたことはあるが、親しく相見るのは、十有餘年の昔、京都の建仁寺で分れたきりである。隨つて談は大分あつた。

やゝ程經て、大拙君が藥石にと坐を立つた後で、僕と岸とは此に初めて差向ひとなつたので、岸は之を機會に、極めて手短かに、其の沒落して今日に至つた次第を語つた。彼れの語る所は、事毎に打驚かるゝことばかり。僕は、明治の昭代に、猶且斯の如き怪事があるかと、憤らざるを得なかつたのである。

岸の言ふ所に據れば——

彼は去る三十七年の七月、其の鄉里なる越前某の町で開業したが、幸と町内の氣受もよく、患者も相應に集つて、間もなく、近村へ出張所の一つも設けるやうになつた。所が越えて二年、三十九年の十二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月に至つて、或日突然警察から呼出を受けた。行つて見ると、强姦の告訴が出てゐるから一應取調べるとの署長の話だ。何でも十一月の末とかに、右の出張所へ來た婦人の患者を、岸は内診に托して、强姦したとか何とかいふのであつたさうな。岸は身に覺えのないことゝて、丸で寢耳に水、何が何やら見當がつかぬ。一時は茫然と呆氣に取られて了つたが、兎も角も署長の問に應じて、答へるべき限りのことは答へて、引下つた。餘りの馬鹿臭さに、歸途は知合の人を尋ねて、斯く〳〵の次第で、今しも强姦の取調を受けて來た所だと話すと、一同は手を拍つて大笑をした上、中には「岸さんも大分開けて來たわねえ」と冗談をきく婦人さへあつた。

斯な根も葉もないことが、一生の大事にならうとは夢にも思はなかつた岸は、取調を受けた後も、格別氣にはとめてゐなかつた。所が其の年も暮れて、翌四十年の一月の末、又もや岸は呼び出されて、今度は、豫審廷で有夫姦の被告として取調を受けた。相手の女は前の時と同じ人で、村の相應な百姓の妻女、年は二十八、子供が三人ある、腦が惡くて、兩三回岸の診察を受けに行つてるうち、岸は其の患ふる所子宮に在りと稱して、或日强て内診を遂げた。女は内診中恥かしさに兩手で眼を覆うてゐたが、ちと樣子が違ふと思つて、眼を開いて見ると、旣に强姦されて了つてゐたのだといふ。其處で强姦の告訴をして見たが、抵抗の跡が見えぬとて、不起訴となつたので、今度は改めて有夫姦となつたとある。——成程、そんな女は診察したことがある。併し、自分は婦人科の醫者でもなし、婦人科の醫者が使ふやうな器械も持たず、無論内診なんどは唯の一回もした覺はない。況や餘事は知らず、女の事に關しては、昔か

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。「いや君、前に此處にゐた時は、身體に故障がある許りで、他は一切無事だッたが、今日は身體が無事なだけで、名譽も財産も地位も、皆亡くなつてゐるんだ」と憮然として、左ながら物を投げやるやうな風に言つて了つた。

斯う聞くと齊しく、忽然として逗子で見た女の兒の姿が、まざ／＼と僕の目に浮んだ。

二、強姦

丁度其の頃、米國から歸つたばかりの鈴木大拙君が東慶寺にゐるといふので、兎も角もと、岸と二人で、尋ねて見た。大拙君は、一昨年僕が倫敦に居た時、遙く大西洋を隔てゝ、一二度手紙のやり取りをしたとはあるが、親しく相見るのは、十有餘年の昔、京都の建仁寺で分れたきりである。隨つて談は大分あつた。

やゝ程經て、大拙君が藥石にと坐を立つた後で、僕と岸とは此に初めて差向ひとなつたので、岸は之を機會に、極めて手短かに、其の沒落して今日に至つた次第を語つた。彼れの語る所は、事毎に打驚かるゝとばかり。僕は、明治の昭代に、猶且斯の如き怪事があるかと、憤らざるを得なかつたのである。

岸の言ふ所に據れば――

彼は去る三十七年の七月、其の鄕里なる越前某の町で開業したが、幸と町内の氣受もよく、患者も相應に集つて、間もなく、近村へ出張所の一つも設けるやうになつた。所が越えて二年、三十九年の十二

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月に至つて、或日突然警察から呼出を受けた。行つて見ると、強姦の告訴が出てゐるから一應取調べるとの署長の話だ。何でも十一月の末とかに、右の出張所へ來た婦人の患者を、岸は内診に托して、強姦したとか何とかいふのであつたさうな。岸は身に覺えのないことゝて、丸で寢耳に水、何が何やら見當がつかぬ。一時は茫然と呆氣に取られて了つたが、兎も角も署長の問に應じて、答へるべき限りのことは答へて、引下つた。餘りの馬鹿臭さに、歸途は知合の人を尋ねて、斯く〳〵の次第で、今しも強姦の取調を受けて來た所だと話すと、一同は手を拍つて大笑をした上、中には「岸さんも大分開けて來たわねえ」と冗談をきく婦人さへあつた。

斯な根も葉もないことが、一生の大事にならうとは夢にも思はなかつた岸は、取調を受けた後も、格別氣にはとめてゐなかつた。所が其の年も暮れて、翌四十年の一月の末、又もや岸は呼び出されて、今度は、豫審廷で有夫姦の被告として取調を受けた。相手の女は前の時と同じ人で、村の相應な百姓の妻女、年は二十八、子供が三人ある、腦が惡くて、兩三回岸の診察を受けに行つてるうち、岸は其の患ふる所子宮に在りと稱して、或日強て内診を遂げた。女は内診中恥かしさに兩手で眼を覆うてゐたが、ちと樣子が違ふと思つて、眼を開いて見ると、既に強姦されて了つてゐたのだといふ。其處で強姦の告訴をして見たが、抵抗の跡が見えぬとて、不起訴となつたので、今度は改めて有夫姦となつたとある。——成程、そんな女は診察したことがある。併し、自分は婦人科の醫者でもなし、婦人科の醫者が使ふやうな器械も持たず、無論内診なんどは唯の一回もした覺はない。況や餘事は知らず、女の事に關しては、昔から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不具者でないかと、友人から怪まれた位に、品行方正を以て誇つてゐた岸である。夫が内診に托して、强姦などゝは、出鱈目をいふにも程がある。べらぼうな話だと、岸は思つた。

よもやと思つてゐる中、豫審の決定は有罪となつて、公判に回はされた。公判では何かといふと、灰吹から蛇の出る譬、さしも岸が初手から馬鹿にしきつてゐた此の被告事件は、恐ろしいかな、公判でも有罪となつて、岸は重禁錮八個月の宣告を受けた。

此に於て、岸は俄かに狼狽し初めた。今迄はまさか〳〵と油斷してゐたが、此の樣子では、結局何な目に遭ふか知れたものでない。我が潔白は天知る、地知ると許りすましても居られず、岸は一面控訴の申立をすると同時に、一面には俄に證人の喚問を頼むやら、證據を蒐めるやら、大騷ぎに騷ぎ回つた。

第一、此の事件に對する犯罪の證據といふは、唯被害者と稱ふる女自身の證言ばかりで、其の外にとては、何等之を確むべき直接間接の證據といふものがない。其の上、高い聲では言はれぬが、被害者が其の辱めを受けたといふ樣子が、如何にも是れ事實にありさうにもない所であつて、現に斯いふ態度を以てしては、生理學上斷じて姦淫などの行はるべきものでないといふ某醫學博士の鑑定書をさへ、岸は持つてゐた。

だから、控訴では、本人も無論無罪と信じ、辯護士も亦斯く信じてゐたのみか、東京で名判官の聞え高い某判事なども、此の公判始末書を讀んで、東京なら慥に無罪になる所だと言つた位であつた。――夫が又如何にぞや、運惡くも其の頃有罪判事の名法曹界に聞えた某君の手にかゝつて、敢なくも控訴棄却

と相なつた。

岸は叶はぬ迄もと、遂に大審院に上告した。上告はしたが、大審院での爭點は唯有夫姦の被告の可分不可分といふ問題に止つて、法律は果して姦夫姦婦の一人のみを罰して他を免し得べきや否やといふ問題を決するに過ぎなかつた。夫が被告可分と判決せられて、岸が最後の死物狂ひも、遂に見事に失敗に歸した。今は何するとも出來ぬ。岸は怨を吞んで、獄裏の人となるより外はなくなつた。

裁判は確定した。岸は遂に八個月の重禁錮に服したのである。

折ふし、大拙君が食事を終へて歸つたので、談は此で途切れた。いづれ委しいことは其の內重ねてと契つて、僕は飄然と東慶寺を出た。日はとツぷりと暮れて、空は所がらなる鎌倉山の星月夜、星斗闌干として杉の木立の間に輝いてゐる。——嗚呼併し、汝が光明も、まだ〳〵なか〳〵此の世には輝き足らぬと、僕は思つた。

三、一件書類

其の後四五日して、岸は一件書類を僕の方迄送つて來た。不起訴となつた强姦被告事件の方には、署長の意見書、告訴調書、各種證人參考人の聽取書。又有夫姦被告事件の方には、檢事の豫審請求書から始つて、被告や證人の訊問調書、現場の檢證調書、豫審決定書、公判始末書なんど、殆ど尨然たる大册をなしてゐる。僕は逐一之を讀んで見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幸にして從來裁判所の事などには緣の遠かつた僕のことゝて、僕は生れて以來、初めて斯な書類を讀んで見たのである。ちと餘談には渉るが、僕は少し新聞記者の立場から見た一件書類觀といふものを書いて見たい。一言にして之を覆へば、いやはや實に甘いものである。

先づ此等の書類には、アテ字がある、誤字がある、雅俗入り亂れた希世の珍文がある。殊に一字一句の使ひ樣によつて、事件の根本問題を決すべきほどの問答さへ、輕々に筆を下して、些の苦心を費した跡を認めぬ。夫れ同じ「知りません」の一語でも、白ばッくれていふのと、言句に詰つていふのと、きッぱりと言ひ放つたのとは、夫々意味が違ふ。僕等なら其の違つた意味を明かにしたいばかりに、或は前後の關係を叙し、或は問ふ者考ふる者の意氣込を說き、或は語勢の强弱遲速を寫して、猶且戰々兢々として、見たるが儘の光景を歷々と讀者の眼に映ぜしめ得ざるを恐るゝ者である。夫をぶッきらぼうに綾もなく澤もなく書き流して、果して能く眞個の活躍した光景が傳へらるゝだらうかと、僕は疑つた。謂ふこと勿れ、文書は第二段、裁判の骨子は審理に在りと。公判に關係した裁判官辯護士が、先づ事件に對する大體の方針を定むるのは、豫審調書に依るのではないか。控訴裁判に關係したる裁判官辯護士が、當該事件に關する知識を得るのは、主として公判始末書其の他の書類に依るのではないか。人間を前に置いて、其の顏色を見、其の態度を見、其の言語を聽いてさへ、尙事件の眞相をつきとめ兼ぬる世の中に、修辭の色どりなき、生氣索然たる、所謂一件書類なるものが、どれほど迄生きたる人間の目的決意感情を表はし得やうぞ。斯いふ書類を基礎の一として、斷案の料に供するとは、流石に手慣れた仕事とは言ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ながら、えらいものだと、僕は感心した。

併し此の僕等新聞記者の立場から見ては、叙して叙し盡さゞるが如き書類の中にも、讀んで見れば、成程大分變なとがある。第一、女は兩手で眼を覆うてゐる間に、何時の間にやら、旣に强姦せられて了つてゐたのだとある。第二に、寢臺の上に仰臥して、兩脚を――いや之はちと此處へ書き惡い。が併し斯な樣では、到底强姦などの行はれるものでないと、篤學を以て聞えた某醫學博士が鑑定してゐる由は、前に述べた。岸も亦之で姦淫罪が成立つとは、全く醫學を無視した裁判だと憤つてゐる。僕は此の最も重要にして、且最も讀者の好奇心を挑發し得べき點を、此處に明に叙し得ざるを憾とする。第三に、强姦されたといふ女が、聲も立てず、助も呼ばず、又別に小言も言はずして、徐かに宅へ歸つたとなつてゐる。第四に、檢證調書によれば、寢臺は藥局を兼ねた診察室の一隅に在つて、診察室とは幕一重隔てたきり、藥局の後は板壁を隔てゝ患者溜所、寢臺の後は唐紙一枚で直ぐ醫員控所となつてゐる。而して、其の時此等の室に居合せた者は、誰一人被告に不利な證言を與へて居らぬ。第五に殊に可笑しいのは、强姦されたと自任してゐる所の女が、强姦されたといふ日から五六日の後、平氣で自身藥を貰ひに來てゐる。要するに、事件の唯一の證據は唯被害者の陳述だけである。岸の平生を知れる僕には、何しても岸に斯な不心得なとがあつたとは思はれぬ。

夫ならば、此の女こそ誠に變な女である。何が爲に己の恥も構はず、斯な根なしごとを言ひ立てゝ、人を陷れやうとしたものだらうか、夫が頓と合點の行かぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四、變な女

相當の資産ある家の妻女だといふから、無論金を強請るなどいふ意味ではなかつたらしい。精神に異狀があつたのかといふと、さうでもない。さては、此の女初から岸に惚れてゐて、戀の叶はぬ意趣晴しにてもやつたのかと思つたが、そんなとはないと岸は打消した。

尤も、此の女は此の邊て名うての洒落者て、岸の出張所へ來た時も、心ゆくばかりに盛裝して、來る毎に變つた衣物を取りかへてゐたといふ。來ては、藥局の者と、人の妻たる者に似げのない冗談を言ひ交したといふ。今の家へ嫁がぬ前には、隨分如何はしい風評の立つた女だともいふ。

更に切り込んだ人の噂に據ると、彼は某駐在所の巡査と怪しい中であつて、或夜其の密會の現場を本夫に認められた。認められた時、言譯に困つて、出任せに岸の一件を造り上げ、さて今しも之を告訴する手續に就て、件の巡査と相談中てあつたとか何とか、言譯をしたのが、そも〱今回の事の始りだともいふ。

併し此の女の御亭主なるもの丶證言に據れば、妻は佛敎の篤信者てあつて、品行方正てあつて、夫には能く事へて、子供には慈愛の心の深い者てあつたとある。「讃美せよ、アーメン」と言ひたくなる。

五、岸

女の本心なるものが、僕には分らぬが、此の事件の薪に油を注いだ事情に、慥に一つある。岸は元來木で鼻をくゝつたやうな男で、氣心を知つた患者や友人にこそ、評判は宜かつたが、其の筋の役人共には、憎まれ切つてゐた。之が爲に、此の事件に就ては、郡長や署長や檢事や豫審判事の間に多少の連絡があつたとさへ傳へられてゐる。

岸は物堅い男で、今年三十何歳に及ぶまで、まだ一たびも婦女子を玩んだことはない位の堅造である。斯いふ男に限つて、兎角品行方正を得意がつて、何處やらに灰汁が殘つて、始終ごつ〳〵としたがる者だが、岸は正しく夫であつた。彼が言語動作は、慥にリフワインメントを缺いてゐる。怒らせなくてもすむことを、彼は怒らせるやうにいふ。快く言ひ聞かせ得べきことを、岸が言へば不快に聞える。自分は輕妙な冗談の積ていふことにも、其の實は澁のぬけない皮肉が多い。此の調子で、彼は傳染病患者の屆出を迫つた巡査を惡罵し、嫁の世話をしかけた郡長を冷かし、さては下らぬ理窟を警察署へ持ち込んで、署長と喧嘩したことなどがある。

夫のみならず、一體岸は人相が惡い。如何にも意地の惡るさうな顏をしてゐる。之が得意氣に調子に乘つて喋り出すと、小鼻を膨らせて、上唇を尖らせて、而して額に猛惡な深い竪の皺を寄せる。此の竪の皺が寄る時、兩眼の瞳がぐいと坐つて、如何にも毒々しい恐い顏になる。斯な顏で彼な憎さげな口を利いては、先づ大抵の者は中てられて仕舞ふ。郡長や署長が、彼を憎むに至つたのも無理ならぬ。憎い奴だからやッつけろ位のことは、或は恐る、語り合つたかも知れぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一方では斯く憎まれてゐたが、郷黨の間では隨分もてた。學問も新しい。技術も進んでゐる。眞正直な唐竹を割つたやうな男である。身持が正しくて、曾て忌はしい風評を立てられたとはない。夫に强い者には隨分突慳貪につツかゝるが、同輩や目下の者に對しては、情が深くて親切である。だから岸々と、至る所に持て囃された、

彼があらぬ嫌疑を蒙つたとき、彼を識れる者は誰一人之を眞としなかつた。だからさしもの事件に對して、唯の一行の記事も、土地の新聞には出なかつた。裁判の確定する迄、一たびも拘禁せられなかつた彼は、平生の通り診療の事に從うて、門前常に市を成した。初審の辯護士は氣の毒だとて、一切自費で控訴の手續をして呉れた。彼が入獄中は、監獄醫も教誨師も非常の同情を彼に寄せて、殆ど囚人の期し難い優遇を受けた。刑期滿ちて獄を出づるに及んでは、有志が盛大なる慰藉會を開いた時、土地の藝妓が總勢すぐつて盡く自花を焚いて出た。一旦取り上げられた岸が開業免狀の再下附を、郡の有志先づ其の筋に嘆願し、次いで郡醫會の決議を以て、再び之を願ひ出た位である。——唯不幸にして、免狀は今に再下附とならぬ。

六、自殺

或日岸は突然僕を倶樂部に尋ねて來て、前日東慶寺で語り遺した節々の、一件書類の中にも見えぬものを語り足した。——九月の初の殘暑の嚴しい日であつたと記憶する。岸は白絣の浴衣に黒絽の羽織を被

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて、前に見た時ほどに見すぼらしくはなかつた。

色々の物語彼此三時間もあつた後、彼は悵然として、其の地位の竟に回復すべからざるを語つて、「もう生れ變つた氣でゐます」と意味ありげに言ひ放つた。斯なとは斯な身の上の人の能く口にする所だが、此の時は特に僕の耳に異樣に響いた。問ひ返さうとして顏を上げる拍子に、先方は夫と知つたか、問はるゝを待たずして、「實際僕は一度死んて來たのてす、精神的にも、肉體的にも、」と附け加へた。實にも彼は一たび鬼籍に入つて來たものださうな。といふのは、彼が控訴に破れ、上告に破れて、萬事此に休すと見た時、彼は遂に毒を仰いて、自殺したのてある。

忘れもせぬが、四十年の十一月七日、彼は愈々上告棄却の電報に接した。午前中は故さらに平氣て、いつもの通り患者を診察しておいて、さて其の午後、不快と稱して、二階の一室に籠り、先づ心靜かに書置を二三通認めた。盛る所の毒藥は鹽酸モルヒネ零コムマの五。之を注射器に取つて、下腿の皮下にぐッと射した。僕は醫者の家に育つて、幼い時から聞いてゐたが、元來モルヒネ自殺といふものは事頗る面倒なもので、〇、〇X位ても死ねるが、夫より少くては、睡くなる許りて、生命に障らぬ。さりとて無暗に多量に服んだ所が、吐いて〱腸迄も吐き出す位に苦しむが、苦しむ許りて矢張り死ねぬ。偶ま分量を整へて服んだにしても、呑んだのでは、運惡く(?)吐して了ふとがある。岸は流石に醫者の心掛け、萬全の策を取つて、之を皮下に注射したのである。之ならば直ぐ睡氣を催して、睡つてゐるうちに、其のまゝ死んて了ふ。苦しくも何ともないといふ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

注射の後、岸は直ぐ蒲團を被つて寢た。寢た後は、丸で何も覺えなかつた。正しく身は半ば死んでゐたのである。夫から二日經つて、岸は眼を覺した。何時しか助けられてゐたのである。

後て聞くと、岸が臥床に入つて、物の三十分と經たぬ頃、變な咳拂の聲が下に聞えた。折節食事中てあつた代診が、何だか不思議な咳の仕方と怪んで、あわてゝ二階に駈け上つて見たらば、注射器が枕許に轉つてゐた。代診は夫と察した。乃ち急ぎ注射器の用意を整へて、所構はずカムホルの注射を施した。何でも初めて注射を試みた時は、岸が夢中て蒲團の中へもぐり込んて、逃げやうとしたので、代診は大膽にも先づ、肩に一本突ッ込んださうな。能く斯な思ひ切つたとが出來たと、本人も後て驚いたといふ。

此の氣轉の利いた代診氏の働きによつて、辛く玉の緒を繋ぎとめたが、岸は半睡半醒の狀態て、二日を送つた。其の間には、一方て再三再四の注射に依つて元氣の亢奮を謀り、一方では枕邊に寄つた親戚故舊が、絕えず患者を醒し起して眠らせぬとに勸めた。カムホルは解毒の効のあるものてないが、モルヒネの中毒は、睡らせさへしなければ、一定の時間が經過する中に、自然に酒の醉が醒めるやうに醒めて了ふのである。岸は一切丸て死人同樣、一時は呼吸が一分間二回位になつて、ほうッと大きな息を一つした切り其のまゝ絕えて、夫がもう引取つて了つたかと見てゐる中に、又ほうッと吐くやうなともあつたといふ。

「樂な死方はモルヒネに限る。今度君が死ぬなら、僕がちやんと分量を合せて注射して上げませう」と岸は淋しげに笑つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七、流浪

自殺の志を果し得ずして、岸は遂に悶々の裡に、囹圄の人となつた。

苦役八個月の後、娑婆に歸れば、嘗て貯へた一二萬の金は、訴訟の費用に粉も灰もなくなり、剩さへ其の間に父は死し、弟は死して、母は親戚の人の世話になつてゐる。之さへあればと思ふ醫術開業の免狀は、取り上げられて了つて、彼は羽翼をもがれた鳥同樣、尾羽打ち折らした浪人となつてゐた。

一先富山に出て人の代診を勤めてゐたが、警察が無免狀だとて、喧しく言つて來る。次に京都の知人の許に身を避けたが、代診でもしては居らぬかと、何處迄も警察が手を回して調べに來る。天涯地角、身を置くに置き兼ねて、彼は遂に鎌倉に逃れて來た。坊主にするのは如何にも殘念なとて、彼の舊師舊友孰も同情を寄せぬはなきが中にも、彼が故郷の郡醫會では、今春其の決議を以て內務大臣と縣醫會に陳情に及んだ。內務大臣の方は不首尾に終つたが、縣醫會の方では、更に調査委員を設けて、數個月間賣藥行商人をして事情を密偵せしめるやら、委員が現場に臨んで檢視をするやら、色々手をかへ品をかへて取り調べた揚句、結局一同多大の同情を岸に寄することとなり、其の結果遂に岸問題の爲に特に縣醫會を開いて、更に內務大臣に陳情に及ぶことを可決したといふ。岸が若し醫者でなかつたなら、刑期滿つると共に罪は贖ひ終つて、何とてもなかつたらうが、憖ひ醫者である許りに課せられた本刑の外に、開業免狀の返附といふ處分が何處迄も尾いて回つて、彼は手も足も出せないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嗚呼、醫者でありながら、醫者は出來ず、寺に入りながら、僧にはなれず、不幸なる岸は、隱岐壹岐の島の端(はて)なんどでもあらうことか、日本帝國の首都東京を去ること僅に三十哩の鎌倉に。今や罪なうして配所の月を眺めてゐる。

彼を陷いれた女の心持が聞いて見たい。

（明治四十二年十二月十日稿）

附言

「穢な女」を草し了つて、書き加へたいことが二つ三つ出來た。

一、昨年の「時子」の例に倣つて、地名と人名とは悉く變へた。入澤博士も大拙居士も宗演老師も皆假用と見て貰ひたい。

二、岸が初審で重禁錮八個月の宣告を受けた時、之に三個年の刑の執行猶豫がついてゐたので、辯護士は極力岸の控訴を止めた。併し岸はいくら執行猶豫がついてゐたとて、そんな冤罪に服する譯に行かぬとて、斷じて聽容れなかつたのだといふ。

三、又強姦されたと稱する女が、強姦された後二週間の中に藥も貰ひに來れば診察受けにも來てゐる、告訴したのは夫から三週間たつて後のことである。

四、（七）に出た縣醫會は岸の爲に臨時に開かれたもので、内務省への上申は滿場一致で可決せられた。現場臨檢の結果斷じて斯る事の行はるべきに非ざることを調査委員の認めたに由るといふ。

（楚）

關西研究

柯公

（一）

○黑文字は關東趣味なり、關西趣味は丸楊子に似たり。

○若しまぐろの赤き刺身が江戸ッ兒の食膳に缺くべからずとせば鰈の白き刺身は上方人士の食膳に適せずや。

○大阪と京都とは趣味に於て習俗に於て一ならず、同一ならずと雖も之を關東と對比するに於て京阪の二者は多くの點に於て相一致す。

○曾ては伊藤公の銅像を楠公祠內に仆し、頸に繩して市外に棄てたりしは神戸人なり、公の死後其德を懷ひて像を諏訪山上に建てんと欲し、一旦自から頓棄したりし銅像の頸邊の凹凸を修理して自家の公園を飾らんとするものは亦神戸人なり。

○所謂上方贅六の稱呼は大阪人、神戸人の時に甘受すべくして、以て京都人士に冠すべきに非ず、舊帝都の美術と歷史とは偶然にも京人に品格を賦與したり。

○七條停車場に下車するものは行くと數丁ならざるに市內優雅の氣に滿ち、市人に寬裕の風あるを看取せん、梅田驛に下車するの時、旅客の多くは不知不識匆忙裡の人たるべし。

○芦邊踊の卑俗なるは終に紅提灯と篝火に圍まれたる都踊の閑雅なるに如かず、大川筋に神輿を流す天神祭は終に詩的なる祇園會の匹に非ず。

○されど、途上相遇ふて道を問ふ、步を止めて敎ふると懇切なるは東京人なり。夜半警鐘鳴響く時、雨戸一枚を開きて火事の方向を窺ふとの同情心すら乏しきは京阪人共に一樣なり。

○大阪に雜魚寢の俗あり、大阪紳士の好んで試みる所、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嗚呼、醫者てありながら、醫者は出來ず、寺に入りながら、僧にはなれず、不幸なる岸は、隱岐壹岐の島の端なんどてもあらうことか、日本帝國の首都東京を去ること僅に三十哩の鎌倉に。今や罪なうして配所の月を眺めてゐる。

彼を陷いれた女の心持が聞いて見たい。

（明治四十二年十二月十日稿）

附言

「變な女」を草し了つて、書き加へたいことが二つ三つ出來た。

一、昨年の「時子」の例に倣つて、地名と人名とは盡く變へた。入澤博士も大拙居士も宗演老師も皆假用と見て貰ひたい。

二、岸が初審で重禁錮八個月の宣告を受けた時、之に三個年の刑の執行猶豫がついてゐたので、辯護士は極力岸の控訴を止めた。併し岸はいくら執行猶豫がついてゐたとて、そんな冤罪に服する譯に行かぬとて、斷じて聽容れなかつたのだといふ。

三、又強姦されたと稱する女が、強姦された後二週間の中に藥も貰ひに來れば診察受けにも來てゐる、告訴したのは夫から三週間たつて後のことである。

四、（七）に出た縣醫會は岸の爲に臨時に開かれたもので、內務省への上申は滿場一致で可決せられた。現場臨檢の結果斷じて斯る事の行はるべきに非ざることを調査委員の認めたに由るといふ。

（楚）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關西研究

柯公

（一）

○黑文字は關東趣味なり、關西趣味は丸楊子に似たり。

○若しまぐろの赤き刺身が江戸ッ兒の食膳に缺くべからずとせば鰈の白き刺身は上方人士の食膳に適せずや。

○大阪と京都とは趣味に於て習俗に於て一ならず、同一ならずと雖も之を關東と對比するに於て京阪の二者は多くの點に於て相一致す。

○曾ては伊藤公の銅像を楠公祠內に仆し、頸に繩して市外に棄てたりしは神戸人なり、公の死後其德を懷ひて像を諏訪山上に建てんと欲し、一旦自から頓棄したりし銅像の頸邊の凹凸を修理して自家の公園を飾らんとするものは亦神戸人なり。

○所謂上方贅六の稱呼は大阪人、神戸人の時に甘受すべくして、以て京都人士に冠すべきに非ず、舊帝都の美術と歷史とは偶然にも京人に品格を賦與したり。

○七條停車場に下車するものは行くと數丁ならざるに市內優雅の氣に滿ち、市人に寬裕の風あるを看取せん、梅田驛に下車するの時、旅客の多くは不知不識匆忙裡の人たるべし。

○芦邊踊の卑俗なるは終に紅提灯と篝火に圍まれたる都踊の閑雅なるに如かず、大川筋に神輿を流す天神祭は終に詩的なる祇園會の匹に非ず。

○されど、途上相遇ふて道を問ふ、歩を止めて敎ふると懇切なるは東京人なり。夜半警鐘鳴響く時、雨戸一枚を開きて火事の方向を窺ふとの同情心すら乏しきは京阪人共に一樣なり。

○大阪に雜魚寢の俗あり、大阪紳士の好んで試みる所、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「八百萬の神しろしめす雑魚寢かな」是れ、蓋し贅六根性の尤なるものなり。

○若し趣味の人ありて京都島原の角屋に、若くは祇園の一力に登りて一夕紅燈下の人と爲る、一物一品一技一俗に古代の興趣津々として湧くを覺えん。東都敎坊の御神燈、吾人の趣味に適せざるに非ず、而も一種の氣品、一種の情趣が吾人の感興を動かすの多きに至りては終に京都に與せざるを得ず。

○上方を見るに單に贅六的觀察を以てせんとするは抑も謬れり。

（二）

○大阪に於ける新聞の號外は東京のそれと全然方式を別にす。

○東京新聞の號外は途上に於る一枚賣を主眼とす。大阪の二大新聞が號外を發刊せんとする、先づ配達夫を召集し、刷の成る、彼等は韋駄天の如く宙を飛んで各自日頃の購讀先に配布し了る、途上の人之を求めんとして得るに由なし。

○而して大阪の二大新聞は英米獨露に各々特電を有す、兩社を促して爰に至らしめたるものは大阪人士なり。

○東京人士の新聞に對する、新聞を讀むに非ずして人を讀むなり、元の「東京毎日」すら島田氏のために讀者を有したり、蘇峰の愛讀者あり、三山の崇拜家ありて、眼中多く「國民」「朝日」を見ず。

○大阪日報なる一新聞あり、曾て山路愛山を聘す、愛山亦聲を大にして頻に入社の披露に力む、而して斯る叫は大阪人に取りて風馬牛なり。

○彼等は何人の主筆たり、何人の編輯長たるを問はず、機敏にして確實なる報道を愛す、大阪人士に新聞の鑑識あり。

○曾て伯大隈の早稻田大學の爲に來りて大阪市公會堂に長廣告を弄する、歸依するもの殆んど稀なりき。前商工局長森田氏の印度視察を了りて大阪商業會議所に印度談を爲すや、滿堂立錐の地なかりき。

○東京は既に護謨輪時代に入れり、大阪には尚二人乘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の廢車を存す、電車の疾走する傍、老車夫に二人乘の徐行するあり、而して車上の客は相擁して晏如たり。

○川を生命とする大阪に巡航汽船あり、之を一般交通の原則よりする、電車の通達する時則ち河船の自滅すべき時たり、而も能く事の緩急を靜思し、利害に細心なる大阪人は恐くは電車と共に永く河上の一錢蒸汽を保存せん乎。

○大阪人は實質の打算に精なり、漫に贅六の稱を冠するは酷なり。

（三）

○大阪良家の息兒「坊痴（ボンチ）」の稱あり、「坊痴」乎「呆痴」乎吾人之を知らず、吾人は只彼等が一種の氣品と閑雅の風格を備ふるを多しとせずんばあらず。

○鴻池子は呆痴の類なり、而も彼一夕南地又北廓に盛宴を張る、大小の什具、主客の座布團皆之を自邸より運び到る、恰として昔時侯家の遊に似たり。

○船場に鴻池舊家の門口を覩ふ、物古りたる格子内の前栽、鶴の遊ぶを見る、恐くは累代の遺孤たらん乎。

○大阪の富豪住友、藤田あり、吾人は兩者が平素金權と權勢とに倚りて傲慢の譏あるを特に憎み、寧ろ鴻池の大阪舊家の特風あるを愛す、其當代の家長呆痴君を云ふに非ざるは勿論なり。近時厭ふべき醜聞の斯る舊家の門より漏れたるは特に嘆ずるに堪ふ。

○大阪の豪家千種屋の名を知らざる者は稀なり、先代平瀬龜之助氏が諸藝に通じ、珍籍を藏し、鑑定に精に、能樂を能くしたる、其比を江戸の舊家に求むる、果して能く何人を擧げ得んか。

○曾ては奇骨あり、氣品ある雜誌「二十六世紀」を産みたるは大阪なり、今は洗心洞學會の興りて陽明學の研究に腐心し、巨口會ありて關西の俳壇を飾り、書田會の成りて奇典珍籍を蒐め、[illegible]會ありて書道の奬勵に任ず。漫に大阪を俗世界視するは見の謬なるものなり。

○關西俳壇の重鎭水落露石あり、彼や既に現代俳界の巨人なり、而して其居を訪ふ、彼れ南久寶寺町小間物問屋の主人公たり。居宅の幽閑なる心情の悠々たる、

露石君にして世々町家の出たりとせば、純大阪の町家なるものが如何に禮讓に富み如何に格式を重んずるかを見るべし。

○大阪舊町家の風、今尙ほ之を船場に見るべし、家婢にして束髮に結ぶが如き、斷じて容さず、その格式を重んずる概ね此類。

○敬すべき當代女流教育家棚橋絢子は船場町家の出身なり。

○固有の大阪と純正の大阪人とに氣品あり、雅味あり、禮讓あり。漫に贅六を以て之に擬せんとす、失當の甚しきもの。

（四）

○大阪人の患は風の趣味を味ひ得ざるに在り。吾人は春王の正月、帝都の客と爲りて偶々風の半日を上野の樹下に樂むことあり、森林なく丘陵なく、老木大樹なき大阪は大なる不幸なり。

○森林美は崇高の氣を養ひ、清澄の氣を釀す、而して朔風の樹梢に鳴り、落葉の宙空に舞ふの時、人心爽亮を覺ゆ。

○森林美と風趣味は京都に於て之を味ひ得、必しも春山萬樹の紅、秋岳萬葉の黃を言はず、洛中洛外古刹境內の亭々たる松杉の叡山颪に鳴るの時、誰れか心胸の清澄を覺えざらんや。

○洛を出づる二里、輕裝して比叡山に登り、老檜の道、四明ヶ岳に出て、更に老杉の道、根本中堂に達する時、愛樹の念は崇嚴の氣と共に生ず、而して京都人は婦女老幼を問はず時々好んで叡山に登る、山氣樹魂に其品性を陶冶する大なるものあらん。

○人口百二十萬の大阪の市中、獨り掌大の中之島公園を見るのみ、近來茶臼山下天王寺公園の一を加へたるも終に言ふに足らず。

○俗惡なる大阪の大家主は飽迄も一種の長屋を市中に縱横して宅地を餘さんとに腐心す、大阪市內の借屋に一軒建の家なく、長屋の空地に一本の稚松を見るは稀なり。

○市內に大樹老幹なく、民家に植樹の空地なし、鳥の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聲を聴き得ざるは當然なり。古人言ふ宅に三聲なかるべからずと、思ふに市も亦三聲を聴かざるべからず、市の三聲とは何ぞ、鳥聲、鐘聲而して風の梢に鳴るの音なり。

○人若し大阪市内に營々業務に精勵し、足一歩郊外に出づるなしとせば、彼は終に鳥と鐘と而して梢の風とを聴くに由なきなり。人生の不幸蓋し之より大なるはあらず。

○若し此の如くにして五十年を過ぐ、大阪は生氣枯渇し、大阪人は沒趣味の人たり了せん。

○大火を好機として燒地の一半に大公園の建設を敢てし能はざる大阪人は終に自家將來の運命を會得し能はざるものたり。

（五）

○木村長門守重成の純正なる後裔に强慾非道の高利貸木村權右衛門を出したるは一興なり。彼、鬼權の稱あり、住友、藤田の名を知るものは亦彼を知ざるべからず。

○鬼權一タの奇禍、道念を得たりと稱し、遂に耶蘇教に入るや、無定見の記者と幇間的牧師とは終に鬼權の稱を彼の上に廢せり、吾人は關西の言論が金權の爲めに屈するの久しきを慨す。

○初めて大阪に來遊するもの誰れか鰻谷の住友邸に一棧廊の天下の公道を遮つて懸れるの暴狀に驚かざらんや。

○北廓燒失後の大阪、遊廓移轉問題の漸く世論に上り、議終に市の一角網島の地を撰定一決するや、網島王藤田一人の異議は忽ちにして知事高崎を萎縮せしめ、議爰に破る。

○而して百二十萬の市民と數百の操觚者は二金權者の爲に口を箝せられたるが如し。

○七十年前大鹽平八郎をして義旗を飄して貧民に黨せしめたりし大阪が二三金權家の前に降服したりしは痛嘆に餘あり。

○京都圓山公園、私人邸宅の建築を嚴禁す、獨り村井吉兵衛氏の長樂館此處に聳ゆ、館が好んで貴賓を迎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、墨堤大倉別墅の類なり。彼の如きは京都を俗了するの賊、恕すべからず。

（六）

○淨瑠璃は大阪の趣味なり、淨瑠璃の大阪に於ける猶ほ舞の京都、踊の東京に於けるが如く、換ふべからざる固有の趣味たり。

○文樂の名、天下に知らざるもの無し、東京見物に上りたるもの、或は帝國議會を見ざるものあらん、大阪に遊びて半日を文樂に費さるゝものは極めて稀なり。

○大阪の角力界は終に東京力士の一顧を値せず、而して有樂座の壇上に都人士を睥睨して關西の爲めに萬丈の氣焰を吐くもの、攝津大掾及び呂昇あり。

○新演劇の起れる亦大阪なり、大阪の地は一種の藝術に適せるが如し。

○頃者大阪の兩三個所に筑前琵琶を教授する者あり、良家の子女、漸く愛玩の風あり、當に唾棄すべしと爲す、大阪は淨瑠璃以外に更に何物をも要せず。

○京の趣味は舞に在り、「あれ夕立に」一幅、祇園を寫し出し、總て京都を說明す。

○神戶の趣味は夫れ玉突か。

○若し更に地理的趣味を穿鑿する、大阪の趣味は川に在り、京都の趣味は山に在り。

○川の趣味は橋の趣味なり、船の趣味なり、山の趣味は遊山と爲り、茸狩りと爲る。一は上戶に適し妓を携ふるに可、他は下戶に適し寧ろ家族的遊樂たり。

○されど京都に四條の納涼あり、川趣味を發揮す、大阪に西村知事時代、東京の川開に倣ひて大川の川開を企てたる者あり、一年にして失敗に終り亦永續せず。

○大阪人は世界中最も裸體を好む人種なり、大阪の家二階建ならざるは稀にして、二階に物干臺を有せざるはあらず、而して七八月の大阪は裸體種族の跋扈時代にして物干臺に涼を取る、物干臺は治外法權なり。

○裸體の夫は裸體の婦に對し、裸體の姊は裸體の弟に隣して露臺に夕食し談笑す、甲家裸體の主、乙家裸體の婦を比隣せる物干臺に見、亦更に憚るなし。

○大阪が川に富む此の如くにして、大阪人が涼を舟遊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に取ると比較的鈍きは裸體趣味を措にし得ざるを厭ふてなり。

○大阪の男子は常に好んでフランネルの腰卷を爲す、裸體趣味より來れる自然の必要に出づ。

○大阪に在て最も適當に川を利用するものは廣島よりせる牡蠣船なり。芝濱にロセッタホテルを始めたりし東京人の智は大阪に後れたると實に二百五十年なり。

○牡蠣船は一種の屋臺船なり、例年十月に入るや、廣島より到り翌春三月復還る、一船五六人の男を乘す、貝殼盤き、料理番及び給仕男なり、浪華に着して諸處の橋下に繫船す、近年船內に電燈を引くの外、他は皆二百五十年前の風體なり。

○二百五十年以來、牡蠣船が百里の海上を榜して廣陵より浪華に往復しつゝある來歷は上方人士が着倒れ以外喰倒れの素質あるを證せずや。

○試みに淀屋橋畔の牡蠣船に入りて二三種の蠣料理を呼び、淀屋橋の橋腹を仰ぎて一代の豪、淀屋辰五郎を憶ひ、眼を轉じて日銀支店の石造館を望むの時、吾人に一種の威を生ず。

（七）

○大阪にヤトナ制度あり、蓋し雇い女の略稱なり、仲居にして藝妓を兼ぬ、鵺的動物なり、

○ヤトナ制度は大阪人の利害の打算に精なるより發達したりしもの、宰相桂卿の政黨政派に對する猶ヤトナ制度の如しと言ひたりしは適切なる評言なり。

○若し大宴會を催さんとする、ヤトナ會社に電話して豫定の人員を豫定の料亭に召集す、猶ほ音樂隊會社にバンドの注文を爲すと一樣なり。

○大阪の鮨は切鮨にして四角なり、關東流の握を賞味せず。關西の雜煮餅は圓餅を例として京京流の切餅を厭ふ。

○白味噌に圓餅は純乎たる京都趣味なり、佛臭き處あり。切餅に澄しの汁は江戶趣味なり、配するに淺草海苔を要す。

○關東は松魚に誇り、關西は松茸に生く。松魚に覇氣あり、松茸に稚氣あり、一は男性にして他は到底女性

たり。

○關西人の誇に丹醸あり。若し伊丹の名樽を以て江ッ兒に供せんとする、知らず關東兒は能く何を以て之に酬ゐんとする乎。

（八）

○大阪に定住を試みて準大阪人なるもの、四國人に多きが如し、地理上の關係に因らんも同氣相合するなきに非ず。醫家緒方、儒家藤澤共に四國人にして今大阪人に準す、而して大鹽中齋も亦阿波の出なり。

○四國八十八個所を一地方に摸擬したるの型地、阿讃二州に在り、四國遍路の勞を省き、功德は則ち同樣なりと稱す、純贅六式考案なり。

○金比羅宮の献金表章の石柱、俗氣と銅臭とを交へたるもの、京阪地方よりの輸入考案たらん。

○吾人は大阪府の學制樹立者日柳三舟翁を知る、彼は讃の奇傑日柳燕石の嗣なり、阿の柴秋村の後、今大阪女子教育の任に當るあり、市政の公平なる指導者日野國明は、大阪新報社長加藤恒忠と共に豫州松山の出たり。

○吾人は偶々大阪に於る地方人を算へ來りて金澤の中橋徳五郎を想はずんばあらざるなり。

○中橋の手腕と識見とは遥に後藤男以上に在り、彼が今尚一會社長たるに過ぎざるは早く中央を去りて大阪に據るの罪なり、彼の如きは大阪の分に過ぎたる所有物の一たり。

（九）

○山田奠南、眞個男兒の慨あり、彼や大阪堺筋砂糖問屋櫻八の息子たり。有賀長雄は謹厚なる學者なり、儒家として大阪の名門なり。

○工學博士杉山は北廓娼家の出、アイヌ語研究に名ある博士金澤は大阪西區米屋の一子たり、俳人青々が薪屋の主人より一轉して俳壇に名を成したりしは必しも異數とせず。

○高木豐三の實兒文平翁、今老て京都三條に在り、明治四年叡山廻登鐵道を企畫したるの人、京都市が巴里に先づ一年にしてシングル、トロリー式電車を有したりしは文平翁の賜なり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〇カーキー染の發明家、大阪稻畑商會主稻畑勝太郎は三條の一駄菓子屋錢屋の時公なり、横濱生絲檢查所部長今西は西陣庄屋の直公なり、朝弱種族として都人士の侮蔑を買へる京都人は案外に進歩思想に富む。

〇大阪の町家が近年花嫁の資格に女學校卒業を要件とするに至れるは新現象なり。大阪の三官立女學校の校友團が一私立女學校と一大會館を有するは關西學界の誇なり。

〇幸田學士の大阪史を編する、時々疑義を提げて濱翁に質す。濱和助は大阪淡路町質屋の主人のみ、博覧強記、趣味ある人名辭書なり、翁が珍藏する近古名人の筆蹟に至りては世多く比類を見ず。

（一〇）

〇淺草公園と千日前と京極とに通有の喧囂あり、只淺草に食物店の多く、千日前に安価發明什具の露店特に多く、京極に布類小間物店の人目を惹くは三都人士の性情を表白するものたり。

〇日本橋の魚河岸は江戸兒の膓を見るに便ならんも、大阪の雜喉場は必しも大阪人を知るの場所たらず、彼等は喧擾雜揉の間に處して尙性僻の三分を隱蔽す。

〇昔時魚類の雜喉場に到るもの、諸國の漁船、櫓聲軋先を爭ひて市場の河岸に着く、今や大阪に到るの魚類、八分は朝鮮沿岸の產、馬關より冷藏車に由りて梅田驛に至る、鮮尾尙且三日を經たるもの、關西割烹界の革命なり。

〇吾人は堺の大濱を愛す、堺は大阪人のために天爲の大公園なり、その名の由來する所、攝河泉三國の堺たるに起る、我國南洋發展史の起源地たり。

〇堺客年の大火は事實に於て堺を滅亡したり。而も連峰の蜿蜒して背景を作せる、茅渟海の一碧眼前に展開して直ちに淡路島の翠黛に對するの風光は長に堺の生命なり。

〇南海鐵道なるものあり、俗氣銅臭の凝體なり、彼大阪人の爲めに遊覧地を開くと稱して南海の勝地濱寺を俗了し去る、大阪多數の俗物亦盲動して彼等の汽車に鮨詰と爲りて休日を此地に費す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○吾人は楓錦の箕面が復近く鐵道屋なる者のために俗了し去らんを恐る。千年の寧樂の都は後藤某の鐵道ホテルの建築に因りて其雅趣の一半を破壞し去らる、痛むべき也。（完）

（稿了後三日にして大阪市役所の醜聞、關西諸新聞の好題目となり、博士杉山の名聲度が擧られ、獄中の醜なり、話はる、彼れ北郊娼家の出、誤て學界の人となる、吾人頗る此徒を惡む。
一日毀棄したりし春畝公銅像を起して再び諏訪山金星臺上に建てんとしたる神戸人は公爵家の氣色甚だ懌ばざるあるに會ふて議を翻して僅に新鑄に決意す、出でゝ益醜なり。（十二月十五日）

予が見たる武士道の變遷

塚原柿翁

一

我が太切なる武士道に古來の變遷ありと云はゞ、灰吹から蛇の出てたる如く、水瓶に龍のわきたる如く、古今の珍事として目を聞くする者もあらむ。然れども驚くを罷めよ、天地間列位の森羅萬象、有形將た無形を問はず、いづれか生、老、衰、死、の迹を免ぬがれたる。人間の臀に尾が無くなり、山の芋化して鰻となるを思はゞ、是れも宇宙間生物の一なる人類の感情より成れる武士道にして、豈に變遷の事なしと言ふを得べきや。世にめでたしと言ふ日の本の櫻も、芽より蕾となり、花となり、また土と爲る。其れにたぐへらるゝ武士道も、單純より複雜となり、感情より道德となる。今は武士道を道德とする世の中なり。予は之れを四十三年前の昔しに遡りて、感情を基礎としたりし武士道の一面を言はむとす。但し是れ、我が武士道なるものは、總て恁くの如きものなりと言ふには非らず。予の此に說くものは、右に云ふ武士道の一面のみ。唯だ斯くの如き武士道も其の昔しは有りしと云ふに止まるのみ。懷舊談のみ。古史觀のみ。看む人思ひ紛ふべからず。

山行かば草むす屍、海行かば水づく屍、大君の邊に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こそ死なめ、平やはやさし」と歌へるは、確かに上世の武士道なり。武士道の精髓、實にこゝに在り。然れども記憶せよ、昔日の武士道なるものは感情なり、理性には非ざるなり。其の本、偏頗なる愛憎に出でゝ、決して平等なる道徳に根ざせるに非らず。然して今日の如く、仁と云ひ、義と云ひ。文化の華と云ひ。我が國民の執るべき無上の道と云ひ。その他何と云ひ彼と云ふ美名の淵叢たる如きは、蓋し維新後、諸大家の研究より生ぜる斯道の生粋なるべきものにして。其實、翁等が戊辰(明治元年)の前後に於いて、盛んに唱道し、且つ躬行實踐したりと爲す武士道は、かゝる深遠なるものには非らざる也。單純無味、直截簡明、或る意味よりは寧ろ淺薄とも云ふべき程のものにして、其の趣意たる、唯だ吾が事ふる所に忠！たゞ其れ而已。其他を知らざる也。然して其の忠の出て來る所は、曰く恩！其の恩は、曰く土地！すなはち領分、知行、食祿なり。

然れども、其の當時と雖も。一言の恩に感ずる。依托の義に餘義なくせらるゝ。任俠豪氣より來る食祿以外のもの無きには非ず、なれど其は少數なり。僅かに十中の二三を占むるものと見て可なり。而して其の七八の多數は、右の食祿の御恩なるものなり。故に武士道は又た、其の事ふる所に對する忠義の一名と見るも可なりし也。

此の、事ふる所に對する忠義。即ち報恩の、掲焉として事實に顯はれたる者を、承久の變とす。(天慶以後、保元、平治の亂にも其の趣きは聊か見ゆれども)山陽外史、承久記に據り、當時の情況を記るして曰く、

義時大索二鎌倉一。獲二押松一奪レ詔燒レ之。一啓二狀於政子一。政子乃大會二諸將于簾下一。使三安達景盛傳二命曰、吾今日將レ訣二於諸君一也。先將軍(賴朝)被レ堅執レ鋭。闢二草萊一以創二大業一。諸君所レ知也。今讒諛之徒。誑二誤人主一。欲レ傾二危關東之業一。諸君苟不レ忘二先將軍之恩一。則協レ心戮レ力。誅二除讒人一。以全二舊圖一。即欲レ應二詔西上一者。今決レ之。諸將皆感激願レ効レ力。莫二敢異辭一。

こゝに於て大江廣元が策を用ひ、泰時をして直ちに發せしむ。泰時帥二十八騎一而西。行三日。得二十萬騎一と云ふもの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち是れ！請ふ見よ、彼の諸將なる者の心事を見よ。

賴朝の室政子の尼將軍が、今決之と言へば。諸將感激願効力。莫敢異辭と云ひ。而して僅々十八騎を帥ゐたる泰時、行く三日にして、十萬騎の精兵を得ると云ふもの、如何に彼等が其の事ふる所に忠なるかを見む。然も名分上より論ずれば、彼等は皆な王師に抗する者、即ち賊也。其の賊たる醜名をも敢て問はずして、東海、東山、北陸より進める兵、總て二十萬王師を破ること枯れたるを摧く如くして、其の凱歌を颺たる者、蓋し一人の慚色無し。歸來、幕下の恩賞を受けて、得々として子孫に傳へ、且つ此れを以て天下に忠あり、義ある者。すなはち武士道を盡くせる者と爲す。由是觀之ば、武士道なる者は、又た大義名分を知らざる者也。

知らざるも理り也。彼等は皆な源二位(賴朝)が恩顧の者、謂ゆる鎌倉の御家人として、其の給地を將軍より得、其の食祿を幕府より得て。然して其の父母、妻子、兄弟、親族を養へる者也。經に曰く、以恩爲主と。彼等は其恩を以て主として、其の主君たる鎌倉覇府の爲に奮戰もし、討死も爲たる也。即ち其の裏心に於て、天晴れ忠義の死を致せし也。遺族の傍人に誇る固より其所にして、戰功者の鄕里に傲る蓋し當然の事ならむのみ。彼の大義や、名分やの理義は何か有らむ。彼等は初めより知らざる也。恐るべき哉、世の風潮。蓋し後世、爲政者、教育者、倫理學者等の深く攻究して熟慮すべき所ならずや。

二

此の以恩爲主なる感情的武士道（今の理義的武士道に對して）は、北條氏を通じ、足利氏を經て、織田氏、豐臣氏と歷過し、終に予が壯時なる舊幕府の末路に及べる也。即ち予が見聞、否、親しく口に唱へ、躬に行へる其の者也。

予は實を以て告ぐ。予は舊幕府の士にして、祿高二百三十俵。家は中士の下にして、下士の上たりき。然して其の家庭に於ける一事を標して、其餘を類推に委すとせむが。朝夕の膳に對うや、予が父母、兄弟、下

女下男に至るまで、其の箸を取るに先ちて、先づ椀を取りて飯を頂くが例なりき。其故を如何と問へば。曰く、上より頂戴する米也と。

抑も理義を以て之れを言へば。大手三之御門なる門衛の番士なり。即ち同僚相交代して將軍を警備す。敢て懈怠する無くむば則ち可。此の祿米たるや即ち其の報酬なり。我が勞を賣つて我が食を得る、固より當然の事たらむのみ。猶ほ何の恩惠をか謝するを爲むと。蓋し今ならば論ずべきもの丶、昔しはさる事をば言はざりき。先祖塚原市右衛門某より予が父に至るまで九代、二百七十有餘年、此恩に浴し、此惠に賴りて、以て父母を養ひ、妻子を育し、家眷を撫す。其恩、山海啻ならず。即ち將軍家は家長にして、我等は其の子弟僕從なり。便ち死を以て此恩に報ひ、此の御家を守るは士の道なり。決して二心を悖く勿れ。と是れ唯一の家憲にして、又た其の旗下、家人たる者は、上士と下士とを問はず、好く之れを守れりき。即ち、一も上の御爲、二も上の御爲！と、此の上の御爲や、即ち食祿に報ゆる献身の發表せるものにして、此れを忠と云ひ、道と云ふ。謂ゆる德川氏士を養ふ三百年にして得る所の唯一物にして。或る人が、經濟學の交換問題を以て、此の士道を解釋せんと試みたるは、確に一面の眞理を得たるものと予は認む。

然も此の交換問題たる、決して予等が一家言に非ず。又た予が生れて物心を知れる安政文久の近きに始まれる事に非ずして、遠く寬延（今を距る百六十餘年）の昔しに在り。即ち其の元年八月の奧書ある竹田出雲等が著、例の假名手本忠臣藏なるものにして、其の七段目謂ゆる茶屋場なるもの丶中に曰く、僅か三人扶持取る拙者めでも、千五百石の御自分樣でも、繫ぎましたる命は一つ、御恩に高下はござりませぬ。と、是れ忠臣由良之助に對する、義士平右衛門が言に非ずや。其の君仇を斃さんとする自己が決心の本據たるものは、實に給祿の報恩に在り。然れども彼は足輕なり。足輕は足輕だけの見識にして。家老たる由良之助は、更に什麼の見解を具ふるやと云へば。彼の言ふ所も亦た同一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち是れ！請ふ見よ、彼の諸將なる者の心事を見よ。

賴朝の室政子の尼將軍が、今決レ之と言へば。諸將感激願レ效レ力。莫二敢異辭一と云ひ。而して僅々十八騎を帥ゐたる泰時、行く三日にして、十萬騎の精兵を得ると云ふもの、如何に彼等が其の事ふる所に忠なるかを見む。然り名分上より論ずれば、彼等は皆な王師に抗する者、即ち賊也。其の賊たる醜名をも敢て問はずして、東海、東山、北陸より進める兵、總て二十萬王師を破ること枯れたるを摧く如くして、其の凱歌を颺たる者、蓋し一人の慚色無し。歸來、幕下の恩賞を受けて、得々として子孫に傳へ、且つ此れを以て天下に忠あり、義ある者。すなはち武士道を盡くせる者と爲す。由レ是觀レ之ば、武士道なる者は、又た大義名分を知らざる者也。

知らざるも理り也。彼等は皆な源二位（賴朝）が恩顧の者、謂ゆる鎌倉の御家人として、其の給地を將軍より得、其の食祿を幕府より得て。然して其の父母、妻子、兄弟、親族を養へる者也。經に曰く、以レ恩爲レ主と。彼等は其恩を以て主として、其の主君たる鎌倉覇府の爲に奮戰もし、討死も爲たる也。即ち其の裏心に於て、天晴れ忠義の死を致せし也。遺族の傍人に誇る固より其所にして、戰功者の鄕里に傲る蓋し當然の事ならむのみ。彼の大義や、名分やの理義は何か有らむ。彼等は初めより知らざる也。恐るべき哉、世の風潮。蓋し後世、爲政者、教育者、倫理學者等の深く攻究して熟慮すべき所ならずや。

二

此の以レ恩爲レ主なる感情的武士道（今の理義的武士道に對して）は、北條氏を通じ、足利氏を經て、織田氏、豐臣氏と歷過し、終に予が壯時なる舊幕府の末路に及べる也。即ち予が見聞、否、親しく口に唱へ、躬に行へる其の者也。

予は實を以て告ぐ。予は舊幕府の士にして、祿高二百三十俵。家は中士の下にして、下士の上たりき。然して其の家庭に於ける一事を標して、其餘を類推に委すとせむか。朝夕の膳に對うや、予が父母、兄弟、下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女下男に至るまで、其の箸を取るに先ちて、先づ椀を取りて飯を頂くが例なりき。其故を如何と問へば。曰く、上より頂戴する米也と。

抑も理義を以て之れを言へば。予が家は、大手三之御門なる門衛の番士なり。即ち同僚相交代して將軍を警藩す。敢て懈怠する無くむば則ち可。此の祿米たるや即ち其の報酬なり。我が勞を賣つて我が食を得る、固より當然の事たらむのみ。猶ほ何の恩惠をか謝するを爲むと。蓋し今ならば論ずべきもの丶、昔しはさる事をば言はざりき。先祖塚原市右衛門某より予が父に至るまで九代、二百七十有餘年、此恩に浴し、此惠に賴りて、以て父母を養ひ、妻子を育し、家眷を撫す。其恩、山海啻ならず。即ち將軍家は家長にして、我等は其の子弟僕從なり。便ち死を以て此恩に報ひ、此の御家を守るは士の道なり。決して二心を悖く勿れ。と是れ唯一の家憲にして、又た其の旗下、家人たる者は、上士と下士とを問はず、好く之れを守れりき。即ち、一も上の御爲、二も上の御爲！と、此の上の御爲や、即ち食祿に報ゆる感謝の發表せるものにして、此れを忠と云ひ、道と云ふ。謂ゆる德川氏士を養ふ三百年にして得る所の唯一物にして。或る人が、經濟學の交換問題を以て、此の士道を解釋せんと試みたるは、確に一面の眞理を得たるものと予は認む。

然も此の交換問題たる、決して予等が一家言に非ず。又た予が生れて物心を知れる安政文久の近きに始まれる事に非ずして、遠く寛延(今を距る百六十餘年)の昔しに在り。即ち其の元年八月の奥書ある竹田出雲等が著、例の假名手本忠臣藏なるものにして、其の七段目謂ゆる茶屋場なるもの丶中に曰く、僅か三人扶持取る拙者めでも、千五百石の御自分樣でも、繫ぎましたる命は一つ、御恩に高下はござりませぬ。と、是れ忠臣由良之助に對する、義士平右衛門が言に非ずや。其の君仇を斃さんとする自己が決心の本據たるものは、實に給祿の報恩に在り。然れども彼は足輕なり。足輕は足輕だけの見識にして。家老たる由良之助は、更に什麽の見解を具ふるやと云へば。彼の言ふ所も亦た同一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なりき。即ち其の後段にける、緣の下なる斧九太夫を引き出だしての責問に曰く、獅子心中の虫とは汝が事。我君より高知を戴き、莫大の御恩を被むりながら、敵師直が犬となつて、有る事無い事好う内通ひろいだな。と、即ち其の獅子心中の虫として、敵師直に内通せる不忠の惡をば、彼は、彼が高祿を取り、莫大の御恩を受けながらと云ふ案を以て、之を斷ぜり。以て主張の大體を知るべからずや。然れども亦た或は言はむ、是れ士道の來る何者よりするかを知らざる院本作者輩の言ならむのみ。元祿武士の精華たる大石其人の眞髓、必らずや給養の報酬のみならざる也と。

なれど予をして猶ほ言はしめなば。彼れ大石の精髓、果して此に言ふ所の如きか否かを知らざるも。世は出雲等の此言をもて、忠臣内藏助等の心胸を得たるものとして、毫も其間に異論を介む者無き也。即ち其祿を食う者は其事に死するの本分を守り、好く士道の正路を履み得たる者として怪しむ無き也。更に言へば、竹田等の此著は、かの士道（昔しは武士道とは言はず、士道、若くは士の道と言ひたる樣なり。予等は現に士の道と口にせり。）の創唱者とか云ふ山鹿氏の死を去る六十年。又た大石等の死を距つること四十六年。想ふに當時の流風其迹を絶たずして、出雲等の筆、彼と幾分の脈絡を通ぜしや疑ひ無と言はむも不可ならず。否、出雲等のみならず。彼れ義士等の血は遠く慶應の末年に迄も流傳して、幕末の脫走とは爲り畢んぬ。即ち彼の脫兵等は、元祿の大石等と同じく、成るも成らざるも、總て其の一死を賭したるなり。即ち共に朝憲の犯すべからざるをば熟く知るも、臣子の情誼已むを得ずとして、倶に其の敵と見し所に敵せし也。然も彼等が此の情誼の由來する所は、前にも言へる三百年來の御恩なり。鞠養の報酬なり。然して大石等は、其事成りて屠腹したるも、脫兵等は力盡きて降り、如天の皇恩の下に助命せられき。唯だ彼の甲賀源吾、中島三郎助父子三人、伊庭八郎、土方歲三、松岡繁吉等、某々數十百人は、吉良邸討入の夜に討死したる者と同じく（若し有らば）諸所にて立派に戰死せり。然して彼等は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の報恩なる感情の爲に、笑を含むて死せし也。大石等の辭世に言へる「此世後の世思ふ事なき」なり。決して理義に責められ、仁義に捻はれて、苦しむて其の詰腹を切りしに非ざる也。謂ゆる悲壯の死！酸鼻すべき悲哀の最期に非ず。

三

恁くの如く、予が壯時の武士道や、簡明にして直截なり。唯だ報恩なり、報酬なり。縱令其の素質に垢滓の雜然たるもの有りしにも爲よ、其の意趣たり、目的たる者は明瞭炬の如し。爾後、學術大いに開け、啓蒙の技益々進むに隨ひて、部分の解義は樣々詳しきも、輪廓の明亮は愈々虧れて、かの馬を說いて馬無く、牛を解いて牛亡きに至る、碎然確然、何ぞ其の細かにして煩はしきや。而も斯道の精華たるものは、三河武士なりと云ふ。無學の三河武士、甚麽の理義をか分析せむ。甚麽の哲學をか研究せむ。說者が此の美德の標本として予等が先祖を引合に出さるゝこと、芳志は其の感謝する處を知らざれども、實はと云へば雖有迷惑なり。予等が先祖の武士道は、此方の抽斗なり。說者の求むる武士道は、隣りの抽斗なり。謂ゆる抽斗違ひなり。

要するに、封建の武士道と、郡縣の武士道とは、其の心得方を別に爲さるべからず。況んや立憲の武士道(然う云ふ語は有るか知らぬも)をや。由來往昔の武士道は、親族政治の產物なり。此れを法治なる今日の畑に其の儘移植せんとする、謂ゆる圓鑿にして方枘、齟齬して入り難きもの亦た宜ならず乎。

然れども、圓い卵も切り樣で四角なり。於虞美なる、鬱たる夫の武士道、此れを立憲後の諸役に用ひて、其の効の大なる亦た前日の比に非らざるを知る。論者、盍ぞ其の變遷を變遷の儘にして、武士道なる如き無實の名を廢し、之れを國民道、若くは民道と言はざる乎。『吾は日本國民なり、故に日本國の爲に死す！』豈に此れ程の簡明なるもの他に有らむ乎。國民道豈に可ならずや。

(了)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偶感録

金子筑水

◎ツイ先頃是非にと面會を求める人があつた、名刺を見るとどこかに記憶に殘つてゐる名前だ。遇つて見ると確に顏に見覺えがあり且即座に昔なつかしいやうな感じさへした。「ハテ誰てあつたらう」と思つてゐるうち、客は「近頃のヨーロッパの哲學はどんな風てすか、私は先頃ローマ舊教へ加入して、これから日露貿易にても從事しやうかと考へてゐます、がどんなものてしやう、實は御意見を伺ひにあがつたのてすが」といふ。自分は少なからず當惑したが、だん／＼の談話の樣子によつて、客の某君は十數年前早稻田を出た人て、其の當時はクラス中の論客て、よく精神上の種々な質問を持つて來た人だつたと解つた。自分はぼんやりして其の當時を追想してゐると、某君は「私はあの當時哲學に耽り、それからプロテスタント風の信仰を持つてゐましたが、學校を出て田舍へ歸へつてから、是非不變不動な原理とか信仰とかを得なければならんと思つて、とう／＼ローマ舊教徒に成つたわけてす、が一體舊教に對するお考はどうてす、新教と比較してどんなものてしやう、ヨーロッパなどてもまだ勢力を持つてゐるてしやうか」といふ。自分はたゞ「さういふ大問題は困るが、まあ新教の精神と舊教の精神とは、宗教に限らず、人間が歩いて行く二の途てはないてしやうか、一方は自由な動もすれば放縱なやり口、一方は堅い地盤の上に立つて、惑はず動じない然しながら動もすれば頑固に流れやすい筆法、自由政策に對して保護政策、自由黨に對して保守黨といつたやうなものてはないてしやうか」と答へて窃に新教的精神は少數有爲な者に適し、多數民には舊教が恰好てはないかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と考へた。某君は「舊教はほんとうに堅いてす、私は舊教に這入つてから、將來日露同盟が成立して、世界はきつと日露に統一されるものと考へてゐます、日露大帝國が將來の世界ではありませんか」。「さういふ空想も結構てしやう」。「空想てすつて、日露大帝國が空想てすつて、空想々々、どうして空想てしやう」と某君はさも空想といふ言葉に驚いた樣子であつた。何だか氣の毒に思つて「イエ、實行しないうちは凡て空想てはありませんか」と言つたので、少しは落付いて、「アゝ、さうてすか、何ても堅い一原理から、かう上の方から、根本から來なくてはいけませんな、私が日露貿易に從事しやうとするのも、つまりそこから來たのてす」と言つて、何か深く思ふ所ある樣子て、「そこてどうてしやう、實業などよいものてしやうか」。自分は何と答へてよいか分からなかつた。「實際を離れて高い所にゐる方がいゝてしやうか、それとも實業などに從事しても一心が守れるてしやうか」。ます〱當惑して「人にもよるてしやうが、まあ餘り空に走らないて、手近な所から著々初めたらどうてしやう」と言つて別かれた。別れぎわに某君は生涯獨身で暮したい、もう教會て誓さへ立てゝしまつたと語つた。

◎自分は暫くとりとめもない回顧の念に耽つた、十數年前といへば、もう一ト昔以上だ、其の頃は某君もまだ紅顏の少年で、自分等もまた夢のやうな華やかな理想にあこがれた時代であつた。某君はもう顎鬚さへぼう〱として微に昔の姿を偲ばせるだけであるが、當時の氣風精神はまだ依然として殘つてゐるらしい。主義理想に忠實な所は敬服であるが、十數年の田舍の生活は、舊教のそれと同じく、某君の精神を一處に停滯せしめたのではなからうか。某君の同窓には、今現に精神界に文壇に働いてゐる人が少なくない。十年のうちに斯うも時勢や人の身の上が變るものかと今更のやうに感じた。華やかな理想時代、それから自然科學的精神に立脚した實證論時代、それから更に再轉して、自我の内的生活に歸へつた主觀時代、此等が少くとも自分が通つてきた逕路だ。世間では此等の思想の變遷

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偶感錄

金子筑水

◎ツイ先頃是非にと面會を求める人があつた、名刺を見るとどこかに記憶に殘つてゐる名前だ。遇つて見ると確に顏に見覺えがあり且即座に昔なつかしいやうな感じさへした。「ハテ誰であつたらう」と思つてゐるうち、客は「近頃のヨーロッパの哲學はどんな風ですか、私は先頃ローマ舊教へ加入して、これから日露貿易にでも從事しやうかと考へてゐます、がどんなものでしやう、實は御意見を伺ひにあがつたのですが」といふ。自分は少なからず當惑したが、だん／＼の談話の樣子によつて、客の某君は十數年前早稻田を出た人で、其の當時はクラス中の論客で、よく精神上の種々な質問を持つて來た人だつたと解つた。自分はぼんやりして其の當時を追想してゐると、某君は「私はあの當時哲學に耽り、それからプロテスタント風の信仰を持つてゐましたが、學校を出て田舍へ歸へつてから、是非不變不動な原理とか信仰とかを得なければならんと思つて、とう／＼ローマ舊教徒に成つたわけです、が一體舊教に對するお考はどうです、新教と比較してどんなものでしやう、ヨーロッパなどでもまだ勢力を持つてゐるでしやうか」といふ。自分はたゞ「さういふ大問題は困るが、まあ新教の精神と舊教の精神とは、宗教に限らず、人間が歩いて行く二の途ではないでしやうか、一方は自由な動ゝすれば放縱なやり口、一方は堅い地盤の上に立つて、惑はず動じない然しながら動もすれば頑固に流れやすい筆法、自由政策に對して保護政策、自由黨に對して保守黨といつたやうなものではないでしやうか」と答へて窃に新教的精神は少數有爲な者に適し、多數民には舊教が恰好ではないかな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と考へた。某君は「舊敎はほんとうに堅いです、私は舊敎に這入つてから、將來日露同盟が成立して、世界はきつと日露に統一されるものと考へてゐます、日露大帝國が將來の世界ではありませんか」。「さういふ空想も結構でしやう」。「空想ですつて、日露大帝國が空想ですつて、空想々々、どうして空想でしやう」と某君はさも空想といふ言葉に驚いた樣子であつた。何だか氣の毒に思つて「イエ、實行しないうちは凡て空想ではありませんか」と言つたので、少しは落付いて、「ア、さうですか、何でも堅い一原理から、かう上の方から、根本から來なくてはいけませんな、私が日露貿易に從事しやうとするのも、つまりそこから來たのです」と言つて、何か深く思ふ所ある樣子で、「そこでどうでしやう、實業などよいものでしやうか」。自分は何と答へてよいか分からなかつた。「實際を離れて高い所にゐる方がいゝでしやうか、それとも實業などに從事しても一心が守れるでしやうか」。ます〳〵當惑して「人にもよるでしやうが、まあ餘り空に走らないで、手近な所から著々初めたらどうでしやう」と言つて別かれた。別れぎわに某君は生涯獨身で暮したい、もう敎會で誓さへ立てゝしまつたと語つた。

◎自分は暫くとりとめもない回顧の念に耽つた、十數年前といへば、もう一ト昔以上だ、其の頃は某君もまだ紅顏の少年で、自分等もまた夢のやうな華やかな理想にあこがれた時代であつた。某君はもう顎鬚さへぼう〳〵として微に昔の姿を偲ばせるだけであるが、當時の氣風精神はまだ依然として殘つてゐるらしい。主義理想に忠實な所は敬服であるが、十數年の田舍の生活は、舊敎のそれと同じく、某君の精神を一處に停滯せしめたのではなからうか。某君の同窓には、今現に精神界に文壇に働いてゐる人が少なくない。十年のうちに斯うも時勢や人の身の上が變るものかと今更のやうに感じた。華やかな理想時代、それから自然科學的精神に立脚した實證論時代、それから更に再轉して、自我の內的生活に歸へつた主觀時代、此等が少くとも自分が通つてきた逕路だ。世間では此等の思想の變遷

をひとへに無主義だ無節操だ停止する所を知らない輕薄な態度だと笑ふ。笑ふ者には笑はせておくがよい。全體の變遷の中にもおのづから一貫した精神がある。彼の自由な發達を妨げられた人に對してはむしろ一種氣の毒な感に堪へない。

◎哲學といへば世間では今も尙昔風な間違つた考を持つてゐる人が多い。新哲學を振りまわす人さへ、たかゞ純理哲學に對する經驗哲學を主張する位のものだ。我々はレーベンス、マハトとしての哲學を欲する。生活の指南車としての哲學を欲する。自我の眞生活に眞の光を與へる哲學を欲する。人格の構成革新を中心とする哲學を欲する。哲學の眞實の意味は、昔から斯うであつたではないか。抽象的原理を並べ、形式的理論を繰返へすばかりが哲學の能事ではない。文藝が人生に關する主觀の感じ又は個人獨得の感じを傳へるものならば、哲學は自我の生活又は自己人格を解釋批判するものだと言つてよい。自己人格を統一し、人格に新しい意義を見つけ、人格の進歩に強い力を與へるが哲學の主眼である。斯ういふ意味に於て人はめい〱獨得の人生觀を持つてゐる。哲學はさういふ意味の人生觀の秀れたものに外ならない。

◎文藝が作家の個性を示す者ならば、哲學も窮極の意味に於ては個性の客觀化されたものである。眞に個性の中心を解釋したものでなければ、どうしても不誠實で僞で空虛であるを免れないではないか。さういふ哲學に力が無いのは當前だ。文藝が個性の發揮によつて生活に新しい意味を加へて行くものならば、哲學も個人々々に獨得な經驗を解釋して、生活其のものに新しい意味を加へて行くものではないか。過去の哲學又は他人の哲學に沒投するばかりが學者の能事でないは無論である。

◎自然科學の精神に立脚した實證論的傾向も惡くはない、論旨其のものに難はない。たゞ多數の學者が自我の直接經驗(内的生活)を忘れて、ひたすら客觀的實在の研究ばかりに腐心してゐるはどうしたものであらう。自然現象ばかり研めても、肝要な自我の内的生活

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

について、有るか無きかの微な經驗を持つてゐる人が學者と言はれやうか。學者は宗教家の信仰生活にも通ぜねばならず、又詩人の感情生活をも經驗しなければなるまい。豐富な深く且高い内的經驗を味ひ、更にそれを明確に反省し得る人でなければ、眞の學者の資格は無い。人格と學問とを別々に考へるが初から間違つてゐる。大きな人格が大きな學問を產み、小さな人格が小さな學問を產むが自然の約束だ。學問は元來人格構成のための學問で、而も哲學は畢竟人格の反映に外ならない。

◎實行から出た論でなければ聞くに足りない、千萬語を費しても、其れが實行から出ないかぎりは空論だと。昔から繰返へされた格言だ。無論さうに相違ない。固より之れに異論はない。然しながら此の格言を餘り窮窟に解釋して、すべて充分な意味に於て實行された部分だけ論説の上にのぼせて、實行の可能を備へてまだ實行されない部分、又は過去の實行から推して將來斯くあるべきだといふ部分は、之れを論議にのぼせてわるいといふ理由がない。實行の可能を備へた事柄は、既に半ば實行された事柄ではないか。人間は完全な神ではない。將來の進路を豫想してかゝる所にむしろ人間の特色がある。人間の一生に最も幸福なときは、日常の雜念の中からおのづから結晶した美しい理想が想浮べられた瞬間だと詩人が歌つてゐる。藝術も哲學も此の瞬間から產れてたものが多い。創造は人間の生命だ。實行を預想した空想がやがて實現される所に生活の進步は存する。理想は畢竟此の種類の空想ではないか。さらば世の性急なる論者よ、暫く我々が實行の前途を豫想し且空想することを許せ、漫然として其れを破壞するばかりが能事でないではないか。今の時代に於ては、互に誠實にまごゝろの經驗を語り合ふが何より大事ではないか。

◎實行の可能を備へたものを朝な夕なに念じ、誠實にまごゝろの經驗を語り合ふうちには、そこから眞に驚くべく且意外な直覺又は確信が產まれてくる。其の直覺や確信に基いて、自我を改造し生活を革新して行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くが我々の取るべき唯一の途ではないか。此の外に致方が無いではないか。米のジエームスが人間は到底七ころび八をき、倒れたらまた起きるまでのことだ、いつまで起きずに逡巡したからとて何の役にも立たない、信じて進むに若かずと言つたパラドキシカルな論には深い眞理が籠つてゐる。繰返へしていふ、人間は神ではない、蹉跌の中にも深い自我の滿足さへ得れば、それで小さな人間の一生は全いのだ。

油の乘つた男

黒頭巾

其一

●雲右衛門は去り、和田三造は歐洲に飛び、新年の帝都には油の乘つた新進の男は、力士鳳あり。

●輓近、有樂座といへば呂昇を聯想せしむ。呂昇を拉し來れば、大入ならざること無し。

●呂昇は、之を攝津、越路、南部の徒に比しても、素人耳には却て善く聽かるゝべし。彼は、今、油の乘り來れる眞盛りなり。

●呂昇の義太夫に對し、吉田竹子の琵琶歌あり、ともに一代の美聲といふべし。昔の事は知らず、今の攝津は此二人には及ばず。

●呂昇の音聲の美くしくて豐富なる、其の推出しの艶麗にして、意氣滿盛なる、自から彼をして流行兒の威儀を備へしむ。

●有樂座の輝やく舞臺に、金襖の高座を設け、左右に、大輪の菊花を栽ゑ、前に花籠を飾り、幕開けて、電燈の光華煥發するの時、簾を捲けば、拍手の中に、彼は面を擧げ來る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●呂昇の技は、唄としては、心地能く聞かる。彼は、唄ふことに成功す、未だ語るの域に達せず。

●油の乘るといふは、必ずしも其の實力の絶倫なるにはあらず。然れども、油の乘るときは、第二流者、能く第一流を壓すべし。

●呂昇の來るとき、帝都の義太夫悉く屛息す。而して、帝都に、油の乘つた男少きは、義太夫のみにあらず。

●仁左衞門、雁次郎を招かざれば、帝都の劇界は寂寞たるを免かれず。是等の上手はさて置き、種々、樣々の者まで、帝都に來りて、憶面も無く、田舍油を披露し、帝都の藝界は、田舍藝に、ヒヤカサれんとしつゝあり。

●此時力士鳳あり。近來出色の意氣を以て、角界の人氣を集め、油の乘つた男の評判を獨占しつゝある也。

其　二

●ものは善くても、油の乘つた顏と、油の乘らぬ顏とあり。書くことは容易ならず、見れば直ちに、それと分るべし。

●油の乘つた顏は輝く、油の乘らぬ顏は沈めり。乘つた顏は明かに、乘らぬ顏は暗し。乘つた顏には光あり、乘らぬ顏には影あり。

●油の乘つた男は。後光もさすべく、乘らぬ男は、かげ薄き心地せらるべし。

●油の乘つた男は、正面に他の顏を見る。乘らぬ男は、側面に見る。

●油の乘つた男の顏は、大玄關の心持あり。乘らぬ男の顏は潜り戶の心持あり、

●油が乘つた男の顏は、展開の氣あり。如何なる顏も、醜なるも奇なるも、油の乘るを妨げず。

●油が乘り來れば、品も出來、美しくもなり。醜美、形情の外、一種油の乘つた色彩、發射して、自から人を魅するところあるべし。

●問はずして、油の乘つた顏は人を引付くるところあるものなり。これ無くば、猶未だ、大に油の乘つたるに非ずと知るべし。

●油の乘つた男には引付けらる。油の去つた男には、暫らく相對すれば、自から滅入るべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●『美』といふ事にも、油の乘る時あり。女は、妙齡の時、油の乘ると限るものにもあらず。
●美人に在りては、色香といふは油なるべし。「殘の色香」などいふは、猶ほ油の殘ることを意味するなるべし。
●美人は、廿三四歲より四十二三歲の間に、油の乘る時來るべし。男子は則ち四十歲以後六十前後までにあり。
●これより以前に屬するは、夙成なり。此以後まで續くものは、老健なり。
●『油』の語は、唯だアブラとして解釋すべし。アブラの一語、言海にも之を載せず。
●アブラは、換言すれば、スルほど六ヶしくなるべし。日本語にアブラとして置けば頗る味あり。
●吾輩を以て見れば、アブラは精力なり、エネルギイなりといふべし。一の活力なりといふべし。
●或は、アブラは熱なりともいふべし。燃燒の作用に由りて、熱の生ずる如く、人の身心に、境遇により、時により、內外自他、種々微妙の、原因によりて、燃燒の作用を起し、依て生ずる熱なりといふべし。
●大燃は、大熱を生じ、小燃は小熱を生ずべし。
●熱の生ずるとき、人の輝くとき也、光るとき也。而して觸接する、すべてのものに溫情を以て迎へらるゝとき也。
●油の乘つた男には、旭日を聯想す。吾輩、新春に、油の乘つた男を月旦する所以なり。

其三

●佐久間象山の語に、卓勵風發可也、激昂憤勵不可也といへり。卓勵風發は、油の乘つたる態度也。
●激昂憤勵は、壯は則壯なれども、斷續の氣あり、悲憤の氣あり。
◎角界に、『元氣一抔』といふ事あり。まさに卓勵風發を意味する好箇の俗語なりといふべし。
◎卓勵風發は「躍起」の事に非ず。躍起は、腰脆くして力折れ易し。健鬪に耐えず。
●唯だ元氣一抔の者のみ、能く健鬪に耐ふ。健鬪は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

力の充實して、而して出足の早く運ばるゝことを必要とす。

●躍起は、力の充實は、これあらん。出足淺くして、顚倒し易し。躍起は健鬪に似て否也。

●若し健鬪と躍起とを、色彩を以て分別し得べきものならしめば、或は、維新前後の錦繪の對照の如くなるべし。

●明治の錦繪は、インキを以て彩り、美しけれども浮き〳〵したる色也。昔の錦繪は、オトナシくして、何となく沈實の色也。

其 四

●油の乘るといふ。乘るの一語頗る趣味あり。或る靈が『乘る』といふに同じ、狐憑の憑の義なり。

●『もの』が憑くときは、凡夫も不思議の力を現はすことあり。油が乘り來るとき、精采一變するは、これと異なること無し。

●勢を得れば、鼠も虎となるといへり。油が乘るは、勢を得ることなり。

●油が乘るは、精力が乘りうつる也。油の乘つたる間は、其人『精力の權化』ならずんばあらず。

●されば、昔「油の乘つた」男の、行末を見て、其の全盛時を疑ふは矮人の見也。

●梅干に對して、其「皺クチャ」を笑ふことを已めよ。鶯鳴かせし花の盛には、油の乘つたこともあるものぞ。

●智惠の矢といふ三段目の老力士ありき。脛は瘠せて蚊の如し。激昂憤勵して角へども、何人にも勝つこと無し。昔、大達を惱ましゝ面影は唯だ立際の一刹那に殘れるのみ也。

●力士の力は、美人の美と同じ。力の充つるとき、美の輝くとき、則ち油の乘るときならずんばあらず。

●力士の力、充實して、元氣一抔なるとき、摩利支天は、其の兩腕に宿るべし。

●美人の美が滿潮なるとき、滿身嬌態ならざるは無し、「一笑百媚生」の時なり。

●褒姒をして、長生して落魄せしめなば、唐土にも、亦た一の卒都婆小町を見る可かりし也。其の時、誰か、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●「美」といふ事にも、油の乘る時あり。女は、妙齡の時、油の乘ると限るものにもあらず。

●美人に在りては、色香といふは油なるべし。「殘の色香」などいふは、猶ほ油の殘ることを意味するなるべし。

●美人は、廿三四歳より四十二三歳の間に、油の乘る時來るべし。男子は則ち四十歳以後六十前後までにあり。

●これより以前に屬するは、夙成なり。此以後まで續くものは、老健なり。

●「油」の語は、唯だアブラとして解釋すべし。アブラの一語、言海にも之を載せず。

●アブラは、換言すれば、スルほど六ヶしくなるべし。日本語にアブラとして置けば頗る味あり。

●吾輩を以て見れば、アブラは精力なり、エネルギイなりといふべし。一の活力なりといふべし。

●或は、アブラは熱なりともいふべし。燃燒の作用に由りて、熱の生ずる如く、人の身心に、境遇により、時により、內外自他、種々微妙の、原因によりて、燃燒の作用を起し、依て生ずる熱なりといふべし。

●大燃は、大熱を生じ、小燃は小熱を生ずべし。

●熱の生ずるとき、人の輝くとき也、光るとき也。而して觸接する、すべてのものに溫情を以て迎へらるとき也。

●油の乘つた男には、旭日を聯想す。吾輩、新春に、油の乘つた男を月旦する所以なり。

其三

●佐久間象山の語に、卓勵風發可也、激昂憤勵不可也といへり。卓勵風發は、油の乘つたる態度也。

●激昂憤勵は、壯は則壯なれども、斷續の氣あり、悲憤の氣あり。

●角界に、『元氣一杯』といふ事あり。まさに卓勵風發を意味する好箇の俗語なりといふべし。

●卓勵風發は「躍起」の事に非ず。躍起は、腰脆くして力折れ易し。健闘に耐えず。

●唯だ元氣一杯の者のみ、能く健闘に耐ふ。健闘は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

力の充實して、而して出足の早く運ばるゝことを必要とす。

●躍起は、力の充實は、これあらん。出足淺くして、顚倒し易し。躍起は健鬪に似て否也。

●若し健鬪と躍起とを、色彩を以て分別し得べきものならしめば、或は、維新前後の錦繪の對照の如くなるべし。

●明治の錦繪は、インキを以て彩り、美しけれども浮きくしたる色也。昔の錦繪は、オトナシくして、何となく沈實の色也。

其　四

●油の乘るといふ。乘るの一語頗る趣味あり。或る靈が『乘る』といふに同じ、狐憑の憑の義なり。

●『もの』が憑くときは、凡夫も不思議の力を現はすことあり。油が乘り來るとき、精采一變するは、これと異なること無し。

●勢を得れば、鼠も虎となるといへり。油が乘るは、勢を得ることとなり。

●油が乘るは、精力が乘りうつる也。油の乘つたる間は、其人『精力の權化』ならずんばあらず。

●されば、昔「油の乘つた」男の、行末を見て、其の全盛時を疑ふは矮人の見也。

●梅干に對して、其「皺クチャ」を笑ふことを已めよ。鶯鳴かせし花の盛には、油の乘つたこともあるものぞ。

●智惠の矢といふ三段目の老力士ありき。脛は瘠せて蚊の如し。激昂憤勵して角へども、何人にも勝つこと無し。昔、大達を悩ましゝ面影は唯だ立際の一刹那に殘れるのみ也。

●力士の力は、美人の美と同じ。力の充つるとき、美の輝くとき、則ち油の乘るときならずんばあらず。

●力士の力、充實して、元氣一抔なるとき、摩利支天は、其の兩腕に宿るべし。

●美人の美が滿潮なるとき、滿身嬌態ならざるは無し、「一笑百媚生」の時なり。

●褒姒をして、長生して落魄せしめなば、唐士にも、亦た一の卒都婆小町を見る可かりし也。其の時、誰か、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「彼女に烽火一笑の全盛時」ありしを信ぜんや。

●老年者は、屢、青年者に對して、若き時の自慢話を爲すべし。青年者は、其の現在の意氣地無きを見て、往々、退いて笑ふ。

●老人は「油」の拔けたるもの也。油の乘りつゝある壯者に對して、自分も油の乘つたる昔を回想するもの也。

●野花幽草も、開落自ら春秋を爲す。何人にも、一度は、油の乘る花時無くんばあらず。

其五

●油の乘つたる男が、十分に、其の精華を發揮するときは、他人も、不知不識、魅せられて、油の乘るもの也。

●音樂の名手が演奏するときは、聽衆は自から首を振り肩を搖かして、其の節調に合す。

●一人卓勵風發すれば、以て一代を振はしむるに足る。『油の乘る』ことは、感化の働を爲す。『油』は傳染性のものならずんばあらず。

●斯人出でゝ斯道振ふといふは、其の實、『油』の傳染すること也。

●異常に油の乘つたるものは、所謂偉才也。如何なる道藝と雖も、偉才出づれば、則ち振はざること無し。

●雲右衞門の浪花節に於けるは、未曾有の偉才といふを妨げず。浪花節の木戸錢を一圓に引上げたるのみにあらざるなり。

●想ふに、彼は本來一角の才物なるべし。當年、帝都を喰詰めて出發するのときは、一箇の泥鼠たるに過ぎず。

●彼、夜を籠めて、東海道を西下し沼津に到る。彼、飢ゑて斃れんとす。嚢底僅かに廿錢銀貨一箇あり、一擲、以て桃中軒の辨當を買ふ。

●吾輩には、桃中軒の辨當、殊に甘しとも思はず。然れども雲右の爲には、啻に滹沱河の麥飯どころにもあらざりし也。

●雲右衞門の名は、彼の義兄、天津風雲右衞門の名に取るといふ。天津風は、乙女ならで、一抱ある柳の肥大力士にして、臂小さくして腰弱く左まで、油の乘つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たことも聞かざりしが、其の盟を結びし義弟に油が乘つて、雲右衞門の名、日下に廣がれり。

●雲右衞門が、惣髮の括り髮にして、扇を笏に構へて高座に登るときは、其の大なる目は覇氣に輝く。

●吾輩も亦た嘗て、彼を本郷座に聽く。彼や、所謂浪花節の醇なるものにあらず。寧ろ彼は、浪花節に於ては、小醇にして大疵なる者乎。

●然れども其大疵なるところに、彼の性命は存す。彼の浪花節には、琵琶歌やら、新内やら、義太夫やら、種々樣々の節調雜出し、而して拔群の美音以て之を貫く。

●若し彼以下の才をして之を爲さしめば、癖だらけにして聽くに堪えざるべし。唯だ、雲右衞門に油の乘つたる故に、其の百癖は、悉く活躍して、瘡痕を化して、笑靨と見せしむ。

●然りと雖も、雲右、徒らに「油」のみにも非ず。油が乘れば、名を爲すだけの素地は在り。第一、其の才氣、第二、其の美音也。

●辰雄、雛吉、美當一調の非常上手ならざるには非ず。唯だ油の乘り方、遠く雲右に若かず。舊套を脱せざる所以也。

●油の乘るところには、癖あり。癖にして生氣の溌剌たるものあるところ、油の乘つた男たることを表章す。

其六

●雲右衞門に絶好の相對者は和田三造なり。彼は畫界の雲右衞門ならずんばあらず。

●三造の手腕は、第一流を以て之に許すには猶ほ遠し、然れども、彼は畫界を騷がし、世間を驚かせり。彼は油の乘つたる男也。

●三造は、「南風」の畫を以て出現せり。續きて、公設展覽會にも、彼の名、場を壓へり。公設展覽會は、三造が名を爲す爲の舞臺たらずんばあらざりき。

●「南風」に畫ける、風を孕んだる漁舟に立てる老船頭は如何にも快し。風を孕むは、風神が、船に『乘りうつる』ものなり。「南風」は三造の運命を現示す。

●横山大觀が屈原を畫きし當時は、油の乘つた男の槪

無くんばあらざりき。然れども之を三造に比すれば、風雲の氣猶ほ足らず。

◉三造は、「南風」以前、佳書無きには非ず。「大島富士」の如き、小圖と雖も、寧ろ「南風」以上の韻致あり。唯だ、彼は油の乘り方足らずして、筆端に氣燄足らざりき。

◉三造は、雲右衛門に激發されて、雲右の「油」の傳染したるの感無くんばあらず。三造が、一時、括髪を結び、キビラの衣に、きびらの袴を穿ちたるは、正にカンバスを挾める雲右衛門の風神といふの外無し。

◉「おもひて」の中澤弘光も、多年、油書を事として、今、漸く油の乘り來れるを見る。彼も亦た、當年、美術學校を一年位にして卒業せる秀才の仲間也。

◉「おもひて」の二千圓は、毀譽紛々たるものある如し。吾輩を以て見れば、兎も角、油の乘つたる畫たるを失はず。

◉聞說、彼が、此畫を描くや、極めて强き光線を寫し出さんが爲に、畫室の屋根を徹して、炎々たる暑光を引き、かくすること數週日、殆んど日射病に罹るに至る。

◉池中出現の觀世音は、何物をモデルとせるやを知らずと雖も、鼻大に、品低くして、崇高の感を與へず。畫者、敬虔の信念足らざるを徵するに足る。

◉若し、彼に十分、敬虔の信念あるありて、最新の技術を利用し、日射病に罹るまでの努力を敢てせば、「おもひて」は不朽の作たりしならん。

◉惠心僧都の國寶、來迎菩薩圖に於ける、狩野芳崖の悲母觀音に於ける、共に、極めて熱烈なる敬虔の信念ありて、筆に油の乘りたるものならずんばあらず。

◉油の乘つた男には、永遠の信念無かる可らず。然らずんば、縱令、油は乘るといふとも、其光輝は、一時にして已まんのみ。文章藝術の士、敬虔の心を必要とする所以也。

其七

◉花形は、油の乘つた男ならずんばあらず。油が乘り來れば、則ち花形たらずんば已まず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●其時の花形、其年の花形、而して其の時代の花形あり。花形の壽命は長短樣々なり。唯だ、油の乘り方の厚薄如何による。

●星亨の如きは、油の乘つた盛りに斃れたり。快速力の電車に停電の起れるが如き乎。

●十年來、油の乘つた男は、大浦兼武と後藤新平と也。此二人は、テキハキとして、油の力、未だ〱縮ささうに見ゆ。

●一時、油の乘つた男は、平岡浩太郎と阪本金彌となりき。平岡は既に在らず、阪本稍沈默すと雖も、尙ほ將來あるべし。

●聞說、平岡は、眼一丁字無き男也。彼は、數人の學士を秘書とし、到處、つねに之を隨へ、邦文電報すらも、自ら起草するの力無し。

●彼の『油』は金なりき。遮莫、油の乘るといふは恐るべし。彼が一片稜々の氣を驅つて、民黨聯合を斡旋したるときは、天下、彼の風采を想望せざるはあらざりき。

●内閣彈劾文を上奏したる河野廣中が、衆議院に於ける議長としての一刹那は、彼が油の乘つたる高潮時ならずんばあらず。

●河野の前半生は、油の乘つたる生涯といふべし。十八歲、村童の昔、裸馬に鞭つて參謀板垣の軍門に馳付け、鄉村の安全を願出てあるあり、福島事件となり、自由黨の發展となり、彼が政黨史に貢献したる効蹟亦た少からず。

●油の乘つたる河野は、東北男兒の選手なりき。彼の後半生は禪に隱る。

●吾輩は、俗人は俗人として活動すべきを主張す。俗人にして禪に隱るゝは、『油』の拔けたる也。

●參禪は可也。修養の一法としては、吾輩亦た頗る之に左袒す。然れども、之に從事して世事を擲つに至つては吾輩取らず。

●古來、出家を罰するときは、之をして還俗せしむ。其の本領を沒却せしむるは、最後の制裁なれば也。

●油の乘つた俗人が、油を拔きて出家を學ぶは、自ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の生涯に死を宣告するもの也。其以後は、形骸の生活ならずんばあらず。

●「英雄回首即神仙」といふは、殘る『油』を野狐禪に費すの謂にはあらず。

●鳥尾得菴、三浦觀樹の如き、共に、夙に油の乘つた男なり。其の後半生を野狐禪に沒すること殊に惜むべし。

●得菴、觀樹は共に奇才、機鋒鋭邁の人、其の覇氣、劍氣を帶ぶるところ、殊に珍重するに足れり。

●是等鋭敏の人は、元來不讀書の才。其の味は、直覺に在り。如此の人、讀書に沒頭すれば、理路に拘泥するに至り、天成の妙味を沒了す。

●子品川嘗て、鳥尾讀書後、役に立たぬようになれりと評せしは蓋し眞也。

●彼等の『油』は、蓋し本箱の外にあり。彼等が書を讀んで「油」を拔くは、恰も祈禱して狐憑を落すが如し。

●狐憑の去つたる後は、常識に還るべし。然れども、古來、狐の落ちたる人に、一點、靈活の氣を帶びたるものあることを聞かず。

其　八

●公伊藤は、明治年代を通じて、尤も長く、尤も大きく油の乘つた男ならずんばあらず。公の名は、百年を待たずして、青史に輝かん。

●公の如き、世界的大舞臺に立てるものは、暫らく之を措き、如何なる細技と雖も、油が乘れば人を動かすに足る。

●吾輩は、古賀兼造の如く、浪花節を以て、聽ものゝ第一に推賞するものに非ず。然れども浪花節と雖も、油が乘り來れば、萬人の感興を集むるに足ることを知る。

●アレは何々なればとて、藝に由て、品位を付し、以て好惡を分つ如きは抑野暮といはざる可らず。浪花節は言ふに及ばず、假令阿呆陀羅經と雖も、祭文語りと雖も、以て人を動かすに足るべきなり。

●人を動かすと否とは、唯だ油の乘ると否との一點にあり。審美學上、申分なき美貌といふとも、油が乘ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざれば、造り花に異ならず。

●神戸驛に、美音の驛夫あり。發車前、上下の汽車を報ずるに、プラットフォームに徹する朗々たる音調、實に滿腹の精神を濺ぐ。今、神戸驛の一名物となる。

●呼出し勘太の如きも、呼出しに油の乘つて、人に知られたるもの也。油が乘らざれば、經國の事業に關すと雖も、人に知られず。

●油の乘り來るは、月の次第に滿つるが如し。精采奕々として加はり、若し浮雲の妨ぐる無かりせば赫灼たる光輝を發すべし。

●近時、次第に油の乘り來れるもの、政事家としては、侯桂。子寺内及び原敬の如き、力士の鳳。義大夫の越路、碁界の本因坊秀榮の如き、殆んど人の耳目を集注せしむるものあり。

●鳳のケン〳〵は角界に一生面を開く。油の乘り方は、入幕の荒岩以上なり。秀榮の如き「油」にして續かば、秀甫を凌ぎて近世第一の名を爲さんこと、必ずしも難事にあらず。

●秀榮は今八段と稱す。然れども、技を以て能く彼の鋭鋒に對抗し得るものある無し。又た棊界の一壯觀たらずとせず。

●秀榮は、しば〳〵嫋々としたる女竹の如き石をうち、敵手の之に懸るに及び、健闘して敵を捲き潰す。

●秀榮の技、入神を以て驚く者あり。然れども、彼の性命は健闘にあり。彼の局、つねに後半面に於て、機略百出、而して健闘の氣一貫して敵手を呑む。

●能く健闘に耐ふる者は、吾輩、其の油の乘つた男たるを識る。油の乘つた男は、技の後半に於て必ず振ふ。

●吾輩、越路を聽く。其の語り口の後半に力を入るゝといふのみに非ず。長きものの後半に至つて、彼の油は乘り來つて、前半は平々、後半は絢爛たり。

●彼が先きに、歌舞伎座に逆櫓を語るや、彼の長き一段の終り、櫓聲怒濤の處に到るに、油十分に乘り來つて、喉頭の筋肉昂張し、顏朱を爲し、玉の汗迸きかゝり、蓋世の意氣場に磅礴す。

●吾輩つねに眼前に髣髴なるは、團十郎や常陸山の場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に登る風神、蓋世の意氣あること是也。「筆掃二千軍一」は、油の乘つた事を意味す。

◉油の十分乘つた男は「蓋世の意氣」を生ず。「蓋世の意氣」は、見る毎に、人の心目を一新し、人に無限の快感を與ふるものならずんばあらず。

其九

◉「乘つた油」の本性を自覺せざる者は、不幸なる哉。文中子は、自知者英、自勝者雄といへり。油乘つたる男と雖、自ら知り自ら克つに非ずんば、未だ偉材とするに足らざる也。

◉源之助が大阪より東上する頃の評判に、「首は權十郎、我童を等分にして、安本龜八に一皮塗らせ、家橘と左團次とを振り掛けたといふ、一寸見ても一萬兩の値はあるといふ。

◉源之助が、所謂姉御や、キャンの藝者になつて、醉つて管を卷くときは、彼が油の乘り來るところ也。此の本領ありて、一坐に人無しとは云へ、由良之助に扮するといふは何事ぞや。

◉雁次郎も油が乘り來つて名優にならんとしつゝあり。而して帝都に來つて、盛綱を見するといふは了簡違なるべし。

◉高田實が舊劇を演じたるも、亦た勘違なり。彼に油の乘つたるは、新派の大撰手としての自覺の油ならずんばあらず。

◉所謂、高田の腹藝なるもの、之を新劇にのみ發揮せしめば、佛と羅漢ほどの差別ありとはいへ、團十郎の氣合を呑込みたること、彼ほどのものは、舊俳には有ること無し。

◉彼が太十を演じたるは、一期の誤なり。高田の偉大なる光秀は、徒らに舊俳に批難の的を提供したるに過ぎず。

◉呂昇と雖も、其清婉なる義太夫を、鳴門、堀河、御殿、壺阪等に限らしめば天晴ならんと思はるゝに、彼は、往々好んで大物を語るが故に、遂に攝津、越路の壘に薄るを得ず。

◉吾輩を以て見れば、小説に於ける天外も亦た、其本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

領を自覺せざる者ならずんばあらず。

●天外は當年、硯友派の盛時に、獨立崛起す。其の手腕固より凡ならず。『魔風戀風』に至つて、油十分に乘る。

●而して彼が、實業家を描くと稱して、『長者星』を出すに及んで、感興前の如くならず。他人の畑に往ては油十分に乘らざるもの也。

●山路愛山の健筆亦驚くべし。然れども、彼が古人を論ずると、今人を論ずるに於ては、頗る面目を異にす。

●彼は古人の書を讀んで、古人を論ず。而して今人を識らずして今人を論ず。「四十七士」を評傳するには油が乘り「嗚呼春畝先生」には感興無し。

●這般の點に於ては、故兒玉子は偉なりとすべし。彼の機智あるを以てして、其の本領に非ざるの舞臺には、緘默して一言を發せず。

其十

●油の乘つた男は、其の油の高潮時を自覺せざる可らず。是亦た、自知の一半也。

●盛名は、多くは油の乘つた高潮時の後に來る。盛名の時は油の力漸く衰るとき也。盛名の下、久しく居り難き所以にあらずや。

●詩人晩成といふと雖も、老大成の作には熱少し。油の乘るは壯時にあり。

●高靑邱の詩を讀めば、奔放飛騰の氣あり。彼は四十餘にして死せり。「笑拂腰間寶劍光、滿堂美人色如土」此句、老人の口より出でず。彼は、油の高潮時に死せる也。

●倦むといふは、油の減りたることを意味す。懶しといふは油の拔けたる也。

●箸の轉んでも、袖を以て口を掩ふは、油の乘る前也。花が咲いても出るは懶うし、何となく家に居るといふは、油の拔けたる後也。

●油の拔けたる後、言句、何の光燄あらんや、何の精釆あらんや。覇心山の如し、咳唾も珠を爲すといふは、此時に在り。

●歲月飛ぶが如し。貴き油も久しく續かず。詩才ある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に登る風神、蓋世の意氣あること是也。「筆掃二千軍一」は、油の乘つた事を意味す。

◉油の十分乘つた男は「蓋世の意氣」を生ず。「蓋世の意氣」は、見る毎に、人の心目を一新し、人に無限の快感を與ふるものならずんばあらず。

其九

◉「乘つた油」の本性を自覺せざる者は、不幸なる哉。文中子は、自知者英、自勝者雄といへり。油乘つたる男と雖、自ら知り自ら克つに非ずんば、未だ偉材とするに足らざる也。

◉源之助が大阪より東上する頃の評判に、「首は權十郎、我童を等分にして、安本龜八に一皮塗らせ、家橘と左團次とを振り掛けたといふ、一寸見ても一萬兩の値はあるといふ。

◉源之助が、所謂姉御や、キャンの藝者になつて、醉つて管を卷くときは、彼が油の乘り來るところ也。此の本領ありて、一坐に人無しとは云へ、由良之助に扮するといふは何事ぞや。

◉雁次郎も油が乘り來つて名優にならんとしつゝあり。而して帝都に來つて、盛綱を見するといふは了簡違なるべし。

◉高田實が舊劇を演じたるも、亦た勘違なり。彼に油の乘つたるは、新派の大撰手としての自覺の油ならずんばあらず。

◉所謂、高田の腹藝なるもの、之を新劇にのみ發揮せしめば、佛と羅漢ほどの差別ありとはいへ、團十郎の氣合を呑込みたること、彼ほどのものは、舊俳には有ること無し。

◉彼が太十を演じたるは、一期の誤なり。高田の偉大なる光秀は、徒らに舊俳に批難の的を提供したるに過ぎず。

◉呂昇と雖も、其淸婉なる義太夫を、鳴門、堀河、御殿、壺阪等に限らしめば天晴ならんと思はるゝに、彼は、往々好んで大物を語るが故に、遂に攝津、越路の壘に薄るを得ず。

◉吾輩を以て見れば、小説に於ける天外も亦た、其本

領を自覺せざる者ならずんばあらず。

●天外は當年、硯友派の盛時に、獨立崛起す。其の手腕固より凡ならず。『魔風戀風』に至つて、油十分に乘る。

●而して彼が、實業家を描くと稱して、『長者星』を出すに及んで、感興前の如くならず。他人の畑に往ては油十分に乘らざるもの也。

●山路愛山の健筆亦驚くべし。然れども、彼が古人を論ずると、今人を論ずるに於ては、頗る面目を異にす。

●彼は古人の書を讀んで、古人を論ず。而して今人を識らずして今人を論ず。「四十七士」を評傳するには油が乘り「嗚呼春畝先生」には感興無し。

●這般の點に於ては、故兒玉子は偉なりとすべし。彼の機智あるを以てして、其の本領に非ざるの舞臺には、緘默して一言を發せず。

其十

●油の乘つた男は、其の油の高潮時を自覺せざる可らず。是亦た、自知の一半也。

●盛名は、多くは油の乘つた高潮時の後に來る。盛名の時は油の力漸く衰るとき也。盛名の下、久しく居り難き所以にあらずや。

●詩人晩成といふと雖も、老大成の作には熱少し。油の乘るは壯時にあり。

●高靑邱の詩を讀めば、奔放飛騰の氣あり。彼は四十餘にして死せり。「笑拂腰間寶劍光、滿堂美人色如土」此句、老人の口より出てず。彼は、油の高潮時に死せる也。

●倦むといふは、油の減りたることを意味す。懶しといふは油の拔けたる也。

●箸の轉んでも、袖を以て口を掩ふは、油の乘る前也。花が咲いても出るは懶うし、何となく家に居るといふは、油の拔けたる後也。

●油の拔けたる後、言句、何の光燄あらんや、何の精采あらんや。覇心山の如し、咳唾も珠を爲すといふは、此時に在り。

●歳月飛ぶが如し。貴き油も久しく續かず。詩才ある

者、壯時に及んで須らく努力せよ。

●昨年、吾輩、寶生九郎を聽く。此曲祇應ニ天上在ハ人間能得幾回聞の感無くんばあらず。

●彼、恐らくは空前の名手ならん。頽齡七十餘に及んで、婉轉穩秀の詞、尙ほ油の乘つた男たるを失はず。

●彼、猶ほ此絕倫の技を有して、七十を以て勇退を宣せるは、流石に自知の明あるものと感服に堪へず。

●攝津の歌舞伎座に現はるゝや、其の披露の口上に、「大掾今年七十三、老人のよせば善いにとの御叱りもあらん、唯只當地の空なつかしく」と。吾輩をして言はしむるも、彼の場合、同情すべきは此一點にあり。

●小錦、鳳凰の衰へて場に上るは、一種の悲劇なり。今春、常陸山勇退の志あることを聞くは、角力道の爲に賀すべし。

●常陸山は、今に於ても、實力東西に獨歩す。唯だ覇心の既に消磨するを如何せん。彼、此際能く勇退せば、遂に、谷風、雷電を凌ぎて、角界未曾有の大力士たるを得ん。

其十一

●油の乘るには、前提として默解を必要とす。則ち呼吸を呑込むことを必要とす。而して、默解は、必らず其初に、洞然頓悟の形に於て來らん。

●恰も、數十の鍵を以て、一の戶を開くが如く、アレカ是かと、取換へ試むる中、其的切なるものに遭際せば、釋然として開くべし。

●其の取換へ試驗する中には、耐忍も努力もあるべし、厲志自ら此間に存す。カチンと音して鍵の滑かに轉回するは、シツクリ默解せる也。

●鍵の中るや、必らず截然として一刹那に來る頓悟なり。一たび其秘鍵を得れば、幾回すと雖も、呼吸の分らぬこと無し。

●一旦秘鍵を得るの時、瘧の落ちたるが如く、夢の覺むるが如く、病齒の拔けたるが如く、一旦爽然として此より感興起るべし。

●洞然として呼吸を呑み込み、爽然として感興湧き、心手相應じ、天人相和して、活用、音樂的の節調を爲すに至れば、則ち油の十分に乘りたる也。

●されば、油の乘る前には神機一轉あり。外には、一操作の喝采を博するもの無くんばあらず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●油の乗るには、一傑作當らざる可らず。「油の乗つた男」たらしめんには、一傑作當らしめざる可らず。

●吠る犬は睡れる獅子に勝されり。凡夫も盛んなれば神崇らず。「油の乗つた男」は前に敵無し。

●「鈴久」は「株」に當り、漱石は「猫」に當り、浪六は「三日月」に當り、高見山は一度優勝旗を得て、皆一時に光を發す。

其十二

●教育は則ち統率也。政治家の統率は、則ち部下を訓錬する所以也。

●部下をして、先を爭ふて「油が乗つた男」たらしむる者は、極めて統率の器也。

●統率の才といふは、苟合、以て事を擧る所以にあらず。「油」を部下に乗らしめて、音樂的に活用せしむ。統率の才無き者は、部下の油を奪つて、軋しる音を發せしむ。

●吾輩、常陸山に取るは、其の「油の乗つた男」を作るの才にあり。

●彼の西方の敗壘に據つて獨力健闘せしとき、天下の壯觀といふと雖も、部下を鞭撻して、軍容を整へし手腕は、現代稀に觀るところ也。

●一箇人の弟子にして、「油の乗つた男」の多きこと、常陸山の如きは東西比無し。彼、師弟子健闘の氣、回向院を壓す。

●一藝人を以て之を輕視するを已めよ。「油の乗つた男」を作るの努力、豈、容易ならんや。

●這般の意味に於て、福澤は明治に雄視すといふを妨げず。福澤以後、公山縣の政界に於ける、部下に油を乗らせるの才蓋し獨歩也。

●輓近の人物、公伊藤公山縣を始めとし、維新中興の名士、長州に屬する者、概ね吉田松陰の門に出づ。

●「油の乗つた男」を多く作れること、松陰の如きは、近世東西、未曾有といふを妨げず。

●「神來」は「油」を賦與す。松陰は神來也。教育家は「神來」ならざる可らず。

●「神來」は、齡の老少と、時の長短とに關せず。「油の乗つた男」を作ることは壯年者にても能くし得べし。

●松陰投艦の壯擧失敗すと雖も、「油」是より破格に乗り、猛氣凛然として、觸るゝところ「神來」を現ず。

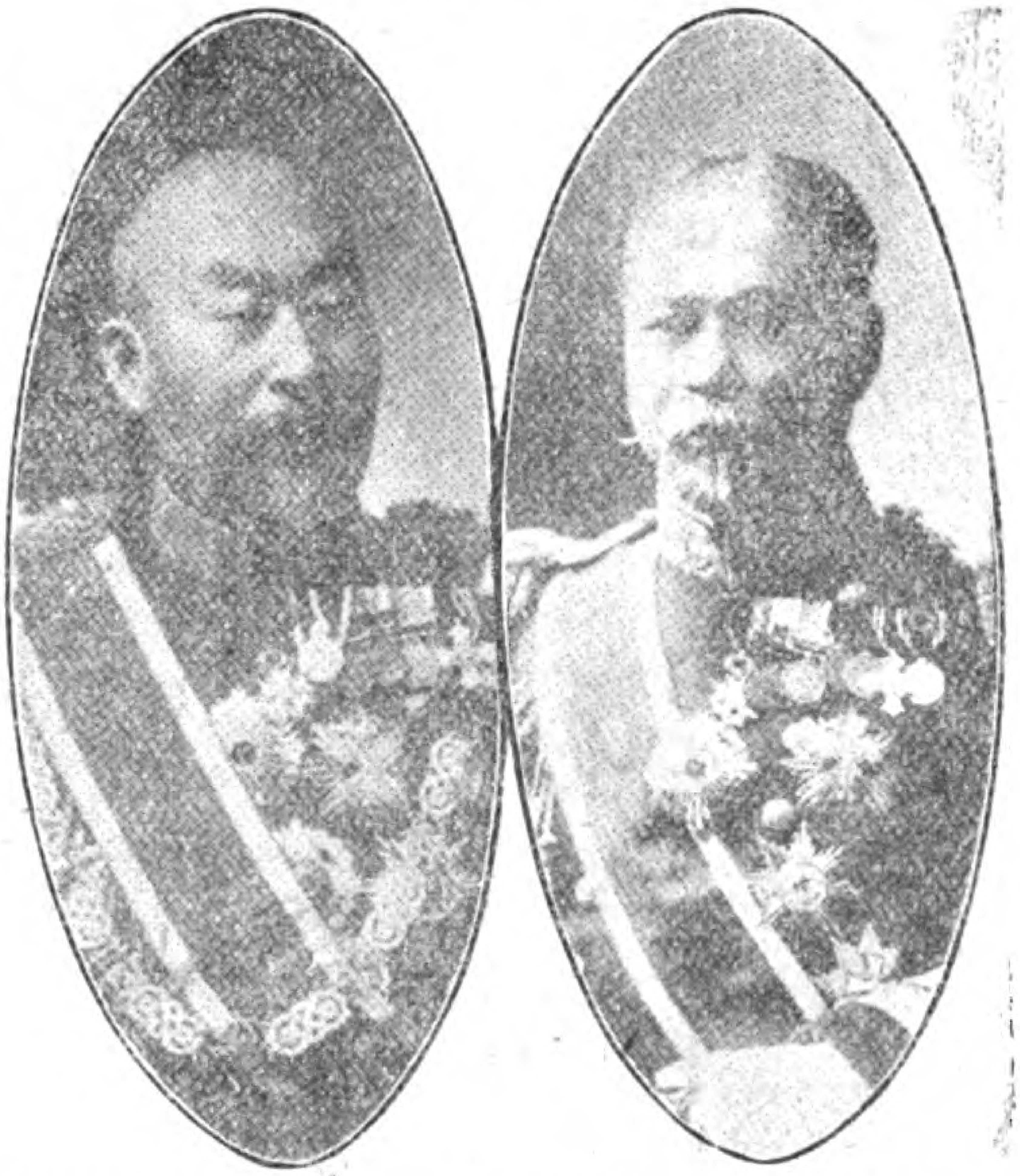
●教育は「油の乗つた男」を作る奇蹟也。吾輩は謂ふ、偉大なる教育は、大なる奇蹟也。人間の能くする奇蹟は、唯だ是のみ。

明治四十二年十二月十四日 稿、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人物評論（一）

山本伯と寺内子



△山本伯と寺内子

三宅雄二郎

山本伯及び寺内子は首相候補者と見做されて居る、他に首相たるの能力あるものが無いでは無いが、陸海軍擴張の結果、將た二大戰役に勝つた結果、軍人の方が首相として内閣に重きを爲すかに考へられて來たのである。其點からして伯及び子が慥に首相たる可き順序になつて居る。けれども此二人は性格及び經歷を異にして居る。山本伯は夙に海軍部内で頭角を現はし、大佐にして權兵衞大臣を以て目せられ、遂に大臣となり、罷めて後進を其職に置き、自ら隱然全部を總括して居る、今は女婿財部氏を拔擢して次官とし、表面よりして權力の爭はれぬものと爲つた。其上伯は薩派の中心である、薩派は近年頗る衰へ、政治上の事は殆んど盡く長派に讓るの已むを得ぬのであるが、海軍は伯を首領として薩摩の海軍である、他より奈何ともすることが出來ぬ。伯は只閥を以て固むる許りでなく、事實に於て俊才を拔擢する、財部も一の俊才である。種々の弊害は伴つて居るも海軍全體に働きは現れて居る、

伯は山縣系よりは伊藤系に近く、そして現に薩摩出身の代議士は盡く政友會である。西園寺侯は或は桂侯

に對抗する力が無いかも知れぬ、無いといふ場合に之と對抗し得るは獨り山本伯であるとも言へるであらう。若し力量よりして、又貫目よりして、首相候補者を求むれば伯は其隨一のものである、山本内閣の名は桂内閣の名に優るとも劣りはせぬ。が伯は首相と爲るか如何か、伯は　陛下の思召も目出度い、首相と爲るに難い事はない、けれども主我的分子の勝つた方であつて、自ら意見を立てゝ之を徹さうとする内閣の首班としての折合が危まれる、閣員は概ね唯々諾々命を聽くとするも、貴衆兩院との關係が危まれる、政客と談話するに巧であつて、之を操縱するに苦まぬであらうが、併し是迄熟練を積んで居らぬ、大なる事に苦まずとも案外小さな事に破綻を免れぬとも限らぬ、首相として從來の聲名に加ふる所あるとは斷定し難い。

首相としては必ず何か爲す所があり、西園寺侯の單に内閣を維持するに止まつたのとは違ふ、桂侯よりも一層見る可きことが有らう、しかし色々な困難が起り、それを無理に耐へて餘計な面倒な目に遇ふも知れぬ、

山内氏及び或る關係の金を運轉すれば議會に困難は無い樣だが、平素海軍の事を專にし、他に經驗の多くない爲に、何分少し思束ない所がある。それよりも陸海軍の權衡を壞したならば、歷史上に首相以上に重きを爲すやにも思はれる。

普通熟語に海陸と稱して陸海とはいはぬ、明治幾年頃迄であつたか、海陸軍と稱して陸海軍とは言はなかつた。それを西南戰役に引續き陸軍が比較的多く勢力を張り、遂に陸海軍と呼ばすことに定まつた、そして名のみで無く實も亦た陸主海從と爲つた、西鄉侯は陸軍中將から海軍中將に轉じ、遂に海軍大將と爲り、樺山伯も左樣である、陸軍出身者が海軍を支配したが、海軍よりしては陸軍に何も爲し得る所が無い。

けれど二大戰役に於て海軍の必要は認められた、特に後の戰役に於て陸軍は決戰するを得なかつたが、海軍は決戰して大勝利を得た、陸軍は今後大陸に戰ふ可き豫定を以て重きを置かれて居るが、大陸に戰ふ場合、海路を安全にする丈海軍を以て十分に海上權を制さな

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれぱならぬ、その孰れが重いかは人々各意見を異にするが、山本伯の力で陸海軍と稱し來つたのを海陸軍と改むる事が出來ぬとも言はれぬ、其方に力を致すが無難ではないか。

寺内子は桂侯の後繼者たるに止まる、桂の樣に圓くなく、年齢もさう違ひはせぬが、遺產を貰ふより外に出まい。子が首相と爲るなどは前に人の想ひ及ばぬ所であつた。陸相たるが最も適任である。が首相となり得ぬ事は無い、山本伯よりは無事に勤まるであらう、がそれ丈の事である、割合に無事なる可しと言ふ丈の事である。首相候補として二人が擧げられるが、此間に少からぬ差がある。(談話筆記)

△山本伯と寺内子

柏軒

山本、寺内、共に軍人で、大將で、而して又政事家である。

寺内子が西園寺内閣時代に、桂黨の計略に乘らずに、專ら西園寺内閣の爲めに盡したのは、實に政事家の公德として稱贊すべきもので、爾來政友會は少からず之を德とし、且つ子の聲望に由て、之を總理大臣にまでも祭り上げやうとした、原敬氏などは此の爲め頗ぶる肝膽を碎いたやうだ、是は一部で評するやうに、强ち桂黨から寺内子を離間して、桂黨の軍人間に於ける勢力を殺がうといふやうな計略とのみも視られ無いやうである。

併しながら寺内子は容易に政友會の希望通りにならぬ、子は陸軍大將として、軍人たる本分を誤らぬのが畢生の志望で、陸軍大臣をこそ勉むれ、是れ以外の大臣の椅子などには毛頭も野心が無いらしい、况んや總理大臣たるをやだ、子は相應に政事家たり得る資格がある、併しながらウエリントン大將の總理大臣として失敗したのに鑑みてか、偏へに陸軍大將として終りを全くする期望らしい、石橋を叩いて渡る主義として、其れも或は賢き分別かも知れぬ、生中政友會などに擔

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がれた處が、結局或る過度期の總理大臣とされる丈では左程名譽でも無い。

山本伯は其の政事家として材幹は多く桂侯に讓らぬといはれて居る、イザといふ場合には、伊藤公をも蹴飛すといふ勇氣がある、桂侯を輔けて、前度の桂內閣の中樞で有つた頃には、現に伊藤公を敵に廻すも宜いといつて大に桂侯を激勵したこともある、伯は精悍絕倫で、また思慮も新らしい、唯だ疵とも認むべきは餘りに頭腦が明敏で、殆んど總ての人が馬鹿に見へることだ、此が爲めに能く人と協同し人を容れて往くとが難しい。是は政事家としての小ならぬ缺點である、伊藤公でも桂侯でも、其の顏付の表する如く、一種の雲煙漂渺乎たる處があつて、之が實に群賢に應酬して能く調和させる妙作用を爲すのであるが、山本伯には其れが無い、政事家、特に總理大臣としては之が缺點である、寺內子などにも一種雲煙式な空惚けた處があるけれど、山本伯は見るから精悍氣で、少しも漂渺乎たる處が無い、昨今西園寺侯や原氏邊から安樂兼道氏をして內々種々の消息を通ずるに力めしめるさうであるけれど、伯は之に對して果して落花心あり、流水甘意なからんやと爲るであらうか、

伯の人物は原氏などと始終相容るゝや否やは問題である、西園寺侯を戴いて一方面を擔任するには、少くも原氏以上の力量はあらうが、總理大臣や政黨首領として衆心を駕御することは如何であらうか、

總理大臣として無比の適任者たる技能を認められた桂侯でさへも、斷然サアベルを解いて政黨首領たるとには躊躇する、侯は順當に往けば疑ひもなく元帥たる人である、山本伯も亦然りである、桂侯は既に總理大臣の試驗で九十點以上で及第したけれど、山本伯の及落は未だ疑問である、疑問である試驗に引掛つて若し萬一落第でもしたら、將來元帥たる金箔に差響きが無いでない、何も引込思案が宜いでもないが、自家の力を量らず、己れが適當の材幹を自覺せずに、不適任な地位に就くがために、却つて其の聲望を殞すものが往々にある、海軍大臣としては天晴無双のものたるを示

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、其の力量幾んど測られずと世間に想像せられて居て、而して何處までも一身を海軍に置て、大將から元帥に進む、實に押しも押されもせぬ、此の方が或は賢い措置でなからうか、

此の頃は政事家、殊に總理大臣に拂底なものだから、彼か此かと頻りに物色する、其の結果山本伯や寺内子までも目指されるやうに爲つたのであらう、此の伯子者決して凡骨でない、少くも松方總理、大隈總理以上たるとは明白であるが、其の山縣總理たるや否やは尚ほ疑問だ、伊藤總理、桂總理たるを得るや否やは尚ほ疑問である。

寺内子は能く自から知り、眞に明哲身を保つ所以を解して居る、山本伯も恐らくは然るであらう。

△海陸の二人物

伯爵 大隈重信

○海軍と陸軍といへば文字の示す如く海と陸だ、海は動くもの陸は靜なもの、從つて海を舞臺とする役者と陸を舞臺とする役者との間に自ら相違が有る譯だ、

○海は地球の全面積の三分の二を占めるに對して陸は其三分の一だ、海は陸の二倍である丈活動の舞臺が廣い、早い例が日露戰爭に於ても、陸の關係ある所は滿洲、西比利亞、朝鮮、本國の日本を交ぜて漸く四箇國然るに海の關係する所は如何か、バルチック海、北海、地中海、印度洋、大平洋、支那海、日本海といふ廣い領域である、さればこそ露國をして日本の水雷艇がバルチック海口を扼しはせぬかなどと杞憂せしめた事も有る始末、孤艇西に向つて錨を上ぐれば鵬程萬里何の遮るものもない、直に露の海岸にも出沒出來るといふ次第、活動の舞臺が廣い、我國が島國である丈尚更左樣だ。

○列國の現勢は海上權を掌握する事大なるものが直に又世界に大を成し、强を稱するのである、が我日本は島國で在りながら海軍の振つた歴史を持たぬ、唯陸軍ばかりであつた、陸軍には相應の積習された經驗の力

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

があるが、海軍にはそれが無い、神武天皇の東征より始めて近く明治十年の戰爭に至る迄、戰といふ戰は大概ね陸上ばかりであつて海上には無い、僅に有るとすれば八島壇浦の戰か、更に豐公征韓の役をでも擧げるべきだが、その征韓の役の我海軍の力は甚だ微弱なるものであつた、僅に釜山對馬間の水路を維持して陸軍との聯絡を完全ならしめた丈に過ぎず、それより以西直に敵の海岸を脅して其間一帶の制海權を握るなどいふ事は出來ずに仕舞つた。

○而かも當時の兵船なるものは皆帆船であつたことはいふ迄もない、小さい乍らも蒸汽力を以て動かすものを用ひたのは幕府の末造ペルリの來航に驚いた嘉永の頃に、僅に和蘭から買ひ込んだ小艦が初めてゞある、御維新になつて軍務局が出來たけれどまだ陸軍のみである、續いて兵部省が出來ても、僅に藩々の殘艦、今より思へば見る影も無い憐れなものを驅り集めて海軍らしきものを組織したゞけて陸軍とは競べものにならぬ、其後次第に制海權の必要が痛切に感ぜられて漸く力をそれに用ひ、日清、日露の兩大役に初めて國初以來の赫々たる効績を示す事になり、從つて海軍の勢力なるものが蔚然として起つて來たのである。

○我國の歷史は此樣なものであるから、陸軍の勢力は海軍の比でない、從つて陸軍の軍人は獨り陸軍の小天地內に閉ぢ籠らず、一般政界にも手を着ける、政治と軍人とには妙に關係があるが、其軍人政治家を考へるに、前原、老西鄕(南州翁)板垣、山縣、大山、西鄕侯(從道)樺山、高島、而して桂而して寺內、皆陸軍出身である、之に對して海軍からも多少は出て居る、河村の如き、勝の如き、榎本の如きそれだが、併し明治政府に於けるそれ等の諸氏は唯員に備はるのみて內閣の重心となる程の勢力を有したものではない、到底陸軍の比ではない、が只一人ある、海軍出身であり、而かも政界に於て諸人環視の衝に立つたものが前後只一人ある、それは即ち權兵衞さんである。

○海軍部內に大に刷新を施し、科學的新知識を用ひて組織的の敎育を施す等、爾來三十幾年一身を全く海

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に委ねて以て今日に及んで居る、又其間に長く內閣に於て一勢力を形成して居つた。此の如き人物は海軍に於ては只一人ほかない、が陸軍になると極めて夥多しい、山縣元帥、大山元帥の如き皆其錚々たるものである。

○廣義には軍事も政治の一部である、從つて軍人にして政治家たるものゝ輩出する何も怪むには當らぬが、只如何せん海軍は常に勢力を持たぬ、それも想へば然るべき理由もあらう、政治は元々人の上に働くもの、人は陸に居る、陸軍は從つて政治と密接の關係を持ち得るが、海には人は居らぬ、人なき海の生活である海軍は自ら政治とは離れざるを得ぬ、此樣な譯で元と政治の念が少いのか、海軍の勢力は一般政治の上には甚だ低い。

○が日本の現勢では滿韓にも勢力を有し、大陸と本國との交通が甚だ必要となつて居る、尙ほ又人口も繁殖した結果、國內だけの生產物では生活に困難を來して來た、て勢ひ外國より原料を取り、それを製品として更に海外に輸出する、即ち殖產工業が大に盛なるべき必要に迫られ居ると同時に、商業貿易も大に振ひ、大平洋岸、印度洋岸、地中海岸と邁進直往して世界に市場を求めなければならぬ、而して之を保護するものは何かといへば無論海軍である、我國の海軍は斯の如き現況に在るのであるが、併しまだ隋力の爲大した勢力を得ぬ、元來敎育の點に於ても陸軍よりは劣る、從つて海軍には人が乏しい、學問も乏しい、陸軍では人物も續々出る、智慧も力も海軍よりは優つて居る樣だ、之も勢の自然で從來に於ては已むべからざる事であつたが、併し近來は海軍にも智慧も力も增しつゝある、人才がポツ／＼現はれつゝある、而して之を導くものは誰かといふに山本さんである、斯う言ふと大分山本さんが偉らい樣になるが、併し海軍には未だ氏に續く人が無いからの事で、それでなくて只言ふならまだ／＼不足を感ずる。

○といへば又陸軍には偉らい人ばかり多い樣になるけれど左樣とも言へぬ、陸軍の方には山縣公が居る、世

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

界に有名なる軍人として、又政治家として功名赫々たる山縣公が居る、只此大立物ある爲に、その隨伴者たる桂ても寺内てゞ樂に行くのてある、山本となると左樣言ふ先輩が無いから事を運ぶに六かしい、薩摩は今日勢力がない、從つて山本さんの立場は困難な立場だ、斯う見て來ると只外面的に觀察を下して優劣を定めることは出來なくなる、併し山本さんが能くまあ彼れ迄に劃策し、奮闘し、海軍の代表者となり指導者となり、始終一貫今日と雖も變らざるの點には多大の同情を表して居る、が之を以て陸軍の人物に對抗するとなると、何となく權兵衞さんては輕い樣に思はれる。

○寺内さんは戰闘家か、參謀家か、但しは軍事行政家かといふと、戰闘家ては無論無い、參謀家としては多少の經驗も有らうが左ればとて大戰闘に參與した事はない、從つて其技倆の程も分らない、が軍事行政家としては實驗もあり、相當に專門的の學問もある、且つ又極眞面目な勉强家てある、それ故此方面に於て先づ許さるべきてあらうが、故の兒玉などとは其性質が大に異なつて居る、總理大臣としたらばといふのか、それは勤まるてあらう、山本さんにても誰にても勤まることは同樣だ、總理大臣々々々々といふけれど大して六かしい事は無い、人が境遇を作ると同時に境遇も亦人を作る、それ故時と場合が促したら二人とも勤まる、勤まるからとて當人が格別偉くなつた譯て無い、只世間が偉くするだけの事だ。

△山本さんと寺内さん

早川鐵冶

寺内は役人時代には議會て度々面會いたして居つたが左程面識はないから能くは知らぬ、が私の兄に陸軍省の小役人をして居たものがあつて、それが先年免職になり困つた時、友人の二宮と云ふ男を以て寺内さんに頼んだら氣の毒だとて態々砲兵工廠の堤池の處へ書面をやり、何か適當な職が有つたら與へて呉れろと頼まれたことがある、私はそれを聞いて寺内さんは大い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親切な人だと思ひ、一度會つて御禮を述べたいと考へ、訪問した事もあつたが、折惡しく不在であつた、其後西園寺侯の晩餐會に招かれた時に、偶然にも會ふことが出來て色々語り合つた事があつた、その他に私の舊知の河北辦理公使の遺子の事に就いても感心した事がある、公使は早く亡くなられたが、それには遺子の有る筈其後如何なつたかと常に心配して居た處、或る時突然其遺子の訪問を受けた。見れば中尉の服裝嚴めしい立派な軍人である、具さに其後の經過を聞いたら、寺内さんの一方ならぬ庇護の下に漸く人と爲つたとて大層滿足して居つた。寺内さんに就いては此樣な話をのみ聞くので、愈よその同情に厚い親切な人物だと思ひ込む樣になつた、氏の頭腦は明晰で周到で、而かも亦謹直に身を保つ人である、そして門戸を閉ざさず誰にも心安く交際するといふ風があり、從つて人心を收攬し居るから、今日の勢を以て次第に地盤を固めて行くなら、今より幾年の後かは知らぬが一度は寺内內閣なるものを現出することと無しとも限らぬと思ふ。

山本さんと隨分古い知合です、私が朝鮮に交際官試補で居つた頃には氏も亦天城艦長として朝鮮に來られ數ヶ月間滯泊中屢々往復致し升た因もあり、幾度か笑謔を恣にし合つたものでした、韓國に駐在官として清國より派遣せられて居つた袁世凱も一席法螺の吹き較べをして流石の袁氏も一目を置いた事があつた、袁も今は失敗して跡を晦まして居るが一度は飛鳥も落ん斗の勢力を得て居つたし山本氏も今日にては海軍省の舅役として元老の地位に居らるゝのを見て轉々感慨に絕へません。氏は頭腦の敏活な上に極めて覇氣がある、所謂口も八丁手も八丁である、從つて傲岸不屈人を人ともせぬ處から海軍部內に於ては極めて人受けが惡くて仕樣なかつたのだが、それを氣の毒に思つたのが故の西鄉從道侯、人に語つて山本も困つたものだ、彼樣に憎まれては、私でも取立てゝやらなければ出世の見込がないと言はれた樣な次第、侯は兎に角氏に見る處があり、獨り衆情を排して重く用ひられた、私が政務局長で居た頃に氏は丁度軍務局長、即ち位置の上から

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は正に私と同輩に過ぎぬのだが、當時既に宛然たる勢力は次官を凌ぎ大臣を凌いで居たもの、職務上海軍省と交渉を要する案件があつて齎して行くと、その事は既に大臣や次官で承認して居るものなるにも拘らず、一軍務局長たる氏が出娑張りて進行を妨げた事もあつた、當然ならば軍務局長からして先づ次官、次官を足場としてそれから漸く大臣といふ順序なのだが、氏は次官とならずに一躍して大臣の椅子に凭つたのは如何にも破天荒の拔擢、之は偏に西郷侯の推輓に因るもの、氏の西郷侯に負ふや極めて大なりと言ふべしてある、氏は例の傲岸不屈を以て身未だ顯職に居らぬ中から一省を切つて廻す態度があつて世間よりは權兵衛大臣と云はれて非難攻撃を受けた事があつたから、如何樣な男か一つ見て置かうとて井上侯が態々會はれた事があつたが、すると卓厲風發、淀みなき快辯を以て滔々と海軍の知識を語り續けた、流石の井上伯も烟に捲かれて仕舞ひ、大にその才を稱したといふ事だ、想ふにその時の氏の海軍の知識なるもの丶程度は如何程てあつたか、氏は實質よりも能く語る人てある、それ故或は海軍に於ける專門知識のあるものに聞かしたら如何樣なものてあつたらうか、兎に角その才幹と覇氣とは凄じいものてある。之を寺内さんと比べたなら寺内さんの態度の質實なのに對して稍々言語を弄する傾が有る。さて其將來は如何か、果して首相となるの日が有らうか、今日の處を以て推すと山本さんは近來全く門戸開放主義てはない、否政客を謝する方てある、して見れば志は其方に無いものとも見える、が左樣見える中に一脈の野心を潜めて居つて機を見て起つといふのかも知らぬ、氏は海軍部内にだけはドシ々々英才を後進から抽いて重用する、而かもそれが單に閥族關係に拘泥するものてない處は感心だ。氏の衷情や解すべからずだが、若し野心あるにした處で今は困難てある、人の運命は旨く潮に乘つて居る間は宜いが、一旦外れると駄目だ、氏は往年甚だ政界の呼聲高く、所謂潮に乘つたものてあつたが、其後妙に外れて仕舞つて杳として聲を聞かなくなつた、伊東巳代治氏など好例證て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親切な人だと思ひ、一度會つて御禮を述べたいと考へ、訪問した事もあつたが、折惡しく不在であつた、其後西園寺侯の晩餐會に招かれた時に、偶然にも會ふことが出來て色々語り合つた事があつた、其の他に私の舊知の河北辨理公使の遺子の事に就いても感心した事がある、公使は早く亡くなられたが、それには遺子の有る筈其後如何なつたかと常に心配して居た處、或る時突然其遺子の訪問を受けた。見れば中尉の服裝嚴めしい立派な軍人である、具さに其後の經過を聞いたら、寺内さんの一方ならぬ庇護の下に漸く人と爲つたとて大層滿足して居つた。寺内さんに就いては此樣な話をのみ聞くので、愈よその同情に厚い親切な人物だと思ひ込む樣になつた、氏の頭腦は明晰で周到で、而かも亦謹直に身を保つ人である、そして門戸を閉ざさず誰にも心安く交際するといふ風があり、從つて人心を收攬し居るから、今日の勢を以て次第に地盤を固めて行くなら、今より幾年の後かは知らぬが一度は寺内内閣なるものを現出することと無しとも限らぬと思ふ。

山本さんと隨分古い知合です、私が朝鮮に交際官試補で居つた頃には氏も亦天城艦長として朝鮮に來られ數ヶ月間滯泊中屢々往復致し升た因もあり、幾度か笑謔を恣にし合つたものでした、韓國に駐在官として淸國より派遣せられて居つた袁世凱も一席法螺の吹き較べをして流石の袁氏も一目を置いた事があつた、袁も今は失敗して跡を晦まして居るが一度は飛鳥も落ん斗の勢力を得て居つたし山本氏も今日にては海軍省の舅役として元老の地位に居らるゝのを見て轉々感慨に絕へません。氏は頭腦の敏活な上に極めて覇氣がある、所謂口も八丁手も八丁である、從つて傲岸不屈人を人ともせぬ處から海軍部内に於ては極めて人受けが惡くて仕樣なかつたのだが、それを氣の毒に思つたのが故の西鄉從道侯、人に語つて山本も困つたものだ、彼樣に憎まれては、私でも取立てゝやらなければ出世の見込がないと言はれた樣な次第、侯は兎に角氏に見る處があり、獨り衆情を排して重く用ひられた、私が政務局長で居た頃に氏は丁度軍務局長、即ち位置の上から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は正に私と同輩に過ぎぬのだが、當時氏に宛然たる勢力は次官を凌ぎ大臣を凌いで居たもの、職務上海軍省と交渉を要する案件があつて齎して行くと、その事は旣に大臣や次官で承認して居るものなるにも拘らず、一軍務局長たる氏が出娑張りて進行を妨げた事もあつた、當然ならば軍務局長からして先づ次官、次官を足場としてそれから漸く大臣といふ順序なのだが、氏は次官とならずに一躍して大臣の椅子に凭つたのは如何にも破天荒の拔擢、之は偏に西郷侯の推輓に因るもの、氏の西郷侯に負ふや極めて大なりと言ふべしてある、氏は例の傲岸不屈を以て身未だ顯職に居らぬ中から一省を切つて廻す態度があつて世間よりは權兵衛大臣と云はれて非難攻撃を受けた事があつたから、如何樣な男か一つ見て置かうとて井上侯が態々會はれた事があつたが、すると卓厲風發、淀みなき快辯を以て滔々と海軍の知識を語り續けた、流石の井上伯も烟に捲かれて仕舞ひ、大にその才を稱したといふ事だ、想ふにその時の氏の海軍の知識なるもの丶程度は如何程であつたか、氏は質實よりも能く語る人である、それ故或は海軍に於ける專門知識のあるものに聞かしたら如何樣なものであつたらうか、兎に角その才幹と覇氣とは凄じいものである。之を寺內さんと比べたなら寺內さんの態度の質實なのに對して稍々言語を弄する傾が有る。さて其將來は如何か、果して首相となるの日が有らうか、今日の處を以て推すと山本さんは近來全く門戸開放主義てはない、否政客を謝する方てある、して見れば志は其方に無いものとも見える、が左樣見える中に一脉の野心を潛めて居つて機を見て起つといふのかも知らぬ、氏は海軍部內にだけはドシ々々英才を後進から抽いて重用する、而かもそれが單に閥族關係に拘泥するものてない處は感心だ。氏の衷情や解すべからずだが、若し野心あるにした處て今は困難である、人の運命は旨く潮に乘つて居る間は宜いが、一旦外れると駄目だ、氏は往年甚だ政界の呼聲高く、所謂潮に乘つたものであつたが、其後妙に外れて仕舞つて杳として聲を聞かなくなつた、伊東巳代治氏など好例證、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある、巳代治氏も一時は盛に世から注目される、元來野心に富んだ人て正に薩摩兒の山本と對稱すべき質てあつたが、遠慮に過ぎて敢て動かぬ間に機を逸して潮を離れて仕舞つた、今ては誰一人巳代治の巳の字も語る者が無い、山本さんに縱しや野心あるにした處て機運は最早や去つて居る、寧ろ寺內さんの將來の方が有望てあらう。

△山本伯と寺內子

黑頭巾

其一

●世人の眼に映ずる一伯一子は、維新以來、政壇稀有の不思議なる對照の位地に立つ者ならずんばあらず。

●一伯一子が、啻に薩長の代表者といふが故なるのみにあらず。

●一伯一子は、內閣組織の候補者を以て目せらる。則ち此二人者は、寧ろ其將來に大立者として囑望せられつゝあり。

●年齢を以てすれば、一伯一子は、從來內閣組織者に比して、決して壯年なりとはいふ可らず。

●公伊藤が內閣の首班に列したる三十八歳の例は暫く措き、侯桂が總理大臣となれる五十五歳に比するも、一伯一子の齢は既に過ぎたり。

●然れども、一伯一子は、世人より頗る新人物を以て目せられ、二人者の顏觸は、新らしき快感を與ふ。

●一伯一子は、勿論、伊藤、井上、山縣三尊の提撕を受ること大なるのみならず、西郷、木戸、大久保三傑の薫化を受けしことも亦少からず。

●一伯一子は、維新の當時、十五六歳以上にして、舊教育に於ては、既に一人前の侍となれる役にあり。

●故に、一伯一子の頭は、一應、武士として、出來上りたるものなり。此二人者は、維新前の侍としても發言權を有す。

●此點に於ては、一伯一子は、三尊とも侯桂侯西園寺とも何等の相違あること無し。二人者は、必ずしも新

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人物といふ可らず。

●若し政治思想を以てすれば、一伯一子は、三尊二侯以上に新思想を有する者とは謂ふ可らず。

●一伯一子を以て三尊二侯に換らしむるとも、政治論は多く變化無きのみならず。或は、其の範疇を脫出せざるやも知る可らず。

●然らば則ち、一伯一子は、新人物たる所以を失ふべきや。

●吾輩を以て見れば、一伯一子は三尊二侯に比して、政治家として新らしき色彩を有す。

●所謂、其の色彩なるものは、一伯一子の生立をして、三尊二侯とは沒交涉なるの感を與ふるもの也。是れ、彼の一伯一子が新人物として特地に期待せらるゝ所以にあらずとせんや。

其二

●伯と子とは鎬を削つて爭ふにあらず。而して世人は將來の競爭者を以て期待す。

●此二人者の風貌は、共に性格の特徵を標章し、而して互に絕好の對照たらずんばあらず。

●伯の顏を見れば、佛蘭西の探偵小說の主人公を聯想す。想ふに、其の精悍多智なるべき表情は、熟練明達なる彼の老探偵に似たるもの無くんばあらざるべし。

●伯の風采には勢雄の姿あり。丈高く、筋肉は引締りて、太々しく生ひ茂りたる頰髭は、其の押强き人たることを現示す。

●子の風貌は、端午の武者人形を聯想せしむ。昔の武將は、全く此の如くなるべしと思はる。

●子をして洋服を脫して鎧、陣羽織を著け、烏帽子の冑を戴き、床几に腰掛けしめなば、繪本に見る加藤清正の再來也。

●子の眉の釣りて口元の力味たる、忠直武勇の表情を爲す。伯の西洋的なるに對し、子の純乎たる日本的なるを見る。

●其の趣味を以て見るときは、伯と子とは、全然、其の風貌の相異なるが如くなるべし。風貌は性格の象徵也。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉伯の如き精悍なる風神が薩摩海軍に絶無なるが如く、子の武將らしき儀型も亦た長州陸軍に唯一なり。
◉畢竟、伯は、薩人としては透明なる表情を爲し、子は長人としては武張りたる威儀を有す。風貌の上にも、一伯一子は、薩長の異彩を以て世人に迎へらるゝ也。

其　三

◉彼の異彩ある風貌の、孰れが先きに總理の倚子に著くべきやは興味ある觀察ならずんばあらず。
◉其の人格手腕を以てすれば、此の兩者は容易に輕重す可らず。
◉伯は、海軍主事、一勅任官よりして、既に權兵衛大臣の評判を博し、其越權の振舞は、屢物議を招きたり。
◉事實に於て、伯は勅任大臣たりし也。彼は、入幕の前よりして、逸早く、大關を以て期待されたるもの也。
◉此勢を以てすれば、伯は既に總理の候補にも立ちたるべき筈なり。而して總理は、尚ほ未來にあるは、何故ぞや。
◉薩長と別て觀察すれば、長派には、多士濟々たりき。輓近、總理の呼聲を得たる者、桂、白根、兒玉及び子寺內あり。薩には唯一の伯山本あるのみ。
◉薩派の頗る振はざる間に在りて、伯の雄姿殊に人目を惹く。是れ伯が、特に早く、總理を以て囑望されたる所以ならずんばあらず。
◉子の發達は、稍其趣を異にす。子は、久しく士官學校長を奉じて、世評に上らず。
◉其の頭角を拔きて、陸軍大臣となるや、世人は尚ほ彼を以て、寧ろ參謀總長の適材ならんとせり。
◉議會に於ける一伯一子は、世評の依て來るところを現示す。伯は機智。子は著實。伯の辯に操縦あり。子の説明に數字多し。
◉數字は、子の性格閲歷を代表す。子は、長派の首相候補者の後進にして最も長らく實務に鞅掌せり。
◉桂、兒玉が早くより政治家を兼ねたるに反し、子は軍人專念に、其の精緻なる頭腦を統計表の中に絞りたり。
◉閑說、子は每夜公文書類を官邸に持歸り、食後、汲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々として調査に從事す。靑、紅、黃種々の鉛筆を挾み、それ〲批評の種類を分ちて縱橫に塗抹す。

●精確にして勤勉なるは、子の商標ともいふべし。熟練なる將校と雖も、報告書を提出して、大臣の靑、紅、黃の鉛筆を博せざる者稀也。

●靑、紅、黃の鉛筆は、子寺内の名をして九鼎大呂よりも重からしむ。靑、紅、黃を聞きて襟を正さゞるの陸軍人あること無し。

●靑、紅、黃の鉛筆は、子が半生を一貫す。子の閲歷には、機略無く奇才無し。

●子は、勤勉精確、以て陸軍大臣として、知らざる事無く、盡さゞる事無きに至り、一轉して總理の候補者となれり。

●一伯一子が發展の逕路は、此の如く別種の趣を爲す。是れ二人者の性格が持來せる運命の相違に外ならず。

●伯は風の如く、子は山の如し。風は疾きも吹き止むことあり。山は靜なれども確然たり。

●「後の烏は先きになれり」寧ろ今日に於ては、子が總理たるの日は、或は伯よりも早かるべきに似たり。

●然りと雖も、此二人者は、畢竟、大なる未知數なり。最少し咲かせたる後、宜しく其の色彩を論ずべし。今に於て其の滿開時をトせんこと、尙ほ遺憾無きにあらず。

其 四

●伯山本對子寺内といふことは、木戶對大久保。乃至黑田、西鄕對三尊といふとは、其の意義を異にす。

●維新政府は、薩長の勢力を以て組織せられ、隨つて薩派、長派の區別ありて、軋轢もあり、暗鬪もあり、競爭もありて、而して其の間に調和ありて、以て立憲政治の確立を見るに及ぶ。

●立憲政治確立するの後ち、豈、又た藩閥あらんや。安んぞ薩派、長派ある可んや。

●今日に及んで、猶ほ薩派長派を夢想する者あらば、其は舊夢未だ醒めざる者也。時勢後れのみ。何事をも爲し得ざるや明也。

●世、往々、薩派が山本伯を擁戴せんことを論ずる〻

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のあるも、伯の明、決して其の擔ぐ所とならざるや疑無し。

●伯にして若し藩閥の殘黨に擔がるゝならば、今日を待たずして起つ可かりし也。伯は、政治上、所謂薩派に屬する者に非る也。

●若し政略に尙ほ薩派の存在するありとせば、彼等が夢想する最後の首領は、則ち伯山本なるべき也。

●然れども伯の器局は稍大。西比利亞鐵道貫通後の今日、藩閥の殘壘に據つて政治を爲さんことを企つるものに非ず。

其五

●子寺内が極眞面目に、極地味に活動し、而して伯山本が深沈として一聲を發せざるは、好箇の對照ならずんばあらず。

●吾輩を以て見れば、蘊蓄は子の性命にして、扶植は伯の本領ならずんばあらず。

●子は德の人也、淸廉を以て聞ゆ。伯は力の人也。貨殖を以て名あり。

●子は蘊蓄し、伯は扶植す。子が輓近の發展に蘊蓄の發揮されたる也。伯が、黑幕の海軍總裁たるを得るは、扶植の結果なり。

●伯は、財を扶植し、人物を扶植し、勢力を扶植す。一言を發せずして重きを爲す。故に伯は營々として扶植す。

●子は汲々として蘊蓄す。其の細を厭はず、事毎に、丁寧を極む。是を以て知らず識らずの中、能く其の大を致せり。

●伯は豪宕にして老猾也。先輩を操縱し、同輩を翻弄し、佳婿を頤使す。彼の海軍に於けるは、元老の態度あり。

●子は則ち誠實にして穩健。天馬行空の快界に出でずと雖も、言々必ず實行す。其の陸軍に於けるは、元老の態度無くして、元老の勢力あり。

●周密苛細は子の看板也。子は、つねに部下に小言を浴せるを以て名高し。是恐らくは彼の爲に寃也。然れども、處世保身の上、一の趣味ある事實たるを失はず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●小言に就ては、子は毎に故兒玉と對照せらる。皆言ふ、兒玉は洒落にして小言を言はず。寺内は嚴格にして小言を事とすと。

●是れ反對の事實なり。兒玉子が部下を叱咤し、小言を言ふは遙に寺内の上に出づ。

●兒玉は駄洒落を言ひ、酒も飲み、豪語し、大笑し、時に放蕩も爲す。寺内は、徹頭徹尾、眞面目なり。

●寺内は厲聲を飛ばさず。溫容人に接し、壯來豪飲せず。著實ありて奇拔無く、平々正々、濁らぬ水の廣く流るゝが如し。

●寺内に奇景無し。故に、他の批評は、一に其の小言に集注す。若し彼に一點道樂氣を帶びしめば、彼の小言は評判の種にはならざりし也。

●伯は聳然として峙つ。一目して異常なるを認むべし。子は平々然として奇無し。久しくして益、其の妙味を識る。

其六

●一伯一子は、互に薩長人の長處を有しつゝ、而して互に薩長人らしからざる色彩を有す。

●されば、此二人者は、薩長人としての聲價を占めつゝ、別種の精米を發す。

●將來内閣を組織せん者、此二人者を閑却するを得ざるべし。此二人者は共に、必ずしも躍起運動を爲す者に非ざるに係らず。

●伯が、軍門を閉ぢ、鳴を鎮めて、控へたるは、却て伯の重きを爲すべし。

●此種の態度に出るもの、伯の外、子伊東あり。又た一代の傑物なり。然れども、伊東は山本よりも小也。彼は、時々、躍起を試む。

●伯は、鳴かず、飛ばずして、如何程までに其の聲價をせり上げ得べきやは、趣味ある問題なり。

●天成の麗質、養はれて深窓に在り、八方の聘に應じて、益、韜晦し、聲望益騰貴するにも似たる哉。

●然れども、聲價の騰貴も自から時期の問題に屬す。悠々歲月を涉らば、顏色改まるの憂あらん。

●吾輩、又想ふに、政治家が伯を見るは、[illegible]行して密

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

傍、底知れざる一團の深林に邂逅するが如くならん歟。

●夜は朧也、森は極めて寂たり。天高く人絶ゆ。かねて怪しの森と聞けば、拳を固め、戒嚴すること無くして通過するを得ざるべし。

●伯は、夜の怪しの森の如く、横たはる。子は、豊かなる大平原の如く、白日、人の前に展開す。

●吾輩は思ふ。元老政治の制度は、中々、容易に已まざるべし。而して、此の一伯一子は、將來に元老たるべきものなり。

其七

●伯は富を得、子は政權を得、富を得るの因由は、吾輩之を識らず。

●子は勿論、侯桂を經て、公山縣を繼承するならん。伯は、政治系よりすれば、まさに公伊藤の分野を繼承すべきも、恐らくは未だ之を繼承する所以を發見せず。

●公伊藤薨後の政友會は、總裁の位置、頗る注目に値するもの無くんばあらず。

●伯、總理たるの日には、組織の才あり、包容統率の量あり。薩人の政事家として、稀覯の精采を發ずるならん。

●政友會にして、斷然、伯を總裁に迎へなば、伯は、之を地盤として、其の辣腕を揮ふを得ん。

●政友會より見るも、政治思想の系統上伯を其の適材と推すべきものならずんばあらず。

●然れども、政友會は、旗色を變じて侯桂を戴かんも、伯山本を迎へざるべく、伯も亦、眼前にチラック元帥を擲つて、政黨に投ずることを爲さゞるべし。

●伯は、總理の器を以て推さる。然れども伯自からは、今より地盤を經營してまでも、總理を遣つて見んといふほどの熱無かるべし。

●政友會はゆかず、官僚派に合はずとすれば。政界の形勢激變するか、伯の神機一轉するかに非れば、伯山本が總理たるの日は、猶ほ遼焉たりと謂はざる可らず。

●或は、伯は、總理の聲價を荷ふて、其中に、老境に入るならん。

●伯にして、雄心消磨すること無くば、永遠に「負嵎の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

虎」として、政界に睥睨するならん。
●侯桂が、現職を退くの日は、元老の一空席を補充するの日にして、而して子寺内が總理たるの條件を實現せしむるの時ならん。(完)

△山本伯と寺内子

田川大吉郎

山本伯寺内子は武人としてよりも政治家として未來の望を負うて居るが如くにいはれてゐる。兩人の出處行藏の跡を考ふれば、武人政治家としての外に一般人としての裕かなる趣味を持て居るかと思ふけれども私は主として其政治的將來について考へる所を述べて見たい。

私は山本伯寺内子が將來に於て日本の運命に關係ある二つの問題を解決すべき衝に當つて居る人と觀察する。其問題といふは一括して云へば滿洲問題及び太平洋問題てある。寺内子は陸軍の人として無論滿洲問題に最も執念深き人てあらう。山本伯も亦薩摩軍人の一部として傳統的に滿洲問題に熱心に注意して居る人てあらう。けれども日本は滿洲に得意の地歩を占めたが爲めに必ずしも昌榮する譯てはない。日本は日本の命運を大部分太平洋に繋いて居る。が太平洋に於ける優越權を占むるや否やが日本の盛衰浮沈を決する大關鍵てある。寺内子は陸軍一方の人として此問題に注意が屆かないかも知れぬが、山本伯は海軍の人として必ず此形勢に着目して居るてあらう。隨て山本伯の滿洲熱は薩摩軍人として傳統的てあるに拘らず此一點よりして幾らか熱が冷さるゝてあらう。そこて太平洋問題を負擔し解決する所の責任が自然山本伯の肩に掛つて居るやうに世間が觀測して居る。寺内子は依然として今日の滿洲熱の渦中にある人と思はれて居る。で滿洲に向て日本が大いに手を伸さんことを希望する論者は自然寺内子の門に集るかも知れぬ。太平洋に向て伸びなければならぬと主張する論者は自然山本伯の門に集るてあらう。此意味に於て海洋的日本の政論は山本伯に

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よつて代表せられ、大陸的日本の思想は寺内子によつて代表せられ、此二種の思想の消長盛衰に伴うて二人の將來の浮沈は分れはしまいか。要するに二人は此二つの問題の指導若くは決定に向て差詰め其要衝に當つて居る人と目すべきてあらう。

或は桂侯が其衝に當て居る代表者てあると思ふ人があらう。けれども伊藤公の歿後桂侯は伊藤公の勢力の繼紹者たるの志が頻りてある。桂侯は伊藤公よりも八方美人的の人て國の將來の政策に向ては、私の見る所若し大差なしとすれば、堅實なる一定の方針がない。侯は從來の惰力に乘じて其れを巧みに按排する手腕に富んて居るが自ら經綸を定め大方針を立てるの決心がない。山本伯寺内子は政治上の才略に於て桂侯に若かざる點があるけれども、イザ必要といふ時は斷乎として其主張を行ふの勇氣がある。前の二問題は或意味に於て時機の問題てあるから、其時機の點と又斷行力を要する點とよりして其解決は侯に歸せずして伯或は子に歸するてあらうと思ふ。但し滿洲問題及び太平洋問題は未だ手に觸れざる問題てあるかの如く見て居る人もある。日本の當面の問題は朝鮮てあらう、朝鮮は大陸問題に注意するものゝ第一の踏石として非常に熱中して居る點てある。大陸の外餘念なき陸軍の人寺内子は自然の勢、此場合朝鮮問題に注目すること深いてあらう。伊藤統監死して曾根統監によき評判なく、朝鮮の人心動いて居る場合には、寺内子の食指が朝鮮統監に動いて居ると人が云ふのも強ち無理からぬ事てある。本人が意識的に之を希望すると否とに拘らず本人の位置、本人の主義が自然に寺内子を朝鮮に引摺込む時代があらう、而かも寺内子の存外問題を見るの明と、人を容るゝ量と相待て、自ら朝鮮統監に就くことをなさぬかも知れぬ。世間ては已に後藤男が朝鮮統監に意ありと傳へて居る。後藤男にして若し統監となるの日あらば、私は其背後には必ず寺内子があつての結果ならんと思ふ。寺内子自ら當るべきの位置を後藤男に讓り後藤男をして寺内子の指揮を仰いて朝鮮の問題に當らしめ故兒玉男自から用ふること少くして、多く後藤

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

男に當らしめた方針を襲ふ智略であらうと思ふ。

寺内子の初めて陸軍大臣たるや、人皆其偏狹の器にして長く職に堪へざるべきを思つた。されど大臣になつて以來、其偏狹については矢張り世間の疑が解けぬやうだが、其堅實なる態度、明晰なる主張、一旦言ひ出した事は容易く動かさぬ氣象、何れも人の信用を博して、當時よりは其名聲隆々として昂りつゝある今日にあつては、宰相たる器度にも乏しくないと人がいうて來た。

山本伯は海軍大臣を罷めてから數年、所謂三年鳴かず蜚ばざる概あるも、人は何となく未だ山を出でざるの謝安に比して、此人は何時かは宰相の印綬を帶ぶるの日あるべしと期待して居る。本人に其志あるや否やは人毎に其所見を異にするが、四圍の事情、就中前述の日本の海上力を擴張するの必要は、或は此人を心ならずも宰相に引上ぐる時機があらうかと思ふ。山本伯は思ひ切て薩閥の人を用ふる。寺内子も思ひ切て長閥の人を用ふる、從て今日の陸軍は全然長州の陸軍となつた、今日の海軍も亦薩摩の海軍なること已に久しい。兩人の器局は確かに偏する所あつて雄大ではない。玆に兩人の病ありと思ふ。殊に山本伯は海軍以外の人に交りが薄い。山本伯の門には政治家の足も繁からず、陸軍の人の影も薄く、實業家銀行家の足跡も乏しい。山本伯が政權を握るの一大弱點はこゝだといはれる。只海軍々人のみを以ては天下は經營されぬ。然しながら伯若し宰相の位に就けば其因緣の深くない丈け却て思切つた大改革をなすに容易であるかも知れない。世人は伊藤公や桂侯の八方美人的態度に已に厭きて居る。もつと截利辛辣な施設を望んで居る場合であるから彼の弱點と思はるゝ所は、彼の強點となるかも知れぬ。寺内子も此點に於ては同じやうな立場に立つて居る。然し海軍大臣としての山本伯よりも陸軍大臣としての寺内子の方が交りが廣い。無愛嬌の中にも尙多少の愛嬌がありといはれる。寺内子の立場は桂侯の如く圓融ならず、山本伯の如く峭直ならず、其中間に位置して居るもの丶如くいはれて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政友會は兎に角今日の一大勢力である。若し爲すあるの人之を率ゐれば、之をして有用の政黨たらしむること必ずしも難くはない。其政友會は今日に於ては桂侯に向ては殆んど絕望したやうである。其望を囑する所は第一に寺内子、第二に山本伯、彼等は此兩人によつて將來を開拓したいと期して居る。然るに兩人の政治的位置は前述の如き二思想の其一方の代表者として互に相抵觸すべき運命に誘はれて居る。政友會が兩方のどちらにても隨ひ得らるゝが如き態度を示すは、政友會に一定の眼識なく、主張なきの明證であつて、笑ふべく又惜むべき事に相違ないが、兩人共かゝる大政黨に据膳せらるゝ境遇は將來に於て多望　るものといはなくてはならぬ。

寺内子は財乏しといはれて居る。今日の政治運動には相應に金が要る。寺内子が其運動を起すについて兵站方を如何にするか一個の問題である。さりながら日本の陸軍は此點に於て不斷の兵站部と目されて居るから寺内子が此位置を占むる事久しい程兵站の心配がないかも知れぬ。局外者たる僕の知る所でない。山本伯は財多き人といはれ、同時に財に澁い人といはれて居る。て伯が若し政治運動に乘り出して來るとすれば如何にして其の費用を充たすか、之は甚だ興味ある問題である。伯が果して政治界に志ありとすれば從來の財に對する態度は待つあつて然りしものにて、今後は其多年の蓄積を散じて其面目を一變し大いなる飛躍を試むるのかも知れない。私は樂しんで兩人の將來を見んと欲する。兩人の將來は日本の政界の消長盛衰に大いなる關係あることを以上の理由によつて信ずる。私はいふまでもなく日本の海上權力の發達の爲めに少しなりとも力を注ぎたいと思ふ一人である。(了)

△山本と寺内

茜陵隱士

兩方共に海陸軍の守りの堅い將軍である。寺内さんは正直を標榜して賣出した人で、思慮周密ではない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處が山本さんは極く細心な人で自己の守りが堅過ぎる。で寺内さんの方には子分がある、又其半面には嫌ひな人もある、寧ろ好惡相半ばする傾がある。山本さんには甚だ嫌ひな人がない。けれども又身を以て盡すといふ子分もない。之れが兩將軍の優劣の比較を見出す點である。

伊藤さんに死なれて大いなる打撃を蒙つた人は桂さんに次いでは山本さんであらう。今迄は他日の總理大臣の候補者に擬された山本さんも伊藤さんがなくては甚だ危い所がある。これはあの連中の釣合は總て伊藤さんによつて取られてゐた。且つ山本さんには政治家の資格が甚だ缺乏して居る。總てが餘り規律的であつて盛んな野性もなければ、又新空氣を呼吸する肺も持たない。そこで山本さんは自ら堅く軍人を以て任じ・脇目振らずに周密に軍事に盡瘁して居る、此點は國民も山本さんに感謝せねばならぬ。なぜ山本さんは伊藤さんに死なれて其樣に打擊を蒙つたかといふに、薩摩の殘焔の眞中に於て、伊藤系と山縣系との間に横はつた山本さんであるからして、其間に充分の消息を握る工夫があつたのである。處が伊藤が死んで了へば此兩系の間の山本が片一方の相手を失ひ、甚だ索然たる有樣となつた。此點は桂さんも同樣である。

寺内さんになると、純粹な山縣の子分で、そしてサーベルの中に年來の勢力を扶植した上に、段々政治界に馴れて來て、應待振りも昔の下士根性が餘程脱けた。下士根性といふと、報告に行つた軍人に釦一つ外れて居ても之を非難する、といふやうの事をいつたのであるが今は其風もなくなつてなか／＼隱然の勢力が盛んである。

一體今の世の中は操行が甚だ亂れて居つて、平田さんなどは惡魔狩を初めて頻りに各方面の檢擧をやつて居るが、寺内も山本も亦此一代の風潮の外に立つことが出來ぬ人である。兩先生方に逢うて見ると、兩方共森嚴極まつた態度をして居て、客をして形を改めしむる概がある。けれども裏に廻つて見れば山本の今の妻君に於ける、寺内の時々の待合入の如き、存外通人的

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政友會は兎に角今日の一大勢力である。若し爲すあるの人之を率ゐれば、之をして有用の政黨たらしむること必ずしも難くはない。其政友會は今日に於ては桂侯に向ては殆んど絶望したやうである。其望を囑する所は第一に寺内子、第二に山本伯、彼等は此兩人によつて將來を開拓したいと期して居る。然るに兩人の政治的位置は前述の如き二思想の其一方の代表者として互に相抵觸すべき運命に誘はれて居る。政友會が兩方のどちらにても隨ひ得らるゝが如き態度を示すは、政友會に一定の眼識なく、主張なきの明證であつて、笑ふべく又惜むべき事に相違ないが、兩人共かゝる大政黨に据膳せらるゝ境遇は將來に於て多望 るものといはなくてはならぬ。

寺内子は財乏しといはれて居る。今日の政治運動には相應に金が要る。寺内子が其運動を起すについて兵站方を如何にするか一個の問題である。さりながら日本の陸軍は此點に於て不斷の兵站部と目されて居るから寺内子が此位置を占むる事久い程兵站の心配がないかも知れぬ。局外者たる僕の知る所でない。山本伯は財多き人といはれ、同時に財に澁い人といはれて居る。て伯が若し政治運動に乘り出して來るとすれば如何にして其の費用を充たすか、之は甚だ興味ある問題である。伯が果して政治界に志ありとすれば從來の財に對する態度は待つあつて然りしものにて、今後は其多年の蓄積を散じて其面目を一變し大いなる飛躍を試むるのかも知れない。私は樂しんで兩人の將來を見んと欲する。兩人の將來は日本の政界の消長盛衰に大いなる關係あることを以上の理由によつて信ずる。私はいふまでもなく日本の海上權力の發達の爲めに少しなりとも力を注ぎたいと思ふ一人である。(了)

△山本と寺内

茜陵隱士

兩方共に海陸軍の守りの堅い將軍である。寺内さんは正直を標榜して賣出した人て、思慮周密ではない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處が山本さんは極く細心な人で自己の守りが堅過ぎる。で寺内さんの方には子分がある、又其半面には嫌ひな人もある、寧ろ好惡相半ばする傾がある。山本さんには甚だ嫌ひな人がない。けれども又身を以て盡すといふ子分もない。之れが兩將軍の優劣の比較を見出す點である。

　伊藤さんに死なれて大いなる打擊を蒙つた人は桂さんに次いでは山本さんであらう。今迄は他日の總理大臣の候補者に擬された山本さんも伊藤さんがなくては甚だ危い所がある。これはあの連中の釣合は總て伊藤さんによつて取られてゐた。且つ山本さんには政治家の資格が甚だ缺乏して居る。總てが餘り規律的であつて盛んな野性もなければ、又新空氣を呼吸する肺も持たない。そこで山本さんは自ら堅く軍人を以て任じ・脇目振らずに周密に軍事に盡瘁して居る、此點は國民も山本さんに感謝せねばならぬ。なぜ山本さんは伊藤さんに死なれて其樣に打擊を蒙つたかといふに、薩摩の殘焰の眞中に於て、伊藤系と山縣系との間に横はつた山本さんであるからして、其間に充分の消息を握る工夫があつたのである。處が伊藤が死んで了へば此兩系の間の山本が片一方の相手を失ひ、甚だ索然たる有樣となつた。此點は桂さんも同樣である。

　寺内さんになると、純粹な山縣の子分で、そしてサーベルの中に年來の勢力を扶植した上に、段々政治界に馴れて來て、應待振りも昔の下士根性が餘程脫けた。下士根性といふと、報告に行つた軍人に釦一つ外れて居ても之を非難する、といふやうの事をいつたのであるが今は其風もなくなつてなか／＼隱然の勢力が盛んである。

　一體今の世の中は操行が甚だ亂れて居つて、平田さんなどは惡魔狩を初めて頻りに各方面の檢舉をやつて居るが、寺内も山本も亦此一代の風潮の外に立つことが出來ぬ人である。兩先生方に逢うて見ると、兩方共森嚴極まつた態度をして居て、客をして形を改めしむる概がある。けれども裏に廻つて見れば山本の今の妻君に於ける、寺内の時々の待合入の如き、存外通人、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行動あるを免れぬ。陸海軍の兩眼目にして規律嚴然たる先生方でも、著しく人間の表裏を示すといふを感ぜざるを得ぬ。敢て兩先生方を非難するではないが、今後に於ける日本の要求は極めて品行の正しい儀表的人物であらう。伊藤さんの如き放縦自在の態度は後來は兩將軍に望ましからぬ事であるから茲に一言して置く。

△山本伯と寺内子

靜觀居主人

日本の軍備上の必要といふよりも、今後の日本に軍備擴張の必要の時機ありとしたならばそれは陸軍にあらずして海軍にあることは明かであらう。其方からいへば今の海軍の基礎を作るに與つて力ありし山本伯の方が乘り出して來るといふ事に緣故があるやうにも思はれる。けれども日本の海軍の擴張の必要は、山本が出て初めて知られた程、日本國民が海軍に冷淡でもなく、又今日では山本が居なくても、山本の養うた當局の人々で充分擴張を實行し得るかも知れない。そこで若し山本が總理大臣になることがありとしても、それは海軍の山本としてにあらずして、日本の政治家たる山本としてゞなければならぬ。處が日本の政治家としての山本は私の眼には一向入つてゐない。何處にあの人の政治の能力あるか私には頓と分らない。現在政府の外に居るに拘らず元老とか、政府の當局者とか、或は政治上に有力の政黨の首領共の考へて居る事、又表にあらはれぬ裏面の事にもよく眼を附けて居る、大抵知らぬ事はないと思はるゝ點は確かにある。けれども其事柄について我意見はかうである、彼の意見は宜しくないと主張を出したといふ事を聞いた事がない。或人が主張して其主張に賛成する時には有力な賛成を爲し得る。けれども自分自ら主張の中心となつたとは聞いた事がない。それでは政治家として何だか物足らぬ氣がする。

寺内の方にも多少物足らぬ點がある。彼は山本に比

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べると説の多い方である。總ての事について多少の説がある。然し説の多いといふ事は説を熱心に主張して貫徹しようといふ事を意味しない。或場合には説の多いのが却て主張のない事になる事もある。が山本がやつて居ない事で寺内がやつてゐる事が只一つある。山本は前度の桂内閣では桂からは副總理といふ待遇を受けて居たに拘らず副總理たる實を行ふた事はなかつたらうと思ふ。寺内は西園寺内閣で副總理の役目を少々やつたやうである。寺内は今の桂内閣では大臣の首席であらう。そこで前桂内閣で山本が副總理であつた如く、寺内は現桂内閣の副總理でなくてはならぬ筈だのに、さう行ては居ない。で寺内は西園寺内閣で一寸副總理は勤めたものゝ、先づ好んでやつたものでないといへるかも知れぬ。それに、もう一つ寺内に物足らぬ所は案外にも陸軍部内の評判がよい事ばかりでもないといふ一件である。海軍に於ける山本の勢力よりも陸軍に於ける寺内の勢力は少しばかり小さくはないかと思はれる。それは山本は今の海軍の創設について與つて力あるが、寺内は陸軍の今日あるについての貢献の力が山本よりも少し足らぬ所あるより起つたのかも知れぬ。一つは内閣について説の多いより、陸軍について力が専らでないより起つた所もあらう。寺内は山縣とは少し違ふ。山縣は陸軍に對して絶對である。今も猶其勢力を落さずに居る。寺内は多少山縣の蔭に隠れて居る。それから長州には外に人物がある爲かも知れないが、薩摩の人が熱心に山本を推さんとするものあるに比して長州の人の寺内を推す數は少し足らぬ、其代りに寺内を推さんとするものが長州以外にあるかも知れぬから差引勘定したら同じかも知れぬが薩摩の勢力もまだなか〳〵あるから、どうも寺内の方が少し足らぬやうにも思ふ。

そこで若し軍人から總理大臣が出なければならぬとすれば、どつちが先になるだらうといふのが問題だ。前例によれば前の總理大臣が自己に代る總理大臣を推薦する事になつて居るから、差當つて桂が兩人の中何れを推薦するだらうと考ふれば、私は山本を推すに

ひないと信ずる。（終）

△山本伯と寺内子

尾崎行雄

西郷南洲、大久保甲東去つて以來薩摩に人なきや久し。維新の際に蘊蓄した薩摩の勢力は非常に強大にして且其團結力もなか〱鞏固なれば、之を統率する薩派の代表的人物の出てんことは熱心に要求せられたが、終に其任に當るべき人物が出でず、止むを得ず松方侯黑田伯等を其首領になしたる事あるも充分なる効果が擧らず、又一時樺山伯、高島子、川上子等が薩派を代表せし事あるも之れ亦さしたる勢力ともならなかつた。其間にあつて長州は伊藤公、山縣公、續いて桂侯などの代表的勢力によつて漸々發達し、今日に於ては薩派の政治上に於ける勢力は甚だ微々たるものになつて了つた。けれども維新以後今日に至るまで養ひ來つた勢力は、よし表面に顯はれずとも、尙陰然たる一勢力として存して居る。何人にても之を代表するものあれば喜んで之を迎へんとして居る。此場合に於て山本伯といふ人傑が突然顯はれた。伯は未だ微祿の際よりして未來の大臣を以て目せられ、其後益々發達して世間の希望に背かぬ一種の傑物となり、將來も亦大いに爲すべきの位置と機會とに遭遇しさうな狀態にある。而して此人は智あり、量あり、又膽あつて政界の首領になるには好都合の人と思はれる。他日必らず大いなる働をなすであらう。只當人も熟知するだらうが、これから先の日本は薩摩とか長州とかいふ殘壘に據て事を爲さんとするもそれは到底出來ぬ。殘壘も利用すべきものには相違ないが其れ丈けでは仕事が出來ぬ。即ち日本全國の利害を眼目とし、日本全國の人物を收攬して其れに依らねばならぬのである。山本伯も其點を看破し、薩人として立たず、日本の一人として事をやつてゐる。現に海軍に拔擢して居る人物も其郷黨朋友なる故のみではない。今の海軍大臣なども伯の引立てたものであつて而かも其郷黨の人にあらざるを見ても

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

矢張り日本の土臺の上にて仕事をする積りであらう。只私の疑ふ所は伯が果して眞に政治的趣味を備へて居るか否か、矢張り軍人的趣味が彼を作つて居るのではないか。其點は私にはよく分らぬ。伯が政治に必要なる機略を備へて居ることは私も認める。然し其羽翼を伸ばすことの狹いのを見ると伯に果して政界に來る準備あるや否やを疑ふ。海軍の方にはよく其勢力を張つて居るが、桂侯が萬遍なく諸種の方面に手を伸ばして居るのとは其趣を異にして居る。然しこの依る處一方に偏するが如く見ゆるのは、今迄の境遇の然らしむる處であつて、眼界弘く亘らなかつた爲かとも思ふ。然し兎に角之れが伯の政治上に於ける一つの疑問であつて、又缺點なるかの疑がある。殊に世間では伯が財利の念强くして私財を積みつゝあるとの說を傳へる。私は其眞僞を知らぬし、又若し眞なりとするも、他日大いに之を散ぜんが爲めに積むならば、方法さへよければ政治家として相當の志であらうが、若し財其物を嗜むより來りしならば、政治家として助とならざるのみならず、傾をなすであらうと思ふ。其の事について思ふは長州の代表者たる寺内子の事である。寺内子は財を散じて常に親戚故舊に厚いといふ風說を道路の人より聞く。之れ亦其眞僞を知らぬが、官界に居ることも久しく、殊に陸軍の重要の位置にありながら近來まで自己の邸宅を有せざりしは他に其類例なき事と思ふ。近來初めて其の邸宅を建てたといふ事を御本人から聞いたが、其性質財利に恬淡なる人故定めて質素にして瀟洒たるものだらうと思ふ。此人は己れを處することも謹嚴にして且つ朋友故舊に篤く、思慮周密――寧ろ周密に過ぐる程であつて、又吏務に通じて居る。山本伯とは其性情大いに反する處あるが、一は薩派出身の有力者、一は長派の有力者として政界の二雄たるを失はない。其位置經歷略ぼ相匹敵し、其代表する藩閥の力も略ぼ相當るを以て他日の日本は或は此二人の手によつて暫らく經綸せらるゝ時期があるかも知れぬ。殊に寺内子は近來貴族院に手を伸ばして頻りに羽翼を張らんとしつゝあるは、必ずしも現在の內閣の爲めに盡す爲めの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みならず、將來の自己の根底を作る深謀あるものとも觀察せらるゝ。

然しながら兩氏共、目下の急に應ずるに鋭利にして深く將來を慮る點に缺けて居るやうにも思はれる。貴族院に手を伸ばすにしても其の着眼點が徹底して居らぬ。國民的勢力日に發達し維新以來其の勢力を慾まにせし流石の薩長の勢力も次第に崩れ、長州內閣が出來ても純粹の長人として之に入る者は極く僅しかない。古の長州內閣といふものとは非常の相違である。若し薩派が作つても同樣である。國民的勢力發達して薩長などいふものは次第になくなる。將來は議院に手を伸ばすにしても貴衆兩院、殊に國民の上に立つ衆議院に比較的重きを置かねばならぬのは明瞭である。現在の衆議院は餘り有力でないやうに見えても將來必らずさうでない。又貴族院は政黨嫌ひとか何とかいふけれども之も亦一時の現象で、忽ち變化すべきは數理の上に明瞭である。今日所謂官僚派の手先の如く見ゆるものは多くは半白の老人で棺桶に片足を踏入れて居る連中である。之に次いで出て來るは皆進歩した敎育を受けた人で熱心に政黨興味を鼓吹してゐる。之を以ても天下の形勢次第に推移しつゝあるを見るに足る。故に同じ貴族院に手をつけるにしても今のつけ方ではいけぬ。其點に於て兩人の爲す所に多少の怨を抱くを免れぬが、然し兩人共事物の要點に着眼して將來の發展の地步をなすに怠らぬ人の如く見ゆるから、よく注意して躓かずに行けば將來の大立物となる事は疑ないであらう。(了)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京朝日新聞



▼東京朝日新聞は作らず、唯有を有とし、無を無とす。
▼東京朝日新聞は僞らず、唯是を是とし、非を非とす。
▼東京朝日新聞は動かず、威武に動かず、富貴に動かず。
▼東京朝日新聞は賣らず、權貴に賣らず、勢力に賣らず。
▼是の如くにして我が東京朝日新聞は健在す



文藝欄 文學美術に關する各方面の評論及報導を爲すべく新設し夏目漱石之が編輯に當る

新聞界 内外の新聞雜誌に關する報道を網羅す、世界新聞界の大勢を知らんと欲せば眼を此欄に逸す可からず杉村楚人冠之を主る

小說 冷笑 歸朝以來文壇の視聽を萃めたる永井荷風氏が初めて公にせる長篇

小說 空中の人 は江見水蔭氏が新生面を開ける興味中心の試作にして讀者の喝采湧くが如し

物好銘々傳 各階級の變な妙な物好き先生續々として現れ出づ

犬の話 學者貴族乞食盜賊各種各樣の興味ある談話を集む

元日の本紙を看よ!!!
世界的一大計畫發表せらるべし!!!

犬十五題 不折畫伯の筆に成り奇想天外より落つ

家庭教育 の資料として昨年中大喝采を博したる「今日の歷史」に繼ぎ新材料と新意匠を加へたる「今日の手紙」連載せらる

此他 碁譜印譜泉譜 落語 お伽噺、詩歌、俳句、川柳、雜錄等 興味津々

新年附錄 **日英博覽會世界一周雙六**（一部賣は廿五錢）
楚人冠及椋十共案、中村不折畫、前田默鳳書の大版彩色刷說明附帙入

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

信用ある店舗及卑猥なる賣藥の廣告は掲載を謝絶す

色刷新聞の王

中央新聞

世は飛行機の時代となり飛行機の飛行は世界を驚倒しつゝあり

中央新聞の活動、飛躍、發展は正に飛行機式なり

別けて四十三年の中央新聞は政治界に經濟界に飛行機的突進を試むべし

中央新聞は家庭の女王なり婦人子供の好伴侶なり

小說は秀抜、講談は逸宕共に好評世上に嘖々たり

小說 荒浪　怒濤庵作

講談 義士傳　西尾鱗慶演

◎本紙定價一部壹錢五厘◎一ヶ月前金卅五錢三ヶ月同一圓◎半ヶ年同一圓九十錢◎一ヶ年三圓六十錢
◎地方遞送料一ヶ月金八錢を加ふ
◎本紙廣告料◎中央五號活字十八字詰一回一行金五十錢◎雜報欄一行金一圓色摺一色一圓

電話 編輯用 長距離百七十九番
編輯用（新橋）二千二十三番
事務用 二千二百五十八番

振替貯金口座（貳〇〇壹番）
便益部振替貯金口座（壹四六壹〇番）

發行所 京橋區山城町 中央新聞社

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



▲都新聞は議論公正にして平易穏健に、報導は機敏にして簡潔周到なり。

▲都新聞の政治上、經濟上の記事は公平にして何等外間の制肘を受けず。

▲都新聞の相場欄は觀察奇警にして且機敏に、少しも他人に役せられず。

▲都新聞の工藝、美術に關する記事は報導評論共に妥當にして且親切也。

▲都新聞の雜報は演藝欄、花柳界の消息と共に出色なりとの公評あり。

▲都新聞の讀者と記者及相談の相談は讀者の相談對手にして又好讀物也。

▲都新聞の小說、講談は其挿繪と共に當代名家の手に成り最大好評あり。

▲都新聞の紙質精良にして印刷鮮明なり見て心地よく讀んで眞に面白し。

▲都新聞は都鄙の各種の階級を通じて最も多く且十年以上の愛讀者多し。

▲都新聞の廣告は以上の理由に依り種類の如何を問はず其効力最も大也。

發行所
東京市麴町區内幸町
都新聞社

電話
社長室 新橋 二〇八一番
事務用 新橋 一七五番 四〇六六番
編輯用 新橋 六一六番 三一〇八番
（振替貯金口座七五二七番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日本

▲政治　に關して日本新聞は官僚政治反對の急先鋒たり、今や時は政治季節に入る、眞面目に政界の眞相を知らんと欲する者は日々の其の座右に缺く可からず

▲經濟　上の事は日本新聞の最も留意する所、且下財界否況の由來する所を詳かにして國民負擔の過重一大原因たるを示し租税輕減の必要を唱道しつゝあり財界人士の必讀すべきもの

▲教育　界の記事論評は日本新聞の特得たり教育界の人士は一讀して東京新聞紙中其比なきを發見せん

▲市場の聲　は經濟界の異事奇聞を素破拔いて笑ふべく喜ぶべき事ある中に自ら財界の裏面を窺ふ捷徑たり

▲新聞批評　は書肆の提灯待たること無く嚴に其良否を指摘し力めて讀書家の參考に稗益せんとす批評嚴に過ぐとの評あるも讀者に忠實ならんとすれば亦止むを得ざるに出づ謹て江湖の高批を仰ぐ

▲數日の讀物　時々の出來事、若くは社會一種の狀態にして讀んで趣味あり利益あるもの細探調査の上、誇りとする所なり

▲へなぶり　は三十一字の奇拔なる一新體にして今の人情世態は丸出しとなる、趣味興味此上ある可らず

▲俳句　は角田竹冷宗匠の撰に係る連日の紙上に十七文字光彩を放つ

▲短歌　は中村秋香大人の撰にして亦紙上に優美掬すべきものを添ふ

▲平易　文章字句凡て平易、何人にも解し易く讀んで

▲農業　に關する記事論評は他に類例なき所、近時は農家の爲め特に代理部を設けて其必需品の代理購買を引受け農家の實益に供しつゝあり

▲講談　は讀み物として趣味寡からず斯道の老手を煩はして日々の紙上に連載す從來讀書の好評喧し

▲小說　是れ又大家の手に成る者每號の紙上に現はれて文學的趣味の津々盡ざる所、本紙の誇りとする所

▲不問語　は社會凡ての階級に亙る人事の側面觀にして珍奇喜ぶべきものあると同時に社會の裏面を流るゝ一種の狀態を觀察して得る所寡からず

定價一ヶ月金貳拾五錢
市内ハ郵税金拾五錢ヲ
要ス　三ヶ月郵税共金
壹圓貳拾錢

東京市京橋區三十間堀三丁目
發行所　日本新聞社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一陽來復、明治四十三年の新天地は笑つて吾徒の活動を待てり。

一陽來復、二六新報の新粧は、庚戌の天地に一大爪痕を印すべく期待されつゝあり。

正義の急先鋒、人道の擁護者、官僚政治家の一敵國、弱者の味方、平民の友、悩める者の慰安者、迷へる者の指針、二六新報は此の抱負を以て崛起せり。

二十世紀の新舞臺に立たん者は必ず此の拔目なき助言者あるを忘るべからざる也

二六新報

◎本紙廣告料

新式活字十八字詰一回一行前金六十錢▲雜報欄内特別廣告一行一圓金一圓●郵券一割増

◎本紙定價

一枚一錢五厘一ヶ月三十五錢▲内地本社直送（韓國北淸及南淸の一部を含む）一ヶ月郵税共前金四十錢三ヶ月同上一圓十錢六ヶ月同上二圓十錢△外國本社直送一ヶ月郵税共八十七錢●郵券代用一割増振替貯金二錢増

△見本御望の方は御一報を乞

發行所　東京市神田　二六新報社

電話　本局一二二六二六番　二五〇〇番　二六〇〇番

振替貯金口座六一七二番

横濱市港町五丁目　横濱支局

大阪市北區東梅田町　大阪支局　電話特東二六〇〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日本最古の新聞として光榮ある歴史を有し教育ある社會に多くの讀者を有す

東京每日新聞

政治經濟財政に關する諸問題に就ては穩健なる主義を持し正確なる報道を怠らず每月三日には清新なる家庭の讀ものとして理想的家庭雜誌新家庭（定價七錢）を月極讀者に無代配布す

▲本紙定價一枚　一錢　一ヶ月二十錢　外ニ郵稅十五錢
▲三ヶ月　前金郵稅共金一圓　郵券代用一割增

東京麴町區丸の内

東京每日新聞社

電話　本局二〇八六（編輯）　本局二〇七八（同　）　本局一七九〇（事務）

編輯事務兩局を通じ一千九百の社員は夜と日との區別なく活動して休止せず

夕刊
朝刊

報知新聞

七臺の輪轉機は午後四時より翌午前四時迄轟々輪轉の聲を絶たず發行部數實に四拾二萬部を超ゆ廣告機關として拔群の偉功を奏するは多言を要せず

▲定價一部一錢五厘一ヶ月卅五錢郵稅十五錢夕朝刊卅八錢郵稅卅錢▲三月ヶ分拂の者に限り郵稅共一圓廿錢夕朝刊（割引無）郵券代用一割增

東京丸の内

報知社

電話

本局長二六八一　編輯局
本局長二〇三三
浪花三六五一　兜町出張所
本局特長三三三五　販賣部
本局長一六〇八　廣告部
本局三二一一　代理部
本局一二〇九　安信所

東長三四三一　大阪支局
長一四三六　名古屋支局
長一七六五　京都支局
長五七　靜岡支局
長一五三一　橫濱支局
二二一　橫須賀支局

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一日三度の刊行新聞

東京京橋三十間堀

やまと新聞

あさに出す新聞は

一日中の世界の出來事を殘りなく會得し得るやう大きくて鮮明な活字で記してある忙しい仕事をする人は先づ之を讀んで更に一日を了へて後ち夕刊で詳細を知れ

例へば其題目を讀んだゞけても一目瞭然に前

正午に出す新聞は

人は之によつて其日午前中の出來事を何人よりも一番早く知り地方の人は之によつて一日遲くれの新聞を讀む必要がなくなる蓋し正午版は本社の獨創に係る者である

毎日一回宛特別に詳細なる號外を出すと同樣市内の諸君の親切なる友人で又多智なる教師である諸君が一日の勞作を了

ばんに出す新聞は

へてゆつくり其日一日の出來事を知り一日の慰安を得やうとするには之れに限る最も趣味に富んで最も記事の豐富な點が夕刊の生命で又我誇とする所である

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

記事も意見も、穩健にして而も綿密なれば、何の事件に關しても。最も信賴して讀む可き新聞紙なり

本局　東京市京橋弓町　振替貯金八千番

電話新橋　編輯　三五二・三九六五　事務　二貳三六・三貳三〇

朝報社

日刊新聞

東京朝報

(永世無休日)

定價　一枚一錢　百枚九十錢

郵稅　一枚二厘　百枚二十錢

一年三百六十餘日。日々味いて飽きる事無し。新聞紙中の米の飯也。人は一日も此新聞に離る可からず

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨を御附記を乞ふ

毎日電報

本紙は全國新聞中内外通信機關の最も完備したる新聞紙なり

△英國憲政の爭點

慶應義塾大學政治科教授 田中華一郎氏

ハーコート曰く現下の政局は佛蘭西革命よりもクロンウェルの革命よりも重大なりと、何故に佛蘭西革命よりもクロンウェルの革命よりも重大なりやは即ち本篇の説明する所なり、且一月の總選擧において自由黨勝利を得ば上院は如何に成行くや、統一派勢力を得ば英國の財政々策は如何に變動するや、是亦本篇の説明する所なり、元旦以降紙上に連載する本篇は政治問題研究者の必ず一讀すべき緊急の大文字なり

△社會改良論

法學博士 遠藤隆吉氏

今日の社會には國民を支配する道德の標的なし、是を以て人心徒に迷惑して弱者は煩悶し强者は我意を逞ふし社會の劑法混然たり、如何にせば秩序を保ち、强弱を調和し男女の別を定め而して東洋特種の文明社會を構造すべきかこれ一日以降本紙に連載する本篇の解決せんとする問題なり

△小説女優

松居松葉

東西の劇に通ずる小説家としては第一に指を松葉に屈せざるべからず、此人にして此作あり、氏が渡歐中の觀察は本篇において初めてその眞粹を發表するものなり

△家庭教訓いろは歌留多

壹組

政治家文學者其他朝野名士の筆蹟を舶來厚紙に印刷して作りたるもの、新春家庭の教訓的遊戲物にしてこれを讀者に贈呈す

發行所 東京市麴町區有樂町壹丁目(振替貯金口座五八四二) 毎日電報社

信用なき人卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る御旨附記を乞ふ

國民新聞

▲政治上の機微を窺ひ知らんとする人は國民新聞を讀め
▲國民新聞の政治上に於ける評論と報道は穩健且つ正確
▲主筆蘇峯氏の東京だよりと日曜講壇は新聞界の一異彩
▲財界の趨勢を詳細に知らんとする人は國民新聞を讀め
▲國民新聞の財政經濟に關する記事論說は神速且つ確實
▲文藝界の思潮消息を解せんとする人は國民新聞を讀め
▲國民文學欄の俳句と創作は淸新評論は妥當消息は周到
▲新春の紙上より大學教授上田敏氏の新作小說渦卷を掲載す
▲繪畫と寫眞の美を翫味せんとする人は國民新聞を見よ
▲國民新聞には鹿子木不倒畫伯を始め著名大家の繪畫あり
▲能樂欄は本紙獨特書畫骨董其他娛樂的記事頗る豐富也
▲社會各方面の出來事を知らんとすれば國民新聞を讀め
▲國民新聞の社會種は有益にして面白く機敏にして誠實
▲興味多き續き物を樂しまんとする人は國民新聞を讀め
▲小說と講談は誰にも解り易く且つ面白きを以て評判也
▲國民新聞には斷へず各種の興味ある懸賞募集の催しあり
▲國民新聞を他にして眞の新聞を求むる人は失望すべし

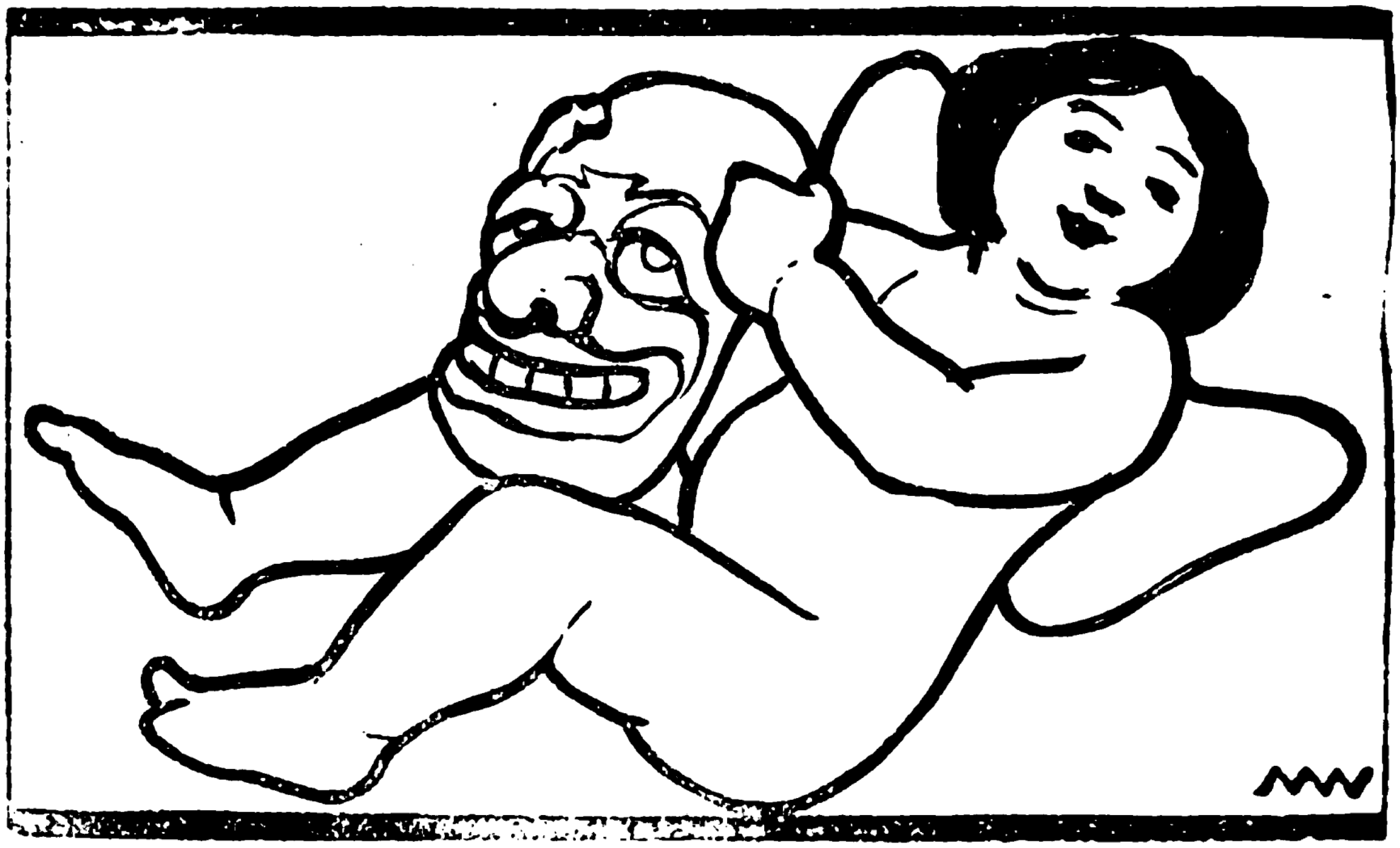
定價一ヶ月卅八錢　三ヶ月前金壹圓八錢　六ヶ月前金二圓十錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新年號創作



浴醫の家

正宗白鳥

（一）

老父山室衞が浴醫となつて、有馬の山間へ退いて後、その子の伊之吉は只一人東京に殘つて、下宿住ひをしてゐた。去年の春辛夷の花の咲いてる時分、二三日父の家へ歸つたのみで、長い夏の休暇にも、口實を設けて東京を離れなかつた。牛の吼えるやうな父の癇癪聲を聞かず、氣儘に寢起の出來るやうになつてから、東京は見違えるほど樂しい都會となつた。嘗て一度柔しい懷かしい情愛を見せたことのない父も、金にかけては慾が淺くて、學資の額に苦情をつけることはなく、大抵は請求通り送つて呉れる。折々母からも意外の小遣

錢を送つて呉れる、學課を懈けやうと、何んな遊びをしやうと、誰れも咎めるものはない。多年友人の下宿暮しを見る度に羨んでゐたその氣樂な境涯に入つてゐるのだ。何しに新しい故郷へ歸つて、恐ろしい父の目の前に小さく萎けて暮らす必要があらうぞ。

て、彼れは今年の夏も歸省する氣は少しもなかつた。宿代の心配のない有馬の溫泉に遊ぶよりも、友人と房州の海岸へでも貧乏旅行した方がましだと決めてゐた。そして母の度々の手紙をも斥けてゐたが、その最後の手紙を讀むと、流石に打棄てゝ置けなくなつて、不承々々に歸省の仕度をした。この春負傷してからの病が次第に重くなつて、とても夏を越せさうでないと云つて來てゐる。此頃は絕えず譫言ばかり云つてゐて、人の顏をも見別けられんやうになつたと知らせて來た。

伊之吉は手紙の文句通りに、父の病氣が重いとは信じないで、出來るだけ出立を遅らせ、八月の中旬頃にやう／＼有馬の方へ旅立ちした。ほんの見舞ひさへ濟ませたら、直ぐに歸つて來るつもりであつた。

生瀨で汽車を下り、鞄だけ俥に乘せ、自分は歩いて坂路を上つた。焦るやうな磧の中を澄んだ水が細く流れてゐる。所々皺をつくつた禿げた山が見ても暑苦しく聳えてゐる。溫泉行の客は前後に續いて、草鞋ばきで勇ましく行過ぎる十五六人連れの青年もあつた。木の間を通して絕えず美くしい衣服がチラついてゐる。伊之吉は山の繁盛を思ひながらも、心が進まなかつた。「有馬へ二里」「有馬へ一里」と、道しるべの文字を讀む毎に、額のたるんだ父の顏がます／＼鮮かに浮かんで來る。子供の時分跳ね廻つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

笑ひ興じてる折でも、その顔が目につくと、貓を見た鼠のやうに隅の方へすつ込んで息を殺してゐたが、今も恐ろしさは少しも變らない。それに病氣だと癇癪も一層ひどくなつてるかも知れぬ。

彼れは自分の家につく頃、父が眠つてゐればよいがと願つた。そして幾度も道傍に憩うて、周圍の景色を眺め、車夫と話などして時を遲らした。

山の腰を分け上るにつれて、暑氣は次第に衰えて、杖桒橋を渡る頃には、日は落葉山に落ちかけて、涼しい風がヒヤ〱と肌に觸れた。去年の春とは異つて、町の物音が賑やかに響いて來た。昨夕から芝居も始まつてるんだと車夫が云つた。

父の家は瀧川に添うてゐる。紅殻色の門には浴醫從七位山室衛といふ木札が厳めしくかゝつてゐたが、狹長い土間高い上框は田舍の百姓家染みて、醫者の住宅らしい氣がしなかつた。

「伊之さん、此間から毎日待つてたんですよ」と、母の妹のお安が竈の前で火を吹きながら、直ぐに見付けて聲をかけた。その聲に氣付いて、奥の間から母や母方の祖母が出て來て、「今年も歸つちや來まいと、今も噂してたんだよ」と、左右から顏を見守つた。

「お前、有馬も隨分暑いだらう」と、母は着替えの浴衣を出して、「直ぐにお湯に入つてお出でな」と勸めた。

伊之吉は病人のことが氣遣はしくて、小聲でその容態を訊いたが、母は事もなげに、例のフワ〱した聲で、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「此頃はボケちやつて、何を云ふんだか分りやしないんだよ、只時々暴れ出すのには弱つちもう、あの通り身體が大きいんだからね」と云ふ。

「お父さんは何處に寢てるの」と、矢張小聲で問ふと、母は首を曲げて奥の間を差示して、

「まあ、行つて會つて御覽、お前の顔が分るか知らん」

「本當にそんなに悪いの」と、伊之吉は不審がつて、靜かに奥の間へ入つた。箪笥や葛籠を置いた狹い風通しの悪い部屋である。

彼れはソッと蒲團の側へ寄つて、「只今歸りました」と、慇懃に挨拶した。父は細く目を開けてゐたが、やがてムク／＼起上つて、その子を見詰め、

「又試驗に落第したんぢやらう　貴樣のやうな學才のない奴が、人並の勉强で何が出來る。確かり根性を据ゑてやらなくちや駄目だぞ」と、唇を震はせて嚴めしく云つた。

「えゝ、此頃はよく勉强してゐます、今年の試驗にも落第はしなかつたんです」と、逆らはぬやうに云ふと、

「さうか、落第はせなんだか」と、父は常にない柔しい調子で云つたが、やがて首を俯垂れて兩方の膝を撫でながら、「左の足が左大臣、右の足が右大臣」と、寢呆聲で五六度繰返して云つた。

そして伊之吉が呆氣に取られてゐると、ヒヨイと藤八拳を打つやうな格好に兩手を突出して、「黑川君

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「君はさう恨んでばかりゐるけれど、何に好んで君を死地に入れたんぢやない、君の死んだのも運ぢやから、さう思つて諦めて貰ひませう」と云つて、誰れかの押詰めて來るのを支えるやうな身構えをした。

「そら始まつた」と、母は目を上げて微笑した。

「黑川君て誰れのこつたらう」と、伊之吉は薄氣味惡く感じて、次の間へ後退りして、ソッと母に訊いた。

「私も思ひ出せないんだよ、黑川なんてこれ迄一度も聞いたことがないと思ふよ、戰爭ででも一緒に働めてた人か知ら。戰爭の譫言がよく出るんだから」

「ぢや、毎日あんなことを云つてるんですか」

「あゝ、日に二三度は乾度黑川君と談判が始まるんさ。そら御覽、又脛を出して撫て出したよ、傷はもう直つちまつてるのに、まだ足を氣にしてばかりゐる。さう云へばこの春池の坊へ診察に行つた時に、二階から轉げ落ちて左の足に傷をした時は大變な騷ぎだつたよ、傷は左程でもないのに、一人で狼狽て出してね。あんな氣の小い人ぢやなかつたのに」

「左の足が右大臣、右の足が左大臣」と、突如に奥の間から聲がした。一同思はず吹出した。

（二）

衞は蒲團の上にキチンと坐つて、黄んだ肥つた脛を露出しにしたまゝ、獨り西南戰爭の夢に耽つてゐ

た。その時分彼れは軍醫として從軍して、手荒な療治と邪慳な態度とで、負傷者を恐れさせた。

戰爭が終ると軍職を離れて、姫路で開業した。亡き妻の遺兒のお篠と、親一人子一人の淋しい境涯に滿足して、行々相應しい養子を迎へるのを樂しみに日を送つて、再婚を勸める知人の言葉には耳を貸さなかつたが、半歲立たぬ間に、如何にもその不自由に堪へかねて、譯もなく結婚した。

後妻のお德はその折まだ二十歲前で、夫とは親子ほど年齡が異つてゐた。その地の名家の娘で、女として一通りの藝は身につけてゐた。結婚後間もなく伊之吉を生んだが、それがためにお篠に對して粗略な素振を見せることはなく、實の母と實の姉とを兼ねたやうな柔しい情愛で絕えず庇つてゐた。二人の子も成長するにつれて、荒々しい父を離れて、母にのみ縋るやうになつた。

衞は姫路から大坂へ移つた。大坂から東京へ移つた。東京では小い病院をも建てるほどになつたが、その一生の最も華々しい時分に、お德は赤痢に罹つた。經過が惡い上に、主人の仕打もひどくて、稍もすれば枕許で怒鳴りつけられるほどであつたが、お篠は生命がけで忠實やかに看護して、そのためか見込みのつかなかつた病人も次第に癒り口のつくやうになつた。しかしお德の快くなる頃には、お篠の身にその病の感染して、僅かの日數の間に死んでしまつた。衞は非常に落膽した。男泣きに泣いた。そしてこの頃から癇癪は一層强くなつて、晝も夜も何かにつけて、怒號の聲が嵐のやうに家の中に響き出した。「貴樣のやうな馬鹿が生きてゝ何になる。」と口癖のやうに伊之吉を罵つた。「おれの跡は貴樣には續が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつて、打たれやうと罵られやうと、身動きもせねば口答へもせず、蔭では「お父さんの傘、外廣かりの内狹まり」と嘲けつてゐた。

實際、衛の癇癖は家の者に激しいほど、他人に向つては激しくなかつた。風流の嗜好もあつて、書畫を集めたり詩人や歌人とも往來してゐたが、そんな人と打ち解けて話するのを聞いてゐると、不思議に靜かて穩やかて、世間の人と違ふ所は見えなかつた。妻君の實家に對しても、盡せる限り盡してゐた。實家は後繼者の不檢束から、年々零落して、諸方の親類に助力を乞はねば立行かぬやうになつたが、衛は應揚にその世話をした。外の親類のやうに愚圖々々した文句を並べるやうなことは一度もなかつた。終にはお徳の母や、末の妹のお安をも引取つてやつた。その父も不運な一生の最後を、この家の一室て送り、追善供養もして貰つた。親類の親類も「鮎膓」ぐらゐの手土産て東京見物に出掛けて、五六日も此家を宿屋代りにして宿つて行く。

お徳の從弟の從弟が幾度も醫術試驗に落第した揚句、見習のつもりて此家にゴロついてたこともある。主人側に親類のない代りに、妻君の縁者が砂糖に寄る蟻のやうに寄つて來た。衛は心て親切に待遇はぬ代り、物入の幾ら嵩張つても、少しも苦情がましいことは云はなかつた。金庫の鍵は妻君の手に渡されて何に使はうとその自由に任されてゐた。

だが、病院は經營を過まつたのか、人望はなくなり、三四年の後には人手に渡るやうになり、衛は都の眞中ては獨立して、業を續けられなくなつた。それに身體も衰え、技術も世に遲れて來たので、思切

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて老後の保養をかねて、有馬の山中へ引籠ることゝなつた。從七位といふ肩書や趣味の廣いことは町の者に喜ばれ敬はれるに都合がよかつた。

（三）

伊之吉は父の樣子を見て、これなら有馬の家も豫期したほど居づらくはなさゝうだと思つて、心の底てはむしろ父のボケたのを喜んでゐた。

彼れは母の手から湯染の黃い手拭と湯札とを貰つて、狹い坂路を上つて浴場へ行つた、どの店先も氣色ばんで、去年の春とは見違へるほど賑やかであつた。夕闇にボンヤリ見える人の顏が濕つぽく、擦違ひに湯臭い匂ひをさせた。浴衣を緩く、光澤のいゝ首筋を見せた女もあつた。去年の春は田舍物らしい醜い客のみだつたが、夏だからか、今は軟い肉色をした人も其處邊にチラついてゐる。二三の客を送る湯女が、何やら云つて前後相呼はつたが、その言葉は聞馴れぬ有馬の言葉だつた。

彼れは蒸氣の立籠めた中に自由に身を横へ、天井から靜かに垂れる水滴に快く打たれながら、蒸氣の奧に動いてる浴客の赤い身體をボンヤリ眺め、その取留めのない話を聞くともなく聞いてゐると、自分も生れて初めて、溫泉の客となつた心地がした。東京も面白いが、かうしてこの田舍に夏を過すのも惡くはない。

て、湯から出ても直ぐには家へ歸らないて、夕涼みの人に交つて、炭酸泉の方へ遊んだ。靈泉の湧出るのを見ながら、後の暗い山から音もせずて落ちて來る冷つこい風を浴びた。都では目ても留めなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た空の星も、心を惣立てて、嘗て例のない妄想を恣にさせた。

彼れは芝居小屋の木戸口にも立留つた。カンテラの光で下題や役者の名前をも見た。幕の間から拍子木の音がして、それに續いて太鼓の音が響いた。パナマ帽子を被つた髯の生えた男が子供を脊負ひ、妻君を連れて、首を屈めて低い木戸口を潜つてゐた。伊之吉もウッカリ入りかけたが、五錢の木戸錢も有つてゐないのに氣付いて、其處を引返して、瑞寶寺の野道を辿つた。見る物聞く物凡てが珍らしいので、腹の空るまでウロついた。

家へ歸ると食膳は用意されて、一同が待ちあぐんでゐた。

左右に二つもランプを點し、その明るい光の側で、打寛ろいて夕餐を食べた。障子は取放つてゐるので、川向うの旅館の燈火が闇の中に搖めいて見える。水音も幽かに心を眠らすやうに聞える。膳には鯛の刺身、鮎の鹽燒、罐詰の牛肉などがあつて、下宿馴れた彼れは見たばかりでも悦しかつた。

「かうしても、何だか自分の家へ歸つたやうな氣がしない、皆なで旅へ出てるやうだ」と、云つて周圍を見廻はして笑つた。

「此地へ來てもう三年になるんだけど、私達はちつとも土地に馴染まないよ、本當に居心地の變な所だ。これで夏の間は東京ほど暑い思ひをしないだけでもいゝけれど、冬になつて御覧、そりや寒くつて〳〵」と言葉に力を入れて、「それに九月の中頃になると、バッタリ火の消えたやうに淋しくはなるんだしね、とても長くはゐらりやしないよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「その代り氣樂ていゝてせう、忙がしくなくつて」

「忙しいんだか暇なんだか分りやしない、何だか氣が落付かなくつて。どうかして此年は雪の降らない間に、都會へ引越したいものだ、もう〳〵冬籠りは閉口々々」と、母は浮いた調子て云つた。そして祖母と移轉先の評定を始めた。矢鱈に姫路や大阪の知人に問合せて、既に二三軒相當の家をも知らせて貰つてゐる。

「しかし、どうせ移る位なら東京がいゝさ、僕は姫路なんかへ家を持つのは厭だね」と、伊之吉は横から口を出して反對したが、母は碌に取合はず、

「そりやね、お前が學校を卒業して、一人前の月給取にでもなつたら、東京へても何處へても、お前の行く所へついて行くにや定つてらあね。だけど、それ迄は田舍にゐた方が物がかゝらなくつていゝんだよ」

「だつて、僕の下宿料を出すよりや、東京に家のあつた方が儉約だと思ふがな」と云つたが、ふと其處に坐つてる祖母や、叔母のお安を見て、こんな家族の多いのに氣付いた。これては一家の物入も多からうと、今更のやうに感じて、「どうせ東京に住まんほどなら、いつそ有馬にゐた方がいゝてせう、さうすりや僕もこれから暑中休暇毎に歸つて來る樂みがあるんだしね、姫路なんか駄目だ、第一こんなに荷物があつちや、引越すのも大變だ」

「何てもありやしないよ、東京を立つた時の思ひをすりや」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の妻は、晝間よりも艶かしく若く見えたが、伊之吉はそれを快く思はなかつた。去年に比べても、東京を出る時に比べても、少しも老けてゐないやうに思はれた。

彼れは顔立の何處か似通へる母と祖母とを見比べてゐたが、ふと祖母に向つて、

「祖母さんもちつとも變りませんね、何年立つても同じことだ、女は或時まで歳を取ると、顔形が變らなくなるからいゝ、堅まつてしまうんだらうな」

「堅まるも堅まらんも、もう／＼私のやうに甲斐性がなうちや仕様がありませんわい、今の間はどうにか凌げても、霜が降る頃から、身體が動かんやうになるんで大弱りぢや。今年の冬は暖かい所で歳を越さにや、もう身體が持ちますまい」と、祖母はさも訴へるやうに云つた。

食事が終ると欄干の側へ座を移して、東京の知人の噂と、有馬の話とをし合つた。先日まで池の坊の別莊へ住友家の誰れかゞ宿つてゐたが、茶代を五十圓も置いたのに、宿の者はまだ不服を云つてると、祖母は土地の者の强慾に呆れてゐた。年々湯治の客が殖えるのだが、別してこの夏は暑かつたからか、どの宿にも空間がなくて、家の二階を借りたがる人が多いんだけれど、病人があるんで貸すことが出來ぬ。見晴らしはいゝし部屋は奇麗だし、向ひの兵衛の別莊に劣りやしないのにと母は惜しんだ。父が此地へ來てから、俳句や和歌の會の企てられて、大分風流の道も開けかゝつたのに、中途で止切れて殘念なことだと、町の老人連中が云つてることも語られた。父が主となつて溫泉神社へ奉納する筈の額も、出來かゝつて沙汰止みになつてるさうだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お父さんのやうに、歌だの詩だの、碁まで打つて、年中頭を痛めなすつちや、腦の惡うなるのも無理はなからうかい」と、祖母は尤らしく云つた。

（四）

伊之吉の寢床だけは二階にのべられた。彼れはランプを持つて、眠い目をして上つて行つたが、眞先に床の間にゴチャ〳〵に積まれた幾多の石が目についた。父が多年の苦心で集めたもので、家の者がうつかり粗末にでもしやうなら、引据ゑて足蹴にしかねまじき權幕で大切にした寶である。去年よりも又石の數が殖えたらしい、順序よく棚に並んでた昔に比べると有難味が失せた。某侯揮毫の額と、亡姉お篠の畫像とは舊の如くかゝつてゐる。

伊之吉はこれまで滅多に足踏みもしなかつた父の部屋に、氣儘に手足を伸して寢た。翌朝遲くまで夢一つ見ずに眠つて、やう〳〵目が醒めても、容易に起きやうとはせず、寢床の中から正面のお篠の肖像を見詰めてゐた。姉弟少しも似てゐないと云はれてゐたが、父の情愛も姉にのみ注がれてゐたらしい。父は毎朝かうして肖像を眺めながら、姉のことを思ひ出してゐたのだらう……

彼れはふと姉と一緒に父の妾の家へ行つたことを思出して、獨りで可笑しくなつて笑つた。妾といふのは、安土町に住んでた頃、よく彼れの家へ出入して、一時は母とも仲のよかつた女で、色の白い口の大きいお世辭のいゝ女だつた。或日學校の歸りにその家の前を通ると、格子の中から聲を掛けられたので、何氣なく寄つて見ると、誰れにも云ひなさるなと口留めして、新聞紙に菓子を包んで呉れた。二三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度こんなことが續いたので、味を覺えて、後には自分から進んで遊びに行つて、御馳走になりなどした。子供心にも家の者に知らせちや惡いと氣付いて、決して口外はしなかつた。時々は貰つた菓子を寢床へ持つてつて、獨喰ひの旨さを感じてゐた。所が、或日姉と二人で使に行つた歸りに、どんな機會だつたか、「僕が行くと御馳走して呉れる所があるんだぜ、姉さんも連れててやらうか」と、得意になつて、姉さんもその家へ引張つて行つた。だが何故だか一人の折ほどチヤホヤされず、ろくに御馳走にもなれなかつた。しかも姉の口から明ら樣に母に知られたので、二人とも手酷しく叱られて、それつきり妾の家へも道寄りが出來なくなつた。

　あの時は母の顔でも恐かつた。そして自分よりも姉の方が激しく叱られ、さも姉が自分を連れて行つたやうに責められたが、矢張母は姉の實の母ぢやなかつたんだと、伊之吉は思續けてゐると、

「伊之さんもう十二時になつたよ」と、お安は雨戸を開けながら呼起した。

「さうかい、道理でお腹が空いちやつたから、今御馳走のことばかり考へてたんだ」と、伊之吉は氣輕く起きて、丈の短い寢衣を着たまゝ緣側をウロ〳〵して、

「安ちやんは有馬が厭にならんかね、毎日用もないのに、何をして暮してるの」と、自分と同年の祖母の痩せた萎びたやうな顔を見た。

「用がない所かい、こんなに忙しいのに」と、お安は佛頂面をして、邪慳に雨戸を開けて、それから夜具を片付け出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伊之吉は笑顔をして、その荒々しい働振りを見てゐた。祖母はお安を連れて山室家の厄介になつてから、自分て進んで女中代りに働き、お安をも指圖して酷遣つた。お安は詮方なく働きながら、不平は年と共に增長した。二人の姉は相當の家へ緣付くまで兎に角お孃樣として育つたのに、自分は何時までも食客だか召使ひだか分らぬやうな境涯にゐなくちやならん。いつそ女中なら女中て、何處か外のお屋敷へ奉公した方がましだと思つたこともあつた。有馬へ來てからは內輪ばかりて氣樂にはなつたが、その代り義於の世話ても手一つてしなければならなかつた。

そして伊之吉の目には、今てもお安を叔母らしく思へなくて、只の女中らしく見えたが、お安の方ては時々叔母氣取りになりたがつてゐるのて、甥の夜具の上下しまでしたくはないし、又すべきものぢやないと思つてゐる。

「飯を食つたら妙見堂へ登つて見やうかな、安ちやんも行かないか、まだ行つたことはないんだらう」と、伊之吉は身を屈めて、妙見堂道を覘いてから階下へ下りた。父は昨夕は大人しく眠り、今朝も靜かに坐つてゐて、物に驚く風はない。何時もかうだと世話が燒けなくていゝんだがと、母は喜んでゐる。伊之吉も最早父を憚る氣はなく、その目の前て自由に話もすれば、父の考込んだ樣子をも笑つた。見た所、氣力の衰え果てゝ無意識になつて、病氣の苦痛などありさうてなく、目付きや手付きは絕えず滑稽染みてゐる。

「お父さん、左大臣が出てますよ」と、彼れは冷かしながら、奧の間から父が秘藏のステツキを取出し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

散歩に出やうとしたが、父は細めた目で彼れの後姿を見送ると共に、スックと立上り、

「そりや來た、こりや溜らん」と呟きながらドシン〳〵と飛廻つて、壁に打つかつた。寢衣の前は開いて、帶は疊に引摺つた。

「何が來てるもんですか、ジッとして寢てるんですよ、貴下は寢てゐさへすりやいゝんだ」と、母は後から抱いて、力を入れて寢床へ引張り込まうとした。祖母は急いで川に沿うた雨戸を閉めた。お安は慌てゝ表の潜戸を締めた。

「馬鹿な、其處へ來てるぢやないか」と、病人は口を震はせ、鈍い目で何處ともなく見詰めた。

「何を云ふんですよ、何時までも〳〵皆なに世話を燒かして」と、母は握拳で病人の背を打倒すやうにした。

父はムグ〳〵口を動かしてゐたが、又物忘れをしたやうにボンヤリして寢床へ戻つた。祖母は再び雨戸を開けた。

「今日は夕立が早く晴れた」と、母はセイ〳〵息をしながら、次の間へ戻つて、汗を拭つて茶を飲んだ。

「何を恐れてるんだらう」と、伊之吉は再び座について訊いた。

「何だかね、日に一二度は何かゞ來るんて弱つてしまう、黑川君との談判だけなら無事だけれど、今のやうだと險呑て仕樣がないよ。先月だか、うつかりしてる間に往來へ飛出して、そりや大變だつたの。家の中だといゝけれど、戸外へ出て變な眞似をされた日にや、恥曝しだからね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だけど、お父さんももう長い間ぢやないな」と父が飛廻つた時の素振は目に殘つて、流石に彼れの心も曇つた。

「あれてお前、長引かれた日にや溜りやしないよ」と、母は眉を顰めた。

「今の間に孝行してお上げなされ」と、祖母は何氣なく云つたが、その言葉は伊之吉の耳に厭な響を與へた。

（五）

こんな風て四五日過ぎた。衞は毎日「左大臣」と「黒川君」と「何か來た」とを日課として、次第に根を疲らせて、汗が額に流れても、蚊が膝頭に喰入つても、何とも感じないやうてあつた。「暑い」とも「物が欲しい」とも嘗て云つたことがない。伊之吉はこの狹い土地の名所古跡を直ぐに見盡してからは、矢鱈に湯に入り炭酸水を飮んて、腹の空るのを樂しみにしてゐた。毎日在京の友人へ繪葉書や手紙を送つた。或親しい友へ宛てゝこんな事をも書いた。

「父の病態はよろしくない。毎日何物にか苦しめられてゐる。僕等はどうかして慰めやうと思つても、父は僕等の心盡しを感ずるだけの意識がない。最早死ぬまて惡い夢から醒めないだらう。僕等は父の魘されるのを傍觀するより外取る道もない。僕は遙々歸省して父の死の床に侍しても、父と今生の訣別を交すことが出來ぬ。遺憾てならぬ」

彼れはかう書いてから感じた。父と別れるのも遠くはないと思詰めて、心細く感じて見た。彼れは又

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

退屈醒ましに、虫干をかねて、父の藏書や書畫を引出して見た。その中には「こんな者を父が持つてたか」と、呆れるやうな春畫もあつたが、彼れはその面白さうな二三冊をコツソリ自分の鞄に收めた。伊之吉はそれに返事もせずに、友人宛の繪葉書に趣向を凝らした詞書を認めてから、階下へ下りると、彼れの從弟の色の黒い田舍びた顏が、直ぐに目についた。母の妹の長男で、彼れより一つ年下である。笑ひ〳〵病人の譫言のお相手をしてゐたが、伊之吉を見ると丁寧に挨拶して、無沙汰を詫びたり兩親の傳言を述べたりした。

「伊之吉、一寸下りてお出てな」と、或日母が階子段の下で、二三度續け樣に聲を掛けた。

その間にも病人は落付いた聲て、前からの話を續けてゐた。

「昨夕は宮樣がお着きになつて、有馬は大變てしたぜ、あの山へ一面に提灯が點きましてな。夜中人聲が切れなんだ。賊軍も恐れて逃げたらしいが、何より目出度ことぢや、貴下のお國ぢやまだ騷動が止まんのてすかい。さうだとお父さんも御心配だらう」

「えゝ」と、從弟は答へてゐたが、伊之吉は彼れを促して二階へ連れて行つた。お安に汲んで來させた冷つこい炭酸水を、土瓶の口からうつしながら、

「君、此處は涼しいだらう、まあ緩くり逗留したまへ、僕もこの土地にや友人がなくつて退屈なんだから、君が來て丁度よかつた、君が疲れてさへゐなけりや、これからでも名所を案內してもいゝんだが」

と、心から客を歡迎した色を見せた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いや見物はこの次でいゝ、今度はほんのお見舞ひに來たゞけて、直ぐ歸らなくちやならんから」と、從弟は頑なに斷つて、明日にも歸りたさうだつた、「僕も今は一家の主人だから、前のやうにブラ〳〵遊んでもゐられんさ、何もかも僕一人て始末をつけなくちやならんのだ」

その顏も言葉も自分より大人びたと伊之吉は思ひながら、「ぢや僕は君について二三日君の國へ遊びに行かうかしら、此家にゐたつて用事はないし、暑中休暇はまだ二十日もあるんだから」と云つて、從弟の故郷の樣子などを聞いた。其處へは小學卒業後半年ばかり厄介になつたことがある。あの時は將來の方針について、自分の考へたことは父が聞いても呉れず、只「貴樣に學問させて何になる」と怒鳴るばかりて、父自身にも子の將來について、少しも量見を決めてる風はないので、伊之吉は自暴氣味て家を飛出したのてあつた。從弟の家庭ては食物の拙いのと、夜具の薄いのと、便所の穢いのが厭だつたが、親子の睦じいのが如何にも羨しかつた。父親が嬰兒を綾したり、學校歸りの子供の復習を聽いてやつたり、一緒に釣に行つたりするのを見てると、世にもこんな幸福な家庭があるのかと不思議なやうてあつた。他人の父の何でもない一言一行が皆慈愛に滿ちてるやうて、從弟の身の上が羨ましくてならなかつた。

「君に差支えがなけりや、僕は何時でもついて行くよ、叔父さんなんかと一緒に、も一度釣に行きたいな。海鯽魚釣りに行つた時は面白かつたね、船て食つた飯の味は今ても忘れないよ」と、伊之吉の心は穩やかな海岸へ馳せて、其處て自由に水を浴び釣をする樂みを想像してゐたが、從弟はあまり同行を喜

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はなかつた。

「此頃は魚は釣れんよ、それに此地とは異つて暑さは酷いし蚊は多いし、折角來て貰つても氣の毒な思ひをせにやならん、それよりは來年の春にでも緩くり來たまへ」と、云つて、折角湧立つた伊之吉の興を醒ましてしまつた。伊之吉は變な氣がした。堅苦しく坐つて煙草など吸つて、病人の身の上など眞面目に案じてるらしい從弟の大人振つた樣子に飽足らなかつた。

（六）

その夕方獨り散歩した。月光で小徑を通つて鼓ヶ瀧まで行つた。歸りには見馴れた料理屋の前を通つた。毎夜騷々しい音の絶えぬ家で白粉や臙脂で醜い顏を色取つた女の出入りするのを見たこともある。今夜は何時もほど賑やかではなくて、往來近い二階の一室から深沈かに三味線が響いた。透明つた聲が流れて來た。「湯屋の二階を下から見れば」といふ俗謠が靜かに柔かに唄はれる。伊之吉は家の前を行きつ戻りつして聞惚れた。有馬の山にも川にも親しみ、溫泉神社の寶物をも見て、最早見殘した所はないんだが、まだ料理屋にだけは足を踏込んだことがない。そして何だか一番面白い所を見忘れてたやうな氣がした。聞けば神戸や大阪から夏場だけ稼ぎに來てる女もあるさうだが、三味線を彈くだけなんだらうか、寢宿りもするんだらうか、此處の料理屋はどんな仕組みなんだらうかなど〻、色々の疑ひを起して見た。そして疑ひの起れば起るほど、二階座敷の有樣が物珍らしく感ぜられた。一度は家の者の目を避けて遊んで見たくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、彼れは金を取出す方法を考へながら歸つたが、家では祖母と母と從弟とがそれ〴〵に分別顔をして話込んでゐた。

「勝太(從弟)さんにビールでも御馳走したらいゝぢやないか、僕も少しは飮めるんだから」と、伊之吉は柱に凭れて坐つた。

母は目で笑つたばかりで取合はず、前の話を續けた。何氣なく聞いてると、父死後の一家の處分や從弟の家庭救助の打合せをしてゐる。

「家でもこの稼業さへ止めればお安にゐて貰はなくてもいゝし、當人のためから云つても、今の中に緣付かなくちや、あまり遲れてもよくないんだしね、今年一杯にやどうかしやうと思ふんだよ、一度お母さんにも會つて、何處か相應な嫁入先を搜して貰ひたいと思つてるんだから、勝さんからもさう話してお吳れな。これで定りをつけて世帶を小くしてしまひさへすりや、ちつとはねえ、どうにかそりやならんとも限らんけど」と、母は勝太の何かの賴みを受入れるに躊躇してるやうであつた。

祖母も後について、「家でも伯父さんが病氣ぢやと、些ともお金が入らんで出る一方ぢやでな」と云つて、「かう何家も運が惡くちや困つたことぢや」と歎息した。

「祖母さんが又心配しだした」と、母は笑つた。この人一人が苦のなさゝうな顔をしてゐる。

伊之吉は話の中に加はらうとしたが、何だか調子が惡いやうなので差扣えた。父の死後の一家の處分財産の高などがふと氣に掛つて、詳しく母に問ひたかつたが、勝太が側にゐるので言出せなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして勝太が新たに雜貨商を始めると云つて、それに必要な資本の足らぬのを零したり、やり出せば乾度成効するなど〻話すのを聞いてると、彼自身の將來の仕事も多少氣になつた。早晩自分の腕で生活せねばならんのだといふ考が、うつかりしてゐた心にも鮮かに起つた。

その夜は勝太と二階に枕を並べて寢たが、伊之吉はあまり話を仕掛けなかつた。

翌日目を覺ますと、勝太の寢床はチャント疊まれて、その人は二階に見えなかつた。階下へ下りると、母は髮を結はせてゐた。勝太は歸仕度をして、伊之吉に暇乞ひしたら直ぐに出立すると待つてゐた。

「ぢや、其邊まで見送つてお上げな」と、母に云はれたので、伊之吉は勝太について出た。勝太は有馬籠竹細工など僅かばかり買つて、「一寸旅へ出ても、親類へ何か土産を買つて歸らやにならんのだから五月蠅くつて」と云ひながら風呂敷に包んだ。草履を穿いて尻をからげ、蝙蝠傘を差してスタ〳〵身輕に歩いたが、橋際へ來ると、慇懃に見送りの禮を述べて、一人後をも見ずに道を急いだ。伊之吉は暫らく橋の上に立留まり、泥臭い男だと思ひながら、その姿の木蔭に消えるまで見送つた。それから態々昨夕の料理屋の前まで散歩して歸つたが、家には母も祖母もゐない。お安に聞くと、祖母は湯へ、母は瑞寶寺の生花の會へ行つたのださうだ。

「ぢや、病人が暴れ出したらどうするんだい、安ちやん一人で仕末をつけるんかい」と、伊之吉は何かしらむしやくしやした感じがしたので、慳貪な口調で云つた。

「だつて私、そんなこと知らないわ」と、お安も口を尖らせた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、二人は暫らく默つて睨み合つてゐた。閾の向うでは病人がさも怠るさうに首を垂れた。風のない蒸暑い日で、病のない者でも身を動かすに懶かつた。伊之吉は横になつて團扇遣ひしながら、父を見守つてゐたが、

「よくあんなに變つたものだ、側へ寄つても痛いほど生々してた人間が、あんなに脱殼のやうになつて」と獨言のやうに云つて、お安を顧み、「安ちやんも長い間の看病で弱つたらうね、だけど終まで面倒を見てやりよ。親爺も親類の世話はよくしたんだから」と云つた。

「だけど私一人がそんなお世話になつたんぢやないわ」と、お安は白目を見せてムキになつた。給金なして働かされてといふ不平も潜んでゐた。

「そりや決つてるさ。だけど一番長く側にゐたんだから、一番親切に介抱するのが當然の義務だよ」と、伊之吉は感情の稍激しくなつた、「勝太さんだつてわざ〳〵見舞ひに來た位だもの、安ちやんは徹夜看護したつていゝんだね」

「勝さんなんか見舞に來たんだか何だか分りやしないわ。」と、お安は皮肉に云つた。

「おや、何しに來たんだい」

「何しに來たんだかね、そりや色んな譯があるんだらうけれど、お金も貰つたらしいのよ」

「お母さんから？」と、伊之吉は目を据ゑて、「まさか病氣見舞に來てお金を持つて行く奴もあるまいよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

…勝太さんの金使ひが荒い所爲ぢやないかと、私思つてるんだけど」と、お安はつい話に乘氣になつた。

「田舍の者はボンヤリ遊んでて、どうかすると他人に寄掛ることばかり考へてるから駄目だよ」と、伊之吉は母の親類の揃つて意氣地がないのを忌々しく感じた。その親類の動搖が絶えず自分の家へも響いてゐたことを思つた。幼時には懷かしかつた從弟や叔母が、寄生蟲であつたと思はれた。

「矢張遺傳だね、叔父が家倉をぶつ潰しただけあつて、その姉妹も派手好きで遊び好きで、身代が持てんのだよ」

「だつて田舍の姉はさう派手好きぢやないわ、見た所も此家の姉さんよりや餘程年上に見えるわ、」

「安ちやんも歳よりや老けてらあね、」

「どうだつていゝのよ」と、お安は心細さうだつた。

「まあ少し辛抱してるさ、僕の世になつたら樂をさせて上るから」と、伊之吉は笑ひながら云つた。お安も淋しく笑つて、打解けたやうだつた。そして有馬へ來てから、月々多額の金の減つて行くことを力を入れて話した。

「何に入るんだらう、恩給は下るし、銀行の利子だつて可成り入つて來る譯だし。此地なら交際も少いんだから、東京にゐるほど生活に係る譯はないさ」と、伊之吉が怪しんだ。

「でも隨分入るのよ」と、お安は先月も先々月も五月にもと、と指を折つて心で數へ出した。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ぢや、病人にも費用が係るんだらう」

「いゝえ、お醫者だつて杉谷さん(小學校醫)にちよい〳〵見て貰ふだけよ。大阪から誰れかに來て貰ふと云つてたけど、それも物がかゝるばかりで無駄だからつて、中途で止したのよ」

「無駄だつてその位のことはしなくちやならんさ。」

「だけど、私銀行にお金なんかないだらうと思ふわ、姉さんが呉服屋へ拂つた金だつて僅かぢやなからうと思ふわ、」

「安ちやんも拵えて貰うんだらう」

「うゝん、私着物なんか入りやしない」と、お安は力んで斷言した。

伊之吉は默つて考へ出したが、その中眠氣さして、手枕で假睡した。午餐に呼起されて、手の痺れを摩り〳〵、欠伸をしてゐると、大きな丸髷に結つた、白粉でもつけたやうに色の白い母の顏が、目の前に現はれた、

(七)

暫らくして、彼れはふと思出したやうに母に向つて、五圓ばかり請求した。九月の新學期から用ゐる敎課書を、今の中に友人に頼んで買つて置きたい、遲れると賣切れるかも知れぬと眞面目な顏して云つた。母は一言で承知して、その金を渡した。爲替で送ると云つて、彼れはわざ〳〵郵便局へ行つたが、ポス

そして夕暮なて長い日を待あぐんだ。夕餐は輕く食べて、新しい浴衣に着替え、麥藁帽子を被つて出た。溫泉場を一廻りしてから、かの料理屋へ行つた。内の賑やかなのに氣臆れがして、暫らく躊躇した揚句に思切つて入つたが、案内された座敷は思つたよりも奇麗だつた。燭臺を二つ置いて、丸ぼちやの若い女中が膳を運んで酌をした。伊之吉は場所馴れぬので、碎けた話も出來なかつた。藝妓を呼ばうと思ひながら、それも言出しかねて、只二三杯飲んだばかりで、マジ〳〵して部屋を見てゐた。そして「貴下何家へお留りです」と女中に訊かれて、返答に困つてドギマギした。やう〳〵見覺えの宿屋の名を擧げたが、其處の女中や客のことを問ひかけられたので、尙更當惑した。若しや家の者に知れはせぬかと、絕えず後見たい心地がした。この狹い土地では何事も直ぐに知れ渡るだらうと氣遣はれた。矢張東京の牛屋でゞも飲んだ方が氣樂だ。

て、彼れは遲くならぬ間にと、膳の上の肴を平げてしまうと戶外へ出た。竹細工屋の時計を見ると、まだ幾らも時間が立つてゐない。家へは醉を醒さなくては歸難いので、足に任せて步んだ。空には雲が濃く風がなくて、暑苦しくて、酒の氣も容易に消えなかつた。步き疲れて歸ると、家の者に見られぬやうに直ぐに二階へ上らうとしたが、お安は暗い所から氣味惡い目をして、ジッと伊之吉の紅らんだ顏を見た。そして後からソッと二階へ上つて床を敷きながら、酒の匂ひを嗅ぎつけやうとした。

「お前、昨夕は何處でお酒を飲んだの」と、翌朝母に訊かれて、伊之吉は極り惡さうに、炭酸水の茶店で麥酒を一杯飲んだばかりだと言譯した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「葡萄酒なら見舞ひに貰つたのがあるんだよ、好ならお上りな」と、母は船來の大きな葡萄酒の壜を取出した。

「朝の内酒なんか飲めないさ」と、伊之吉は氣が咎めて盃を執らうとはしなかつた。そしてお安が告口をしたことに感付くと、忙々しくて堪へなかつた。あの迂散臭い目付が目障りになつた。隅の方にションボリしてゐながら、絶えず自分等のすることに氣を付けてゐるらしい。自分の戸外へ出てる間には鞄の底まで捜してゐないとも限らぬ。袂の中まで見てるかも知れぬ。厄介者の癖に厭な奴だ。と、伊之吉は思つた。

去年の春の歸省には、怖い父の顏ばかりが目について、外の家族のことは際立つて映らなかつたが、父が影の薄くなつた今は、母やお安の姿が鮮かに浮上つて見える。田舍の親類との關係も手に取るやうにハッキリとした。以前に異らぬのは祖母ばかりだ。

病人はさして痩せもせず、苦しみもせず、只ジリジリに心が衰えてるやうだつた。有らぬことを口走つてはゐたが、次第に暴れなくなつて、偶に飛出しても足が浮いて直ぐに倒れるほどに弱つて來た。それを見て、伊之吉は父も枯木のやうになつちまつたと呟やいて、母に向ひ、

「お父さんの年齡は幾つだらう」と訊いた。

「もうお前、六十四だよ」

お母さんはと續いて訊かうとしたが、何故だか變な氣がしたので、自分の心の中で大略見當をつけた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、
「お父さんが死んだら、遺族の扶助料が幾ら貰へるんてす」と眞面目て云つた。
「恩給ぐらゐなものだらうよ」と母は輕く答へて、「何だつてそんな事を訊くの」と可笑しがつた。
「只訊いて見たいからさ。それて扶助料はお母さんが死ぬまて貰へるんだね、」
「あ、さうだとも」
「おや、お母さんは一生食外しはないんだね、保險金が千圓も取れるし…………」
「どうしてお前、それぱかりて安心しちやゐられないよ」
「何、それて澤山さ、お母さん一人の暮しにさう金のかゝる筈がないもの」と。お母さん一人といふ言葉に力を入れた。
「いゝえ、かゝりますとも。それにお前が來年卒業してからても。世間へ出るのにや、着物を拵えるとか何とか、そりや色んなことにお金が入るんだよ。結婚もしなくちやなるまいしさ……まだ〲お前の氣のつかんことにお金の入る一方だから」と、母は云つたが、伊之吉に先々のことを打明けて相談しやうと云ふ氣はなかつた。世間染みた勝太に明したほどの内輪話をも、伊之吉にはしなかつた、
しかし伊之吉はそれが聞きたくてならぬ。上京前に一家の財産の高をも調て置きたいと思つた、祖母やお安の目を避けて、親子二人差向ひの座て充分に聞きたいことを聞き、云ひたいことを云ひたかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「葡萄酒なら見舞ひに貰つたのがあるんだよ、好ならお上りな」と、母は船來の大きな葡萄酒の壜を取出した。

「朝の内酒なんか飲めないさ」と、伊之吉は氣が咎めて盃を執らうとはしなかつた。そしてお安が告口をしたことに感付くと、憎々しくて堪へなかつた。あの迂散臭い目付が目障りになつた。隅の方にションボりしてゐながら、絶えず自分等のするとに氣を付けてゐるらしい。自分の戸外へ出てる間には鞄の底まで捜してゐないとも限らぬ。袂の中まで見てるかも知れぬ。厄介者の癖に厭な奴だ。と、伊之吉は思つた。

去年の春の歸省には、怖い父の顏ばかりが目について、外の家族のことは際立つて映らなかつたが、父が影の薄くなつた今は、母やお安の姿が鮮かに浮上つて見える。田舍の親類との關係も手に取るやうにハッキリとした。以前に異らぬのは祖母ばかりだ。

病人はさして痩せもせず、苦しみもせず、只ジリジリに心が衰えてるやうだつた。有らぬことを口走つてはゐたが、次第に暴れなくなつて、偶に飛出しても足が浮いて直ぐに倒れるほどに弱つて來た。それを見て、伊之吉は父も枯木のやうになつちまつたと呟やいて、母に向ひ、

「お父さんの年齡は幾つだらう」と訊いた。

「もうお前、六十四だよ」

お母さんはと續いて訊かうとしたが、何故だか變な氣がしたので、自分の心の中で大略見當をつけた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、

「お父さんが死んだら、遺族の扶助料が幾ら貰へるんです」と眞面目で云つた。

「恩給ぐらゐなものだらうよ」と母は輕く答へて、「何だつてそんな事を訊くの」と可笑しがつた。

「只訊いて見たいからさ。それで扶助料はお母さんが死ぬまで貰へるんだね、」

「あ、さうだとも」

「おや、お母さんは一生食外しはないんだね、保險金が千圓も取れるし…………」

「どうしてお前、そればかりで安心しちやゐられないよ」

「何、それて澤山さ、お母さん一人の暮しにさう金のかゝる筈がないもの」と。お母さん一人といふ言葉に力を入れた。

「いゝえ、かゝりますとも。それにお前が來年卒業してからでも。世間へ出るのにや、着物を拵えるとか何とか、そりや色んなことにお金が入るんだよ。結婚もしなくちやなるまいしさ……まだ〳〵お前の氣のつかんことにお金の入る一方だから」と、母は云つたが、伊之吉に先々のことを打明けて相談しやうと云ふ氣はなかつた。世間染みた勝太に明したほどの内輪話をも、伊之吉にはしなかつた、

しかし伊之吉はそれが聞きたくてならぬ。上京前に一家の財産の高をお調て置きたいと思つた、祖母やお安の目を避けて、親子二人差向ひの座て充分に聞きたいことを聞き、云ひたいことを云ひたかつた

明日か明後日折を見て乾度訊くと決して、その日は深入りした口も利かないて、二階へ上つて一人ゴロ／＼した。蟲干の書畫を片付けながら、戸棚や引出を矢鱈に捜したが、彼の目に目ぼしい品と思ふやうな物は一つもない。印材だの草煙入の金具だの、父はよくもこんな無用な物ばかり集めたことだ。そして自分の子に遺した財産といつたら、これぱかりしかないのである。

彼れは扶助料でも保險金でも、受取人が母であつて、自分でないことを不思議に感じた。しかも父がその子に傳へやうとした財産は外に一つもありさうでない。父六十四年の生涯は母と母の親類のために働いたやうなものだ。

「それに違ひない、親爺が自分の子らしく可愛がつてた姉さんさへ。お母さんの身代りになつたのだ」

と、彼れの神經が恐ろしく冴えた。

（八）

八月も末になつて、朝夕の風は秋らしくなつた。溫泉の客はボツ／＼山を下りだした。伊之吉も日增しに都戀しくなつた。父が何方かに片付くのも何時の事だか分らぬから、九月になつたら兎に角出立すると口癖に云つて、汚れ物の洗濯や袷の新調を急がせた。

或晩も散步がてら、二三の友人と下宿屋の下女への土產物として、竹細工や絲細工を買ひに行つた。後日追懷のためにと、自分にも紅葉を浮かせた有馬燒の湯呑を買つた。浴衣一枚の肌の薄冷えるので、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

急いで歸つたが、家には障子を締めて、母が一人俯首して低い聲で新聞の續物を讀んでゐる。父の微かな寢息が響いて、家の中はシンとしてゐる、

「祖母さんと安ちやんは？」と訊くと、

「溫泉へ」と、簡單に母が答へた。

「淋しいねえ」と、伊之吉は家の中を見廻してから母の側へ坐つた。手づから茶を入れて飲みながら、母の目を追うて自分も新聞を見てゐた。が、暫くして。

「僕はお母さんに聞いときたいんだがね」と言難さうに云つた。

母は目を上げてチラと見た。

「僕はこれから先の事を、お母さんによく相談しとく方がいゝと思ふ。東京へ行く前に家の財產も調べとくといゝんだがね」と、伊之吉は何氣ない風で輕く云つた。

「何を思つてそんな事を」と母は笑つて、「調べとく程の財產があれば結構だけれど……………」

「でも幾らでも有る以上は、整理しとかなくちやならんさ、僕ももうお父さんの手を離れて世間へ出るんだから」

「だから確かり勉強して出世することさ、お前は家の事は心配しなくつても、まだ一年や二年學資に不自由さしやしないから、安心して勉強おしなさいな」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「無論勉強はするさ、だけど家の事も考へなくちやならんさ。お父さんが働いてる間は兎に角、今のやうだと少しばかりの財産も喰込む一方だから、そのつもりで方針を立てる必要があると思ふね、親類の世話だつて一々してた日にや際限がない」と、伊之吉はふと言葉を角立たせた。

母は不審げに伊之吉を見詰めて、「お前、何だつてそんな事を云ふんです」と云つたが、やがて微笑して、「今日に限つて可笑なことを云ひ出すのね」

「ちつとも可笑くはないさ。僕はこれから一家の内情を知つて置かなくちやならんさ、當然責任があるんだから……お父さんが死ねば山室家は僕が嗣ぐんだから……僕の外には誰れ一人山室家の血統はないとすりや、どうしても僕に責任があるんだ。家を衰微させちやならんさ」

「だからお前も身體を大事にして、行々立派な人になるやうに、今から心掛けてゐなさいな」と、母は親しげに云つた。

伊之吉はその心持の母に分らぬのを焦躁がつた。自分は最早一人前の後繼者であるのに、子供扱ひされるのが意に滿たなかつた。そして激しい事も云ひ兼ねるし、何と云はうかと躊躇された。

「僕は無論姫路の叔父さんのやうに　ズボラにやならんさ、僕には兄弟はなし眞の身内はないんだからそのつもりで自分一人でやる丈のことはやるさ。だけどお母さんも確かりしなければ駄目だ。安ちやんだつて祖母さんだつて、田舍の親類だつて、山室家とは別なんだからね」と、續いて大人振つた口を利

くのを、母はます／＼可笑しく思つた。それにも構はず、伊之吉は尚何か云はうとしたが、其處へ二人が湯から歸つて來たので、口を噤んで、買物を持つて二階へ上つた。鞄を整理して、幾度も中を覗いたり、父の書物を入れたり出したりして、退屈てしかも心の落付かぬ夕を送つた。東京の友人が懐かしくて、有馬の家が厭はしかつた。

母は見舞ひに來た女客と、高聲でぺら／＼喋舌つては笑つてゐたが、客が歸ると、階下から聲を掛けてお菓子を貰つたからと伊之吉を呼んだ。伊之吉は下りて行かなかつた。

「伊之や今日はどうかしてるよ」と、母の冴えた聲が二階へ聞えた。お安も何か云つてたらしいが、その聲は聞えなかつた。

伊之吉は何となしに、階下にゐる者を厭はしく思つた。で、自分で床をのべ雨戸を閉ぢて、詰らなさゝうに眠についた。

その夜は珍らしく二三度も目が醒めた。醒める毎に力のない父の譫言が耳についた。夜明方にランプを持つて便所へ下りると、父は蒲團の上に坐つてゐた。蚊帳越しにその顔が青く凄く見えた。燈光が差すと目をその方へ向けて、不思議さうにランプの後を見送つた。「黒川君々々々」と、後から呼掛けた。その聲は墓の中からでも洩れて來るやうなので、伊之吉は夜具の中に首を竦めて耳を蔽ふたが、暗闇にもかの顔が浮んで消えなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、彼れは薄明るくなるのを待かねて、飛起きて雨戸を開けて、寢不足の顔を朝風に吹かれた。まだ向ひの旅館の戸は鎖され、その側の小徑にも朝毎に見える散歩の客が出てゐない、人氣のない山の麓に次第に曙光のまして來るのが、快く彼れの目を醒した。彼れは寢衣のまゝ裏口から出て、朝露を踏んで古ぼけた鳥居の側まで上つた。愛宕山の彼方を赤く染めて、朝日は最初の一線を彼れの面に投げた。谿間の人家は鮮かに足下に浮んだ。彼れの家父の居る部屋も明かに見下された。三田行の俥が橋の上を通つた。浴客の姿が下の木間に見えた。

（九）

彼れは暑くなるまで其處に彳んでゐた。そして一度も通つたことのない草に蔽はれた近道を下りた。水の乾れた川原を傳つて家の近くまで歩いたが、ふとお安らしい顔を岸の上に見つけたので、立留つてソッと見詰めた。表通からは隱れた別莊の物置小屋の壁に沿うて、お安と脊の低い肥つた男とが立話をしてゐる、男の顔は後向で見えず、話聲も聞えなかつたが、伊之吉は何となく不快に感じて、二三歩行過ぎたが、知らず〳〵又立留つて振返つた。お安の口は引釣るやうに動いて、目は折々物に怖ぢたやうに四圍に注がれてゐた。そしてジリ〳〵陰の方へ身退ぎしてゐたが、ふと伊之吉を見つけて驚いて顔を背けた。

伊之吉は知らぬ風して家へ歸つた。祖母が濡手拭で病人の顔を拭つてゐる。病人は子供のやうにそれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を五月蠅がつて、首を振つてブツ〱云つてゐる。

「さあ、これで綺麗になりました。長いことお湯に入らんから身體が臭い〱」と、祖母は獨言を云つた。

「お母さんは」と、伊之吉は突立つたまゝ訊いた。

「溫泉ぢやらうわい」と云ひながら、祖母は母の鏡臺から香水の瓶を取出して、寢床に振りそゝいだ。

「何故そんな事をするんです、臭いんですか。衣服を替えて身體を洗つて上げたらいゝでせう」

「さう思ふんぢやけど、身體が大きうて自由にならんのでな。初の間は寄つてたかつて、綺麗にして上げたんぢやが、此頃はちつとも構はんから臭うなつて仕様がない」

　伊之吉は香水の匂に打たれながら、あれ程潔癖であつた父の垢塗れになつてるのを、無慚に感じた。そして「ぢや、僕が手傳つて洗つて上げやうかな」と、勢込んだが、祖母は大儀がつて、夕方にでもと云つた。

　知らぬ間にお安は歸つて來て、朝餐の膳立をしてゐた、伊之吉とは互ひに物をも云はなかつた。其處へ母はテカ〱した顔をして溫泉から歸つて、鏡に向つた。かの香水瓶をも取出した。そして、

「伊之さん、今朝は何處へ行つたの。ちつとも氣が付かなかつたよ」と、晴やかな聲で云つた。

「この崖の下を歩いてたのさ」と、伊之吉はわざと蔑むやうにお安を見て、「有馬は厭な所だね、僕は明日にも出立したいな」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それ御覧、お前にだつてさうだらう、私達はもう疾くにこの土地に厭き〳〵してるんだよ」

「だけど、お母さんは仕方がないさ」と、伊之吉は眉を顰めた。病人の看護さへすれば、それで母の務は終るんだ、一生に仕殘してる仕事はそれつ切りだ、外に厭くも厭かんもあつたもんぢやないと思つたが、口では何とも云ひ得なかつた。

（十）

明日立つと定めて、彼れは旅の仕度もして置きながら、その日が來ると、何かしら家の事が氣掛りになつて立兼ねた。二階にゴロ〳〵してる時が多くて、滅多に病室へは近寄らないが、父に對する古い記憶は次第に消えて、折々は懷かしくもなり氣の毒にもなつた。「もう三四年、お父さんが丈夫でゐて呉れゝばよかつた」と、シミ〳〵と母に云つた。そして父の家が自分の手に渡る間に、半年でも一年でも母の手で自由にされるのが、不快に感ぜられた。

「伊之さん、又晝寢してるんかい」と、或日母は貰ひ物の林檎を持つて二階へ上つた。伊之吉が毛深い逞ましい足を恣まゝに投出して、ポンヤリしてるのを見ると、何時もながら悅しかつた。賴もしかつた。

て、その側へ坐つて、指環の光つた白い手でその皮を剝いて、

「これはね、高津の曾根さんが寄越したのだよ、お父さんの好物だからつて」と、手渡しすると、

「何だ酸ばいゝぢやないか」と云ひながら、伊之吉は二ツ三つ大口に嚙つて、「明日天氣だつたら、いよ

〳〵出て行かう」と、延引の言譯らしく云つて、母の氣色を伺つた。

「さうね、學校を休んでもよくないだらう。お父さんの方もまだ急ぢやなからうから、待つてゝも果しがなからうよ」と、云つて、母は考へて、「お母さんも一寸大阪へ行つて來たいんだけど。お前の見送りをかねて日歸りにして行つて來やうかしら」

「そんな急用があるんかね」と、伊之吉は問詰めたが、母は口では悠長に、

「いろ〳〵後始末の相談もしとかにやならんし、銀行へも行つて來たいし……」と、云ひながら、獨りさま〳〵の胸算用に凝つてゐた。

「だつて、今の場合お母さんが家を空けられやしないよ、そんな無責任な事は出來やしないよ」と伊之吉は理由もなく勢込んで、「お母さんはもつと責任を以て家を取締らなくちや駄目だよ。安ちやんなんかヒネクレた人間だから、お母さんが注意しなくちや」と云つて、自から感情の激するまゝに、お安が身持が惡いんぢやないかと云ふことまで、不器用な言葉で喋舌つた。

母は呆れて聞いてゐたが、やがて、

「何をお云ひだい、伊之吉。お前に指圖されなくつたつて、人に後指を差されるやうな眞似は、お母さんはすりやしないよ。何十年私一人で家の始末を付けて來たんだからね」と、キッとした顔付をした。

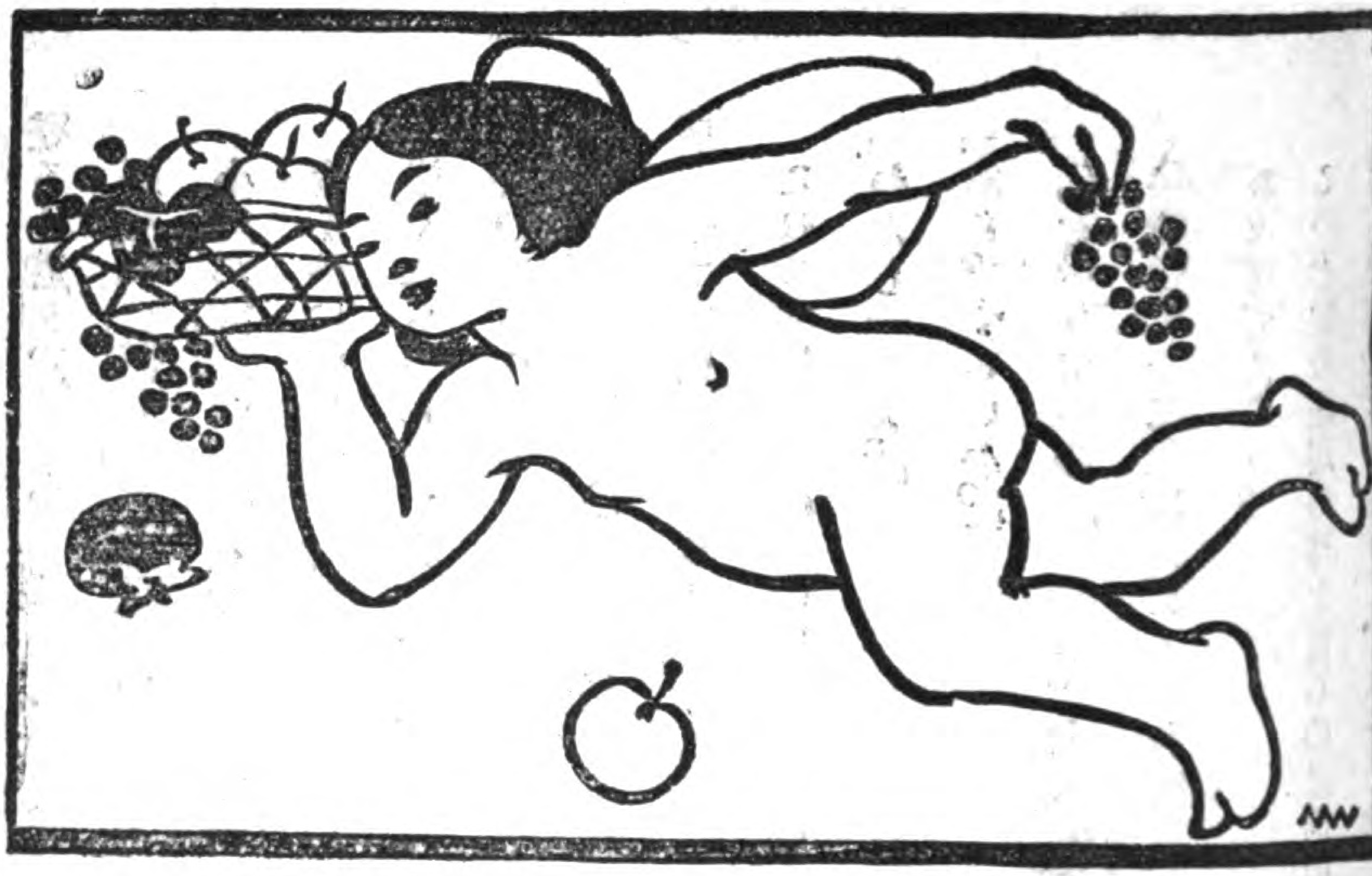
伊之吉は氣壓されて口を噤んだ、父に足蹴にまでされてゐた母に、こんな手強い底力が潜んでゐるやう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とは知らなかつた。

だが、母の顏は間もなく柔らいで、今までの樣は忘れたやうに消えた。そして伊之吉を促して晝餐に階下へ下りたが、伊之吉は階下の部屋に居ると氣が詰まるやうてあつた。(完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



杯

鷗外

温泉宿から皷が瀧へ登つて行く途中に、清冽な泉が湧き出てゐる。

水は井桁の上に凸面をなして、盛り上げたやうになつて、餘つたのは四方へ流れ落ちるのである。

青い美しい苔が井桁の外(そと)を掩うてゐる。

夏の朝である。

泉を繞る木々の梢には、今まで立ち籠めてゐた露が、まだちぎれちぎれになつて殘つてゐる。

萬斛の玉を轉ばすやうな音をさせて流れてゐる谷川に沿うて

登る小道を、溫泉宿の方から數人の人が登つて來るらしい。

賑やかに話しながら近づいて來る。

小鳥が群がつて囀るやうな聲である。

皆子供に違ない。女の子に違ない。

「早く入らつしやいよ。いつてもあなたは遲れるのね。早くよ。」

「待つてらつしやいよ。石がごろ〳〵してゐて歩きにくいのですもの。」

後れ先立つ娘の子の、同じやうな洗髮を結んだ、眞赤な、幅の廣いリボンが、ひら〳〵と蝶が群れて飛ぶやうに見えて來る。

これもお揃の、藍色の勝つた湯帷子の袖が翻る。足に穿いてゐるのも、お揃の、赤い端緒の草履である。

「わたし一番よ。」

「あら。ずるいわ。」

先を爭うて泉の傍に寄る。七人である。

年は皆十一二位に見える。きやうだいにしては、餘り粒が揃つてゐる。皆美しく、稍〻なまめかしい。

お友達であらう。

この七顆の珊瑚の珠を貫くのは何の緒か。誰が連れて溫泉宿には來てゐるのだらう。

漂ふ白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞のやうに泉の畔に差す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞赤なリボンの幾つかが燃える。

娘の一人が口に銜んでゐる丹波酸漿を膨らませて出して、泉の眞中に投げた。

凸面をなして、捻り上げたやうになつてゐる水の上に投げた。

酸漿は二三度くるくると廻つて、井桁の外へ流れ落ちた。

「あら。直ぐにおつこつてしまふのね。わたしどうなるかと思つて、樂みにして遣つて見たのだわ。」

「そりやあおつこちるわ。」

「おつこちるといふことが前から分つてゐて。」

「分つてゐてよ。」

「嘘ばつかし。」

打つ眞似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。」

「早く飲みませう。」

「さうさう。飲みに來たのだつたわ。」

「忘れてゐたの。」

「えゝ。」

「まあ、いやだ。」

手ん手に懷を搜つて杯を取り出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して來て、七つの杯はいよいよ耀く。七條の銀の蛇が泉を繞つて奔る。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字體で書いてある。何か據があつて書いたものか。それとも獨創の文字か。

かはるがはる泉を汲んで飲む。

濃い紅の唇を尖らせ、桃色の頬を膨らませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいといふ聲がする。蟬が聲を試みるのである。

白い雲が散つてしまつて、日盛りになつたら、山をゆする聲になるのであらう。

この時只一人坂道を登つて來て、七人の娘の背後に立つてゐる娘がある。

第八の娘である。

背は七人の娘より高い。十四五になつてゐるのであらう。

黄金色の髪を黑いリボンで結んでゐる。

琥珀のやうな顔から、サントオレアの花のやうな青い目が覗いてゐる。

永遠の驚を以て自然を覗いてゐる。

唇丈がほのかに赤い。
墨の縁を取つた鼠色の洋服を着てゐる。
東洋で生れた西洋人の子か。それとも相の子か。
第八の娘は裳のかくしから杯を出した。
小さい杯である。
どこの陶器か。火の坑から流れ出た熔巌の冷めたやうな色をしてゐる。
七人の娘は飲んでしまつた。杯を漬けた迹のコンサントリツクな圏が泉の面に消えた。
凸面をなして、盛り上げたやうになつてゐる泉の面に消えた。
第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、井桁の傍に進み寄つた。
七人の娘は、この時始てこの平和の破壊者のあるのを知つた。
そしてその琥珀いろの手に持つてゐる、黒ずんだ、小さい杯を見た。
思ひ掛けない事である。
七つの濃い紅の唇は開いた儘で詞がない。
蟬はじいじいと鳴いてゐる。
良久しい間、只蟬の聲がするばかりであつた。
一人の娘がやうやうの事でかう云つた。

「お前さんも飲むの。」

聲は訝に少しの嗔を帶びてゐた。

第八の娘は默つて頷いた。

今一人の娘がかう云つた。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸拜見。」

聲は訝に少しの侮を帶びてゐた。

第八の娘は默つて、その熔巖の色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、腱ばかりから出來てゐるやうな指を離れて、薄紅のむつくりした、一つの手から他の手に渡つた。

「まあ、變にくすんだ色だこと。」

「これでも瀨戸物でせうか。」

「石ぢやあないの。」

「火事場の灰の中から拾つて來たやうな物なのね。」

「墓の中から掘り出したやうだわ。」

「墓の中は好かつたね。」

第八の娘は兩臂を自然の重みで垂れて、サントオレアの花のやうな目は只ぢいつと空を見てゐる。

一人の娘が又かう云つた。

「馬鹿に小さいのね。」

今一人が云つた。

「さうね。こんな物ぢやあ飲まれはしないわ。」

今一人が云つた。

「あたいのを借さうか知ら。」

憫の聲である。

そして自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を、第八の娘の前に出した。

第八の娘の、今まで結んでゐた脣が、此時始て開かれた。

《MON•VERRE•N'EST•PAS•GRAND•MAIS•JE•BOIS•DANS•MON•VERRE》

沈んだ、しかも鋭い聲であつた。

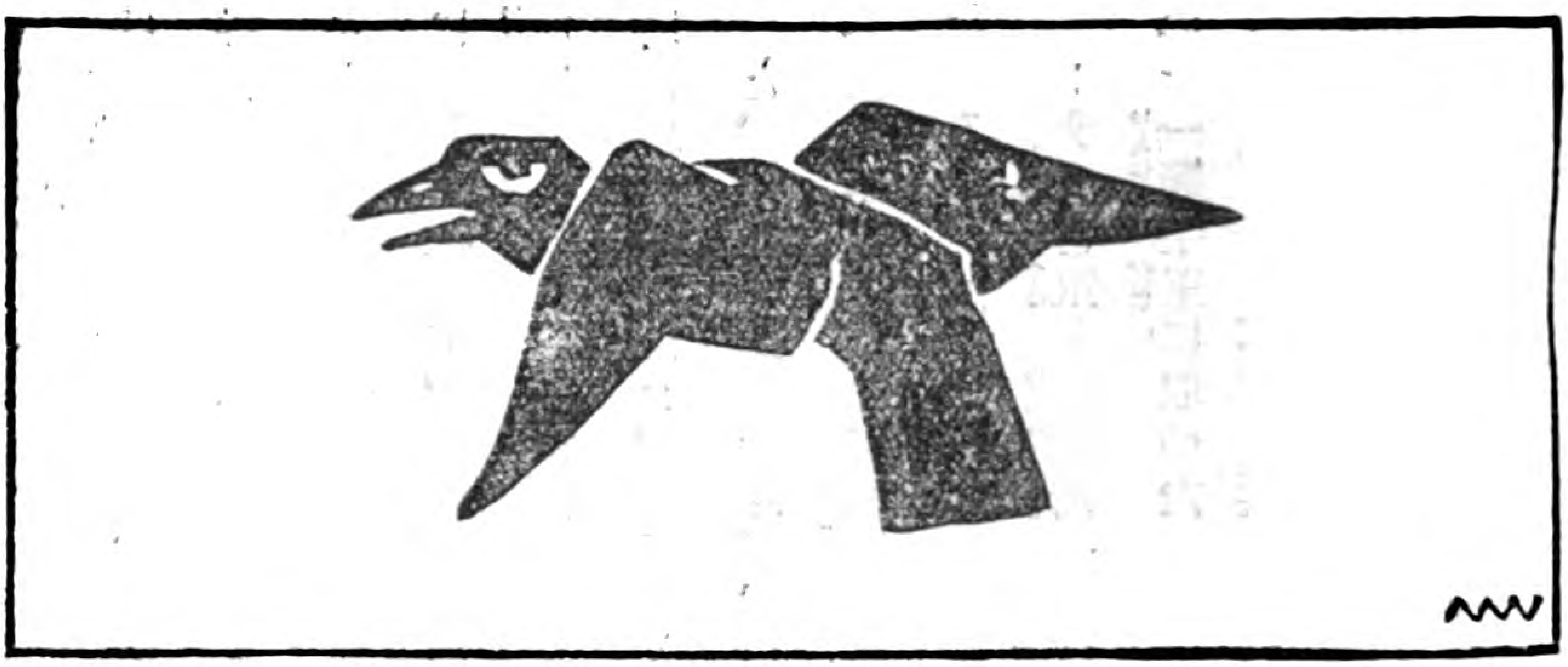
「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます」と云つたのである。

七人の娘は可哀らしい、黒い瞳で顔を見合つた。

言語が通ぜないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第八の娘の兩臂は自然の重みで垂れてゐる。
言語は通ぜないでも好い。
第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解すべき餘地を留めない。
一人の娘は銀の杯を引つ込めた。
自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を引つ込めた。
今一人の娘は黒い杯を返した。
火の坑から湧き出た熔巖の冷めたやうな色をした、黒ずんだ、小さい杯を返した。
第八の娘は徐かに數滴の泉を汲んで、ほのかに赤い唇を潤した。　（完）



雪國から

中村星湖

内地では見られないやうな幅の廣い眞直なＹ町の街路を歩いて行くと、町盡頭に、石炭の煤煙で眞黒になつた停車場がある。なにがし工場の煙突が林のやうに植つて、盛んに白い煙を吐き出して居る。その背後に、何處を涯ともない石狩大原野が、北から西へ展けて居るのだ。

町に近い所は黒く飜へされた新開の耕地、そこらには大根か何か青物が、ポチャリ〳〵と置き忘られたやうに殘つて居る。耕地が急に高まつて鐵柵でも結ひ連ねたやうに見えるあたりは林檎畑で、最早可也拗り荒らされた梢にも、まだポツ〳〵と蝕ひ葉の間に紅い頰を見せてるのがある。それ等を貫いて停車場から眞北へ、一と條の廣い道が眞直に砥のや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うに走つて居る。同じ程の高さに切り矮められた林檎畑が盡きると、一方は灰色の泥炭地になり、一方は黄色な牧草地に續き、ところ〳〵に誰やらが「さかさ箒のやうだ」と言つた白楊樹が、細長く中空に聳えて居る。町から半里ほど入つた牧草地の一角に一つの部落があつて、その取着きの、土地でアカダモと呼ぶ大楡の林の前に、雪除の板構ひをした洋式まがひの二た棟の人家が建てられ、二三ヶ所長方形に板壁を拔いて、玻璃窓が薄すり光つて居る。小さな煙突からは薄青い煙がゆる〳〵とたち上つて、右側に低く藁葺の屋根だけ見える廐て、コトリ〳〵と飼馬がハメ板を蹴るかと思ふと、何處やらて、鷄の時を作る聲が聞え、サラ〳〵と小川の流れる音も傳はる。

と、林の落葉を踏んで、白い前垂をした姉樣冠が、紅や青の林檎を山盛り摘み入れた笊を抱へて庭前へ出て來た。そして其所に蓆を敷いて切髮のお婆さんと日向ぼこりをして居た五才ばかりのお冠髮の子を見ると、ニッコリしたと見えて、白い齒が日に輝いた。

ドサリと笊を蓆の端へ卸して、『阿母さんまだこんなに御座いましたよ、殘りが。』とわけて紅く大きいのを一顆手玉に取つた。

あか〳〵と大野の涯の夕靄に、今將に沈まうとする日は、笊を取圍んで蹲まつた三人の影を長く地上に引かせ、風が出たと覺しく裏の林は烈しく枯葉をふり落とす。

三十分許後には、白い前垂の女は手拭を外し、手足を淸めて、暖かい食堂の暖爐の前て赤兒を抱きながら家の人達と夕餉を認めて居た。

「どうだな、今日のやうな穏やかな天氣が續けば、お前の體の具合も好からう。」と洋燈の灯に口髭の濃い日に燒けた顏の半面を照らされながら、夫は靜かに斯う言つた。

「エ、」と受けて女は輕く咳をした。髮は無造作に櫛卷にして、鼻梁の通つた細面が、暖爐の火照りてホッと上氣して居た。赤兒を抱いた手の指は、似つかはしくなく節立つて居た。

「今日お前の留守に妙な手紙が兄貴から來た、書棚の上へ載せといたから後で見るがいゝ。」

「エ、一體どんな事なんです？」

「お前の言はゞ讒訴だがな。ナニ、馬鹿々々しい事よ。お前が野良へまで出て一生懸命で働くものだから、どうも五萬六萬の身代の奥さんとしては品がない——と言ふのだね。これは、阿母さんの前だが兄貴の考が間違つて居るのさ。間違つて居ればこそ御覽、あの大磯でも五本の指に折られた財產を何時か何う一文なしにして了つて、今は俺の方から、鳴許がましい言ひ分だが補助して上げて居る。これは怨みがましく聞えるから今迄お前にも誰にも言はなんだが……俺がアメリカへ行つてた折、あちらで一つ開墾を始めようかと思ひ付て、五百圓の金の借用を兄貴に申込んだ事がある。その時なぞは一言の返事も無かつた。けれどこの夏のやうに、兄貴がわざ〳〵此方まで出向いて窮狀を訴へられると、何うか斯うか遣つて居る今の身分では、叶へてあげなければならない。月々五十圓と言へばオイソレとは行かない所を、お前が俺の心持をよく知つて居て呉れて、惡い顏もしないで出して呉れるのを俺は喜んで居る。俺の主義と言ふとムツカシクなるが、日頃の考では、自分は何んな見すばらしい生活をしても宜い、家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

庭に不和合さへ來たさない限りは、親戚は勿論、出來るならば他人をも救つてあげたい——この俺の心持が解らない爲に、俺はお前の前に二人も家内を持つたが皆離緣して了つた。殘酷のやうたが仕方がない。そこへ行くと、面と向つて斯んな事を言ふのは變だが、お前をば、俺は貰ひ當てたと喜んで居るのさ。……何も泣く事はないぢやないか。世間では古いと笑ふてあらうが、俺は矢張怨みに報ゆるに德を以てしたい。お前も泣いたり怒つたりすることはない、ナ解つたらう、爲すべき事をして人から彼れ此れ言はれるのは口惜しからうが、言ふ人は言ふ人ぢやないか。』

夫は靑木市藏と言つて、妻はお靜。お靜が二十三の冬、同じ大磯出身の緣故から、世話する人があつて四十に近い市藏の許へ嫁入つたのは、最早七年の昔である。十七の頃人を戀して恥かしい手紙を我から送つた事もあつたが情げなく返された。二十三の頃親戚の者の求婚に逢つて、母親に打開けたが、對手よりも自分が年上だと言ふ不思議な理由から許されなかつた。親兄弟の眼鏡に叶つた夫は熊の栖む北海道と聞いて、今度は自分が二の足を踏んだが、ツイ說きすゝめられて式を大磯で擧げ、間もなく夫と連れ立つてこの石狩の野へ來たのてあつた。夫は年取つてるだけ物の解る、二なく優しい人てあつたが內地とはスツカリ違つて居る氣候風物が彼女に一番つらかつた。母親や妹などへは、いかにも元氣さうに『今日は飼馬へ乘つて野遊に行きました』の『昨日は夫と一緒に橇へ乘りました』のと言つては遣つたが、一望際涯も無い雪景色を眺めながら、陽炎燃ゆる故鄕の靑海原を戀ひ慕つて、淚を流した事は幾たびてあらう！

夫が、小作人の所を一と廻りして來ると、外套の頭巾を眉深に被り、提燈を吊げて出懸けた後で、お靜は早寢の姑の懷へ上の娘と一緒に寢付いた赤兒を入れて貰つて、手燭を秉つて夫の書齋へ入つた。其所の窓々には綠色の窓掛が垂れて居て、眞中の褐色の丸卓子には白い洋紙とインキ壺とが乘り、壁際の大きな書棚には冬期讀書の準備にと言つて、アメリカから持つて來た洋書や、近頃取寄せた農事園藝に關する内外の新書や、去年能登總持寺へ行つた頃から集めた佛典などがギッシリ詰まつて、背革の金字も光れば、醬油に漬けたやうな古ぼけた色合も交ぢつて居た。

手燭を卓子に載せて、高い書棚の上に僅かに端の白く見える物に眼を着けた時、彼女は差出す手の慄えるを覺えた。

胸をワク／＼させながら手にした封筒を裏、表と返して見て、急に内身を引出してサラッと卓子へ廣ろげた。そして縱横に書きなぐつた文言を追うて行くうちに、つとめて押へて居た怒氣に堪へ難ねて、齒を喰ひしばりながら手紙を滅茶々々に引破つた。封筒をもズタ／＼に破つたのを四邊へ投げながら、彼女はドッと尻餅をついた。

「お靜や／＼！」

「ハッ！」と答へながら、ポロ／＼流れる涙を袂で拭きながら手燭を吹き消して書齋を出た。

「お前今の音は何え？」

「エ、何でも御座いません、私チョット躓いたので御座います。」

『何だか恐ろしい音だッた。氣をお付けよ、お前はたゞの體ぢやないんだから。』

『ハ……阿母さん有難う御座いました、もう坊を頂きませう。』

『最早用は濟んだかえ？晝間あんなに好い日和だつたが夜は矢張寒じるねえ、市藏は遲からうから、戸締りを見てお前も早くお休みよ、オヽ寒い！……それからもッと暖爐を焚いて置いとくれ。』

*
**

お靜は赤兒を懷中に入れ、寒い廊下を通つて用達しに行つた。その歸りに賑やかな下女部屋を覗くと、村の若者が二人許遊びに來て、何か笑ひ興じて居た。

『お源や、私頭痛がするから早く臥せります。裏木戸の締りは忘れずにして寢てお呉れ。』と少し高く言ひ棄てゝスタ〳〵と自分の寢室へ入つた。

そこは姑の室の隣で、先刻下女が焚き付けたと見えて、暗中に暖爐の火がペラ〳〵と赤黄に燃えて、その側に白毛布を重ね掛けた寢臺が二つ並んで居た。

『ぢや養母さん御免下さいまし。』

『アイヨ』

お靜は寢衣に着替へ、子供を抱いて床へ入つた。平たく柔かい枕へ輕く後頭を載せて仰向けになつたが、頭の左側が矢張ヅキ〳〵痛む。空乳房に縋り付いた赤兒は、吸つても〳〵出ないのでヤケにグイグ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

イ吸ひ着いて、乳房の頭が小さな咽喉へ入つて了ひさうだ。彼女はいく度か寝返りを打つた。
やゝ落着くと、風が通ると見えて、梢が鳴つたり、落葉が時雨のやうに散るのが聞える。ともすればそれが荒磯を打つ波のやうにも取れる。波のやうに——と思つて居ると、これが癖で、彼女の前には日に輝く故郷の海が見える。白帆が見える。姫宮様が大磯へお成りの折、廣い沙濱で小學校の生徒が體操を御覧に入れた光景などが鮮かに浮んで來る。御褒美の手帖を頂いて歸りに何處ぞへ取落して、濱中探してもわからなくて、口惜し泣きに半日泣いた——その自分の幼顔なども浮んで、泣き濡れた手を開いてパアをすると、それが長女のお美代になつたりする。
「オホヽヽ」
「エヘヽヽヽ」
ハッとすると、それは下女部屋から來る笑聲であつた。後はもうコトリともせず、風も凪ぎたらしく、モリ／＼と飼葉を噛む馬の齒音が聞え出す。乳房を離れてスヤ／＼寝着いた子供の寝息にも氣が付く。
暫らく意識の外を廻つて居た手紙がチラと影を差すと、またクワッとするやうな氣分になつた。
「義兄さんも餘りだ！餘りだ！何う言ふ積りであんな事を....品が無い？品が無い？....私が女だともつて馬鹿にして、餘りだ！餘りだ！口惜しいッ！....」
ツイ抱き締めて、子供を泣き出させた程力が入つたが、やがてまたそれを寝せ着ける間に彼女の心も次第に落着いた。

『一體あんな手紙を取つて置いて私に見ろと言つた良人の心持は？‥‥矢張同じやうに品がないッて思つてなさるだらうか？アメリカてクリスマス贈物に主人から貰つたと言ふ帽子を十年以上も被つて居なさるんだもの、私が百姓女のやうになつたッて不相應とは思ひなさるまい。けれど親戚の義兄さんにさへそんなに見苦しいならお他人樣には何んなだらう？』

住居や生活は準洋式だが、夫が野へ出ればお靜も野へ出た。夫が獵に行けばお靜も續いていつた。夫が馬に乘れば彼女も馬に乘つて、針持つ事より習はなかつた手に鍬肉刺も出來た。來た當座にはさうもしなければ淋しかつた。故郷の事、處女の頃の事など思ひ出されて仕方がなかッたからだ。國へは海越え山越えて、汽車や汽船のある世でも一日や二日では歸られない。他人のよくするやうに姑が何うの食物が何うのと、チョイと拔け出して母親に甘へに行く事も出來ない身だッた。『七年は辛抱するんだよ。』と母親も言つた。『七年目には連れて歸る。』と夫も言つた。それまでも、いつまでも、最早來た以上は仕方がない。と心から此地の土になる積りで働らいた。

二年目には女の子が生れた。新しく母になつた心持の嬉しかつた事。『大きくなつたら何にしやう、何う育てやう？』仕事の隙にはそればかりを樂しんだ。三年目には男が生まれた。四十を越した夫は前にも増して喜んだ。自分とても嬉しかつた。がその子は、寒い氣候に風邪を引いて、半年經たぬに死んで了つた、悲しかつた、口惜しかつた。自分も一緒に死にたかつた。が最早その時は後が始まつて居た。

その頃夫は、國へ歸る程の道程を國へは寄らずに能登へ行つて、半年ばかり總持寺て半僧生活をした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

用事で札幌まで出て、其足でフイと行つて了つたのだ。『一緒に居るのはお前の體の爲によくない、これはお前にも解るだらう、ことに丁度農事も閑だし、少しの間精神の修養を積んで居る。』と手紙があつた。驚きもした。『私がお氣に召さないか？』とヒガミもしたが、夫も長男を死なせた悲みが殘つて居やう。その外自分の體に對する心遣ひも、推し得ぬではなかつた。

次のが生れる一と月程前に夫は例の落着いた顏をして歸つて來て、まづ滯りの無いやうな笑ひを見せた。生れたのは男の双兒であつた。一人は里に預けた。自分が里子としての悲しい生ひ立ちを考へて、何うか自分の手元にと思つたが抱へ切れなかつた。

去年の夏には、お靜の里親の爺さんが遙々相模から逢ひに來た。『當分まだ國へは歸れねえかナ？』とお爺さんは、薬罐頭を揚げて、大きな口でパクリと煙草を喫ひながら言つた。『阿父つあんダメよ。見た通り忙しい家だから。』とお靜は芋の皮を剝きながら答へた。其時庭のドロの葉陰で蟬が鳴き頻つて、人の丈ほどに伸びた向ふの牧草地の青草の上に、垂れ下つた瑠璃色の空をのして、綿のやうな雲のモクモク湧き起つた事を覺えて居る。

『夏が過ぎ、秋の果物の收穫が濟めばズット閑暇になりますから歸つて歸られない事は無いのですが、お靜がよく子を生むものですからね——今年などは二人一緒に生むと云ふ勢ひです。その子が風邪を引く、ヤレ醫者だ、ヤレ病院だと言つてるうちに一年が經つて了ふわけでして。イヤハヤ。』と夫は笑ひながら言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『アハヽ』と頭の光る所をツルリと撫てヽ『さう言はれると御覧、お靜が眞紅な顔をして居ら。さう言はれると子が生まれるなあお靜一人のせいと取れるが、お前さんも罪の半分は脊負はちやなるまい、ねえ阿母さん。アハヽヽヽ。』と爺さんは咽喉佛の見える程大きく笑つた。

『何にしても結構な事てがす。子ほど寳はありましねえな。俺にや實子は無くてお靜を里子に預かつたんだが、矢張忘れられなくて、斯うノコ〱とやつて來るだア！』

『さうてすとも。てすから私共も精出して拵へます。』

…………

『私はまた後が始まつてるんだ！……そんなにお腹が大きいとは自分でも思はないが、養母さんはさすが目敏い。良人てはまだ私の頭痛がしたり不機嫌だつたりするのを風邪位に思つてるやうだが……』とお靜は寢たまゝて心持總身に力を入れて見た。

と微かに、物あつて動くやうに思はれた。我と我肌に觸れると、ヒヤツと手の冷えが身に浸み、骨までも透る、ゴツ〱と灰の崩れるけはひがして、暖爐の周圍が急に暗くなつた。

『…義兄さんが品が無いつて言つたな、餘り子供を持つからか知ら？……』

考へ疲れて、お靜はやがて深い眠りに落ちた。

重い物に壓されたと思つて眼を開けた時には、室の空氣は一層暖かくなつて居て、暖爐はまたもペロ〱と赤黄色い舌て暗を嘗めて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

⁂

二三日して、東に遠い夕張の支脈と思ふ紫紺の連山の頂が白く光る日、うそ寒い風の中でお静は夫に手傳つて、例年の通り大磯や東京の親戚へ送る林檎の荷造りをした。

「これは私自分で摘んだんですから、大磯の阿母さんのへ入れて下さい。」

「何だ！蝕ひやシナビたのばかりぢやないか！」

「あんな事を！」

姑は赤兒を庭へ抱き出して、夫婦の働くのをニコ〳〵と眺めて居た。

「アラ養母さん、おさんに脊負せて置いて下されば好う御座んすに。どうも恐れ入ります。この頃は大變重くなりましてすから大儀で御座んせう。」

「ナアニ年寄はあゝ言ふ弄具が無いと却つて弱くなるよ。この頃は子供の世話を燒くて動くものだから、阿母さんがメッキリ元氣付いた事を御覧。」

「阿母さアん！」

「ウルサイネエ！アヲ美いちやん、お前さんは鼻涕なんぞ垂らして、早くお家へお入りなよ、好い兒だ、今に母さんが好い物を拵へて上げます。」

林檎を詰めた箱へ釘を打込む音がタン〳〵と響く。何處ぞの扉がバタリ〳〵と風に鳴る。蕭條とした寒

煙が一朶、黒ずんだ部落の方から裏の林へ靡きかゝつて、遠くて微かに銃音も聞える。

『ヤ打つたな！……今年はまだ一度もおぢさん（熊）に出喰はさないが、早う里へも雪が降れば好いな。』

『厭ですねえ！』

『何て？』

『雪が降ると私や骨まで凍るやうな氣が致します。』

『馬鹿ナ！そんな時にやお前達や暖爐室へ籠城して、喰ひたい物を喰ひ、讀みたい物を讀んで居られるから平常より樂で好いぢやないか。』

「でもそれが二た月も三月もだから退屈しますさあね。」

『ぢや俺と一緒に鐵砲擔いて出懸けるサ。』

『女がそんな事をしたら大變てさア。』

『でもお前は何時か俺と一緒に橇へ乘つて喜んで居たぢやないか。』

『エ、あの頃は隨分お轉婆てしたねえ。けれども子持になつてからカラ意氣地が無くなりましたよ、コホン。』

やがて幾箱かの林檎をば、釘で嚴重に固めた上を素繩て絡げ、二三匹の馬に負はせて、小作人を頼んで停車場まで送つた。

夕餉も變りなく樂しく濟んだ。

が、床へ入ると、赤子が咳をし始めた。熱も出た。そして一と晩泣き明かした。夫が夜中に起きて暖めて呉れた牛乳も、皆吐いて了つた。

あくる朝早く、下女は眠い眼を擦つて、ブツ〳〵言ひながら醫者迎へに行つた。霜は雪のやうに繁く、吹く息も白かつた。

急性肺炎と診斷が付いてから一週間目には、赤兒は冷たくなつて床上に横はつた。

『俺があの日戸外へ連れ出したのが惡かつた、よせば好かつたに。』と姑は我手で殺したやうに切なかつた。

『壽命てす阿母さん、あれは生れ落ちるから弱かつた。』と兄の養ふ可き母を引取つた程の親思ひの市藏は、何事にも觀念して居るやうな調子て、斯う言つて母を慰めた。

お靜は夫の止めるのを無理に、赤兒の死體を一と晩抱いて寢た。髪は白の敷布に亂れ、顔は死んだ兒よりも青く、眼は赤く泣き腫らされた。

耶蘇教から佛教に入つた市藏は、日頃書齋の一隅に持佛をしつらへて置いた。其夜彼は其所に燈明を點じて、自ら銹のある聲て經文の誦讀をした。眞教、普門品、それから觀音經。聲は呂に落ち律に昂り、錯落として玉と珠と相撃つが如く、擁與として波と濤と相暢ぶるが如く、室々、隅々まで行き渡つた。

……………

種々重罪、五逆消滅、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自他平等、即身成佛……

姑の室一つを隔てゝ聞いて居るうち、お靜は子守唄で賺される子供のやうに、何時かスヤ〳〵と夢路に入つた。

野邊送りの日は、連日連夜の看護疲れでボンヤリして居たが、寄り集まつた小作人や村の人達が歸つて了ふとお靜は急に淋しくなつた。

「ツマラナイ！」

斯う口へ出しても言つて見た。

「お前餘り氣を落しては不可いよ。」と姑はお靜の喪心した青い顏を見て言つた。

「ツマラナイ！」

馬鹿に大きくなつた彼女の眼から、また涙が流れ始めた。

「仕方がないぢやないか。」と夫が言つた。「かうなつては早く里子に遣つたのを呼び寄せるさ。」

「ツマラナイ！私は無駄苦勞ばかりして居る。」

斯う言ふうちに、彼女の頭は水のやうに澄んで、その鏡のやうなところへ、孕ますにも、生ますにも、殺すにも平氣で居る男の汚ない髯面が映つた。――彼女はツク〳〵夫が惡くなつた。そして自分が淺ましくなつた。

やがて里子に遣つた双兒の片割も來たが、何だか自分の子ではないやうな氣がした。それとも遂に馴

染む程日數が經つた。日毎通ひ詰めた亡き兒の墓へも足が遠くなつた。朝の霜、夕の風も次第に深く、鋭くなつて、氷雨のやうに降る時雨の日には、晝も盛んに暖爐を焚いた。

「また長い冬籠りが始まる！」と思つた時、深い〳〵雪の下の窖のやうな住居て、夜は殊に、行屆いた防寒設備の暖爐に蒸されて、汗ばんて、男は女を求め、女は男を探す已みがたい振舞が、時としては親と子、時としては兄と妹をも盲目にした事を、お靜は七年の間に、この狹い部落のうちにも數々見聞きした――さうした事が今、自らも顧みられた。

「私は最早また始まつてる。」

この上に重ね〴〵て……双兒の次ぎは三兒か、四兒か……

「まるで犬見たいだ！」と思ふと、我ながら汚ならしかつたが、可笑しかつた。

「ツマラナイ！生んでは殺し、殺しては生む……こんな事して一生……？」

雪の來ない前に、一早く別の世界へ逃げたいやうな氣が起つて來た。

「自分ばかり苦勞したつて、他人からは品が惡いの何のッて言はれるばかりだ、……ア、厭だ〳〵！」

何かに付けて思ひ出すは故鄕ののたくるやうな穩やかな青い海だ。その濱邊の松林の、冬も明るく、暢びやかな故鄕の家。母。兄。妹。老い耄けたと聞く母。三十娶らず、二十六でも嫁入らぬ涼しいやうな輕いやうな生活。

夕暮の窓から、枯々の廣野の末の南の靑空を眺めて居ると、歸心は矢のやうに、突いて來た。が思へ

自他平等、即身成佛……

姑の室一つを隔てゝ聞いて居るうち、お靜は子守唄で賺される子供のやうに、何時かスヤ〳〵と夢路に入つた。

野邊送りの日は、連日連夜の看護疲れてボンヤリして居たが、寄り集まつた小作人や村の人達が歸つて了ふとお靜は急に淋しくなつた。

『ツマラナイ！』

斯う口へ出しても言つて見た。

『お前餘り氣を落しては不可いよ。』と姑はお靜の喪心した青い顏を見て言つた。

『ツマラナイ！』

馬鹿に大きくなつた彼女の眼から、また涙が流れ始めた。

『仕方がないぢやないか。』と夫が言つた。『かうなつては早く里子に遣つたのを呼び寄せるさ。』

『ツマラナイ！私は無駄苦勞ばかりして居る。』

斯う言ふうちに、彼女の頭は水のやうに澄んで、その鏡のやうなところへ、孕ますにも、生ますにも、殺すにも平氣て居る男の汚ない髯面が映つた。――彼女はツク〴〵夫が惡くなつた。そして自分が淺ましくなつた。

やがて里子に遣つた双兒の片割も來たが、何だか自分の子てはないやうな氣がした。それとも遂に馴

染む程日數が經つた。日毎通ひ詰めた亡き兒の墓へも足が遠くなつた。朝の霜、夕の風も次第に深く、鋭くなつて、氷雨のやうに降る時雨の日には、晝も盛んに暖爐を焚いた。

「また長い冬籠りが始まる！」と思つた時、深い〳〵雪の下の窖のやうな住居て、夜は殊に、行屆いた防寒設備の暖爐に蒸されて、汗ばんで、男は女を求め、女は男を探す已みがたい振舞が、時としては親と子、時としては兄と妹をも盲目にした事を、お靜は七年の間に、この狹い部落のうちにも數々見聞きした——さうした事が今、自らも顧みられた。

「私は最早また始まつてる。」

この上に重ね〳〵て……双兒の次ぎは三兒か、四兒か……

「まるで犬見たいだ！」と思ふと、我ながら汚ならしかつたが、可笑しかつた。

「ツマラナイ！生んでは殺し、殺しては生む……こんな事して一生……？」

雪の來ない前に、一早く別の世界へ逃げたいやうな氣が起つて來た。

「自分ばかり苦勞したつて、他人からは品が惡いの何のッて言はれるばかりだ、……ア、厭だ〳〵！」

何かに付けて思ひ出すは故郷ののたくるやうな穩やかな青い海だ。その濱邊の松林の、冬も明るく、暢びやかな故郷の家。母。兄。妹。老い耄けたと聞く母。三十娶らず、二十六ても嫁入らぬ涼しいやうな輕いやうな生活。

夕暮の窓から、枯々の廣野の末の南の青空を眺めて居ると、歸心は矢のやうに、突いて來た。が思へ

ばひとりでは歸れない。歸るには、夫を說き進めて一家を擧げて歸らねばならぬ。それには少なからぬ費用も要る。耕地を捨てゝ行く事は全財產を捨てゝ行く事だ。他人に托すにしても容易ならぬ事だ。

夫の敎訓は日頃身に浸みて居る。それだけに夫にそれを言ひ出し兼ねた。子供らしいと笑はれると、思ひ返しもしたが、矢張歸りたい！矢も楯も堪らなく歸りたい！雪の來ぬ前に！

彼女は遂に姙娠した事を明ら樣に訴へた。そして、時々面を澁めたり、空咳をして見せたりした。『頭痛がする。』とも言つた。『足が冷えます。』とも言つた。それが實際である場合よりはワザとする場合が多かつた。ワザとした後で、折々顏を赤めたが、やがて全くの病人と自らも信ずるやうになつた。

『私の體は永く持たないやうな氣がします。』と心底涙組んで言ふ事もあつた。

『養母さん、お國へ歸りたいとは思召しませんか？』と姑を唆す事もあつた。

『美いちやん、大磯には今一人の美いちやんの祖母さん、お角力樣のやうに肥つて、鼈甲の大きな眼鏡を懸けて――ソラ、お豐叔母さんや敦叔父さんと一緒に寫眞に寫つてる、あの祖母さんが居るんだよ、お前大磯へ行きたくはないの？濱には麗綺な貝やなんぞが澤山落ちて居るのよ。』と長女を對手に話す事もあつた。

然し夫にはそれと言ひ得なかつた。

⁂

往來も止まる程の、深い初雪が降つた朝の事て、夫がニコ〳〵顔て、暖爐の前て獵具の手入れを始めて居ると、お靜がコホ〳〵咳き入りながら、眼の色を變へて入つて來た。

「良人！」

村田式の獵銃を雪明りて光る窓へ向けて、照尺の狂ひは無いかと狙ひを付けて居た夫は、左眼を眠つた儘、藪のやうな口髭へ掛かつた鼻涕を啜り込みながら振向いた。

「良人はマア！」

「何だい？」

「この寒いにお出懸けなんてすか？」

「こんな日が獵にや持つて來いぢやないか？」

「そりやさうてせうが……アノ良人！」

夫は俯向いて熱心に革帶のケースを調べて居て、對手にならない。お靜は其肩を突くやうにして、鋭く、

「良人！」

「吃驚するぢやないか？」

「アノおさんがね。」

「ムウ」

「ムウぢやありませんよ。大變がおッ始まりましたよ。」

「何？」と夫はやうやく顔を擧げた。

「アノおさんがお腹を大きくしッちやつたやうですよ。」

「ホウ？」

「昨夜何だかコト〳〵したからと思つて今朝用達しの歸りをチヨイと覗くと、丁度帶を締める所でしてね‥‥テッキリ身持なんてすよ。」

「そりや困るねえ。」

「何うなさいます？」

「何うなさいますつて、己のせいぢやあるまい何うも仕方がないぢやないか。」

「てすがアンナ者を使つて置くわけには行かないぢやありませんか‥‥」

「ソンナ殘酷な‥‥ソンナ事を言ふお前ぢやなかつたがねえ。‥‥今追出されたら此の雪の中で野倒死ぬより外はあるまい。『誰の子か知らないが出來たものなら、痛はつてやるが好いさ。同病相憐みさうなものぢやないか。」

夫の例の寛容な笑顔の前て、お靜はバッと顔を赤めたが、それは直ぐ消えた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私は厭です。あゝ言ふ人間と一緒に居るのは厭なんです。自分にも愛憎が盡きました！この家も、この雪國も厭ンなッちまひました！」

さう言つて彼女はオイ／＼泣き出した。

「お前は何うかして居るよ。體の具合でも惡いんぢやないか？」

姑は何事かと思つて其所へ入つて來た。

「私、自分でもこの頃の心持が解らないんです……殊に今朝、今朝は最早忍耐が仕切れません……どうぞ私を國へ歸して遣つて下さい……永い事ではないです、この一と冬だけ……年取つた母にも逢ひたう御座います！」

啜き入りながら、泣きながら、狂氣のやうになつて、お靜は斯う喋つた。

夫は呆氣に取られて居た。

十一月に近いある日、夫の穩やかな計らひから、青木一家は、この冬一と冬を大磯に避寒する事と決つた。留守は小作人の爺媼に賴んで、下女は生み落すまで置いて遣ることにした。

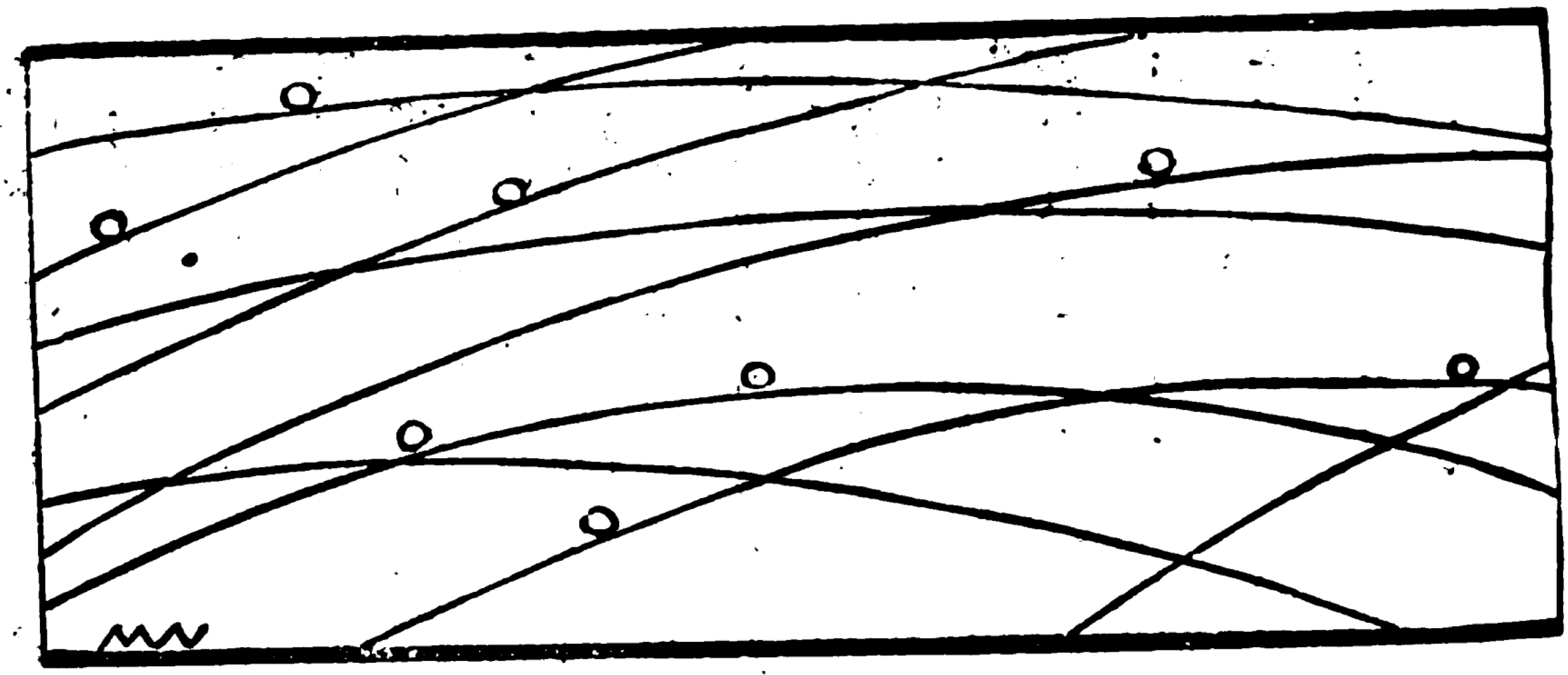
朝日の冷たい光が射す雪の氷原を、アカダモの林を後にして二臺の橇が走り出した。黑と鹿毛の二頭の馬は、鼻面を揃へて、黑烟の湧き起こるY町の停車場へ向かつた。右の橇にはクリスマス贈物の古帽を被り、外套の襟を立てた市藏が長女を抱いて乘り、左の橇にはお靜と姑が赤兒を挾むやうにして毛布

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七

にくるまつて居た。梶の金輪がリン／＼と鳴つて、其間にお靜の小さな咳が交ちつた。

（明治四十二年十二月稿）



ふる馴染

徳田秋聲

ある静な日の午後、修吉は例の懈いやうな頭に、色々の事を思浮べながら、晷を移してゐた。その目の先へ誰が持つて來たとも知らず、葉書が一枚おかれた。

葉書は黒枠である。「また死んだ、誰の番だらう」と、修吉は心で呟きながら取上げて見ると、それが松枝のお婆さんであつた。

修吉は國で能く見た二十三四年前のお婆さんと、東京へ來てから綺麗に頭髮を剃つてゐた、品の好いお婆さんの顔とが、直に目に浮んで來た。

修吉は早速弔みに行くとにした。實を言ふと、つい鼻の先に居ながら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恁云ふ機會でもなければ、些と行きにくいくらゐ無沙汰になつてゐた。

宅に用意がなかつたので、通の紙屋で横封を買つて、無雑作に札を押込むと、それに香奠と云ふ文字を書つけて持つて行つた。秋の初めて、埃深い通は、日がまだぢり〱して居た。家は矢來の或大きな屋敷の直ぐ横手の方になつてゐる。そこへ引越してから、今日が初めての訪問である。

玄關には、思つたほど下駄の數も見えなかつた。案内を乞ふと、二男の禮二が出て來て、「あゝ修さんですか」と笑つて迎へた。

上つてみると、家には何の事もなさゝうである。沈んだやうな顔も見えなかつた。火鉢の前に坐つてゐた細君は、不相變くりッとした目を瞬つて、毎時の氣爽な調子で、修吉の弔みを受けた。

「家のお婆さんも、到頭お陀佛になつちやつたのよ」と云つた口の利方である。

修吉は茶の間から、奥の座敷へ通された。座敷はきちんと取片着いてゐた。雅味のある昔風の敷物を敷いて、そこに唐木の大きな臺が置いてある。床には近頃死んだばかりの或大家の觀音の幅、横手に一口の太刀が飾つてあつた。修吉は椽の柱に凭れるやうに坐つて、そこで松枝氏に挨拶した。松枝氏は四十五六の年輩で、今は内務省の方に奉職してゐる。世々學者の家柄で、氏も古い書物は所好な方である。支那の古典、稗史の類にも詳しいと聞いたが、骨董癖もなか〱深かつた。よく徳川時代の珍本を、本箱から取出して來ては、さも味の深さうに愛撫してゐるのを見受けた。

亡なつた人は、松枝氏には繼母であつた。松枝氏が東京で家を持つて、子供が出來る時分に、この母

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親は一人の實子と一緒に、國の家を畳んで、松枝氏に引取られるとになつた。それ以來、茱萸と枇杷の樹の多かつた松枝氏の國の屋敷には、修吉の知らない顔の人が住むやうになつた。

細君が姉の友達で、其弟が修吉の稚馴みであつたところから、東京へ出てから、修吉はこの家へ出入するとになつた。長い間の下宿生活には、こんな家庭は修吉のために一つの港のやうな者であつた。着物を拵へる時とか、金が要るとか云ふやうな時には必然この細君の處へ來て謀つた。

この家で、修吉は色々の人に逢つた。皆な賑やかな細君の處へ集つて來る連中で、女が多かつた。近所に住む同郷の人の細君もあれば、哀な世帯崩しの年増などもあつた。昔し同じ町に門を並べてゐた家柄の娘で、長く吉原に腕を鳴してゐたとか云ふ、色の褪めた凄い女も居た。塑像の上手な、少い美術家の××氏に逢つたのも、この長火鉢の側であつた。松枝氏の弟の古い英學者、細君の弟の醫學生などもゐた。この醫學生は、歌や俳句が巧かつた。小い時分修吉は其家へ遊びに行つて、其父の長い白髯を見る度に、百人一首にある柿本人麿のやうだと思つた。祖父は可也な歌人であつた。

恁云ふ人達には、國の事が能く話題に上つた。長いあいだの放浪生活で、もう故郷の事は悉皆忘れ去つて了つた修吉の耳には、この連中の國訛が異樣に響いた。而してそれが修吉に夢のやうな幼時の記憶を喚起さしめた。この細君の家の人達の顔、其廣い庭、垣根際にあつた大きな李の樹、築山一杯の躑躅、大きい紋のついた布子のやうな着物を着て、そこを能く歩いてゐた白髯の祖父、禽を飼つてゐた目の大きい父親、外で孫が泣かされると、直に出て來て賺して連れて行き／＼した祖母、松枝氏の細君が能く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

育た其母親、それから貧しい修吉自身の家の周圍、空屋敷、そこらの叢や石原の中から蟋蟀を搜したり、寂しい町垠の森蔭を、蟬を釣つたりして歩きまはつてゐた、慘な修吉の姿、それらの薄い印象が過去の暗い影の底から、をり〳〵閃めくやうに想出された。昔の家の狀、悲哀の多かつた自分の生立の迹、泥溝の緣に生えてゐた尉が髯の毒々しい實、柔かい垣根の藤の葉に集つてゐた灯婆と云ふ優しい姿の蟲、こんなものまで想出された。この追想は、いつも修吉の心を暗くした。

それからもう十年になる。松枝氏の長男は二十二三の青年になつた。細君の弟は、醫師になつて地方へ行つてしまつた。細君の體には、有福な四十女らしい落着が出來て、頰に豊かな肉が垂れて來た。家もずツと廣〳〵なつて、生活狀態が其頃から見ると奥深くなつた。

修吉は松枝氏と少時話を交へてから、起つて靈前に香を手向けた。位牌は座敷の奥の一室に据ゑられてあつた。此處は一方硝子障子になつてゐる。其窓の一半が屏風で外光を遮へるやうに建てられて、長い寢棺が横はつてゐた。其前に据ゑた白い片の被つた机に、位牌や供物がおかれてある。

長い袴を着けた松枝氏は、慇懃に側へ來て、修吉が禮拜する間を跪坐んでゐた。

而して元の席へ復ると、「いや何うも有難う」と滿足さうに輕く挨拶した。

するうち客が又一人通された。客は四十四五の、胡麻鹽頭の紳士であつた。修吉は入代りに茶の室へ引退つた。茶の室には、主の二人の弟、大きい方の弟の子供、細君、それから出入の商人風の男などが居聯んでゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あの人堀さんよ。」細君は首を竦めて笑つた。

修吉は又その人の幼時の、家が大きな楠のある川添の屋敷であつたことを想出した。而して、髪を長くしてゐた、其時分の堀の後家さんの一人子息が、此紳士の稚いをりの幽かな印象であつた。雪のびしよく降る日に、長い小田原を着て、この楠の下を通つて學校へ通つたことや、石高な道を、草履を穿いて、その向の家へ、醋を買ひに行つた貧しい自分の姿も、頭腦の底に殘つてゐるやうであつた。

その時分、お婆さんはまだ四十幾歳であつた。細君は十三四のお轉婆娘であつた。貧弱な修吉は、このお轉婆娘の手に手鞠に取られて、能く上へ投あげられなどした、それから大分經つてから、東京へ緣づく噂が傳つて、修吉は少年の胸に淡い悲哀を覺えた。

「あの時分のお婆さんのお髮は、眞實に美事なお髮でしたね。四十幾歳と云ふんでしたらうね。」入口の方に坐つてゐた、松枝氏の弟の細君は、思の深さうな言方をした。

「その時分、些と東京へお出になつて、其次にお目にかゝつた時には、もう綺麗にお髮をお落しなすつてね。」

「何しろ幸福な人さ。」細君は想出したやうに言つた。「何の苦勞もしないで、七十二までも生きて、死ぬ時と云つたら、全然眠つてても行くやうだつたのよ。」

修吉はこの細君が、能く莫迦にしたやうな調子で、人の好い姑を揶揄つてゐたことを思出した。

「四十と云へば、今の阿母さんのやうなものですね、」松枝氏の二男が喙を容れた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それから三十年……それだけ皆なが年取つてゐるんだわ。修さんにだつて、子供が三人もあるぢやないか。」細君は言出して笑つた。緣づいてから二十年許のあひだ、こゝの世帶を切盛して、子供を育てゝ來た事、自分も人も老いた事が、尺て度るやうに解つた。

先刻から、一同の話題に上つてゐた、庭の夜會草が、幽白い花を、ぱつと夕闇の木蔭に咲かせる頃に自分は暇を告げた。

「貴方は古いお馴染ですから、今夜お通夜に入らして下さい。」

細君は送出すとき土產を紙に包みながら、更つたやうに恁う言つた。稚い時分からの馴染の人に、恁して子供の土產を包んで貰ふのが、修吉には可異いやうに思はれた。

家へ歸ると、「如何てした」などゝ妻は訊いた。

「多勢行つてゐたんてすか。」

「少しは來てゐた。」

自分は恁う言ひながら、包みを出して子供にくれた。

「へえ、それがお國のお菓子てすか、」妻は希しさうに一つ取つて、割つて口にした。菓子は餡の濃厚な田舍の御所饅頭と云ふ類てある。自分も想出したやうに、其半分を取つて食べた、醇い甘味が、食つてからも舌の上に殘つた。「恁云ふ菓子を、僕等は悦んて食つたものだ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それから、お金のことを言はなかつたんですか。」

修吉が松枝氏の細君から融通してもらつた借金が、まだ大分殘つてゐることを、妻は知つてゐた。その金は放縦な下宿生活時代に借りたのであつた。細君は「少し餘所に然云ふお金があるから、それを借りてあげやう」と云つて用立てゝくれた。然云ふ事を東京の人は誰でも爲るやうである。細君は其頃それを誰かに頼つて、良人に內證でやつてゐたが、其樣な事を長く續得られる質ではなかつた。修吉はそのために、義務を果さないのではなかつたが、細君は餘り催促をしやうともしなかつた。修吉は氣に爲い／＼長いあひだ自分の心持を疑はれるやうな苦しい思を忍んで來た。それだけ此四五年の生活に餘裕がなかつた。て、殘つた分は、何時までも殘つてゐた。

細君がその時分、よく無盡の掛金や割戾しなどのことで、胸算をしてゐた事なども、修吉はをり／＼見受けた。顏の廣い細君は、寄ついて來る工面の惡い人に、然云ふ仲間入をしてやるやうな場合が度々あつた。

修吉は今そんな古いことを言出すこともなしに、その家へ顏を出し得るほど、互に心を知合つてゐた。

晚飯が濟んでから、修吉は書齋へ入つて、それから描くべきものに筆を着けた。それが濟むとセルの單衣のうへに、羽織を着て出かけて行つた。その前に、お通夜に集まる人達の食ふやうなものを、少許妻に見繕はせて、持たせてやつた。

門を出ると、高臺の方の空から、物凄いやうな雲が追蒐け／＼出て來て、空氣が可恐しく濕氣を含ん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐた。その暗い雲の蔽被さつたやうな空の下に、秋口の宵の町が、處々に眠さうな灯影を見せて、シンとしてゐた。往來には人の影も疎であつた。修吉は古い蝙蝠傘を肩にかけて、懈いやうな心持て歩いて行つた。

松枝では、上口の室に明が點けてあつた。その屏風の蔭に、帽子や外套やが脱いてあつて、座敷の方からは聞いたことのあるやうな話聲が洩れて來た。修吉は直ぐ其方へ通された。

客は近所に住つてゐる醫師が一人、外に若い人が二三人あつた。醫師はもう酒が廻つたと見えて、てら〳〵した顔や目を光らせて、肥つた體を、縁側の柱に凭せて、胡坐を組んでゐた。大きな餉臺の上には、刺身や燒肴や茶碗蒸のやうな物が、ごて〳〵と駢べてあつた。修吉はこの醫師に直ぐ猪口を持たせられた。

奥の室は薄暗かつた。線香の煙の漾ふたあたりに、若い法師が位牌と向合つて行儀よく坐つてゐた。燈明の蠟燭の灯が、肉の硬いやうな白い其顔を照してゐる。お婆さんの實子の、松枝氏の二番の弟が、其側に畏まつて話のお相手をしてゐた。この弟は、近頃こゝから或る役所へ通ふやうになつたが、まだ一家を成すほどの氣働がなかつた。髯の嚴つい立派な男て、母親と一緒に引取られてから十幾年のあひだ、一度も兄や嫁、其子供達の先へすらも乘出さうとしたことがなかつた。自分の產みの親の葬式を、兄の手一つて出してもらふのが、如何にも氣が引けると云つた色が、沈んだやうな其樣子に歷々見えた。どんよりした微溫い此處の空氣に育つた寄生木のやうな此人の生涯にも、除々何方へか乘出さなければ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ならぬ時が來たやうに思へた。

茶の室の向の部屋には、松枝氏の子供の机が据ゑてあつた、そこに長子と松枝氏の長弟とが、葬式の準備員らしく坐つて、色々の書ものなどをしてゐた。長子はもう父親を見下すくらゐ體が發育してゐた。次男の弘二君も、ひよろりとした其體を、大股にそこらを歩きまはつて、客の取次などをしてゐた。父親も二人の叔父も子供も、何の差等も異色も見えないくらゐ、此の家庭の空氣は何時も一ト色に流れてゐた。

自分等が陽氣に酒を飲んでゐる間に、雨が降出して來た。するうち板戸が閉められて、家のなかは蒸暑いくらゐであつた。

席が段々崩れかゝつて、人々は夫々他哩もない雜談に耽つた。その間に、隱遁者のやうな主人は、古典や骨董や、謠などの趣味が、味つても味ひきれぬと云つた風で、始終其事を思廻らしてゐるらしかつた、而して人々の話に、「ふむ〳〵、成程」と、輕い應答をしてゐたが、其渦中へ入るやうな事はなかつた。ふと漢學のことなど聞かれると、「さう……」と、目元に意味の深さうな笑を浮べて、說いても說き切れぬほど深くて廣いと云ふやうに、首を傾げてゐた、

醫師の世間は可也廣かつた。話題も豐富であつた。夫から夫へと、話の範圍が擴がつて行つた。病で苦勞してゐる病家先の或代議士夫婦の噂などを、さも面白さうに興に乘つて話出した。この醫師にも美術癖があつた。三人の話が何時か書の方へ落合つて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私がこの間或所から手に入れた××の一筆書を、貴方に御覽に入れましたかね。」醫師は恁う言つて、綺麗に刈つた其の髯を捻つた。

「いやまだ拜見しませんが……。」松枝氏は、先刻から見てゐた風來山人の何とか云ふ小册子を、捻くりながら言つた。

「些と好いものです。あれならば、何處へ出しても立派なものです。」

「ほう、そのうち是非拜見しませう。」松枝氏はもう其書を豫想して樂しんでゐるやうに見えた。

話が色々の方面へ飛んで行つた。壁に懸けられた額の「乾坤失色」と題する涅槃の漫畫や。壁に飾つてある、異樣な太刀の束、黑い佛像などの批評も始まつた。

その間、法師の單調な讀經の聲が、長く續いた。かうして咽喉から絞出すやうな其聲を聞かされてゐるお婆さんと、昔し一緒に音曲を聞いた時のことを、修吉はふと想出した。お經の聲は、慘な新佛の眠を、引搔まはしてゐるとしか思へなかつた。

旋て部屋の空氣が白けたやうに、夜が更けて來た。そこらに居た人の姿も、何時か寢室の方へ引込んでしまつた。干からびたやうな佛の前の盛飯、供物の林檎、其上に燈明の灯が靑白く搖いて、疲れた讀經の聲が、時々調子はづれに高く張揚げられた。慵れた修吉の頭腦が、其度毎に掻廻されるやうであつた。

「さあ〳〵、皆な眠つちや可かん。眠氣ざましに何か面白いことを行らう。」ドクトルが疲れた目を引擦つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て言出した。

「さあ何か可いかね。明朝、雨が霽れるやうに照々法師でも拵へやう。」

ドクトルは獨語して、茶の間の方へやつて來た。

隅の方に長火鉢を扣へて坐つてゐた細君は、邪氣のないドクトルの顏を見て、ニヤ〳〵笑出した。

「貴方の姉さんと、お祭の時能く照々法師を拵へたわね。」細君は修吉に話しかけた。「而してそれを南天の枝に懸けておくのよ。あんな時分の事を想出すと、變なものね。」

細君の目は、眞中に弔したランプ越しに、冴え〳〵して居た。

「それから、一緒に常盤津なぞ習ひに行つたともあつたつけ。」

「東京へ來てから、あんな事は行らないですか。」修吉は問かけた。

「いゝえ些とも……三味線なんぞ全然聞きもしないわ。それでも此間久振で小清を一度聞きましたつけ。巧いもんだわね、あの三味線が……。此方の思ふ壺へはまつて行くんだもの。危つかしい處なんざ、些とも有りやしない。だけれど、あの女も年を取つたわね。聲に底が出て來たやうよ。それも其筈さ、もう長い小清ですからね。でも私が此處の家へ來た時分から、顏はあゝ云つたやうな顏さ。馴染の藝人などが、見る度に更けて來るのを見ると心細いやうだわ。」

「さうさ、お婆さんの坐つてた處へ、貴方が坐るやうになつたんだから。」ドクトルは出來あかつた照々法師を、そこらへ投出して、松枝氏の弟と一緒に、幾枚も〳〵半紙に南無妙法蓮華經を書出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「こんな物を書いてもらふやうに爲つてはお仕舞だ。」

弟は行けぬ口に飲過した酒が廻つて、血色の勝れない頰にも、紅味を有つて來た。疎な鬚が顎に生えて、肉のない骨が物を言ふ度、ガク／＼動いた。それを見ると、失意であつた前生涯が想出された。久しい前から英學の塾を經營して、毎日々々の講義や素讀に、顳顬の骨が、もう憊れ切つてゐるやうであつた。修吉は自分の影を、此人に見出すやうな氣がした。

寄書の惡戯をしてゐたドクトルも弟も、其處へどかりと倒れてしまふ頃には、修吉は頭の心から疲れて口を利くのも臆劫であつた、

雨は宵の口より一層劇しくなつた。讀經の方ももう過んで、家のなかゞシンとして來た。起きてゐる人達の顏には、一樣に困憊の色が見えて來た。話はまた死んだ人の身の上に移つた。もう迚も望みのなかつた其の臨終のさまを話すとき、灯を瞶めてゐる細君の動かぬ目のなかに、冷やかな或物が流れた。

「貴方にも阿母さんがあるんだわね。」細君は言出した。

「どうして呼んであげないのです。あの方は本當に悧巧な行屆いた人よ。來てほしいと思ふ人は些とも來ないで……。」

猜疑心の多い、修吉には此の語の意味が色々に解れた、母を讃めたのだとも取れるし、母親のゐない家庭は必然不亂次だらうと云ふやうな意味にも聽かれた。

「僕のところなぞは、未だ母を迎へるやうな家の形が出來てゐないのです。」修吉は恁う云つて外方を向

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いてゐた。

細君も淋しい笑を洩した。

恁して向合つて話してゐても、子供の時を追想させるやうな淡い優しい感情の通ふやうなことは、もう無くなつて了つた。互に見透されまいとしてゐるやうな、此氣まづさが、金や禮儀で取遠されるやうな時機が疾に過去つたかとも思へた。

修吉は夜明が待遠しいやうな思で、然して暫らく其處に坐つてゐた。をり〳〵疲れた體を起して、枕を置いてある奥の室へ入つて、隙した窓から、暗い外を窺いて見た。するうち、ぴしよ〳〵雨の降る隣の屋敷の黒い森の上には、何處か幽かな明みを持つて來た。部屋の中に寢轉んでゐると、明方の寒さが、戸の外から滲つて來るやうであつた。

一人二人、目をさまして、鼻のつまつたやうな聲で潜々と話を初める時分には、ランプの火影が、自然に薄らいで行くやうに思へた。高らかな讀經の聲が、それから又曉頃まで續いた。

糸瓜の花のほの〳〵と白い窓の外を覗きながら、細君は、「ちよいと修さん、此處にも斯樣な花！」と蒼白い顔に笑を浮べた。

蚊帳のなかゝら、旋て主も弟も出て來た。

「お天氣は如何かな」と、皆なは窓の方へ寄つて、白んで行く空の方を見上げた。

ドクトルと二人、修吉が暇を告げやうとする時、細君は奥からお國風の大きな菓子袋を持出して來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中には鴨川と云ふ、修吉が子供の時分能く食つたとのある煎餅が一杯入つてゐた。厚紙で拵へて、口を元結で結へた其袋は、棊碁の駒のやうな形をしてゐた。

「この袋のなかゝらお煎餅を出して、よく夜更まで旗源平をしたものだわね。」袋をメリンスの風呂敷に包んでゐる、細君の顔が、然うも言つてゐるさうに思えた。

修吉は、深い雪の夜に座敷に集つて、然うした春の遊びに耽つてゐた頃の、細君の少い、幼な姿などを思浮べながら、外へ出た。

町はまだ靜な夢の中にあつた。

家へ歸ると、子供はこの提げた菓子袋の下に集つて來た。異様な袋のなかゝらは、子供等の見たともない芝舟や鴨川が出た。

修吉は、飯を濟すと、間もなく奥に延べたまゝの蒲團のなかへ、こそ〳〵と入つて行つた。

一時頃に、禮服を着て松枝の家へ行くと、會葬の人が彼方此方に二人三人づゝ集つてゐた。傘をさして門の外にゐる人や、前の家の門の蔭にゐる人などもあつた。

家へ入つて行くと、腕に黒い片を捲きつけた人が、澤山居た。

修吉は茶の室へ入つて、火鉢の側に坐つた。昨夜のドクトルは、其側の机のうへて、紙に香を包んでゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或人は、額を蒐めて、焼香順の書付を持つて、鉛筆で何やら印をつけてゐた。香は皆なそれ〳〵に手渡された。ドクトルは修吉にも其一包を頒つて、「君も親戚の分だ」と、例の剽輕な調子で笑つた。

「もう釘を打つけつちやいやすよ。」奥の方から喚ぶ聲が聞えた。

女達は皆な泣きたいやうな顔をして、其の方へ急いだ。

奥は部屋一杯に人立かして、知らぬ人と知らぬ人と、默つて顔を見合つた。近親の人達は、棺側を取捲いて、中へ色々なものを入れたり、併べたりしてゐた。それが濟むと、急いで蓋をして、片端から釘を打着けて行つた。新しい木の匂と、線香の匂との混交になつた其處いらに、人々がごや〳〵して、用のある者も無い者も、一様に立つたまゝ彼方行き此方ゆきした。次の間に腕組して坐つた人も、落着かぬ目色をして、其方を見やつた。

然うして靜肅な混亂のうちに、長い棺が表へ擔出された。

フロックを着けた主人、弟、制服の二兒、海軍服の末子、この末の子を、薄色縮緬の紋附を着た細君が抱いて車に乘つた。修吉もドクトルと前後して、乘つて來た車に乘つた。

寂しい、白けたやうな雨の中を、行列が順々に繰出して行つた。棺の角、油紙に裹んだ龍捲の尖端、其様ものが、空から差す薄光を受けながら、輕く動いて行くのが、不規律に幌のなかゝら見られた。車が時々前の車を遠く離れるかと思ふと、急に又喰着いて、遲々と曳かれた。

暗い木立や垣根の多い狹い通の奥にある寺へ着くまでには、可也の時間がかゝつた。大きな百日紅のある石壘の側の方へ、車が次ぎ〳〵に引込まれると、人々は旋て受付口から上つて行つた。其中に交つて、親族席に就いた時、修吉の頭腦は全然眞空のやうであつた。

懈い讀經の聲、單調な銅鑼の響、空虛な老僧の引導、然云ふものが、それからまた長く續いた。

燒香が濟むと、修吉は急いで寺から出た。

葬式が濟んでから、二日目に修吉はまた松枝の家の閾を跨いだ。

その日はネルの上に、袷羽織を着るやうな陽氣で、四時頃の太陽は、倦んだやうな其光を、黄ばんだ木立、垣根の上に投げてゐた。修吉は何處へ行くともなく、其處らを彳徉いてゐたが、するうち決斷のない足は、癖になつたやうに、何時か其方へ向いて行つた。

その時例の無口な下女が取次に出た。同時に修吉は茶の間へ上つた。

細君は火鉢の傍に、俛いて書付のやうなものを見てゐたが、些と修吉の顏を見あげると、

「この間は、雨て飛んだ御迷惑てしたわね」と、何處か媚らかすやうな調子て言つた。

髮を綺麗に取あげて、何事もなさゝうに悠然と坐つてゐた。

東南向の平庭には、もう日がかげつて、隅々の木の蔭が薄暗かつた。

「眞實に大變だつたのよ。」細君は大分たつてから言出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

―今までかゝつて、漸と片着いたのよ。病氣のあひだ、もう放抛つてあたつものですから、其處いらが、もう滅茶苦茶になつてゐたの。」

下女は水を盛つたバケツを、庭先の沓脱のうへにおいて、せつせと板敷に雑巾がけして居た。

それから細君は、そこへ散らかつてゐた書付や受取のやうなものを、一纏めにして、奥の方へ持つて行つた。而して廣々したやうな家のなかを、彼方から此方へ動いてゐる氣勢がした。手箪笥の抽斗を開ける音や、文庫のやうなものゝ蓋をする音も聞えた。

修吉はその間、可也腕の枯れた庭師の作つたらしい、庭木の配ひ方などを見てゐた。ぐるりと取廻した縁の栂の板敷が、薄光に光つて、そこに水蓮の植つた青い鉢や、檞の盆栽の置いてあるのも、蕪雑な自分の家から見ると居心が好かつた。

侑められた菓子を摘んで、途斷れ〳〵に話込んでゐるうちに、弟が勤先から歸つた。口の重い彼は洋服を着たまゝ其處に坐つて、何時までもじつとしてゐた。修吉は寺で取替つた帽のとなどを訊いた。

するうち末の子が泥だらけの足で上つて來て、茶の室を通りぬけて、薄暗くなつた奥の室へ駈込んだ。そこへ主も歸つて來た。

主は羽織と袴を脱棄てると、其處に落着いて坐りもしないうちに、手拭や石鹸箱を出させて湯に行つた。

後で三人は又默つてゐるやうな事が多かつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それから四五日經つと、修吉は初七日に呼ばれた。

その晩、ドクトルも來てゐた。蒸暑い晩で、人々は皆なてら〳〵した顏をして、團扇や扇子を使つた。法師が經を讀むあひだ、弟達は代る〳〵柱にかゝつてゐた唐團扇で、やせたその背へ緩やかに風を送つてゐた。部屋から庭へ蒼白い灯影が流れて、木の片蔭に、長い蔓の夜會草が二つ三つ白い花を見せてゐた。

法師が、叮嚀に其處へおかれた盆の上から、お布施を受取つて歸つてから、席が崩れ出した。人々は思ひ〳〵に、話したり飲んだりした。茶の間の方でも、別に集つて、盃の取遣をしてゐた。賑やかな笑聲が、其方からも洩れた。

修吉は九時頃まで、この團欒のなかへ入つて、酒を飲んでゐた。

外へ出た時目がちろ〳〵して居たが、靜かな通を歩いて行くと、頭の底がシーンとして來た。

それから五日ばかり經つて、松枝の細君が修吉の家を訪れた。

修吉は其時、明い座敷の方で新聞を讀んでゐた。朝の十時頃で、目眩いやうな光線が、冷々した縁から室内の疊のうへまで流込んでゐた。修吉はその光線を横顏に受けながら閾際に胡坐をかいてゐた。そこへ自分の細君が、松枝夫人の來訪を取次いで來たので。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「貴方、松枝さんの奥さん……」と低聲である。

松枝の細君は、落着いた色氣の羽織など被てゐたが、帯の締方などは無造作な方て、打粉が蒲洒してゐた。

「へえ、好い家ね。庭がなか〳〵廣いぢやありませんか」と坐ると直ぐ、お愛相を言つた。

するうちに、細君が亂れてゐた髮などを直して、茶道具や菓子などを持つて、更つた顏をして出て來た。この細君の挨拶振が、打解けた客の樣子に相似はぬほど叮嚀てあつた。

「私も一度、上がらなければならないのてございますけれど、子供がをりますと、遂用事にかまけまして……。」

「お互さまてすよ。家の坊なぞは、人一倍惡戯の激しい方てすから、それは寔に世話が燒けて、爲樣がございません。」

「でも餘が皆さん大きくて在しやいますから……私共の子供と來た日には、それこそ大變なんてございます。」

こんな話が、暫く續いた。松枝の細君は、サク〳〵した調子て辯つたが、時々話が途斷れるやうな事があつた。女同士こな〳〵した話を爲ない方てあつた。するうち細君は、子供の啼聲を聞いて、奥へ起つて行つた。

松枝の細君は、横の方に置いてあつた包みを取あげて膝の上へ載せると、其儘其上へ手をおいて、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それから四五日經つと、修吉は初七日に呼ばれた。

その晩、ドクトルも來てゐた。蒸暑い晩で、人々は皆なてら〳〵した顔をして、團扇や扇子を使つた。法師が經を讀むあひだ、弟達は代る〳〵柱にかゝつてゐた唐團扇で、やせたその背へ緩やかに風を送つてゐた。部屋から庭へ蒼白い灯影が流れて、木の片蔭に、長い蔓の夜會草が二つ三つ白い花を見せてゐた。

法師が、叮嚀に其處へおかれた盆の上から、お布施を受取つて歸つてから、席が崩れ出した。人々は思ひ〳〵に、話したり飲んだりした。茶の間の方でも、別に集つて、盃の取遣をしてゐた。賑やかな笑聲が、其方からも洩れた。

修吉は九時頃まで、この團欒のなかへ入つて、酒を飲んでゐた。

外へ出た時目がちろ〳〵して居たが、靜かな通を歩いて行くと、頭の底がシーンとして來た。

それから五日ばかり經つて、松枝の細君が修吉の家を訪れた。

修吉は其時、明い座敷の方で新聞を讀んでゐた。朝の十時頃で、目眩いやうな光線が、冷々した縁から室内の疊のうへまで流込んでゐた。修吉はその光線を横顔に受けながら閾際に胡坐をかいてゐた。そこへ自分の細君が、松枝夫人の來訪を取次いで來たので。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「貴方、松枝さんの奥さん……」と低聲てある。

松枝の細君は、落着いた色氣の羽織など被てゐたが、帯の締方などは無造作な方で、打扮が蒲洒してゐた。

「へえ、好い家ね。庭がなかなか廣いぢやありませんか」と坐ると直ぐ、お愛相を言つた。

するうちに、細君が亂れてゐた髮などを直して、茶道具や菓子などを持つて、更つた顔をして出て來た。この細君の挨拶振が、打解けた客の樣子に相似はぬほど叮嚀てあつた。

「私も一度、上がらなければならないのでございますけれど、子供がをりますと、遂用事にかまけまして……。」

「お互さまですよ。家の坊なぞは、人一倍惡戯の激しい方ですから、それは寔に世話が燒けて、爲樣がございません。」

「でも餘が皆さん大きくて在しやいますから……私共の子供と來た日には、それこそ大變なんてございます。」

こんな話が、暫く續いた。松枝の細君は、サクサクした調子で辯つたが、時々話が途斷れるやうな事があつた。女同士こなこなした話を爲ない方てあつた。するうち細君は、子供の啼聲を聞いて、奥へ起つて行つた。

松枝の細君は、横の方に置いてあつた包みを取あげて膝の上へ載せると、其儘其上へ手をおいて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「これは片身配と云ふほどの品ぢやないのよ。だけれど、古いお馴染ですから、眞の章までに持つて來たんですから、その心算で誰方が着られたら着て下さいよ」と、恁う言つて、漸く中の物を取出して、私と下に置いた。品は黒絽の羽織であつた。

修吉は困つたやうな顏をした。

「多勢貰ふ人がお有てせうに……僕は其樣な品を頂かなくとも可いてす。」

「そんな品ぢやないの。それに葬式なぞは東京て今度が初めてせう、後にするとが先になつたり、前に爲るとが後になつたり、何だか混亂してゐたものですから、實に不行屆がちて……。」と云つて、細君はそこらを見廻した。

「でも可いわね、恁して靜かな家を持つて、やつて行けるんだから……」と、それから間取の工合や湯殿の有無などを訊いた。

そこへ又妻が出て來た。

「お宅は誠にお廣いさうでございますね」と、子供に乳を啣めながら言かけた。

「いゝえ……」と、細君は子供の顏を覗いて愛しなどした。

「書室を拜見な。」細君は言出した。

「書室と云ふほどの大したものでもありませんが、まあ見て下さい」

二人は玄關の方から、書室へ入つて行つた。床の板や、建出した柱は、まだ然程古びてゐなかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なく、[illegible]されて來るやうな光線が、落着よく取込まれるやうに出來てゐた。

周には色々の畫が懸つてゐた。本箱の上や、卓子の上にも、幾箇となく並んでゐた。その中に立つてゐると、色々の感じの好い色彩が一度に目に映つて、冷つこいやうな室内の空氣に、頭腦の底がスーツと透いて行くやうであつた。

口輕な細君も、この勞作場へ入つて來ては、餘り頓興な質問を發したり、批評を加へたりするやうなとは爲なかつた。而して、室内を少し歩くと、直に出てしまつた。

細君は元の座へ復ると、渇いた咽喉を冷めた茶に潤してゐた。そこへ修吉が布に塗つた一枚の小い繪を持出して來た。その繪には、花瓶に紅、白、紫、色々の鮮やかな花が挿されてあつた。

「これを差上げませう。」

「それを……おゝ。綺麗だこと！。」

「餘り好い出來でもありませんが、何處かへおかけ下さい。額は何か、お有りでせう。」

細君はそれを受取ると、「さうね、有るかも知れませんよ。」と、じつと繪に見入つてゐた。

「でもお氣毒ね。」

修吉は、薄い髯を引張りながら、不滿足さうに、これも繪に目を移してゐた。

旋て細君は、風呂敷でそれを包んで、「ぢや頂戴しておきます」と云つて嫣然笑つた。

「本當に貴方は、あの時分から畫が好きだつたわね。貴方の阿母さんが弟に下すつた悪戯書が、今でも

何處かにある筈ですよ。」

修吉は、餘り好い氣持がしなかつた。

それから細君は直に歸つて行つた。

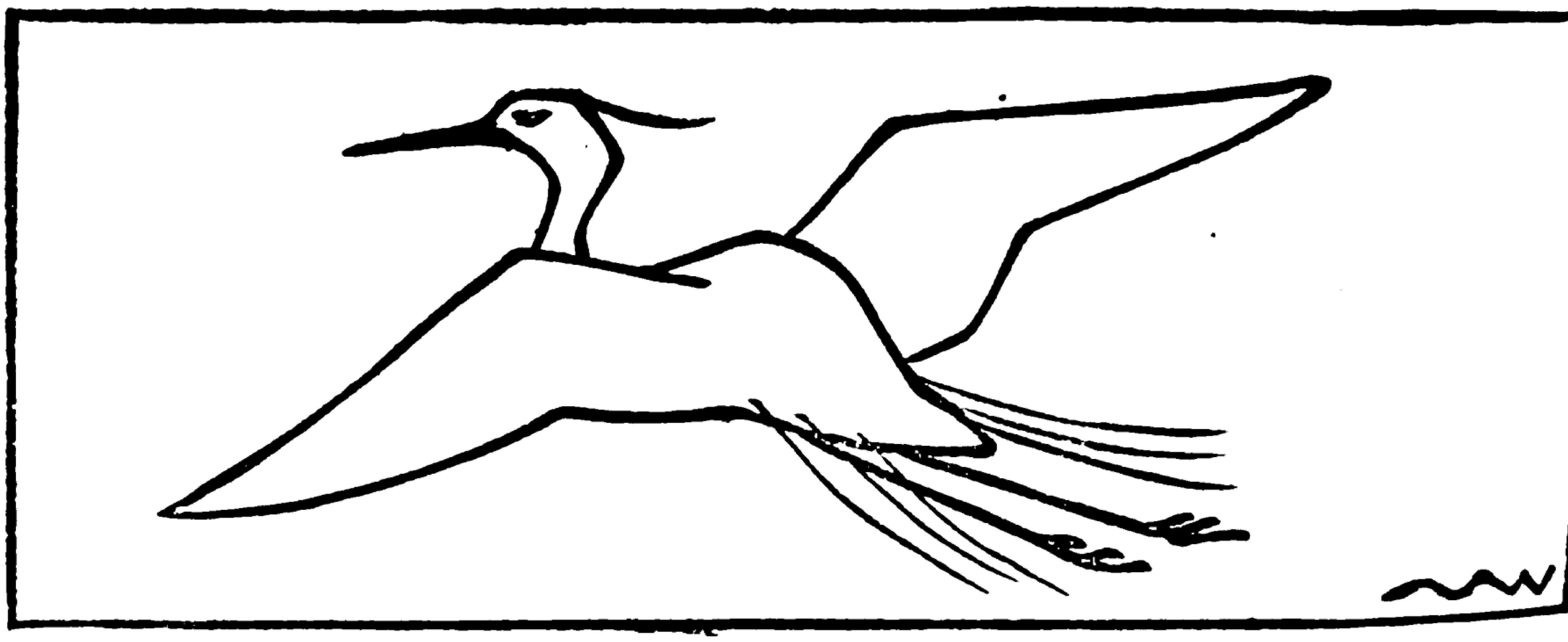
後で、妻は羽織を擴げて、日に透しなどして見てゐた。而して「もう餘程憊れてゐますよ」と苦笑した。

修吉は、「さうさ、當然さ」と云ふやうな顏をして、今贈つた自分の畫のことを考へてゐた。畫は三年ほど前に描いたもので、永く隅の方に放抛つておいた作である。今見ると色が全然生てある。

「拙いものを遣つた！」と思出すと、何時までもそれが氣になつた。

修吉の足は、それからまた、何時とはなし松枝の方へ向かなくなつた。

（をはり）



スケッチ

島崎藤村

茅町の停留場が廢されてから、この界隈より日本橋方面へ電車の便を取らうとするものは、是非とも淺草橋を渡り、あの樹木のすこしばかり殘つて居る廣小路まで出て乘らねばならぬ。あそこで線路は二叉に別れて、往きには大傳馬町、本町などを廻り、還りには市區改正中の石町、鐵砲町、馬喰町を通り過ぎる。よく私もあの邊を往來する。そして、あの暗い暖簾を掛けて、町の兩側で荷造りなどをする、ところによつては新しい箪笥やそれから種々な商品を高く積み重ねてある、黑い奥深い土藏造の問屋が軒を並べた町々を電車の窓から眺めて通る度に、私は少年時代の記憶を喚起さずに居られない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伊勢町といへば私は友達の生れた繪具問屋を聯想し、本町といへばあの四丁目の角の砂糖問屋であつた家を聯想する。殊に本町の家にあつた茶室風の靜かな座敷は、往時同志の青年が集つて、夜の更けるのも知らずに文學、美術を談じたところである。數寄を凝らした床の間、爐、壁の色――あそこで雜誌が毎月編輯されたものであつた。『時』は人の住居をいろ〳〵に動かした。友達も動けば、私も動いた。本町でも、伊勢町でも、今では皆な懷しい記憶の家である。

町家の變遷にも驚かれる。米澤町あたりは全く町の姿を一變して了つた。あの名高い煙管屋の跡などは奈何成つたらう。人形町邊も變つた。あの通りには藤掛といふ古い袋物屋があつて、そこで『高祖遺文錄』を取次いだものであつた。あの店なぞは相變らず榮えて居るであらうか。花屋敷の古本屋も今では見當らない。濱町、不動新道、竈河岸、皆な變つた。翁堂といへば、あの邊での好い菓子屋であるが、あの家なぞは舊のまゝにあると思つたら、暖簾は同じでも、代が替つて居る。

私は勝田の一門の繁榮を追想せずに居られない。それを考へると、確かに商家といふものゝ歷史が時代と共に一回轉したことを感ずる。唐物店、荒物店、下駄店、其他勝田の暖簾を掛けた大きな問屋が、石町の通に軒を並べた頃は、實に全盛を極めたものであつた。もし本店の御隱居を中心にして、あの婦人の若い盛んな時から悲慘な老後までを傳へることが出來たなら、一時代前に榮えた大きな商家の面影を偲ばしめるであらう。私は吉村のおばあさんから、よくあの御隱居の話を聞くが、先代の菊五郎を最屓にして、舞臺の上から御辭儀をさせた程の豪奢を盡したものであるといふ。家が衰へてからでも、御

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隱居の芝居見物には、金を十圓包み、鴨を二羽添えて、それを俳優へ祝儀として出したとか。この勝田の分家にあたる勝新の娘の法事が淺草の寺であつた時、私は一度御隱居といふ人を見たが、その頃は勝新の方が榮えて、本店は最早餘程衰微して居た。勝田の一門は今は多く跡方も無い。御隱居も亡くなつた。鼻緒店、針店、この二軒が繼續して商業を營んで居るばかりである。

電車が開通してから、夜見世の位置も變つた。兩國の通へ出たものが、今では淺草橋の通へ出る。

成島柳北の書いたものを見ると、柳北の號は柳原の北からつけたもので、家は淺草森田町にあつた。柳北は淺草橋と左衞門橋の間あたりに住んだものと見える。

「柳橋新誌」に曰く、

「橋以レ柳爲レ名、而不レ植二一株之柳一。舊地誌云、以下其在二柳原之末一命上焉。夫柳橋之地、乃神田川之咽喉也、而與二兩國橋一相距僅數十弓。故江都舟楫之利以二斯地一爲二第一一。而遊舫飛舸爲二最多一矣。其南赴二日本橋八丁渠芝浦品川一者、北向二淺草千住墨陀橋場一者、東則本所深川柳島龜井戸之來往、西則下谷本鄕牛籠番街之出入、皆無レ不レ過二此者一。而遊二五街娼肆一、觀二三場演劇一、及探花泛月納涼賞雪之客、亦皆取二水路于此一。故船商之戶、舟子之口、星羅雲屯、非二他境所一レ及。而釣艇網舸之徒亦居二其間一。橋之東西

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伊勢町といへば私は友達の生れた繪具問屋を聯想し、本町といへばあの四丁目の角の砂糖問屋であつた家を聯想する。殊に本町の家にあつた茶室風の靜かな座敷は、往時同志の青年が集つて、夜の更けるのも知らずに文學、美術を談じたところである。數寄を凝らした床の間、爐、壁の色——あそこで雜誌が毎月編輯されたものであつた。『時』は人の住居をいろ〱に動かした。友達も動けば、私も動いた。本町でも、伊勢町でも、今では皆な懷しい記憶の家である。

町家の變遷にも驚かれる。米澤町あたりは全く町の姿を一變して了つた。あの名高い煙管屋の跡などは奈何成つたらう。人形町邊も變つた。あの通りには藤掛といふ古い袋物屋があつて、そこで『高祖遺文錄』を取次いだものであつた。あの店なぞは相變らず榮えて居るであらうか。花屋敷の古本屋も今では見當らない。濱町、不動新道、竈河岸、皆な變つた。翁堂といへば、あの邊での好い菓子屋であるが、あの家なぞは舊のまゝにあると思つたら、暖簾は同じでも、代が替つて居る。

私は勝田の一門の繁榮を追想せずに居られない。それを考へると、確かに商家といふものゝ歷史が時代と共に一回轉したことを感ずる。唐物店、荒物店、下駄店、其他勝田の暖簾を掛けた大きな問屋が、石町の通に軒を並べた頃は、實に全盛を極めたものであつた。もし本店の御隱居を中心にして、あの婦人の若い盛んな時から悲慘な老後までを傳へることが出來たなら、一時代前に榮えた大きな商家の面影を偲ばしめるであらう。私は吉村のおばあさんから、よくあの御隱居の話を聞くが、先代の菊五郎を最屓にして、舞臺の上から御辭儀をさせた程の豪奢を盡したものであるといふ。家が衰へてからでも、御

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隱居の芝居見物には、金を十圓包み、鴨を二羽添えて、それを俳優へ祝儀として出したとか。この勝田の分家にあたる勝新の娘の法事が淺草の寺であつた時、私は一度御隱居といふ人を見たが、その頃は勝新の方が榮えて、本店は最早餘程衰微して居た。勝田の一門は今は多く跡方も無い。御隱居も亡くなつた。鼻緒店、針店、この二軒が繼續して商業を營んで居るばかりである。

電車が開通してから、夜見世の位置も變つた。兩國の通へ出たものが、今ては淺草橋の通へ出る。

成島柳北の書いたものを見ると、柳北の號は柳原の北からつけたもので、家は淺草森田町にあつた。柳北は淺草橋と左衛門橋の間あたりに住んだものと見える。

「柳橋新誌」に曰く、

「橋以レ柳爲レ名、而不レ植二一株之柳一。舊地誌云、以三其在二柳原之末一命焉。夫柳橋之地、乃神田川之咽喉也、而與二兩國橋一相距僅數十弓。故江都舟楫之利以二斯地一爲二第一一。而遊舫飛舸爲二最多一矣。其南赴二日本橋八丁渠芝浦品川一者、北向二淺草千住墨陀橋場一者、東則本所深川柳島龜井戸之來往、西則下谷本郷牛籠番街之出入、皆無三不レ過二此者一。而遊二五街娼肆一、觀二三場演劇一、及探花泛月納涼賞雪之客、亦皆取二水路于此一。故船商之戸、舟子之口、星羅雲屯、非三他境所レ及。而釣艇網舸之徒亦居二其間一。橋之東西

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

連二兩國橋之南北一。各戸之舟舫、舳艫相銜、楫櫂相擊、其數不レ知二幾千艘一。」

これを讀むと、舟が重なる交通機關であつた安政の昔を想像することが出來る。同時に、兩國橋と柳橋とを控えた神田川の河口が殆んどその中心ともいふべき場處であつたことを知ることが出來る。今でも天氣の惡い時には、あそこへ荷舟が集合して、風波を避ける爲に小さな港の趣を成して居るが、しかし往時の神田川ではなくなつた。屋根船は一艘しか殘つて居ない。淺草橋から柳橋へかけて、あの兩岸にある物揚場の裝置、高い石垣、古風な石段、鐵の鎖すべて往時の光景を語るものであらう。

神田川は到るところ面白い。湯島の杜の見えるあたりも好し、川下へ行つて白い壁や赤煉瓦の壁が岸に接近して並んだ光景も好い。その面白さは、半ば死んだ水のやうに、欠伸をしながら都會の眞中を流れて居るところにある。濁つた、汚ない川だが、品川の海の方から青い潮が押し寄せて來ると、急に活々とした趣を呈する。多くの荷舟はこの潮に乘つて川口へ入つて來る。

『柳橋新誌』の二篇は、初篇から見ると十二年の間を置いて出したとしてある。その中に元柳橋といふ言葉が出て居る。『余昔與二竹西坡一、飮二于故柳橋某樓一。題二詩其壁一云。嬌歌侑レ酒醉二高秋一。無限歡情卻惹レ愁。門柳簾疎美人去。他年追感在二此樓一。距レ今僅七八年、而西坡老病流二離于北地一、當時紅裙皆凋落如二晨星一。余亦詑二餘生於風塵中一。每レ過二故柳橋一仰見二老柳橋一、愴然感レ舊。有二桓氏金城之歎一。』この元柳橋は難波橋とかの別稱で、柳北の時代に別に柳橋が出來たと言つてある。兎に角、昔の柳橋の迹は今日野菜市場のあるあたりだといふから、燒けるとか、埋立てるとかして、地形は餘程變つたものと見える。昔なかつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ところに今では柵がある。船宿の廃れた迹に今では鷄が遊んで居る。

響――小諸から大久保へ、大久保から斯の市中へ、次第に私を引寄せた響が、今二階の障子に近く聞える。私が信州に居た頃、淺間の山腹にある山番へ通ふ途中で、しきりに耳を欹てゝ聞かうとした幽かな物の音も――小諸の古い城跡の側で、白い煙の見える度に立留つて、遠くなるまで聞かうとした汽車の音も――失張この響であつた。今私はその響の中に居る。ある時は破壞するやうに恐しげな、ある時は眠たく物憂く單調で退屈な……どうかすると私はこの響を障子の外で聞くのか、自分の頭腦の内で聞くのか、よく分らないやうな氣のすることもある。

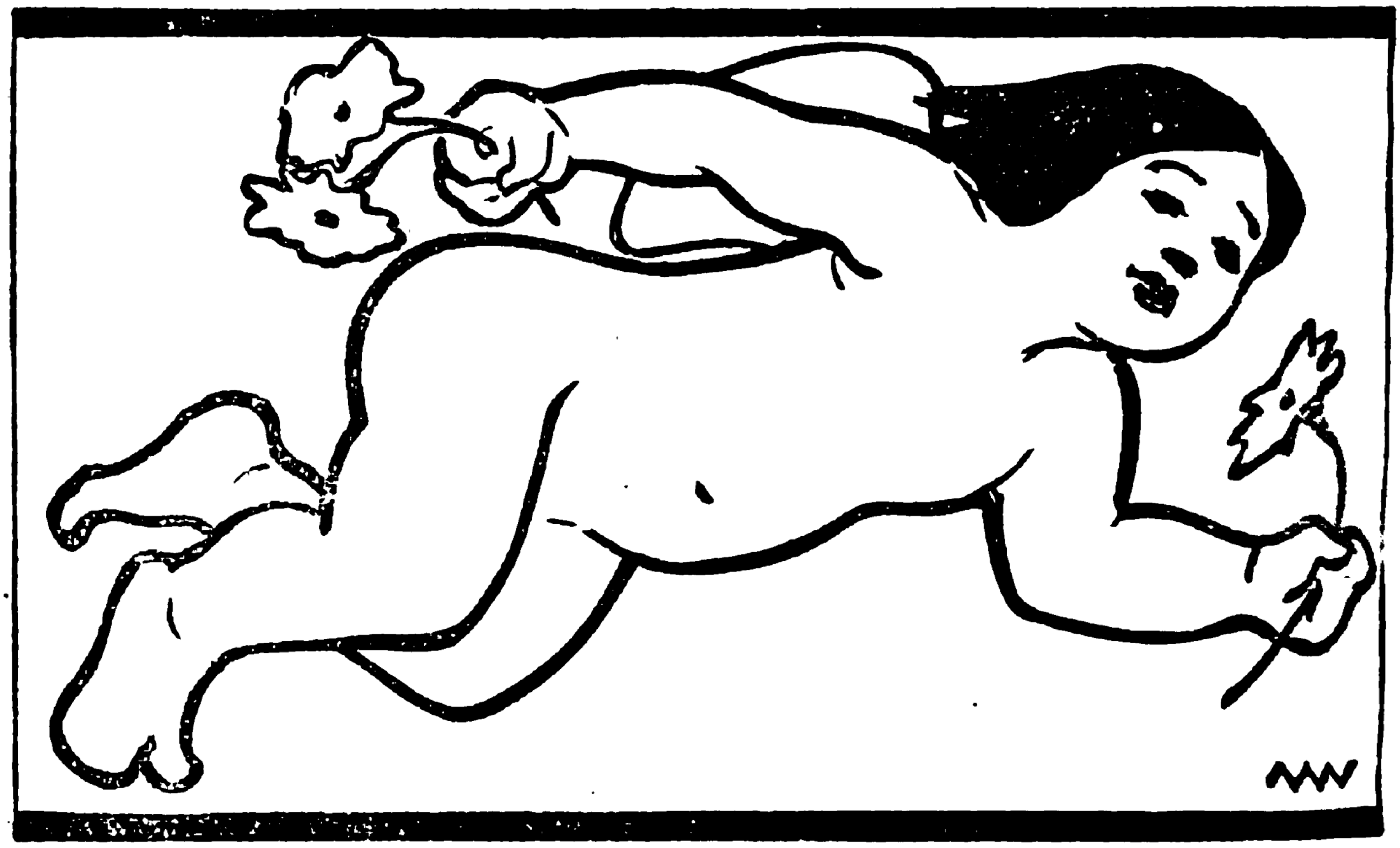
夕日は部屋の内に滿ちた。二階から屋根越に見える靴製造場の高い玻璃窓は光り輝いた。

私は空想の部屋を離れて、夕日の滿ちた町へ歩きに出た。そして初冬らしい、冷い空氣を呼吸した。柳橋の畔まで行くと、柳の葉は皆な落ちて了つて、枯々な、茶色がゝつた細い枝を通して、寒さうな濁つた水が見える。舟の影もない。埋立地について、料理屋の角を曲り、交番の前を通り過ぎると、やがて私は兩國橋の上に立つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本所の方へ歸つて行く人達、男、女、勞働者などが、いそがしさうに橋の上を通つた。兩國の公園の方を見ると、大福餅屋だの西洋料理店だのゝ高い屋根や低い屋根がごちや〳〵並んだ家と家の間のところへ、紅い夕日が沈んで行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



見果てぬ夢

永井荷風

一

ふところ手して縁側に佇んで、彼は衰へた黄い十月の夕日が次第々々に、蒼黒く濁つた古池の水の面から消えて行くのを眺めた。池のほとりから向うの築山を蔽ふ芝生の芝は、刈つたことのない雑草と共に延び放題に延びたまゝ、已に黄く枯れて居る。植込の落葉はその上一面に散り乱れてゐるばかりか、池の石から池の水の中まで散々に落ち込んで、色の褪つた藻草の間にとまつて腐つてゐる。濕つた土地だけに一面の青苔が、植込の日陰なぞは、殊更に厚くつや〳〵と輝いて居

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る外には、鮮かな力のある色は一ッも見えない。去年あたりまでは其れでも何うやら斯うやら、落ちた種から手入れはせずとも自然に葉鶏頭や紫苑などの秋草が生えて居たけれど、それさへ今年はとう〳〵根が絶えてしまつた。花のない庭、雑草の立ち枯れした廢園の淋しさを落葉の梢から梢に、夕暮の餌に飢えた秋の小鳥が歌つてゐる。彼はぢッと打眺めて、悲しいよりも却て今は何となく懐しい心持になつた。何故と云つて、彼はあらゆる物の荒廢衰頽のさまに對して抑え切れぬ詩味を感ずる性情を持つてゐた。彼は今日のやうな有様にわが家の庭の荒れはてゝ仕舞ふのを、ずつと以前から豫期してゐた、覺悟してゐた。落葉と枯草の庭も同様、自分の生涯もまた哀れに荒れすさんで仕舞ふのをちやんと知り抜いてゐたからである。

梢の間から古池の水の上に落ちる夕日の黄ろい繪模様はもう消え失せた。空氣は俄に濕つて冷く沈み返つた。けれども何處となく淋しい風の音がして木の葉が頻と枯れた芝生の上に落ちる。植込の樹木の幹は小暗い夜のかげの中に見えなくなつたが、枯れた其の葉や草の色は黄昏の光に却つて鮮に浮き出して來る。彼は依然として兩手を懐にしたまゝ、椽先の庭下駄を突掛けて空の方を見ながら二歩三歩と池の方に歩いた。

蒼白い空は其の一方だけ猶もかすかな夕日の名殘に色づいたまゝ、雲一ッなく晴れてゐる。と見ると、半ば落葉してからりと明くなつた櫻の梢の間に十日頃の片割月が白くかゝつてゐる。苔を踏む庭下駄の下に落葉は聞き取れぬ程の響を立てた。今だに生殘つた蟀が芝生のかげに鳴き始める。水際の石の上

から鯉の子がどぶりと古池の中にかくれた。その波紋の靜まるまで彼は石の上に立止つて古池の水を眺めたが、然し彼がいつも眺めては愛する自分の姿や空の浮雲や岸の樹木の反映は、あたりの小暗いために水の上にはもう見られなかつた。迷つた落葉が一片、水を覗く袷の襟元を掠めて飛んだ。落葉は早くもしつとりと秋の夜露に濡れてゐたので、彼は其の冷さが總身にしみわたるやうに感じて、驚くともなく振返つて、しげ〳〵身のまはりを見廻した。

庭は小暗いだけいかにも廣く見られる。優しい柳、とげ〳〵しい梅、眞黒な松など、さま〳〵な樹木は大きな屋敷を取り卷いて、肅然として聲なく立つてゐる。大きな屋敷は丸窓をあけて茶室のやうに突出した彼が居間の八疊を除いて、どこも彼處もすつかり雨戸が閉めてある。次第に昇る夕月の光が樹木の影をおぼろに映して、幾枚となく立連ねたこの雨戸は、晝も夜と同じやうもう彼れ此れ一個月以上も閉め切られてある。主人の彼が父から讓り受けたこの庭園この邸宅をいよ〳〵賣拂ふべく決心した其の夕から、屋敷の雨戸は一枚殘らず閉めきられて仕舞つたのである。小間使も仲働も書生も皆既にそれ〴〵解雇の處置をつけてしまつて、今では、父の車を二十年近くも曳き通した老車夫助造と飯焚の婆の二人しか殘してない。

老車夫は死んだ父と同年であつた。木更津邊の農家の伜であつたさうだが賭博で土地を失した結果、東京へ出て來て車夫になつた。身體が丈夫なばかりに六十近くになつてもまだ車を曳く。父は段々自分の身體が老衰して行くにつれ、其れに引比べて助造の行末を心配して今の中にどうにか老後の計畫をつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けるやうにと、屡云聞したばかりでなく、一時は何か商賣の資本にと尠からぬ金さへ與へた事もあつた。然し不幸にも女房に死なれた助造は、老年と共に鳥目になつて日の暮は安全に車を曳く事ができないにも係らず、何一ツ世渡りの道を知らないので、父の親切もつまりは仇になつて、一時助造は哀れな辻車夫に落ぶれて、冬の夜中に凍えて死にさうになつた事さへある。それを知つて父は止むを得ず以來は下男にして再び屋敷で使ふ事にした。けれども性來の愚鈍で、夥しく氣がきかない處から、下女共の他の奉公人の不平と嘲罵の的になるばかりであつた。

「おい、助造。」

若い主人は閉め忘れたらしい裏の庭木戸を閉めてゐる助造の姿を見て呼びかけた。

助造は腰をかゞめて、潮吹の章魚のやうな顔を猶更可笑しく、眼をぱちくりさせるばかりで返事をしない。しやうと思つても吃つて返事ができないのだ。「へい」と勢のいゝ返事のできない爲めに、彼はこの屋敷へ來るまでは幾度抱車夫の目見得に行つても、失禮な奴だと云ふ事で直樣しくじつて仕舞ふのであつた。若い主人はこの事をよく知つてゐる。そしてお世辭を云つて人の機嫌を取る事のできない助造の身の上を、其れが爲めに一層氣の毒だと思つて居る。助造は此の末どうなるであらう。自分の屋敷はもう旬日ならずして人手に渡つてしまふ。いかに氣の毒だと思つても自分にはもう助造の一生を見てやるだけの資力がなくなつた。

「助造、お前どうするつもりだ。何かいゝ考へをつけたか。」

「へゝえ。」と助造は曖昧な返事をして、ぼんやり若い主人の顏を見てゐる。

「金はいくらでもやる。百圓でも二百圓でもまとめてやる。然し此の前親父のゐた時見たやうに、愚図々々に遣つちまツちやァ困るよ。乃公も家を賣る位だから、この後はいくらお前が困つても最う世話はできないんだからね。」

「へゝえ。」暫く默つた後、「若旦那、お金なんぞいりません。」

「だつて、家を出てから金がなかつたら困るだらう。」

「困つてもよござんす。どうせ末は困るんですから、却てお金なんぞない方がよござんす。」

「其れぢや乃公が困るよ。助造、お前一體どうする考へだ。又車でも引くつもりか。」

「まア、さうでもするより仕樣が御在ません。」

「困るなア。」ぢツと助造の顏を見たが、助造の方は主人の目の前を唯だ恐縮するらしいばかりで、別に己れの前途を氣遣ふ樣子もなく、間のぬけた馬鹿な顏をしてゐる。

「車を曳くにしたところで、身體がさうはきくまい。お前もういくつだと思つてゐるんだ。」

助造はひよこ〳〵お辭義をして謝罪つてゐる。

「困るなア。」再び云ひすてゝ彼はもと來た古池の方へ猶もふところ手したまゝ俯向いて歩いた。落葉と青苔を踏む遲々たる庭下駄の其の歩みにつれて、老車夫の最後の運命があり〳〵心の中に描き出される。

金をやれば其の金のある中だけ、ぐづ〳〵に飮んで暮して、金がなくなれば再び寒い夜の河端や暗い辻

の角に客待をするのであらう。それも老い行く年と共にいよ〳〵梶棒を取る事も出來なくなれば何處かの軒の下に飢るか凍るかして死んでしまふに違ひない。それをば助造はすこしも氣にかけて居ないやうだ。氣にかけても無駄だと自分から諦めて、木の葉の風にさそはれて落ちるやうに、平然として其の生涯を運命の手に一任してゐるらしい。若い廢園の主人は重ねて古池の石の上に立止つて、はら〳〵、はら〳〵、止め度もなく落ちて來る木の葉をば感慨深く打眺めずには居られなかつた。微光の黃昏は早くも過ぎて、今は眞蒼な狹霧が深く木立を包んだ明るからぬ冷い月夜である。月は白く、古池の死んだ水の面、枯れた藻草の間に其の姿を映してゐたが、雨のやうな木の葉に打たれる波紋につれて、ゆら〳〵と細かく動く。

彼は未來に對して少しく恐怖を感じない老車夫の身の上を幾多び羨んだであらう。愚圖で氣がきかなくて、酒がすきで、仕樣がない奴だと助造の噂が家人の口に上る度々、彼は自分の身の上を其れとなく心潛に比較した。彼は三十五歲の今日まで全くの遊民坐食の徒であつた。昔は某藩の儒者として知られた彼の父は明治になつても矢張學者として官吏として一世の名望を負うてつい四五年前に死んだのであるから、彼は名家の子弟として世に出る機會は無論あり過ぎる程澤山あつたに違ひない。然し彼は長い年月を規則に縛られた學校を卒業するや否や、經驗のない若い身空は直に烈しい快樂の誘惑を受た。すると父の名聲が世に知られてゐるだけ、彼の名も忽ち道樂息子として世間に喧傳される。其れを好い事にして新聞の雜報は幾度といふ事なく艶つぽい材料を殊更に彼の私行から探り出す。噓と云はず眞と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云はず、噂は更に噂を產むもので、彼は今更に改心して見ても最う時は已に晩く、一度び定められた評判はどうしても動し得ない事を知つた。さうなつて見ると、最初は單に二十歲の無分別と、其の後は無意義の反抗でやつたのに過ぎなかつたけれど、次第々々に自暴自棄になつて、二度と再び立身の志なぞは起さなかつた。

彼は二個の苦しい記憶を持つて居る。其の一個は放逸の生涯を去つて健全な清潔な生涯にはいりたい爲めに、彼は友人の家の骨牌會で出會つて美しい人だと思つたある令孃と正式の結婚を試みた。其の望みは直樣遂げられたけれども、二人の性格の相違から來る不和の爲めに三年ならずして離婚するに至つた事である。新しい時代の敎育を受けた新しい細君は恐しく嚴格な人で、又恐しく正義に對する虛榮心の強い人であつた。彼は細君が恐しく名譽と義務を重んじて、嚴格な道德を說くのも、つまりは人から後指をさゝれまい、人から賞められたいと云ふ虛榮心が第一の原動力であつて、決して良心の滿足內心の慰安から出るものでない事を悟つた。ある慈善事業の寄附金の事について、彼は飽くまで無名の寄附を主張したが、細君は其れに反對したばかりでなく、誰々さんが百圓出したから自分はどうしても百五拾圓やらなければならぬと口論したのが破綻の最後であつた。日比谷の公園に夏の夜の音樂を聽きに行つた時、細君は木立の薄暗い處、香しい花壇を前にして、聽衆の雜沓からは遠く離れた其處此處の腰掛に、若い男女のひそ〳〵語り合つてゐるのを見て、細君は實に猥らしい厭なことをしてゐる人達だと云つた。其れに對して彼は例へ猥らな事であつたにした處が、花壇の花と云ふ花は盡く香しい薫りを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つ夏の夜、月よりも蒼いガスの光のかげに手を握り合つて、音樂を聽いてゐるのは美しいてはないか。世の中は何もさう道德からばかり判斷して仕舞はないて、情熱からも味ふ事を忘れてはならないと辯解した事があつたのも、總て來るべき破裂の動機であつた。

彼は一時ある銀行の雇人になつた事がある。無職業と云ふのはいかにも世間の聞えが惡い。名義だけでもいゝから何處へか勤めに出てくれと細君がたつての勸めを退けかねたからである。彼は名望のある父の威光で、容易く勤め口を見付けたけれど、もと〳〵自ら進んでやつた事でもないから、其れほど實直に其れほど規則正しく勤めはせず、內心では體よく向うから解雇して吳れゝばよい位に思つてゐた。ところが事實は全く相違して、其の年の末に經濟界一般の不振と共に、銀行內部に改革が行はれて、彼よりも最つも勤勉で且つ生計に苦しんで居る幾多の社員が解雇されたにも係らず、彼は無事で而も等級が昇進した。彼は自ら正義の如何を疑つた。自個の存在を心疚しく思つた。銀行の頭取と大藏省の官吏てあつた自分の父との關係を不快に感じた。彼は一度び遠かつた花柳界に意識して再び近き、そして離婚を斷行すると同時に銀行をも辭職してしまつた。

二

緣側の障子に薄赤い燈火の光が映つた。燈火の光は引開けたまゝの障子の間から長く流れて、緣に近い植込の葉裏の一枚々々を斜めに照すと、露にしめつた苔と落葉の冷い土の上に橫はる黑い濃い木の影から更にまた他の影が重り生じて、小暗い夜の庭面は燈火のない時よりも却つて一段と暗く淋しくなつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たやうに感じられた。彼は月の光も夜の空の光も達かない遠くの深い木立の間と、障子に映るしめやかな燈火の色とを何心もなく見較べると、あの光のかげ、あの屋根の下に生きてゐた此の年月の自分の生涯が、まるで他人のもの丶やうに冷靜に覗ひ知られるやうな心持がした。それは何とも云へぬほど苦味く又沈痛てある。恐れ憚るやうに庭下駄の足音も靜にそッと座敷に上つた。

いつ見ても變りのない、飽き々々した八疊の間である、父が死んで弟が母をつれて地方へ行つてしまつた後、屋敷中は一度も手入れをしないので、去年の暴風から折々に雨漏りのする其の汚點が床の間の壁の上に殘されてゐる。掛物はもうかけてない。水をやらなかつた爲めに楓の盆栽が紅葉を待たずに枯れかゝつてゐる。煙草盆と古びた坐蒲團を傍にして、大きな紫檀の机の上には徒に思想の苦悶を敎へた書物と、空しく過去の夢を思出させる手紙の殼と日記の斷片とが、亂雜に置かれてある。彼はての机を避けるやうにして、離れた床の間の柱に力なく背を寄せかけて坐つた。再び庭の方を眺めると、夜の空に黑い樹木がその影を聳かしてゐて、水蒸氣に包まれた淡い月の光が古池の水の面を氣味惡くひからして居る。蟲の聲が哀れに細く、暗くて見えない地面から聞える。

自分からも强ひて退けて、今では友達と云ふものは一人もない身の上をよく知つてゐながら、彼はふいと訪ねて來てくれる人でもあつたらばと思つた。例へあつたにした處が、夜になつてこんな遠い場末まで來るものゝあらう筈がない。屋敷は上野から根岸から入谷から、猶も遠い金杉である。近所には古寺が多い。田圃はずッと北豐島郡から荒川の緣まで續いてゐる。更けて行く夜の沈默は人の肩を押える

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かと思はれるほどで、風に誘はれる落葉の軒を掠める響がどうかするほど強く明かに聞き取れる事がある。夜の都會を出て北の方へ走り去る凄じい最終列車の響も絶え果てゝしまふと、彼はいよいよ靜まり行く深い寂寞の中に、夜が更ければ更けるほど却つて底深く響き出す遠い車の音を耳にした收穫の後の打捨てたまゝの田甫を越して、埋立地の狹い往來をば夜遊びの人達が人力車を吉原の遊廓に走らせる響である。

毎夜彼はこの響を廢宅の柱にもたれて聽き澄す事を愛した。この響は無限の空想を更け渡る燈火の下に誘ひ出すからである。彼は遊廓をば美しい詩の世界だと感じてゐる。遊廓のみではない、世のあらゆる罪惡、人間のあらゆる弱點も美しい詩であるとしか思ふ事が出來ない。詩の生命は惡であるか惡の生命は詩であるかと疑ふ事さへ度々であつた。貞操の妻と慈愛の親とが眠つて居る時を覗つて、不正の戀に捉はれた若い人達が悔恨の涙に暮れながらも拒み難い力にひかれて暗黑の夜を走り、彼處には人工の晝間が造り出されてある特別の世界に彷徨つて來て、粉飾と虚僞との間に瞬時の欺かれたる夢に醉ふ。詩でなくて何であらう。

彼は盜賊や委托金の費消者などをも法律や道德が見るやうには見て居ない。忠兵衞を書いた近松、鼠小僧を書いた默阿彌のやうに天下の罪人を物哀れに又勇ましく美しく見てゐる。と云つて何も積極的に惡を皷吹するのではない。唯だ惡德が産んで呉れる悲哀を喜ぶのだ。この點に於いてのみ彼は罪を罰し惡を憎む道德の存在に感謝してゐる。人生に嚴格な道德がなかつたなら、其の半面の惡德、其れに對する同情

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

悲哀、パラドックスの興味と云ふものは全然産れて來ないからである。彼が十年一日の如くに花柳界に出入する元氣があつたのも、つまり花柳界は不正暗黑の巷である事を熟知してゐたからで、されば若し世間が放蕩者を以て忠臣孝子の如く賞美するものであつたなら、彼は邸宅を人手に渡してまでも其の賞讃の聲を聞かうとはしなかつたであらう。正等なる妻女の僞善的虛榮心、公明なる社會の欺僞的活動に對する義憤は、彼をして最初から不正暗黑として知られた他の一方に馳せ赴かした唯一の力であつたので、つまり彼は眞白だと稱する壁の上に汚いさまざまな汚點を見るよりも、投捨てられた襤褸の片に美しい繡取りの殘りを發見して喜ぶのだ。正義の宮殿にも往々にして鳥や鼠の糞が落ちて居ると同じく、惡德の谷底には美しい人情の花と香しい涙の果實が却て澤山に摘み集められる……。

どうしたであらう。あの力彌は。と彼は考へ出した。その年の秋の夜更、吉原の引手茶屋の二階で内俄や女中の二三人と俄の催しを見た後の雜談に醉後の時間を費してゐた時、彼の女は神田祭へ出た手古舞の姿のまゝでばたばたと威勢よく梯子段を上つて來た。女中の一人が絕えず燭臺の蠟燭を剪りながら一昨年の俄の時には「落人」へ出た藝者の何子が淸元の上調子を彈いた男と出來合つて眞正の落人になつたと話して居た處なので、ついそれに誘出されて彼の女もまた語るともなく其の初戀の話を聞かしてくれた事があつた。まだ藝者などにならぬ前、立派な商家の娘であつた時分に踊のおさらひへ行つて狐忠信を踊つた歸り道、嘗てから愛してゐた店の若いものと鬘下地に結つたまゝの姿で後先の考へもなく駈落ちしたと云ふ。稚い調子で話す而も色彩の强いこの逸話は、「俄」の雜沓の靜つた後の疲れた夜半の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心持と合致して、如何に深く彼の心を醉はしたであらう。力彌は其の夜から久しい間、彼の戀人であつた。

　彼はいつでも其の夜の情調と其の夜の光景とを殆ど生涯に二度と會ひがたいほど美しいものであつたと思つて居る。場所は彼が何れほど繰返して詩化しても猶飽きる事を知らない歡樂の巷の、而も其の騷ぎと狂ひとが絶頂に達して却つて一種身に迫る寂しさを生じた時、踊の假裝をした人が、歌舞の世界から突然拔出して來て、現實界に起つた戀の物語をする。技巧の天地と自然の人生とが妙に縺れからんで更に一種特別の世界が現出された。彼はこの洗練の極に達した技巧と形式の世界に這入つて、初めて人生の出來事に感動する事が出來るのであつた。

「阿波の鳴戸」の淨瑠璃があつて後、彼は街に彷徨ふ巡禮の小娘を哀れと思ふ。參詣の男女の雜沓と彩色の濃厚な形式の雄大な山門とを背景にして、初めて非人乞食の群に同情する事が出來る。其の後に彼が深く柳橋の藝者に迷つたのも、新唄の「紫」をどうかして家元の咽喉から出るやうに歌ひたいと夢中になつた結果、唄の節につい誘はれて浮氣ものになつた事があると語つた彼女の一夕話からであつた。彼が新興の明治時代のいかなる方面の社會にも興味を持つ事の出來ないのも、つまりは其の外形のあまりに粗雜で、趣味のあまりに陶冶されてゐない事が第一の原因であつた。この點からして彼は二十世紀的文明の激しい呪咀者であつて、賤民の泥靴で踏みにぢられた浮華の十八世紀と、水野越前守に打擊を受けた江戸時代の夢想家である。立木と花壇と噴水と彫刻とを幾何學的に排列させた路易王朝の庭園術と、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

燭臺の光に照して緋毛氈の上に、わざ〳〵植物を虐待して其の枝を採曲げて見せる石州流の活花と、或はかの支那婦人の纏足と西洋婦人のCorsetの如き、男子も猶粉黛を施した藤原時代と、額を削つて頭髪を調へた徳川時代の如きは、彼が眞實文明の極致と信ずる處であつた。

いかに彼は江戸の浮世繪に現れた懶き衣服の曲線と、Préraphaëlismeの疲れたる人物の姿態とを愛したてあらう。清朝の軟弱纎細なる香奩體の詩と、佛蘭西の幻覺的なるSymbolismeの詩とを愛したであらう。歴史を讀んでも時代の變遷、英雄の事業については、地震か火事のやうな偶然の出來事位にしか感動しなかつたけれど、例へば傾城の勝山とか、Madame Pompadeurとか云ふ一代の流行の誘起者に對しては、必ず特別な崇拜の念を催すのであつた。

十八世紀末の英吉利から起つたらしいDandysmeについて屢考へた事がある。彼の着てゐた藍色の胴衣が詩人Byronをして夜も眠られぬほど不快ならしめたと云ふかの洒落者Beau Brammelの生涯をば、彼はナポレオン大帝の其れよりも最つと悲壯に感じてゐる。英吉利の貴族のブランメルと云ふ人は馬鹿に華美な色の着物を着て、片眼鏡をかけ、嗅煙草をかぎながら貴族の宴席や庭苑を横行して歩いた伊達者であるが、妙にひねくれた性癖を持つてゐて、特更にHis Majestyからのinvitation.を拒絶して見たり、Prince of Walesを罵つて見たりするかと思ふと、自分あるが爲めに、意氣地のない年少の一貴族が失戀に沈んでゐるのを覗ひ知つて、自分の苦痛を犧牲にしてまで其の愛してゐる女を意氣地のない貴族にやつて了つたりする。然し富貴の榮華も忽ち滅びて、彼は巴里の木賃宿に身をかくし、當時陛下の招

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心持と合致して、如何に深く彼の心を醉はしたてあらう。力彌は其の夜から久しい間、彼の戀人てあつた。

彼はいつても其の夜の情調と其の夜の光景とを殆ど生涯に二度と會ひがたいほど美しいものてあつたと思つて居る。場所は彼が何れほど繰返して詩化しても猶飽きる事を知らない歡樂の巷の、而も其の騷ぎと狂ひとが絶頂に達して却つて一種身に迫る寂しさを生じた時、踊の假裝をした人が、歌舞の世界から突然拔出して來て、現實界に起つた戀の物語をする。枝巧の天地と自然の人生とが妙に縺れからんて更に一種特別の世界が現出された。彼はこの洗練の極に達した技巧と形式の世界に這入つて、初めて人生の出來事に感動する事が出來るのてあつた。

「阿波の鳴戸」の淨瑠璃があつて後、彼は街に彷徨ふ巡禮の小娘を哀れと思ふ。參詣の男女の雜沓と彩色の濃厚な形式の雄大な山門とを背景にして、初めて非人乞食の群に同情する事が出來る。其の後に彼が深く柳橋の藝者に迷つたのも、新唄の「紫」をどうかして家元の咽喉から出るやうに歌ひたいと夢中になつた結果、唄の節につい誘はれて浮氣ものになつた事があると語つた彼女の一夕話からてあつた。彼が新興の明治時代のいかなる方面の社會にも興味を持つ事の出來ないのも、つまりは其の外形のあまりに粗雜て、趣味のあまりに陶冶されてゐない事が第一の原因てあつた。この點からして彼は二十世紀的文明の激しい呪咀者てあつて、賤民の泥靴て踏みにぢられた浮華の十八世紀と、水野越前守に打擊を受けた江戸時代の夢想家てある。立木と花壇と噴水と彫刻とを幾何學的に排列させた路易王朝の庭園術と、

燭臺の光に照して緋毛氈の上に、わざ〳〵植物を虐待して其の枝を拗曲げて見せる石州流の活花と、或はかの支那婦人の纏足と西洋婦人の(corset の如き、男子も紛粉黛を施した藤原時代と、額を削つて頭髮を調へた德川時代の如きは、彼が眞實文明の極致と信ずる處であつた。

いかに彼は江戸の浮世繪に現れた懶き衣服の曲線と、Préraphaélisme の疲れたる人物の姿態とを愛したであらう。清朝の軟弱纖細なる香奩體の詩と、佛蘭西の幻覺的なる Symbolisme の詩とを愛したであらう。歴史を讀んでも時代の變遷、英雄の事業については、地震か火事のやうな偶然の出來事位にしか感動しなかつたけれど、例へば傾城の勝山とか、Madame Pompadeur とか云ふ一代の流行の誘起者に對しては、必ず特別な崇拜の念を催すのであつた。

十八世紀末の英吉利から起つたらしい Dandysme について屢考へた事がある。彼の着てゐた藍色の胴衣が詩人 Byron をして夜も眠られぬほど不快ならしめたと云ふかの洒落者 Beau Brummel の生涯をば、彼はナポレオン大帝の其れよりも最つと悲壯に感じてゐる。英吉利の貴族のブランメルと云ふ人は馬鹿に華美な色の着物を着て、片眼鏡をかけ、嗅煙草をかぎながら貴族の宴席や庭苑を横行して歩いた伊達者であるが、妙にひねくれた性癖を持つてゐて、特更に His Majesty からの invitation. を拒絶して見たり、Prince of Wales を罵つて見たりするかと思ふと、自分あるが爲めに、意氣地のない年少の一貴族が失戀に沈んでゐるのを覗ひ知つて、自分の苦痛を犠牲にしてまで其の愛してゐる女を意氣地のない貴族にやつて了つたりする。然し富貴の榮華も忽ち滅びて、彼は巴里の木賃宿に身をかくし、當時陛下の招

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聘を拒絶した其の氣取つた語を繰返しながら、貧と病の手に死んでしまつた。曾ては大門を閉ぢさせたかの紀文大盡が晩年に至つては純金の茶碗に其の日の糧を請うて歩いたと同じやうな一種の奇骨と氣慨をば、彼は宗教に對する如き無限の權威を托して此れに信賴して居るのであつた。

其れ故、彼は今その身の破滅を目撃する場合になつてゐても、決して後悔する事はなかつた。物質上の恐怖はあつたにしても思想上の疑問は起らなかつた。花は何故に散るか、夢は何故に覺めるかと云ふやうな詩的哀傷の情に打沈められるばかりである。

更によく心を澄して、彼は再び遠い車の轟きに耳を傾けた。波浪の起伏するやうに弱くなつたり強くなつたりして堪えず續いてゐる車の響はその、低く弱く沈んで行く折々に、突然起る庭の樹木の戰ぎに遮られる事がある。すると廣い廢宅の欄間の障子ががたり／＼と動く音を立てたが、然し彼は夜の庭に夜の風の吹き起つた爲めだと云ふ氣はしないで、聲なき月光の中に立ち竦む樹木の枯れた枝々が自然にかゝる悲愁の叫びを放つ、其れに對して家の障子も同じやうに獨てがたり／＼と動くのであるやうに思つた。肉體の知らない寒さをば彼は心の底に感じる、燒けたゞれた紅葉の最後の一片をも吹き拂つて仕舞ふ「冬」と云ふものゝ姿をあり／＼目に見る如く感じた。一度び掻消された車の轟きがまた高まる。冬の寒さ暗さ淋しさの中を行く夜遊びの人の車。あゝ「自然」はいかに穩で、冷て、沈着き拂つて、且つ公平なものであるか。それに反して「人情」はいかに暖く、騒しく、休みなきものであらう……。

三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空の青い、日の光の强い、空氣の乾いた小春日和の半日が、夕暮と共に突然襲ふ空氣の冷却と濕氣とに、特更濃くなる狹霧の中に暗くなつて行つた。西の方の空は今日に等しい明日の晴天を豫知させる烈しい夕照に染められてゐる中、その反對の方角の空は已に黃昏の淋しく寒げな光に滿されて蒼白く底深く透通るやうに輝つてゐる。早くも灯のついた一直線の大通りは狹霧の薄衣につゝまれて、一帶にぼつと紺鼠色に霞み渡つてゐた。屋根や建物の壁の角度に著しい色の濃淡が生じて、遠くの方は並木でも人でも車でも屋根でもが影のやうに薄く見えて、其の猶更遠い街のはづれは立續く兩側の建物の間が丁度深い谷の底でも覗くと同樣、塵埃と相混ずる水蒸氣が煤烟のやうに黑く暗く立迷つてやつと其の奥に灯の光だけを數へさせるばかりである。通行人は皆な急いで歩いて居ながら、電車の混雜や商店の戶口を飾る新しい灯の光や、又は己れと同じやうに急いで歩く他の人達を珍しさうに見遣つて行くものが多い。辻々の電車の乘換場には人が大勢列をなして立つてゐた。日曜日か祭日であつたのだらう。電車を待つて居る女は何れも外出の晴衣を着て居たし、幼い小供は田舍の休茶屋なぞでよく見る薄の穗で作つた木兎を持つて居たし、少しは醉つても居るらしい男連の中には熟つた赤い枝柿や野菊と楓を下げてゐるものもあつた。

彼は銀座の通りを一人でぶら〳〵新橋の方へ歩いた。尾張町の人込の間に何心もなく佇んで、そして見るともなく其の邊に立つて居る女達の姿を眺めた。それ〳〵の身分を示すそれ〳〵違つた姿から、然し彼は一般の風俗流行の今年は去年、去年は一昨年と段々に變つてゐた事を今更心付いたやうに嚴し〳

感じた。髮や前髮は大きくなつたかと思ふと又小く、緩くなつたかと思ふと又引詰まる。羽織の小紋は縞物となり、縞物は更に無地のいろ〳〵に絶えず定りなく動いて來た。それを回想すると此の意味もなく跡形もない馬鹿々々しい外形の變化は、彼が身に取つては直に此れまでの生涯の色ある歷史を語るに等しい。實に十年、彼は櫛簪から下駄の鼻緒の變遷までをつぶさに知り盡した身でありながら、もう數へる中に去つてしまふ今年の月日を名殘にして、續いて來るべき年からその先を見て行く事が出來ないのかと思ふと、彼は近頃になつて著しく目につくあの柔い綠の色の翡翠の玉と青貝の細具と、わざと光澤を消したやうな染色の羽織や紋の縫取りをばぢッと目を放さず目守らねばならなかつた。

屋敷は既に賣渡しの手續きを濟ましてあるので、今日にも明日にも身は新橋の停車場から都會を後にせねばならぬ場合になつて居るのである。父が死んだ時に其の遺產を三分して一を母親、他の一を弟が讓り受けた。弟は永く米國に遊學して果樹培栽と牧畜とを研究して歸つて來た一種の理想家であつて其の母と共に母の鄕里なる遠州の野に大きな家禽所を起して其處で平和な Puritanisme の家庭を作つてゐる。二人はこれまでに一度も物を爭つた事はないけれど、餘りに一致しない思想の相違から或時は互に敬遠主義を取つて音信不通になつてゐた事もあつた。然し弟の方は兄よりも先に親しく碎て來て、特にこの二三年は嘗てトルストイ伯に私淑すると稱して都門の生活を罵つたやうな論文的の手紙を全廢してしまつて、まるで違つた柔い穩な調子で、且つ小供らしく、兄さんも出來る事なら一日も早く東京の住居をよして一家昔の小供の時のやうに母の膝元に集つて正月のお雜煮を食べてくれるやうにと

書いて來るやうになつた。[redacted]の主人公を喜んで迎へたかの偕正のやうな弟の家の扉を叩くより外に仕方がない。弟と母とは自分を見て眞心から喜んでくれるに違ひない。弟の家には暖かい火と明い日光と青々した樹があるであらう。あゝ、然し其れが果して何であらう。彼は甞て見る英吉利風の曇つた空の下に聲もなく靜に廣る牧場の景色と、熟つた葡萄の葉かげに Nymphe の群が Faun に戯れる日のあたつた泉のさまとを思ひくらべた。北方の野に移り榮へた教と、南の海のほとりに其の名殘を止める教と何れが誠のものであらう。窓を閉して眠るべきか。青草の褥に蝶の飛ぶを眺むべきか……

日はすつかり暮れ果てた。湧起る燈火の殊更に明い寶石屋と唐物屋と呉服屋の前には人が大勢佇んでゐると、其の人込の中から目に立つ若い女を見やうが爲めに更に立止る人もあるらしい。並んだ柳の木蔭には毎夜の露店がそれ〳〵の品物を並べ始める。廣告の樂隊と電車の響のかしましい中に天麩羅屋と洋食屋の油の臭ひがぷん〳〵立迷ふ。横町の薄暗く靜な通りから、この騒しい大通りを越して、更に向うの靜な薄暗い方へと藝者を載せた人力車がチン〳〵と鈴を鳴しながら、時々は五六臺もつゞいて行く。それを通りすがりに見返ると、着物を拔衣紋に着こなした頸筋のみが街の火影に眞白く浮き立つて、兎角の批評を許さぬ一刹那の印象として其の横顔が何とも云へぬ程に美しい。彼は同じ方向へと足を向けた。丁度空腹を感じる折からの晩餐を、どこぞ趣好に適つた川添ひの二階で準へたいと思つたからであ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。水邊の小樓と云ふ言葉はさま〲な情景を描き出させる。夜の都會の只中をば濁りに濁つて聲なく流れる濠渠の水が、動きもせずに映してゐる石垣の上や橋の袂の二階の火影。簾を卷いた其れ等の家の障子に映る人の影と、漏れて聞える三味線や唄の聲をば、こなたの岸の痩せ惱んだ柳のかげから、或は同じ二階の欄干から殊更露の多い肌寒い夜更に伺ひすます哀傷の情と、もし又晝間であるならば、春雨のしと〲と降る生暖い午過に、滿汐に漂ふ芥を啄まうとして、燕の群が頻りに飛び交ふ水の面にぎい〲と櫓の重い響を殘しながら動てゆく平い荷船の列を、詮方なげに眺め暮す倦みはてた心持と……彼は丁度徳川三百年の泰平に疲れて、不健全な、軟弱な、餘りにraffiné し過ぎた文藝を産出させた江戸の都會詩人と同じやうな心持て、今夜もまた築地の河岸通りにある唯ある家の、磨き込んだ細い格子戸をあけて這入つた。

今夜かぎりだ。もし今夜の終列車にも間に合ふものならば、旅館へ歸つて既に仕度のしてある革包を持つて出達しても差支はない。彼は昨日も一昨日もさう思へば思ふほど堪えられぬほど殘り惜しい氣がして、始めは出達する便宜上ほんの一晩宿るつもりの旅館にも、もう今日で五日ほどになつて仕舞つたのである。

六疊ほどの小座敷に少し夜も更けかけた時分、中庭を越した向うの二階て、小聲ながらも好い咽喉て端唄を唄つてゐる男があつた。女の彈く三絃は爪びきらしい。何心なくどう云ふお客だときいて見と、女中は聲を潛めて、世間の誰もが知つてゐる若手のある俳優の名を示した後、其の俳優が先頃何とか云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ老華族に落籍された以前の戀人と、忍び會ひの果敢さを唄つてゐるのだと答へた。すると今度始めて[redacted]ほんとに世の中はまゝにならないものねえと云つて、火鉢にかざす彼の白い手をばぢれツたさうに握つた。彼は美しい女の話す戀物語と云へば、それがどんな平凡な事であつても、一ツとして懐しく忘れがたく感じないものはないので、握られた手を其の儘に握り返して、

「お前も苦勞して居るね。聞かうぢやないか。お聞かせな。」

小登美は始めの中暫くは何の彼のと話をそらして居たけれど、表の河岸通りを彼の新内の流しが、太い一の糸の響の間々へと、上調子の殊更細い三の糸を響かせながら通り過ぎてしまふ時分になると、もう耐へきれぬかして、今度は此方から「お聞きなさいよ。何でも奢ります。」と云つて自分の爲めに銀行をしくじつて朝鮮へ行つたとか云ふ人の事を長々と話し出した。

「逢へないのかと思ふとそれアしみ〴〵逢ひたくなるものよ。どうせ何時か一度死ぬもんなら、死んでもいゝから逢ひたいと思ふわねえ。だけれどまゝにならないわ、お金で縛られてる身體なんですもの。」

彼は人間の慾望の限りがないにつけて、人間の生活が其れを滿足させるには、何故かくも適しないやうに出來て居るものかと思はざるを得ない。神田祭を踊つたあの美しい力彌は病氣で死んだ。紫の唄をよく歌つてくれた柳橋の小萬は他人の妻になつた。熱情は唯徒に燃えて、色もない記憶の灰を殘すばかり。人はやがて寂しく首を垂れて、まゝにならない浮世だと云ふ最後の言葉を繰返す爲めに、泣き、

笑ひ、怒り、また狂ふに過ぎない。夜は已に更けた。夜廻りの拍子木が聞え出した。燈火には油も枯れ、時來れば醒める酒の醉も盡きて、限られた人間の身體は限りのない歡樂を味ひ盡す力にもつかれて、重くなつた瞼をば又來べき明日まで厭でも閉さなければならぬ時刻になつたのである。

「お宅までお送りしますわ。いゝでせう。」と小登美が云つた。

二人一しよに外へ出ると夜は靜に蒼く煙つてゐて、風のない沈んだ空氣の冷かな濕りが心持よく感じられる。處々の二階の障子に映る火影を殘して、已に寐靜つた裏通りの街は、板塀越の樹木と屋根と架橋の影が、柳の間に立つ蒼い瓦斯燈の光に、朦朧と霞み渡る蕭條な夜の畫面を作つて居た。Nocturne と云ふ題で近頃の巴里の詩人がよく歌ふ夜の色、夜の情調も此れであらう。彼は遠くない歌舞伎座の裏手の旅館にこの儘歸つて仕舞ふのを如何にも殘り惜しく思つた。も少し濠渠の眠つた水のほとりに添うて歩いて行きたい

「登美ちやん。お前の家はどこだ。あんまり好い景色だから、今度は僕の方が送つて行つて上げやう。寒かあるまいね。」

「いゝえ。」と云つて小登美は縋るやうに片手で男の腕につかまり、片手で取上げた褄をば帶留めの間にはさみ込んで、紙煙草をふかしながら歩いた。

時々其の邊の暗い横町から出て、また向うの暗い燈火の達かない方へと行つて仕舞ふ車の上からは、座敷の歸りらしい藝者が見て見ぬやうに二人の連立つて歩く姿を見て行くらしく思はれた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうしたつて、いゝ仲としか見えないね。」

「結構、願つたり適つたりよ。ほゝゝゝほ。」

小登美の笑ふ聲がびつくりするほど透き通つて夜の中に響いた。派出所の赤い燈火の下に立つてゐる巡査は髭の中から猜疑の眼を光らした。摺れちがひになつた二人連の男が非常に厭はしいものでも見たやうに惡罵の聲を放つて過ぎたばかりか、遠くへ行つた向うから小石を取つて投げつけた。石は無論見當が外れて路傍の小犬を驚かしたに過ぎない。彼は先に小登美が笑つたよりも更に大きく高くあはゝゝと笑つて、二重廻の袖の下に小登美の小い身體を抱くやうに庇つて、

「馬鹿な奴等だなア。」

四

細い横町の何れも同じやうな格子戸づくりの家の戸口へ女を送り込んだ後、再び銀座通りへ引返して見ると最後の赤い灯をつけた電車が思ひの外大勢の乘客をのせて急いで馳せ過ぎた後、徒に明い大通には見渡すかぎり歩いて行く人の影は殆ど絶えて、一度閉めた商店の戸口を細目にあけて星の多い夜の空をば遣瀬なげに眺めて居る手代らしい若い男の姿の見られる位のものであつた。牛肉屋の新しい大戸は軒先の電燈の下に猶更眞白く、西洋料理屋の二階の廊下には食卓の上に椅子を倒さに載せたのが、引損ねたカーテンの硝子戸越に見える。道路の面は兩側の煉瓦道も同じやう、急に地ならしてもしたやうに平かに靜に廣く見えて、雨のやうに飛ぶ並木の柳の葉の一枚々々が、瓦斯や電燈の強い光の中に、時々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

笑ひ、怒り、また狂ふに過ぎない。夜は已に更けた。夜廻りの拍子木が聞え出した。燈火には油も枯れ、時來れば醒める酒の醉も盡きて、限ぎられた人間の身體は限りのない歡樂を味ひ盡す力にもつかれて、重くなつた瞼をば又來べき明日まで厭でも閉さなければならぬ時刻になつたのである。

「お宅までお送りしますわ。いゝてせう。」と小登美が云つた。

二人一しよに外へ出ると夜は靜に蒼く煙つてゐて、風のない沈んだ空氣の冷かな濕りが心持よく感じられる。處々の二階の障子に映る火影を殘して、已に寐靜つた裏通りの街は、板塀越の樹木と屋根と架橋の影が、柳の間に立つ蒼い瓦斯燈の光に、朦朧と霞み渡る蕭條な夜の畫面を作つて居た。Nocturne と云ふ題で近頃の巴里の詩人がよく歌ふ夜の色、夜の情調も此れてあらう。彼は遠くない歌舞伎座の裏手の旅館にこの儘歸つて仕舞ふのを如何にも殘り惜しく思つた。も少し溝渠の眠つた水のほとりに添うて歩いて行きたい……

「登美ちやん。お前の家はどこだ。あんまり好い景色だから、今度は僕の方が送つて行つて上げやう。寒かあるまいね。」

「いゝえ。」と云つて小登美は縋るやうに片手て男の腕につかまり、片手て取上げた褄をば帶留めの間にはさみ込んて、紙煙草をふかしながら歩いた。

時々其の邊の暗い横町から出て、また向うの暗い燈火の達かない方へと行つて仕舞ふ車の上からは、座敷の歸りらしい藝者が見て見ぬやうに二人の連立つて歩く姿を見て行くらしく思はれた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうしたつて、いゝ仲としか見えないわ
[redacted]

小登美の笑ふ聲がびつくりするほど透き通つて夜の中に響いた。派出所の赤い燈火の下に立つてゐる巡査は髯の中から猜疑の眼を光らした。擦れちがひになつた二人連の男が非常に厭はしいものでも見たやうに惡罵の聲を放つて過ぎたばかりか、遠くへ行つた向うから小石を取つて投げつけた。石は無論見當が外れて路傍の小犬を驚かしたに過ぎない。彼は先に小登美が笑つたよりも更に大きく高くあはゝゝゝと笑つて、二重廻の袖の下に小登美の小い身體を抱くやうに庇つて、

「馬鹿な奴等だなア。」

四

細い横町の何れも同じやうな格子戸づくりの家の戸口へ女を送り込んだ後、再び銀座通りへ引返して見ると最後の赤い灯をつけた電車が思ひの外大勢の乘客をのせて急いで馳せ過ぎた後、徒に明い大通には見渡すかぎり歩いて行く人の影は殆ど絶えて、一度閉めた商店の戸口を細目にあけて星の多い夜の空をば遣瀬なげに眺めて居る手代らしい若い男の姿の見られる位のものであつた。牛肉屋の新しい大戸は軒先の電燈の下に猶更眞白く、西洋料理屋の二階の廊下には食卓の上に椅子を倒さに載せたのが、引損ねたカーテンの硝子戸越に見える。道路の面は兩側の煉瓦道も同じやう、急に地ならしでもしたやうに平かに靜に廣く見えて、雨のやうに飛ぶ並木の柳の葉の一枚々々が、瓦斯や電燈の強い光の中に、時々

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は黄金の片の翻へるやうに見えた。

更け渡る街頭の夜半の風に、人知れず、行衛知れずに飛んで行く、あゝこの柳の落葉。彼は其れと同じ樣に、今は早やすつかり寐て仕舞つた都會の表面に、唯た一人起きて彷徨つてゐる人である。さう思ふと忽ち孤獨の寂しさ、明日の恐怖、昨日の追回とが潮のやうに胸の中に湧返つて來る。一瞬間前の出來事は凡て茫とした夢の如くに遠く離れてしまつて、唯た今別れたあの藝者、今夜始めて見た小登美がまるで久しい間の戀人であつたやうな氣がした。無暗にもう一度、一度でいゝから逢つて見たい。何故自分の宿つてゐる旅館まで無理にでも連れて行かうとはしなかつたのか、と思つたが直とまた、いや、幾度繰返して見ても同じやうな、どうせ末は別れる切れると云ふ浮世の戀であるならば、つまり今夜のやうに、ふいと逢つて、ふいと思設けず互の過去をしみ〴〵語り合つて、そして又ふいと別てしまう。機會が見ず知らずの他人と他人とを不意と結び付けて不意と又引離してしまう。これが一番情趣の深い夢であるのだらう、然しそれにしても餘りにあつけ無かつた。何か紀念になるものでも遣り取りして置けばよかつたのに……と云ふ氣もした。

今方二人で歩いて來た横町を木挽町の方へ曲らうと思つて、出雲橋の手前まで來た。更け渡る溝渠の眺めはます〳〵靜に優しく見えて、沈みきつた水の面には、寐靜る兩側の人家の屋根の倒影と共に、若し覗いたなら自分の姿も見られるやうに思はれたので、彼は橋の上に立止つて欄干に身をよせかけた。右側の眺望は近く岸の石垣の上に立ちつゞく人家の列に限られてゐるが、左側は已に戸口をしめた待合

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らしい二階家つゞきを後にして往來が溝渠と共に長く延びて、その盡きる丁度其正面に新橋停車場が[illegible]旅館の灯と[illegible]汽船の大きな廣告か[illegible]船の夜泊りする水の上に其の[illegible]反映を漂はしてゐる。最終の列車も已に去り、又已に着した後と見えて階段の前から堀割の岸まで廣がる廣場には、平素込み合ふ人力車の影は一ツもない。其れ故、建物の内部に青く澄んで海の如く漲り渡る燈火の色の中に、折々二人三人と他分驛夫か赤帽らしい人影の動いて見えるのが、天涯無限の旅情とも云ふべき、一種の鋭い哀愁を引起させる。

彼は今迄停車場と云ふものをこんなに遠くから、こんなにしみ〴〵と、まるで畫のやうに靜に見た事はなかつた。都會の出入口と自分なるものとを、こんなに明かに對峙させて見た事はなかつたのだ。あゝ、都會の出入口。その此方には燈火もある音樂もある、富貴、功名、罪惡もある。その彼方には林、畠、山、寒い冬の空が限りなくひろがつて居るのだ。彼は土地の上をば限り知れず匍つてゐる鐵の線路と、其れをつたはつて走つて行く汽車と云ふものは實に恐しいものだと思つた。縛られて悲しさうに鳴く家畜や、默つてごろ〳〵して居る荷物と同じやうに、汽車はいかに別れまいとする戀人をも、一瞬間の中に百里も二百里も引離してしまうてはないか。

彼は今日までに、雨の降る夕、日の照る朝。幾度かこの同じ停車場に送つたり迎へたりした人々の、或は祝すべく或は痛むべき運命のさま〴〵を思返した。そして明日の朝か晩か、或はまた其の次の日か、自分ながらも知る事の出來ない――然し極く近い將來に、夜寒に冷るあの石の階段をば、見送つてく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る人もなくて、悄然として昇つて行くべき自分の後姿を、彼は他人の姿のやうに心の中に描き出して見た。（四十二年十一月稿）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



無爲

小栗風葉

一

××寺の和尚は、ガランとした庫裏の臺所の虫の食つた大きな角火鉢に兩肘を突いて、傍て日向ぼつこを爲ながらコクコク居睡りを爲しゐる小僧を、默つて見て居た。小僧は今年十三になる。長い睫毛を伏せて薄目に映つた佛顏が、發育の盛な此年頃の子供のやうでも無い、何處か脾弱に見えた。

頭腦の好い小僧だ、行々は中學校へでも入れたらと言つた先住の辭を、和尚は思ひ出したのである。

「だが、體が這麼ぢや、途中て入佛事にならうも知れんて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

當分まあ恁うして置いて、其中に……と云つとる中には、俺も最うこれ、何時何時目を瞑るんだか……」と那樣事も思つた。

ボーと云ふ響の鈍い汽笛が濱の方から聞えた。和尚は可睡齋の火除のお札の載つた眞黑な神棚の下の、硝子の曇つた掛時計を見擧げた。

「十時半……と。汽船が着いたな。妙光、これ、お主門まで出て見ろ、誰か汽船から揚つて來りや爲んか。」

小僧は不意に起されて、眩しさうな目をして日當りの庭へ出た。山門の前は細い汐入の小川になつて居る。其所の石橋に立つて、汽船がボーと又汽笛を鳴らして出るまで、濱の方をボンヤリ眺めて居た。

「誰も見えりや爲んな。」

「彌張な、何うした事だ、荷物ばかり早うから寄來して置いて、先月の末に來ると云ふのが最う……今日は新は幾日だ。」

和尚は火鉢の横の古い旅簞笥の上の綴暦を取揚げて、老眼鏡を懸けた。而して幾度も指を折つて見た。

細長い半島の突端の、三方小山て圍まれた此の小村では、海を渡つて來る小蒸汽船が唯一の交通機關である。郵便も旅客も皆其便を藉りるのであつた。汽船の着く度び、和尚は毎日恁うして約束の人を待つた。寒い冬の間病氣の養生に、寺の座敷を間借したいと言ひ寄來したのは最う一月も前た。海の向うの市で、中學の教師と云ふ事だが、和尚は一面識も無いのである。始めから話が無ければ左に右く、來

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ると云ふ者が何時までも來ないと、其れのみ氣に懸つて心待ちに待たれた。

十一の年に出家して、五十三の今日まで寂しい僧侶の生活には慣らされた。今から三四年前、五里ばかり奥の山寺から這地へ轉住した其當時、檀家の世話で梵妻のやうな者も暫く持つて見た。慾が深くて、小僧に物惜みをして、身贔負で口彌喧しい。女の連子があつて、それがピー〳〵能く泣いて煩かつた。和尚は一度で懲々して生家へ返した。然し女手の無い不自由は左に右く、小僧と唯二人暮しは有繫に寂しかつた。寺も廣過ぎる。七間半の本堂に續いて位牌堂、納所に庫裏、庫裏の方丈から中庭の廊下を渡つて、別棟の書院もある。年中雨戸を閉切つたまゝ使はぬ間なぞもあつた。

先へ送つて寄來した荷物と云ふのは、書院へ行く其廊下に積んである。大一番の柳行李に茶皮の鞄、雨傘と一所に足駄が二足、荷作りの細引に結び付けてあつた。一足は派手な牡丹色の鼻緒の女穿きである。外に最う一つ黑塗りの妙な恰好をした箱――三尺ばかりのボートを伏せたやうな中高の被蓋が、眞鍮の金具で留めてある。金具の色も褪め、塗りも手擦れて、可なり持ち古したものらしい。提げて見ると案外輕い。何の容器だか和尚には分らなかつた。

和尚は是等の荷物を見て、荷物の主を色々に想像して見た。

二

十一月の取付、格別に其の日は能く凪いだ朝であつた。毎もの汽船が着くと間も無く、三十餘りの背

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の高い二重外套を着た男と、二十二三の束髪の女とが山門を入つて來た。和尚は直ぐ其れと知つた。ボンヤリ立つて見てゐる小僧を訶つて、急いで座布團を出させた。

「始めまして。私が澤て……」と其男が丁寧に挨拶するのを、和尚は手を掉つて制した。

「那樣お固い挨拶なんか、まあ〳〵。私は恁ういふ粗懶坊主だて、唯何うか心易うな。其方は御家内で――これは能うこそ。」と碎けた調子で言つた。

和尚の毒の無い薄痘痕の赭顏を見て、澤は直ぐ、氣の置けない好人物らしいと思つた。人の厭がる病人の神經質な頭には、それが何より嬉しかつた。和尚は和尚て、先方が若い教育のある都人士と云ふので、始めは馬鹿に爲れまいと用心して喋つて居た。段々談して見たが那樣樣子も無い、何所か弱々しい所さへ見えた。病氣の所爲だらうと思ふと、和尚は寧ろ氣の毒になつた。

若い細君は、葡萄懸つた薄手のショールを膝の上に載せて、突當りの煤び切つた四枚立ての紙門をマジ〳〵眺めて居る。普通と違つた只廣い古い家造が、何だか坐つて居ても溫味の通はぬやうに底冷たく感じた。曠やかな秋の日の射込んだ所だけ際立つて明るく、周圍は却て暗かつた。

「妙光、俺の寢床を揚げて置いて、書院の戸を開けて來い。」と和尚が命じた。

澤夫婦が借りやうと云ふのは、裏の其書院である。小僧は直ぐ立つて行つた。突當りの紙門を開けると更紗の布團が敷いてあるのが見えた。最う午に近い、今頃まで寢床の取つてあるのを細君は異樣に思つたが、始終其れは敷放してある事が後に分つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

書院は十疊二間に長五疊が附いて、廊下を折廻した。小僧が雨に曝らされた隙間だらけの雨戸をガタピシ開けると、茂り放題に茂つた庭木が軒へ覆冠つた。西の開いた南向きの座敷だが、木立の深いのと、本堂や庫裏の大きな屋根とて日光を遮られて、二間とも薄暗くガランとして居た。長五疊だけは幾らか明るい。廂も淺く、四枚の半障子の腰窓は、狹い室に光線は充分だが、北向きて日が當りさうも無い。

何年にも掃除した事が無いのかと思はれた。塗框の剝げた障子の棧でも、緣の擦れた疊の敷合せでも、埃が綿屑のやうに溜つて居る。細君は頭を手拭て包んで掃出したが、掃いても掃いても奇麗にはならなかつた。ホツとして緣側に立つと、庭に溜つた落葉や枯葉のジメ〳〵腐つた匂が鼻を刺した。深い森の中て見るやうな鬼齒朶や石葦が茂つて居る。

「まあ、能く荒れて――陰氣ねえ。」と誰に言ふとも無く小聲て言つた。

而して這麼所に長い冬の間を寂しく暮すのかと思ふと、細君は心細かつた。

澤は長五疊て、行李や鞄の荷造を解いて居たが、陰氣と云ふ事は自分も同感だつた。

「然し宿屋なぞと違つて、居心の好いのが何よりだ。座敷が離れてゐて氣兼ねが要らんし、それに和尚も好人物らしいし……」と首に卷いたハンケチを氣にして直しながら、「第一氣候が好い、餘程暖な土地だ。」と附け加へた。

荷物の整理やら夕飯の支度やら、小僧に案内を聞いて買物に出るやら、其間は細君も忙しさに氣が紛れて居た。然し日も暮れて、飯も濟まして、後は爲草も無く默然と坐つて居ると、つい意氣地無く淚ぐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まれた。今まで住んだ市の夜深よりも靜かだ、シーンとして沈んで行くやうに寂しい。夫婦は所在無くて宵から寐た。狹い長五疊に故と窮屈を忍んで、枕元のランプを出來るだけ明るくした。久しい間人氣の絶えた空室の古い壁や疊が、冷々と體を通すやうで睡就かれない。廣い眞暗な次の二間も、何だか後見られるやうで氣になつた。

三

三日四日と住み慣れて見ると、幾らか心も落着いた。掃除をする毎に段々書院の埃も出なくなる。寂しいとは思つても陰氣なとは感じなくなつた。位牌堂の裏に積み重ねた塔婆や古位牌の雨曝しになつたのも、見慣れゝば氣にも成らなかつた。竈の下の焚付が無い時には、境內の橫の丘へ上つて、細君自身て墓場の花殼を集めて來るやうになつた。墓場には白い骨の曝れたのが時々目に付いた。

「奧さん、昨夜は何うだつたな、彌張寂しくて睡られんかな。」

庫裏の裏の桑畑を前に、和尚は顏を洗ひながら聞いた。臺所の水口を開けて、其所に井戸屋形がある。摘み殘しの葉のカサ／＼になつた桑畑は、高い屋根の蔭になつて朝露に濡れた。虫も啼いて居る。村を圍んだ小山の頂の所々に、海の方から來る朝日の影が活々と射し初めた。和尚は每朝薄暗い中に寐床を出て、寐衣の上に行成り茶の眞岡の法衣を引被けると、直ぐ本堂のお勤めに懸かる。それを濟ましてから、漸と此時刻に手水を使ふのが例であつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いゝえ、大分最う慣れましたと見えまして、能く睡みます事！今朝なんぞ和尚さんのお經て、吃驚して目を覺ましたやうな譯てすもの。」と細君は笑つて答へた。

寐起きのまゝの細帶に白い前垂を懸けて、竈の下を焚付けてゐる。開け放つた水口から冷たい朝風が吹込んて、廣い臺所は烟が立籠めた。

「お經が邪魔になりや爲んかな。お前さん達が目を覺まさんやうに、那れても成るたけ加減するやうに爲とるだが、一體私は、小僧の時から聲を一杯に張るやうに敎へられとるものだて、年を取つても彌張其癖があつてな。」

「いゝえ、那樣御斟酌なすつちや困りますわ。内の澤など本當に寐坊てすから、甚麼高い聲て爲すつても平氣てすの。」

「今朝は未だお睡みか。」

「えゝ、まだ大鼾てすよ。」

「睡れるのは結構さ。」と和尚は水て洗つた赭顔をテラ〳〵させながら、「一體澤さんは何所がお惡いのだな、一向病氣らしい樣子もお見えんぢや無いか。」

「那れて彌張好けないんてすつて。何てすか最う、此春頃からブラ〳〵してましてね、何時までも瞭りしないて困りますの。」

「私等又素人目には、奥さんの方が却つて顔色なぞお惡いやうだ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「那樣に見えますか。」と細君は青白い頬を塗つて、爲方無さゝうに寂しく笑つた。

和尚が然う見たのも無理は無い。細君の顔色は全く好くなつた。そればかりて無く、食事も細い、體の持扱ひも太儀さうて、澤よりも餘程病人らしいのである。

四

毎日好く晴れた秋日和が續いた。寺の境内には返り花が咲いて、沖では中鰤や鰆が捌け口に困るほど漁れた。漁立てのピチ〳〵撥ねてゐるのを、檀家の漁師が能く寺へ提げて來た。和尚は其度び細君に賴んて拵へて貰つて、

「さあ、可いだけお取りた。這麽にあつても小僧と二人て腐らして了ふて、お前さん達にも食べて貰はにや困る。」と然う言つては容器ごと薦めた。

深切を無にするのも惡い。澤は本の印ほど貰つて置いて、後は細君に命じて悉くり返させるやうにした。而して必ず返禮を怠らなかつた。和尚や、和尚の所へ出入りする村の人々と近しくするのが、澤には累はしいのてある。這方の朝飯の濟んだ頃、茶を淹れたからと小僧に言はせて、能く和尚が呼びに寄來す。爲方無しに出掛けては行くが、年輩も考へも違つた和尚達の、愚にも付かぬ世間話に調子を合せるのが苦痛てならなかつた。

風の無い暖な日は、澤は成るたけ外へ出るやうに努めた。後の小山へ登つて、末枯れ懸つた軟い下草

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の上に臥そべりながら、海から來るオゾンに富んだ空氣を、鼠の嗅ぐやうに貪り吸つた。目の下の疎な漁村の古い家並は、晝も睡つたやうに閉れ返つて居る。小學生徒の揃つた聲が折々聞える。秋の日を湛へた紺碧の輝く海の果には、向うの國が青く浮んで、暗く入込んだ所へ帆影が隱れて行く。其所には湊がある。市がある。澤は活きた社會から遙かに遠ざけられたやうな氣がして、自分の病身を沁々傷んだ。

濱邊へ出ると、其所には有繋に人影が毎も動いて居た。然し行逢ふほどの村人は、何れも異邦人を迎へるやうな目をしてヂロ／＼見るのが厭はしい。澤は成可く人氣の無い渚や磯端を拾ひ歩いて、藻や海草の強いヨヂユームの氣を嗅いだ。日が山の向うへ落ちて、海の上を薄り夕霧が抹くと、沖から歸つて來る漁船で一頻り濱は賑つた。潮氣を含んだ磯臭い夕暮のシットリした空氣の中に、船を迎ひに出た女子供の樂しさうな聲が入亂れて、其所にも生活の努力に酬ゐられる滿足と慰藉とが見られる。那樣時に澤は獨り寂しい思を抱いては、スゴ／＼と寺へ歸るのであつた。

「何うせ最う虫の食つた體だ。先は積れて居る。今の中に貪れるだけ生を貪るんだ！」と然う云つた氣にもなる。何か慫う鴉片のやうな物でも飲んで、不思議な快樂に醉つて見たい。

求めるものゝ有るやうな苛々した心持で寺へ歸ると、裏庫は開け放したまゝ明も未だ點らぬ。飯も濟まして、入相の鐘も撞いて、最う寢るより外に所在の無い和尚と小僧は、暗い火鉢の前へック然と坐つた。火鉢の炭火が二人の顏だけ赤く照した。澤は臺所へ廻つて、其所から上つて、眞暗な幾間かを足探りに通つて書院へ來た。書院の座敷二間は毎もの如く閉め切つた。長五疊の障子だけポッと明が射して、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細君の影法師がボンヤリ映つて居る。

「何て不景氣な明だ！」澤は行成りラムプの心をグイと拈つた。

「御飯を上りますか。」と細君は聞いた。慿れてゐた火鉢から漸と體を起して、懷の兩手を出す。

「何だ其恰好は。」と苦り切つた。「全くの事が、お前の其不景氣な顔を見ると、厭になつて飯なんか食ふ氣になれんよ。ねえ、おい、若い者なら若い者らしく、些と白粉でも塗つて活潑に行つてくれ。人に見せるばかりが身飾みぢやあるまい。夫の前も少しは身奇麗にしたら何うだ。」

「那樣事を仰有つても、私、體が惡いんですもの。」

「嘘を吐け。家へ歸りたいものだから那樣口實作るんだらう。薄情な奴だ。」

「いゝえ、全く體が變なんです。私、此間中から然うぢや無いかと思つてたんですが、何うも彌張……赤坊でも出來たんぢや無いかと思ひますわ。」と細君は少し赤い顔をした。

澤はハッとした。自分の病症は未だ瞭りと細君にも明して無いが、醫者には明らかに宣告されて居る。這地へ轉地する事に決めたのも其爲めだ。若し果して妊娠だとすれば、生れた其子の運命は悲慘なものである。澤は遠廻しに、下劑でも飲んで試して見たらと勸めた。

「那樣物を飲んで、若し赤坊だつたら毒ですもの。」と細君は肯かなかつた。

が、其後何かの拍子に細君の袂から下劑の賣藥包が出た。澤は見て見ぬ振をして默つて居た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三

毎月齋の廿四日が地藏の齋日てあつた。寺は禪宗曹洞派だが、本尊は延命地藏である。其日は明るい中から風呂を立てゝ、甘酒を湧かして、小僧を對手に和尚は忙しかつた。夕方から本堂には希らしく燈明が上つて、彩色をした奉納提燈が點つて、講中の年寄と小供がゾロ／＼詰め懸けた。皆が風呂へ入つて温まつて、熱い甘酒をフー／＼云つて旨さうに啜つた。

書院の澤の所へも、湯桶に入れて小僧が持つて來た。

甘酒も啜るだけ啜つて了ふと、一同は本堂の佛前の內陣にグルリと半圓を輪作つて和尚の導師て地藏歎偈を合唱するのてある。

南無地藏願王尊

と和尚が鈴て節を取つて唱ふと、一同も其れに附いて覺束無い節を合せた。

釋迦文佛遺付屬
出現惡世人禪定
地獄無間代受苦
餓鬼飢渇皆飽滿
畜生被毛即解脫
修羅調伏我慢幢

人間濟度生死海
天上遠離五衰難
一稱一禮證功德
今世後世大安樂

以上の文句の一節が切れる毎に、小僧がガーンと一つ磬を鳴らす。又南無地藏と繰返しては次の一節に移る。チリヽンヽくと云ふ振鈴と磬子の音と、而して年寄達の澤の無い聲で綴く唄ふ物哀れな節と、恁うして秋の夜は靜かに深けて行くのであつた。外には最う木枯めいた風がザワくヽ梢を騷がした。

「何うだ、お前もバイオリンでも彈かんか。」澤は本堂の合唱を聞きながら、細君に言つた。

「向うの邪魔になるてせう。」

「何管ふものか。信心の邪魔でも爲るならだが、那りや年寄達の遊びだもの。湯に入つて甘酒を飲んで好い氣持になつて一晩那して唄ひ深すのだ。」

それから急に思付いて、澤はビールを一本買ひにやつた。細君は病氣に障るからと留めて見たが、肯かなかつた。提燈を點けて二丁ばかり先の飲食店まで買ひに行く途中、町の外れの眞黑な海が星明りにチラくヽ光つて物凄く見えた。浪の音も聞える。走るやうにして急いで歸ると、本堂の障子の明るい中て、鈴の拍子に附いて多勢の唄ふのが、成程樂しさうに思はれた。

細君は氣を利かして、ビールは小罎を二本にした。澤は渇と一本を空けて、最う赤くなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さあ、バイオリンを彈いた。」と細君に强ひる。

細君は進まぬ顔をして、それでも澁々樂器の容器を持出した。和尚が異樣に思つた此の黑塗の函はヴワイオリンであつた。細君は短い些つとした曲を三つばかり奏した。お役目のやうな氣の乘らぬ彈き方であつたが、それでも調子が昂んで來ると、細君の目は美しく輝いた。

地藏の講中が散會したのは九時過ぎであつた。ガラ／＼と本堂の戸を閉める音がして、暫くすると、和尚が書院へ還つて來た。

「澤さん、未だ起きてお居てか。」と廊下から聲を懸けながら、「南無地藏南無地藏て、お彌喧しかつたらう。宵から十時近くまでも慰らしい、此儘寢られりや爲んがな。今妙光に饂飩を取りにやつたが、お前さん達も一杯づゝ附合つて貰ふだ。」

和尚は手爐に自分の煙草火まで用意して來た。細君がヴワイオリンを片付けるのを見て、

「何て歇めるな、私が來たとて歇めんても可いぢや無いか。奥さん、私にも聞かせてお下れ。」

「いゝえ、駄目てす、駄目なんてす。」と細君は何うしても肯かなかつた。

其中に小僧が重さうに麵箱を提げて來た。饂飩はキシメンと云つて平打てある。澤夫婦も薦められて一杯づゝ食つたが、後は强ひられても手を出さなかつた。

「品が好いのか、それとも遠慮されるのか知らんが、這麼物の二杯や三杯、御君達も意氣地が無いな。さあ妙光、お主最う一杯喫くのだ、殘つても爲方が無い。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小僧が腹一杯だと言ふのを、和尚は譴るやうにして無理に又食はせた。而して後は悉皆自分で平らげた。幾らか意地にもなつたらしい。澤が新たにビールを拔いて薦めても、何うしても口を付けなかつた。尤も脚氣の氣味だとは言つて居た。

「奥さんの鳴物も、今夜は最う聞かせて貰へさうも無いし、どれ、妙光、行つて寢るかな。何だかお邪魔したやうでお氣毒だつた――ぢやお寢み。」と和尚は充らなさゝうに生欠をして立つた。

「何だか和尚さん、機嫌が惡かつたやうぢや有りませんか。」と後で細君が言ふと、

「和尚の氣に入るやうに然う單純には、我々都會の人間は出來ない。」と澤は苦笑した。

六

澤夫婦が來てから、寺へは色々の物賣りが出入りした。婆さんの魚屋、百姓片手間の八百屋、それから三四里先の町から岡持を持つて二日置きに來る牛肉屋もある。和尚も物珍らしさうに荷物を覗いては見るが、滅多に買はうとは爲なかつた。檀家からの貰ひ物で、小僧と二人の食ふには事を缺かない。それに均らし一日置き――何うかすると二軒も一所に佛事があつて、夕方から逮夜に招かれては齋に就いて來る。漁所だけに佛事も大方腥物で行る。

暖い小春のやうな日和が續いた後は、乾度西風が吹く。すると、近廻りの平板船が皆入つて來て、三日でも四日でも濱前に繋つて居る。日和角力と云つて、船乘の若い者達が手拭だの酒だのを景品に貰ひ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

集めて、砂濱で素人角力を取る。土地の明神へ奉納の意味で、大抵其れで日和が直るとしたものだ。然し直らぬ事も多い。那樣時には土地の漁師も休むし、船乘は上陸するし、狭い村の辻々に夜深まで淫な唄が聞える。而して運の好い旅藝人が毎夜のやうに大當りを占めた。

「何うだな、澤さん、今度來た浪花節が豪う巧いといふ評判だが、一晩何うだな。」と和尚が誘つた。

毎日の風で外へは出られず、澤も退屈し切つて居つた、浪花節では聞きに行く氣に成れなかつた。それでは留守を頼むと言つて、和尚は夕方から小僧と二人で出掛けた。澤夫婦といふ留守居が出來た所爲か、此節和尚は能く外出する。一日二日と寺を空けて、元の山寺へも遊びに行つた、隣村の花火も見に行つた。又近い中に、何所やら少し離れた所へ泊り懸けて行くやうな事も言つてゐる。

浪花節から歸つたのは十時前であつた。和尚は留守を頼んだ禮心に、蜜柑を十ばかり小僧に持たせて歸つた。

「澤さん、今歸つた。何うも留守を有難う、方々戸閉りまで爲て貰つてお世話だつたな。」と廊下で呼んで見たが返事がない。

障子に映つてゐた書院の火影はフッと消えた。和尚は蜜柑を提げたまゝ默つて引返して直ぐ方丈の寢床へ潛り込んだ。敷放しの寢床は冷り肌に心地惡い。幾度も寢返りをした。

翌朝和尚は寢過して、毎もの勤めの讀經も怠つて了つた。寢足らない顏をして、照つたり曇つたりする障子の日射をボンヤリ眺めながら、火鉢の前で一日生欠を爲い／＼暮した。逮夜も一軒あつたが、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れには小僧一人遣つた。和尚は、後て本堂の賽錢箱なぞヂアラ／＼調べて居たが、小僧が歸つて來ると、

「俺、明日××町までいつて來るてな、二三日留守を爲ろよ。」と出拔けに言ひ出した。

「這麽天氣にな？」と小僧は意外らしい。

「天氣が何だ、汽船だもの。」

其晩和尚は、澤夫婦にも留守を賴んだ。而して翌日十時半の汽船の入るのを待つて出掛けた。素頭に羅紗の角袖外套を端被つて、着物も琉球擬ひの絣てあつた。出掛ける時に小僧を呼んて、××町へ行つたと云ふ事は、村の者に喋らぬやうに口留めをした。

七

和尚の留守中は、寂しい寺が仍寂しかつた。朝々の勸行は無いし、夕方鐘を撞いて了ふと、小僧は明りの點かぬ中にガラ／＼戸閉りをして寢て了ふ。年の行かないのに、廣い庫裏て唯一人は心細からう。細君は可哀さうに思つて、留守の中だけ、自分達の寢る次の間へ寢床を持つて來さゝうと爲たが、澤が許さなつた。

「我々の居ない時は何う爲る？小僧は慣れてるから、お前なんかのやうに寂しがりは爲ん。」と然う言つたが、細君の僻を何う僻んだのか、「それとも、お前が可哀さうだと言ふなら、自分の寢床を那方へ持つて行つたら可からう。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まあ、何故那樣事を被仰るんですの？」と細君は呆れて夫の方へ顏を向けた。「私は偶と然う思つたから、寢床を持つて來させませうかつて、唯貴方に言つて見たゞけぢや有りませんか。」

「最う舍せ、寢床の問題なんか――聞き苦しい！」と言ふと、スポリと夜具を冠つて了つた。

「私の言ふ事は、何でも貴方は惡く取つて氣にお支へなさるものだから、私、申上げたい事があつても申されやしないわ。」

「ぢや、何か言ひたい事を言はずに居ると言ふのか。そりや氣毒だ――夫婦の間で。遠慮無く言ふが可い、何だ。」とムックリ頭を擧げた。

「でも……又惡くお取りなすつちや困りますよ。ね、可う御座んすか。」と念を押して置いて、細君は一度家へ歸してくれと頼んだ。

理由は體の異狀である。果して姙娠か、それとも病氣か、產婆なり醫者なりに慥めて貰ひたい。姙娠ならば其心構へも爲ねば成らぬし、病氣ならば仍更早く治して了ひたい。氣分の引立たぬのも半は其所爲だと細君は言つた。澤は唯冷かに聞いた。

「それだけの事で故々歸るには及ばんだらう。此土地の醫者だつて、其くらゐの診察が出來ない事も無からうし、若し又姙娠だとすれば、今未だ二月目や其所らで騒ぐ事は無からう。お前は下劑を飲んでるぢや無いか。」

「……………いゝえ。」と細君は小さい聲で否認した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人は其まゝ默つて了つた。思ひ〳〵の事を肚には考へた。

「貴方の病氣は、逗地へ被來つて少しはお宜しいんですか。」と暫くしてから細君は聞いた。

「何故？そりや幾らか好いさ、好いから居るんだ。」

「でも、盜汗が此節甚いぢや有りませんか。」

「何有に、元からさ。」

「それに、些い〳〵咳を爲さいますわね。」

「何うせ病氣の體だもの、色々な故障があるさ。」

「一體何所がお惡いんでせうねえ。瞭り其れが分らないつてのは、醫者も存外駄目なものね。」

「駄目とも。」

それ限り二人は又默つて了つたが、互ひに對手の心を讀み合つたやうに思つた。而して澤は、世に神聖なもので有るやうに謂ふ夫婦――其の「夫婦」といふ事に心苦しい感がした。

朝、澤の疲勞は毎も甚しかつた。青い顏をして、パクリと口を開けて、八時九時までグッタリ睡つて居る。覺めた時とは顏が變つて、グッソリ窶れて見える。細君は朝の其寐顏を見ると、心から夫が疎ましかつた。而して自分の命が搾られて行くやうな恐怖と不安を感じた。

或る風の無い月の好い晩であつた。澤は日が暮れてから錢湯に行つた。湯揚りの温かな好い心持でブラ〳〵濱通りを歩いて居る中に、食物の名々書出した薄暗い掛行燈を見付けて、竝むやうに其軒を潜つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。近頃は蹈躙の徒を目當てに、何所の飲食店にも首を眞白に塗つた若い女が坐つて居る。澤は教育家としても殊に潔癖な生活を送つて來た。細君以外に若い女と相對するのは是が始めてだ。澤の好奇心は誂へた食物の來るまでも穩かなかつた。飲めもせぬ酒を無理に二三杯飲んで、早々に飛び出した。而して渺々と月の光に煙つた果知らぬ海の、無窮に流れる潮の間斷無い浪打際を辿つて、獨り消えて行くやうな頼り無い哀愁をも覺えた。

浮か〳〵歩いて居る中に、湯冷めがしてゾク〳〵し出した。二三杯飲んだ酒も恐しく體に利いたやうで、息も切ない。澤は急いで歸り懸けたが、急に渚に蹲んで苦しく咳入つた。寺に歸つた時には死人のやうな眞青な顔をして居た。細君は喫驚して色々と聞いたが、澤は唯湯冷めがして寒い、と然う言つて直ぐ臥つた。

八

和尚は五日目の朝、例の汽船で歸つて來た。何だかガッカリしたやうな氣がする。行く先々て酒を強ひられて、五日の間毎日飲み續けた其疲れもある。僧侶にはどうかすると强酒家があるが、和尚も其口て、若い頃から能く飲んだ。大酒をして亂れぬのを自分でも誇つて居た。今は年を取つて酒量も減つたが、それても脚氣の發らぬまでは、對手さへあれば朝からても飲んだ。其くらゐ好きな酒である。夏から此方へ醫者に禁じられて居たが、旅先きで飲んだのが太して體に障らなかつたのを好い事にして、歸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つてからも續けて飲み出した。然し幾らか氣懸りてはあるらしい。飲んだ後から足の痺を摩つて見ては、思ひ出したやうに灸なぞ點えて居た。

和尚樣が歸つてからと云ふので、故と命日の法事を延した壇家も二三軒あつた。大師講の執務も溜つて居た。歸つて二日ばかりは和尚も忙しかつた。

三日目、此土地ての顏利きの旅人宿の隱居て、壇家の中ても世話役と云つたやうな氣爽な老人が遊びに來た。年は七つ八つも上だが、和尚とは飲仲間てある。愚痴ぽい老女の涙のやうな秋雨が、朝からビショ〳〵降り續けて鬱陶しい。濕氣拂ひと云ふので、和尚は毎もの角火鉢に燗罎を懸けて、是から獨りて始めやうとする所てあつた。隱居は其れを見ると、笑ひながら家へ引返して、新しい鰆の軒魚を自分て作つて持つて來た。

「可い鹽梅だつた、丁度今籠から揚げて來たばかりて。私は又、和尚さんは相變らず願酒だとばかり思つとつたに……」

「最う願明けさ。」と和尚は笑つて、「私も好きな事は皆が知つとるものだて、餘所へ行くと何うしても飲ませずにや濟まさんだて。實はな、お前さんだて談すが、此間久振に××町へ行つてな。」

「何所へお出てたかと思つたが、そりや可かつた。向うの衆もお健て？」

「皆健だ。お婆も隱居さんに宜しう言つてな。那女もお前、つい此秋子供を亡うしたさうて、ガツカリ力を落して居るわな。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「やれ〳〵。那の這方へ逃げて來とつた女の子をの、そりやお婆さんも力落しだらう。」

婆さんと云ふのは、和尚が生家へ返した梵妻の事である。隱居は實に其時の媒人であつた。

二人の間には這麼話が續いた。話の次第に、隱居は最う一度お婆さんを寺へ戻したら何うだと勸めた。和尚さんが嫌つた、其の煩い連子の亡くなつたのは幸ひだ。小僧さんも何時まで手元に置く譯には行くまい、和尚さん一人になつたら炊焚にも不自由だらう——と云つたやうな事を其れから其れと、色々年寄らしい考を並べて隱居は勸めた。幾らか酒も廻つて冗くなつてもゐた。

「私は何うでも可いだて、其話はまあ、隱居さんに任せとかう。」と滿ざら斷り切つても了はなかつた。

和尚も醉つて居る。有繋に嗾られるやうな氣もしたのだ。

隱居が歸つた後て、和尚は好い心持になつて假寐をして了つた。目を覺ました時には最う暗くなつて居た。其所等の戸閉りもして、ランプが細目に點けてあるが、小僧の姿は見えない。外には未だ雨の音がして居る。和尚はゾク〳〵體を顫はせながら、火鉢の鐵瓶に觸つて見て、お佛供飯のボロ〳〵になつたのを湯漬にして掻込んだ。

「妙光め、此の降るのに何處へ行きやがつたらう。」と然う思つて居る所へ、小僧は書院から歸つて來た。

「何だ、奥へ行つとつたのか。」

「此間から外史を溫らつて貰つとる。」

「那樣事を——體の惡いのに迷惑だらう。」

「何有に、奥さんが溫らつてお下れる。奥さんも自分の稽古になるて、毎晩一時間づゝ來るが可いつて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然う言つて下れたもんだてな。」

「奥さんが——ふん。」と言つた限、和尚は默つて了つた。

　それからは、小僧は毎晩夕飯を濟ますと、日本外史を抱へて書院へ行く事に決めて居る。和尚が骨を折つて敎へた四目殺しも、此節は厭がつて對手をしない。鎭西八郎爲朝や、惡源太義平で夢中だ。一時間が何うかすると二時間も書院を歸らなかつた。和尚は獨り臺所に殘つて、火鉢の前にポツ然と時間の經つのを待つより外は無かつた。其の退屈さは無い。と云つて宵寐をすれば夜の明けるのが待遠しい。切めて九時頃までは、時間潰しにブラ〳〵出歩いて見た。興行物でもあれば格別、那樣もの丶無い晩は、近しい檀家を其れから其れへと遊び廻つた。時には酒臭い息をして歸る事も有る。

「妙光、澤さんは今日一日寐とつたやうぢや無いか。病氣が好う無いやうだが、可いのか、邪魔になりや爲んか。」和尚が或時小僧に注意した。

「曩それても、奥さんが來いと言つたもの。」

「可い氣になつて、お主、病氣が染つても知らんぞ。」

「染るのか知らん？」と有繫に懸念らしく遲らつて見たが、「でも、澤さんは然う惡い病氣のやうにや言つとらんが。」

「自分で言ふ事だもの、當になるもんか。」

「だつて、唯傍へ行つたぐらゐて……」小僧は肯かなかつた。

「可い〳〵、早死爲たきや行くが可い。どれ、俺も遊んで來るかな。」と黑天鵞絨の頭巾を首卷に爲ながら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら、今夜は何所へ行つたものだらうと考へた。

狭い村である、然う〱遊びに行く家があるものではない。と云つて、同じ家へ度び〱行くのは、先でも煩さからうと云ふ氣象がある。其所で茶菓子など買つて行つたり、行つた先で饂飩など奢つたりするが、和尚には生優しい錢高では無かつた。

九

澤は湯冷めから風を感込んで、それからと云ふもの、氣分の好い日は少なかつた。起きるよりは寐て居る方が多い。咳も激しくなつた。細君は細君で、例の青い顔をして陸々飯も食べない。夫の枕元に坐つて、始終物思はしさうに沈んで居た。其中に何を思付いたか、小僧に日本外史の復習をしてやる事にした。澤は無論喜ばなかつたが、今のやうに所在無いのも、閑過ぎて却て色々な事を考へる。氣の紛れるには其れも可からうぐらゐに思つた。然し細君の熱心は、閑消しや氣紛れとは思へなかつた。小僧の復習よりも自分の勉強らしく見えた。晝も暇さへあれば本を覗いた。

其頃から細君は、思ひ出したやうに昔の學校友達などと些い〱文通を爲出した。而して「女子と職業」と云つたやうな、際物染みた新刊書の廣告を見ては郵便で取寄せた。何とか云ふ手藝の叢書めいた物も豫約した。悉く夫に秘密と云ふ譯にも行かぬが、問はれなければ自分からは言はなかつた。澤には氣紛れとしか其れが思はれない。今更那樣ものに色々と手を出して見るより、バイオリンでも最う少し獨習したらと勸めても見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細君の凝り方は段々激しくなつた。何うかすると讀書の方に氣を取られて了つて、夫の世話も忘れて居るやうな事がある。其の癖體は大儀がつて髮も陸には結はない。澤も癇癪を起しては、行成り見てゐる本を引手繰つて其れを細君の顏へ叩き付けるやうな事も折々あつた。

「何の爲めに附いて來てるんだ。夫の介抱が那樣に厭か。畜生！早く死ねば可いとでも思つてるんだらう。見ろ！忘れや爲んぞ、貴樣の薄情は。」と息を喘ませて呶鳴つた。

「二言目には薄情だ〱と被仰るが、貴方は……貴方こそ私を……」と言懸けて、細君は身を顫はせて泣き出した。「あゝ、お胎には這麽赤坊が有るし、此先まあ、私の體は何うなるんだらう。」

「氣の毒だな、下劑が利かんで。」澤は毒々しい言方をした。

其顏を怖しさうに凝と見て居た細君は、兩手で自分の顏を掩つて了つた。

すると、五六日經つた或る朝、細君は夫に食事を濟ませてから、其儘又ケットを蹴散つて惱しさうに突伏した。體でも惡いのかと聞かれて、

「えゝ……出來たのかと思つたが、然うぢや無かつたんですわ。」と然う言つた。

十

寺の周圍の立樹も落ちる葉は落ち盡して、松ばかり目に立つて殘つた。山や丘は地肌の透けるやうな枯色をした。海では海鼠が漁れ出した。朝は薄り霜も見える。而して毎日のやうに時雨が來て、日當りの無い北向きの長五疊は薄暗く寒い。澤は置炬燵をして、閉付けの惡い灰色の障子を眺めた。偶ては細

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

君が青い顔をして、寐たり起きたりして居る。

然う云ふ譯で、三度の食事から夫の身邊の世話、藥だの滋養物だのと手數が多い。初めて立居の難くなるまで、宿屋へ移つたらと細君は言つたが、澤は生返事をして居た。夫婦宿屋住ひの其出費を考へたのである。澤は自分の病氣の永引く事を思つて、常に節約を忘れなかつた。中學に在職中、月々心掛けて置いた若干かの貯蓄には限りが在る。

然し、段々と是から冬の寒さに向つて、室の日當りの惡いのには澤も弱つた。此節引續いて病氣の好くないのも、一つは室の所爲かと思はれた。

「最う少し何うか、日當りだけでも好い所がありさうなものだ。」終に然う言ひ出した。

「私、體が治つたら、濱の方の見曠しの好い二階か何かで、何所か貸してくれさうな家を搜して見せう。」と細君は直ぐ同意した。

「見曠しなんか、那樣贅澤は望まん、唯日が當つて暖かけりや可い。」

「それには何うしても東を受けた海岸ですわ。」

細君の體の異狀は五日ばかり續いて治つた。而して久振に洗湯へ行つた其留守、小僧が帶封の郵便を澤の所へ持つた來た。上書は細君宛てゝある。何氣無く封を開いて見ると、其れは「和漢文講義錄」と云ふのであつた。講師は皆故の中等教育檢定試驗委員であると云ふ事が、表紙裏に特筆してある。澤は此講義錄の目途も、亦是を講讀する妻の目的も一度に讀めた。

「畜生！這麼物を益立たせるものか。」と云ふやうな冷酷な考が心を掠めた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

細君が湯から歸つて來ると、

「おい、郵便が來てるよ。」と其れを投出した。

「然うですか。」と言つて、細君は一目見たまゝ何氣無い風をして側へ遣つた。

「今ね、お湯で何處かのお上さんに聞きましたら、濱の荒物屋の二階で、六疊と三疊ださうですが、ズッと海を見曠して、それは日當りが好いんですつて。是まで學校の先生とかに貸してあつたが、今丁度空いて居るつて事ですから、私、直ぐ行つて見て來ませう、ね、可いでせう。」

「可いだらう。」と澤は人事のやうな返事をした。

細君は湯揚りの暖かさうな頬や手などをして、顏を粧したり髪を梳付けたりした。後向きに坐つた其の素足の指先まで健かな血が漲つて紅色をして居る。澤は炬燵の中から凝と眺めて、自分の衰へた生の壓迫されるやうな鬱憂を感じた。

荒物屋の方は直ぐ話が決つて、澤夫婦は翌日引移つた。餘り出抜けて、和尚は些つと意外のやうであつたが、然し留めも爲なかつた。

「又寂しくなるなあ。」と小僧が訴すのを、

「寂しい方が可いのだ。無爲樂と謂つてな、餘計な事を見たり聞いたりすると、心が騷いて出家の邪魔だ。」と和尚は戒めた。

××寺の入相の鐘は時を違へず鳴つた。霜の朝々、勸行の聲も休まず續いた。和尚と小僧とは冬の日の短いのを喜んだ。

（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▲我國文學雜誌の最高位を占る早稲田文學の新年號を見よ▼

早稲田文學

本號に限り 正價 四拾錢 郵稅三錢

一冊金二十錢郵稅一錢五厘六冊以上郵稅不要

第五十號新年紀念號要目

創作

●イブセン社會劇 人形の家（全篇完譯）……島村抱月

●長篇小說 町より山へ……田山花袋

●短篇小說 うはさ……正宗白鳥

評論

▲國木田獨歩論……片上天弦

▲樋口一葉論……相馬御風

▲長谷川二葉亭論……中村星湖

▲尾崎紅葉論……楠山正雄

▲正岡子規論……服部嘉香

▲大西操山論……白松南山

▲綱島梁川論……生方敏郎

▲高山樗牛論……本間久雄

▲橋本雅邦論……河野桐谷

▲市川團十郎論……池田銀次郎

●挿畫ドイツ近代大家スカルピナ作『冬の夕暮』（原色版）●十名家肖像（寫眞版）

▲早稲田文學は最信頼すべき現代文藝界乃至思想界の指導者なり▼

東京神田表神保町
振替東京二七〇番

東京堂書店

賣捌所 全國各地到る所の書林雜誌店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士吉田東伍先生著

桂侯爵題辭 尚侯爵題辭 後藤男爵序 岩材男爵序 新渡戸博士序

北海道、樺太 琉球、臺灣 之部完成

見本進呈

大日本地名辭書續編

振古未曾有の大著として一世を驚倒したる吉田東伍先生著『大日本地名辭書』は今や國運の發展と共に其續篇即ち北海道、樺太、琉球、臺灣の部を完成し、永世に新日本を裝飾すべき全備せる典籍となれり。抑も此四大島は我邦南北の二大關門にして、海に陸に天然無限の寶庫と稱せられ、通商に拓殖に漁獵に海防に內外勢力の競爭場たり我々新代國民に取りて利害の關係甚だ密接にして、最も形勢を詳にせざるべからざる地方なるにも拘はらず、從來確實なる地志記錄絕無にして、事實を調査せんとする學者教育家事業を起さんとする實業家、政治家等皆亡羊の嘆を免れざりしなり。今や著者の非凡なる熱誠と精力とは此の大日本帝國中刻下最も重要なる地域を最も詳細明白に說明したるが故に何人も坐らにして其情勢を窺ふを得るに至れり。苟くも新國民として現代の國運發展に參加せんとする人は必ず本書を備ふべく、曩に正編を購はれたる人は本書を併せて完璧とせらるべきは勿論なり。弊社は光榮ある此出版の始終を完うせんが爲、左の方法に據り最短期特賣を行ひ遍く大方諸君の高需に應ず

最短期間實費特賣

續編全一册 正價金六圓

特價金四圓五拾錢

裝釘背革 最上製本 大本 縱九寸橫六寸五分 六號活字廿四字詰 三十一行三段 紙數約九百頁 地圖七葉入 ▲送料廿錢 臺樺四拾錢 韓清五拾錢

正編 全四册

▲正價金廿六圓▲特價金貳拾圓

正編は此際五百部を限り御高需に應ず

送料 壹圓 臺樺 壹圓七拾錢 韓清 貳圓

東京神田裏神保町 合資會社 冨山房 電本一〇三六、振替五〇一

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

教育界思想界破天荒の快著

冷泉　藤原喜代藏先生著（最新刊）

明治教育思想史

全壹册
紙數七百五十六頁
定價貳圓卅錢
（送料）市内四錢、内地拾二錢、臺樺三十錢
韓、清卅五錢

言ふ迄もなく本書は明治教育思想變遷の歴史也。實利的教育説、自然主義教授説、開發主義教授説、折衷的教育説、道德的教育説、國家主義の教育、社會的教育説、活動主義教授説、實驗的教育説及び國民思想等の變遷を説きたるもの。而も其の叙述たる乾燥無味の史實を臚列したるものに非ず、毎章必ず一般の思想界の概况を記して當時の社會狀態と政治、社會、道德、宗教文藝等に關する時代思潮とを評論して之を時の教育思想及學説と對照せしめ、記述評論を併せ用ひて史實の原因結果を闡明し、一面教育思想の變遷を最も正確に叙述せると同時に一面中心的人物を一々容赦なく解剖して紙上に躍如たらしむ。收むる所政治家あり、文學者あり、宗教家あり、新聞記者あり、本書を讀で快哉を叫ぶ者亦何ぞ獨り教育家のみならんや。

木村鷹太郎先生譯

プラトーン全集

全部五卷
表裝優美總紙數約六千頁
第一卷　寫眞版肖像三
第二卷（理想國）寫眞版肖像二
第三卷　寫眞版肖像一
紙數各千二百餘頁
定價各貳圓八拾錢
送料市内四錢
内地十六錢、臺樺各三十五錢、清、韓各四十錢

第四卷國憲編出來

『國憲』篇全部十二卷の雄篇はプラトーン全集第四卷を成す、プラトーン思想の最も成熟せる時期の産物なり。プラトーン實に人事興廢盛衰の理を達觀して、不拔鞏固なる國家を出現せしめんとして玆に國家存立の意義、其主義、其理想を明かにし、國民の精神を統一し國體政體の貴ぶべきを論じ風俗習慣を重んじ、國家國民の信仰及び祭禮等に敬意を表し結婚、生産に意を用ゐ、教育を貴重し、學術學科の輕重上下を定め、善良なる哲學を勸め、不良なるものを禁遏し尙武、體育、精神の鍛錬を論じ、男女兩性の兵役護國を主張し、遊戯音學文藝の監督を嚴にし、飲食、衣服、情欲の整理を謂ひ、孤兒、遺言、遺産等を初め、土地、家屋、金錢貸借等其他百般の事より、商業、經濟、市場、奴隷、外國旅行等、其他の民事商事等に至る立法行政の大精神を明にす。皆是れ哲學的深遠なる見識に基き、理想を以つて實際を引き揚げんとせるものなり。題して『國憲』と謂ふと雖、乾燥無味の條文的のものに非ず、或は法律と謂ふと雖『人物』『智德』は其主眼にして、此人物を養成して完全强固の國家を造らんとするものなり、されば『國憲』篇は一面憲法にして、他面國家、社會、哲學、教育宗教、文藝に關する堂々たる大組織の哲學にして、之に加ふるに其仕組の戯曲體問答體の美文を以つてせるものなり。

圖書總目錄無代進呈

發兌元　東京神田　電話本局一〇三六番　振替口座五〇一一番　合資會社　富山房

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

上人がとうてられてこは證如上人(光敎)の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一巻をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日從二禁裏一以二女房奉書一三十六人家集令二拜領一、門跡經乘へ以二御書一被二仰越一候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下由被レ仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘巻の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一巻の初にしも、この事を見いでたるは、まづ不思議の緣なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかくしておぼえたりき(中略)やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その說をもとめしに、誰も未だ見聞せさる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、(中略)本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最良の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、本朝三蹟とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はた世に、たぐひを見ざる結構にて、藤原氏全盛代時の美術の粋を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、無比の重寶たるものなり。本書中の一片にして、また〳〵世に傳れるは、千金の價値あり、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠣喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしともうれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば今又いはず。又おもふに本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどももありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絶えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかしとにもかくにも天下の至寶なれば、神佛の加護ありしなるべし(中略)

又本書は、もと御室闕白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならす、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはればもらしつゝ、さてこの寫眞版は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが手習の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまてづゝえりいて寫しとり、かくはものしつるなりけり。

發賣所 東京市本郷區西片町十番地はノ十四 **婦人社**

電話下谷九百十九番
振替口座東京卅四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

御奈良天皇恩賜
宮内省御歌所寄人　坂正臣先生序
宮内省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋
本派本願寺所藏

三十六人家集寫眞帖

裝幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、奉書、江戸川別漉、上質洋紙等各種

一組六十葉特別實價金拾圓（但用畧鳥の子に限り一圓增）

遞送料金貳拾四錢（但東京市内無遞送料）

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれは、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畫とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の仝好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらるゝ古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば卽ちこの三十六人家集三十九帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、道風、佐理、行成の三蹟をはじめ、公任、俊頼などの筆蹟とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめでたければ、先うちおどろかれつゝ、かく貴き天下の寶物を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつゝ（中略）時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるを

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

第五卷 第一號

趣味

本號に限り
定價四十錢
郵税金三錢
壹年分金貳圓五拾五錢

小説

執筆者

森鷗外
眞山青果
德田秋聲
水野葉舟
内田魯庵
小山内薫
田山花袋
岩野泡鳴

文藝家相互評

文學者 美術家 五十餘名家の對比

評論

執筆者

坪内逍遙
灰燼十萬卷
戸川秋骨
内田魯庵
片上天弦
文壇色々の記
島崎藤村
無名氏

發兌 東京麹町區飯田町六丁目二十四番地 易風社 振替口座二三〇四一番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士森鷗外先生著

(新刊)

續一幕物

これ大陸近代文學の精華を萃めたるもの、ダヌンチオ。マーテルリンク。ストリンドベルヒ。オスカーワイルド。リルケ等世界的大文豪の傑作六篇を收む蓋し泰西文學を日本に紹介したる尤も卓越せる尤も完備せるもの也

岡田三郎助装
菊版四百餘頁
郵税金拾貳錢
定價壹圓廿錢

一幕物

菊版四百餘頁
定價壹圓廿錢
郵税金拾貳錢

本書はハウプトマン。ズーデルマン。シュニッツレル等最近獨逸劇壇の傑作七篇を集む

水野葉舟著 高村光太郎装畫

微温

菊版四百餘頁
定價九拾五錢
郵税金拾貳錢

永井荷風著

荷風集

四六版三百頁
定價六拾五錢
郵税金八錢

發兌 東京麹町區飯田町六丁目二十四番地 易風社 振替口座二〇三四一番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

農産林産種子
果樹用材苗木
庭樹苗盆栽類
草花種子球根
種禽種畜農具農書

東京内藤新宿電車終點際（電話番町一八一六番）

資本金七十萬圓

明治四十三年春の部

營業案内

（書入大版八十ページの美本）

ハガキにて御申込次第無代進呈

日本種苗株式會社



反省社編輯

空文年表（一名かきいれ年表）

（定價金五拾錢　郵税八錢）

中央公論發行所　反省社

實費發賣
分類
圖書總目録
定價七拾錢

●此總目録は部下數百の各書店にて既往數十年間に發刊せる有益なる圖書を漏れなく類別網羅せる大冊なり

●弊店嚴に讀書家の爲め分類圖書總目録二萬部を提供せしに忽ち豫定部數を超過し其後の申込は一々謝絶せしも今回更に五萬部を印刷し送料を負擔し實費金四拾錢を以て貴需に應ず全國數百万の好書家に對し五萬部は甚だ少數なり豫定以上は定價に復す御希望の方は至急御申込あれ

▲讀書界唯一の燈臺なり
▲圖書撰擇は讀書家の最大要件なり
▲極めて低廉に圖書を供給する割引法を掲載せり
▲僅かに四十錢を惜みて讀書の撰擇を誤り賜ふな

東京日本橋大通今川橋際
書籍雑誌大賣捌所　大洋堂書店　振替口座東京一二五七

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を願ふ

謹賀新年

書籍及雜誌

地方販賣部
諸學校教科書及内外各種圖書雜誌類は何れの發行に不拘版元と特約し價格は低廉發送は敏速に御便利を旨とし卸小賣共手廣く取次發賣候間續々御注文希上候

御送金便法
振替口座は東京二七〇番に候間御送金の際は最寄り郵便局に就き御承合御拂込被下候へば安全に着金し速に送本も出來至極簡便なる送金方に御座候

書籍陳列場
讀書家諸彦の御便利を計り圖書雜誌は汎く蒐集陳列し殊に新刊物は日々迅速に取寄せ低廉に勉强販賣仕候間最寄りへ御通行の際は御觀覽陸續御愛顧願上候

委託販賣部
書籍雜誌發行の諸賢より其一手販賣方々弊堂へ御委托に相成候へば獨特の擴張法を以て販路奮勉仕候間御發行前に御申込被下度萬事御便利に御相談仕可候

東京市神田區表神保町三番地

圖書切手調進仕候

東京堂書店

電話本局一一二三 同二四八 同二五五二
振替口座東京二七〇 發電略號〇ト

謹賀新年

新築移轉

新年と共に左記の處へ新築移轉仕候今後益々卸賣勉勵擴張可仕候間不相變御引立の程願上候

東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地

北隆館書店

電話新橋一七八九
振替貯金口座七五〇

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

恭賀新年

圖書出版
書籍雜誌卸専門

中央公論特約販賣所

東海堂

東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋二〇一五 三四三五
電信略號荷印
振替貯金八六七

最新刊

法學博士中村進午君 法學博士副島義一君序
早稻田大學講師井上昕治君著

獨和法學大辭典

全壹冊 定價四圓五十錢
背、角、革、釘裝極美、四六版千百五十頁
二千部限り特價金參圓八十錢
送費內地十六錢臺清韓四十錢

山川早水著

巴蜀

寫眞コロタイプ挿畫貳百有餘種菊判洋裝美本
定價金貳圓參拾錢郵税十二錢臺二清韓三十五錢

▲▲▲滿天下の人士の夢寐に往來して絶えざる蜀中の眞境を寫せる一大奇書出現す▲著者は長く巴蜀即ち今の四川省に在り故に史蹟景勝の描寫考證悉く精確にして網羅遺す無し▲所謂蜀の山水といへば其景勝の壯麗天下に冠たり蜀の文學と蜀の山水とは收めて此書に在り▲支那文學は日本文學の祖先にして巴蜀は支那文學の樞紐たり揚雄出で司馬相如出て三蘇亦生る▲孔明關羽張飛等皆蜀の豪傑此一事既に巴蜀が如何に支那歴史に美的装飾を加ふるを見ずや▲紀行なり歴史なり文學なり地理書なり風俗志なり詩纂なり有益の書なり趣味の書なり▲文章は輕快にして條達加ふるに二百有餘面の寫眞挿畫を以てす蜀の一草一木も眼前に在り▲諸學校の備本たるべきは言を俟たず殊に該博の知識と重厚の趣味とを望まるゝ學生諸君に薦む▲漢文漸く復興し來るの時此書が支那臭味なき支那純粋の興趣を傳ふる功豈尠少ならんや▲裝訂の美麗なる滿載せる挿畫の鮮明なる出版界未曾有の美本なり實に書齋唯一の珍寶應接室無雙の裝飾なり▲▲▲

發行所 東京市京橋區鈴木町一番地 **成文館**

大賣捌所 東京中橋南傳馬町 目黒書店 大阪 吉岡平助 三宅莊藏 名古屋 星野書店 川瀬代助

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方ハ中央公論に依る旨御附記を乞ふ

恭賀新年

書籍雑誌 **大取次**

神田裏神保町 **上田屋**

低廉迅速 **大勉強**

賀正

中央公論大賣捌所

小説 **純潔** 楓窓澤田順次郎氏著

定價金八十五錢　郵税金八錢

本書一度出でゝ現代の小説盡く顔色なし。自然派も讀め、非自然派も讀め。肩のこる修養書を讀まんよりも名は小説と雖もこの書によりて教へらるゝ處は甚大なる者あらんその内容は乞ふ就てこれを知られよ。

書籍出版新聞雑誌 取次大販賣所

良明堂　電新三五三四　振替一四七〇　東京京橋西紺屋町十六

……猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新春劈頭の二大珍書

新刊

文學士 幸田成友先生著

大塩平八郎

（石井柏亭君裝釘）

洗心洞箚記の著者にして、且つ天保騷亂の主謀者たる大鹽中齋は、抑も英雄か、將た學究か、將た又一介の野心兒か、蓋し豈畢竟史上の？たるなからむや。著者幸田文學士は曩に大鹽が活動の根據地たる大阪に在り、公囑に應じて曠世の大業大阪市史の編成を主裁すること無慮十年、劇務の餘暇這の不出世の怪傑が不可測の人格に興味を感じ、博參旁證、經營慘憺、終始口舌に盡し難きの苦心を費して其實蹟を踏査し、史上の秘密境を照破せるものにして、其の權威ある！大著述たるは既に識者間の定評ある所。運命の幻怪は、時代の風潮と相煥發して、讀者をして轉た事實は小說より奇なるものあるに驚かしむ、史壇文壇の一大珍苞にして、庚戌讀書界劈頭の新光彩たり。

菊判美本 四百七十頁
コロタイプ三葉
地圖貳葉挿入
正價壹圓五拾錢
送料十二錢

新刊

澤庵禪師舊鈔 森大狂居士參訂

澤庵禪師 老子講話

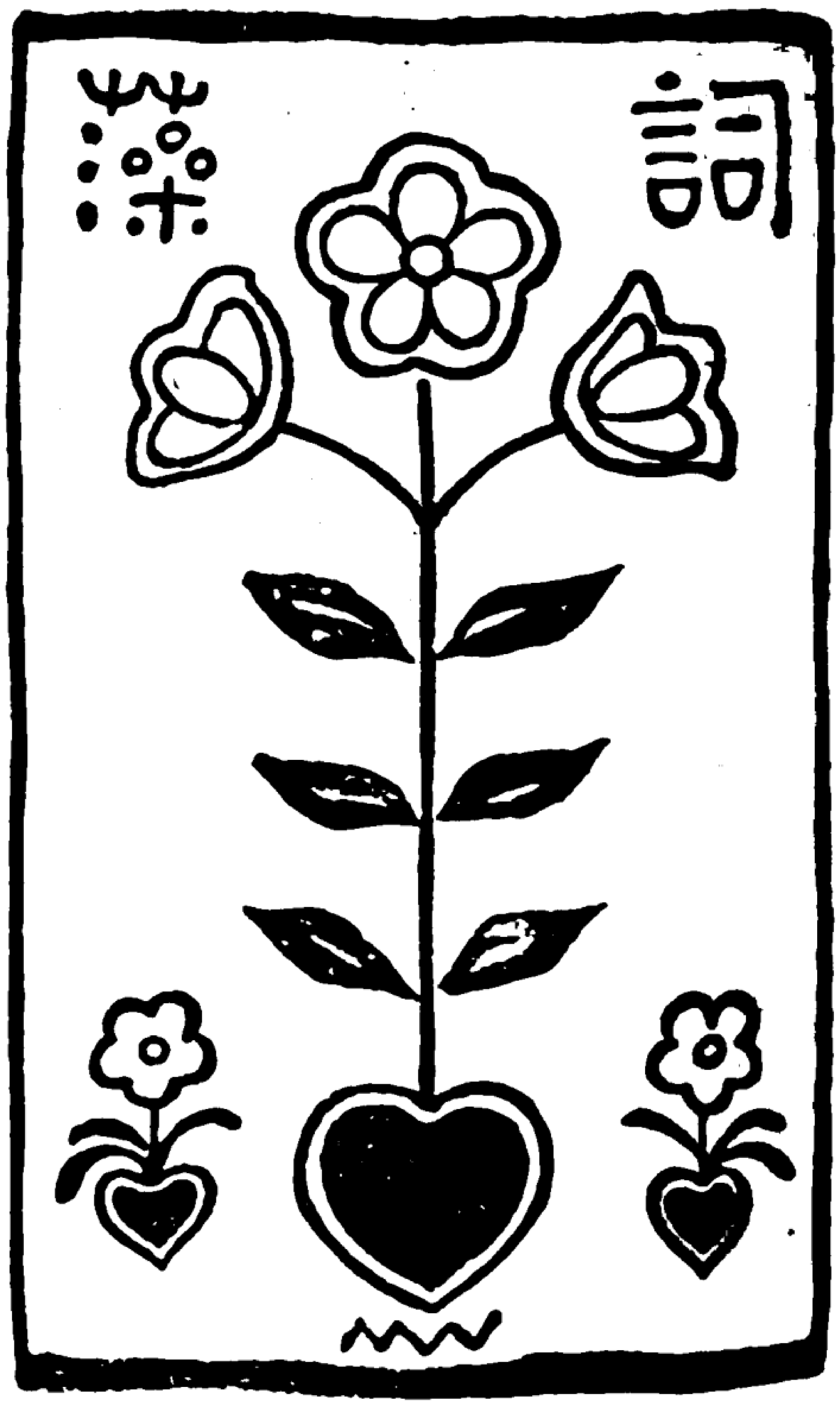
老子の一書言々宇宙の祕を闡き、句々人情の微を穿ち、幽玄高妙眞に東洋思想界の珍たり、孔子曾て評して云ふ『老子猶ほ龍の如き乎』と、本書は龍の如き老子の教訓を禪門近世の大德澤庵禪師が卓拔の見を以て平易簡明に講解せられたる希書にして、禪の妙と老子の玄と相迸發して眞に龍の雲を得たるが如く、雷電を叱咤し、乾坤を呑吐するの感あり、人事紛々俗務蝟集の中に沒頭するの士一たび本書を繙かば、神韻縹渺として心胸自ら快濶なるを得む。今附するに禪林の祕書『太阿記』を以てす、錦上更らに花を添ゆるもの！

菊判總布 參百餘頁
金彩美裝 頗莊麗
正價壹圓參拾錢
特價 金壹圓
送料八錢

發行所 東京本郷一丁目 振替東京壹七壹 東亞堂書房

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告は揭載を謝絕す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



黃

柴舟

黃なる葉の落ちつくしたる木の間より見るおほ
空の靑のつめたさ

人去りて火桶の火のみしらじらとこのもの足ら
ぬ夜の味

君がするらつこの皮の襟卷のその冷やけきあた
ゝかさ欲し

赤土の坂のゆふやけ大根などつめる車の過ぎは
てし後

聲たてゝまたも笑ひぬわらはずばさびしき思丞
ふこゝちして

そよ〳〵と庭の木の葉ぞおちおつる小春のかげ
のしづかなる中

君が家の朝のけふりのよく見ゆる靑菜の岡の霜
の降りはも

白枯れし木ごと木ごとに風泣きてしめやかなら
ぬ冬の夕ぐれ

朝霜のいたくおきたる垣根道そのからたちの針
のするどさ

午後一時あたゝかながらうら淋しちれる木の葉
のかたよりもなく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新年十五題

蝶衣

鬼打木

鬼打木舊府の情に堪へて立つ
鬼打木古き武門と見えにけり
此門を戀ひし男や鬼打木
秘姫もあれば大賀玉の木も嚴めしき

縣召

上﨟見て我妻おとる縣召
風土記を今次捧げぬ縣召
横領の訴もあるや縣召
雲客の養女賜ひぬ縣召

飾臼

百杣の宗家なりけり飾臼
大齒朶も敷きてとこ世の飾臼
飾臼戸に一聯の春詩かな

破魔弓

破魔弓や柳營を忌む子の大志
破魔矢さすさつ夫が宿の靭かな

帳綴

八郡に小作とりけり御帳綴
帳綴や手代任せの諸出納
持ち山の今年伐る部や御帳綴
帳書に傘屋の主賴みけり
帳綴や阿陽太守の金御用
鑛の出高も富めり御帳綴

居籠

妹とあれば常(トコトヘ)に居籠も惡しからず
居籠りて覗けばたゝる眼かな

年玉

年玉や故郷の禰宜が守札

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年玉を漁者持ち積むや漁長がり

鍬初

難有や皆農徳の鍬初め
鍬初や草木の花のあるじ顔
鍬初や楪華詩屋の韮畑
天領は斯やうに肥えぬ鍬はじめ

織初

機はじめ百濟織女の歌きかん
筬梳三打うちて初機下りけり

紡初

紡ぎ初めて絲の長恨新たなり
手ナ末の貢なき世や紡初

鹿島事觸

晩稲良き鹿島の觸れも賑かな
事觸にたばかられしも目出たけれ

船靈祭

船靈に磯山榊捧げけり
船靈にまつりし蜜柑桐夫くれぬ

踏歌

瑞髪も結はてたへなる踏歌かな
月中へ奏てゝ歸へれ踏歌人
踏歌舞天津宮事かくもこそ

飾

忘れざらん貧時の紡車飾りけり
臼の上に木割が槌も注連飾
輪飾や父祖が征夷の白眞弓

榧

木食の翁に女あり榧を盛る
小鼠の烏帽子にかづく榧の殻

新年十五題

蝶衣

鬼打木

鬼打木舊府の情に堪へて立つ
鬼打木古き武門と見えにけり
此門を戀ひし男や鬼打木
秘姫もあれば大賀玉の木も嚴めしき

縣召

上臈見て我妻おとる縣召
風土記を今次捧げぬ縣召
横領の訴もあるや縣召
雲客の養女賜ひぬ縣召

飾臼

百姓の宗家なりけり飾臼
大歯朶も敷きてとこ世の飾臼
飾臼戸に一聯の春詩かな

破魔弓

破魔弓や柳營を忌む子の大志
破魔矢さすさつ夫が宿の靭かな

帳綴

入郡に小作とりけり御帳綴
帳綴や手代任せの諸出納
持ち山の今年伐る部や御帳綴
帳書に傘屋の主頼みけり
帳綴や阿陽太守の金御用
鑛の出高も富めり御帳綴

居籠

妹とあれば常(トコトヘ)に居籠も惡しからず
居籠りて覗けばたゝる眼かな

年玉

年玉や故郷の禰宜が守札

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年玉を漁者持ち積むや漁長がり

鍬初

難有や皆農德の鍬初め
鍬初や草木の花のあるじ顔
鍬初や楳華詩屋の韮畑
天領は斯やうに肥えぬ鍬はじめ

織初

機はじめ百濟織女の歌きかん
梁梳三打うちて初機下りけり

紡初

紡ぎ初めて絲の長恨新たなり
手ナ末の貢なき世や紡初

鹿島事觸

晩稲良き鹿島の觸れも噂かな
事觸にたばかられしも目出たけれ

船靈祭

船玉に磯山榊捧げけり
船靈にまつりし蜜柑船夫くれぬ

踏歌

瑞髮も結はてたへなる踏歌かな
月中へ奏てゝ歸へれ踏歌人
踏歌舞天津宮事かくもこそ

飾

忘れざらん貧時の紡車飾りけり
臼の上に木割が槌も注連飾
輪飾や父祖が征夷の白眞弓

榧

木食の翁に女あり榧を盛る
小鼠の烏帽子にかづく榧の殼

和歌

尾上柴舟選

○ 本間五丈原

血の色の透きて見ゆるに手をかざし幼なき程を
おもふ灯のもと

時雨るゝや外の面の草に夕日してしばしが程の
しづかなるかな

カアテンの白きが淋しあかつきを吹かれて君が
窓にみだる

窓の日の秋を流るゝ音もなきそのしづけさに倦
みはてにけり

我れおもふ君またおもふかくていま心ひとつに
なりにけるかな

原に松などしげり鳥來鳴くその山すその午後を
ゆきける

こひ心またえ堪えずもなみだぐむあはれやうす
きよろこびのなか

ああ今日の光りのしろきよろこびにはぐくまれ
つゝ暗涙をする

快よきひかりなだれ來あけがたの白きベツトに
めざめぬるとき

草の陽やくりやの窓に鳥き鳴きしばらくにして
黄昏にけり

○ 百田楓花

大ぞらのいづこに鳥の羽うつやしづごゝろなき
日の來りけり

海みつゝ繪島ヶ岩の松により死にも得ぬ身をあ
はれみしかな

誘はれてまた泣きぬれし瞳を擧げぬ夜の波の音
の遠き近きに

ひたぶるに海はにごれりわがこゝろ誘ふものな
けふもみいでず

わかれきて冷たき床に入りしときはじめて涙頰
につたひきぬ

蟲啼かず戸による君が黒髪にしづかに秋の灯の
ながれたり

ゆくがまゝわがかなしみをゆかしめよさびしく
燃ゆるあまつ日のもと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山々に楓の花の咲くころに海の闇夜をわすれかねつも

○　三浦曉村

つかれたる夜の都會の底にもゆうす青白き瓦斯のひかりは

青空にいさゝかばかりくれなゐの殘る夕べを窓によりつゝ

暮れてゆく秋のさびしさ丘の上に立てる一樹のかげもゆるがず

秋の聲うすら悲しく山かげの木かげのくらきかたにきこゆる

うすぐらき巷のかげをつかれたる子はまたひとり今日も歸り來

○　坂梨葉村

三月の土と土とのひまに見し山椒の花の白かりしかな

いづこより來しや秋風わが閨の鏡の裏に蟬のなく

いとひろき心もつ子の瞳にも似てゐる貝の花ひらく見ゆ

ぬか星の青き寂默の地を這ひて妻ともなりし牽牛花のはな

灰色のそらのあなたに消えうせし島の影さへあかず哀しき

安からぬこゝろの壺のさびしさに霜月の日のてりわたる哉

冬の日の凍てたる土にひそみたる强き悲しみわれをおそひぬ

○　金子不泣

樹の多き故郷の家秋の夜はよもすがら風泣きて止まざり

なつかしく倚らむ一樹をさぐりつゝ秋の林の落葉をぞふむ

北國の人よりおくり越せし梨わがかなしみに似たる味ひ

ちらばへる落葉の上にこぼれたる月の光のか[illegible]じめる色

なつかしきものゝ一つと數へけり藥の味も長う病みては

○　山村龍子

黄なる葉のいさゝか殘る樹によりて病む君思ひ此夕べ泣く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我れ女作り話と知りつゝも聞けば泣かるゝとがめ給ふな

幼どき名和長年の物語よくせし君もかりそめを云ふ

いまのよの女は悲し位など美き衣などを主と仰ぐ故

名は知らず血の色したる花なれば直にわれは口づけをする

思ふこと一つも告げず別れたる後の心の味ひぞよき

○　　藤　三千緒

いま君は次の一語をきかむとし先づほゝゑみてさかづきをとる

銀座なるピーアホールの二階より秋くる街をながめてはをる

曲り角まがらむとしてふとおもふそれは離れにもはなされぬこと

いとけなき子の將來を指定るごと夕餉の程に夫と對ふこと

○　　町田不破

まばらなる心の雜木雪降りてたゞ一いろの花さかりする

君來ては我が灰色のみさび江に彈きリボンの紐をうつすかな

老といふつれなきものと我が歌とゝつ追ひつして一年は經ぬ

あはれなり吾等が末に生まれ來る最終の人に照らん日の色

大地は我れを載せたりたまさかの大彗星も此月路に入る

○　　橋本義雄

階段を踏み外づさんと氣づきたる驚きをもて君に向へる

つまづきし石を叩きて半生のくるしき跡をわが歌ふかな

秋の日に照らされながらそのまゝに死せるが如くものをおもへる

あな悲しあざみしむれに交じらひて君を忘れむすべを求むる

○　　橋口春山

白き壁入日につよくうつれるを見つめさびしう廣き街ゆく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山に立ち海を見つれば死ねばかり悲しきこゝろやゝ和みぬる

刺戟する頭をかゝへやうやくにひるの光りに射られけるかな

○　小澤紫紋

日は狹青林間の耋恍としてよき鳥あまた梢にぞ啼く

夕されば廣き草原うちつゞくそのはてにしも心は走る

颯々と海越えてくる秋の風刀根の河原のなてしこを吹く

○　菊池野菊

小さき日に我なるものを定め來し故に今日しも身にあきたらず

新らしき望みいてきぬ我はしもまた若き日をもつべからむか

天地に心足らひぬ何處にもうたがはしかるものあるを見ず

○　藍原小一郎

そらを見よ又海を見よ春の日の靜かにくれるそのいろを見よ

いつ迄もかゝる靜寂に語りえぬ心にありて痛きかんかな

樹によりてわれは默せり微かにくれゆく中にわれをおぼえず

○　指田白縫

わが胸の悲しき思ひ歌にして歌ひつゞけむ命死ぬまで

悲しみに滿てるこの身を溶かしめよ消えはてしめよ月の光りよ

涙わきぬ何故となく遠き木に水無月の日の照りわたる時

思ひ倦み寢がへるたびにわが枕いともさびしき音を立つるかな

○　高田瓜人

さかしらの男は笑をもらすにも唇をしめ目を働かす

まとゐしておどけ話しにまじりえぬ性なり人は世馴れぬといふ

まろ石も角ある石も果しなく月の河原に影層ねたり

○　伊藤双流

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大木の梢にいまし鳥など止まれるほどにわれ秋を知る

色あせし女の顔に秋の日は靜やかに照るほどのかなしみ

まだ醒めぬしづけき夢の破らるゝ憎き日數多おこり來んかも

○　堀　露洋

茫として何とはなしに來る日もまた來る日も落日を見る

生くことに日毎おはれておなじ道今日も行くなり明日も行くらむ

わが心ゆるすにあらずゆるせとて强ひられもせて只二人居る

○　法月紫星

塵しろき机の上をかきまわし亂る、紙の端に秋を賦す

病葉の音なくおつる秋の朝光をあびて眼をとぢて坐す

遠方に消えゆく秋のチャルメラを戀ひしと家を出てゝきくかな

○　小河原素山

吾が持てる多き涙をつくすまで泣くかなしみを與へたまへよ

吾れ寧ろ五彩とわかぬ盲人と生れざりしをなげく日もあり

徒らに泣きて過しぬ喜びは涙の底に湧く心地して

○　金子白明

秋雨や人にむかへば何となく喜びに似るさびしさぞ湧く

夜の星の群よりことに輝ける一つの星を見出でたり君

○　すうび生

生くるためそれは生くなりかゞやかに若き日のゆくそにすがれども

わがのぞむもの求むれば心たる求めえぬ時力おもひぬ

○　河邊紅衣

けふといふみしかきものを重ねつゝかくしてつひに世をさかりゆく

○　下山利春

このまゝに死なばよからめさみだれの靜けき夜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の窓にもたれつ

○

あたゝかきその白き手ぞおほはるゝ火なき火鉢に額あつるとき　北林芦水

○

亡き人の小さき子らを椅子にならべ一人一人にキスする母よ　植田破夢天

○

座を立ちぬいまどよめきの中にゐし爾たる心いたくはぢらひ　波江野牧風

○

大和はも寺多き國其の寺の一つに住みしわかき日思ふ　村上義信

○

超然とわが世の秋に立ち得たる我と思ひぬ歌を歌へば　菊池野菊

應募和歌は東京市小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

初東風　高田蝶衣選

初東風や筑紫の果の一ッ松　秋紅蓼
初東風に寺炎上や囈語聞ゆ　同
初東風や佳章を弄す閑情に　同
初東風や弊裘を吹くこの朝　同
初東風の富士をおろして出廬かな　朱子樓
初東風に出初め出づや籠り船　同
初東風に入るやをかしき貢船　同
雙鶴の試翼初東風渡りけり　同
初東風に穴居の民の筑を撃つ　羅月
初東風や魔除の御符を髻に　同
初東風に貼付紋のめくれけり　同
初東風は相馬御殿の垂氷吹く　同
初東風や歸漁祝の配り魚　雨圃
餅臼を初東風山の木に選む　同

初東風や山河の綠吹き起す　春溪
初東風に井開の幣搖らぎけり　同
初東風や湖明けそむる雲母波　哲郎
初東風や御陵山に音もなし　同
初東風の古家に筆を祭るかな　夢筆
初東風や召に應じて蘭臺に　同
初東風や藩儒に贄す魚三尾　榴炳子
初東風の梁に吊す呪餅かな　同
初東風に鴛鴦の拔け羽も白帆かな　曉鐘樓
緋の房に初東風渡る女輿　同
初東風や除夜の神事の捨籌　不寐庵
初東風や蘆邊の鴫眠足る　同
初東風や手に量り賣る舟の魚　痩脚
初東風に家を建て增す島司かな　同
初東風に冠の紐のゆるみかな　鶴人
初東風や朝月高う渡る雲　同
初東風や冬季のこぼれ島　綠童
初東風に仰ぎて高し魚見臺　叱竹
初東風や翁の面に髭植ゑん　翠雲
初東風や小鉢にうつす黃水仙　美川
初東風に珊瑚の鞭を鳴らしけり　風來子

餅のひゞ初東風そゞろ吹きにけり　鳴子
初東風や長者が藏の棟いくつ　水馬
初東風や大川口の止筏　愚案
初東風や島へ神事の通ひ舟　虎鳴
初東風や水神に御供奉る　明分
初東風の注連に火移る竈かな　東洋
急使立つ驛鈴の音も初東風に　不騷
初東風やくりて朱をうつ漁曆　人生
初東風や山籠りせし日誌讀む　蛙念子
初東風や松を掠めし鏑より　螢覇郎
初東風や村町となる祝ひ日に　石頭眠
初東風や門符新たに磯の家　十八公
初東風や籠居の詩魂蘇る　冬木
初東風や家のまはりの槻大樹　慘冬

募集課題

大根　一月十五日締切
寒食　二月十五日締切

規定

一、應募句は淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛郵送の事
一、一人三十句以内、用紙は半紙、「中央公論俳句」と明記の事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評論

韓國統監の威信

韓國統監曾禰子健康例ならずといふ、必ずしも其の爲めなるまじきも、吾人は頗る其の信用に疑惑を懷かざるを得ず。

彼の一進會が日韓合邦論を唱ふるや、反對論囂然として起り、反對の極頻りに排日論を皷吹するものあり、現に内閣總理李完用の如き極力排日論を煽動せり。

一進會の目的は素より之を以て李内閣を顚覆するにあり、彼等の背後には、眞面目に日韓合邦を利なりと信ずる日本の志士と、事ある毎に一種の飛躍を好む日本の所謂策士なるものの潜めるや疑ふ可らず、伊藤公の慘死洵に悼むべしと雖も、國民の感情の昂ぶれに乘じて、先づ一進會をして合邦を唱へしめたると智なるに似たり、然れども日本の思慮ある國民は、韓國の王室が伊藤公を仇として暗殺に關係あらば格別、然らずんば依然伊藤公の實施せし我が廟議を遂行するを當然と信ずるもの也、伊藤公を悼むの感情如何に昂ぶるとも、何ぞ輕卒に公の方針を一變す可けんや、清露兩國との二大戰役を經來つて、我が國民の對韓思想は幾んど十分に洗錬せられたり、之を解せざる策士は憐れむべく、策士の策に乘ぜし一進會や最も憐れむべし。

李内閣顚覆のために、卒然として合邦論を提へし一進會の輕擧憐れむべきも、更に憎むべきは、己れの内閣を守護するがために、極力排日氣焔を煽動せる李内閣の一味なりとす、傳ふる所によれば、排日運動の一隅には實に宮中の雜輩も混じ居るといふ、伊藤公が苦心して定めたる宮中府中の區別も、公の墳墓の土未だ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

乾かざるに早く已に忘れんとする乎、之を思はゞ誰か憮然たらざらむや。

若し統監曾禰子にして健在ならば、李容九等を叱して一進會の運動をも防止し得たるべし、李完用を一喝して排日煽動を差止めんとまた難からざるべし、否、然かせざる可らざる也、然るに之を其の初めに抑へず、相互の運動激烈なるに至つて僅かに之を禁む、之を禁むると雖も、彼等恐らくは陽に聞きて而して陰に從はざるべし、殊に排日の如きは、依然として益々擴發すべし、嗚呼斯の如くして統監の威信那邊に在るや、韓國の上下は之より漸く我が統監を輕侮するの氣風を馴致せざるや、吾人實に深憂なき能はざる也、然り、統監政治の前途に少なからざる不安を懐かざるを得ざる也。

英國の大政爭

英國議會は本月十三日を以て解散せられ、廿日總選擧を行ふ豫定也。

自由黨政府は、其の與黨たる勞働黨の歡心を收めて以て多數の人望を繫がんと欲し、養老年金其の他社會政策の遂行に努めたりしがため、歳入に多大の缺陥を生じたれば、地租及び相續税等を增徴して之を補ふの案を立て、然かも之を全部豫算案中に編入したり、若し單行案とすれば、一々上院に於て否決せらるゝ危險あるも、之を一の豫算案中に編入すれば、上院には豫算訂正の權なしといへる五十年來の傳說に由て、容易に上院より否決せらるゝ虞なければ也。

此の政府の財政案は、多數の英國民、殊に勞働者に深く歡迎せられたるも、貴族富豪の徒は、其の自衛上極力之に反對せざるを得ざりき、斯くて下院に於ては約八十日間の討論を盡したる後、竟に之を通過せしめたるに、貴族富豪を代表する上院は、上院に豫算訂正の先例なきも、之を否決するの權利は憲法に於て保障せらる、上院は政府の豫算案を決する以前、先づ本案に對する國民の意向を問はざる可らずと唱へて、竟に大多數を以て之を成立せしめざりき、下院解散は乃ち

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の結果也。

政府黨は總選擧の後更に多數を得ば、上院を改造して、上院の權力を制限し、全く豫算案を可否すると能はざらしめ、其の他重要の議案に就ても、著るしく上院の權力を殺がざる可らずと聲言し、盛んに示威運動を行ひつゝあり。

總選擧に於て、多數勞働者が政府黨に與するがため、政府黨が少くも若干の多數を制すべきこと殆んど疑ふ可らず、然れども英國の基礎たる中流社會の意向は如何、彼等は英國政府の執れる社會政策を全然是認するか、抑も又貴族富豪の利益も相當に之を支持せざる可らずして、統一黨に與する乎、是れ吾人の殊に興味を以て注目する所也。

英國首相アスクイス氏は、愛耳蘭に完全なる自治を許すべきことを聲言したり、之に依て愛耳蘭黨を益々堅く味方とする心算なるべし、政府黨の措置巧は則ち巧なれども、動もすれば、政黨本位の傾向なきにしも非ざるが如し、斯の如くして其の極端に走らば、反動は意外の邊に生ずべし、即ち兩黨の勝敗未だ全く逆睹す可**らざる乎。**

旅順口一部の開放

ウイッテの東巡するや、ダルニー經營の不適當なるを發見し、而してアレキセーフの極東太守たるや、竟に轉じて旅順の大經營に着手したりき。

然も、着手したりし也、未だ其の半をも成すに至らざりき、否、十の一をも成すに至らずして之を日本の手に移したりき、大連棧橋の不完全なる、而して所謂露西亞町の整理したる外、他は廣濶なる道筋を定めたるに過ぎざりしは其の證也、旅順の西部に所謂新市街なるものを作らんとし、幾多宏壯なる官舍邸宅を建築し始め、既に全く建築したるものよりも、建築に着手したるに止まり、今尚ほ足場組立のまゝなる宏屋多きは其の證ならずや。

露國が旅順を如何なる商港とするの方針なりしかは、今にして知ると能はず、或は軍港を西口に移し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の西部に航路を開鑿して完全なる一大軍港と爲し、單に小なる東口のみを商港とする豫定なりしと推想するものなきに非ず、然れども推想は竟に推想のみ。

我が南滿洲鐵道の貨物大に增加して、大連のみにては十分に之を呑吐し得ざるに至るや、竟に旅順の開放を請願し、政府亦之を容れて其一部(多分西口ならん)を開放するとなれり、南滿洲鐵道の力を以てせば、彼の旅順のヤマトホテルを經營するが如く、多くの未成品たる家屋を旣成せしめて、十分に之を利用するとを得べく、一の不凍港を得て、南淸其の他との聯絡にも大なる便宜を得べく、列國また其の慶に依るに至るべし。

旅順の防備は、我れ少しく之を修めしのみ、竟に大に力を用ふるには至らず、英國が威海衛を租借して一の軍港としながら、僅かに軍艦の集合處と爲すに止めたるが如く、我れ今旅順を開放せば、啻だに淸國を安んずるに止まらず、併せて淸國以外の猜疑を消散するに有効なるべし。

吾人はまた併せて關東都督府の廢止を求む、少くも其の縮少を望む、其の學校經營の如き之を南滿洲鐵道會社に托するも可なるのみ。

博覽會費の分奪か

我が日英博覽會事務局は、出品荷造費として文部省へ一萬圓、海軍省へ五千圓を分ちたるも、陸軍省には唯だ三千圓を分てるに過ぎざるために、陸軍省より故障起り、荷造費を增加するにあらずんば、其の舊城壘雛型の出品を拒絕すべく交涉したりしとか。

新聞紙の傳ふる所斯の如し、吾人は實に苦々しく思ふ、博覽會費は英國より贈與せられたるものに非ず、假令贈與せられたるものなりとも、官省としては之を儲くべき筋合もなく、勿論損すべき等もあらず、其の正當に要するものは正當に之を受けて支拂へば可なる等也、其の多少を爭ふ理あるとなし、何ぞ況んや其の費用たる、總て國民の粒々辛苦より成れる租稅なるをや。

事小に似て小ならず、吾人は現内閣の信用、殊に政府部内の信用に取て最も苦々しく思ふ。

内務省の前後の色采

西園寺内閣の内務省は、大臣の原氏、次官の吉原氏、警保局長の古賀氏總て佛蘭西學者なりき。而して桂内閣の内務省は、大臣の平田男、次官の一木氏、警保局長の有松氏總て獨逸學者也、之を無意義なりといはゞ乃ち已む、而かも面白きコントラストならざらんや

看よ、今の内務省が鋭意戊申詔勅の履行に努め、尊徳宗の宣傳に骨折りて、百事質素儉約風を皷吹するに反して、前の内務省は、新聞紙の操縱に、議員の操縱に、政略の卷舒に、總て華美壯麗を主としたりしにあらずや。

一は佛國型也、一は獨逸式也、學派の異同を視てまた其の手段の異同を知るべし。

西園寺侯はチヤキ〱の巴里ッ兒なり、桂侯は田舎漢然たる伯林人也、彼が嘗て此を罵つて苗族といへる、猶ほ巴里ッ兒が獨逸ッ坊を罵るが如きのみ、而して必らずしも一内務省のみに非ざる也。（以上丫丫生）

海外時評

伊太利新内閣と三國同盟

十二月十一日ソンニノ男の新伊太利内閣組織せらる、男は夙に伯林、馬德里、維也納伊國公使館に吏員たり、深く歐洲外交に通ずるの聲譽あり、之を助くるにギッチヤルヂニ伯の辣腕を以てす、知らず如何なる効績を伊國外交史上に遺さんとする乎。

今や伊太利の外交は方さに一變轉機に際會せり、三國同盟は佛國の壓迫を懼るゝの要なき今日の伊太利に執りては寧ろ有難迷惑の結果たらずとせず、否最近三國同盟の勢力を後援としボスニヤ、ヘルツエゴヰナ兩州を合併し盛んに近東に發展しつゝある墺地利こそ却つてアドリアチク海上、伊太利の商權を奪はんとする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

强敵にあらずや、玆に於て平ラコニギに於ける露伊兩帝の會見は起れり、席上近東に於ける現勢維持は宣言せられたり、而して前海相ミラベロオ提督の建艦計畫は是則ち墺國海軍發達を標準として成立せるものにあらざる乎、吁嗟同盟國内の海軍競爭と言ふ、讀者はその餘りに滑稽なるに驚かむ、然かも事實は方に斯くの如くなるを奈何せむ。

左はれ其同盟破棄の決行及其方法に到つては是一箇の難題也、前ジヨリチ内閣が逡巡躊躇したるも、同盟に對して捨て難き情誼を感じたるに非ずして寧ろ利益問題たる方法の一點に苦しみたるに外ならず、知らずソンニノ内閣は如何に之を解決せんと欲する乎。

獨逸の防戰策

之に關聯して思ひ出てらるゝは亦智計百出の獨逸が如何にして三國同盟――無理多き三國同盟の生命を人工的に引延ばさんと力む可きか是也、ウヰリアム二世の親友前宰相ビユロウ公は閑雲野鶴を友とすと稱し羅馬に在るも、その伴侶は恐らくは閑雲野鶴にあらざる可し、近者傳へて云、宰相ベエトマン、ホルウエヒ、羅馬に遊ばんとすと、亦以て其底意を窺知するに足る可からずや。

佛國多事

佛國政界再び多事ならんとす、首相ブリアン氏の選擧區擴張論は選擧法改正運動を再燃せしめ、總選擧期の接近は數年來雌伏したる羅馬教徒をして捲土重來、一種の神聖戰爭を起さしめんとす、然かも之に倍して重要なるは佛國官吏の同業組合問題是也、是より先き佛國都市雇員、税關吏、小學教員、郵便局員等は一八八四年の法律を無視して約二百餘同盟を組織せり、而して其結果如何は今春及今夏同國の商業及交通機關を痲痺せしめたる對政府同盟罷工に於て明かなるものありき、然るに之等多數の官吏同盟は十一月末遂に全國同盟の組織を決議し次て十二月上旬巴里警吏間同じく官吏同盟組織運動を惹起したり、是言ふ迄もなく政府の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

威嚴問題也否寧ろ其生命問題也、忽ち之を放棄せんか、政府は遂に議會以上に壓迫し來る新私設制度の奴隷たらざるを得ざる可し。

孰れにするも佛國は將來の禍害料る可からざる難關に遭會せりと謂ふ可し、左はれブ氏の達腕も恐らくは之を默過するの外無かる可きか、何ぞや、是勢なれば也、而して佛國政府の緩慢就中久しく法相たりし現首相ブリアン氏の緩慢、最此勢を增進したるものなれば也。

露國對芬蘭波蘭

露西亞帝國、嗟乎儕の名が虐政と聯想せらるゝと一に何ぞ久しきや、芬蘭ウイボルグ州合併は中絶せるも芬蘭議會の軍事的立法權は先づ芬蘭人民の意向に反して無法にも剝奪せられんとす、顧みて芬蘭憲法を檢す其第二條に曰く『芬蘭大公國は露國々家の不可分的部分を構成し其内政は獨立の立法に基き別立の機關之を行ふ』と、此句靈あらば其れ正さに號泣せむ、是に於て

平吾人は怪まず、昨年末又々波蘭第四分割説の發生し來りしを。

葡萄牙皇帝外遊

葡萄牙皇帝マヌエル二世、十一月愈丁年に達し給ひ西英佛三國を訪問あらせらる、結婚の御準備なりと口善惡なき京童は傳へ、葡國條約改正準備の爲めと政客は批評せり、御目的恐らくは双方にあるならんか、唯吾人が景仰に堪えざるは陛下が父帝遭難の後に即位あり幾多の難關を經過して却て樂天的氣象一層顯著に發露し來れること是也、斯くの如き者恐らくは輔弼の良臣最も其効に居らむ、然かも帝の多幸なる天稟も亦決して無視す可き所にあらざる也。

英國總選擧

英國下院總選擧、旬日の後に迫る、日東泰平の民屠蘇の醉醒めやらず、街頭和樂の聲滿つるの時、西方の同盟邦は龍驤虎嘯、黨爭今正さに酣ならむ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知らず勝敗は如何、十二月一日上院が七十五對三百五十の大多數を以て前外相ランスダウン卿の豫算案否決動議を通過せるは統一黨側の勝利確信に基因せり、殊に同黨首領バルフォル氏は一九〇六年大敗の汚辱を回復する唯此一與のみと意氣込あり、其意氣愛す可きも、事或は斯くの如く容易ならざらむ。

何ぞや、固より藏相ロイドヂョルヂの豫算案は土地税、遺産税、所得税の各部を通じて所謂革命的、社會主義的たらん、然かも之が放擲を主張する統一黨に到つては無條件放擲を要求せずして同時に貧民税たる可き所謂二志(シリング)食料品輸入税の採用を迫らんとするものなり、又豫算案を否決せる上院は封建の遺物にして其組織眞個の國民代表機關を距ること遠し、その多年の慣例を無視し嘴を財政案に容れたる行動は果して天下萬民の同情を惹く可きか、殊に最近英國政界の特徵は即ち庶民的思想及庶民分子の勃興に在り、蓋し勞働黨が一九〇六年選擧に於て俄然五十の頭顱を議場に占め來る、近來統一、自由兩内閣共、海軍費の膨張に苦しむに關らず、猶資を社會政策に投じつゝある、皆此新現象の刺激のみ、而して庶民分子の勃興は畢竟有資產階級の征伐を意味し、有資產階級の征伐は即ち今回豫算案の如き土地税其他財產税の增加を意味す、知らずバルフォル氏等は如何にして普通選擧と大差なき英國選擧區民が獨り今回に於て俄然上院に味方す可しと信ぜんと欲する乎、將た庶民的思潮と反比例の行動に出づ可しと信ぜんと欲する乎。

翻つて閉會前に於ける英國下院の勢力を見る、曰く自由黨三百六十七、勞働派五十二、國民黨八十二、統一黨百六十六、社會黨二、合計六百七十、即ち知る、統一黨の勝利は正さに過去の員數を二倍するの要あるを、更らに轉じて過去二年間の補缺選擧を檢す、亦以て眞に國民、自由黨内閣に飽くの徵と見る可きものあらず、其れ然り、統一黨の前途は決して其豫期するが如く洋々春海の如くならざる可き也。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歐洲の庶民的思潮

吾人は歐洲政界の特徴として庶民主義の勃興を擧げたり、左はれ翻つて觀すれば歐洲政界孰れの所か此主義と此思想の旺盛を認めざる、之を佛國に見んか、新藏相コシユリー氏の新遺産税案が二割六分と言ふ最高率を定めんとするが如き、官吏社會にまで職業同盟熱勃興し來れるが如き則ち悉く其適證のみ、之を獨逸に見んか、去十月索遜、巴丁諸州議會選擧に於ける社會黨の勝利絶大なりしは如何、之を白耳義に見んか、兵役問題に關する庶民派の富豪征伐は如何、數來數去、讀者は昨年末のみに於てさへ歐洲庶民主義勃興の現象多々なるを觀取す可きを疑はざる也。

米國大統領教書

十二月六日米國議會開會す、翌七日大統領タフト氏教書を送つて盛んに同國内外の關係及將來の施設を論議す、過激なる共和黨の一派失望して曰く無味平凡なり、新經論の見る可き無しと、之を[illegible]もの誰かロオスエルト氏の絢爛超凡なるとタフト氏の圓熟平淡なるとを一層對照せざらむ

唯配慮す可き所は絢爛必らずしも廣深の内容を包蓄せず、平凡時に却て重大の實際的事業を豫示すること也、先づタフト氏の司法改革主張は去一世紀間米民を苦しめたる「訴訟遷延の弊害」を一掃するに在り、州際商業委員會權限伸張の主張はツラスト征伐を完全にせんとするに在り、更に其毎年ドレツドノオト型戰艦二艘の建造を主唱し、兩洋沿岸防備擴張を稱道せるは即ち同國が愈々膨張政策、積極政策を繼續するの證左たらずとせず、若しそれ教書中特に力を淸國問題に注ぎ、日淸協約が米國の極東方面發展を阻害せざるを言明せるに到つては、是豈大統領がモルガン一派の對淸經營に援助し、殊に指を滿洲蒙古に染めしめむるの念深きを示すものに非ずとせん哉。

ロ氏は多く語り多く行ふ、タ氏は多く行ふも少く語る、從つて片言半句は意味一層深長ならずんばあらず、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

況んや片言半句ならざるものに於てをや。

ニカラグア國革命

中米ニカラグア國叛亂は今や一轉革命戰爭となるに到れり、是米國が叛將エストラドに味方し現大統領ゼラヤ氏の沒落を謀れるを以て也。

米人二名の殺害事件とニカラグア、コスタリカ、グアテマラ、三國の不和とを以て十二月二日米尼國交斷絕の原因となすものは是編年史家の徒のみ、米人殺害は却て尼國側に正當の理由あり、三國不和は一九〇七年華盛頓府締結中米協約上、米國の容喙を許すも、國交斷絕は尚早也、然らば則ち眞因は何如、曰く米國の中米併呑策がゼラヤ氏の中米聯邦策と扞格相容れざること其一、曰く巴奈運河完成期の接近が米國の干涉を早めたること其二、

左るにても氣の毒なるはゼラヤ氏なる哉、在職十五年計畫し來れる所方さに水泡に歸せんとす、更らに可憐なるは中央西班牙民族たるかな、血緣を同うし利害を同うしながら、兄弟內に鬩ひて、今や聯合の夢消え、やがて獨立の實も失せんとす。

土耳其と波斯

「歐洲先覺國が亞細亞人の爲めに謀る、是亞細亞人の爲めに謀るにあらず、報酬の爲に謀る也」と、是蓋し齊東野人の言ならむ、然るに之を證明する事實の餘りに夥多なるを奈何せむ。

十二月中旬土耳其內閣總辭職說起りぬ、是チグリス、ユーフラテス兩河に於て許したる英人航業獨占の爲にあらざりし乎、吾人は是に於て最近波斯政府の露英借款五百萬圓問題につき少しく懸念無きを得ざる也。(以上懷沙隱客)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

過去一年間の政治、財政、外交、思想、文藝

△政治

四十二年の我が政治界は甚だしく非凡ならざるも、亦平凡と稱すべき年にはあらざりき、試みに其の重要なる部分を擧げん。

第二十五議會は四十一年十二月廿二日を以て召集せられ、廿五日聖駕親臨、開院式を擧げさせ玉へるが、四十二年三月廿四日議事を畢り、翌廿五日閉院式を施行、而して第二十六議會も、當臘廿二日を以て召集せられたり。

(一)新政黨問題の顛末

第廿五議會中最も政會の耳目を惹けるは新政黨組織の計畫なるべし、曾て西園寺内閣に反對し、併せて政友會を敵とするがため、進步黨の一部人士は曾て犧多村と罵れる大同俱樂部とも提携して、一大同盟を作らんとしたりし事あり、西園寺内閣意外に脆く倒れて、桂内閣之に代るや、彼等は稍々阿然自失の姿なりしも、尙は政友會が依然として多數を占むるに對し、之と角逐すべき政黨を作らざる可らずとし、隱約の間に其の計畫を進めつゝありき、蓋し彼等は以爲らく、其地方地盤よりすれば、進步黨と政友會とは略々相當るに足る、然るに進步黨の勢力政友會の半にだも當らざるは進步黨が常に藩閥打破といふが如く時代後れの陳腐論を株守して、甚だしく政權に遠ざかるが故なりとし、政友會に倣ふて欵を桂黨に通じ、之と一致して以て速かに政權に近接するに如かず、故に大隈伯が輕卒に大言壯語して全黨を窮境に立たしむるを嫌ひ、巧みに伯と手を斷ちて、更らに桂黨と握手するに努めたりき。

然れども桂侯は伊藤公あるがため、濫りに政友會を切崩すことを得ず、既に切崩さずして多數黨たらしむる以上、之と妥協するを便なりとして、進步黨の希望に從はず、進步黨の策士等は、若し政友會と略々相當るに足る政黨を組織せば、桂黨の一味翕然として之に來り投ずべしと豫想し、四十二年の初め公然新政黨の計畫を發表したり、即ち二月廿四日の常議員會に於て、交涉委員を撰定し、更に廿七日の同會に於て、犬養毅氏を除名することを決議するに至れり、犬養氏は桂黨等果して陣頭に立たば強ひて新政黨を非とせざるべきも、彼等が容易に起らざるを知り、彼の大同俱樂部と合同して官僚に黨するを非なりと唱へ、容易に新政黨の計畫を贊せず、大同派の多數また犬養氏を喜しとせざるあり、黨中の多數も亦犬養氏の偏狹を苦めるを以て常議員等は、斷じて犬養氏をすら斬

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば、形勢直ちに定まるべし爲し、竟に除名を決行せる也。

然るに此の除名處分を殘酷と爲すの聲高く、世上の同情多く犬養派に歸し、進歩派の多數かた犬養派に屬し、策士等の計畫全く齟齬するに至れり。

茲に於て新政黨の組織に意ある又新會の河野、堀田の諸氏更らに發起人となり、自から綱領を發表して同志の糾合を求めたるも、又新會內部にも、亦犬養派と行動を倶にせんと欲するものあつて一小紛を生じ、而して戊申倶樂部、大同倶樂部等また逡巡して動かざりしかば、交渉容易に進まず、三月廿三日又新會は現狀維持と決して自から其の交渉を中止するに至り、新政黨計畫全く頓挫したり。

進歩黨にては犬養派（非改革派と稱す）、非犬養派（改革派と號す）と相分立して暫らく正朔を爭ひ、犬養派は三月廿二日大會を開て自から進歩黨本部を名乘り、旭館に事務所を置けるが、非犬養派は日本精製糖會社の賄賂問題よりして數名の代議士を失ひ、氣勢益々挫けしかば十月初旬より、犬養派に媾和を求め、無條件を以て全然黨を犬養派に讓れり、實に十月十五日也、而して新政黨の計畫は當分殆んど見込なき姿となれり、蓋し桂侯の竟に手を下さざると、進歩黨の幹部一變して、新政黨組織に意なき故也。

（二）貴族院の形勢

貴族院には政友會未だ容易に手を下すの餘地なかりき、然るに西園寺內閣が其の多數の中堅たる研究會より領袖の堀田正養子を拔擢して司法大臣に爲すや、天下擧げて愕然たりき、而して堀田子の一派は是より心を政友會に傾むくるに至れり。

政友會の役員とまでなれる秋元興朝子は又別に貴族院中に談話會なるものを創立し、研究會中の尙友會（子爵團體）を分裂せしめんと策したりき、子は揚言すらく、政黨は時代の必要に由て生ず、今の貴族院と雖も憲政黨なきを得んやと、子は立憲政治は即ち政黨政治に外ならずとする思想を懷き、非政友主義の中堅たる研究會を粉碎せんには、先づ其の大多數を占むる子爵團體の尙友會を突崩すに如かずと做すが如し、此がため尙友會と談話會の衝突辛烈を極め、七月十日の補欠選擧の際には殆んどいふに忍びざる運動をすら見るに至れり、選擧の結果は素より尙友會の勝となれるも、談話會が挫せず倦まず、巧みに新聞紙を利用して運動に寸時の懈怠なければ、漸く當さに一敵國たるべき乎

研究會に屬する伯爵も、亦十數名相率いて脫會し、別に伯爵同志會なるものを組織して桂內閣反對を標榜せり

研究會、茶話會、無所屬等を合して、桂黨に與みするもの尙ほ多數にして、政友會は未だ到底幟を立つる能はずと雖も、其の熱心を以て倦まず休まず、機會ある每に步一步を進めば、或は侮る可らざる勢力と爲るや知る可らず、但し政黨臭味を貴族院中にまで流及せしめ、所謂貴衆兩院を縱斷すると、理に於て果して至當なりや否やは、識者の須からく研究を要する點なるべし。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（三）高等商業學校の紛擾

東京高等商業學校には、商科大學たる希望あり、貴衆兩院に運動して既に建議案をも提出せしめたるが、現文部大臣小松原氏は、此の問題解決に手を染め、四月廿二日大學教授會に訪問し、同會より、法科大學會に經濟科の外、更に商科を設くるの答申を得、五月一日大學評議員會を開き、商科を法科大學内に置く事、入學者を高等商業學校卒業生より取り、九月より其の講座を開くことを決し、六日省令を以て高等商業學校の專攻科向ふ二ヶ年後廢止さるゝことを公示したり。

教授中には、商科及工科農科と相並びて獨立する能はず、僅かに法科内に設らるゝを快しとせず、竟に辭職して而して暗に生徒を煽するものあり、卒業生の團體たる同窓會の崛起するあり、全校生徒が擧て同盟休校を企つるに至り、新聞紙また之を誇張し煽動して著るしく世上の耳目を惹けり。

茲に於て實業家三團體は澁澤男、中野武營氏等を仲裁人として生徒を慰撫し、一面には政府間に交渉する所あり、仲裁者は法科内に商科を置くを延期し、專攻部廢止の省令を取消さんことを桂首相に求めたるも、首相は六月廿二日の閣議に於て、專攻部存續期間二ヶ年を六ヶ年に延期して、以て現在生徒の既得權を侵害せざることに決定したりと告げ、前の要求を拒絕したれば、委員も餘儀なく廿三日委員會に之を報告し、生徒等も竟に之を納得するの外なくして事全く落着したり。

（四）代議士瀆職問題

日本精製糖會社は、其の重役中、不正の所業を爲すものありとて拘引せられ、其の結果[illegible]會當時に於ける砂糖官營法案提出事件に就て、會社より議員に贈賄したる事實發覺して、政友會、進步黨、大同俱樂部所屬議員の拘引せらるゝもの多く、議人皆顏色を失へるが、五月八日豫審決定し、七月三日裁判宣告あり、其の決定左の如し。

重禁錮十ヶ月　松浦五兵衛　長谷川豐吉　横田虎彦　白井哲夫　西村眞太郎

重禁錮八ヶ月　荻野芳藏　澤田寧　今田鎌太郎

重禁錮六ヶ月　栗原亮一　森本駿　横井時雄　村松愛藏　江崎巖二

重禁錮四ヶ月　佐藤虎次郎　奥野市次郎　島津良知　河崎東藏　安

重禁錮二ヶ月　田村惟昌　木村半兵衛　關野善次郎

追徵金九千五百圓　小澤愛次郎　中村忠七

同二千圓

同二千圓

同貳萬圓

同七百圓（共同責任）　松浦五兵衛　栗原亮一　森本駿　白井哲夫　河崎東藏　西村眞太郎

同六百圓（同上）　西村眞太郎　安田勲　西村眞太郎

同六百圓（同上）　田村惟昌　西村眞太郎

同四百圓（同上）　木村半兵衛　西村眞太郎

同四百圓（同上）　關野善次郎　西村眞太郎

同八千三百圓　西村眞太郎

同二千五百圓（共同責任）　横井時雄　松浦五兵衛　澤田寧

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

金額	氏名
同二千五百圓(同上)	村松愛藏　澤田宇衞　松浦ハ兵衞
同千四百圓(同上)	荻野芳藏　澤田宇衞　松浦五兵衞
同八百圓(同上)	奥野市次郎　澤田宇衞　松浦五兵衞
同千六百五十圓(同上)	島津亘知　澤田宇衞　松浦五兵衞
同三千圓(同上)	長谷川豐吉　佐藤虎次郎　小澤愛次郎　澤田宇衞　松浦五兵衞
同一萬八千百五十圓(同上)	澤田宇衞　松浦五兵衞　川島龜夫

無罪　森本駿　奥野市次郎　島津亘知　木村牛兵衞

三年間刑の執行猶豫　關野善次郎　中村忠七　今田鎌太郎

醜中の醜なるものと謂べし、唯だ臼井哲夫が單獨にて二萬圓を得しは彼れ一人之を懐にたるに非ず、實に大同派の殆んど全部に分てるなるも、彼れ一人罪を負へる結果なりといふ、同じく惡人といへとも些か俠骨ありと稱すべき乎。

(五)大官の更迭

屢々辭任すと傳へられて、屢々留任したる伊藤公は、六月十四日韓國統監を免ぜられて樞密院議長に任じ、副統監曾彌子統監に昇任し、而して樞密院議長山縣公は樞密顧問官に任ぜられたり、京童の傳ふる所によれば、伊藤公は歸朝每に統監辭任を申出づるも、然かも其の本意に非ず、元老閣臣等をして强ひて其の留任を求めしめ、之を容るゝと共に、自家の要求に聽從せしむるを慣手段としたりき、今度も亦其の手に出でしも、桂内閣は空惚けて、斯くまで辭意ある公の老軀を勞するは本意にあらずといひ、竟に公の辭任に從へるにて、公は寧ろ意外としたる程なるべしと、果して然る否や。

六月十六日田中伯宮内大臣を免ぜられ、侍從職幹事岩倉公、宮内大臣となり、同時に渡邊子内藏頭を兼て宮内次官に任ぜらる渡邊子の次官たる、世間多少不滿の聲なきに非ず、然れども其の手腕は之を認めざる可らず。

六月十五日鐵道院幹部更迭す、始め鐵道院成るや、遞相後藤男其の總裁を兼れ、平井氏其の副總裁に任ざられしが、玆に至て院の部を分ち、平井副總裁を計理部長とし、山之内理事を運輸部長とし、前田理事を總務部長とし、更に鋭意して冗員陶汰を行ふ。

十一月六日左の更迭あり

特命全權大使兼特命全權公使　内田康哉
免兼官墺國駐劄被免
米國駐劄被仰付

特命全權大使　高平小五郎
米國駐劄被免

特命全權大使　荒川己次
墨國駐劄被免、西班牙駐劄仰付、葡萄牙國駐劄兼勤仰付

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

後に數月在[illegible]夫氏[illegible]國駐箚[illegible]命せらる。

(六)伊藤公暗殺さる

伊藤公は十月廿四日大連を發して満洲に旅行せり、蓋し始めて満洲に遊べるなるが、恰かも東亞に來れる露國藏相コヽツオフ氏と哈爾賓に於て會見すべく、廿六日同所に到りき、蓋し彼と會見せば、日露の親交を申ぬべき何等かの機會を捉へ得べきを期せしが如く、露國藏相も亦暗に之を期待せしに似たり。

然るに公の哈爾賓停車場に著し、露國官憲及び在留日本人の歡迎を受くるや、突如韓國の刺客安重根に狙撃せられて殪れたり、享年六十九、遺骸は即日哈爾賓を發し、大連を經て軍艦秋津洲にて横須賀に送られ、十一月四日國葬を以て日比谷公園に於て式祭を行ひ、大森の谷垂に葬むる。

我が國民の感情は實に昂騰の極に達せり、而して韓國君臣の危惧するもの多く、或は乘じて以て事を構へんとする策士あり、竟に韓國一進會の合邦上奏となり、韓國の政界頗ぶる紊れたり。

政治の實狀に影響すると少しと雖も、公の死は我が國民の感情を動かせし一事に於て、實に四十二年中の最大事項なりき。

(七)實業團の渡米

米國聯合商業會議所に招待せられし我が實業團は、澁澤男を團長とし中野武營氏を副とし、團員五十餘名、八月十九日を以て横濱を出發し、九月一日シヤトルに上陸し、シカゴ、紐育、華盛頓を經て桑港に出て布哇を經て十二月十七日歸朝したり、其の日米親交に資する所ありとして、政治上にも多少の價値あるとは、何人も之を認識し得べし。

(八)電車問題

東京電車は、四十一年十二月廿二日を以て其の賃率を引上て五錢均一(現在は四錢均一)と爲さんと欲して之を東京府知事に請願したり、府知事は之を許すの當然なるを認むるが如くなりしかば、時論沸騰したりしが、聰明なる内閣は其の取捨に惑はず、四十二年一月十九日府知事より該願書を申達するや、廿二日直ちに之を却下したり。

然るに市會及び其の他の方面には、更らに電車を市有とすべしと計畫するものあり、頻りに政府の意向を問ひしかば、十月十六日遞信大臣官舍に於て、後藤遞相と平田内相と立會の上、尾崎市長、大岡市會議長、を招きて政府の意向を明示したり、是より市は鋭意して市有の計畫を立て、十一月十六日五千八百萬圓を以て電車買收の案を定めて市會に提出して之を可決せしめたり、然るに會社は十八日重役會議の結果、斯る低價にては到底市の交渉に應ずる能はずとして謝絶し、後二三の仲裁者出でしも、政府が是れ以上の高價にて買收するとを許さゞる意向なるとを探知し、竟に其の運動を中止したり。

想ふに電車問題は、今年中に於て必らず世を動かすものあらんか、吾

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人は興味を以て其の時機を俟つ。

(九)韓國鐵道合併

韓國鐵道を帝國鐵道院の支配に屬せしむべき諸法令は、十二月十六日の官報を以て公示せられたり、斯くして事實共に韓國の交通機關を我が手に收む、既に外交、軍備、交通、司法を我が手にし、財政、教育まで半以上我が手に在り、斯くして保護國といふも屬國といふも、事實に於て何の差ありや、世人は其の名に拘らずして其の實を看るを要す

(十)飛行機調査

飛行機の調査研究は、四十二年に於ける世界の大流行なりき、去れば我が陸軍省は、約六十萬圓の費用を以て臨時氣球研究會なるものを組織し、長岡中將を委員長とし、諸工學博士及び陸海軍の佐尉官を其の委員としたり、飛行機の材料たる紙、絹、竹、漆共總て我が國の特產にして自然に諸材料を具備す、吾人は完全なる發明の必らず我が國より出でんことを期待す。

△財政

(一)第二期財政計畫

桂內閣の第一期財政計畫、即ち四十二年度の豫算は、吾人之を昨年一月の本誌に詳報したりき、茲には先づ桂內閣の第二期財政計畫の大要として、桂首相が九月十五日銀行倶樂部に於ける演說の全部を左に掲ぐべし。

今夕は御招待を蒙り全國重要銀行を代表せらるゝ諸君と食卓を共にするの機會を得たる處只今豐川會長より諸君を代表せらるゝの意味を以て昨年本官就職以來の我國財政經濟上の變遷を叙述せられ其間本官の採りたる方針が幾分良好なる影響を有するの傾ありたりとの御言葉を受け深く光榮とすると同時に財政經濟上僅かに整理改善の緒に着きたるのみにして將來施設經營を要する重要問題甚だ多き今日に於て只今の如き鄭重なる御挨拶を受くるは時機未だ尚早なるの感あり幸に從來の方針にして多少にても良好なる効果を奏したることを認めらるゝ以上は何卒今後も諸君と共に力を協せて益財政の整理經濟の發達の爲充分盡瘁して以て他日大に我經濟界の繁榮を祝福するの時機を作るに努めんとす。

▲財政經濟の經過　昨年九月當會開會の際は病氣に妨げられ出席することを得ざりしも當時政府に於て決定したる財政上の方針に付ては同僚後藤男爵より大要を陳述し御參考に供したり其の後政府に於ては其の方針に基き計畫を立て豫算を編成し議會に提出したるに其協贊を得て財政計畫は具體的に確定することを得て目下之が實施中に屬するは諸君の承知せらるゝ所なり顧るに過去一年間に於て內地經濟界は一二不祥なる事件の發生ありたりと雖も幸にして財政經濟の根底既に鞏固となり加ふるに金融機關を指導せらるゝ諸君の措置其の宜を得殊に我全國民が深く刻下の情勢を認識し發奮自彊の決心頗る固かりしの結果動搖の影響は一部局に限られ而かも此間事業界に於ては玉石の別判明し善悪の淘汰に依りて自然の整理行はれ經濟界は歩一歩鞏健なる氣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

債を告け一方に於ては公債其他有價證券の市價漸次恢復し又一方に於ては外資相次て流入し一般金融は著しく緩慢となり目下の情勢を以て判斷すれは今後特別なる出來事なき以上は我が經濟界は特に懸念すべき事情なきに至りたるは諸君と共に深く欣ぶ所なり。

昨年決定したる方針に基き既に實行したる所を簡單に繰返して述べんに。

（一）歳計上に於ては確實の歳入を以て支辨し得る程度に於て歳出の計畫を定め以て歳出入の均衡を維持し。

（二）一般計上未募集公債を打切り將來に於ても特別なる例外を除き公債財源に依頼することを避け且つ既存公債に對して其償還額を増加し以て一般公債の信用を高め。

（三）鐵道の經營を獨立自營のものとし一般會計と鐵道會計との間に於て相互に累を及ぼすことなからしめたるものにして。

以上の方針は實に財政の基礎を鞏固に維持するが爲最も緊要なるものなるが故に此根本方針は今日少しも之を變改するの必要なきのみならず將來永く此方針を以て終始一貫するの決心なり此點は之を再言するの必要なきも世或は誤解を爲すものなしと限られざるを以て此機會を以て特に一言す。

▲第二次財政計畫　政府は既に實行したる財政整理を以て我事終れりと爲すものにあらず事の緩急を計り財源の如何を察し漸次整理の歩を進め以て戰後の財政整理をして能く終始する所あらしめんとするは本官就職當初よりの決心なり故に來年度豫算編成の時期に入るに先ち既定十年計畫の大本を動さざる範圍内に於て更に四十三年度以降實施すべき整理の要項を定め今や其の決定方針に基き豫算の編成中なり參考の爲方針の綱要を述べんに。

（一）税法に付ては負擔の衡平を圖ると同時に成るべく國民の企業に適り其最も苦痛とする所を除くの必要を認め幷に財源を得て税制の整理を爲すこと。

（二）四十一年度[illegible]を生ずるの見込なり其内急要已むを得ざる經費の財源に充つべきものを除き殘額は之を國債整理基金に增加繰入するとせり四十三年度の國債償還額は既定の國債償還計畫に基き本年度中に償還したる元金に對する利子不用額丈けを更に元金償還額に增加するの結果本年度より増加して約五千三百萬圓となるの計算なりしが前述の剩餘金を繰入する爲結局其金額丈けは更に增加する譯なり。

（三）多年の宿題たる官吏增俸も永く猶豫すべからざるを認め明年度より現在俸給の三割を標準として之を實行するの案を立てたり而して行政の各部に亘り出來る丈け經費の節減を加へ之が財源の一部に充つるの計畫なり。

本官は常に政府と國民とは同一體にして喜憂を共にすべき者たるを確信するが故に政府は堅實なる施設に依て以て民福の增進を圖り財政經濟共に步調を一にして國運の發展に資するを以て唯一の目的とす昨年財政整理に着手したるは全く此精神に出てたるものにして明年度の財政計畫も亦一に此精神に基くものなり。

▲税法整理の要項　我國民の負擔は大戰役を經過したる結果として急激なる增加を告け殊に戰時中急速に税制を施行したる關係上租税の賦課衡平を失したるものなきにあらず故多少賦課過重の反響を呈するに至りたるを以て之を相當整理するの必要を認む併しながら國家が當然の任務として經營施設を要する事項は國運の發展に伴ひ益々多きを加ふるの場合に於て歳入を減入するは甚だ困難なるが故に歳計に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實なる基礎を動かさゞる範圍內に於て稅法の整理を實行するの案を立てたり大戰役を去ること未だ遠からず國政日に發展するの時機に於て幾分なりとも財源を得て稅法整理を實行することを得るは深く喜ぶべき所なり

▲國債償還金增加　國債償還に付ては昨年償還額の增加を決定したる以來幸に內外の信用が恢復し公債市價は近來著しく騰貴したることと諸君の熟知せらるゝ所なりと雖も深く我が國運隆興の趨勢に鑑みるときは未だ滿足の程度に達したりと認むることを得ず故に國債償還の計畫を愈適切有效のものたらしむるの必要を認め來年度に於ては歲計上の純剩餘金を利用し償還資金を增額することゝせり歲計剩餘金は性實上長期に亘るべき經常經費の財源に充つるの不可なるは明かなる所なるのみならず之を國債償還額の增加に使用するときは我國產業界全般を通じて最も不足を感ずる事業資金の供給を潤澤ならしむる所以となり其結果內地產業を誘掖振興し從て又廣く上下の階級に涉り國民の負擔力を增大することを得稅法整理と相俟て直接間接に國力涵養の效果甚大なるものと確信す之れ實に目下の狀態に於て國力の發展を來すべき積極的政策なりと思考す

▲民間經濟の順況　明年度財政計畫に關する方針の要項は以上述べたる如きを以て經濟界に於て極めて有力なる地位を占めらるゝ諸君は何卒此の趣旨を諒せられ益々我經濟界の發達に盡力せられ以て戰後の經濟的經營の美を完くせられんことを切望す我國最近の經濟狀態は屢々述ぶるが如く資金潤澤にして而かも今日となりては米作の豐穰疑もなく又た各方面の猶豫も漸次平癒し前途懸念すべき事情なきのみならず歐米經濟界も豫期の如く漸次好況に向ひつゝあるが故に諸君に於ても此狀態を利用せられ而して又一面には前年來の覆轍に鑑み飽までも堅實穩健なる步調を以て經濟的經營に從事せられんことを望む。

▲帝國外交の好良　今や帝國と締盟諸國との關係は極めて良好且つ親善にして就中日英の同盟は兩國政府及臣民の交も深厚なる友愛同情を基礎とし益々鞏固を告げ常に平和の有力なる保障となり米國との間に在りては目下我實業家の往訪中にして兩國經濟界の有力者は親しく意思の疏通に努め又清國との間には一時解決に惱みたる諸種の懸案も今や兩國の交讓妥協の誠意に依りて圓滿なる解決を遂ぐるに至りたるは兩國善隣の關係上最も幸慶とする所なり要するに四圍の外交關係は頗る圓滿且良好なるを以て諸君は此最好の機會を利用せられ通商貿易上又は對外的企業上に於て外に對しては深く商業上の德義を尊重し自他相利するの互惠的精神を以て圓滑なる取引關係を結び廣汎なる市場を開拓するに注意し內に在ては同業相提携し各種事業者間の連絡を保持し一致協力以て將來永遠の利益を開發するに奮勵努力せられんことを熱望して已まざるなり。

（二）稅制整理

桂內閣の稅制整理なるものは、大要左の如し、地租輕減論に對して果して如何の成行を看るべきか、殊に注目を要す。

政友會に於て原、松田、元田、鳩山の諸氏が地租輕減問題を密議するや、他は皆輕減の意向を發表すべしと主張し、而して原氏一人獨りに之を發表して爾後の自由を拘束するの非なるを論じて聽かず、斯くと漏聞せる桂首相は、先づ若槻大藏次官をして西園寺侯を訪ふて四十三年度豫算の大體を說明し、以て其の同意を求めしめ、次て首相自から西園寺侯を訪ひ、財政に對する侯の同意を求むると共に、地租問題に就て與黨の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論議あるとを暗示し、且つ大宮をして、更に原氏を助ふて同一意思を通せしめ、西園寺侯また桂首相を助ふて讓意を致せりと聞く、素より十分に確約せしにわらざるも、妥協の端緒は既に已に開かれたりと謂べし。

△四十三年度より減税となるもの

△所得税(減税額四百五十萬圓) 現行課税累進率は所得額別の前階級と後階級との間に大なる不公平あるを以て(假へば九百九十九圓の所得者の税金は十一圓九十九錢なるに千圓の所得者の税金は十五圓なり)今回の改正案に於ては超過累進率を設け後階級は前階級より超過したる部分に對してのみ累進率を適用し以て負擔の公平を計ると同時に脱税の弊を防ぎ又現在の所得金額十二階級を更に二十二階級に細別し各階級間の税率の差を少からしめ且第三種所得を資産所得勤勞所得の二種に區別し前者に對しては課税率の十即ち其全額を課し後者に對しては課税率の八を課する事とし多額所得及び法人所得の課税率は幾分か高めたり。

△砂糖消費税(減税額二百萬圓) 砂糖消費税の改正要點とする處は現行の一二三四の階級を六種に區分するにあり即ち其種類及税率は左の如し

第六種 和蘭標本二十五號以上に相當するの消費税額百斤に付十圓
第五種 同標本二十五號未滿にして同上九圓
第四種 同標本二十號未滿にして同上八圓
第三種 同標本十八號未滿にして同上七圓
第二種 同標本十五號未滿にして同上五圓
第一種 同標本十一號未滿にして之を甲乙の二種に區別し乙は同上三圓甲は二圓とす。

(備考) 甲は樽入れ黒糖の最劣等のものを指すものなり。

△織物消費税(減税額百萬圓) 現行毛織物税率從價の一割五分は高きに失するを以て漸次毛織物の消費は他の織物に移り内地毛織物製造事業の發達を阻碍するの嫌あるを以て他の織物税率同様從價の一割を以て課税率とす。

△通行税(減税額約百萬圓) 交通の頻繁なる市内通行税を廢止せんとするものにして市内通行税の範圍は單に行政區畫の理想にのみ依る能はざるを以て市内通行に準ずべき範圍は命令を以て之を定むることゝなるべし。

△相續税(減税額三十萬圓) 相續税の改正要點とする處は家督相續人は財産を承繼すると同時に家族扶養の義務を負ふも遺産相續人は單に財産を承繼するに過ぎざるを以て家督相續の税率を輕減するは我國固有の家族制度を尊重する所以なれば現行法の家督相續の場合に於ける課税價格五千圓までは、千分の十二とあるを、千分の十と改正すると同時に現行法にては相續税を課せられたる後三年以内に相續開始したる場合に於ては相續税を免除すとあるを五年以内と延長し五年以内に於て更に相續開始したる場合に於ては相續税を半減すとあるを七年以内と延長したり

△酒造税(延納額卅萬圓) 醤油と同じく酒精の税金を三ヶ月延納を許す事とする結果翌年度へ繰越となるものなり。

△四十四年度より減税となるもの

△營業税(減税百五十萬圓) 營業税の改正要點とする處は物品販賣業の中にありても其業體により收益に大小多寡の差異あるを以て其業體により税率に等差を設け以て負擔の公平を計ると同時に製造業の課税標準は資本金額に重く倉庫業の課税標準は建物賃貸價格に重き税率を適用する事等を以て重なるものとす而して營業税の四十四年度に至らざれば減税とならざる理由は營業税は毎年一月の申告に基き其税額を決定し五月及十二月の二期に之を徴收するものなれば四十四年度に至らざれば改正法を實施し能はざるが爲めなり。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△宅地價修正（卅萬圓の増加）　宅地價の修正は賃貸價格の十倍を以て修正地價とし賃貸價格の十倍が現在地價の廿倍を超ゆるときは現在地價の廿倍を以て修正地價とし以て負擔の偏重を矯正せんとするにあり但し宅地價の修正には約一ヶ年半の調査日子を要するを以て四十四年度に至らざれば實施し能はざる由。

△外　交

（一）日韓新協約

伊藤公は韓國統監を辭して樞密院議長に任ぜらるゝや、韓王へ御暇乞と稱して、七月一日大磯を發して京城に至り、曾禰統監と共に韓國の臣民と會見し、同十九日歸朝し、廿日參內したり、而して日韓間に訂せられし覺書は、左の如く廿四日を以て發表せらる。

覺　書

日本國政府及韓國政府は韓國司法及監獄事務を改善して韓國臣民幷に在韓國外國臣民及人民の生命財産の保護を確實にするの目的と韓國財政の基礎を鞏固にするの目的を以て左の條款を約定せり。

第一條　韓國の司法及監獄事務の完備したることを認むる時迄韓國政府は司法及監獄事務を日本國政府に委託すること。

第二條　日本國政府は一定の資格を有する日本人及韓國人を在韓國日本裁判所及監獄の官吏に任用すること。

第三條　在韓國日本裁判所は協約又は法令に特別の規定あるものゝ外韓國臣民に對しては韓國法規を適用すること。

第四條　韓國地方官廳及公吏は各其の職務に應じ司法及監獄の事務に付在韓國日本當該官廳の指揮命令を受け又は其の補助を爲すこと。

第五條　日本國政府は韓國の司法及監獄に關する一切の經費を負擔すること。

右各其の本國政府の委任を承け覺書日韓文各二通を作り之を交換し後日の證とする爲記名調印するものなり。

明治四十二年七月十二日　統監子爵　曾禰荒助

隆熙三年七月十二日　內閣總理大臣　李完用

我國に於ける覺書の發表と同時に、韓國に於ても發表せられたるが、元來韓國司法機關は、事實上日本人に依りて運用せられつゝありしを以て、今回の覺書に依り、名實共に我國に收め得たるものと云ふ可し。而して韓國軍部の廢止に關しては、覺書中何等の規定する處なかりしかども、同三十一日に至り、韓國皇帝は左の詔勅を發しぬ。

朕は將來官民の發達程度が増兵を要する時に至るまで軍部及び武官學校を廢止し現在兵を宮中親衞兵に置き之を管掌せしむ士官の養成は之を日本國政府に委託して軍事を練達せしむ爾來庶朕が意を體せよ

同時に勅令第六十八號を以て。軍部の廢止、親衞兵設置の件を發表せられたるが、左の如し。

勅令第六十八號

一、軍部を廢して宮中に親衞府を置く、親衞府官制は別に之を定む。

二、從來軍部に屬する歲入歲出豫算の全額及び財産は、總て宮內府に委囑せしむ、現に不用に屬する財産は度支部所管に委囑す。

三、陸軍武官學校は之を廢止す、其時期は別に之を定む、武官の養成

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は日本國に歸屬するものとす。

四、現在の將校並に將來日本政府に委託養成するものは、日本軍隊に託して軍事を實修せしむ。

五、將校は休職となりたる時は、其俸給半額を受け、停職となりたる時は俸給三分の一を受く。

六、將校の現役を放るゝ時は、別に定むる所に據り恩給を受く。

附　則

本法は發布の日より施行す。

去て八月十五日韓國銀行に關する覺書發表せられたり、全文左の如く韓國の中央金融機關は、全く我が手に歸せる也。

韓國銀行覺書

日韓兩國政府は韓國銀行の設立に關し左の條款を協定す。

第一條　韓國政府は韓國銀行を設立し之に兌換銀行券を發行するの權を與へ韓國中央金融機關たるの業務に從事せしむるの外日本銀行の委託あるときは日本國々庫金の取扱を爲さしむべし。

第二條　株式會社第一銀行の發行したる銀行券は韓國銀行の發行したるものと看做し韓國銀行は其の銷却の義務を承繼するものとす。

第三條　韓國銀行の株式は日韓兩國人に限り之を所有することを得

第四條　韓國銀行の重役は當分の中日本人を以て之に充つべし。

第五條　韓國銀行は韓國政府持株以外の株式に對して爲すべき利益配當が年百分の六の割合に達する迄は韓國政府持株に對し利益配當を爲すことを要せず。

第六條　韓國政府は韓國銀行創立後五箇年間は同國政府持株以外の株式に對し年百分の六の割合の利益配當を保證するものとす。

右覺書日韓文各二通を作り之を交換し後日の證とする爲め記名調印す。

明治四十二年七月二十六日

隆熙三年七月二十六日

統監子爵　曾禰荒助　印

内閣總理大臣　李完用　印

（二）對清問題の解決

安奉線問題に付、我が政府が八月六日自由行動を取るの聲明を爲すや、清國政府は極めて敏速に事を決せんとし、同十三日交渉の旨趣を通告し、同十九日奉天總督錫と我が小池總領事との間に覺書を調印し、九月四日更らに我が伊集院公使と彼の梁外務尚書との間に於て、滿洲、間島に對する兩覺書の調印を行へり、其の全文及び顛末は、當時吾人の詳論したる所なれば、茲に架説の要を見ず。

安奉線の守備並びに警察權問題は、昨今交渉中するが、必らずや互讓を以て相當の決定を看んと吾人の疑はざる所也。

（三）清國の近狀

兩宮崩御以後、攝政監國王載灃治を圖つて施設頗ぶる看るべきものあり、一刀兩斷に袁世凱を斥け、更らに其の後任として直隸總督となれる端方を罷めたるが如き、秋霜烈日の威、殆んど人をして襟を正さしむるものあり、中外の聲望を繫げる張之洞死せるも、清廷少しも動搖の色なく、政機の中樞全く攝政王にあると分明したり、將來の事最も刮目して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

看るべき乎、吾人また筆を更めて之を詳論せんと欲す。

憲政準備の一端と稱せられし諮議局は、十月十四日より各省一齊に開催したり、然るに各省共官民の衝突多きも、是れ始めより豫期せられしこと也、吾人は清國が迷ふことなく、遲疑することなく、遲くも其の宣約の如く憲政を開創せんことを望む、今にして之を避けんと欲するも到底能はざれば也。

（四）布哇移民問題

我が外務大臣は、第廿五議會に於て、「我が移民を多く滿韓方面に集合して、米國よりは漸次手を引かん方針なることを演述したり、此の方針の是非は今姑らくいはず、唯だ此がため米國にある我が勞働者の慘狀は、殆んど看るに忍びざるものあらんとす。

布哇に在る我が勞働者が、一ヶ月の勞働賃銀十八弗を廿二弗に引上げんことを要求して同盟罷工を企つるや、其の計盤は幾波瀾の後、全く失敗したり、然れども耕主は彼等の緘默したりし後、多少賃銀を增加することとして、少しく我が面目を立てたるが如し、然れども彼等が露國又は韓國より多く移民を招來せんといふこと、果して一場の虛喝に過ぎずんば、我が布哇移民の前途甚だ樂觀す可らざる也。

（五）日露戰爭說否認

露國方面には、時々日露開戰の傳說あり、伊藤公が哈爾賓に至りて露の藏相コ、ツオフ氏に會見せんとするや、伯林方面よりは日露同盟說を傳へ、而してノオウヴレミヤ新聞は却つて日露再戰の避く可らざるを呼號したることすらあり、吾人は素より寸分も惑ふ所なしと雖も、露國並びに歐洲の一部には、尙ほ頗ぶる不安の心を懷くものもあるべし。

然るに露都に於ては、半官的に詳細を告知して曰く

日露戰爭起らんとすとの風說あり且極東より到る不穩の報道又新聞紙上に滿ち爲めに特に人心を激動せるの狀あるは最近新紙上に明かなり此感情は遺憾なる狀態を以て一層廣大の範圍に伸及せんとす而して目下の諸報に依れば我極東の邊疆に於て此風說の影響殊に強きものあるが如し即ち同地に於ては日露戰爭避く可らずとの信念社會人心に浸潤し官吏間にさへ及び爲に不安の念は昂進し直接に私人事業に影響しつゝあり事業家等は如何なる程度迄同風說が確實なるか極東の商工業は果して平和維持に信賴し得可きかにつき消息を政府機關に求むるに到れり事茲に到る政府にして此等の騷擾につき干涉を拒むとするも人民の利益豈之を許さん哉是茲に絕對的に宣言するの止む無きに到れる所以也抑現今各種の日露衝突說は絕對的に無根なり、政府は日露戰後經過したる四年間を利用し以て戰爭が遺せる各種惡感を一掃し兩國政治經濟關係の平和的發達を助くる目的を有する諸種の國際協約を締結せり此點より見れば通商條約漁業條約に次ぎて彼の互に極東に於ける兩國領土保全保障の目的に成れる一九〇七年の政治的協約は特に重要視す可きものなり、此等が太平洋岸の一般政局を鞏固安全にして殊に日露關係に貢獻するや疑惑を容れず蓋し兩國關係は或る新聞が稱せるが如きこと無く一九〇七年以來衝突誤解起れること全く無し而て接外務大臣に達せる報道も大藏大臣が最近極東旅行中得たる感想も毫も內

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に不安分子を含まず而して雙方共日米關係には完全なる相互的善意あり且つ互ひに將來起り得可き各問題を平和に友愛に解決せんと欲することを確實にせるを見る。

是れ當然のみ、而して吾人は更らに露國政府の意向を疑ふ餘地なき也

（六）米國の疑惑

我が清國と滿洲に關する覺書を發表するや、米國政府は少しく疑ふ所あり、將さに抗議を提出すべき諸材料を蒐集し調査しつゝありしと傳ふ此の時清國駐在公使に任ぜられしクレーン氏は、シカゴに於て頗ぶる露骨に、日本の措置を非難する演說を爲すや、國務卿は氏が赴任の途次桑港に出でしを召還して、竟に之を免官し、同時に米國は調査の結果、日清協約の滿足すべきものなることを聲明して、其の態度を明白にしたり

次て奉天にある米國總領事代理官は、滿洲貿易の近狀を報告するに方り、日本の貨物が多く稅關の賦課を免かれて清國に入込むことを指摘し、日本の機會均等主義の有名無害なることを非難したり、然れども我が輸入貨物の大部分は、南滿洲鐵道改築の所要材料及び都督府所管の官需物にて、總て條約上無稅たるもの也、斷じて脫稅したるに非ず、我が政府の現に詳細に其の誣妄を辯明したれば、米國政府及び國民の多數は、必らず應さに納得せしむるべし。

米國にはヘアパートの如き排日說を盛んに鼓吹し、現に清國に一英字新聞を起し、損失を顧みずして偏へに日本を攻擊するものあり、彼等が清韓兩國に於て、陰に陽に排日を爲すの眞相は、人をして不快の感に堪へざらしむ、然れども是れ猶ほ國家に一偏見あるが如きのみ、國家の主人以下家族の多數他意なく我と親むに於て。我れ豈一二偏見のために [illegible] 損す可けんや、米國政府及び思慮ある國民の我れに對する好意は、吾人能く之を認取す、唯だ要は一偏見ヘアパート輩に大體を過られざるを注意するに在り。

（七）伯林の陰謀

ナショナル、レビューは、獨逸が東亞に於ける日英、日露、日米の關係を離間せんとして、殆んど到らざるなきを擧示し、日本政府は能く獨逸の眞意と手段とを諒解するも、米國政府は他の事物を理解すると太だ明なるに拘らず、外交上には全く曖昧にして、容易に陰謀に陷ゐり易しと警め、米國新聞が獨逸僞造の電報を信ずることを憫笑したり。時節柄頗ぶる興味ある評論ならずや。（以上ＸＹ生）

△己酉思想界の回顧

新しきものは常に世に持て囃がる、花の開く然り、人の生るゝ然り、而して思想の生るゝ、最も然り、其故に丙午は綱島氏の見神說を以て賑ひ丁未は加藤博士の「我國體と基督敎」を以て囂しく、而して戊申は人生觀上の自然主義論を以て最も紛雜を極めたり、然るに今新年の初頭に

つて過去一年の已酉の思想界を顧るに何とて新に產聲を擧げたるものは非ず、自然主義論は猶ほ爭はれたり、プラグマティズムは猶ほ舌端に上されたり、而して古典復活論も頗る旺盛を見たり、されど憶へば其問題の大を致せりと否とは暫く置く、少くも皆前年即ち既に戊申の歲に於て產れ出てたるものならずんばあらず、已酉の年は石女なりき、已酉の年は石女によつて營まれたる家庭なりき、雜亂紛紛の思想の聞えはあり、聞えに伴ふ聲將た無からずとせざれど、只何となく一味蕭索の感の湧まざるを得ず。

丁未より引續きて戊申の論壇に亘り、猶ほ頻りに爭はれたる國家對宗敎の論も、已酉に入りては何となく下火となり、老博士加藤弘之氏の獨り颯爽の雄姿あり、白頭猶ほ能く馬鞍に跨つて陣頭に起つの意氣、「基督敎徒窮す」の一書を公にして「正想的宇宙觀」を物したる以後の幾多の論敵を相手取り攻矢を放ちたるも、別にその中に過去に發表されたる以外の議論の新要素ありとも見受けず、敵も疲れやしたる之には敢て又酬ゆるものもあらざるの觀あり、只それ玉利博士あり、丁酉倫理講演集八十六卷に於て一矢値に應じたるものありと雖も、只自己の生物學說に加へられたる老博士の評に對して謬妄を敎へたる以外に注意すべき程の論題に觸れず、此等を僅に樹梢に殘る餘聲として暴颶頓に元の大寂寥に歸したるの觀あり、吾人の戊申末に於て博士の議論に對して望める幾多の懸案は博士が世に對して解決を迫れる三個の提案と共に、未了の間に斯くして全く葬られ了んぬ。

人生觀上の自然主義論は文藝觀上の自然主義論とその產聲を同時にし、而かも其聲の精到なる論理的組織に習はざる文士側より發せられたるが爲に、戊申に於ては最も喧囂を極めたりと雖も、甲論乙駁の間次第に眞理の闡明せられて分野の明瞭を見るに至り從つて已酉に入りてよりは文藝との關涉に關する爭議は洒然として跡を收めたるはありと雖も、而かもそれとは離れたる單に人生觀としての自然主義は已酉に入つて最も思想家の注意を惹きたるものゝ如く、而してその說の中堅たるものは島村抱月氏なるべきか、氏は近著「近代文藝の研究」の卷頭に、序文に代へて敢て「人生觀上の自然主義を論ず」の一文を公にし、自己の心的態度を明に告白し、理想は求めざるを得ざるものながら、而かも得るの機あるべからず、吾人は斯くて長しへに懷疑の狀態に在るべきの意を洩し、更に早稻田文學九月の卷に「懷疑と告白」を物してこは前に示せる「人生觀上の自然主義を論ず」の文に繼ぐべきものと告げ、此に於て哲學と宗敎との此吾人の有する懷疑に對しては何等積極的の權利、積極的の効力を有せざるを語る事一層、遂に哲學宗敎二つの最後の鐵案を加へて、それ等二つの者及生血の通へる部分は只其現實の懷疑より發足せし點それのみ其他は吾人と沒交涉なりと斷じ、所詮は今の哲學宗敎の價値は現實の觀照、只これのみと一轉捩して眞に文藝に說き進み、既に現實の觀照といへばこれ哲學宗敎の本領を脫して文藝的のみ、眞面目といはん人はいひ、事實予の第一義生活に全力を擧げて刺激を送るものは文藝のみとて、畫きにそれを畫きて結びぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

島村氏の此類論は他の人生觀上の自然主義論者、少くも長谷川天溪、岩野泡鳴等の諸氏のそれとは少からざる甄別なかるべからざるを知れ、後者の眞理そのものを見ること宛然幽靈の如く、所詮は有るべからざるものを吾人の妄想に思ひ浮かべしもの丶如き觀をなし、さて此人生は無理想なり、無解決なりと絶叫し騷ぐに對して、前者は必ずしも然らず、理想の求めて得らる丶の日有りや無しや、そは暫く置くとも、兎にも角にも吾人はそれを求めずば滿足する能はざるなりとなすものなり、即ち島村氏は左の「懷疑と告白」に於て說いて曰はずや、「懷疑は何時でも終點を意味するものでないから、之に住する限り必ず何等かの形何等かの程度て終點を知らうとする努力若くは要望が殘る、其實終點は恐らく知れないものであらうとは今迄の經驗敎へる所であるが、それにも拘らず之を知らう／＼とあせる氣持は古今を通じて少しも減じない、又あせらざるを得ない事情が人世の根本に横はつて居る、知れないものを知らうとする、此パラドックスがやがて造化の神秘であらう」と、此點留意を要す。

要するに巳酉の思想界は混沌たるものなり、人は皆懷疑の徒なり、煩悶の徒なり、之を救ふべく近來英米に起れるプラグマテーズム、即ちゼエームス、シラー若くはデューエー等一派の唱說に係る實用主義、詳には實用標準主義とも謂ふべき一派の新哲學輸入せられ、王堂學人田中喜一氏の如き實にその首領たり、即ちその大綱を言へば、吾人の複雜なる經驗に統一を與へ、之を以て吾人の日常生活の樣式を作り理想を作らざるべからざるが、その統一の標準たるべきものは常に實用たらざるべからずとなし、あらゆる人生活動の價値を悉く此實用なる目安を以て評定せんとするものなるが、是れ又新しき運動にはあらず、既に戊申に於て既に盛に唱導せられ論議せられ、戊申來の早稻田文學誌上には金子筑水氏の精到り察到れる紹介と批評とありたる程のもの、只それ一面にその實用といふ事の餘りに空漠たる聲にして之を物の眞非眞を定むる標準を當るに遺憾多しとする純哲學者側の見解と、更に一面に於ては絕對に懷疑論に傾くもの丶容易に耳を假さゞるとの爲に、未だ力なる聲として流布せられざる迄なり。

金子氏のプラグマチイズム評を掲げんとすれば勢ひ戊申に迄遡らざるべからざる困難あるが故に暫く之を略せん。島村抱月氏の評は前述の「懷疑と告白」の中に於て明示せられたるものあり、即ち下の如し、曰く「近頃世に唱へらるゼームス、シラー等諸家のプラグマテイズーム思想の如きは、最も巧に此の活きた現實を視貼して立たんとする哲學である、從つて若し玆て一つ最も自分に近い哲學を選び出せといはれ丶ば今の處此思想を擧げる外はないと思ふが、それすら私は其の懷疑に立脚してそれから多く離れまいとする處に生命を感ずるのであつて、若しそれが究極の解決だと言はれると首を傾けざるを得ない、實際我々は唯自分々々の實生活に都合のよいやう其時々に適應する經驗の整理統一をやつて居る、事實はプラグマチイストの言ふ通りである、之を外にしては何の哲學も成り立つ譯はない併し之だけで凡てだとは何うしても言へない、問題は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實は之から先にある、實生活に都合の好都合なやう統一すると一口に言つて了へば何でもないが、事實其統一が滿足に行はれてゐるか否かといふことが第一問題である、勿論何うにか斯にかやつては居る（中略）併し大體の傾向から言つて進んだ複雜な思想の人ほど不滿足の統一に陷り行く趣のあるのが見遁すべからざる悲しい人生の事實である、過去生活に對する悔恨反省それから從來の生活に對する不安心配、是れが丸て人生に無いものならプラグマチイズムの命題は十分の權威を以て我々を支配しやうが事實は其反對である、（中略）プラグマチストと雖も之を消して了ふ力はない、然るにプラグマチズムが其まゝ解決哲學にされて人生觀論にまで來ると此要求を事も無げに無駄だと打ち消さゞるを得なくなる、但しプラグマチストが此場合に提出すべき言葉は別に有る、即ち生活の爲に都合よくといふ、けれども實は生だの生活だといふ語が本來詩であり謎であつて中身は充實して居ながら定義の下せないものだ、（中略）要するに生活の雜多な矛盾、それを過去現在、未來の時にかけて何う統一するか、之が根本の問題でプラグマチズムではそれが解けて居ない」。と

金子氏此年の評論にも多少之に言及したるあり、そは新小說十一號に於ける「我を如何に作るべきか」の中にあるもの、それを抄錄せんか、曰く、「現代人の思想に最も近きプラグマチストすら生活の充實感を何處に求むべきかに就いて極めて漠然たる態度を取つて居るではないか。諸慾望の理想化、過去の經驗の調和統一、論旨其者には別に缺點もないが、全體の着眼と態度とにどうも慊らない點が多い、主情意論を口にするプラグマチストは其精神に於てやゝもすれば主智的抽象的形式論となる嫌ひはないか、實際的を口にしてとかく空な理論に走る傾はないか、欲望の理想化又は過去の經驗の統一、之を端的に情意中心の人格の事と見て一層具體的に人格の構成を論じてこそ全體の態度が切實に且つ生氣を帶びてくるが、其等の思想が動もすれば人格の中心を離れて其周圍の主智的努力、又は理論一篇に過ぎないものとなる嫌ひはないか、實際的に切實に人格の構成を主張する主意ならば、經驗の統一なりといふ思想よりはもつと適切な、もつと實行的な、又もつと積極的な主張が現はれなければならい筈だ。」と、去れど委しきは猶ほ戊申十二月の早稻田文學誌上に見ざるべらず。

プラグマチズムに對して其實用主義なるものゝ餘り空漠なる點を批つ所は島村金子の二氏兩々相一致す、されど金子氏の島村氏と態度の相異なるは此短き引用文中、猶ほ雲龍の片鱗を見たるが如きものあるべきが如く、金子氏は實に理想を求めて而して理想を得べしとなし、吾人の努力はその效果の如何ばかり憐れなるものあるべしとも猶ほ多少の效果あるを疑ふべからず、而して既に效果の有らば之を求むるの努力又決して廢すべからず、世の煩悶者流は畢竟萬世に通じて過らざる不變の理想を思ふの謬想より來れるもの吾人の生活の絕えず發展し變化する以上は理想又其時に改まらざる可からずとの見を抱く、そは短文ながらも本號中央公論秋季大附錄號に寄せられたる氏の論之を盡す、即ち曰く「在來の全懷疑者の態度を見ると、動もすれば或る一定不變の絕對眞理が客觀的に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

存るものと思ひこみ、消極的態度のまゝ斯かる眞理に逍遥しおたきた趣むといふ趣がある、人生の秘密が不變のまゝ何處にか隱れてゐる様に思做す氣味がある、これが抑も誤解の根底ではないか、人生は人類が造つて行くものとすれば我々の疑問とするものが永久不變の形に於て何處にも隱れて居るのではない、吾人は吾人の意志を以て人生を當に如何に造るべきか、其處に其疑惑は存するのである、彼の永久靜止の秘密に疑を抱くといふが如きはまだ古來の空想上の懷疑を夢みる者に過ぎない。人生を如何に造るべきか我を如何に造るべきかこれが實際上の最も眞摯な又最も切實な懷疑である、(中略)彼の空想的懷疑家は何處にか客觀的に潜んで居る秘密の暴露を消極的に待つて居る、いつ迄待つたとて懷疑の和ぐ折があらうか」とその態度の如何に島村氏と異なれりやは甚だ觀取の價値あるべし

プラグマチズムに對する教育家の批評は丁酉倫理講演集に現はれたる吉田熊治氏の論文之を代表すべく氏は猶ほ讀賣紙上に於ても最も簡潔に論述したりき、その要旨とする處はプラグマチズムは實用を標準とすといふも其實用なるものは、各境遇に居る各個人により千差萬別ならざるべからず、然らばプラグチック教育は個人的教育ならざるべからず、是れ事實に於て行はれ難き事なり、又プラグマチズムの主張によらば如何なる生活の樣式若くは理想を有するものなりとも、そのもの自身に取りては其者自身の經驗を最も能く統一したるものならざるべからざるが故に、之に向つて他より異なる生活の樣式若くは理想を教ふる必要あるべからず、されど斯くせば何處にか人類の進歩あらん、是れ吾人の蒙昧し居る教育の精神と矛盾するものなりと、プラグマチストたる田中氏豈に一矢の酬ゆるなからんや、氏は十二月の讀賣紙上に「プラグマチズムと教育」と題する論説に於て暗に之に答へて曰く、吾人の說くプラグマチズムは絶對個人主義に非ず、社會的個人主義なり、故に個人的教授の要なし、否要せば却て誤る、殺なる社會的編成の中にて教育してこそ其處に社會的個人を完成し得るなれ、要は用意の如何にあり、教科書は共通なるべけれど教科書によりて會得する生徒の見解は各人各樣なり、各人各樣の個人性を損はず發展せしむる樣勉むるが是れ我プラグマチック教育の玄諦なり、又各人の現在有する生活の樣式や理想や、各人の經驗を最もよく統一せりと自ら認むるは許す、左れど傍より見て必ず早晩破壞の來るべき樣式なり理想なりと認むるに於ては敢て進んで破壞しやり別に建設しやる事不合理なりといふべからず、毫もプラグマチック教育の不可能を信ぜずと。

長きに亘れば此處には簡說すべきも田中氏の本誌九月號に於て公にしたる「岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず」の一文には頗る論題となるべき諸多の要素を含蓄せり、氏は先づ三分題を揭げて然る後自己と岩野氏との相違點を各項目に就きて評說し、(一)人間は唯現實にのみ價値を置くべきものといふ第一分題に就いては予は之を具體的に解釋するに反し岩野氏は之を抽象的に解釋し、(二)人間の活動は單一不離なりといふ第二の分題に就いては予の之を作用的に解釋するに反して岩野氏は之を機械

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的に解釋し、(三)個人は自己の滿足のみを目的とすといふ第三分題に就いては予の之を有機的に解釋するに反して岩野氏は之を分子的に解釋せりとして以下細叙せるが、其中宗教に關するものは神の解釋の條なり、氏はプラグマチズムの主張として神の存在を許す、左れど許すといふ丈にて萬人に必須のものにあらず、現に氏自身は神の觀念を要せずと斷言せり、是れ明に神を見ること猶ほ物の如く、又只一個實用に叶へるものとなす迄の見解なるが故にあらずや、吾人は此神觀には決して贊同を敢てせざるものなるが、そは兎もあれ、今日幾多の基督教徒あらずや佛教徒あらずや、加藤博士に喰つて掛れる所謂諸大家諸名家あらずや、而かも何が故に彼等宗教家は此プラグマチストの宗教觀に一矢を放たざるか、放たざるは此種の神觀を以て滿足するものか非か、田中氏の所說は兎もあれプラグマチズムは現下海の內外に橫流せんずる思想なり、よもや彼等の耳目に觸れざる事はあらざるべし、有らばその神觀の如何なるべきかを究めずして已むべきに非ず、プラグマチズムの起れること既に昨今とはいふべからず、而るに此の如きの觀を呈するは我宗教界は實に落莫なりと謂ふべし、若し落莫たらずんば、遲しとは雖も此新に開かれたる庚戌の論壇に於て目覺ましき研究の起らんことを望む。

兎もあれ己酉は懷疑の一年なりき、哲學宗教の權威殆んど失墜して人心據を失ひ道德の緊縛その糸朽ちて又危からんとす此に於て一面又孔子教復興の論一部に起れり、古典復活の聲盛に、現に戶川殘花、矢野恒太、島田三郎諸氏の建設に係る孔子教會なるものなり、一面又丘博士の如き

あり、三田文學會の講演に於て「人類は不進步なり」と喝破し、人類は亂善界を生活の標準とせず、黃金を以て標準とせり、即ち黃金を有するもの獨り適者として生存を贏ち得る事、之を來せるものとし、進化論を經とし、て立論し、此經濟的方面より人類を改善せんと勉むるあり懷疑的思想と其弊とは心あるもの丶一般に痛惡する所となれるま丶斯くて斗柄一轉玆に新しき曙光を迎へぬ、知らず今後の趨勢如何。(以上松逕生)

△己酉文壇概觀

昨年の文部省展覽會には、一昨々年の和田三造氏の「南風」、一昨年の竹內栖鳳氏の「猿と兎」、下村觀山氏の「小原御幸」及び和田三造氏の「煒燻」の如き觀覽者の注意を一幅の裡に集めて了ふといふやうな際立(きわだ)つたものはないやうであつた。が全體として見渡した所では、著想といひ技巧といひ、確かに進步の跡の著しきものあつて、性急にして獨斷を好む批評家を除くの外は、何人も之に對して悲觀絕望の聲を放つことを爲なかつたのである。僕は昨年の文壇全體を心に描いて見て、恰度昨年の文部省展覽會に對すると同樣の感じを得る。作品一つを指して、前に比倫なく、永く後昆に傳ふべきものと斷ずることは、或は出來ぬかも知れぬが、全體としては確かに進步した、發展した。主なる作家は近二三年來、世間も認め、自己も認めた各自の特徵を發揮することに努力し、[illegible]

して充分に之を發揮し得た。寧ろ發揮し盡したかの觀さへある。作家個人としても、文壇全體としても或は正さに一大回轉期に遭逢して居るのかも知れぬ。然しそれが即ち却て昨年の文壇の、進歩の著しかつたことを反證するものともいへやう。之を事實に就て見れば、島崎藤村氏には「春」の如き長篇がない。けれども氏が昨年中公にした十二三篇の短篇は、其二三篇を除くの外、皆氏の新藝術の泰斗たるを示すに餘ある者ばかりで、氏の觀察は益々精透に、技巧は愈々圓熟に近きつゝあることを充分に知ることが出來る。昨年の文部會展覽會では、作品としては黒田清輝氏の「鐵砲百合」が最も優れてゐるといふ、此意味に於て僕は藤村氏の作品は矢張り現時の文壇に於て一頭地を抽いて居るものと信ずる。「苦しき人々」は書き方にいくらか、ゴタ〱した所もあるが、其覗ひ處の一種の深みを有する、「一夜」の層々迫り出して些のたるみなき技巧の力、「旅」の一字一句悉く味あり匂ある文章の妙、「奉公人」の山家の色彩と情致の饒かなる、「河岸の家」の素朴なる書き方、「雜貨店」の淡々として白湯を飲むが如き中に深く人生の疲れたる有樣を描ける、「弟子」の深酷にして殆んど渾然たる技巧の妙を發揮せる、「芽生」の外面描寫の中に、内に祕せる悲痛の情を偶せる、皆各々特殊の味を具へて反覆熟讀して益々其及び難きの特長あるを認める。藝術に於ては「量」は餘りに重きをなさぬ。氏に長篇なしと雖も氏の活動は藝術の上より見て最も意味多きものとなさねばならぬ。次に藤村氏と並び稱せらるゝ、田山花袋氏は如何と見るに、氏には十餘篇の短篇の外、「妻」（尤もこれは一昨年の終りから日本新聞に掲載されたものだが、單行本として讀まれたのは昨年であるから、昨年のものとして置く）及び「田舍教師」の二長篇がある。「田舍教師」はまだ精讀しないが、「妻」は描寫の技術に於て確かに氏の一進境を劃した作物である。自由自在に、思ふ通り、見た通り、書き得たといふことは人をして驚嘆せしめる。又空想が現實に接して次第〱に其影を收めて行く實人生の有樣もなか〱よく描かれた。一昨年の「生」に比しては深酷の度は缺けてゐても技巧といふ點に於て遙かに優つて居る、短篇の中では「おし灸」「ピストル」どな藝術品として優れてゐた。「罠」も多少粗雜な點、誇張な點があつたとしても、一種の大膽なる形式と、大膽なる思想の告白として、力に滿ちた作品であつた。氏の最もエラい點は常に問題の提供者、文壇の刺戟者となつて、自ら動くと共に他をも動かして行く所にある。それ丈け氏の作品には常に未成品の觀はある。隨喜渇仰の念を氏の作品に起すことは稀であるが、將來の分らぬ人といふ感じは何時でも來る。氏は何時も若々しい、何時も動いて居る。而かも動きながら進んで行く。昨年の氏も、一昨年の氏、一昨々年の氏と同じく、多産にして且つ多福なる人であつた。昨年の文壇に於て武者振の最も勇ましく且つ華やかに、稍々單調に傾かんとする文壇に一掬みの清涼劑を投じ、殆んど世人の耳目を聳動するの概あつた人は永井荷風氏である。氏の前著「あめりか物語」にも、又發賣禁止の厄を蒙つた「ふらんす物語」にも、好短篇は甚だ多い。が、そは多く洋行中の作か、若くは洋行中の材料を書き綴つたもので、氏が日本の社會を如何に觀じ、如何に描くべきかといふ事は極めて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

興味ある疑問として文壇の人の注意を惹いて居た。氏は昨年二月「深川の唄」を公にしてより、續いて「祝盃」「春のおとづれ」「監獄署の裏」「牡丹の客」「歡樂」「歸朝者の日記」「すみだ川」等悉く日本に材を取つて其作を發表した。氏は社會及び人生を有りの儘に語らずして、社會及び人生に對する自己の感情を歌つた。氏「あめりか物語」や「ふらんす物語」に於けるよりも文章が次第に巧みになつて、形式が次第に整うて來て、思想の發表が次第に大膽になつて來た丈けの相違である。氏は何事にも何物にも現在のものには總て反抗して見て、其反抗より來る事實的若くは空想的のパラドックスの興味を味ひ且つ歌つて居る。佛蘭西を讃美し、江戸趣味ゐ憧憬するのも、其對象の善惡及び氏の性格より來るよりは寧ろ、現在に反抗するといふ處から來て居る方が多い。氏が若し佛蘭西に生れて、日本に漫遊して來た人と想像したら、恐らくは非常なる佛蘭西の熱罵者であつて、熱心なる日本の讃嘆者であつたらう。此現在に反抗する氣分と、鋭利なる感受力と、富贍なる詞藻と、全身に染込んでゐる音樂的情調とは、茲に氏を驅つて、一種獨得なる、抒情詩的小說の開祖とならしめた。日本の文壇は極めて物に倦き易い。氏の如き抒情的傾向の人には一層危險な文壇である。氏の昨年の作物は皆とりどりに面白いが、抒情詩的なる自然の勢として、其どの篇にも「歡樂」か又は「監獄署の裏」の一部が入つてゐるやうに思はれるのは、多少單調に流れはしないかと危まれる。然し「あめりか物語」などには同じ自己の感情を語るにしても、何か事件を描寫して其れに感想を附すといふ性質のものが可なりあつたやうに思ふが、氏も追々日本の社會や又は實際の事件を深く觀察し研究するやうになれば更らに別方面を開拓し得る人と信ずる故、今年は必らず氏の作風にも一變化を來すだらうと思つてゐる。氏と共に昨年の文壇に目覺ましかつたのは森林太郎氏であつて氏は昨年正月「スバル」に「プルムウラ」の戯曲を公けにして以來、殆んど毎月小說か脚本かの創作を發表し、傍ら盛んに飜譯をも世に出した。其意氣と精力とは專門の文學者を壓倒するの概があつた許りでなく、其一點一劃のソツなき洗錬の筆致は、容易に青年作家の摸倣を容さぬものがあつた。「半日」「魔睡」「鷄」、「ヰタ、セクスアリス」「假面」等皆なかなかに面白い。氏に熱なきを咎むる人があるが、今日の如き時代にあつて、一人に萬能を望むのは恐らくは望む人の無理であらう。僕は氏の文壇の爲めに盡さんとするの熱心と且つ盡し得た効績とに對しては深く感謝する所あつて然るべきものと思ふ。德田秋聲氏は昨年にあつて何等の目覺しき働きをみせない。然しせないのが當然である。氏の特徴は何等目覺しき事をせずして、ジリジリとエラクなつて行く處にあるからである「日向ぼつこ」でも「四十女」でも「媒」でも「母」でも「指環」でも「死後」でも「リボン」でも、氏の在來の作風と變つた所は目立たない。然しどれでもみなよき作品には相違ない。極言すれば、氏の藝術は今日に於て行くべき處に行き着いたやうの觀はある。一轉せざれば恐らくは讀者に厭かるゝてあらう。然し厭かれるといふ事と腕が鈍つたといふ事とは別問題である。氏は決して腕の鈍る人ではない。若し眞に腕の鈍つた人はといへば今日に於てはどうしても眉山

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青果氏を擧げずはなるまい。氏の昨年中公にした短篇は二十篇或は夫以上にも及ぶべく、數に於ては矢張り他に匹敵する人はあるまい。けれども其中のどれが僕等に非常なる興味を起さしめたか。「三軒目」も「埋立地」も「あの家この家」も「夜」も「移轉前後」も決して惡るいものではない。力のある、サク／＼した書き方は讀んで心地がよい。だが、一昨年の氏の作に比して優つた點は少しも認めることが出來ない。のみならず其他の諸篇には投遣りの、書なぐりの、只筆に任せて持合せの文章を綴り合せたといつた風の無責任のものが隨分見える。腕が鈍つた、藝が死んだといふ感じをつく／＼起させる。氏は今にして一轉化せずんば只惡達者なる作者としてのみ過せらるゝであらう。呉々も氏の反省を望まざるを得ぬ。氏に比べると氏と並び稱せられた正宗白鳥氏は依然として其名聲を墮さぬのみか、其努力の勉勵の頗る著しきものがある。氏の最初の長篇「落日」は未だ讀まぬから、僕は何とも評が出來ず、又他人の評では餘り大したものでないとの噂も聞くが、一昨年末から書き出した「二家族」の如きは、氏の將來の發展大いに期待すべきものあるを示し、「泥絲」には描寫の技術の漸次進歩しつゝあるを見るべく、「地獄」「强者」「最初の犯罪」等皆とり／＼に面白かつた。小栗風葉氏は「耽溺」に於て殆んど總ての人の惡罵を買ひ、「好意」「同室の女」「誘導」等又世評に上らなかつたが「姉の妹」は稍々成功と認められたに拘らず、當局の禁止に逢ひ、間もなく、都落ちをして久しく文壇に遠かつて居るが、其清麗玉を欺くが如き筆致は現代の珍品にして今春を待て又大いに文壇に打て出るだらうと想像されてゐる。高濱虚子氏は「三疊と四疊半」及び長篇「俳諧師」の作あるが何れも他人の及ばぬ妙所あつて現文壇の一異彩たるを失はぬ。夏目漱石氏は相變らず超然として時流と相關せざるが如く「それから」「永日小品」「滿韓ところ／＼」等を草してゐる。小説として讀めば僕等の趣味と一致せざる書き方を嫌らなく思ふが、氏一流の觀方及び書き方として讀めばなか／＼面白い所もある。殊に「滿韓ところ／＼」の如きものは氏でなくては到底書けぬものである。森田草平氏の力量及び文壇に於ける位置は未だＸである。「煤烟」の前半は確かに昨年の文壇に於ける最も光彩あり生命ある作物の一に數へることが出來る。が其後の短篇「離合」「水死」「扉」「母」等は世人の期待に添ふ程の出來榮でなかつた。然し氏の特長は或はコセッカズに鷹揚にやつて行く所にあるかも知れぬ故、三四篇の短篇を以て輕々に判ずることは見合はせて置かう。上司小劍は初めは大した人でないと思はれてゐたが、「月夜」を出した頃から、そろ／＼世の注目を惹き、近來に至ては甚しき進境を示して來た。「閑文字」「筍」「親類」「藤七」等はさしたるものでもないが「畜生」の如きはなか／＼他人の追從を容さぬ概がある。又中村星湖氏も近來の進境頗る目覺しく。「一切の事」は僕は世人が褒める程感心しないが「白晝」「木像の批評」等は非常に面白く讀んだ。全體に亘つて藝術の臭ひが少し足らぬと思はるゝ點はあるが發達する人かも知れないと考へらるゝ。若し未第一流を以て容されぬ人の中最も藝術の臭の饒かな人を求むれば疑もなく水野葉舟氏であらう。其デリケートなる感受力とフレッシュなる文章とは一種のム

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ードを讀者の心に沁々と味はせるに餘ある。氏が大作家となり得べき人か否かについては疑あるが、氏の作品は現時の文壇に珍らしきものとして重んずるの價値は充分あらうと思ふ。小山内薫氏常に新らしき試をやつて居る點に於て感心するが、一轉して才の衣を脱ぐにあらざれば眞の作家とはなれないだらうと思ふ。岩野泡鳴氏は「耽溺」に於て大いに實出したが、餘りに不注意なる文章及び描寫は氏の作品の藝術的價値を減殺すること少くない。小杉天外氏の「零餘子」「芝居の歸り」などは殆んど氏の筆と思はれぬ程拙かつた。氏も今年は一轉變して來なければなるまいと思ふ。相馬御風氏、薄田泣菫氏、徳田秋江氏、小川未明氏等には僕はまだつく〴〵感心した作品を見ぬ。佐藤紅綠氏は「十七の頃」に於て才筆の尋常ならざるを示したが、何處か本郷座式興味を脱し切らぬを遺憾とする。評論及び詩壇、戯曲等についても論ずべきであるが餘り長くなるから小説の評ばかりにて止めておく。

終りに昨年程發賣禁止の頻々たることなく、毎月必らず二三種づゝ其厄に罹つた事を附記して置く。（以上樗陰生）

新刊批評

▲元祿快擧錄　福本日南著　啓成社發行

「忠臣藏に關する書物は殆んど讀まないものはない」といつて居る福本日南氏の著であつて、且つ文章上手、話上手、物語好きて、よく物の裏表の分る著者の事であれば、信用もされ又面白くも讀まるゝことに於て之以上の赤穗義士傳はないといつてもよい。製本も立派て挿畫も精巧、何人にも推奬するに足る讀み物である。（定價二圓二十錢）

▲小説寄生木　徳富健次郎著　警醒社發行

杳として音なきこと數年、府下粕谷の里に退いて專ら鋤鍬を揮りし手によつて書かれたるもの即ち本書、全々一千百頁の大冊、篠原良平なる人の書殘せしノートブツクに據つて書き綴りしものとはいへど、先づ量に於て人を驚かすに足る。精讀の上次號に批評すべし。（定價並製一圓五十錢、上製貳圓）

▲小説信仰　中村春雨譯　春秋社發行

アンドレーフの著を譯せるものにして、何れの方面より見るも充分研究の價値あるもの、尙上田敏氏が嘗て本誌に譯載したりし「沈默」の譯をも附錄として添へたり、兩譯文を比較して見ば尙一層の興味あらん。（定價八十錢）

▲小説嗚呼九年　細江閑山著　[illegible]星社發行

未だ前篇のみなれば後篇の出づるを待て精讀すべきが打見たる處木下尙江氏式の書き方にて普通の小說とは餘程毛色の變つたものなり。(定價一圓)

▲哲學新案　井上圓了著　弘道館發行

非常に眞面目に著者の所信を告白せるものであつて若し著者の所說に反對の人が讀んでも此書によつて暗示を與へらるゝことが頗る多いであらう。(定價一圓)

▲銀月文　伊藤銀月著　樂山堂書房發行

銀月氏の文章を集めたるものにして中には衒氣の鼻につくものもあれど、概して快活にして面白きもの也。(定價九十錢)

▲相愛記　黑瀨二水著　興樂房發行

眞に處女作らしき初々しき筆つきも見ゆれど、眞面目な書き振りにいやみ少きを取るべし。(定價六十錢)

▲虛子小品　高濱虛子著　隆文館發行

小品二十餘篇を集めたるものにして、旅行記も、キヤラクター、スケッチもとり〴〵に面白し。小說めいたものは却て不成功のもの多きやうに見ゆ、思ふに小說として取るに足らぬものを此篇に收めたるが故なるべし。されど兎に角今迄出てたる小品文集中出色のものなり。(定價五十錢)

▲二人畫工　内田魯庵譯　金尾文淵堂發行

シエンキーウヰツの作を譯したるものにして、譯文縱横自在、痒ゆき處に手の届くやうに少しも誤譯臭なきは流石に老手、原作亦なか〳〵に面白く、よき讀み物なるに、其筋のお尤めを蒙り、又もや發賣禁止とは果て面妖な。(定價金一圓)

▲新世帶　德田秋聲著　新潮社發行

秋聲氏の長篇中最も成功せるものにして、多少新味(フレッシュネス)を缺くの憾はあれども藝術の臭ひ最も深く染みたる作品といふべし。(定價四十錢)

▲ラセラス王子物語　坂本大風譯　内外出版協會發行

ジョンソンの著を譯したるものにして、中學程度の人にはよき讀物也(定價廿錢)

▲インキ壺　田山花袋著　左久良書房發行

隨分ドグマチックな論もあり、矛盾した論もあるが何れも生氣潑剌とした議論が多くて面白い。藤村氏の「新片町より」は味ひながら讀めば興味多く之れは卒讀した方が心地よし、藤村氏はザッヂエストし花袋氏はショックを與ふ。兩人の思想、性格最もかゝる偶然錄的のものに窺はる(定價九十五錢)

▲獨和法學大辭典　井上忻治著　東海堂書店發行

忠實に六七頁も見續くると著しく本書の特徵、即ち著者用意の存する所の在來坊間のものと異なる事が知れる、即ち在來のものは只名詞の術語をのみ收集して相應の譯とした迄であるに反して、之は單に名詞と

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

み言はず動詞、形容詞、副詞、成句等の嫌なく　苟も法學原書に特有の語なら何でも洩すまいと勉めて居る、即ち單に語數を豐富にして體裁のみを整へんとする樣な無意味な努力では無く、實際獨逸の原書を讀むに當つて一切の障碍の無き樣にと苦心したものだ、凡て此一精神から分岐して居る事だから、從つて單に成法上の用語一切や又は一般法學若くは特殊法學各科の用語のみでなく、更に凡てに通ずる學說上のそれをも收容して居る、其他法學の直接の補助學科たる政治、經濟、商業、哲學等の諸學科に迄も渉つて旁求殘す所なく、就中哲學の用語は二千語以上にも及んで居るのは特に本書を以て出色ものとなすに足りる、常に學徒の頭を悩ます拉典語も亦二千有餘の多くが收められて居り、英佛兩國語も獨逸書に常用されるもの丈は大凡そ取り入れられて居る、獨逸法學を原書に由つて研究せんとするものには蓋し新に得た一大光明であらう、附錄の獨逸帝國立法年表と法學略字解の二篇是れ又學徒の机上に離る可からざる重寶なものであらう。（定價四圓五十錢特價二千部限り三圓八十錢）

▲歐洲見物

櫻井鷗村著
丁未出版社發行

西比利亞から行つて歐大陸を縱斷し、蘇士を廻りて戻りて來た七ヶ月間の道中見聞記であるが、世に在り觸れた樣な報告的旅行記とは全然違ひ、作者が感興の乘つた筆を以て其感興を其儘寫したものだから、毫も記述に枯淡貧弱の點が無い、從つて讀者は共に世界見物に連れ廻られ、親しく懇に入つて說明を聞いて居る心地がする、精細の觀察あり、周到の解釋あり、穩活の見解あり、而かも其間に滑稽もあり、諷刺もある、此種の著述では近來の好讀物と思ふ。（定價七拾錢）

▲高原

吉江孤雁著
如山堂書店發行

相變らず面白い、筆致は益々圓熟の境に入つて來た、此篇には御嶽の表裏以下十三篇、「緑蔭」よりも稍長いもの丶みが收められて居る、紀行文家としての君は最早他の頭を拔くと評ある今日今頃比較でもあるまいが、從來名を得た、麗水、烏水の諸氏に比べると甚しく措辭が平面に近いて居つて讀む目開く耳にシックリした感情が與へらるゝ、花袋氏に比べれば氏の描寫の周密なるに拘らず、而かも詩趣の朧氣なるものゝあつたに比し、之には何處までも一味烟霞の氣が生意に充ちて溢れて居る、尚言つて見れば質に於て花袋氏に優り、形に於て烏水氏に優り、質と形とに於て併せて麗水氏に優るといふが妥當であらうか、兎もあれ君は能く讀者と同じ平面に立つてそして天稟の詩趣を遺憾なく語る處に特殊の地步を占めて居るものだ。（定價金五十五錢）

▲涅槃篇

多田鼎纂譯
無我山房發行

釋尊の涅槃の聖蹟に關係ある諸經の文を集めたもの、釋尊晩年の轉輪說法を地理と繫いて會得することが出來るもので甚だ有益なもの、卷首に收めた印度の古代の地圖、是れ又此種の著には無くてならぬものと思ふ。（定價八十錢）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論第廿四年總目錄

自四十二年一月
至仝 十二月

社論

公論

海外

說苑

小說

詞藻

評論

雜組

第廿四年第一號より第十二號まで第六號（發賣禁止號）を除くの外、悉く取揃え高需に應ずることを得べし、其内特價號左の如し、但し殘部僅少のもの少なからず。

一新年號　金四十錢　郵税二錢五厘
一春秋附錄號　各金四十五錢　郵税二錢五厘
一第七月號　金二十五錢　郵税二錢
一第九月號　金二十二錢　郵税一錢五厘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京	堂
仝　神田裏神保町	上田	屋
仝　京橋尾張町	東海	堂
仝　日本橋呉服町	北隆	館
仝　本郷本富士町	盛春	堂
仝　京橋鎗屋町	艮明	堂
仝　日本橋本石町	至誠	堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文	館
仝　京町堀	太華	堂
京都佛光寺	東枝書	肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

廣告一手取扱 神田三河町一丁目 博報堂

●本號に限り特價金四拾錢 郵稅三錢

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢 但清、韓兩國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は**本郷西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京東片町局**と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は**東京三十四番**なりこれにより御送金の方は**登記料貳錢**を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年十二月廿五日印刷及納本
明治四十三年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA